

中野市 ^{S e n t a} 千 田 遺 跡

千曲川替佐・柳沢築堤事業関連
埋蔵文化財発掘調査報告書
—中野市内その1—

2013.3

国土交通省北陸地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



1. 千田遺跡全景（南西から）右は千曲川、左は JR 飯山線、後方は高社山、調査地点は 1～5 区



2. 千田遺跡全景（北東の川久保遺跡上空から）斑尾川をへだて左は 10 区、右は 12 区



1. 8区全景（南東千曲川上空から）右側は9区、後方はJR飯山線替佐駅



2. 8区西南部縄文時代集落跡、上が千曲川側



1. コの字形を備えた竪穴住居跡 8区SB44 (手前)・43 (後方)



2. ベッド状遺構がめぐる竪穴住居跡 8区SB31



1. 縄文中期中葉土器群 8区SB10・19・29・35・53など出土



2. 縄文中期中葉土器群 (1) 8区SB31出土



1. 縄文中期後葉土器群 (2) 8区SB25出土



2. 縄文中期後葉土器群 (3) 8区SB41出土



1. 縄文中期の磨製石斧 8区



2. 縄文中期末葉から後期前半のチャート原石・石核・石蕨など 4区SQ03



1. 縄文中・後期の土偶 3・4・5・8・12区



2. 縄文中・後期の土・石製品 3・4・5・8区



1. 弥生後期土器 8区SB12出土



2. 古墳後期土器 12区SB87出土

はじめに

千曲川は長野県の北半分の水を集めて日本海に注ぎ込む大河であり、古来より地域の人々の心や生活と深く結びついた存在であります。しかしながら、千曲川はたびたび、洪水被害をもたらす存在でもあり、千曲川の洪水被害から人々の生活や財産を守ることが課題でありました。そうしたなかで、このたび、中野市替佐地区での千曲川築堤事業が計画されました。

その築堤事業地内には、周知の遺跡として千田遺跡が存在しており、平成14年度から長野県埋蔵文化財センターが記録保存のための発掘調査を実施してきました。その発掘調査では縄文時代の大集落をはじめ、弥生時代後期、古墳時代後期の集落、中世の集落や水田がみつかり、長きにわたる人々の生活の痕跡が残されていることがわかりました。特に、縄文時代では長野県内屈指の土偶の出土数を誇り、千曲川の河原で採取した多様な石材を使った石器、大量の磨製石斧、さまざまな地域との交流を示す各地の土器が出土しております。また、縄文時代の住居跡では新潟県地方に多くみられる長方形の石組の炉など、千曲川・信濃川を通じての人々の交流が知られ、この地域の歴史を語る上で非常に重要な遺跡であることが明らかになりました。こうした大集落がこの地につくられたのは、やはり千曲川の豊富な漁業資源、あるいは川を通じての交流の結節点としての利便性によると思われます。また縄文時代にとどまらず、弥生時代以後においても人々の生活の痕跡が認められることは、同じような生活・交流の利便性に富んだ環境であったと思われます。

こうした内容、量ともに豊富な千田遺跡であります。今後、この地域にとどまらず全国的にも、今回の発掘調査の成果が歴史を考える資料として活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた国土交通省北陸地方整備局、長野県教育委員会、中野市・旧豊田村、中野市教育委員会・旧豊田村教育委員会、長野県立歴史館、地元的地権者や関係者の方々に深甚なる謝意を申し上げます。


例 言

- 1 本書は、長野県中野市（旧豊田村）豊津に所在する千田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、千曲川替佐・柳沢築堤事業に伴う事前調査として実施し、国土交通省北陸地方整備局からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』19・20・22・23・26～28ほかで紹介しているが、内容に相違がある場合は、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で掲載した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図「替佐」（1：25000）、「中野」（1：50000）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土地座標は、国土地理院の定める平面直角座標第Ⅷ系の原点を基準としている。座標値は日本測地系（旧座標）による。
- 6 発掘調査にあたって、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは協力を得た（敬称略）。
石器実測：（株）アルカ
黒曜石産地推定：望月明彦（沼津工業高等専門学校教授）
測量・空中写真撮影：（株）こうそく
放射性炭素年代測定、樹種同定、種実分析、植物珪酸体分析：バリノ・サーヴェイ（株）
遺物写真撮影：（株）信毎書籍印刷
報告書編集：（有）アルケリサーチ
報告書印刷：（株）信毎書籍印刷
弥生土器分類：千野 浩（長野市立博物館）
縄文土器分類：寺崎裕助（新潟県立歴史博物館）
縄文集落・土偶：小林達雄（國學院大學名誉教授）
- 7 発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の諸氏・諸機関に御指導・御協力を賜った。御芳名を記して感謝の意を表します（敬称略）
秋田かな子 阿部昭典 石井 寛 石坂圭介 石坂 茂 石原正敏 伊藤正人 猪瀬美奈子
今福利恵 江原 英 小熊博史 長田友也 勝山百合 加納 実 上條信彦 木下哲夫 藤織 茂
佐藤信之 佐藤雅一 渋谷昌彦 清水克彦 菅沼 亘 菅谷通保 鈴木徳雄 関根嶺二 高橋 桂
高橋 保 谷藤保彦 寺内隆夫 千葉 豊 中島庄一 西田泰民 新田康則 原田昌幸 水沢教子
宮内信雄 宮尾 亨 百瀬長秀 山口逸弘
長野県遺跡調査指導委員会（戸沢充則、会田 進、小野 昭、桐原 健、工楽善通、笹澤 浩、
高橋龍三郎、丸山徹一郎）
- 8 発掘調査担当者は第1章第2節第3表に記載した。

- 9 本書は、綿田弘実が編集を行い、調査第1課長上田典男が校閲し、調査部長大竹憲昭が統括した。
執筆者は以下のとおりである。
- 第1章第1節：上田典男
第2章第1節、第2節の縄文時代以外、第7章：市川隆之
第3章第3節2、第4章第3節、第4節2、第5章第3節2、第4節2、第6節2、第6章第3節2、
第4節2、第6節2：廣田和穂
上記以外：綿田弘実
- 10 挿図・挿表は第1章から通し番号とした。
- 11 石器の石材については調査研究員市川桂子の助言を得た。
- 12 本書に添付したDVDには、右記の内容を収録した。本文PDFファイル、掲載遺構・遺物図版、写真図版、
竪穴住居跡・土坑一覧表、8区石器地点別点数、全地区土製品・石製品地点別点数、自然科学分析データ
- 13 本書で報告した遺物と記録類は中野市教育委員会へ移管予定である。

凡 例

- 掲載した実測図の縮尺は原則として次のとおりで、当該箇所のスケールの上に記してある。
ただし、調査区全体図・遺構分布図・挿図などは任意である。
調査区全体図 1：500、割付図 1：120、
個別遺構図 竪穴住居跡 1：60、1：80、部分 1：20～1：30 その他 1：25～1：80
土器実測図・拓本図 1：4、土・石製品実測図 1：2、石器実測図 2：3、1：2、1：3、1：4、1：6
- 掲載した遺構写真の縮尺は任意の大きさである。
- 本文及び付編 DVD に掲載した遺構・遺物実測図中のスクリーントーンは以下のように用いた。これ以外の場合、図中に凡例を示した。
- 遺物実測図中のスクリーントーンは以下のように用いた。これ以外の場合、図中に凡例を示した。
- 遺物写真の縮尺は、およそ次のとおりである。
土器約 1：6～1：3 土製品 1：2 石器 2：3～1：6
- 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2004 年度版）を基準とした。

遺構図	被熱赤変部分		遺物図	赤彩土器	
	炭化物分布範囲			黒色土器	
土器断面	縄文・弥生土器					
	土師器・中世土器					
	須恵器					

目次

口 絵
序 言
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
挿表目次
遺構・遺物図版目次
写真図版目次

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
1 替佐築堤の事業概要	1
2 埋蔵文化財の保護協議	2
3 替佐築堤工事に伴う千田遺跡の発掘調査に係る基本協定及び受委託契約	5
第2節 調査の経過と体制	6
1 発掘作業の経過	6
2 整理作業の経過	8
3 調査日誌抄	10
第3節 調査の方法	13
1 発掘作業の方法	13
2 整理作業の方法	17
第2章 遺跡の地形・歴史的環境	22
第1節 地形環境	22
第2節 歴史的環境	23
第3章 6区の遺構と遺物	34
第1節 概 要	34
第2節 縄文時代	34
1 遺 構	34
2 遺 物	35
第3節 古墳時代	36
1 遺 構	36
2 遺 物	38
第4節 小 結	38
第4章 1～5・7区の遺構と遺物	39
第1節 概 要	39
第2節 縄文時代	40
1 遺 構	40
2 遺 物	49

第3節	弥生時代	58
第4節	古代	58
1	遺構	58
2	遺物	59
第5節	中世・近世	59
1	遺構	59
第6節	小結	61
1	縄文時代	61
2	古代以降	64
第5章	8・9区の遺構と遺物	65
第1節	概要	65
第2節	縄文時代	66
1	遺構	66
2	遺物	89
第3節	弥生時代	108
1	遺構	108
2	遺物	111
第4節	古墳時代	112
1	遺構	112
2	遺物	113
第5節	中世・近世	114
1	遺構	114
2	遺物	115
第6節	総括	115
1	縄文時代	115
2	弥生時代	118
第6章	12区の遺構と遺物	122
第1節	概要	122
第2節	縄文時代	123
1	遺構	123
2	遺物	123
第3節	弥生時代	125
1	遺構	125
2	遺物	126
第4節	古墳時代	126
1	遺構	126
2	遺物	130
第5節	中世・近世	133
1	遺構	133
2	遺物	136
第6節	総括	136

1	縄文時代	136
2	古墳時代	136
3	中世・近世	140
第7章	10区の調査	141
第1節	概 要	141
1	地形と土層	141
2	検出遺構	142
第2節	10区1～5面の遺構	142
1	1面と関連遺構	142
2	2面の遺構	145
3	3面の遺構	150
4	4面の遺構	152
5	5面の遺構	153
第3節	10区南のトレンチ調査	154
第8章	総 括	155
引用・参考文献		
遺構・遺物図版		
写真図版		
報告書抄録		

挿図目次

第1図	千田遺跡の位置・遺跡周辺の地形	1	第7図	千田遺跡周辺の地質図	22
第2図	斑尾川両岸の調査範囲	3	第8図	中野市周辺遺跡分布図	26
第3図	千田遺跡の範囲	14	第9図	千田遺跡8区縄文中期第Ⅴ群土器分布図	87
第4図	グリッド設定図	15	第10図	千田遺跡8区縄文中期第Ⅶ群土器分布図	88
第5図	弥生時代～奈良時代土器の器種分類(1)	20	第11図	千田遺跡8区土偶分布図	104
第6図	弥生時代～奈良時代土器の器種分類(2)	21			

挿表目次

第1表	発掘届等諸届一覧	5	第5表	中野市周辺遺跡一覧表(2)	28
第2表	受委託契約一覧	6	第6表	中野市周辺遺跡一覧表(3)	29
第3表	千田遺跡調査体制	10	第7表	中野市周辺遺跡一覧表(4)	30
第4表	中野市周辺遺跡一覧表(1)	27			

图版目次

图版 1	6区遺構分布図	163	图版 37	5区縄文土器1(土坑SK669・1061、 土坑墓SM01・08、遺物集中SQ06他)	199
图版 2	6区割付図1	164	图版 38	5区縄文土器2(遺物集中SQ01・06)	200
图版 3	6区割付図2	165	图版 39	5区縄文土器3(遺物集中SQ06)	201
图版 4	6区割付図3	166	图版 40	5区縄文土器4(遺物集中SQ06)	202
图版 5	6区古墳時代竪穴住居跡(SB02)	167	图版 41	7区縄文土器1(VII Y23)	203
图版 6	6区縄文土器、古墳時代土器	168	图版 42	7区縄文土器2(SK2036)、弥生土器 (VII Y23)、5区古代土器(SB01)	204
图版 7	1~5・7区遺構分布図1	169	图版 43	3・4区土製円板	205
图版 8	1~5・7区遺構分布図2	170	图版 44	4・5区土製円板	206
图版 9	1~5・7区割付図1	171	图版 45	7区土製円板	207
图版 10	1~5・7区割付図2	172	图版 46	1~5区ミニチュア土器	208
图版 11	1~5・7区割付図3	173	图版 47	3~5・7区土製品	209
图版 12	1~5・7区割付図4	174	图版 48	3・4区土偶	210
图版 13	1~5・7区割付図5	175	图版 49	4・5区土偶	211
图版 14	1~5・7区割付図6	176	图版 50	8区縄文時代遺構分布図	212
图版 15	1~5・7区割付図7	177	图版 51	8区縄文時代遺構検出面地形図	213
图版 16	1~5・7区割付図8	178	图版 52	8区土層断面図	214
图版 17	1~5・7区割付図9	179	图版 53	8区縄文時代割付図1	215
图版 18	1~5・7区縄文時代個別遺構図1 (掘立柱建物跡ST01、陥し穴SK27)	180	图版 54	8区縄文時代割付図2	216
图版 19	1~5・7区縄文時代個別遺構図2 (土坑墓群SM01~21)	181	图版 55	8区縄文時代割付図3	217
图版 20	1~5・7区縄文時代個別遺構図3 (土坑墓群SM01~21断面図)	182	图版 56	8区縄文時代割付図4	218
图版 21	1~5・7区縄文時代個別遺構図4 (SQ03土層断面図)	183	图版 57	8区縄文時代割付図5	219
图版 22	1~5・7区古代竪穴住居跡(SB01)	184	图版 58	8区縄文時代割付図6	220
图版 23	1~3区縄文土器(土坑SK03、 遺物集中SQ01・02・04・05他)	185	图版 59	8区縄文時代割付図7	221
图版 24	4区縄文土器1(土坑SK79~81、 遺物集中SQ03)	186	图版 60	8区縄文時代割付図8	222
图版 25	4区縄文土器2(遺物集中SQ03)	187	图版 61	8区縄文時代割付図9	223
图版 26	4区縄文土器3(遺物集中SQ03)	188	图版 62	8区縄文時代割付図10	224
图版 27	4区縄文土器4(遺物集中SQ03)	189	图版 63	8区縄文時代割付図11	225
图版 28	4区縄文土器5(遺物集中SQ03)	190	图版 64	8区縄文時代竪穴住居跡1(SB07)	226
图版 29	4区縄文土器6(遺物集中SQ03)	191	图版 65	8区縄文時代竪穴住居跡2(SB10)	227
图版 30	4区縄文土器7(遺物集中SQ03)	192	图版 66	8区縄文時代竪穴住居跡3(SB11)	228
图版 31	4区縄文土器8(遺物集中SQ03)	193	图版 67	8区縄文時代竪穴住居跡4(SB14)	229
图版 32	4区縄文土器9(遺物集中SQ03)	194	图版 68	8区縄文時代竪穴住居跡5(SB16)	230
图版 33	4区縄文土器10(遺物集中SQ03)	195	图版 69	8区縄文時代竪穴住居跡6(SB17)	231
图版 34	4区縄文土器11(遺物集中SQ03)	196	图版 70	8区縄文時代竪穴住居跡7(SB19・52)	232
图版 35	4区縄文土器12(遺物集中SQ03)	197	图版 71	8区縄文時代竪穴住居跡8(SB19・52)	233
图版 36	4区縄文土器13(遺物集中SQ03)	198	图版 72	8区縄文時代竪穴住居跡9(SB20)	234

函版 73	8区縄文時代整穴住居跡 10(SB21) … 235	函版 110	8区縄文時代土坑 2 (SK1553・1571・1660・1678・1860) …………… 272
函版 74	8区縄文時代整穴住居跡 11(SB22) … 236	函版 111	8区縄文時代土坑 3 (SK1522・1559・1569・1667) …………… 273
函版 75	8区縄文時代整穴住居跡 12(SB23・26) …………… 237	函版 112	8区縄文時代土坑 4 (SK1765・1793・1796・1803) …………… 274
函版 76	8区縄文時代整穴住居跡 13(SB25・28) …………… 238	函版 113	8区縄文時代土坑 5 (SK2265・2408 ~ 2411) …………… 275
函版 77	8区縄文時代整穴住居跡 14(SB27) … 239	函版 114	8区縄文時代土坑 6 (SK1401・1560・2272・2375) …………… 276
函版 78	8区縄文時代整穴住居跡 15(SB29) … 240	函版 115	9区縄文時代配石遺構 (SH33・34)、土坑 (SK1756・1757・1763・2449・2450)、弥生時代土坑 (SK1755) …………… 277
函版 79	8区縄文時代整穴住居跡 16(SB30) … 241	函版 116	8区縄文時代配石遺構 1 (SH12 ~ 14・16 ~ 19) …………… 278
函版 80	8区縄文時代整穴住居跡 17(SB31) … 242	函版 117	8区縄文時代配石遺構 2 (SH05・06・08 ~ 12・27・28・30) …… 279
函版 81	8区縄文時代整穴住居跡 18(SB32) … 243	函版 118	8区縄文時代配石遺構 3 (SH01 ~ 03・32) …………… 280
函版 82	8区縄文時代整穴住居跡 19(SB35) … 244	函版 119	8区縄文土器 1 (SB07・10) …………… 281
函版 83	8区縄文時代整穴住居跡 20(SB36) … 245	函版 120	8区縄文土器 2 (SB10) …………… 282
函版 84	8区縄文時代整穴住居跡 21(SB37) … 246	函版 121	8区縄文土器 3 (SB11・14) …………… 283
函版 85	8区縄文時代整穴住居跡 22(SB37・38) …………… 247	函版 122	8区縄文土器 4 (SB14) …………… 284
函版 86	8区縄文時代整穴住居跡 23(SB40) … 248	函版 123	8区縄文土器 5 (SB16) …………… 285
函版 87	8区縄文時代整穴住居跡 24(SB41) … 249	函版 124	8区縄文土器 6 (SB16・19) …………… 286
函版 88	8区縄文時代整穴住居跡 25(SB43) … 250	函版 125	8区縄文土器 7 (SB19・20・21) …………… 287
函版 89	8区縄文時代整穴住居跡 26(SB44) … 251	函版 126	8区縄文土器 8 (SB21・22) …………… 288
函版 90	8区縄文時代整穴住居跡 27(SB45) … 252	函版 127	8区縄文土器 9 (SB22・23・25) …………… 289
函版 91	8区縄文時代整穴住居跡 28(SB46) … 253	函版 128	8区縄文土器 10 (SB25) …………… 290
函版 92	8区縄文時代整穴住居跡 29(SB47・49・50) …………… 254	函版 129	8区縄文土器 11 (SB25) …………… 291
函版 93	8区縄文時代整穴住居跡 30(SB51) … 255	函版 130	8区縄文土器 12 (SB26・27) …………… 292
函版 94	8区縄文時代整穴住居跡 31 (SB51・56) …………… 256	函版 131	8区縄文土器 13 (SB27・29) …………… 293
函版 95	8区縄文時代整穴住居跡 32(SB53・54) …………… 257	函版 132	8区縄文土器 14 (SB29・30) …………… 294
函版 96	8区縄文時代整穴住居跡 33(SB55) … 258	函版 133	8区縄文土器 15 (SB30) …………… 295
函版 97	8区縄文時代整穴住居跡 34(SB57) … 259	函版 134	8区縄文土器 16 (SB30・31) …………… 296
函版 98	8区縄文時代整穴住居跡 35(SB58) … 260	函版 135	8区縄文土器 17 (SB31) …………… 297
函版 99	8区縄文時代整穴住居跡 36(SB59) … 261	函版 136	8区縄文土器 18 (SB31) …………… 298
函版 100	8区縄文時代整穴住居跡 37(SB60・62) …………… 262	函版 137	8区縄文土器 19 (SB31・32・34・35) … 299
函版 101	8区縄文時代整穴住居跡 38(SB61) … 263	函版 138	8区縄文土器 20 (SB35) …………… 300
函版 102	8区縄文時代整穴住居跡 39(SB65) … 264	函版 139	8区縄文土器 21 (SB35・36・37) …… 301
函版 103	8区縄文時代整穴住居跡 40(SB66) … 265	函版 140	8区縄文土器 22 (SB37) …………… 302
函版 104	8区縄文時代整穴住居跡 41 (SB67) … 266	函版 141	8区縄文土器 23 (SB37) …………… 303
函版 105	8区縄文時代整穴住居跡 42 (SB68) … 267	函版 142	8区縄文土器 24 (SB37) …………… 304
函版 106	8区縄文時代整穴住居跡 43 (SB68) … 268	函版 143	8区縄文土器 25 (SB37) …………… 305
函版 107	8区縄文時代整穴住居跡 44 (SB69) … 269	函版 144	8区縄文土器 26 (SB40・41) …………… 306
函版 108	8区縄文時代溝跡 (SD14) …………… 270		
函版 109	8区縄文時代土坑 1 (SK1551・1552・1557・1570・1700・1722・1750・1752) …… 271		

図版 145	8区縄文土器 27(SB41) ……………	307	図版 181	8区縄文土器 63(SB58・59・60・61・62) ……………	343
図版 146	8区縄文土器 28(SB41) ……………	308	図版 182	8区縄文土器 64(SB62・65・66・67・68) ……………	344
図版 147	8区縄文土器 29(SB41) ……………	309	図版 183	8区縄文土器 65(SB68,SK) ……………	345
図版 148	8区縄文土器 30(SB41・43) ……………	310	図版 184	8区縄文土器 66(SK,SH) ……………	346
図版 149	8区縄文土器 31(SB44) ……………	311	図版 185	8区縄文土器 67(SH,ⅧQ区) ……………	347
図版 150	8区縄文土器 32(SB44・46) ……………	312	図版 186	8区縄文土器 68(ⅧQ区) ……………	348
図版 151	8区縄文土器 33(SB46・51) ……………	313	図版 187	8区縄文土器 69(ⅧQ区) ……………	349
図版 152	8区縄文土器 34(SB52・53・54) ……………	314	図版 188	8区縄文土器 70(ⅧR区) ……………	350
図版 153	8区縄文土器 35(SB54・55・57・59) ……	315	図版 189	8区縄文土器 71(ⅧR区) ……………	351
図版 154	8区縄文土器 36(SB61・68) ……………	316	図版 190	8区縄文土器 72(ⅧR区) ……………	352
図版 155	8区縄文土器 37(SB68) ……………	317	図版 191	8区縄文土器 73(ⅧR・P・V区) ……	353
図版 156	8区縄文土器 38(SB68) ……………	318	図版 192	8区縄文土器 74(ⅧV・W区・SB15・ 東傾斜面) ……………	354
図版 157	8区縄文土器 39(SB68・69) ……………	319	図版 193	9区縄文土器 ……………	355
図版 158	8区縄文土器 40(SK1401・1522) ……	320	図版 194	8区土製円板 ……………	356
図版 159	8区縄文土器 41(SK1551・1552・1553 ・1558) ……………	321	図版 195	8区ミニチュア土器 1 ……………	357
図版 160	8区縄文土器 42(SK1559・1560・1569 ・1570・1571) ……………	322	図版 196	8区ミニチュア土器 2 ……………	358
図版 161	8区縄文土器 43(SK1660・1678・1750 ・1860・2407) ……………	323	図版 197	8区土製品 ……………	359
図版 162	8区縄文土器 44(SH26, SQ11・14・20・ 21,ⅧQ区) ……………	324	図版 198	8区土偶 1 ……………	360
図版 163	8区縄文土器 45(ⅧQ24・25区) ……	325	図版 199	8区土偶 2 ……………	361
図版 164	8区縄文土器 46(ⅧQ25区) ……………	326	図版 200	8区土偶 3 ……………	362
図版 165	8区縄文土器 47(ⅧQ25・R01 ~ 03・ 06 ~ 08・11区) ……………	327	図版 201	8区土偶 4 ……………	363
図版 166	8区縄文土器 48(ⅧR11・16区) ……	328	図版 202	8区土偶 5 ……………	364
図版 167	8区縄文土器 49(ⅧR16区) ……………	329	図版 203	8区土偶 6 ……………	365
図版 168	8区縄文土器 50(ⅧR16・17区) ……	330	図版 204	8区土偶 7 ……………	366
図版 169	8区縄文土器 51(ⅧR21・22, V03・04・ 05区) ……………	331	図版 205	8区土偶 8 ……………	367
図版 170	8区縄文土器 52(ⅧV05区、流路跡、 東傾斜面) ……………	332	図版 206	8区土偶 9 ……………	368
図版 171	8区縄文土器 53(東傾斜面) ……………	333	図版 207	8区土偶 10 ……………	369
図版 172	8区縄文土器 54(SB07・16) ……………	334	図版 208	8区土偶 11 ……………	370
図版 173	8区縄文土器 55(SB17・19・20) ……	335	図版 209	8区縄文時代石鏃 1 ……………	371
図版 174	8区縄文土器 56(SB20・21・22・25) ……	336	図版 210	8区縄文時代石鏃 2 ……………	372
図版 175	8区縄文土器 57(SB25・30) ……………	337	図版 211	8区縄文時代石鏃 3、石鏃 ……	373
図版 176	8区縄文土器 58(SB31・35・36) ……	338	図版 212	8区縄文時代尖頭器、石匙、鈎状石器、 異形石器 ……………	374
図版 177	8区縄文土器 59(SB37・38・41) ……	339	図版 213	8区縄文時代スクレイパー 1 ……	375
図版 178	8区縄文土器 60(SB41・42・43・44) ……	340	図版 214	8区縄文時代スクレイパー 2 ……	376
図版 179	8区縄文土器 61(SB45・46・48・49・50・ 51・52) ……………	341	図版 215	8区縄文時代打製石斧 1 ……	377
図版 180	8区縄文土器 62(SB53・54・55・56・57) ……………	342	図版 216	8区縄文時代打製石斧 2 ……	378
			図版 217	8区縄文時代打製石斧 3 ……	379
			図版 218	8区縄文時代打製石斧 4 ……	380
			図版 219	8区縄文時代磨製石斧 1 ……	381
			図版 220	8区縄文時代磨製石斧 2 ……	382
			図版 221	8区縄文時代磨製石斧 3、板状石器、	

砥石 1、研磨礫	383	図版 266	8区弥生時代竪穴住居跡 4 (SB08)	428	
図版 222	8区縄文時代砥石 2	384	図版 267	8区弥生時代竪穴住居跡 5 (SB09)	429
図版 223	8区縄文時代石錘、礫器	385	図版 268	8区弥生時代竪穴住居跡 6 (SB12)	430
図版 224	8区縄文時代敲打礫 1	386	図版 269	8区弥生時代竪穴住居跡 7 (SB12)	431
図版 225	8区縄文時代敲打礫 2	387	図版 270	9区弥生時代竪穴住居跡 1 (SB63)	432
図版 226	8区縄文時代敲打礫 3	388	図版 271	9区弥生時代竪穴住居跡 2 (SB64)	433
図版 227	8区縄文時代棒状敲石	389	図版 272	8区古墳時代竪穴住居跡 1 (SB04)	434
図版 228	8区縄文時代磨石類 1	390	図版 273	8区古墳時代竪穴住居跡 2 (SB13)	435
図版 229	8区縄文時代磨石類 2	391	図版 274	8区古墳時代竪穴住居跡 3 (SB18)	436
図版 230	8区縄文時代磨石類 3	392	図版 275	8区弥生土器 1 (SB03・05・06)	437
図版 231	8区縄文時代磨石類 4	393	図版 276	8区弥生土器 2 (SB08・09・12)	438
図版 232	8区縄文時代磨石類 5	394	図版 277	8区弥生土器 3 (SB12)	439
図版 233	8区縄文時代磨石類 6	395	図版 278	8区弥生土器 4 (SB12)	440
図版 234	8区縄文時代磨石類 7	396	図版 279	8区弥生土器 5 (SB12)	441
図版 235	8区縄文時代磨石類 8	397	図版 280	8区弥生土器 6 (SB12)	442
図版 236	8区縄文時代磨石類 9	398	図版 281	9区弥生土器 (SB63・64、SK1755)・8区 中世焼物	443
図版 237	8区縄文時代磨石類 10	399	図版 282	8区弥生時代石器・石製品・土製品	444
図版 238	8区縄文時代磨石類 11	400	図版 283	8区古墳時代土器 (SB04・13・18)	445
図版 239	8区縄文時代磨石類 12	401	図版 284	8区古墳時代石製品 1	446
図版 240	8区縄文時代磨石類 13	402	図版 285	8区古墳時代石製品 2	447
図版 241	8区縄文時代磨石類 14	403	図版 286	12区土層断面図	448
図版 242	8区縄文時代石皿 1	404	図版 287	12区縄文時代遺構分布図	449
図版 243	8区縄文時代石皿 2	405	図版 288	12区縄文時代割付図 1	450
図版 244	8区縄文時代石皿 3	406	図版 289	12区縄文時代割付図 2	451
図版 245	8区縄文時代石皿 4	407	図版 290	12区縄文時代割付図 3	452
図版 246	8区縄文時代台石 1	408	図版 291	12区縄文時代竪穴住居跡 (SB88)	453
図版 247	8区縄文時代台石 2	409	図版 292	12区弥生・古墳時代遺構分布図	454
図版 248	8区縄文時代台石 3	410	図版 293	12区弥生・古墳時代割付図 1	455
図版 249	8区縄文時代多孔石 1	411	図版 294	12区弥生・古墳時代割付図 2	456
図版 250	8区縄文時代多孔石 2	412	図版 295	12区弥生・古墳時代割付図 3	457
図版 251	8区縄文時代多孔石 3	413	図版 296	12区弥生・古墳時代割付図 4	458
図版 252	8区縄文時代石棒・丸石	414	図版 297	12区弥生・古墳時代割付図 5	459
図版 253	3～5・8区縄文時代石製品	415	図版 298	12区弥生・古墳時代竪穴住居跡 1 (SB81・82)	460
図版 254	8区弥生時代以降遺構分布図	416	図版 299	12区弥生時代竪穴住居跡 2 (SB84)	461
図版 255	8区弥生時代以降割付図 1	417	図版 300	12区古墳時代竪穴住居跡 3 (SB70)	462
図版 256	8区弥生時代以降割付図 2	418	図版 301	12区古墳時代竪穴住居跡 4 (SB71)	463
図版 257	8区弥生時代以降割付図 3	419	図版 302	12区古墳時代竪穴住居跡 5 (SB72)	464
図版 258	8区弥生時代以降割付図 4	420	図版 303	12区古墳時代竪穴住居跡 6 (SB73)	465
図版 259	8区弥生時代以降割付図 5	421	図版 304	12区古墳時代竪穴住居跡 7 (SB74)	466
図版 260	9区遺構分布図	422	図版 305	12区古墳時代竪穴住居跡 8 (SB74・75)	467
図版 261	9区割付図 1	423	図版 306	12区古墳時代竪穴住居跡 9 (SB76)	468
図版 262	9区割付図 2	424	図版 307	12区古墳時代竪穴住居跡 10 (SB77)	469
図版 263	8区弥生時代竪穴住居跡 1 (SB03)	425			
図版 264	8区弥生時代竪穴住居跡 2 (SB05)	426			
図版 265	8区弥生時代竪穴住居跡 3 (SB06)	427			

図版 308	12区古墳時代竪穴住居跡11(SB78) …	470	図版 327	12区古墳時代土器 6(SB85) …	489
図版 309	12区古墳時代竪穴住居跡12(SB79) …	471	図版 328	12区古墳時代土器 7(SB86) …	490
図版 310	12区古墳時代竪穴住居跡13(SB80) …	472	図版 329	12区古墳時代土器 8(SB87) …	491
図版 311	12区古墳時代竪穴住居跡14(SB83) …	473	図版 330	8・12区古墳時代石製品・土製品 …	492
図版 312	12区古墳時代竪穴住居跡15(SB85) …	474	図版 331	10・12区金属製品、10区古墳時代土器 ・中世建物 …	493
図版 313	12区古墳時代竪穴住居跡16(SB86) …	475	図版 332	10区位置図 …	494
図版 314	12区古墳時代竪穴住居跡17(SB87) …	476	図版 333	10区南土層断面図 …	495
図版 315	12区中世以降遺構分布図 …	477	図版 334	10区1面遺構図 …	496
図版 316	12区中世以降割付図1 …	478	図版 335	10区1面土層断面図 …	497
図版 317	12区中世以降割付図2 …	479	図版 336	10区1面水口部分図 …	498
図版 318	12区中世以降割付図3 …	480	図版 337	10区2A面遺構図 …	499
図版 319	12区縄文土器1(SB74・88、SH48、 SK3204・3322) …	481	図版 338	10区2面遺構図1 …	500
図版 320	12区縄文土器2(SK、II Q・V区)・ 弥生土器(SB82・84) …	482	図版 339	10区2面遺構図2(屋敷地) …	501
図版 321	12区縄文時代土偶 …	483	図版 340	10区3面遺構図・水口部分図 …	502
図版 322	12区古墳時代土器1(SB70・71・72) …	484	図版 341	10区3面土層断面図 …	503
図版 323	12区古墳時代土器2(SB72・73・74) …	485	図版 342	10区4面遺構図 …	504
図版 324	12区古墳時代土器3(SB74・75・76・77) …	486	図版 343	10区4面土層断面図 …	505
図版 325	12区古墳時代土器4(SB77・78) …	487	図版 344	10区5面遺構図 …	506
図版 326	12区古墳時代土器5(SB79・80・83・85) …	488	図版 345	10区5面土層断面図 …	507
			図版 346	10区5面水口部分図 …	508

写真図版目次

PL 1	遺跡遠景	PL 17	4区縄文時代石器(4)
PL 2	6区古墳時代竪穴住居跡、掘立柱建物跡	PL 18	4区縄文時代石器(5)
PL 3	1～5・7区(1)縄文時代遺物集中(1)、 土坑	PL 19	4区縄文時代石器(6)
PL 4	1～5・7区(2)縄文時代遺物集中(2)	PL 20	4区縄文時代石器(7)
PL 5	1～5・7区(3)縄文時代掘立柱建物跡、 土坑墓(1)	PL 21	4区縄文時代石器(8)
PL 6	1～5・7区(4)縄文時代土坑墓(2)、 土坑、弥生時代遺構、古代竪穴住居跡	PL 22	4区縄文時代石器(9)
PL 7	4・5区縄文土器(1)	PL 23	8区(1)縄文時代竪穴住居跡(1)
PL 8	4・5区縄文土器(2)	PL 24	8区(2)縄文時代竪穴住居跡(2)
PL 9	4・5区縄文土器(3)	PL 25	8区(3)縄文時代竪穴住居跡(3)
PL 10	4・5区縄文土器(4)	PL 26	8区(4)縄文時代竪穴住居跡(4)
PL 11	3～5区縄文時代土製品(1)	PL 27	8区(5)縄文時代竪穴住居跡(5)
PL 12	1・3～5・7区縄文時代土製品(2)	PL 28	8区(6)縄文時代竪穴住居跡(6)
PL 13	3～5区縄文時代土製品(3)	PL 29	8区(7)縄文時代竪穴住居跡(7)
PL 14	4区縄文時代石器(1)	PL 30	8区(8)縄文時代竪穴住居跡(8)
PL 15	4区縄文時代石器(2)	PL 31	8区(9)縄文時代竪穴住居跡(9)
PL 16	4区縄文時代石器(3)	PL 32	8区(10)縄文時代竪穴住居跡(10)
		PL 33	8区(11)縄文時代竪穴住居跡(11)
		PL 34	8区(12)縄文時代配石遺構(1)
		PL 35	8区(13)縄文時代配石遺構(2)

- PL 36 8区(14) 縄文時代土坑(1)
- PL 37 8区(15) 縄文時代土坑(2)
- PL 38 8区(16) 縄文時代土坑(3)
- PL 39 8区(17) 縄文時代遺物出土状況ほか、
9区(1) 縄文時代遺構
- PL 40 8区縄文土器(1)
- PL 41 8区縄文土器(2)
- PL 42 8区縄文土器(3)
- PL 43 8区縄文土器(4)
- PL 44 8区縄文土器(5)
- PL 45 8区縄文土器(6)
- PL 46 8区縄文土器(7)
- PL 47 8区縄文土器(8)
- PL 48 8区縄文土器(9)
- PL 49 8区縄文土器(10)
- PL 50 8区縄文土器(11)
- PL 51 8区縄文土器(12)
- PL 52 8区縄文土器(13)
- PL 53 8区縄文土器(14)
- PL 54 8区縄文土器(15)
- PL 55 8区縄文土器(16)
- PL 56 8区縄文土器(17)
- PL 57 8区縄文土器(18)
- PL 58 8区縄文土器(19)
- PL 59 8区縄文土器(20)
- PL 60 8区縄文土器(21)
- PL 61 8区縄文土器(22)
- PL 62 8区縄文土器(23)
- PL 63 8区(9区) 縄文土器(24)
- PL 64 8区縄文土器(25)
- PL 65 8区縄文土器(26)
- PL 66 8区縄文土器(27)
- PL 67 8区縄文土器(28)
- PL 68 8区縄文時代土製品(1)
- PL 69 8区縄文時代土製品(2)
- PL 70 8区縄文時代土製品(3)
- PL 71 8区縄文時代土製品(4)
- PL 72 8区縄文時代土製品(5)
- PL 73 8区縄文時代土製品(6)
- PL 74 8区縄文時代土製品(7)
- PL 75 8区縄文時代土製品(8)
- PL 76 8区縄文時代石器(1)
- PL 77 8区縄文時代石器(2)
- PL 78 8区縄文時代石器(3)
- PL 79 8区縄文時代石器(4)
- PL 80 8区縄文時代石器(5)
- PL 81 8区縄文時代石器(6)
- PL 82 8区縄文時代石器(7)
- PL 83 8区縄文時代石器(8)
- PL 84 8区縄文時代石器(9)
- PL 85 8区縄文時代石器(10)
- PL 86 8区縄文時代石器(11)
- PL 87 8区縄文時代石器(12)
- PL 88 8区縄文時代石器(13)
- PL 89 8区縄文時代石器(14)
- PL 90 4・8区縄文時代石器(15)・石製品(1)
- PL 91 8区縄文時代石器(16)
- PL 92 3~5・8区縄文時代石製品(2)
- PL 93 8区(18) 弥生・古墳時代竪穴住居跡(1)
- PL 94 8区(19)・9区弥生・古墳時代竪穴住居跡(2)
- PL 95 8区弥生土器(1)
- PL 96 8区弥生土器(2)
- PL 97 8区弥生土器(3)
- PL 98 8区弥生土器(4)
- PL 99 8区弥生土器(5)
- PL 100 8区弥生土器(6)・9区弥生土器(1)
- PL 101 9区弥生土器(2)
- PL 102 7区弥生土器、8区弥生時代石製品、
8・12区弥生・古墳時代土・石製品
- PL 103 5区古代土器、6・8区古墳時代土器
- PL 104 8区古墳時代石製品
- PL 105 12区(1) 縄文・弥生時代竪穴住居跡、
古墳時代竪穴住居跡(1)
- PL 106 12区(2) 古墳時代竪穴住居跡(2)
- PL 107 12区(3) 古墳時代竪穴住居跡(3)、
中世遺構
- PL 108 12区縄文土器・土製品
- PL 109 12区古墳時代土器(1)
- PL 110 12区古墳時代土器(2)
- PL 111 12区古墳時代土器(3)
- PL 112 12区古墳時代土器(4)
- PL 113 12区古墳時代土器(5)
- PL 114 12区古墳時代土器(6)
- PL 115 12区古墳時代土器(7)
- PL 116 12区古墳時代土器(8)
- PL 117 12区弥生土器、10区中世土器・石製品
- PL 118 10区(1) 第1・2面
- PL 119 10区(2) 第3・4・5面

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯

1 替佐築堤の事業概要

千曲川は長野県の北半分の河川の水を集めて北流し、新潟県境で信濃川と名称を変えて日本海へ注ぎこむ。斑尾山を源とする斑川は、飯綱町から流れくる斑尾川と合流し、千曲川に注ぎ込む。斑川は、高野辰之作詞、唱歌「ふるさと」で「こぶな釣りし、かの川」と歌われた川で、斑尾川も含めて現在でも魚類や水生生物が数多く生息している自然環境豊かな川である。中野市の替佐地区（旧豊田村）は、この斑尾川と千曲川の合流点に位置する。

替佐地区は無堤地区であったこともあり、昭和57・58年（1982・1983年）の出水により多数の家屋が浸水被害を受けた。こうした浸水被害を解消し、生活する人々の生命や財産を洪水等の被害から守るため、国土交通省北陸地方整備局千曲川工事事務所（現 千曲川河川事務所）は、平成10年（1998年）から築堤事業に着手した。まず、千曲川本流の改修に着手し、事業地に所在する遺跡の調査と築堤事業を並行して進めながら、平成18年（2006年）より千曲川からの逆流の影響を受ける区間の斑尾川の改修に着手した。ただ、この間の平成16・18年（2004年・2006年）にも台風等による洪水が発生したが、平成18年の出水に際しては、家屋移転が進み、被害も大幅に減少した。



第1図 千田遺跡の位置と遺跡周辺の地形

2 埋蔵文化財の保護協議

千田遺跡は長野県北部、中野市（旧豊田村 2005 年合併）の豊津地区の千田地籍に所在する。千曲川・斑尾川合流付近の千曲川左岸に立地し、斑尾川を挟んで千曲川の下流側が川久保・宮沖遺跡となる。千田遺跡は、土器や石器が採集される遺跡として古くから知られており、周辺在住の好事家によって多くの遺物が採集されてきており、縄文時代中期後半の遺跡とみられていた。しかし、発掘調査歴もなく、厚い千曲川洪水土層に覆われて遺跡の詳細は不明であった。この遺跡にかかって千曲川替佐築堤工事が計画され、記録保存のための発掘調査を実施することとなり、長野県埋蔵文化財センターが担当した。長野県埋蔵文化財センターでは平成 14 年度から築堤工事にかかる千田遺跡の調査に着手し、並行して斑尾川対岸の川久保遺跡の確認調査を実施した。その結果、千田遺跡は千曲川・斑尾川に面していることから、洪水の様相や変遷と共に、縄文時代早期中葉から中世、近世にいたるまで、長期にわたる人間の活動が残された遺跡であることが明らかになった。

平成 13 年度（2001 年度） 10 月 22 日に、国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所（以下、千曲川河川事務所）と長野県教育委員会（以下、県教委）による替佐築堤事業に関わる埋蔵文化財の保護協議が現地で行われた。千曲川河川事務所からは、築堤に関わる工事は千田遺跡が所在する千曲川の上流側から着手し、斑尾川沿いについては JR 飯山線まで行う計画だが、飯山線の上流側も協議中で、いずれ事業化する見込みであること、本堤より内側部分は流路断面を確保するために掘り下げるので堤防部分とその内側が事業地となることが示された。そして、協議の結果、平成 14 年度に千田遺跡から発掘調査に着手することとし、調査主体は長野県埋蔵文化財センター（以下、当センター）が担当すること、調査対象が 10 万㎡に近い面積となることから、可能な範囲の確認調査を実施すること、15 年度以後の調査は 14 年度の調査成果を踏まえて協議することとなった。

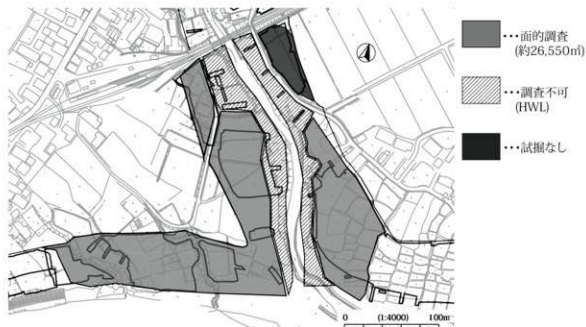
平成 14 年度（2002 年度） 年度当初から千田遺跡の発掘調査に着手した。また、対象地内の確認調査を実施し、川久保遺跡については千曲川沿いの 3・4 区周辺の場所で確認調査を行い、段丘上の 3 区東側と段丘直下で遺物が採取されたが、千曲川沿いは調査の必要がないとされた。この確認調査の結果を受けて、翌年 1 月 17 日に千曲川河川事務所・県教委・当センターの三者協議で、築堤にかかわる調査は 18 年度までに終了させること、15 年度から工事を着手するので、15 年度は千曲川の上流側にあたる千田遺跡の 1,000 ㎡の調査を行うこと、斑尾川右岸を中心とした確認調査を実施することが確認された。

平成 15 年度（2003 年度） 15 年度の調査対象地区は JR 飯山線に近接する箇所であったため、4 月 14 日に JR 東日本飯山線営業所と千曲川河川事務所、当センターの三者で協議を行った。築堤工事に伴う工事用道路敷設について千曲川河川事務所と JR 東日本飯山線営業所との計画協議が予定されており、埋蔵文化財調査についてもこの中に含め、実施協議を進めていくこととなった。その後、7 月 2 日に埋蔵文化財調査に伴う重機の JR 飯山線横断についての協議を JR 東日本飯山線営業所と当センターで行い、7 月 7 日から発掘調査に着手した。古墳時代後期の住居跡を中心に調査を進め、8 月 28 日に調査は終了した。12 月 17 日に、千曲川に面した 14 年度調査区の東側未調査区に護岸工事を行う旨が千曲川河川事務所から提示され、翌年 1 月 8 日に現地でトレンチ調査を実施し、遺構・遺物が無いことを確認した。1 月 20 日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で、次年度調査についての再協議が実施された。そこで平成 16 年度は川久保遺跡の調査を優先すること、対象地は 15,000 ㎡で、調査は川久保 2 区を優先して順次 2 区から 1 区へ調査を進めることとされた。

平成16年度（2004年度）当該年度は、斑尾川対岸の川久保遺跡の発掘調査に終始した。10月20日には台風23号により洪水が発生し、川久保遺跡調査区内も完全に水没する災害にあったが、12月には調査を終了した。翌年1月17日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で次年度調査に関する協議が行われた。平成17年度には築堤用の土砂が入ることから、本堤盛土とする千曲川沿いの川久保・千田遺跡の調査を同時に進めてもらいたい旨、示された。それを受けて当センターでは2班体制で2遺跡の調査に臨み、斑尾川沿いの千田10～12区、川久保5・6区は平成18年度に調査することとした。その後、1月28日に千曲川河川事務所から、斑尾川兩岸の調査については斑尾川が急流河川で降雨から出水が早いこと、雨量・流量観測並びにパトロール等の体制が整っていないなどの理由から、以下の条件が県教委あてに提示された。

- ① 現況地盤高が斑尾川HWL（計画洪水水位）より低い場所での発掘調査は行わない。
- ② 現況地盤高が斑尾川HWL以上の土地について発掘調査を行う場合、支川計画の流量規模における築堤相当（計画流量500立方メートル/s未満の堤防相当）の地山を河川側に残すこと（斑尾川岸法肩から3m離して掘削を行うこと）。
- ③ 上記②によらない場合は、同程度の仮締め切りを設け、出水に備えること。
- ④ 地盤掘削において、掘削深度が現地盤より2m以上になる場合は安全衛生法に定める作業責任者を配置すること。
- ⑤ 上記④において、掘削は法面を45度で切り下げ、なおかつ法長が10mを越える場合は小段を設けること。
- ⑥ 掘削底標高は排水を考慮した高さ以上（TP326.0m以上）とし、それ以上掘削は行わないこと。また、排水勾配は5%とする。なお、条件的に上記をクリアしたとしても、現況の斑尾川最深河床標高より深く掘削してはならない。
- ⑦ 村道近くで掘削を行う場合、舗装保護のため舗装路肩より0.5m以上離して掘削すること。

県教委では調査の安全を第一優先とし、上記の条件で調査を進める方針を選択し、当センターでもその方向で対応策を練り、2月9日に三者で再協議を実施した。その結果、千曲川河川事務所が提示した条件



第2図 斑尾川兩岸の調査範囲

を順守し、千田11区は斑尾川計画高水位（HWL）より低いためトレンチ調査のみとした。

平成17年度（2005年度）4月12日に千曲川河川事務所と当センターで当該年度の工事工程と調査工程の調整を行い、5月10日から千田、川久保両遺跡の調査を並行して進めた。千田遺跡8区の調査では、縄文時代の竪穴住居跡53軒をはじめ、配石遺構などが、さらに弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居跡等、予想をはるかに越える遺構数が確認されたため、他の地区を含め当初の日程通りに調査を終了することが困難となった。そこで、9月12日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で協議し、10月から調査研究員を1名増員することとした。11月11日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で調査の進捗状況の確認と今後の日程調整などを行い、12月22日に調査を終了した。12月27日に千曲川河川事務所、当センターで17年度の調査状況の確認と次年度の計画について協議を行った。平成18年度に千曲川沿いの千田9区まで本堤防を完成させ、斑尾川沿いの川久保5区と千田10～12区の調査が終了次第、工事に着手する予定が千曲川河川事務所から示された。当センターからは、プレハブ用地・排土の搬出場所の確保が課題で、それらを解決するためには斑尾川に仮設橋を設置する必要があること等を要請した。なお、11月11日の三者協議では、替佐築堤事業に係る発掘作業が概ね18・19年度で終了する見込みが立ち、今後、出土した膨大な資料を整理し報告書を作成していくには多くの人員と期間が必要となってくるため、発掘調査に係る基本協定を千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で締結すべき旨を県教委が提案し、協定締結に向けての作業を開始し、18年度からは柳沢築堤事業に係る中野市柳沢遺跡の調査対応も求められ、同遺跡についても基本協定の中に位置付けていくこととなった。この協定は、「替佐築堤及び柳沢築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」として翌年3月17日付けで締結された。

平成18年度（2006年度）4月25日に千曲川河川事務所と当センターで当該年度の工事工程と調査工程の調整を行った。その結果、千田遺跡の調査を先行し、川久保遺跡については、周囲の水田から水が落ちた9月から着手すること、宮沖遺跡の確認調査及び柳沢遺跡の調査は、川久保・千田遺跡の調査が終了する10月以降に着手することとなった。また、18年度は築堤工事が広域かつ大規模に展開するようになり、埋蔵文化財調査も同時併行で進めていくことから、工事業者でつくる「替佐築堤護岸工事関係者連絡会議」に調査担当者も加わり、安全かつ円滑にそれぞれの事業が進むよう連絡調整を図った。この年も、7月に梅雨末期の豪雨で調査区が水没したが、10月20日に千田遺跡の調査は終了し、宮沖遺跡の調査へ移行した。翌19年1月12日に千曲川河川事務所、県教委、中野市教育委員会、当センターの四者で、平成19年度以後の調査について協議し、19年度には宮沖遺跡の調査を終了させ、JR飯山線以北の千田遺跡の確認調査、柳沢遺跡の本調査を実施し、並行して千田遺跡の本格整理作業を進めること、20年度には千田・柳沢遺跡の本調査を完了させることとした。

平成19年度（2007年度）4月9日に千曲川河川事務所と当センターで当該年度の工事工程と調査工程の調整を行った。その結果、宮沖遺跡の調査を主体に進め、状況に応じて千田遺跡のJR飯山線以北の確認調査を実施することとした。千田遺跡の確認調査は9月11日から9月25日まで行った。9月21日に宮沖、千田遺跡調査終了に係る現地協議を千曲川河川事務所と当センターで行い、千田遺跡については、段丘上では遺構が検出されず、氾濫原内は堆積土層が薄く近世の水田層が部分的にしか認められないことから本調査の必要はないことを確認した。なお、6月12日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で協議が行われ、千田遺跡の本格整理作業を中断して、柳沢遺跡の調査に対応することとなった。

平成20～24年度（2008～2012年度）19年度に調査が終了したことや19年度に柳沢遺跡で銅戈・銅鐸が発見されたことなどから、千田遺跡に限った保護協議は行われず、年度の初めに事業計画、終わりに実績報告を提出することで対応した。ただし、17年度末に三者で締結した基本協定の期間が21年度末までであったことなどから、22年2月10日から協定変更に向けた協議を開始し、3月30日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者による新たな協定が締結された。

3 替佐築堤工事に伴う千田遺跡の発掘調査に係る基本協定及び受委託契約

替佐築堤工事に伴う千田遺跡の発掘調査は、斑尾川対岸に位置する川久保・宮沖遺跡と柳沢築堤工事（いずれも事業主体は国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所）に伴う中野市柳沢遺跡の発掘調査とともに、千曲川河川事務所・県教委・当センターが所属する長野県文化振興事業団の三者により、発掘調査の実施に関する協定（「替佐築堤及び柳沢築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」）を平成17年度末に結び、実施された。ただし、平成17年度以前の調査面積（千田遺跡は平成14年度から、川久保遺跡は平成16年度から調査着手）を含んでいないことや各遺跡の調査対象面積が確定していないことなどの整理については、三者による継続協議とした。

平成19年度には柳沢遺跡において弥生時代の青銅器埋納坑が発見され、全国的にも注目を集めたが、千曲川河川事務所・県教委・中野市教委等が実施した協議の末、柳沢遺跡を記録保存することと決定した。これに合わせ、調査経費が計上され、4遺跡の調査対象面積及び調査経費の整理が行われ、平成21年度に変更協定が結ばれた。

千曲川河川事務所と当センターは、この基本協定に基づき年度ごとに埋蔵文化財発掘調査業務の受委託契約を結び、遂行した。契約期間と契約額（柳沢築堤工事関連遺跡と面積按分）は第2表のとおりである。

第1表 発掘調査遺跡諸届けなど提出状況

遺跡名	発掘届		発掘通知		埋蔵物発見届		埋蔵文化財保管証		発掘調査報告		発掘物預り書		文化財認定及び出土品の帰属	
	日付	番号	日付	番号	日付	番号	日付	番号	日付	番号	受理届出日	番号	日付	番号
千田	14.4.1	14長理第3-11号	14.4.11	14教文第4-11号	15.2.21	14長理第77-14号	15.2.21	14長理第77-14号			15.2.24	M-3号	15.3.7	14教文第6-92号
千田	15.4.1	15長理第11-15号	15.4.14	15教文第8-15号	16.1.29	15長理第138号	16.1.29	15長理第138号	16.1.29	15長理第138号	16.1.29	M-3号	16.2.23	15教文第10-132号
千田	17.4.1	17長理第12-8号	17.4.11	17教文第4-8号	17.12.28	17長理第13-18号	17.12.28	17長理第14-18号	17.12.28	17長理第15-18号	18.1.10	M-5号	18.1.16	17教文第6-123号
千田	18.3.23	17長理第12-21号	18.4.6	18教文第4-2号	18.10.26	18長理第2-9号	18.10.26	18長理第3-9号	18.10.26	18長理第4-9号	18.10.26	M-3号	18.11.14	18教文第6-86号
千田	19.3.9	18長理第1-19号	19.3.15	18教文第4-34号	19.9.28	19長理第9-11号	19.9.28	19長理第10-11号	19.9.28	19長理第11-11号	19.9.28	M-2号	19.10.24	19教文第6-71号

第2表 受委託契約一覧

年度	契約期間	契約額			作業内容
		総額	替佐	柳沢	
平成14	14.3.26～15.3.31	49,991,197	49,991,197	-	千田遺跡の発掘作業、川久保遺跡の確認調査 上記遺跡の基礎整理作業
平成15	15.3.26～15.12.24	10,000,000	10,000,000	-	千田遺跡の発掘作業、川久保遺跡の確認調査 上記遺跡の基礎整理作業
平成16	16.4.7～17.3.31	90,169,235	90,169,235	-	川久保遺跡の発掘作業・基礎整理作業
平成17	17.4.15～18.3.31	182,259,000	182,259,000	-	千田・川久保遺跡の発掘作業 上記遺跡の基礎整理作業
平成18	18.3.29～19.3.31	110,777,100	93,181,200	17,595,900	川久保・宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡発掘作業 上記遺跡の基礎整理作業
平成19	19.3.30～20.3.31	114,481,500	53,854,500	60,627,000	宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡発掘作業 柳沢遺跡青銅器埋納坑室内調査 上記遺跡の基礎整理作業
平成20	20.3.29～21.3.31	123,165,000	2,856,000	120,309,000	柳沢遺跡発掘作業・基礎整理作業 千田・宮沖遺跡本格整理作業
平成21	21.4.1～22.3.31	45,297,000	38,711,400	6,585,600	川久保・宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡本格整理作業
平成22	22.4.1～23.3.31	37,632,000	32,161,500	5,470,500	川久保・宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡本格整理作業
平成23	23.4.1～24.3.31	42,388,500	30,246,923	12,141,577	川久保・宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡本格整理作業 柳沢遺跡報告書刊行
平成24	24.4.1～25.3.31	23,814,000	23,814,000	-	川久保・宮沖・千田遺跡本格整理作業 川久保・宮沖遺跡、千田遺跡報告書刊行

第2節 調査の経過と体制

1 発掘作業の経過

(1) 平成14年度の発掘作業

14年度はJR飯山線替佐駅の南、千曲川・斑尾川の合流点より千曲川の上流側に位置する1～5区を調査した。4月18日プレハブを設置し重機を投入、22日発掘開始式を行い人力による作業に着手した。対象地は飯山線側の河岸段丘平坦面と、千曲川寄りの段丘傾斜地であり、まずトレンチ掘削により縄文時代の遺物包含層を確認した。その後の重機進入路確保等を考慮して、千曲川寄り半分を上流から1～4区と呼称し、縄文時代の廃棄場を調査した。特に下流側の4区では急斜面に厚く堆積した縄文中・後期を中心とする大規模な廃棄場が検出され、大量の遺物が出土した。9月後半から平坦面5区の調査を展開し、5区西と呼んだ上流側では縄文時代の廃棄場5カ所と、縄文時代の土坑群と掘立柱建物跡を調査した。5区東では縄文時代から中・近世の遺構が密集し、縄文後期前半の土坑墓群が注目された。古代の竪穴住居跡1軒もみつけた。中世以降の掘立柱建物跡や柵列跡も多く、千曲川べりに集落が営まれていることが明らかになった。縄文時代の廃棄場出土遺物は膨大で、専用コンテナ760箱に上った。11月17日現地説明会、22日終了式を行い、12月4日埋め戻して発掘作業を完了した。

(2) 平成15年度の発掘作業

15年度は千曲川のもっとも上流側、豊井小学校及びJR飯山線に近い6区の調査を行った。7月4日プレハブ設置、重機進入を行い、8日開始式から作業員が参加した。段丘上に位置するため河川堆積の影響は少なく、縄文時代、古墳時代の遺構・遺物が同一面で検出された。遺構としては、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒が良好に残っており、掘立柱建物跡が近接位置にある興味深い成果があった。8月28日終了式、プレハブ撤去を行い、発掘調査を完了した。

(3) 平成17年度の発掘作業

17年度の調査地点は、JR 飯山線替佐駅の南東、千曲川と斑尾川沿いの一帯で、千曲川に面した地点を上流から7・8・9区、飯山線から斑尾川右岸の地点を10・11・12区と呼称した。4月25日、重機による9区のトレンチ調査から着手し、集落跡が推定される8区で一区画を表土剥ぎした。5月10日開始式を行い、作業員が参加した。8区では上層で弥生時代、古墳時代、中近世の集落跡が検出され、8月6日現地説明会を実施。弥生・古墳時代遺構の調査が終了に向かう8月以降、縄文時代遺構の本格的な調査を展開した。検出された住居跡数と遺物量は当初の予想をはるかに上回り、中野広域シルバー人材センターに依頼して作業員を増員し、単点測量を連日稼働して実測作業の迅速化を図った。9月後半以降窪穴住居跡を15軒前後同時に調査し、並行して遺物分布密度の高い遺物包含層の掘り下げ、土坑等の調査を行った。こうした状況から10・11・12区の調査は翌年度に送ることとし、10・11月には重機によるトレンチ調査を行って、12区は古墳時代、中世集落跡、10・11区は複数面に及ぶ水田跡を確認した。10月下旬から11月上旬、下流側の9区を調査し、縄文後期、弥生後期の遺構を検出した。11月下旬には7区の調査を行って縄文時代の廃棄場などを検出した。11月後半から寒さが厳しく、12月中旬には大雪を除去して調査を続ける状況となり、12月22日終了式、27日現場撤収となった。この結果、千曲川の上流側に位置する14年度調査区から斑尾川右岸の合流点まで、千曲川に面する事業地の発掘作業が完了した。出土遺物は600箱を数えた。

(4) 平成18年度の発掘作業

18年度調査地点はJR 飯山線を北限とする、斑尾川右岸段丘上の12区と、低地部の10区を対象とした。11区は計画高水位に抵触するためトレンチ調査にとどめ、10区も斑尾川から距離をおき、一定の深度以下は面的に掘削を行わない方針となった(第2図)。4月22日プレハブ設置、24日開始式を行った。基地プレハブは斑尾川左岸の川久保遺跡内に設置した。複数面確認されていた10区の水田層は、区画の変わる面に絞って調査する方針を決めた。左岸側のプレハブから非常に遠いため5月下旬、10区にプレハブ・水道を設置した。12区は第1面の北半部で中世集落跡、南半部で古墳時代集落跡の調査に着手し、古墳時代調査面を北半部に拡大した。10区第1面では近世水田・畑跡、第2面では中世後期の屋敷地と畑・水田跡を調査、第3面で中世面の調査にかかった。7月19日斑尾川が増水し、午前9時プレハブから非難、午後3時にはJR 飯山線法尻まで水が付き、調査区全面プレハブの屋根まで冠水した。7月27日現場の排水とプレハブ復旧等の作業に着手し、31日発掘作業を再開した。作業の遅れを取り戻すため、8月下旬シルバー人材センターを通じて作業員を増員し、10区は4・5面の中世水田跡を検出して調査を終了した。堆積が深い南端部はトレンチ調査により土層断面を記録した。12区では9月、縄文面の調査にかり住居跡を検出した。両地区とも10月上旬発掘作業を終了した。以後、翌年度調査予定の宮沖遺跡の確認調査を行いながら、プレハブで遺物洗浄を行い、12月14日プレハブを撤去して作業を終了した。出土遺物は32箱であった。

(5) 平成19年度の発掘作業

柳沢遺跡の発掘調査と並行して9月11日から25日までの間、JR 飯山線から国道117号線の間位置する斑尾川右岸を重機によりトレンチ調査した。調査対象地は狭く急傾斜面も含まれていた。断面観察の結果、中近世の水田層が確認されたにとどまり、面的な発掘調査の対象とならなかった。19年度調査をもって、築堤事業地内の千田遺跡の発掘作業はすべて終了した。

2 整理作業の経過

(1) 平成14・15・17・18年度の基礎整理作業

各年度とも発掘作業終了後に、主に冬期間を基礎整理作業にあてた。図面整理としては、遺構図面の点検、補修、遺構台帳と遺構図の照合、図面修正と2次原図・全体図・台帳作成を行った。写真整理としては、撮影記録簿と各種写真の照合、フィルムのアルバム・ファイル収納と注記、台帳作成を行った。遺物整理としては、遺構・グリッドごとの収納箱への仕分け作業、箱への付番と台帳作成などを行った。写真収納法など具体的な作業の方法は、本章第3節2(1)に記した。

(2) 平成19年度の整理作業

19年度は、17・18年度発掘調査出土遺物の注記作業を行った。洗浄後大部分が箱詰めされたままの遺物を、土器、土製品、石器、石製品等に仕分けし、土器の注記は委託することとして準備作業を行った。大・中・小・浅テンバコ各種をサンプル調査して計数し、各規格の平均収納破片数を算出した。極めて数量が多いため、地区別に分割して2度の入札を行い、2社が受託した。その他の遺物には大形過ぎるもの、注記部位を指示しにくいもの、小形過ぎて本体へ注記ができないものなどが多く含まれ、機械注記に適さないため作業員が手書き注記した。

(3) 平成20年度の整理作業

本遺跡は縄文時代を主体とするため石器の出土量は多く、石鏃等の小形石器及び剥片類には黒曜石が多数含まれている。それら黒曜石の蛍光X線による産地推定分析を行った。分析試料は8区の集落跡出土資料に重点を置き、縄文中期のうちでも編年位置が明らかな竪穴住居跡出土資料を最優先した。発掘時点で中期中葉・後葉・末葉の大別は判明していたため、各時期にわたる試料を選定した。さらに14年度調査区からは縄文中期末葉から後期前葉の廃棄場を検出し、8区集落の終焉以後にもたらされた黒曜石が含まれているため、ここからも抽出した。分析は国立沼津工業高等専門学校に委託した。産地推定の結果は、試料850点のうち732点、87.35%が諏訪・星ヶ台産と推定され、時期・地点による差異は見られなかった。

(4) 平成21年度の整理作業

遺構・遺物・記録類の数量把握：基礎整理以降、本年度まで遺物洗浄・注記以外の本格整理は行っていないため、各地点別に資料の数量把握から着手した。復元個体数等を推測するため、遺物量が多い8区のSB22・25・37住居跡3軒出土18箱を選び、分類・接合し復元個体管理表に登録した。完形及び半分程度遺存する個体は60点を数え、8区の縄文住居跡1軒には、多くて20個程度復元可能土器が含まれると予想された。抽出した60点のうち約半数を接着剤と石膏補填により、実測図化できる状態に復元した。さらに拓本の報告書掲載に必要な破片資料が、各住居跡に数10点含まれている。このほか縄文時代から中近世にわたる石器、石製品を計数した。剥片・石核等を除いた道具類の数は、8区出土点数が約3,300点に上った。これらの数値をもとに、整理計画、報告書の内容を検討した。

金属器のX線透過：古墳時代、古代、中世の各時代に属する金属器は、表面を覆う錆の外側の土を除去し、チェック付ポリ袋等に収納し仮保管してきた。多くはかりん糖状の錆や緑青に覆われている鉄器・青銅器を、長野県立歴史館でX線透過し、本来の形態・種類と劣化状態を明らかにした。

科学分析業務委託：C¹⁴年代測定、樹種同定、種実同定、プラント・オパール分析を行った。年代測定

及び樹種・種実同定試料は炭化物及びそれを含む土塊である。一部は水洗選別後乾燥し、ポリ袋等に保管してきた。プラント・オパール、珪酸分析試料は現地で土層断面から採取し、フィルムケースに保管してきた。これらの試料を、入札により選定した業者に委託して分析を行った。

(5) 平成22年度の整理作業

遺物整理は、土器の接合・分類・集計、及び管理台帳作成、石器・石製品・土製品の分類、台帳作成、実測を行った。図面整理は、遺構図面の修正と2次原図作成を行った。

土器の整理：縄文土器を優先した。対象は8区の縄文集落跡から出土した土器460箱、及び1～5区の廃棄場から出土した土器360箱、合計820箱である。遺構・グリッドごとに接合・分類、計量・計数し、復元資料等の抽出と破片の収納を行った。8区は作業を終了、1～5区は300箱分の抽出を終了した。

石器の整理：8区出土石器337箱から剥片石器1,940点を抜き出し、器種別に台帳記載した。その上で実測点数を決め、住居跡出土資料を優先し、各器種の代表例となる完形品、希少器種を抽出した。器種は、石鏃、尖頭器、スクレイパー、石匙、鉤状石器、異形石器、石錐、打製石斧の計165点である。これらを実測委託した。遺構図面整理では2次原図を作成し、8区の縄文時代竪穴住居跡から着手した。

縄文土器の整理について、平成23年1月29・30日新潟県立歴史博物館学芸課長・寺崎裕助氏を招聘し指導を受けた。8区竪穴住居跡出土土器から抽出された整理箱約300箱の土器の分類、編年上の時期、地域的特徴、報告書掲載の要点等を教示された。

(6) 平成23年度の整理作業

土器・土製品の整理：8区と1～5区の大半を除いた140箱分の分類・接合・集計及び復元資料の抽出・台帳記載と破片の収納と、抽出された土器の復元、実測を行った。復元では実測・撮影に耐えるよう必要最小限の石膏補てんを行った。前年度接合・抽出した8区出土縄文土器から着手し、弥生・古墳時代土器に進んだ。実測には磁気式の三次元計測機を導入した。土製品は全点を台帳記載し、実測作業には図化機(マイブンスコープ)を用いて素図を作成し、細部と断面を手測した。

石器・石製品の整理：道具と剥片類との選別、分類・集計、台帳記載、報告書掲載資料の抽出、実測である。対象は8区337箱、1～6区250箱の縄文時代石器、及び他地点の縄文～中世の石器・石製品、合計616箱である。実測作業は前年度実測委託した剥片石器を除いた、磨石類、石皿等の礫塊石器及び石棒、垂飾等の石製品を対象とした。図化方法は土製品と同様、図化機利用と手測とによって行った。

図面の整理：前年度2次原図作成が終了した8区の縄文時代住居跡以外、全地点の遺構を対象とした。竪穴住居跡は原則として個別図を作成し、その他の各種遺構については大部分を割付平面図として報告書掲載することとした。掘立柱建物跡、杭列跡、配石遺構、溝跡等は個別に記述する場合があるが、土坑は一部を除いて一覧表掲載とすることとし、表作成を行った。

(7) 平成24年度の整理作業

遺物の整理：残った土器実測、拓本とりを行い、土製品、石器、石製品とともに手描きトレースした。報告書掲載資料を対象に、種別の遺物観察表を作成した。

図面の整理：原則として竪穴住居跡は平面図、断面図、部分図などを組み合わせた個別遺構図、土坑などは8m区画をもとにした割付図として掲載するため、A2判にレイアウトして2次原図作成し、手描きトレースした。割付図用のトレース図は当センターでスキャニングし、全体図作成を行った。拓本を含む

第1章 調査の経過と方法

遺物トレース図も同様で、仮図版組みまで行った。遺構については、地区別、種別に一覧表を作成した。このほか原稿執筆、遺物・図面・写真収納とそれに伴う台帳作成を行った。

入札を経て委託した事業は、遺物撮影業務、編集業務、印刷製本業務である。

第3表 千田遺跡調査体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員
平成14年	深瀬弘夫	小林秀夫	土屋 積	西山克己・黒岩 隆
平成15年	深瀬弘夫	市澤英利	廣瀬昭弘	西山克己
平成16年	小沢将夫	市澤英利	廣瀬昭弘	鶴田典昭・黒岩 隆・市川隆之・中島英子・山崎まゆみ
平成17年	仁科松男	市澤英利	廣瀬昭弘	鶴田弘実・久保光男・市川隆之・入沢昌基・柳沢 亮・山崎まゆみ
平成18年	仁科松男	市澤英利	平林 彰	鶴田弘実・市川隆之・入沢昌基
平成19年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田弘実・市川隆之・白沢勝彦・廣田和穂・大沢泰智
平成20年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田弘実・市川隆之・白沢勝彦・廣田和穂・大沢泰智
平成21年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田弘実・市川隆之・廣田和穂
平成22年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	鶴田弘実・市川隆之・廣田和穂
平成23年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	鶴田弘実・市川隆之・廣田和穂
平成24年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	鶴田弘実・市川隆之
平成14年度～平成19年度 発掘作業員				
青木洋子 新井さち子 秋山せつ子 秋山貴透 池田道保 池田 暁 大井晴美 大内秀子 大口直明 大塚加津美				
大原保之 岡田幸幸 荻原敬敏 荻原千代子 小根山貞子 勝山シズ子 木村嘉光 木村ミヨシ 久保 昇 小池美香				
小橋善太郎 小林英一郎 小林英子 小林喜久子 小林弘茂 小林靖男 小林幸雄 坂本清一 佐藤 進 佐藤市次朗				
佐藤禮子 鈴木亜紀子 鈴木友美 関口 要 関口時恵 関谷道雄 田井中志保子 高野武則 田口雅美 竹内啓剛				
武田保夫 田中邦男 田中元宣 田中有希 田中エツ 田村桂子 田村多恵子 土屋美晴 寺島尊夫 傳田良廣 遠山文月				
遠山良子 徳武知旋 徳永門 中澤ヒデ子 永澤由美子 中島伸雄 永原定子 永原春男 永原宗夫 西澤良治 西野孝治				
野村善和 原山竜雄 平尾恭子 藤澤正美 松木拓宏 松木 武 松木たつ子 松野クラライレーネ 丸山いづ子 丸山豊松				
丸山優治 三井貴美 宮川和久 宮沢アヤ子 宮沢才二 宮沢よい子 宮本和子 村田宗之 森山キミ江 山浦ヒサエ				
山上知也 山口武利 横田与志子 (中野広域シルバー人材センター) 池田泰造 石井博 鈴木金三 高橋栄蔵 土屋三郎				
土屋富司 徳武一義 徳永徳一 松野登喜雄 水野利彦 武藤良助 村上 治				
平成19年度～平成24年度 整理作業員				
阿部高子 池田豊一 石田多美子 市川ちず子 猪股万里子 宇賀村節子 小根山貞子 片岡義郎 窪田 順 倉島由美子				
小池美香 小林知子 近藤朋子 坂田恵美子 佐藤進 塩野人奈菜美 清水秋子 高野和子 鳥羽仁美 中島裕子				
中村智恵子 西村はるみ 半田純子 日向富美子 藤井裕子 増田千加代 待井聖 町田隆三 丸山千夏 柳原澄子				
山崎みな子 渡辺恵美子				

3 調査日誌抄

平成14年度

4月18日	プレハブ設置。重機投入、下段調査開始。地表 下130cm 縄文後期包層検出。	長視察。
4月22日	発掘開始式。重機検出・排土運搬開始。	8月7日 プレハブより上流側試掘(～9日)、トレンチ⑤・ ⑥で縄文中期土器出土。
5月14日	3区検出。遺物集中SX01調査。図面割付作成。 豊田村長視察。	8月24日 空撮・空測実施。
5月30日	SX01調査・図面。3・2区面の遺物検出。遺物 洗浄(継続)。村公民館領取材。	8月26日 4区SQ03調査、斑尾川より下流側試掘(～ 30)。
6月21日	SX01下層、凹部上層調査。高橋桂氏来跡。	9月3日 4区SQ03、重機道、1区拡張区終了。河川事 務所中野出張所視察、豊井小5年生24名見学。
6月28日	5区黒色土帯調査(継続)、土器・骨片多出。	9月6日 1区拡張～4区西壁断面図終了、プレハブ上流 トレンチ⑤⑥土器溜まり調査終了。
7月18日	3区・2区凹部調査。4区黒色土帯調査。豊田 村CATV取材。猛暑。	9月25日 4区土層観察ベルト外し。5区古代住居跡SB01 他調査。重機排土運搬・検出。
7月24日	4区黒色土部(SQ03)調査。2・3区凹部調査。 村議会議員、北沢伊美議員、千川川工事事務所	

- 10月8日 4区中央ベルト掘り下げ、遺物取り上げ、5区SK450完形密倒立・近世溝西側検出。
- 10月23日 5区検出調査図面（重機道下も5区とする）、豊田中2・3年生（総合学習）、村社会教育課来跡。
- 11月17日 8:30～12:00現地説明会。50名参加。
- 11月18日 5区土坑墓調査、図面・写真。南西城土坑、凹地形（SX01続き）調査。遺物等搬出、プレハブ撤去。
- 11月22日 5区図面、南西城調査図面、終了式。
- 11月29日 5区図面終了、東尾川右岸重機試掘終了、SX03他重機埋め戻し、挨拶回り。
- 3月15日 「長野県の遺跡発掘2002」に出席（～5月5日）。
- 平成15年度**
- 7月4日 プレハブ・トイレ設置。
- 7月8日 開始式。重機トレンチ掘削、検出。
- 7月16日 遺構検出・調査。古墳後期掘立柱建物跡ST02検出。遺物洗浄（継続）。断面分層・注記。
- 7月29日 SQ08直下古墳後期住居跡SB02、床面精査。
- 8月6日 SB02撮影、ST03再撮影、SK・SQ検出・調査、豊田村CATV取材。
- 8月22日 空撮空測実施。CATV現場ビデオ受け取り。
- 8月28日 プレハブ・トイレ撤去、機材片づけ。終了式。
- 3月13日 「長野県の遺跡発掘2003」に出席（～5月9日）。
- 平成17年度**
- 4月26日 9区トレンチ掘削、縄文・弥生土器、土師器。8区下流側から長軸トレンチ。プレハブ設置。
- 4月28日 9区・8区北西部から表土剥ぎ。古墳後期住居跡1軒。河川事務所視察、7区盛土除去について打合せ。
- 5月10日 発掘開始式。8区北西部包含層掘削・遺構検出。表土剥ぎ（継続）。
- 5月13日 8区北西部包含層掘削・検出。飯測量杭設置（継続）。中野市教委と県教委出土品移管の協議。
- 5月23日 8区北西部中世掘立柱建物跡群、古瀬戸・珠洲焼。第1検出面下に50cm無遺物層存在、2面調査予定。
- 6月7日 8mグリッド杭打設（継続）。中世ビット群、弥生住居跡掘削。標準土層決定。
- 6月15日 弥生住居跡4軒、大形土坑SK1401掘削。作業員出勤率低くシルバー人材センターによる増員検討。
- 6月22日 中世ビット群単点結線（継続）、大形土偶出土。
- 7月7日 弥生住居跡6軒、縄文包含層調査。県文化財保護審議会樋口昇一委員視察。
- 7月12日 中野広域シルバー人材センター出動。
- 7月21日 河川事務所中野出張所長・係長視察。飯山東小6年生見学。
- 8月1日 第1回空撮。遺物洗浄。
- 8月6日 現地説明会。117名参加。
- 8月9日 永田小角間教諭10年研修（～12日）。
- 8月25日 長野高専生2名実務訓練（～26日）。
- 9月25日 仮設道路表土剥ぎ、26日から調査（～10月3日）。
- 10月11日 縄文住居跡17軒他掘削。単点測量（継続）。12区重機トレンチによる試掘開始。
- 10月20日 縄文住居跡他調査、自然流路単点測量。12区中世ビット、11区トレンチ2本、砂層下水田3面。
- 10月24日 8区上流側第2面遺構検出、縄文住居跡10軒。9区重機トレンチで8区側境界に縄文包含層確認。
- 11月2日 8区縄文住居跡調査。7区堤防尻に南北トレンチ、谷部に包含層。9区弥生住居跡、縄文配石調査。
- 11月7日 9区空撮、全景写真。8区縄文住居跡7軒他調査。9区弥生住居跡2軒、縄文配石遺構他調査（～9日）。
- 11月15日 7区廃土搬出。8区縄文住居跡15軒掘削。10・11区断面実測。県教委、県文保審議会委員視察。
- 11月30日 8区第3回空撮。7区遺構検出。12区表土剥ぎ。10区トレンチ埋め戻し（～12月2日）。
- 12月8日 7区空撮。8区縄文住居跡、土坑調査。
- 12月13・19日 プレハブ周囲、駐車場、発掘現場雪かき。
- 12月22日 8区縄文住居跡3軒、土坑掘削。撤収作業、終了式。
- 12月26日 プレハブ屋根雪下ろし。図面・機材等撤収。
- 3月18日 「長野県の遺跡発掘2006」に出席（～5月11日）。
- 平成18年度**
- 4月22日 現場へプレハブ設置。
- 4月24日 発掘調査開始式。17年度遺物の洗浄開始（継続）。
- 4月26日 10区第1面表土剥ぎ開始（継続）。
- 5月17日 12区表土剥ぎ、中世ビット群を第1調査面とする。
- 5月24日 10区へプレハブ設置。12区の市道を除去。

第1章 調査の経過と方法

- 5月30日 10区第1面の空撮。全景撮影。
- 6月5日 10区第2面表土剥ぎ。12区中世ビット掘削。永田小6年生14名見学。第1回工事関係者連絡会議。
- 6月13日 10区第2面の集落・畑跡、12区南半部の古墳住居跡調査。グリッド杭打設。
- 7月4日 10区第3面で中世の水田跡を検出。第2回工事関係者連絡会議。
- 7月19日 千曲川・斑尾川増水し避難。重機は堤防上へ避難。飯山線下まで着水、現場プレハブは屋根まで水没。
- 7月27日 作業再開し器材、水没遺物洗浄、現場排水作業。
- 7月31日 10区は排水ほぼ完了しヘドロ除去開始、12区は古墳後期住居跡調査再開。
- 8月9日 10区第3面の水田面検出再開。12区古墳住居跡調査。
- 8月17日 災害後1日も作業日に降雨がなく、連日35度の猛暑で熱中症防止が重点課題。
- 8月21日 中野広域シルバー人材センター会員出勤。
- 8月23日 10区第3面地形単点測量。12区古墳面空撮。
- 9月5日 10区第4面で水田面検出、稲株痕あり。第4回工事関係者連絡会議。
- 9月21日 10区は計画高水位にかかり重機でトレンチ掘削。
- 9月26日 12区南側縄文面終了。中野西高2年生30名見学。
- 9月28日 10区最下層(第5面)で棚田状の小水田撮影。12区で埋蔵物ある縄文中期住居跡検出。
- 10月4日 10区調査終了。12区中央部から北部の縄文包含層・住居跡調査(～16日)。
- 10月10日 10区南端部にトレンチ掘削。
- 10月18日 10区南トレンチ土層観察。記録後埋め戻し。以後宮沖遺跡試掘(～11月15日)。
- 11月9日 炭化物・骨等微細遺物含む土壌試料の水洗開始。洗浄済み遺物の仕分け・台帳記入作業を継続。
- 12月13日 器材・遺物を搬出。終了式。仮設電気撤去工事。
- 3月18日 「長野県の遺跡発掘2006」に出展(～5月11日)

平成19年度

- 6月6日 17・18年度出土遺物を仕分け、弥生・古墳時代土器は個体識別・図化資料抽出・台帳登録・復元開始(～10月31日)。注記委託準備。
- 7月3日 石器、石製品、土製品の手書き注記開始(～9月14日)。
- 7月17日 長野市立博物館係長千野浩氏弥生土器指導。
- 8月24日 注記委託第1次分、受託業者へ搬出。
- 9月11日 JR飯山線～国道117号線の間、斑尾川右岸をトレンチ調査。断面で中近世水田層確認(～

25日)。

- 11月6日 注記委託第2次分、受託業者へ搬出。
- 1月18日 注記委託第1次分、受託業者から返却。
- 3月18日 注記委託第2次分、受託業者から返却。

平成20年度

- 7月14日～5区、8区出土の縄文時代遺物から黒曜石を抜き出し、産地推定分析予定試料を選定する。収納袋記載と台帳作成、箱詰め(～8月7日)。
- 9月22日 黒曜石試料を沼津高専へ搬送。
- 12月15日 黒曜石試料を沼津高専から搬出。結果報告受領。

平成21年度

- 4月1日 整理作業開始。替佐築堤関係遺跡全資料数・整理状況確認開始。
- 7月22日 8区所在の遺物が多量に出土した縄文中期住居跡を選び、土器の個体識別を行う(～8月5日)。
- 10月26日 上記から復元可能個体を含む住居跡3軒を選び、縄文土器を分類・接合し、復元個体管理表に登録する(～11月25日)。
- 11月9日 全地区の石器・石製品を集計。8区の3337点を最多に、4712点まで数えた(～11月20日)。
- 11月25日 金属器台帳点検、X線透過リスト作成。
- 12月7日 縄文土器復元開始(～1月31日)。
- 12月18日 分析鑑定試料リスト、委託書類(放射性炭素年代、樹種同定、種実同定、プラント・オパール分析、珪藻分析)を作成。業者に分析を委託する。
- 3月12日 分析委託成果品が納品される。
- 3月13日 「長野県の遺跡発掘2010」に出展(～5月9日)。

平成22年度

- 4月1日 整理作業開始。
- 4月12日 整理補助員出勤。8区縄文土器接合・観察分類・選別資料の台帳作成着手。
- 7月29日 8区縄文時代剥片石器の住居別・地点別分類収納(～8月9日)。
- 9月21日 8区縄文時代剥片石器の器種別台帳作成(～30日)。
- 10月4日 実測予定石器抽出・一覧表作成(～19日)。
- 10月20日 8区住居跡図面整理開始。2次原因・遺物分布図作成。
- 12月20日 石器実測委託契約締結。
- 1月6日 縄文土器の復元開始。
- 1月29～30日 縄文土器について新潟県立歴史博物館学芸課長寺崎裕助氏から指導を受ける。
- 2月14日 8区出土縄文土器の接合・観察分類・集計・選

別作業が完了。1～5区出土縄文土器の同作業開始。	11月24日 1～6区石器・石製品の分類・台帳作成開始（～1月10日）。
3月7日 8区縄文時代住居跡の2次原図作成完了。	1月11日 土製品分類・台帳作成開始（～1月17日）。
3月11日 石器実測委託成果品が納品される。	1月25日 土偶ほか土製品・石製品実測（～3月23日）。
3月12日 「長野県の遺跡発掘2011」に出展（～5月15日）。	3月17日 「長野県の遺跡発掘2012」に出展（～5月13日）。

平成23年度

4月1日 整理作業開始。
4月5日 整理作業員出勤。1～6区土器接合・分類・集計、選別資料の台帳作成、8区縄文土器復元開始。
4月18日 7・9・10・12区土器接合・分類・集計、選別資料の台帳作成開始（～6月8日）。
6月6日 8区縄文土器実測、石器分類・台帳作成開始。
6月13日 住居跡以外の遺構2次原図・土坑一覧表作成開始。
7月13日 石器・石製品実測（～11月22日）。
11月21日 1～6区縄文土器拓本図作成（～12月26日）。

平成24年度

4月1日 整理作業開始。
10月26日 遺物写真撮影業務委託契約締結。
11月13日 遺物写真撮影業務撮影開始（～12月5日）。
12月14日 遺物写真撮影業務成果品納品。
12月25日 印刷編集委託業務契約締結。
1月25日 印刷製本業務請負契約締結。
2月22日 編集業務委託成果品納品。
3月29日 報告書納品。

第3節 調査の方法

1 発掘作業の方法

(1) 発掘作業における記録の方法

A 遺跡の名称と記号

遺跡の名称と遺跡記号は、下記のとおりである。遺跡記号は記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット3文字で略表現した記号である。1文字目は当センターが独自に長野県を9分割した地区記号で、中野市は「A」、2文字目及び3文字目は遺跡名をローマ字表記したなかの二文字を選択したものである。各種の記録類や遺物の注記にこの遺跡記号を使用している。

遺跡名称：千田遺跡（せんた いせき）

遺跡記号：ASN

B 遺構の名称と遺構記号

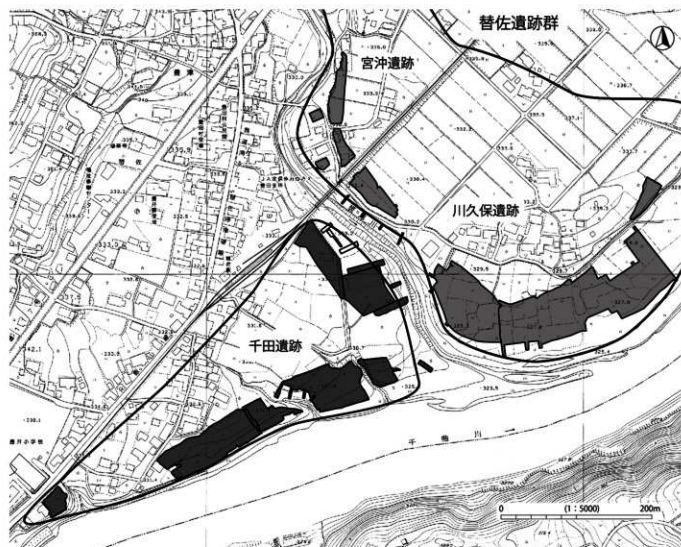
遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。ただし、主に平面形状や分布の特徴を指標として検出時に決定するため、以下に記した遺構記号と想定される遺構の機能・性格が実際に適合しない場合がある。たとえば8区の「SB15」は分割調査となり、当初住居跡を想定して付番したが、流路跡と判明した。遺構記号は時代に関わらず種類ごと、検出時に付けた。遺物・写真を含めて混乱を避けるため、一旦記号・番号を付けたものは原則として変更していない。17・18年度調査区ではこの原則を順守した。一方14・15年度調査区では検出時にSKを付した土坑が方形や直線などの配列を示すことが判明した場合、ST・SAのP番号に変更している。発掘の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。たとえば8区では「SB33」、「SB39」は遺物包含層と判明して欠番とした。遺構内施設についても同様である。発掘作業及び本書で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

- SB：長径2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み〔竪穴住居跡〕
 SK：単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないSBより小さな掘り込み。〔土坑〕
 SM：土坑のうち墓跡と認められるもの。〔土坑墓〕
 ST：SBより小さな掘り込みや礫が一定間隔で方形、長方形、円形に配置するもの。〔掘立柱建物跡〕
 SA：SBよりも平面形が小さな掘り込みや礫が列として配置するもの。〔柵列跡、築地跡〕
 SD：溝状の掘り込み。〔溝跡、流路跡〕
 SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。〔焼土跡、火床〕
 SH：石が面的に集中するもの。〔礫群、集石遺構、配石遺構〕
 SQ：遺物が面的に集中するもの。〔遺物集中、土器集中、廃棄場〕
 SX：以上に記した以外の不明遺構。

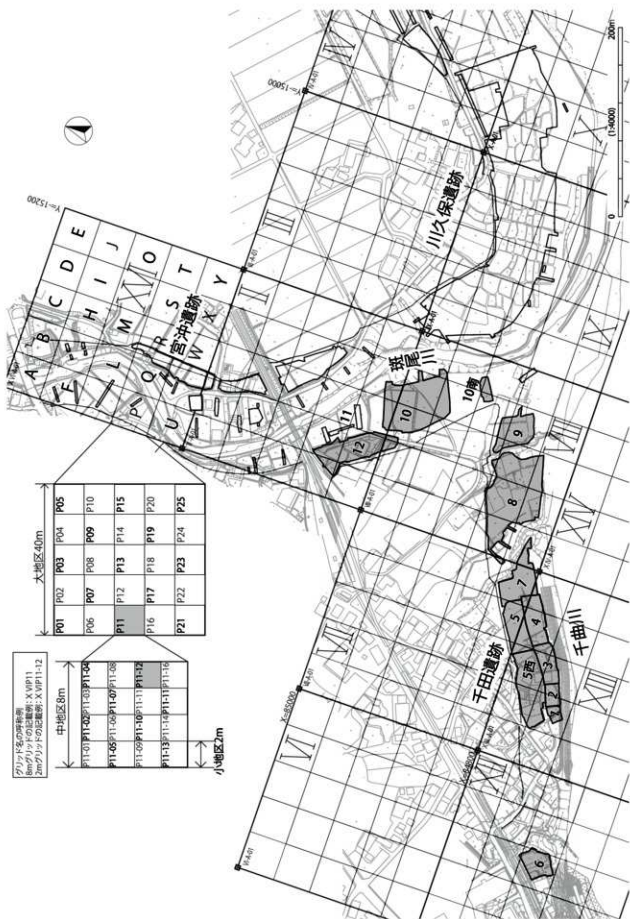
なお、SB内の柱穴・貯蔵穴等やSTを構成する個々の掘り込みにはPitを付した。

C 調査区(グリッド)の設定と略称

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点(東経138°30'0"、北緯36°0'0")を基準に、200の倍数を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」、「大地区」、「中地区」、「小地区」に区画した。



第3図 千田遺跡の範囲



第4図 グリッド設定図

「大々地区」は200×200mの区画で、北西から南東へ東西方向にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。「大地区」は大々地区を40×40mの25区画に分割したもので、北西から南東へ東西方向にA～Yのアルファベット記号を与えた。「中地区」は、大地区を8×8mの25区画に分割したもので、北西から南東へ、東西方向に1～25のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準・単位、あるいは包含層遺物の採取単位としたのが、この中地区である。「小地区」は、大地区を2×2mの400区画に分割したもので、西から東へA～Tのアルファベット、北から南へ1～20のアラビア数字を組み合わせて番号を与えた。

グリッド名の実際の表記においては、小グリッドを「Ⅷ Q08 - 12」のように記した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、当初提供された用地図等が日本測地系であったため、統一性を保つ必要から日本測地系の座標値で統一している。

D 図面記録

遺構の図面記録は、中グリッド杭を基準として必要に応じて2m間隔に釘を打ち、水系等で小グリッド相当の方眼を設定してスタッフ、コンベックス等によって測点を計測し、A2判の所定の実測用紙に記録した。中グリッドを1:20縮尺で図化すると用紙の規格に適合し、標準的な割付図となる。このほか、測量委託の一環で単点観測した測量図を結線した平面図も、17・18年度調査区では多用されている。水準測量は標高値を記した基準杭を利用してレベル観測した。単点図、手測図とも縮尺は1:20を原則とし、部分図は1:10等で実測した。

調査区全体の地形記録は、同一調査面で複数時代の遺構が検出された6区、1～5・7区、9区では時代を特定せず、2面の調査面で縄文中期遺構が顕著な8区、3面の調査面で古墳後期集落が顕著な12区では当該時代の地形を記録することとした。等高線間隔は、6区、1～5区は10cm、7区、8・9区、12区、10区は50cmとした。

E 写真記録

各地区の全景、個別の遺構、土層断面等の撮影は、調査担当者が6×7・35mmフィルムカメラを用い、モノクロネガ、カラーポジフィルムで撮影した。6×7カラーポジは重要な記録写真撮影に用い、通常は35mmフィルムを使用した場合が多い。各地区とも最低1回は空撮を行い、1～5・8・10区は複数の調査面で実施した。

(2) 表土掘削と土層確認

いずれの地区も前年度あるいは当該年度初めに、重機でトレンチを掘削し、調査面、基本土層の確認を行ってから調査面まで重機で掘削を行った。10・12区では調査区外周に排水溝を兼ねたトレンチを切って土層観察に利用し、4・8区では土層観察用にベルトを残して周囲を掘削した。調査年度が5か年にわたり、千曲川に沿って約500m、斑尾川に沿って200mと広範囲を調査したため、全体の土層を統一的に記載することはできなかった。土層の記録は『新版標準土色帖』に則って色調を記録した。

(3) 遺構検出と遺構調査の手順

基本的な調査の進め方は、重機で表土を掘削した後、グリッドを設定して、草かきなど大きな道具を用いて人力で遺構検出を行った。遺構検出の際、出土した遺物は包含された層位名またはグリッド名を併記するか、帰属遺構名を記して取り上げた。本遺跡では当初から遺構調査面が複数確認されていたので、上

層の調査面が終了したのち次の調査面まで間層を重機により掘削する手順で、それぞれの遺構検出面の調査を行った。検出された遺構は、まず平面形で切り合い関係を把握してから掘り下げ作業にかかった。調査の順序は切り合い関係の新しい遺構から古い遺構の順に行った。平面検出時に新旧がわからない場合は、随時サブトレンチを入れて断面観察し土層堆積状況等を確認して作業を進めた。発掘時の観察で判断した新旧関係が、整理時に出土した土器の新旧によって逆になる可能性が生じる場合もあり、個別遺構の説明でその点にふれた例がある。

遺構の切り合い状況に応じて十文字方向あるいは単一方向のトレンチまたはベルト断面で土層観察し、写真撮影、実測図化、記述記録を行った。その後遺物を残しながら掘り下げ、遺物の出土状況に特徴のあるものなどは、出土状況を撮影・図化記録し、遺物取り上げ後に完掘状態の写真撮影・実測図化を行った。竪穴住居跡では完掘後に床而下（掘方）の状況を確認して遺構調査を終了した。12区古墳時代住居跡では床面までの完掘時にピットが確認できず、貼床を剥がしてピットがみつかる住居跡がいくつかあった。

2 整理作業の方法

(1) 基礎整理作業

発掘調査年度の冬期に以下の基礎整理作業を行った。図面類は、記載内容を点検・修正しながら記録漏れを補い、竪穴住居跡などの個別遺構図については2次原因図を複製した。これらを縮小コピーして遺構全体図を作成し、事後の作業に活用した。竪穴住居跡など重要な遺構を優先して調査所見を記述記録として残した。また、遺構写真については、モノクロフィルムはベタ焼きを貼付してアルバム収納し、カラーポジフィルムについては35mmはマウント付で専用ファイルに収納、6×7はスリーブ収納した。写真の注記は、35mmカラーポジはマウントに、その他はアルバムに、フィルム番号、遺跡記号、地区、撮影内容、撮影方向、撮影日を記している。図面・写真には付番し、撮影記録簿をもとに台帳を作成した。遺物については、年度ごとに行う速報展に出展する資料を復元する程度で、ほとんど手が付かなかった。本格整理作業については、前節に年度ごとの作業内容を記した。

(2) 土器分類と段階区分

A 縄文土器

本遺跡では10区を除いて縄文早期から晩期まで、量的な多寡はあってもほぼ間断なく各時期の土器が出土している。ここでは、中期を除いて大別時期を群、各時期の初頭から末葉各期、または型式を類、類内の細別を種として以下のとおり分類する。中期は資料が膨大のため、初頭から末葉、または型式で区分した時期を群、群内の系統を類、類内を器形、文様等によってさらに細分した分類を種とする。時期によって編年細別に精粗の差があり、本分類は便宜的な部分がある。特に中期中葉は北信地方では未解明の時期であるため、新道式以降、通常は後葉に含まれる曾利Ⅰ式・唐草文系土器Ⅰ期までを含むものとする。中期土器の様相については、4・5章末で若干の検討を試みる。

第Ⅰ群：縄文早期の土器（沈線文系土器、条痕文系土器各期）

第Ⅱ群：縄文前期の土器（塚田・花積下層式、二ツ木・関山式、有尾式、諸磯a・b・c式、晴ヶ峯式各期）

第Ⅲ群：縄文中期初頭土器（五領ヶ台式土器）

第Ⅳ群：縄文中期前葉土器（貉沢・後沖式期）

第V群：縄文中期中葉土器（新道式、藤内Ⅰ・Ⅱ式、井戸尻Ⅰ・Ⅲ式、曾利Ⅰ式各期）

第VI群：縄文中期後葉土器（大木8b式、加曾利EⅡ式期）

第VII群：縄文中期末葉土器（大木9・10式、加曾利EⅢ・Ⅳ式各期）

第VIII群：縄文後期土器（称名寺式、堀之内Ⅰ・2式、加曾利BⅠ・2式、上ノ段式、中ノ沢K式各期）

第IX群：縄文晩期土器（佐野Ⅰ式、水式各期）

B 弥生土器（第5図）

本書で行った弥生土器の器種分類と段階区分は、長野市松原遺跡における調査成果に準じた（長野県埋蔵文化財センター1998）。ただし、同一器種の分類において中間形態が多く認められる場合は、細分化せず一つの器種としてまとめた。

甕：口縁部が長く外反し、口縁部外面に施文する特徴を有する平底甕。基本的に松原遺跡におけるB類に相当するが、一部口縁が無文のものや、口縁部長が短いが施文する個体が存在するため、細分しない。プロポーションによる分類は以下の4種に分かれる。Ⅰ類（口径<胴最大径）、Ⅱ類（口径≒胴最大径で胴部最大径が中位）、Ⅲ類（口径<胴最大径で胴部最大径が上位）、Ⅳ類（口径>胴最大径）。上記でまとめた甕以外に胴部の下部が膨らむ個体（20）がある。これらは点数が少なく、前後の系譜が不明瞭なので、分類せずに個別に報告する。

台付甕：底部に台が付く甕。器形や文様帯構成は基本的に平底甕と同じ。

壺：口縁部が外反する。肩部がナデ肩。胴部下半にくびれがないなど共通の要素がみられる形状のものを総称する。松原遺跡では該当するものをA類（口縁が短く外反し細頸傾向）とB類（口縁が朝顔状に長く外反し太頸傾向）に細分するが、本遺跡では両者の中間形態が多いため細分しない。

上記でまとめた壺以外に、口縁が極端に短く外反し球胴形となる個体（6）、口縁が弧状となる個体（58）、口縁部の外反が弱い個体（59）がある。これらは点数が少なく、前後の系譜が不明瞭なので、分類せずに個別に報告する。

鉢：体部が碗形を呈し、口縁部が内湾化傾向をしめす。松原遺跡におけるA類に相当する。

高坏：坏部が碗形を呈し口縁部が内湾化傾向のものをA類、口縁端部が水平に屈曲し鐙状になるものをB類とする。脚部の長さは、Ⅰ類（坏部高>脚部高）とⅡ類（坏部高≒脚部高）に分かれる。

甗：鉢状の器形の底部に穿孔を施したものの、基本的に単孔となる。

蓋：円錐形状で頂部につまみを有するもの。

C 古墳時代～奈良時代土器（第5・6図）

土器の器種分類は川久保・宮冲遺跡の成果を用いた（長野県埋蔵文化財センター2013）。以下、千田遺跡で出土したものを中心に概要を紹介する。ただし本遺跡では出土例が少ない器種については、長野市榎田遺跡における器種分類を参考とする（長野県埋蔵文化財センター1999）

食膳具

坏A：平らな底部から体部が斜めに伸びる逆台形の器形。須恵器のみ。

坏B：体下半部が折れて口縁が直立し、平坦な外底に高台が付く器形。須恵器のみ。

坏C：古墳中期後半の半球形の体部に口縁端部を外側へ短く折った器形を基本とし、時間の経過とともに口縁が長く伸びて相対的に体部高が低くなり、最終的に内面にわずかな段を残すのみの逆台形に近い形態に変化する。CⅠ類は口縁端部を短く折る器形。CⅡ類は器高の1/3ほどで口縁が屈曲

する器形。C 3類は器高の1/2～3/4ほどで口縁が屈曲する器形。C 4類は器高3/4以上で口縁が屈曲する器形。C 5類は底部脇にわずかに段を残す器形。

環D : 口縁が内湾する丸底の器形。

環E : 須恵器蓋の模倣形態で、口縁が直線的に外に開く器形。

環F : 須恵器蓋の模倣形態で、口縁が内側に屈曲する器形。

環G : 平底で、口縁の立ち上がりが比較的直線に近い器形。宝珠つまみを有する蓋を伴う。須恵器のみ。

環H : 口縁内部に受口が付いた器形。須恵器のみ。

環I : 丸底から内湾気味に口縁が立ち上がる器形。I 1類は口縁部が緩やかに外反する器形。I 2類は口縁端部がやや肥厚する器形。I 3類は丸味のある体部からそのまま緩やかな直線で口縁に至る器形。

環J : 皿形の浅い器形。須恵器盤の模倣形態。

環K : 出土量が僅かな土師器環をまとめる。

環L : 器高が低く、口径が大きな皿形の器形。口縁は屈曲して緩やかに外反する。

環M : 体部が内湾して口縁に至る器形。

蓋 : 須恵器にのみ認められる。口縁内側に受け口が付く器形、口縁端部が折れる器形、半球形の器形などがある。

鉢(鉢) : 環よりも口径が大きく深い器形を鉢(鉢)にまとめる。

高環 : 環C 3類に脚を付けたものをC類、脚に透かしを付した須恵器模倣形態のものをD類、外反口縁の浅い皿形の高環をE類、須恵器の高環をG類とする。

煮炊具

甕A : 長胴で器面にナデ調整を施すもの。

甕B : 長胴で器面にハケ調整を施すもの。

甕C : 長胴で器面にミガキ調整を施すもの。

甕D : 長胴で器面にケズリ調整を施すもの。

甕E : 球胴に近い甕で胴部中央部付近に最大径があるもの。

小型甕 : 器高が24cmより低いものをまとめる。長胴と球胴のものがある。

甕A : 小型で、体部が開いた逆台形に近いもの。

甕B : 大型で、砲弾形の体部に湾曲した把手が付くもの。

甕C : 小型で、A類に類似するが、底部に小孔を蜂の巣状に穿孔するもの。

鍋 : 胴部が深く球胴形を呈し、一対の把手を有するもの。

貯蔵具

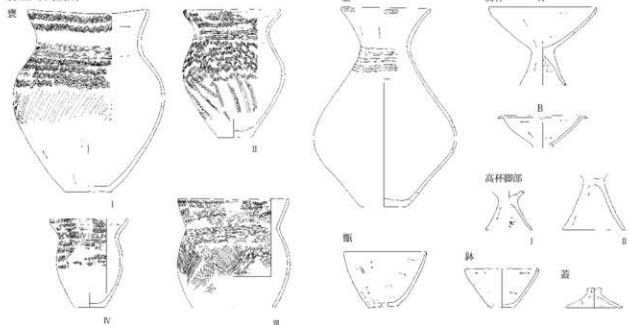
鉢 : 胴部が逆台形状で口縁部が短く外反するもの(須恵器のみ)。

甕C : 外反するやや長い口縁の付くもの、器面にミガキ調整を施す。

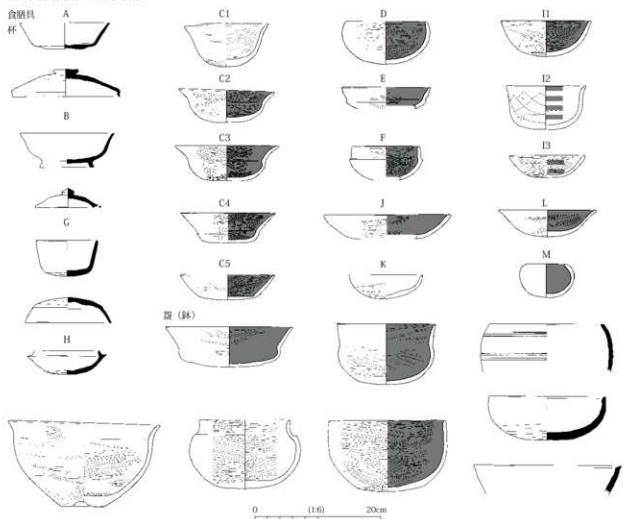
甕D : 須恵器の模倣形態。球胴で、体部に短く外反する口縁部をもつ。

ミニチュア土器 : 祭祀用と思われる小容器をミニチュア土器としてまとめる。

弥生時代後期



古墳時代後期～奈良時代1

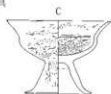


第5図 弥生時代～奈良時代土器の器種分類(1)

古墳時代後期～奈良時代2

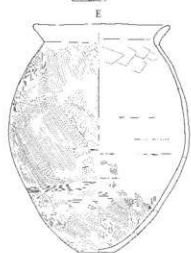
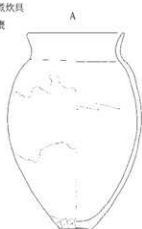
食器具

高杯

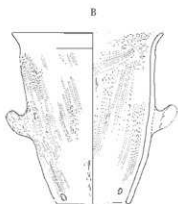
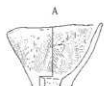


煮炊具

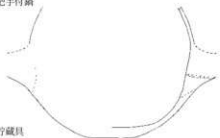
甕



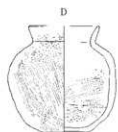
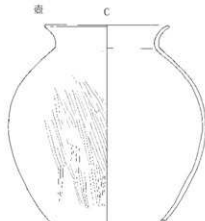
小型甕



把手付甕



甕



貯蔵具

鉢



ミニチュア土器



0 10 20cm

第6図 弥生時代～奈良時代土器の器種分類(2)

第2章 遺跡の地形・歴史的環境

第1節 地形環境

千田遺跡は長野県の北部、中野市豊津地区の千曲川・斑尾川合流地点付近の千曲川沿いの河岸段丘に立地する。この中野市域を含む長野盆地は、西縁に長野盆地西縁活断層系断層群（赤羽他 1985）が走り、西側が隆起して山地・丘陵、東側が沈降して盆地となる（赤羽ほか 1992）。千曲川はその盆地内を流れるが、千田遺跡の所在する中野市西部のみは、千曲川が断層を横断して隆起する西側丘陵地帯を流れる。これは中野市東部にある夜間瀬川扇状地が断層面まで達して高い地形を形成し、千曲川が流れにくいことや、西側丘陵の隆起スピードが千曲川の浸食スピードを上回らないため、丘陵地帯を千曲川が流れられたと考えられている。この断層群は東西から押される力によって形成された逆断層で、隆起する丘陵部では槽曲と断層が発達し、付近では西方の赤塩丘陵東縁に千曲川と同方向の替佐断層や上今井断層が走る。千田遺跡の所在する中野市豊津地区はこの隆起する丘陵内を流れる千曲川沿いの谷底平野にあたり、西側の赤塩丘陵斜面には崖錐地形が発達する。

この長野盆地西縁活断層群の活動による隆起で、中野市西部の丘陵地帯では千曲川沿いに河岸段丘が発達し、千田遺跡もその河岸段丘の一つに立地する。段丘上面は平坦で南端付近に丘陵斜面から流れ下る沢が形成した小規模な新期扇状地が重なり、東側は千曲川に面した段丘斜面となる。千田遺跡の土層は最下層に段丘礫層、その上部に千曲川の細粒堆積物が載り、千曲川氾濫原が隆起したものとみられる。この段丘を形成する断層活動の周期は1,000年～2,500年とされ（塚原 2011）、最も短く見積もるところでは950年周期説がある（佃・栗田・奥村 1990）。1回の活動に伴う隆起量は1～3mと考えられ、1847年の善光寺地震に際して飯山市域では主断層のものは動いていないが、断層から東約1km離れた千曲川河床中に2～3mの段差が発生したことが知られている（塚原 2011）。また、通商産業省工業技術院地質調査所（現独立行政法人産業技術総合研究所）が連と近接する中野市古牧で行った河岸段丘調査結果では単位隆起量が平均1.9～2.3mと算出されている（佃・栗田・奥村 1990）。



第7図 千田遺跡周辺の地質図

上記の隆起量と断層活動の間隔からすると、多くの段丘面が存在すると思われるが、現在、中野市西部の丘陵部の段丘面は、高位から赤塩面、長丘面、草間面、高丘面（原面）、栗林面の5面がとらえられている（中村 1981）。旧石器時代遺跡が確認されるのは高丘面以上であり、この高丘面の段丘化は中野市栗林遺跡の調査で採取した段丘下層の旧低地底部の堆積土層出土木片の¹⁴C年代から約27,000年前と推測されている。その後、12,000年前頃に千曲川河道の移動、10,000年前～9,000年前に自然堤防の形成、6,000年前頃までに下位の栗林面の段丘形成があったと推測されている（長野県埋蔵文化財センター 1994）。年代測定値については資料が少ない状況であり、今後修正される可能性はあるが、栗林面では縄文前期からの土器出土が認められ、この頃には離水して人間の活動がはじまると推定されている（渡辺 1994）。千田遺跡のある段丘も千曲川との比高差や出土土器から栗林面に当たると捉えられる。

なお、千田遺跡には大きな段丘崖は認められないが、斑尾川対岸の現川久保集落付近から千曲川下流側に比高差が拡大する段丘崖による2段前後の河岸段丘面が認められる。斑尾川河口付近の川久保・宮沖遺跡で把握された低位の段丘Ⅰ（長野県埋蔵文化財センター 2013）は千田遺跡と地表面標高は類似するが、縄文時代後・晩期頃に離水し、上部に堆積土が載って地表面が上昇・平坦化したもので縄文時代中期の遺構が検出された千田遺跡の段丘面よりも形成時期は新しい。川久保・宮沖遺跡で縄文時代前期土器が出土した斑尾川上流側の段丘Ⅱが、千田遺跡のある段丘面に対応すると思われる。ちなみに、『中野地域の地質』（赤羽ほか 1992）で示された遺跡周辺の地層区分では、段丘Ⅰが礫・砂・泥からなる完新世の谷底平野堆積物、段丘Ⅱが後期更新世～完新世の段丘堆積物分布範囲に当たる。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

千曲川沿いの栗林面では旧石器時代遺跡は認められず、中野市では長丘・高丘丘陵の原面（高丘面）以上で認められている。千曲川東岸の長丘・高丘丘陵では立ヶ花表遺跡、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、浜津ヶ池遺跡、牛出窯跡（牛出古窯遺跡）、千曲川西岸では南首峯遺跡などがある。これ以外に、千曲川から100mの至近距離にある中野市立ヶ花上川端遺跡で旧石器のブレイド、豊津大日影遺跡、上今井伊勢宮山、斑尾山麓の永江菖蒲平で尖頭器が出土したとされるが、詳細は不明である。

縄文時代

千田遺跡では縄文早期後葉から晩期末葉までの土器が出土し、中期を主体に前期後葉から後期中葉の遺構が検出された。そこで中期前後を中心に、掲載図（第8図）の範囲を超える遺跡も含め、北信の既発掘遺跡事例にふれる。

草創期遺跡は約10km北西に位置する野尻湖周辺に分布密度が高いが、千曲川沿岸には極めて少ない。中野市内では今日も事例がない。早期も野尻湖周辺の高密度は押型文・沈線文・条痕文各期を通じて継続する。千田遺跡周辺でも早期遺跡は散見され、月夜岳（押型文）・がまん淵（沈線文）・風呂屋・飯綱町丸山（絡条体圧痕文）の諸遺跡がある。山ノ内町上林中道南遺跡は沈線文土器新段階の標式遺跡として知られる。

前期前葉期の住居跡は長野市の浅川扇状地遺跡群に散見される。飯山市有尾遺跡に中葉有尾式期の住居

跡、南大原遺跡に南大原式と呼ばれた時期の住居跡がある。飯山市大倉崎遺跡、長野市松ノ木田遺跡で後葉期の集落跡が調査され、諸磯b式より羽羽式が優勢な土器組成を示す。長野市上浅野遺跡では同時期の環状集石群と多量の遺物が出土し、浅鉢形土器を埋納した土坑が丸山遺跡にある。長野市松原遺跡では中葉と終末期の集落跡が検出され、地表面に多数の焼土跡が残っていた。

中期前葉期には飯山市須多ヶ峯遺跡で長軸約17.7mの長楕円形大型住居跡が検出された。同深沢遺跡は前葉期深沢式土器の標式遺跡として知られ、17点の土偶の中には中空大形土偶がある。同時期の風呂屋遺跡では北陸系新崎式土器が伴い土偶30点が出土、対岸の姥ヶ沢遺跡には同時期の大型土偶がある。千曲市屋代遺跡群では周堤が廻る住居跡が検出され、廃屋墓が明らかになった。中葉期は北信地方では遺跡数が少なく調査事例が乏しい。飯綱町上赤塩遺跡は住居跡を検出し、新潟県頸南地域・魚沼地域と通じる土器様相を窺わせる。中期後葉期前半も同じ状況が続き、野沢温泉村平林遺跡、巨礫を用いた立石遺構がある長野市檀田遺跡で斬合式土器が出土した。中期末葉に至って集落遺跡調査例が急増する。高山村八幡添遺跡、長野市吉田古屋敷遺跡、戸倉町円光房遺跡など、住居跡検出例は15遺跡以上ある。多くの遺跡では加曾利EⅢ式期の新しい段階に柄鏡形敷石住居跡が出現し、Ⅳ式期以降住居の主流となる。屋代遺跡群では住居跡53軒、掘立柱建物跡27軒、焼土跡97基、杭列43基などからなる、環状集落の半分程度が検出された。直線状・環状に配列する杭列は松原遺跡にもある。

中期末葉に営まれた遺跡は後期前半に継続するものが多いが住居跡は減少し、加曾利BⅠ式期以降住居跡例がない。長野市村東山手遺跡、高山村坪井遺跡、山ノ内町伊勢宮遺跡、木島平村稲荷境遺跡、飯綱町明尊寺遺跡などに敷石住居跡がある。後期前葉期の栗林遺跡では湧水点に作られたクリ材の水さらし場遺構と、低地に掘った貯蔵穴79基が検出され、磨面が残る台石など多量の堅果類加工が出土した。柳沢遺跡にも貯蔵穴群が見られる。堀之内Ⅰ式期の長野県に特徴的な鉢形土器を「栗林型」と呼ぶ意見もある(鈴木2112)。群馬県・新潟県の長野県に接する地域まで分布し、しばしば裏被葬に用いられる。後期後半以降、石棺墓を作る遺跡が増える。長野市村東山手・宮崎遺跡、飯山市宮中遺跡、野沢温泉村岡ノ峯・蕨平遺跡などがあり、上越・中越地方にも広がる。飯山市東原遺跡には大形石囲炉を備えた掘立柱建物跡があり、6本の柱根が残っていた。沢田鍋土遺跡には中期末、飯綱平遺跡には後期中葉の粘土採掘坑がある。

晩期には遺跡数はさらに減少し、宮崎遺跡、信越国境を中心に分布する佐野式土器の標式・山ノ内町佐野遺跡、飯綱町茶臼山遺跡、飯山市山ノ神遺跡などが知られるにすぎない。

弥生時代

中野市・飯山市周辺では弥生時代中期後半の栗林式期から遺跡が数多く知られる。中野市北部の柳沢遺跡を境として以南では千曲川の東岸、以北では千曲川西岸に1～2km間隔で分布し、そのなかで数多くの菅玉や木棺墓、または礫床木棺墓がみつかった飯山市小泉遺跡、同上野遺跡、中野市栗林遺跡、銅叉・銅鐸を出土した柳沢遺跡などの特徴的な遺跡が5～7km間隔に点在する。これらの弥生時代中期後半の遺跡はすべて同時にあったものではなく、遺跡のない飯山市・木島平村の千曲川沿いの自然堤防地帯や中野市扇状地帯で今後新たに遺跡がみつかる可能性も想定されている。上記の遺跡分布の在り方も今後変更される可能性がある。飯山、中野市域の弥生時代中期後半の遺跡は、長野市松原遺跡など巨大集落遺跡が形成される時期より古いものが多く、栗林式後半期の遺跡は多くは知られていない。そのなかで斑尾川対岸の川久保・宮沖遺跡は栗林式期後半期の水田を営む小集落遺跡の可能性が知られた(長野県埋蔵文化財センター2013)。

弥生時代後期の遺跡は、弥生時代中期後半の遺跡と重なりながら、千曲川東岸の木島平村、中野市の夜

間瀬川扇状地の先端付近など、栗林式期に遺跡が認められない場所にも分布する。また、当該期の遺跡は低地を含む一定地域に面的に広がるようにみえる。弥生時代後期は前半の吉田式と後半の箱清水式期に分けられるが、千田遺跡でも出土した吉田式期の遺跡は長野盆地北部に比較的多く知られる。中野市の吉田式土器を出土した遺跡として月岡遺跡、柳沢遺跡、川久保・宮沖遺跡、栗林、西条・岩船遺跡などがある。なお、長野市吉田高校グラウンド遺跡では当該期に東北地方の天王山式土器やアメリカ式石甕が出土し、中野市間山遺跡でアメリカ式石甕、川久保遺跡で天王山式土器が1点出土している。

古墳時代

弥生時代後期に箱清水式土器分布圏であった当地域へ、北陸系土器、次に東海・畿内系土器というように段階的に外来系土器が流入する(赤塩 1994)。これにより、弥生時代後期以来の在来系土器様式は解体し、土器様式は多様化して畿内系土器要素が強まる。やがて、畿内系小型精製土器が盛行する土器様相へと変化していく。外来系土器の流入から読み取れる情報や人間の移動に伴って地域社会が解体、変容し、さらに墓制も連動して当地域が北陸、東海・畿内地方の勢力のそれぞれ最前線と位置づけられながら、古墳時代へ移行したと捉えられている(土屋 1998)。中野市、飯山市域では北陸系土器流入期や東海・畿内系土器の流入期の遺跡が数多く知られており、斑尾川対岸の川久保・宮沖遺跡では東海系土器の流入から畿内の影響が強まる頃の小規模な水田跡と集落遺構が見つかった。しかし、これに続く時期の畿内の小型丸底土器、器台、有段口縁鉢など畿内系小型精製土器が普及する時期の良好な中野市域の遺跡はあまり知られていない。また、古墳は飯山市有尾1号墳、法伝寺2号墳、勘介山古墳、中野市蟹沢古墳などの前方後方墳、庄内期頃の古い前方後円墳ともされる高遠山古墳(寺沢 2000)があるが、後続する4世紀の古墳も不明瞭である。周辺域で後続する時期の古墳として、5世紀前半のタタキ調整による埴輪が出土した飯綱町庚申塚古墳(前方後円墳)があり、他には銅鏡を出土した伝承から古墳の可能性も指摘されている長野市(旧豊野町)石村將軍塚がある。

古墳時代中・後期の遺跡には、中期の祭祀遺跡の新井大口遺跡、中・後期の集落遺跡に中野市新野遺跡や神宮寺下遺跡、千曲川下流の飯山市田草川尻遺跡、有尾遺跡などがある。古墳は5世紀中頃から6世紀にかけて七瀬双子塚古墳(前方後円墳)や、主体部が割竹形木棺の七瀬古墳群や山の神古墳、林畔2号墳(円墳)などがある。そのほか、合掌形石室の金鐘塚古墳、馬具・鉾留短甲を出土した林畔1号墳等がある。なお、合掌形石室の古墳は和栗古墳の木島平村まで分布し、積石塚古墳は小布施町から中野市南東部、須坂市、大室古墳群など千曲川東岸に多く分布する。この古墳時代中期末には信濃川下流となる新潟県南魚沼の信濃川の支流、魚野川沿いに中核的な飯綱山古墳群がある(甘粕 1986)。飯綱山10号墳では鉾留短甲や鉄鉢、馬具など、中野市林畔1号墳と類似した副葬品が出土し、両者ともに畿内政権と関わりのある埋葬者が推定される。そうした副葬品が出土する古墳が同じ千曲川・信濃川流域にあることは両者を結ぶ道の存在も推測させる。古墳時代後期の周辺遺跡の様相はあまり捉えられていないが、遺跡に近いところでは7世紀後半の風呂屋古墳がある。

古 代

千曲川東側の高井郡に入る中野市域では奈良時代の集落遺跡は不明ながら、7世紀後半から、8世紀を中心に9世紀前半までの茶臼家窯跡、清水山窯跡、池田端窯跡、大久保窯跡、中原窯跡、坂下窯跡、立ヶ花表窯跡、安源寺遺跡、牛出窯跡など窯業遺跡や工房遺跡が高丘陵地に造られた。一方、千田遺跡が含まれる千曲川西岸の水内側では長野市・飯綱町の境にあたる髷山周辺に窯跡群が知られ、本遺跡の南西2kmの今井地区にも寺窪窯跡がある。また、平安時代の土師器焼成遺構が中野市栗林遺跡や安源寺遺跡



第8図 中野市周辺遺跡分布図

第4表 中野市周辺遺跡一覧表(1)

掲載 番号	市町村	市町村 番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
2	中野市	206	川久保(替佐遺跡群)		○	○	○	○	○		2004～2007調査(川久保・宮沖・塚添・小宮総称)
3	中野市	206	宮沖(替佐遺跡群)		○	○	○	○	○		2004～2007調査(川久保・宮沖・塚添・小宮総称)
4	中野市	203	千田		○	○			○	○	2001～2003・2005・2006調査
1	中野市	176	柳沢		○	○					2007～2009調査町文・銅鐸出土
5	飯山市	146	上組			○					
6	飯山市	147	深沢		○						1963(1)、1964(2)、1965(3)、1993発掘
7	飯山市	306	藤城						○		
8	中野市	242	深沢城跡						○		山城
9	中野市	217	鶴田		○						
10	中野市	228	永江城址						○		山城
11	中野市	216	北永江								
12	中野市	241	永江館跡						○		居館
13	中野市	214	八号塚		○	○					1994調査
14	中野市	213	大谷地		○		○				1994調査
15	中野市	215	稲沢		○						
16	中野市	237	隣の城の筆跡						○		山城
17	中野市	238	名立				○	○			
18	中野市	179	小丸山古墳				○				古墳
19	中野市	166	吉牧			○					
20	中野市	177	八幡塚古墳				○			○	古墳
21	中野市	178	塚六古墳				○				古墳
22	中野市	180	藤平塚塚						○		
23	中野市	175	赤岩古墳				○				古墳 推定位置
24	中野市	174	七ツ鉢		○						
25	中野市	173	村林		○						
26	中野市	172	神宮寺				○	○			寺院
27	中野市	171	神宮寺下			○	○				1948・1971調査
28	中野市	170	梵天		○	○					
29	中野市	5	笠原の立						○		
30	中野市	169	きつね塚								塚状遺構 時期不明
31	中野市	168	原敷添		○						
32	中野市	167	関上		○						
33	中野市	163	壁田(含、壁田宮下遺跡)		○	○		○	○		1971調査
34	中野市	161	壁田城跡						○		山城
35	中野市	211	袖久保(含、日向遺跡)		○						
36	中野市	212	大日影		○						
37	中野市	162	ねごや						○		
38	中野市	82	笠原			○				○	石積み遺構 中・近世か?
39	中野市	208	飯綱平北		○						
40	中野市	207	飯綱平(含、袖山遺跡)		○			○	○	○	1992・2004調査
41	中野市	209	笠倉(含、川端遺跡)			○					2011調査
42	中野市	236	笠倉館(森の家)跡						○		居館
43	中野市	210	琵琶島(湯殿)		○	○					2011調査
44	中野市	158	峯		○						
45	中野市	156	山の神古墳				○				古墳 1948調査
46	中野市	157	陣場		○	○	○				
47	中野市	160	赤塚古墳				○				古墳
48	中野市	159	永峯古墳				○				古墳
49	中野市	80	間長瀬				○				
50	中野市	81	笠原上フ原				○				
51	中野市	205	飛山(含、飛山古墳)		○	○			○		1994調査
52	中野市	204	替佐城跡						○		山城
53	中野市	235	対面所						○		1995調査
54	中野市	153	三ツ又		○						
55	中野市	154	中殿1号古墳				○				古墳 消滅
56	中野市	155	中殿2号～5号古墳				○				古墳 1986・1987調査 消滅
57	中野市	231	田妻						○		
58	中野市	79	新井向原						○		
59	中野市	6	全井陣屋						○		
60	中野市	78	新井大口フ				○				1969調査
61	中野市	200	風呂原		○	○		○			1994調査
62	中野市	202	南大洞		○	○					

第5表 中野市周辺遺跡一覧表(2)

掲載番号	市町村	市町村番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
63	中野市	149	宮反		○	○		○			1983・1984 調査
64	中野市	150	大保城跡								居館
65	中野市	148	姥ヶ沢			○	○				1982 調査
66	中野市	152	林畔2号古墳				○				古墳 1948 調査
67	中野市	151	林畔1号古墳				○				古墳 (市史跡)
68	中野市	144	七瀬北原竈址								七瀬4号古墳改称。1987 調査消滅
69	中野市	147	棚畑					○	○		
70	中野市	145	七瀬5号古墳				○				古墳 1987 調査消滅
71	中野市	143	七瀬3号古墳				○				古墳 1987 調査消滅
72	中野市	141	七瀬2号古墳				○				古墳 1986 調査消滅
73	中野市	142	前山古墳				○				古墳 1985 調査消滅
74	中野市	140	七瀬1号古墳				○				古墳
75	中野市	139	七瀬双子塚古墳				○				古墳 (県史跡)
76	中野市	146	寿徳寺跡						○		中世寺院
77	中野市	138	七瀬	○	○	○	○	○			
78	中野市	199	北城城址						○		
79	中野市	233	風呂屋古墳				○				古墳 1994 調査消滅
80	中野市	201	風呂屋居館址								居館
81	中野市	198	寺窪竈址					○			1991 調査
82	中野市	227	西山根	○							
83	中野市	234	南城城址								山城
84	中野市	197	山根		○	○	○				1991 調査
85	中野市	232	内堀館跡						○		居館
86	中野市	196	南大原			○	○	○			1951・1956・1979 調査
87	中野市	135	浜津ヶ池	○	○	○	○				1987・1994 調査
88	中野市	137	大徳寺			○	○	○			
89	中野市	195	蒔山							○	先坂遺跡を改称
90	中野市	122	牛出	○	○	○	○	○	○		1994～1996 調査
91	中野市	134	粟林	○	○	○	○	○	○	○	1948・1950・1965・1969・1980・1981・1983・1987・1991・1992・1994～1999 調査
92	中野市	133	光海寺跡(三ヶ寺跡)						○		
93	中野市	126	安源寺城跡	○	○	○					山城
94	中野市	125	から池						○		
95	中野市	119	立ヶ花・上川端	○							
96	中野市	121	牛出竈跡	○	○	○	○	○			1993・1997 調査
97	中野市	132	粟林3号墳				○				古墳
98	中野市	130	粟林1号墳				○				古墳
99	中野市	131	粟林2号墳				○				古墳
100	中野市	129	小丸山古墳				○				古墳
101	中野市	128	安源寺館跡				○				居館 1990 調査
102	中野市	127	安源寺跡						○		
103	中野市	124	安源寺	○	○	○	○	○	○	○	1951・1976・1986・1986・1985・1994・1995・2002 調査
104	中野市	136	片畑					○			1960 調査
105	中野市	113	中原竈跡								1984 調査
106	中野市	114	東池田竈跡	○			○				2004 調査
107	中野市	115	坂下竈跡					○			
108	中野市	112	茶臼峯竈跡								1963・1964・1971 調査
109	中野市	106	茶臼峯遺跡・茶臼峯竈跡(含・茶臼峯墳塚)		○			○	○	○	1969 調査
110	中野市	123	風巻					○			1989 調査
111	中野市	117	牛出城跡	○	○	○	○				1994・1997 調査
112	中野市	116	立ヶ花	○	○	○	○				1962・1989・1990・1993・1997・2000 調査
113	中野市	118	本誓寺						○		寺院
114	中野市	120	草間西原竈跡					○			
115	中野市	110	池田城竈跡		○		○	○			1991・1992 調査
116	中野市	107	林畔竈跡								
117	中野市	111	大久保竈跡								1964・1983 調査
118	中野市	105	大久保館跡						○		居館
119	中野市	103	高山2号古墳				○				古墳消滅
120	中野市	102	高山1号古墳				○				古墳消滅
121	中野市	100	高屋敷		○	○					
122	中野市	108	立ヶ花表山竈跡		○	○		○			1970 調査

第6表 中野市周辺遺跡一覧表(3)

掲載番号	市町村	市町村番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
123	中野市	229	沢田鍋土	○	○		○	○		○	1991・1992・1995・2009・2010 調査
124	中野市	109	清水山竊跡					○	○		1992・1994 調査
125	中野市	104	上の山竊跡					○			1993 調査
126	中野市	96	西山古墳				○				古墳 消滅
127	中野市	95	京塚古墳				○				古墳 消滅
128	中野市	230	上の山					○			1994 調査
129	中野市	97	秋葉山古墳					○			古墳
130	中野市	99	御座山古墳				○				古墳
131	中野市	101	社堂司古墳					○			古墳
132	中野市	87	立ヶ花城跡	○	○	○	○				城跡 1980・1984 調査
133	中野市	91	立ヶ花表	○		○		○			
134	中野市	88	立ヶ花1号墳				○				古墳
135	中野市	89	立ヶ花2号墳				○				古墳
136	中野市	90	立ヶ花3号墳				○				古墳
137	中野市	92	かま丸測(倉、西山竊跡、西山中世墓址)	○	○	○	○	○	○		1991・1993 調査
138	中野市	93	竜徳寺跡						○		
139	中野市	94	草間城跡						○		
140	中野市	85	川端			○					
141	中野市	98	草間中組			○					
142	中野市	84	殿境			○					
143	中野市	86	鳥軒割			○		○			
144	中野市	77	塚墓			○		○			
145	中野市	76	吉田宮脇(倉、吉田屋敷下、吉田立派遺跡)			○		○	○		
146	中野市	75	五里原								
147	中野市	74	寿町			○					
148	中野市	72	岩船			○		○			
149	中野市	69	西条・岩船遺跡群			○		○			1989～1995 調査
150	中野市	9	岩船氏居館					○	○		
151	中野市	70	三好町					○			
152	中野市	56	中野療行跡(中野陣屋跡)							○	
153	中野市	55	高梨氏城跡						○		1989～1994、1998・1999 調査
154	中野市	8	中野小籠								
155	中野市	52	替代	○	○	○	○				
156	中野市	68	西条長屋塚					○			
157	中野市	67	西条東屋敷			○	○	○			1998 調査
158	中野市	66	五加					○			
159	中野市	46	上小田中		○	○	○	○			1971・1997・1998 調査
160	中野市	44	下小田中		○	○	○	○			
161	中野市	45	光念寺古墳					○			古墳
162	中野市	50	姥懐山古墳				○				古墳 1967 調査・消滅
163	中野市	47	北越巻								
164	中野市	41	中郷		○						
165	中野市	22	新保					○			
166	中野市	38	高遠山古墳				○				古墳(前方後円墳) 1997・1999 調査
167	中野市	21	鎌井屋館跡						○		屋敷
168	中野市	26	行人塚					○			
169	中野市	25	新野2号古墳				○				古墳
170	中野市	20	遠添								
171	中野市	19	三ツ和		○	○		○			
172	中野市	23	金館山古墳					○			古墳(大正14 調査)
173	中野市	24	新野1号古墳					○			古墳
174	中野市	28	新野		○	○	○	○			1990・2002 調査
175	中野市	29	新野陣屋跡							○	近世陣屋
176	中野市	30	新野上東						○		
177	中野市	31	間山	○	○	○	○	○			1958・1983・1991・1992 調査
178	中野市	10	間山館						○		
179	中野市	18	えびす山古墳				○				古墳
180	中野市	17	専福寺跡						○		
181	中野市	16	大熊日影								
182	中野市	27	小曾屋城跡						○		山城
183	中野市	11	大日新								時期不明
184	中野市	12	大熊日向			○		○			

第7表 中野市周辺遺跡一覧表(4)

掲載 番号	市町村	市町村 番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
185	中野市	13	大円寺			○					
186	中野市	3	桜沢遺跡群		○	○	○				1965・1989 調査
187	中野市	4	蟹沢塚				○?		○?		古墳か中世の塚
188	中野市	5	桜沢1号古墳				○				古墳
189	中野市	6	桜沢2号古墳				○				古墳
190	中野市	7	桜沢3号古墳(蟹沢古墳)				○				古墳
191	中野市	8	桜沢4号古墳				○				古墳
192	中野市	9	桜沢5号古墳				○				古墳
193	中野市	10	桜沢6号古墳				○				古墳
194	中野市	15	西山館跡						○		山城
195	中野市	33	真山城跡						○		山城
196	三水村	10	東柏原		○						
197	三水村	8	瘤屋敷					○			
198	三水村	11	黒田城						○		
199	三水村	12	黒田ののろし山						○		
200	豊野町	1	磯ヶ崎城						○		
201	豊野町	1	塚上		○			○			
202	豊野町	3	二ツ石		○						
203	豊野町	49	権豪寺跡						○		
204	豊野町	46	小軽井					○			
205	豊野町	58	箕羽田					○			
206	豊野町	7	立石ヶ丘		○	○	○	○			1978 調査
207	豊野町	3	鐘撞堂						○		
208	豊野町	66	立石ヶ丘古墳				○				古墳
209	豊野町	4	八幡社					○	○		
210	豊野町	5	板橋					○	○		
211	豊野町	6	下張	○							
212	豊野町	81	松ノ木下		○		○	○			
213	豊野町	14	上浅野		○	○	○	○			
214	豊野町	78	山崎古墳				○				
215	豊野町	15	大川端		○	○	○	○			
216	豊野町	17	大瀬浜				○				
217	豊野町	16	町尻		○		○				
218	豊野町	12	観音堂		○	○	○				
219	豊野町	13	塙塚			○					
220	豊野町	10	中島		○						
221	豊野町	101	坊溜						○		
222	豊野町	47	手子塚	○							
223	豊野町	89	上ノ山二号古墳				○				
224	豊野町	77	藤棚					○			
225	豊野町	8	南曾峯	○	○	○	○	○			1980・1993・2005～2007 調査
226	豊野町	11	峰の畑					○			
227	豊野町	9	南曾峯古墳				○				古墳
228	豊野町	18	西沖			○					
229	豊野町	66	北久保			○	○				
230	小布施町	67	土橋・川端			○					
231	小布施町	68	焼約					○			
232	小布施町	1	東郷			○	○	○			
233	小布施町	1	くぬぎ原庄 高梨氏居館						○		
234	小布施町	2	向屋敷				○	○			
235	小布施町	3	西瀬坊			○	○	○			
236	小布施町	4	三木			○	○	○			
237	小布施町	5	六川		○	○	○	○			
238	小布施町	25	二十端城跡						○		

で報告されている。

竃跡や工房以外の奈良時代集落跡が不明瞭な中野市、飯山市域でも9世紀から集落遺跡が認められる。小型住居跡数軒からなる遺跡が多いが、飯山市北原遺跡では鍛冶を行った可能性が捉えられ、同様に中野市川久保遺跡、宮反遺跡、安源寺遺跡などで鍛冶関連の遺構や羽口等が見つかった。なお、北原遺跡は越後同様に掘立柱建物跡が多く認められ、川久保遺跡では千曲川（信濃川）沿いに越後まで点在して出土する武蔵型甕が出土した。9世紀の千曲川（信濃川）沿いの越後との交流の活性化が推測される（長野県埋蔵文化財センター 2013）。平安時代後半の集落遺跡には中野市牛出遺跡、間山遺跡、新野遺跡、川久保・宮沖遺跡などがある。

中世・近世

中世遺跡は居館址・山城、埋納銭・中世墓・寺院などがあり、集落遺跡は断片的にしか捉えられていない。斑尾川対岸の川久保・宮沖遺跡では平安時代末頃の水田跡や畑跡などが明確に捉えられ、以後は継続的な利用が捉えられた。また、川久保・宮沖遺跡では13～14世紀頃に多発した洪水土層で埋没した川久保1区8～10面水田跡が確認されたが、15世紀後半～18世紀頃までは厚い洪水土層は確認されなかった。千田遺跡10区でも中世水田跡上層の16世紀頃の2面は畑地となっており、洪水が少なくと思われる。

なお、『和名類聚抄』に千曲川上流側にある太田郷がみえ、嘉暦四年（1329）諏訪神社五月会頭役に替佐南隣の「今井」が太田庄内と記される。しかし、遺跡所在地である「加佐」、「かいさ」は南北朝期以後に確認されるが、「若槻新庄内加佐郷」と記載され、平安時代に太田郷内に含まれていたかは不明である。また、南北朝～室町時代に替佐周辺に高梨氏と市河氏が所領をもっていたが、その後、高梨氏が飯山市南部までを手中に収めたことが知られる。高梨氏は武田氏侵攻で転出し、戦国時代末期に上杉氏支配域になると、元高梨氏家臣の岩井氏が「かいさ」を宛がわれている。西方丘陵上にある替佐城跡は上杉・武田氏の緊張が高まった頃のものと思われ、山麓の中野市対面所遺跡で五輪塔が多く出土した（長野県埋蔵文化財センター 1998）。

江戸時代に当地域は飯山藩領となる。隣接する川久保・宮沖遺跡では水田が新たに編成された可能性が捉えられている。近世では数多くの洪水記録から、時期毎に発生状況が異なることが知られる。洪水記録をまとめた中野市年表と飯盛マツの年輪を比較した小林暉暉氏によると1629～1710年は旱害が多く、1699～1772年は水害記録が多く、1773～1860年は洪水が少なく、1860～1920年まで水害記録が多いとしている（小林 1971）。一方、佐藤平八氏は飯山市域の洪水多寡を千曲川の河道移動や、飯山藩での治水事業（盆地北端での河床の浸漬）との関係で捉えている（佐藤 1993）。近世の大規模な洪水として寛保二年（1742年）の戊の満水、弘化四年（1847年）の善光寺地震に伴う洪水等が知られている。千田遺跡10区1面の水田跡と対応する可能性がある川久保1区4面水田跡は戊の満水で埋没した可能性がある（長野県埋蔵文化財センター 2013）。

第2章 引用・参考文献

A 論文、県市町村史誌、遺跡分布図等

- 赤羽貞幸・加藤碩一・富樫茂子・金原啓司 1992 『中野地域の地質』通商産業省工業技術院 地質調査所
 赤塩 仁 1994 「第V章 第7節 弥生時代後期から古墳時代初期の土器様相」『栗林遺跡・七瀬遺跡』(冊)長野県埋蔵文化財センター
 甘粕 健 1989 「第四章第一節古墳時代の概観」『第二節古墳文化の形成』『新潟県史』通史編1 新潟県
 大原正義 1981 「北信濃山ノ神遺跡出土の土器について」『信濃』Ⅲ・33-4

- 小野勝年・横山浩一 1982 「林野 1-2号古墳、山の神古墳」『長野県史 考古資料編 全1巻(二) 主要遺跡(北・東信編)』長野県史刊行会
- 金井汲次 1982 「新井大ロフ遺跡」『長野県史 考古資料編 全1巻(二) 主要遺跡(北・東信編)』長野県史刊行会
- 金井汲次・桐原 健 1985 「長野県中野市赤岩神宮寺下遺跡発掘調査概報」『信濃』Ⅲ 10-8
- 神田五六 1936 「信濃栗林の弥生式土器」『考古学』7-7
- 神田五六 1963 「第1章 豊田村の古代文化」『豊田村誌』
- 桐原 健 1956 「北信濃替佐の弥生式土器」『信濃』Ⅲ-8-6
- 小林職暉 1971 「飯盛マツ年輪の一考察」『高井』第19号 高井地方史研究会
- 坂詰秀一 1974 「4 縄文時代」『野沢温泉村史』
- 笹澤 浩 2001 「上浅野遺跡」『豊野町の考古資料(1)』豊野町誌刊行会
- 佐藤平八 1993 「第三篇第五章第二節山と水をめぐる変化」『飯山市誌 歴史編(上)』飯山市誌編纂室
- 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料第1巻」
- 関 孝一 1982 「坪井遺跡」『長野県史考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会
- 檀原長則 1982 「紫岩古墳」『長野県史考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編) 長野県史刊行会
- 塚原直昭 2011 「長野県の地震入門」しなのき書房
- 佃栄吉・栗田泰夫・奥村晃史 1990 「長野断層系から発生する善光寺型地震再来間隔と断層変位量推定 ボーリング及びトレンチ発掘調査報告」『地震予知連絡会議会報』44
- 土屋 積 1982 「七瀬二子塚古墳」『長野県史考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編)
- 土屋 積 1998 「第6節 成果と課題—善光寺北部の古墳出現前後—」『牛出・葦山・風呂屋・対面所・飛山・大谷地・八号堤遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 寺沢 薫 2000 『王権誕生』講談社
- 中村次郎 1981 「第2章 第5節 長丘丘陵」『中野市誌 自然編』中野市誌編纂委員会
- 西沢隆治 1982 「深沢遺跡」『長野県史考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編) 長野県史刊行会
- 仁科良夫・松島信幸・赤羽直幸・小坂共栄 1985 「長野県の活断層」『信州大学理学部紀要』第20巻第2号 信州大学理学部
- 森本六爾 1926 『金鑑山古墳の研究』
- 渡辺敏泰 1994 「第V章 第1節 栗林遺跡周辺の地形形成過程」『栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 渡辺敏泰 1994 「第III章 第1節 遺跡の概要」『栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- B 発掘調査報告書等
- 飯綱町教育委員会 2008 『小玉遺跡』
- 飯山市教育委員会 1978 『田草川尻遺跡II』
- 飯山市教育委員会 1980 『北原遺跡調査報告書』
- 飯山市教育委員会 1985 『北原遺跡IV』
- 飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』
- 飯山市教育委員会 1991 『田草川尻遺跡VI』
- 飯山市教育委員会 1992 『有尾遺跡II』
- 飯山市教育委員会 1995 『須多ヶ峯遺跡』
- 飯山市教育委員会 1994 『上野遺跡IV』
- 飯山市教育委員会 1994 『上野遺跡V』
- 飯山市教育委員会 1995 『小泉弥生時代遺跡』
- 飯山市教育委員会 1995 『上野遺跡VI』
- 飯山市教育委員会 1996 『上野遺跡VII・柳町遺跡』
- 飯山市教育委員会 1998 『東原遺跡—築堤地点—』
- 飯山市教育委員会 2002 『上野遺跡—大倉埜遺跡』
- 小布施町教育委員会 1987 『長野県上高井郡小布施町遺跡詳細分布図』

- 木島平村教育委員会 1990 『稲荷境遺跡Ⅳ』
- 木島平村教育委員会 2002 『根塚遺跡』
- 三水村教育委員会 1997 『上赤坂遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2001 『市道遺跡発掘調査報告書』
- 須坂市教育委員会 1985 『須坂市道跡詳細分布図』
- 豊田村教育委員会 1980 『南大原遺跡』
- 豊田村教育委員会 1994 『飯綱平遺跡』
- 豊田村教育委員会 2005 『飯綱平遺跡Ⅱ』
- 中野市教育委員会 1983 『姥ヶ沢』
- 中野市教育委員会 1985 『宮反』
- 中野市教育委員会 1985 『中野市道跡詳細分布図』
- 中野市教育委員会 1989 『七瀬古墳群・田麦中畝古墳群』
- 中野市教育委員会 1991 『立ヶ花遺跡』
- 中野市教育委員会 1992 『間山Ⅱ』
- 中野市教育委員会 1993 『間山Ⅲ』
- 中野市教育委員会 1995 『安源寺遺跡』
- 中野市教育委員会 1997 『西条・岩船遺跡』
- 中野市教育委員会 2000 『高遠山古墳発掘調査概報』
- 中野市教育委員会 2001 『栗林遺跡発掘調査報告書』
- 中野市教育委員会 2003 『新野遺跡』
- 中野市教育委員会 2006 『長野県中野市道跡詳細分布図』
- 長野市教育委員会 1988 『宮崎遺跡』
- 長野市教育委員会 2001 『吉田高校グランド遺跡Ⅱ』
- 長野市教育委員会 2004 『刈川扇状地遺跡群 横田遺跡(2)』
- 長野市教育委員会 2007 『刈川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡(3)』
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史考古資料編』全1巻(1)遺跡地名表
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1994 『栗林遺跡・七瀬遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『牛出・葺山・風呂屋・対面所・飛山・大谷地・八号堤遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡・がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・清水山窯跡・池田窯跡・牛出古窯遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『松原遺跡 縄文時代』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1999 『村東山手遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大地遺跡・窪原原遺跡)一縄文時代編一』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 『星光山荘A・星光山荘B・西岡A・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏他 縄文時代～近世』
- 長野県埋蔵文化財センター 2010 『月岡遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 『南曾峯遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 『柳沢遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2013 『川久保・宮沖遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2013 『沢田鍋土遺跡・立ヶ花表遺跡・立ヶ花城跡』
- 野沢温泉村教育委員会 1985 『岡ノ峯』
- 牟礼村教育委員会 1979 『丸山遺跡』
- 牟礼村教育委員会 1980 『明尊寺・茶白山』
- 牟礼村教育委員会 1992 『平出遺跡群発掘調査報告書』
- 牟礼村教育委員会 1994 『庚申塚古墳発掘調査報告書』
- 山ノ内町教育委員会 1967 『佐野』
- 山ノ内町教育委員会 1981 『伊勢宮』
- 山ノ内町教育委員会 1996 『上林中道南遺跡Ⅲ』

第3章 6区の遺構と遺物

第1節 概要

6区は千曲川に面して南東に緩やかに傾斜した、標高335m前後の段丘面上となる。河川堆積の影響が及びにくいこともあって堆積が薄く、縄文時代と古墳時代の遺構・遺物が同一調査面でほとんど深度差がなく検出された。遺構は縄文時代前期及び古墳時代後期の土坑51基、土器及び礫集中3か所、性格不明遺構2か所、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡1本である。主な遺構は6世紀前半を中心とする古墳時代後期に属し、縄文時代前期の遺構はこの時期に多くが破壊されたと推定される。

JR飯山線側の調査区北西壁の土層断面を基本土層とした。掘乱部分が多く、表土は黒褐色シルトを基調として礫・砂等を多く含み、平均40cm前後の層厚で基盤層の固い黄褐色シルト層(13・15層)に達する。この間に堆積する黒褐色シルト(7層)が遺物包含層となる。下層にある黄褐色シルトブロック・砂・礫を含むにぶい黄褐色シルト(7b層)が縄文時代前期、上層にある黄褐色シルト小ブロックを少量含む黒色シルト(7a層)が古墳時代後期の遺物包含層である。検出面、埋土等を「基本7層」のように記述する。

なお、縄文時代前期の遺物集中SQ09(XII M8)、性格不明遺構SX01・02(XII M12)、古墳時代の遺物集中SQ07(XII M8)・08(XII M8・9・13～15)が記録され、遺物が取り上げられている。所見記録によれば、上記の埋土の性質及び出土遺物から時期を推定し、自然の凹地形へ堆積した遺物の可能性を指摘している。これらは人為的な掘削あるいは堆積とする根拠に欠けるため、本報告では遺構としては取り上げず、遺物出土地点として扱う。

第2節 縄文時代の遺構

1 遺構

SK 1288 図版2 位置: XII M8

検出: 古墳時代のSQ07直下の第2検出面、基本9'層上面で検出。標高335.10m。SQ07と切り合い関係ではない。規模・形状: 長径98cm、短径77cmの不整形、深さ40cmで断面形はたらい状。埋土: 単層。基本7b層にぶい黄褐色礫層の灰黄褐色からにぶい黄褐色砂礫混じりシルト。遺物: 縄文時代前期土器の小破片少量。時期: 出土した土器片及び埋土が基本7b層であることから、縄文時代前期の遺構と考えられる。

SK 1292 図版2 位置: XII M13

検出: 古墳時代のSQ08埋土直下、標高335.13mで検出。地山の一部となる明黄褐色から黄褐色シルトを掘り込む。SK1293に切られる。規模・形状: 長径165cm、短径80cmの不整形楕円形、深さ37cmで壁は外傾する。埋土: 単層。基本7b層類似層の灰黄褐色からにぶい黄褐色で黄色微細礫混じりシルト。遺物: 縄文時代前期土器の小破片少量。時期: 出土土器片と基本7b層類似層であることから、縄文時代前期の遺構と考えられる。

SK 1295 図版2 位置: XII M13

検出: 地山の一部となる明黄褐色から黄褐色シルトを掘り込む。古墳時代のSK1294及びSK1272に切られる。規模・形状: 現存長径160cm、短径275cmの円形、深さ89cmで断面形は楕円状。埋土: 西側から流入した埋土が8層に分層される。黒褐色や灰黄褐色シルトと明黄褐色砂礫層が基調。遺物: なし。時期: 7b層に近似する埋土から縄文時代前期の遺構と考えられる。

SK 1301 図版3 位置: XII M14

検出: 古墳時代住居跡SB02床面直下、標高334.77mで検出。地山の一部となる明黄褐色から黄褐色シルトを掘り込む。SB02に切られる。規模・形状: 長径130cm、短径120cmの円形、深さ約48cmで断面形は楕円状。埋土: 単層。基本7b層類似の灰黄褐色からにぶい黄褐色で黄色微細礫混じりシルト。遺物: なし。時期: SB02に切られ、埋土が縄文時代前期相当のため、当該期の遺構と考えられる。

SK 1302 図版2 位置: XII M08

検出: 古墳時代のSQ09直下、にぶい黄褐色の粗い川砂層で検出。標高334.96m。SQ09に切られる。規模・形状: 長径65cm、短径53cmの楕円形、深さ22cmで断面形はたらい状。埋土: 単層。基本7b層の灰黄褐色からにぶい黄褐色で黄色微細礫混じりシルト。遺物: 焼けた礫が3点出土。時期: SQ09直下であり地山である基本9層にぶい黄褐色の粗い川砂を掘り込み、埋土も縄文時代前期相当であること、焼けた礫が出土したことから、縄文時代前期の遺構と考えられる。

2 遺物

(1) 縄文土器

本区では縄文時代の土坑のほか、古墳時代後期の住居跡SB02、掘立柱建物跡ST03と同時代の土坑からも縄文時代遺物は出土している。特に長径10mを超える自然の凹地形SQ08からは最も出土量が多い。土器は小破片で磨滅したものが多く、遺構・地点ごとに時期的なまとまりも見られないため、分類ごとに時期をおって記述する。

第I群 早期土器 図版6-1~3・10~14・28・29

第1類: 沈線文系土器 (10・11・28・29)

上林中道南式に比定される土器。10は口端部に刻みを施す。櫛歯状工具で横位・斜位に集合沈線文を施し、28は刺突文が見られる。

第2類: 条痕文系土器 (1~3・12~14)

12は唯一の鶴ヶ島台式である。1~3は内外面、13・14は外面に横位・斜位の細かい条痕文を施す。口縁部の2は外面に横位多段・斜位の絡条体庄痕文が見られる。

第II群: 前期土器 図版6-4~8・15~25・30~32・36~38

第1類: 初頭土器 (4~6・15~18・20・30・37)

4~6・15~18は塚田式に比定される。口縁部に狭い無文部を残して隆帯が廻り、刻みを施すものがある。6は縄文原体で刻む。20・30・37は口縁部が肥厚し、刺切文を施す花積下層式である。

第2類: 前葉土器 (7・8・19・21・22・24・25・31・32・36・38)

胴部の22は幅狭の多段ループ文を施す関山I式土器である。他に羽状縄文のみの破片を本類に含めたが、第1類から第3類に及ぶと推定される。0段多葉原体を用いるものが古く、有文土器の量から第3類は少ないと推定される。

第3類：中葉土器（23）

集合沈線による菱形文に列点刺突を施す、有尾式古段階の土器である。

第4類：後葉土器（33～35）

口端を刻み、横位の沈線文を施す薄手土器である。諸磯式並行期の北陸地方の土器と思われる。

Ⅲ群 中期中葉土器 図版6-26

口縁部に半截竹管状工具で格子目文を描いた、五領ヶ台式期の土器である。

Ⅶ群 中期末葉土器 図版6-9・27

加曾利EⅣ式土器である。9は隆帯が口縁部を廻り、微隆起帯が垂下する。27はW字状の意匠を沈線を描く。ともに縄文を充填する。

（2）土製品・石器・石製品

土製品には土製円板2点がある。1点は繊維土器で、縄文前期前半に帰属する。石器には石鏃及び未製品11、石錐1、スクレイパー4、石匙1、敲打礫1、石錘1、磨石類2、棒状敲石2、砥石1点がある。棒状敲石は古墳時代住居跡SB02出土、砥石は同時期の凹地形SQ08出土であり、古墳時代の可能性がある。石製品には瑛状耳飾の破片がある。

第3節 古墳時代の遺構

1 遺構

（1）竪穴住居跡

SB02 図版4～6 PL2 位置：ⅩⅡM8・9・13・14・15

検出：表土直下の第1検出面基本7層黒褐色シルト上面、あるいは基盤層13層の明黄褐色シルト上及びSQ08下で検出。標高335.37m。切り合いはない。規模・形状：北西壁にカマドがあり、北西-南東方向に若干長い隅丸方形を呈す。主軸7.54m、直交軸7.06m、深さ51cmを測る。床面は黒褐色シルトと褐色シルトを混和した土を厚さ約5cm前後に貼る。柱穴：東西南北コーナーから対角線にそれぞれ約2m内側に4個ある。北側をピット1、東側をピット2、南側をピット3、西側をピット4とした。ピット3については掘方を4回掘り換えている。カマド：北西壁のほぼ中央にある。河原石を芯材にシルトと白色粘土を用いて袖を構築する。主軸長・幅とも約1.5m、高さ約0.7mで、石が左右3個ずつ残存した。炊口部には天井石と考えられる石が崩落した状態で残っていた。燃焼部内から土師器が出土し、右側袖内からほぼ完形の須恵器模倣杯が出土。施設：出入口部分がカマド反対側の南東壁ほぼ中央に作られていた。また間仕切り構造に伴うと考えられる溝が南西壁に直交してピット3・4まで3本、北東壁に直交してピット1・2まで3本が掘られていた。いずれも幅約20cm、長さ約60～70cm、深さ約10cm。埋土：基本7層やSQ08埋土類似の黒褐色シルトが基調。3分層され水平堆積する。遺物：床面近くから多くの土師器杯・甕などが出土。カマド内からも土師器杯・甕が出土。こも編み石が入り口付近で集中出土。時期：出土土器から古墳時代後期の6世紀前半と考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

ST 03 図版2 PL 2 位置: XII M13・14・18・19

検出: 表土直下の第1検出面基本7層の黒褐色シルト上面、あるいは基盤層13層の明黄褐色シルト上面、及びSQ08下で10個の柱穴が検出され、北東-南西方向に主軸をもつ1間×4間の掘立柱建物跡と判断した。当初北西列4間のピットにSK1272・1286・1253・1277・1254を付番し、ピット1・2・3・4・5と改称した。南東列4間のピットにはSK1269・1275・1270・1278・1273を付番し、ピット6・7・8・9・10と改称した。緩斜面にあり、標高335.25～334.81mで検出。切り合いはない。規模・形状: 北西列の北東～南西方向4間は芯々で約3.8m、南東列の北東～南西方向4間は同じく約3.9mを測る。また北東列の北西から南東の1間は芯々で約2.6m、南西列の北西から南東の1間は同じく約1.8mを測り、北東のSB02側で広がる。このような形状で掘立柱建物ととらえてよいか疑問は残るが、北東隣りに並列する竪穴住居跡SB02と関連する建物と推定する。埋土: ピット1～10はすべて単層。若干の差はあるものの黒色シルトが埋土。掘方と柱痕跡が明瞭に観察できなかった。遺物: ピット1・2・3・6・8から古墳時代後期の土師器片、ピット1・2・4・5・7・9からは縄文時代前期土器片が出土。時期: ピット出土土器とSB02との位置関係から、同じ古墳時代後期の6世紀前半と考えられる。

(3) 溝跡

SD 10 図版3 位置: XII M 8・9・13・14・15

検出: 北西側の落込み地形に堆積した表土直下の基本7a層黒色シルト下面、基盤層15層明黄褐色～黄褐色シルト上面(標高335.23m)を掘り込む。切り合いはない。規模・形状: 長さ約15.50m、最大幅約0.70m、深さ約0.10mを測り、落込み地形下端に沿ってほぼ北西から南東に走る。埋土: 基本7a層の黒色シルト単層。遺物: 古墳時代後期の土師器片が出土。時期: 出土土器と同時期相当の基本7a層黒色シルトの堆積から、古墳時代後期6世紀前半の溝と考えられる。曲流することから自然流路の可能性がある。

(4) 土坑

SK 1251 図版2 位置: XII M13

検出: 表土直下の第1検出面基本7層黒褐色シルト(標高335.17m)で検出。切り合いはない。規模・形状: 長径約0.75m、短径約0.64m、深さ約0.34m。埋土: 単層。基本7a層黒色シルト。遺物: 古墳時代後期の土師器片が出土。時期: 出土土器と隣接するSB02等との関連で、6世紀前半の遺構と考えられる。

SK 1260 図版2 位置: XII M10

検出: 表土直下の第1検出面基本16層にぶい黄褐色礫層(標高334.79m)で検出。SK1289を切る。規模・形状: 長径約0.34m、短径約0.28m、深さ約0.14m。埋土: 基本7a層の黒色シルト単層。遺物: 古墳時代後期の完形土師器杯1点が置かれた状態で出土。時期: 出土した土師器杯、隣接するSB02等との関連で6世紀前半の遺構と考えられる。

SK 1293 図版2 位置: XII M8・13

検出: SQ08埋土直下(標高334.96m)で検出。地山の一部となる明黄褐色から黄褐色シルトを掘り込む。SK1292を切る。規模・形状: 長径約3.40m、短径約2.18m、深さ約0.32m。埋土: 単層。黒褐色シ

ルトであるが地山の明黄褐色シルト塊や黄色微細礫が混じる。全体に拳大～人頭大礫が非常に多い。遺物：縄文時代前期土器片が出土。時期：縄文土器を含むが、黒褐色シルトの埋土、SK1292 との前後関係から、古墳時代後期の6世紀前半の遺構と考えられる。

SK 1294 図版2 位置：XII M13・14

検出：SQ08 埋土直下(標高 334.99 m)で検出。地山の一部となる明黄褐色から黄褐色シルトを掘り込む。SK1295 を切る。規模・形状：長径約 2.10 m、短径約 1.48 m、深さ約 0.80 m。埋土：黒色シルト単層。遺物：縄文時代前期土器片が出土。時期：縄文土器片を含むが、SQ08 直下であり黒色シルトの古墳時代後期相当の埋土であることから、6世紀前半の遺構と考えられる。

2 遺物

SB 02 図版6-39～42・44～47 写真103

39は坏C 1類で、口縁端部が短く外反する。40・42は坏C 3類で長い口縁部が大きく外反し、口縁部と胴部の境に段を有する。41は坏F類で、須恵器模倣形態であり、口縁が内傾し器面にミガキ調整を施す。46は長胴甕B類で、器面にハケ調整を施す。このほか小型甕44・45や、口縁の外反が強い壺C類47がある。その他、土製円板3点がある。土師器の破片を利用したものである。

時期：坏C 3類が出土していることから、2期と考えられる。

SK 1260 図版6-43 写真103

43は坏D類で、口縁部が内湾し底部は半球形を呈する。

時期：坏D類が出土していることから、SB02と同じ2期と考えられる。

第4節 小 結

縄文時代の遺構については、存在したとしても古墳時代後期に破壊されたようで、土坑数基を検出できずに止まる。土器・石器とも遺物量は少量であったが、早期中葉末の沈線文系土器、後葉の条痕文系土器が含まれ、前期初頭から前半期にまとまりがある。千田遺跡全調査区で縄文早期土器が出土したのは6区のみである。本遺跡の中で最も古い生活痕跡を認めた地点として、看過できない事例である。少数の土坑と磨滅した土器の小破片、少数の石器から想像して、生活拠点が存在したとするなら JR 飯山線に近い隣接地にあり、当地区に遺物が流れ込んだものと考えてよいであろう。

石組み粘土カマドを壁中央部に備え、床面に間仕切り溝があるSB02は、初期カマドをもつ典型的な住居跡である。長野県内の類例としては、長野市内の本村東沖遺跡、飯田市内の殿原遺跡、前の山遺跡など、5世紀後半代における各地域の中心的かつ先進的な集落に見られる。当地区のSB02住居跡は6世紀前半代であり、長野市・飯田市内の類似事例より時期が遅れるが、長野盆地以北におけるカマド構造を早い段階で受け入れた住居跡例と考えられる。また、この住居跡と1間×4間の掘立柱建物跡は並列して構築されていた。平安時代の東北地方において、竪穴住居に掘立柱建物が付設した構造の建物跡が数多く確認されているが、当遺跡の軒を並べた竪穴住居跡と掘立柱建物跡の性格付けについては、今後の検討が必要である。

第4章 1～5・7区の遺構と遺物

第1節 概要

本区は千曲川に面した段丘面上から、千曲川に向かって南東に傾斜する段丘崖に立地する。調査後の標高は約331.0mから、最低所は325.0mを測る。平成14年度に約8,000㎡を対象に発掘調査を行った。工程の大略は、千曲川側半分は南北方向に6本の試掘トレンチを入れ、遺物検出面を確認した後調査の状況に応じて、便宜的に上流側から下流側に1区から4区の調査区に分割して調査を行った。JR飯山線寄りの西側半分は5区と呼称し、上流の西側、下流の東側に2分割し、1～4区の調査後重機等の進入路を確保して調査を行った。

1・2区では現地表下約1.3mの黒色土層中から縄文土器片が確認され、面的な広がりをもって多量の土器片や石器・剥片類が出土することとなった。またこの黒色土層の下から、千曲川方向に落ち込む小さな谷状を呈する自然地形の凹部に堆積した遺物集中SQ04を確認することとなった。このSQ04にも多くの土器片や石器・剥片類が包含されていた。3区でも地表下約1.3mの黒色土層中から縄文土器片が確認され、1・2区以上に多量の土器片や石器・剥片類が過密状態に面的な広がりをもって出土した。また千曲川に落ち込む小さな谷状地形SQ05が確認され、その北隣に縄文時代の廃棄場SQ01を確認した。SQ05・01からも非常に多くの土器片や石器・剥片類が出土した。SQ04とSQ05は北西方向の2・3・5区の境界部分でひとつとなり、5区西側に広がるSQ06となる一体の遺構群である。SQ04・05を被覆する土層には多量の縄文土器破片が含まれているが、少量ながら古墳時代、古代の土器片も混じっている。従って古代以来の堆積層の可能性がある。

4区では1・2・3区とは異なり、現地表下約0.5mで千曲川方向に落ち込む段丘先端部が確認され、そこに延長約50m、深さ約3.5mに堆積した黒色土層帯SQ03を検出した。黒色土層からは非常に多くの縄文時代遺物が検出され、縄文中期を中心とした廃棄場であったことが明らかになった。このSQ03は昭和40年代の護岸工事でかなりの部分が破壊されていた。本来はさらに大規模な廃棄場であったと考えられる。

5区は東側と西側とは地形が異なる。東側はこれまでの1区から4区とは異なる段丘上の平坦面となり、耕土直下約0.2～0.3mほどの掘削で黄褐色土層の検出面となる。この第1検出面は標高331.5m前後、中央北壁の基本土層33・41・42・47・48・51・56類似層上面に相当する。これらの土層群は、黄褐色系のシルト、あるいは砂質に近いシルトであり、縄文時代以来の基盤層である。この一面で縄文時代から近世まで遺構検出した。5区東側に所在する遺構の記述では上記土層面の記載を省略し、それ以外の検出面の場合記載する。5区西側については2区や3区同様に現地表下約1.0mの黒色土層中から縄文土器、石器・剥片類が非常に多く出土し、下層からSQ06が検出された。当地区は千曲川寄りの傾斜面とは異なり、遺構の密集地域となった。

4区及び5区東側の下流に隣接する地区は平成17年度調査を行った。地区名を7区とし、5区側は段丘上、4区側は谷状地形となり、廃棄場SQ03の続きが検出された。14・17年度の2か年調査した全地区、

1・2・3・4・5西側・5東側・7区は、延長約200mとなった。

本調査地点は工程上大きく7地区に分割して調査を行ったが、地形的に段丘上の平坦面と段丘崖の傾斜地に分かれるものの、沢などで区分されるわけではなく千曲川に沿った一連の地形である。このため個々の調査区を区別せず、時代別、遺構種別に記載することとする。

本区で検出された遺構は、縄文時代は中期を主体とする廃棄場跡6、掘立柱建物跡1、陥し穴1、後期の墓跡21、古代は竪穴住居跡1、中・近世は柵列跡11、これらの各時代に及ぶ土坑約1150、溝9である。遺物は、縄文時代中期・後期土器、石器、土・石製品を主体に、遺物用コンテナにほぼ満杯に収納した状態で760箱に上る。

第2節 縄文時代

1 遺構

(1) 掘立柱建物跡

ST01 図版11・18 PL5 位置：3区XIII C18

検出：遺物集中SQ01の地山に当たる4層の砂質シルト精査中に円形プランを確認した。当初土坑としてSK番号を付番したが、掘立柱建物跡と確認されてからST01を付番し、ビット番号に改称した。記号の改称は次のとおりである。

SK1194 - P1, SK1211 - P2, SK1242 - P3, SK1243 - P4, SK1181 - P5, SK1154 - P6, SK1188 - P7, SK1163 - P8

切り合い：P6はSK1180、SK1210を切る。埋土：3層黒褐色シルト質壤土。柱跡部分の表面に暗黄褐色シルト、掘方埋土はにぶい黄褐色シルトが混入する。

規模・形状：1間×3間の8本柱で長軸はN-23.2°-Wの方向。芯々で桁方向6.6～6.3m、梁方向約2.8m。各ビットは掘方が径約60cmの大きさで、柱跡は径約30cmに揃えられているものと思われる。埋土はほぼ同一で、掘方の形状も、底面近くにテラスが全周するか片側のみテラスをもつ、非常に良く似たものである。当初、他に関連する遺構が見られないと思われたが、埋土の検討のなかで、周囲に同時期の径20～40cmの小さな土坑があり、本跡と関連する可能性がある。時期：埋土の特徴から縄文時代中期後葉に位置付けられる。その他：当初建物跡と考えたが、多少の軸のブレを考えると8本柱のモニュメント的建造物だった可能性が強い。ちなみに柱だけが8本立っていたとすると、春分秋分の日出・日没には8本の柱がすべて影を落とし、どの影も重なり合わない配置になっている。

(2) 土坑墓

5区東のVII X14に集中する平面形態が楕円形の土坑群21基である。いずれも第1検出面、標高約331.7mにて検出された。SM01・08から糞被葬に転用された堀之内2式期の鉢・浅鉢形土器が出土し、墓跡であることと時期推定の根拠となる。他の土坑から埋葬に関わる確実な遺物は出土しなかったため、時期はSM01・08とほぼ同時期と推定し、時期の記述は略す。

SM01 図版16・19・20 PL5 位置：5区東VII X14

切り合い：なし。埋土：単層でにぶい黄褐色シルトブロックや炭化物粒を含む灰黄褐色シルト。規模・

形状：長径 88cm、短径 62cm、残存深さ 24cm を測る。わずかに北方向に振れるがほぼ東西方向を示す。西隅に浅鉢が逆位で置かれ、南北下端に沿って東西方向に 10～20cm 大の礫が 10 個並べられた痕跡を残して出土した。遺物：混入遺物片はわずかで、堀之内 2 式新段階と考えられる逆位で出土した浅鉢がこの墓の時期決定資料となる（図版 37 - 212）。時期：縄文後前期葉。

SM 02 図版 16・19・20 PL 5 位置：5 区東ⅦX14

切り合い：SM03・17 を切り、SK219・220・247・463 に切られる。埋土：複層で灰黄褐色シルトや褐色シルト・黒褐色シルトで構成されるが、灰黄褐色シルトが基本埋土。規模・形状：長径 200cm、短径 94cm、残存深さ 38cm を測る。わずかに北方向に振れるがほぼ東西方向を示す。径 20～50cm ほどの礫が北壁沿いに 1 個、南壁から 20cm ほど北側に離れた南北方向に 5 個の礫が並んで残っていた。南側の状況は埋土から判断して、意図的に壁から離れて並べられた後、この間に土を埋め戻して墓を構築したものと考えられる。遺物：縄文土器破片。

SM 03 図版 16・19・20 位置：5 区東ⅦX14

切り合い：SM18 と切り合い、SM02、SK218・247・328・435・1138 に切られる。埋土：複層で黒褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、灰黄褐色シルトなどが埋土。規模・形状：長径 284cm、残存部短径約 50cm、残存深さは 32cm を測り、主軸はほぼ東西方向を示す。配石などはなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 04 図版 16・19・20 PL 5 位置：5 区東ⅦX14

切り合い：なし。埋土：単層で地山の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径 140cm、短径 74cm、残存深さ 32cm を測り、主軸はほぼ東西方向を示す。配石などはなかった。SM06 を切り、SK94・97・100・1122 に切られる。遺物：西側端部で縄文土器破片が出土。

SM 05 図版 16・19・20 PL 5 位置：5 区東ⅦX14

切り合い：SM06 を切り、SK350 に切られる。埋土：複層で黒褐色シルトや灰黄褐色シルトが埋土。規模・形状：残存部長径 106cm、短径 100cm、残存深さ 18cm を測り、ほぼ北西～南東方向を示す。配石として壁に沿って径 20cm 前後の礫が 4 個、崩れたであろう礫が 1 個、本跡に関連する礫と考えられる礫が SK350 内から出土した。遺物：西側端部で縄文土器破片が出土。

SM 06 図版 16・19・20 位置：5 区東ⅦX14

切り合い：SM04・05 に切られる。埋土：単層で地山の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径 74cm、残存部短径 32cm、残存深さは 24cm を測り、主軸は南北方向を示す。配石の 1 個と考えられる礫がほぼ中央に埋没し、また伏鉢があったかと思わせる土器片が SM05 の配石下部外側から出土している。このことから SM05 との先後関係がわかる。遺物：切り合い関係にある SM05 の列石下部外側から縄文土器片が出土している。

SM 07 図版 16・19・20 PL 5 位置：5 区東ⅦX19

切り合い：なし。埋土：単層で地山の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径 94cm、短径 52cm、残存深さ約 24cm を測る。主軸はほぼ北東～南西方向を示す。伏鉢の可能性のある土器片が北東隅から出土。北西壁や南東壁に沿って径 20cm 前後の礫が 7 個配石として検出された。SM01 に類似した構造である。遺物：北東端部から縄文土器破片が出土。

SM 08 図版 16・19・20 PL 6 位置：5 区東ⅦX19

切り合い：なし。埋土：単層で地山の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・

形状：残存部長径128cm、短径72cm、残存深さ48cmを測る。主軸はわずかに東方向に振れるが北東～南西方向を示す。南西隅には伏鉢が置かれていた。SM01・07のような配石はまったくなかった。遺物：南西端部から堀之内2式の鉢形土器が逆位で出土（図版37～213）。時期：縄文後期前葉。

SM 09 図版16・19・20 位置：5区東VII X 19

切り合い：なし。埋土：単層で地山土の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：残存部長径88cm、短径62cm、残存深さ18cmを測る。主軸はわずかに北方向に振れるが北東～南西方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 10 図版16・19・20 位置：5区東VII X 19

切り合い：なし。埋土：単層で地山土の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径138cm、短径約80cm、残存深さ約10cmを測り、主軸はわずかに東西方向に振れるが北東～南西方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 11 図版16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM12、SK1135を切る。埋土：単層でにぶい黄褐色シルトブロックや炭化物粒を含む灰黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径112cm、短径58cm、残存深さ14cmを測る。主軸はわずかに東方向に振れるが南北方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 12 図版16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM11、SK112・261・316に切られる。埋土：単層で地山土の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径90cm、短径66cm、残存深さ10cmを測る。主軸はわずかに西方向に振れるが南北方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 13 図版16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SK271・310・353に切られる。埋土：単層でにぶい黄褐色シルトブロックや炭化物粒を含む灰黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径推定90cm、短径42cm、残存深さ20cmを測る。主軸はわずかに東方向に振れるが南北方向を示す。伏鉢や列石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 14 図版16・19・20 PL 6 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM15・16・17を切る。埋土：複層で灰黄褐色やにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径推定104cm、短径75cm、残存深さ10cmを測る。主軸はわずかに北方向に振れるが東西方向を示す。20cm以上の礫が埋まっていたが、配石の残存であろうか。伏鉢を想定する土器の出土はなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 15 図版16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM14、SK99・343・344・352・449に切られる。埋土：単層でにぶい黄褐色シルトブロックや炭化物粒を含む灰黄褐色シルトが埋土。規模・形状：残存部長径112cm、短径96cm、残存深さ14cmを測る。主軸は北東～南西方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 16 図版16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM17、SK1142を切り、SM14、SK277に切られる。埋土：単層で地山土の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：長径推定84cm、短径76cm、残存深さ24cm。ほぼ円形。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 17 図版16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM02・14・16に切られる。埋土：単層で地山土の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい

黄褐色シルトが埋土。規模・形状：残存部長径 88cm、残存部短径 52cm、残存深さ 12cm を測る。主軸はわずかに北方向に振れるが東西方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 18 図版 16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM19 を切り、SM03 と切り合う。SK218・219・435・439・440・1143 に切られる。埋土：複層で地山土の黄褐色シルトブロックや炭化物を含む灰黄褐色シルトが埋土。規模・形状：残存部長径 106cm、残存部短径 84cm、残存深さ 38cm を測り、主軸はほぼ南北方向を示す。伏鉢配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 19 図版 16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM20・21 を切り、SK439・440・1143、SM18 に切られる。埋土：単層で地山土の黄褐色シルトブロックや黒褐色シルトブロック、ごくわずかに炭化物を含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：残存部長径 100cm、短径 68cm、残存深さ 20cm を測り、主軸はほぼ北西～南東方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 20 図版 16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM21 を切り、SM19、SK109・252 に切られる。埋土：単層でにぶい黄褐色シルトブロックや炭化物粒を含む灰黄褐色シルトが埋土。規模・形状：残存部長径 88cm、短径 108cm、残存深さ 36cm を測り、主軸はほぼ北東～南西方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

SM 21 図版 16・19・20 位置：5区東VII X 14

切り合い：SM19・20、SK141・152・433・1156 に切られる。埋土：単層で地山土の明黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトが埋土。規模・形状：残存部長径 92cm、短径 90cm、残存深さ 20cm を測る。主軸はわずかに北方向に振れるが北西～南東方向を示す。伏鉢や配石はまったくなかった。遺物：縄文土器破片。

(3) 土 坑

土坑については、時期・性格が推定できるものに限って記載する。陥し穴や遺物を埋納した土坑等を先に記述し、規模・形状、柱痕跡から掘立柱建物跡の柱穴となる可能性のある土坑はまとめて番号と位置、法量を簡略に記す。

SK 03 図版 13 位置：3区XIII H04・09

検出：南向き斜面で地山の黄褐色に近い暗褐色土層に、黒褐色土の不整な長楕円形のプランが確認される。埋土：SQ01 と同じ堆積状況を示す。2層・3層の間に礫と炭化物を含む層を挟み、北側壁際に暗黄褐色砂を多く含む層が堆積する。それぞれ自然堆積であり、その中に遺物、礫、炭化物が流れ込んだ状態で出土した。北(SQ01の位置する側)から南に流れ込んだ状況がわかる。3層は明確に立ち上がりがあるが、1・2層部分は明確ではない。規模・形状：227×135(最大)×82cmの不整長楕円形を呈する。斜面に合わせて南北に長い。壁面は北側から階段状に徐々に傾斜していく。中央がもっとも深く、両側がテラス状にやや高くなっている。遺物：大きな土器片が北側から流れ込むように何点か見られる。遺存状態が悪く表面がボロボロの状態となっていた。加曽利E式系土器であろう(図版23-1)。他に石礫2点がある。時期：出土土器により縄文中期終末から後期初頭と推定される。特徴：人為的に掘られた土坑であろうが、その用途は明確ではない。SQ01の南側斜面に形成されていたことから、SQ01に付属する廃棄坑の可能

性もある。

SK 27 図版 18 PL 3 位置：3区XIIIH04

検出：SQ01の上層を埋土にもつSK14の下層で検出。検出面から深さ85cmで平らな底面が現れたが、その中央にも円形の杭跡と思われる、黒褐色土のプランが現れた。掘り下げるとその先端から黒曜石剥片が出土した。埋土：SQ01の3層に炭化物が混入する土層で、埋土中位壁際には炭化物が集中する。規模・形状：109×84cmの楕円形を呈し、深さ最深で85cmを測る。南側に30cm台形状に張り出した深さ24cmのステップ状の段差が付く。長軸はN-35°-W。壁面は上面から74～78°の角度をもって底面に向かって掘り込まれている。底面ほぼ中央には、10×8cmのほぼ円形の杭跡と思われるピットが穿たれていた。先端には円形の掘り込みがあり、深さは先端で33cmを測る。遺物：底面より10cmほど上層で羽状縄文土器破片が出土した。時期：出土土器により、縄文前期前葉から中葉になると予想される。特徴：形状、底面の杭跡からみて、陥し穴であろう。等高線に長軸を直交させるのではなく左右に45°振る形で設置されている。中央にある杭跡は明瞭である。南側にある切り出しのようなステップは、深い土坑を掘る際手が届かなかったため、カットしたのではないだろうか。

SK 79 図版 7 位置：4区XIII E 01

検出：SQ03の1層を掘り下げていくと、2層上面に焼土化した土がリング状の円形に現れた。埋土：SQ03の1層が上部に入り込み、壁面に硬い橙色焼土、暗赤褐焼土が形成される。下部のパウダー状炭化物を多く含む層の中からは、大形土器片が重なり合う形で出土した。特に土器上面には多量の炭化物が載っていた。土器表面にも煤、炭化物がそれぞれ付着し、土器上で火が焚かれたものと思われる。土坑内で火が焚かれたのは、大きくは2回である。規模・形状：壁面が焼けている50×47cmの円形土坑。深さは北側最深部で16cm。被熱部は2回とも3cmの幅をもつ。遺物：縄文中期末葉から後期初頭土器が出土(24-30)。時期：検出層位、遺物から縄文中期末葉から後期初頭と考えられる。特徴：SQ03内に位置し、廃棄行為に伴う焼き火遺構であろう。南側が焼けていないため、南側から焚かれたものと考えられる。中で何が焼かれたかは不明である。土器を入れながら火を焚く行為を繰り返したと推定される。

SK 248 図版 16 位置：5区東VII X 14

検出：耕土直下の第1検出面、標高331.7m。切り合いはない。埋土：単層。埋土は地山のにぶい黄褐色シルト土ブロックと炭化物粒を含む灰黄褐色シルト。規模・形状：長径40cm、短径30cm、残存深さ20cm。遺物：石皿や礫が入っていた。時期：石皿及び埋土から縄文時代。

SK 891 図版 14 PL 6 位置：5区東XIII D 02

検出：耕土直下の第1検出面、標高331.9m。切り合いはない。埋土：単層でにぶい黄褐色シルトブロック土や炭化物粒を含む灰黄褐色シルト。焼獣骨片が多く混在していた。規模・形状：長径70cm、短径40cm、残存深さ10cm。遺物：中央付近に長径25cm、短径20cm、深さ10cmほどの凹みがあり、その凹みと南西隅の間に石皿が立った状態で埋っていた。時期：埋土と石皿から縄文時代。

SK 1061 図版 14 位置：5区東XIII D 02

検出：耕土直下の第1検出面、標高331.7m。切り合いはない。埋土：単層である。炭化物粒や1cm大の礫が入り、焼獣骨片が多く入る黒褐色シルトである。規模・形状：長径55cm、短径45cm、残存深さ約15cm。遺物：ほぼ中央に土器が据えられた状態で出土した(図版37-211)。出土時には上半部分欠損していた。時期：据えられた土器から縄文後期前葉。

SK 2036 図版 17 PL 6 位置：7区VII Y 16

検出：黄褐色砂質シルト上面で検出された。切り合いはない。埋土：底面から緩く立ち上がる壁面に沿って、炭を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト、上層は灰黄褐色砂質シルトが埋土。規模・形状：長径92cm、短径85cmのほぼ円形、深さ40cmを測る。遺物：検出面近くに後期初頭の大形深鉢半分程度の破片が横に寝かせた状態で埋納されていた(図版42-307)。確実に土坑墓とはいえないが、注意される。
時期：出土土器から、後期初頭の新しい時期。

掘立柱建物跡の柱穴の可能性のある土坑(図版8・11・13)

- SK 24 : 3区XIII C24、直径21cm、円形、深さ24cm、縄文中期後葉か。
 SK 26 : 3区XIII H04、41×33cm、ほぼ円形、深さ36cm、縄文中期後葉か。
 SK 28 : 3区XIII C23、42×24cm、楕円形、深さ31cm、縄文中期後葉か。
 SK 29 : 3区XIII C23、直径30cm、円形、深さ17cm、縄文時代中期後葉か。
 SK 30 : 3区XIII C23、45×35cm、楕円形、深さ38cm、縄文中期後葉か。
 SK 35 : 3区XIII H03、65×45cm、長楕円形、深さ37cm、柱痕跡は直径約15cm、SK67を切る、圧痕隆文土器、加曾利EⅡ式新段階土器片。
 SK 38 : 3区XIII C23、直径33cm、円形、深さ25cm、柱痕跡は直径10cm、最深43cm、縄文中期後葉か。
 SK 40 : 3区XIII C23、31×24cm、隅丸長方形、深さ25cm、SK41を切る、縄文後期前葉か。
 SK 45 : 3区XIII C24、直径約28cm、円形、深さ27cm、縄文後期前葉か。
 SK 46 : 3区XIII C24、直径約26cm、円形、深さ24cm、柱痕跡直径10cm、縄文後期前葉か。
 SK 50 : 3区XIII C24、47×32cm、不楕円形、深さ30cm、柱痕跡15～20cm、縄文後期初頭か。
 SK 52 : 3区XIII C24、43×29cm、楕円形、深さ18cm、縄文後期初頭か。
 SK 54 : 3区XIII C24、57×39cm、不整長楕円形、掘方深さ14cm、柱痕跡深さ23cm、径20cm、縄文中期後葉・後期初頭か。
 SK 69 : 3区XIII H04、44×30cm、楕円形、深さ21cm、柱痕跡径15cm、縄文中期後葉・後期前葉か。
 SK 71 : 3区XIII H03、直径36cm、円形、深さ23cm、縄文中期後葉か。
 SK 1249 : 3区XIII H04、36×25cm、隅丸方形、深さ36cm、柱痕跡径20cm、縄文中期後葉・後期初頭か。
 SK 656 : 3区XIII C13・18、楕円形、SK1092に切られる。縄文後期前葉か。
 SK 659 : 3区XIII C18、円形、柱痕跡径25cm、SK1093を切る。1層目から石皿・磨石セット出土。縄文後期初頭か。
 SK 661 : 3区XIII C18、円形、柱痕跡径15cm、縄文後期前葉か。組む柱はSK665・667が想定。
 SK 665 : 3区XIII C18、楕円形、柱痕跡径10cm、縄文後期前葉か。組む柱はSK661・667が想定。
 SK 669 : 3区XIII C17・18、楕円形、柱痕跡径20cm弱、SK1238を切る。中央に20cm大石蓋状態。土器片多量、復元可。縄文後期前葉。
 SK 1070 : 3区XIII B22、円形、柱痕跡径35cm、打製石斧、加曾利B式土器片出土。

(4) 溝跡

SD 08 図版14 位置：5区東VII X 21

検出：5区東側でも本跡付近の検出面は、第1検出面である中央北壁基本土層とは異なり、川砂堆積地

域となり、川砂面に溝や穴が掘られている。SK453・979・1069・1218に切られる。埋土：単層で黒褐色・褐色・黄褐色の砂が混在したものである。規模・形状：ほぼ北から南方向の溝でSK453に切られた先では確認できなかった。調査区内では5.5m、幅1m、深さ5cm前後を測る。遺物：縄文土器片が出土。時期：出土土器から縄文時代の溝の可能性はあるが、断定できない。

SD 09 図版15 位置：5区東VII X 22

検出：耕土直下の第1検出面、標高331.8mで検出された。SK1201・1247・1248に切られる。埋土：単層で黒褐色・灰黄褐色・黄褐色シルト土が混在して埋土となる。規模・形状：ほぼ北東から南西方向の小さな溝である。長さ3.3m、幅約25cm、深さ10cm前後を測る。遺物：縄文土器片が出土。時期：出土土器から縄文時代の溝の可能性はあるが、断定できない。

(5) 廃棄場

SQ 01 図版8・11 PL 3 位置：3区XIII C23・24、XIII H03・04・09、5区西XIII C12・13・14・17・18・19・23

検出：表土を除去すると多くの土器片が現れた。耕土直下層（0層）の下層から遺構となる。SQ05に向かい北側の5区から南側の3区にかけて南西向き斜面に形成されている。3区は同じシルト質壤土層で、5区は2～4cm大の礫が30%混入した土層が一面に広がる。埋土：3分層される黒褐色シルト質壤土が堆積する。4層目は砂質が強く、灰黄褐・黄褐砂が40%混入した自然堆積で遺物は含まれない。ただし3区南西側一部分は4層面から遺物が出土したため、SQ02として本跡と区別した。5区部分は基本的に3区の堆積に類似するが、上層2層に砂利を含む層が見られる。3区では北西側を中心に5～10cm大の礫が遺物とともに、40×50cmの範囲でいくつかまとまりをもって検出された。5区とは密集度が異なり性格の違いが予想されるが、すべてが人為的な所産ではなかろう。礫下部の遺物集中に伴う溝は人工的なものではなく、自然流水の痕跡の可能性が高い。規模・形状：北西～南東にかけて全長約32m、幅は北側で約12m、中央で約10m、南側で約6mと、千曲川に近づくと細くなる。南西側の南部は攪乱を受け、さらにSQ05側に延びていた可能性がある。埋土堆積中、または埋土堆積以前に掘られたと思われる土坑を伴った遺構であり、3区北側半分と5区全体に満遍なく土坑が分布する。土坑は時期差があり、3区は縄文中期後葉14、後期初頭24、後期前葉24と中期のものがやや少ないが、各時期大差なく北側を中心に分布している。5区の土坑は掘立柱建物跡ST01をはじめ、西側を中心に縄文中期後葉55基が見られ、その東側を中心に後期前葉20基、また全体に点在して後期初頭が24基見られる。また自然流路と思われる中期後葉型埋土をもつSD07も東側に存在する。土坑の規模は全般に3区が小さく5区が大きい。3区と5区の境界部分は土坑の空白部となっているが、攪乱されており本来土坑群が分布したであろう。南北の接触部分は小形土坑が多く、この部分にも各時期の土坑が存在した可能性が高い。遺物：1・2層を中心に加曽利E式期から堀之内式期までの多量の土器が出土した（図版38～216～230）。包含層の形成終了時期は後期前葉であろう。打製石斧、石鎌を中心とする多量の石器、骨片が見られる。4区の廃棄場SQ03の遺物出土状況と比べると破片が小さく、石器の剥片・碎片などは少ない。骨片も小さく少量である。SQ03が人為的な廃棄行為による所産であるならば、SQ01は自然営力による遺物の移動があった可能性がある。南東端1層から小形磨製石斧、中央付近3層から粘板岩製垂飾が出土している。5区中央部分からは、砂利層に混じってメノウ製垂飾が出土した。時期：3区は縄文中期後葉加曽利E式土器後半を中心として遺構は後期前葉にわたる。5区も縄文中期後葉が中心となる。土坑は3区では各時

期のものがあり、5区では縄文中期後葉が中心で、時期幅は同じ。特徴：南西向き傾斜地を利用した廃棄場である。その中に分布する土坑はそれぞれに性格は異なるだろうが、建物の柱穴でもゴミ穴でも、一連の廃棄行為に関わって何らかの意味を持つ遺構であろう。

SQ 02 図版 13 位置：3区XIIIH03・04

検出：SQ01の1～3層を掘り切り、地山と思われた砂質が強い4層の上層に礫と土器片を検出。3区南西側一部分のみではあるが、上層のSQ01と区別してSQ02とした。SQ05に向かう南西向き斜面に形成されている。埋土：SQ01の下層に形成された廃棄場である。4層の上層のみに遺物が含まれ、最深部でも15cm以上の深さはない。規模・形状：南北約5m×東西約2mの範囲で認められた。本来はもう少し南西側に広がっていたものと思われるが、攪乱のため不明である。遺物の出土レベルから、標高約328.7m付近に広がっていたものと思われる。遺物：土器片は少なく、20～40cm大の礫が北側3×2mの範囲に集中する。南側は石礫を含む小破片が散在するのみで、自然営力による所産かもしれないが、北側は人為的なものであろう。時期：SQ01の下層に検出されたため、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

SQ 03 図版 7・21 PL 4 位置：4区XIII D10・14・15・18・19、E01・02・06・07・11、5区VII Y22

検出：表土を取り除くと、黒褐色土層中に多量の土器片が現れた。当初千曲川に向かう斜面に帯状に残った自然の落ち込みかと考えたが、黒褐色土の範囲が広がり遺物量も増加する一方であり、大規模な廃棄場と認識を改めた。剥片、焼獣骨片も多量に伴っていたため、2mグリッドを設定して取り上げた。剥片・碎片集中(XIII A04)、土器片集中(XIII B・C04)、獣骨集中(XIII C・D03)には、それぞれのまとまりがみられた。土器の小破片は、XIII A04・05～XIII C04・05・06、XIII A06～XIII B06に集中していた。XIII A06、XIII B05・06、XIII C04・05は、昭和40年代の護岸工事等で部分的に攪乱されている事がわかった。埋土：中央ベルト、西側ベルトの断面図に詳細を記した。斜面堆積した遺物包含層はもっとも厚い部分で深さ3.5mを測る。基盤層を含め17ないし18層に分層できるが、3層群に大別できる。ほとんどの層が北西方向からの流水作用、旧斑尾川の洪水でもたらされた堆積物であろう。基盤層は、千曲川が浸食・堆積を繰り返し形成された層であろう。黒褐色シルト質壤土を主体とした層に、交互に灰黄色・にぶい黄褐色シルトを20%以上混入する層が入り込む。人工遺物は1層～12層まで間層を挟みながら、ほぼすべての層で出土した。上層1～6b層は多量の遺物が出土し、下層は1～2層おきに縄文前期の土器片が10数点ずつ出土したのみである。13層以下から人工遺物は検出されなかった。断面図をやや詳細にみると、中央部は上層1～6層がシルト質壤土、中層6a層がシルト、9b・d層がシルト質壤土、下層は11・12・15層のシルトの間に16層シルト質壤土が介在する。西側は表土1層から、堆積層の中ほどにあり10層まではシルトである。直下に位置する11・12層は壤土、下層の13～17層は壤土16層を挟んでシルト質壤土となる。2か所の断面の土層対比関係は、A-A'の9b層がB-B'の12層、以下9層が13層、11層が14層、12層が15層、13層が16層、15層が17層、基盤層の17層が18層にそれぞれ対比される。遺物包含層の時期：発掘現場における所見ではA-A'では6b層が縄文中期後葉、9a層が縄文前期第1包含層、9層が同第2包含層、12層が同第3包含層とされる。B-B'では13層が縄文前期第2包含層、15層が同第3包含層とされる。層位を記して採取された土器を観察すると、A-A'では1層から9層で縄文土器が取り上げられ、ほとんどが中期末葉加曽利E III・IV式に属す。後期では5a層から堀之内I式、前期では1・4・8・9層から諸磯c式、5層から繊維土器が出土している。

B-B'では3層から13層で有尾式から加曾利B2式まで縄文土器が取り上げられ、中期末葉から後期前半期は型式が連続している。もっとも新しい加曾利B1・2式は3・4・10・10-1a・12層から出土している。前期では有尾式が6a層、諸磯c式が4層から出土している。称名寺式中頃の個体は9・10-1a・12層から出土した破片が接合した。従って大局的には発掘時点の見解は首肯されるものであろうが、細部にわたって土器型式の編年序列と対応する層序ではない。規模・形状：千曲川に沿う形で、全長40m以上、先端は護岸工事の攪乱を受けているが最大幅10m、深さ最深4m（層厚2.85m）で、中心はXIII E01あたりである。南東方向に向かって傾斜した帯状に延びる遺構である。南東への傾斜角度は当初（基盤層）は45度であったが、最終的には約30度になる。

遺物：上層半分から縄文中期後葉の加曾利E式系土器が8割、その他系統の土器が出土した（図版24-30～36-208）。石器では打製石斧、磨製石斧をはじめとし、石鏃、石錐、石匙などの剥片石器類、石皿、磨石、凹石、敲石、多孔石、石錘などの礫石器類も多量に出土した。チャート・黒曜石の剥片・破片も上層を中心に、多量にまとまりを持って出土した。かなり細かいものまでまとまって出土していることから、この場所で製作されたか、他所で製作されたとすれば、敷物の上で製作した後敷物ごと運んで廃棄したと推定される出土状況である。焼獣骨には、カモシカまたはニホンジカの鹿角、タヌキの肩甲骨、イノシシの下顎骨などが含まれ、これらもそれぞれまとまりをもって検出されている。上層および先端の攪乱部分には、縄文後期初頭の称名寺式土器、三十稲場式土器、前葉の堀之内式土器、中葉の加曾利B式土器も混入している。土製品としては、土偶、ミニチュア土器、三角壘形土製品、土偶、土製耳飾、土製垂飾、土鈴、土製円板等がある。石製品としては、ヒスイ製垂飾、石棒等が出土している。下層半分からは、間層を挟み3面から縄文時代前期中葉の有尾式、織維土器を含む羽状縄文等を施す土器が計40片と、9'層から蛇紋岩製の磨製石斧が1点出土し、その下層からも2点出土している。南西端部分近くから、同時期と思われる塊状耳飾の破片も出土している。特徴：千曲川に向かって行われた儀礼的行為を含む廃棄行為の所産であろう。下層の縄文前期の堆積物は自然の営為によるところが大きいが、上層の中期後葉の堆積は明らかに人為的に行われたものである。その中でヒスイ製垂飾、ミニチュア土器、石棒等を用いた儀礼的行為が行われていた可能性もある。火の焚かれたSK79と夥しい焼けた獣骨の集中、獣皮などで運搬され一括して廃棄された可能性のある黒曜石・チャート剥片・破片の集中なども、それとの関連で捉えるべきであろう。

SQ04 図版8・12 PL3 位置：2区XIII H01・06・07・11・12

検出：第2検出面である中央北壁基本土層1層の黒色シルトとその直下層との接点、標高328.8mで検出された。切り合いはない。埋土：基本土層1層に覆われ、何層ものシルト質に近い黒色または黒褐色の粘質土や砂質土が堆積していた。規模・形状：ほぼ北西から南東の千曲川方向に傾斜し、北側で幅約1.6mを測り、北から約4.5mの位置で南西方向に2mほど張り出す形状となり、ここで幅約5.9mとなる。2区内での上端の高低差は約0.8mで、下端の高低差は2.0m以上である。深い部分では、上端と下端の高低差は1.5m以上ある。北西方向の3区と5区西側との接点部分でSQ05と一体となり、北側に幅広く展開するSQ06に連なる。遺物：縄文中・後期土器片（図版23-7～12）や打製石斧などが出土した。東側上端の落ち際からは焦げた凹石が出土した。時期：縄文時代から古代にかけてのもので、中世に至りSQ04・05共々埋没して平坦な地形になったようである。

SQ05 図版8・12 PL3 位置：3区XIII H02・03・07・08

検出：SQ04と同じ第2検出面。中世溝SD03に切られる。埋土：SQ04同様に中央北壁基本土層1層

や中世砂に覆われ、何層ものシルト質に近い黒色あるいは黒褐色の粘質土や砂質土が堆積していた。規模・形状：千曲川方向に傾斜し、調査区内では北から約7.5 mを調査した。幅は北側で約4 m、南側で4.5 mとなる。3区内での上端の高低差は約0.8 m、下端の高低差は2.1 m以上である。深い部分では、上端と下端の高低差は2.3 m以上あり、千曲川に近づくほどV字状となる。3区と5区西側との接点部分でSQ04と一体となり、北側のSQ06に連なる。遺物：縄文前・中・後期土器片（図版23 - 19・20）や、打製石斧・石鏃など多数が出土した。また上層ではわずかに古代の土師器が出土している。時期：V字状に深い地形を呈していたのは縄文時代であり、弥生時代以降、古代には浅い窪地状となっていたようである。中世に至り埋没して平坦地形になり、SD03などが掘られたと考えられる。

SQ06 図版8 位置：5区XIII B15・20・25、XIII C06・07・11・12・16・17・21・22

検出：表土50 cmを取り除くと、黒色土層中に多量の土器片、石器が現れてきた。XIII C16では25 cm、XIII C16・21では35 cmほどで遺物が出土した。埋土：上・下2層に分層できる。遺物の取り上げは、第1面、第2面とした。第2面において、XIII B15・20、VIII C11.12を境にして、北側が黒色土、南側がやや赤みのある赤黒色土となっていた。水の作用で鉄分の集積が異なり色調に反映したか。南側先端部はオリブ黒色を呈する。規模・形状：北西～南東方向に伸び、北西部分で幅約18 m、中央最大幅約20 mを測るが、南東先端部分で幅約10 mとなる。長さは現状で約22 mを測る。北西側に遺構が広がる可能性があるが、地形的に見て不整形円形を呈する可能性が高い。中央東側のみ30 cmほどの段差があり境界は明確である。その段差によって廃棄場SQ01との遺構境界とした。埋土も東側は径2～4 cm大の礫が30%混入し区別される。遺物：縄文後期末葉屈之内式期が主になる。夥しい土器が出土した（図版37 - 214、38 - 231 - 40 - 293）。付番取り上げた石器は、打製石斧327点、スクレイパー54点、石皿22点、石鏃13点、石核9点、磨製石斧8点、凹石8点、多孔石8点、敲石7点、石錐4点、磨石1点、砥石1点、石槍2点、石柱1点がある。時期：多量の土器片は上・下層とも屈之内式の所産となる。しかしXIII B15、VIII C11に所在するSK655からは縄文中期末葉加曾利E式後半の土器が出土し、下層は中期末葉期から存在した可能性がある。特徴：自然の沢状の地形を利用した廃棄場である。土器群が集中する北東側は人為的な廃棄行為が行われたと考えられるが、そのほかの場所は明確ではない。XIII C11には長さ40 cmほどの石柱が倒れた状態で検出されており、儀礼的な行為も行われていた可能性を示唆している。当初SD06はSQ06下部の遺構と思われたが、遺物分布状況、地形変換点等を考え合わせてみると、SD06はSQ06の西側境界を画する可能性もある。

2 遺物

(1) 縄文土器

A 土器の出土状況

1・2・3・4・5・7区は沢等で地形的に区分されているわけではなく、地区間で主体的な時期に多少のずれはあっても縄文中期末葉から後期前半に集中するため、一連の調査地点出土遺物として報告する。住居跡が確認されない地点ながら、石器等を含む縄文時代の遺物量は整理着手前でコンテナ数750箱に上り、住居跡50軒を検出した8区の600箱弱を上回る。

千曲川上流側の1・2区は調査範囲が狭く、並走するSQ04・05から遺物が出土したが、1～5・7区の中では遺物量は最も少なく、相対的に後期前半土器の占める比率はやや高い。4区と7区斜面部には、千曲川に沿った遺物包含層の層厚3 mに達する密度の高い廃棄場SQ03が形成され、中期末葉土器が圧倒

的に多く出土した。SQ03の遺物量は本地区全体の過半数を占める。磨滅の見られない大形破片も目に付く。包含層には土器とともに、チャート石核・剥片類、打製石斧、磨石等と、破損した台石と思われる摩耗面をもつ礫破片が多量に含まれていた。5区東から7区平坦部は後期前半の墓域が営まれていた区域であり、当該期の土器が相対的に多く、後期後半土器も見られる。5区西は幅約20mに及ぶ凹地状のSQ06から中期末葉、後期前半の土器が出土した。6区で出土した前期前半土器が少量見られる。磨滅した破片も含まれ、西側の斜面上方から投棄されたか流れ込んだと推定される。

B 縄文中期末葉～後期土器の分類と概要

第1群縄文早期土器、第2群縄文前期土器については、第3章第2節2で類別を記した。中期前・中葉については第5章で詳細を記すこととし、本地区で資料が充実している中期末葉から後期土器の分類について述べる。中期末葉の加曾利EⅢ・EⅣ式期には、他に唐草文系土器第3・4段階、在地的な多連渦巻文土器、大波状口縁土器、圧痕隆帯文土器第Ⅰ・Ⅱ群、外来的な大木9・10式系土器、串田新式系土器、沖ノ原式系土器、粗製の縄文施文土器、条線文土器、無文土器などの深鉢形土器と、両耳竈などその他の器種がある。これらの中期末葉土器群を第Ⅶ群土器とし、各系統を類として分類する。後期土器は称名寺式期の土器群が最も多く、堀之内Ⅰ式期がこれに次ぐ。堀之内Ⅱ式期以降は散発的な出土となり、後期末葉まで断続している。それらの後期土器群を第Ⅷ群土器とする。前期の第Ⅱ群同様に、初頭から末葉まで5期区分して類別する。後期土器については時期幅が長いので、深鉢形以外の器種も各類に含める。一部の土坑出土遺物以外、廃棄場または遺物包含層出土であるため、編年序列に沿った分類に従って実測個体を中心に例示し、第Ⅶ群土器は4区SQ03出土資料を中心に概要を記述する。上記の分類に適合せず、説明を省いた個体が少なくないことを断っておく。

C 第Ⅱ群：縄文前期土器 図版23-14～16・19、30-75・76、33-128・134、38-216～221・231・232

第1～3類に属す羽状縄文土器と有尾式は3区SQ01・02(14～16・19)、4区SQ03(75)、5区SQ01(216～219)で出土した。第4・5類の諸磯a式は4区SQ03(128)、下鳥式・晴々案式は同地区(134)と5区SQ01(220・221)・SQ06(231・232)で出土した。浅鉢(76)も見られる。

D 第Ⅶ群：縄文中期末葉土器群

第1類：加曾利E式系土器

図版24-34、30-80は8区でふれる第Ⅵ群6類、加曾利EⅡ式に属すキャリバー形深鉢である。34・80は高い隆帯で口縁部に渦巻文を描き、胴部は縄文施文後縦位沈線を施文する。本地区ではごく少数である。

a種：加曾利EⅢ式 図版24-35～37、25-38～40、30-81・88、31-103、32-109・120、34-145～149・157、35-163・165、41-295・296 PL7・8

口縁部文様帯をもつ深鉢をa1種とする。35～37、81・88・103・157・165などがある。35は口縁部渦巻文が退化して横位区画文が横に流れ、36は渦巻文が消失し、胴部は充填縄文となる。125は頸部に刺突列が廻る。

口縁部文様帯がない深鉢をa2種とする。沈線で波状文、楕円文、U字状文、蕨手文などを描くものには、38・39・109・120・145～149などがある。40・295・296は縄文を横位施文して無文部を残す在地的な個体。低い隆帯を描線とするものは大部分が把手を有するため、第6類a種に含めた。

b種：加曾利EⅣ式 図版25-42～26-45、31-92・97・102・104、32-106、33-

127・139～34－144・151・153、38－222・233・237・239、40－286 PL 7・10

沈線で渦巻文、楕円文、U字状文などを描く222・233・237・239、単純な縦位区画文の44・45・144などがある。隆帯を描線とするものは141～143など縦位区画文が多く、U字状文、渦巻文を描く42・104・151・153などには、意匠の下端がY字状に垂下する地域の特徴をもつ個体がある。本種には1・2単位の橋状把手が付く個体が多い。PL10に326～328を例示する。

第2類：唐草文系土器

a種：第3段階 図版27－52・53、33－135、41－303 PL 7

52は口縁部内面に鈎が付く樽形深鉢である。4単位のS字状文と小渦巻文を配した高い隆帯が口縁部を廻る。垂下降帯で胴部を縦区画し、縦位に近い沈線文を充填する。53・135は同様の地文を施されるが、器形は2類には見られない。53の器形は6類a種47などと共通する。135の交互刺突文は本類の要素であるが、胴部の沈線区画は1類などに見られる。

b種：第4段階 図版27－54、33－131・132、35－171、39－245・247 PL 8

54は内湾する無文の口縁部に隆帯が廻り、胴部を縦位区画して蛇行隆帯が垂下し、雨垂れ状沈線を充填する。131は沈線地文が長く、132は短い。245は沈線区画があり、171は区画が見られず、ともに細い沈線を密に充填する。247は圧痕隆帯が廻り、地文は円点状で浅い。

第3類：大波状口縁土器 図版30－83、31－93・98・101、32－105・108・110・112、38－224、41－302

口縁部に高く立ち上がる台形か双頭状の波頂部を作る。文様は1類a種の沈線文地文と共通の蕨手文が波頂下から垂下し、縦長の区画文が囲む。口端部に沿って沈線が廻り、列点帯となるものも多い。

第4類：多連渦巻文土器 図版30－77・78

本類は、口縁部に渦巻文と楕円区画文が4・5単位配される1類b種と近似する器形・文様ながら、口縁部に楕円区画文がなく、渦巻文が連続して多数描かれる。

第5類：圧痕隆帯文土器

a種：第I群 図版27－55、28－56 PL 7

55は隆帯に圧痕がなく、上下の渦巻文が分離しない腕骨文の形状を残しており、標準的な第I群よりやや古い。地文の縄文は胴上半が横位、下半が縦位の間隔施文である。56は上下端が渦巻文となるクラック状の圧痕隆帯文が4単位廻る。地文は波状・水平の条線文を組み合わせる。

b種：第II群 図版32－119・123、41－294

119・123・294は内湾気味の口縁部に、端部が下向きの蕨手状となる圧痕隆帯文が廻る。地文の縄文は縦位・横位に施され、間隔は確認できない。

c種：その他 図版28－57、30－87、32－107・114・115・117

a種・b種以外のものをまとめる。57・87は口縁部の横位圧痕隆帯から渦巻文が下がる。107・114・115・117は波状口縁を廻る圧痕隆帯に渦巻文や円文が作う。107・115は2・3条の隆帯間に円文、114・117は1条の隆帯から蕨手文が下がる。

第6類：大木式系土器

a種：大木9式 図版24－31、25－41、26－46・47、30－84・86・90・91、31－94・95・100、34－149、41－298・299 PL 7

46は頸部のくびれが強く、口縁部には高い隆帯による把手脚部と円文がある。胴部に渦巻文を描く隆帯はほとんど剥落する。胴部破片86には隆帯で楕円文を描く。これらは本来の大木式土器に近似する。47は平把手があり文様帯は1帯構成で、蕨手文、楕円文には沈線描線が目立つ。その他は波状口縁に双翼状突起、嘴状突起などがあり、同種の文様を低い隆帯が太い沈線で描く。31は把手が平板化している。41は特に大形の双翼状突起が付く。本類は把手のバリエーションが多く、PL10に319～328を例示する。

b種：大木10式 図版26-48 PL9

48は内面がみみずべれ状になるほど深い沈線施文により、横S字状文を描く。無文部は意匠に沿って入念に磨く。本種はこの1個体のみ。大木10式古段階の土器であろう。

第7類：串田新式系土器 図版23-2、30-89、32-111・113、33-136、34-150・152、35-166・167、38-234、41-304

89・234・304は串田新Ⅱ式の搬入品か忠実な模倣品であろう。111は双頭波状口縁に刺突文、113は外面に刻みを施す隆帯と把手、内面に隆帯を貼り付ける。150は隆帯が垂下する波頂部、152には横向きの小把手がある。在地化した模倣品であろう。2・136・166・167は口縁部の一部を、指頭幅ほど内側へ折り曲げる。串田新Ⅱ式土器の波状口縁に施す手法と似るが、本類に含めてよいか躊躇される。文様は1類b種と共通する。

第8類：沖ノ原式土器 図版26-49・50、27-51 PL7・9

49は口縁部に楕円文を2段重ね、50は楕円文の上下に細沈線、刺突列が廻り、いずれも下部は長方形区画文である。51は波頂部のS字状文、渦巻文を2条の隆帯がつなぎ、以下は結節縄文を縦位間隔施文する。沖ノ原式そのものではないにせよ、沖ノ原Ⅰ式並行期の土器であろう。

第9類：縄文施文土器 図版28-59・60、31-96、33-133・137・138 PL9

9・10・11類は図化個体数は少ないが、相当量出土している。59は内湾口縁の外面を肥厚させ、結節縄文を縦位密接施文する。60は全面縄文である。波状口縁の96は口端部に狭い無文部を残し密接施文、133は縦位間隔施文する。平縁の137・138は口縁部のみ横位、胴部は縦位施文する。

第10類：条線文土器 図版28-61、35-169・170・172・174、36-209 PL9

61は無文の口縁部外面を肥厚させ、以下は蛇行する縦位の条線文を施す。169も似る。170は沈線2本、172は条線文で縦位区画し、蛇行条線文を施す。174は部分的に短い間隔で止めながら縦位密接施文する。

第11類：無文土器 図版29-62・63

器面を粗くナデ調整するが、やや凹凸が残る。時期は中期末葉か後期か判断できない。

第12類：その他の器種

a種：両耳壺 図版29-64、32-122 PL10

両耳壺は多数出土している。64・122は胴部に1類b種の文様を施し、64の把手間には楕円区画文がある。122は圧痕隆帯2条が廻る。把手には数種の形状、装飾がありPL10に329・333を示した。

b種：壺形土器 図版24-33、29-65、34-155、38-230

65は短く立つ口縁下に、小橋状把手となる隆帯が廻る球形の小形壺。胴部には低い隆帯で渦巻文を描く。33も同種であろう。230は大形で、胴部には微隆起帯で渦巻文を描く。155は下半部の一部がふくらんだ非対称形壺形土器である。円文、蕨手文などが描かれ、1類b種と同時期の土器である。全国唯一例の靴形土器はどつま先部が発達していないが、祖形的な器形であろう。

c種：鉢形 図版29-66・67 PL7

66は太い沈線、67は微隆起帯で口縁部に無文帯を画し、縦位の条線文を施す。67は注口部がある。

d種：器台形土器 図版41-306

縄文に太い沈線で轂手文、S字状文、透かしを囲む凹文などを描く。ごく少数の器種である。

E 第八群：縄文後期土器群

第1類：初頭土器群

a種：加曾利E式系土器 図版23-1、24-30

いわゆる加曾利EV式である。1区土坑SK03出土の1はバケツ形の器形で、幅と末端位置が不ぞろいの低隆帯が垂下する。30は両耳壺が長胴化したものであろう。45・143なども後期に下る可能性があるが、文様に変化がなく識別が難しい。関沢類型も見られる。

b種：称名寺式土器 図版23-17・29、35-177・178、36-181・183・188・191・192、
38-227・228、39-253・255~260・264・265、40-287 PL10

古段階の資料は見られない。渦巻文を描く188は中段階、帯縄文が幅狭く無文部と等間隔の227・228・235・257~260はやや新しい。191は刺突を施す垂下降帯が蛇体状装飾となる。頸部が屈曲する鉢形土器192・253は称名寺式Ⅱ期、183は茂沢類型であろう。256・264・265は浅鉢形土器である。177は鉢形土器、178とPL10-335は西日本系の小形壺形土器であろう。17・29・181・255・287、PL10-331・332は裏表に刺突列が施される釣手付深鉢・鉢の釣手部である。PL10-330は注口付土器、334は注口土器である。7区土坑SK2036からは309・310と、屈曲する頸部に刺突列が廻る縄文施文土器307と条線文土器308、c種311が出土した。

c種：三十稲場式土器 図版23-18・20・22・24~26、25-41~44、26-45、29-70、
36-185~187、38-225、39-248、42-311 PL10

比較的の小形の鉢形土器が多い。胴部文様は花卉状の爪形文225・248が最も多く、爪形文が細かい185~187もある。他に瘤状の貼付文を付す18・20・22・24・25、縄文254も散見される。本種に特徴的な蓋形土器には、把手が付く大形・赤彩の70、孔があるPL10-337・338、爪形文を施す26、PL10-336などがある。33-129・130、38-238、39-249~251は定型的な本種の器形と異なるが、刺突文が器面を埋める土器である。本種古段階か出現以前か、帰属時期が課題となる種類である。

口縁部に鋸歯文・蛇形沈線文が廻る図版38-226、図版40-288、条線文土器図版35-173、図版39-262は本類の時期であろう。

第2類：前葉土器群

a種：堀之内Ⅰ式土器・南三十稲場式土器 図版23-13、29-69、37-210・211・214、40
-266~268 PL9

鉢形土器には、214のように口縁部の小突起に凹点を付して沈線と刻みが廻り、無文の頸部から膨らむ胴部に鑑形などの意匠を2・3本組の沈線で描く種がある。214・277・290のように内面施文するものも多い。深鉢形土器の266~268・275は口縁部に渦巻文と「く」字状の刻みを施し、1帯の文様構成で米字状などの幾何学的な意匠を描く。214と同じ器形で、渦巻文、三角文などを描く269・270・272は長野県に多い。13は丈の高い小形土器であろう。縦位構成の文様を描く。

5区SK669出土の210は頸部の列点帯で無文部を画し、以下は縄文施文する。69は東北系の大形壺

形土器である。8字状把手に沈線を刻む。69・210は本種の中では古い時期である。

b種：堀之内2式土器 図版23-6、30-74、37-212・213 PL9

朝顔形深鉢には古段階の74と、中段階以降の6などが散見される。鉢形土器213は土坑墓SM08から出土した。内面に沈線帯があり、胴下部には渦巻文と矢尻形の意匠を描く。浅鉢形土器212は土坑墓SM01から出土した。細線帯が口縁部の見込み部分を廻り、垂下して内底面を囲む。繊細な渦巻文、楕円文、刺突列を組み合わせた3種の突起が大小・同種を向き合わせて配される。

c種：石神類型 図版23-11、36-194

波状口縁に小突起を挟んで沈線帯が廻る194・11などがある。b種の浅鉢212と時期が近い。

第3類：中葉土器群

a種：加曾利B1式土器 図版23-12、36-204、40-280・281・292

12・280の外側は磨消縄文帯を縦に区切り、12・292の内側は沈線帯がめぐる。281は外面に蛇行沈線を伴う円形意匠や弧線を描き、内面に沈線帯がある大形土器である。204は鉢形土器であろう。

b種：加曾利B2式土器 図版37-215、40-282・283

215は3単位突起深鉢で、屈曲部から上に磨消縄文帯がある。282は縄文帯を弧線で描く。283は横位区画に斜線を充填する。

c種：東北系土器 図版36-197～201

197～199は磨消縄文を画す沈線に刺突列が沿う。a種に伴うものであろうか。200は羽状縄文を施す鉢、201は波状口縁深鉢である。第4類の時期まで下る可能性がある。

第4類：後葉土器群 図版29-71、36-206～208

上ノ段式土器などを本類とする。206・208は羽状沈線文を密に施す。207は口縁部に狭い楕円区画文が廻る。71は胴中位を区画し、波頂部を囲んで弧線文、胴部に羽状沈線文を施す。

第5類：後葉土器群 図版40-284・285・293

中ノ沢K式土器などを本類とする。284・285は口縁下を区画、293は波頂部で区画が見えない。いずれも太い沈線で鋭角の羽状沈線文を施す。4類より後出と思われるが、編年位置は明確にならない。

(2) 土製品

本区から出土した土製品は238点を数える。内訳は、土製円板180、ミニチュア土器36、土製耳飾4、土製玉類2、貝輪形土製品5、土製匙1、三角壘形土製品1、土鈴2、土偶38である。その他焼成粘土塊12点がある。

A 土製円板 図版43-1～23、44-24～54、45-48～72 PL11

地区別の出土点数は1区3、3区45点、4区51、5区76、7区5点である。使用された土器の時期は、本区出土土器量を反映して、第Ⅶ群1類から第Ⅷ群2類にわたる。正確に土器型式を看取できないが、中期末葉が多いと思われる。破片の部位は胴部と思われ、縄文、磨消縄文が施文されているが、13・39は隆帯がある。湾曲の強い部位は見られない。製作法は打ち欠きのみが半数を上回り、入念な研磨を施すものは7・15・23～25・28～31・41・44・45・47・70である。図化個体の法量は、最小例で直径2.3cm(10・15)、最大例で長さ6.5cm超(36・53～55・65)、重量は5.4～76.3gまで幅がある。平均値は長さ4.0cm、幅4.1cm、厚さ1.0cm、重量21.1gとなる。形態は円形を基本とし、長径・短径にやや差

がある53～55・67のようなものも含まれるが、明瞭に異なる形態は見られない。64のみ三角形に近く、穿孔されている。

B ミニチュア土器 図版46-1～21 PL12

地区別の出土点数は1区1、3区4、4区26、5区5である。欠損品が多数のため正確な形態は把握しにくい。深鉢形が最も多く、球形の無頸壺形が次々である。それ以外の形態には、浅鉢形(1)、高杯状(5)、注口土器(18)、台付(2・17)が見られる。文様は縄文(13)、条線文(6・8・11)など通常見られるもののほか、独特の沈線文(12・15)もある。

C 装身具 図版4-1～11 PL12

希少遺物のため、ほぼ全点を図示した。

- ① 土製耳飾(1～4) いずれも滑車形耳飾である。1・2は外径2.5cm前後の小形品で、孔径が小さい。1は垂直に近い穿孔、2は環部が薄く外面の反りに応じた孔となっている。3は推定外径3.3cm、4は5cm弱となる大形品で、孔も大きい。
- ② 玉類(5・6) 5は長さ4.2cm、直径2cm弱を測り、中心に細い孔が通じた管玉状の形態である。外面に緩い稜を彫り、刺突列を施す。6は直径2cm弱の丸玉状の形態で、斜めに曲がった孔が通じている。繊細な曲線文、刺突文を施す。
- ③ 貝輪形土製品(7～11) いずれも全体の1～2割程度の残欠である。断面が楕円形か下側が薄くなり、二枚貝製の貝輪模倣品と推定される。10は平面形が卵形を窺わせる。9は無文、その他は縄文が施文される。

D 呪具他 図版47-12～19 PL12

- ① 三角埴形土製品(12) 長さ8.2cm、高さ4.2cmの完形品である。断面は正三角形を呈し、中心付近に孔が貫通する。文様はなく、表面は研磨により平滑に仕上げられる。
- ② 土鈴(13～15) 13は直径約5.6cmの球形で、器厚は1.5cm前後と厚い。輪積み成形されている。全面にわたり細沈線で6個の同心円文を描くと推定される。14は直径5cm程度の球形と推定される。器厚6～8mmで凹凸を残す雑な仕上げである。15は球形と推定され、径8mmほどの孔がある。14・15は土鈴か否か判断に迷う土製品である。
- ③ 土製匙(16) 残存部はつまみ部分と推定され、幅1.4cm、厚さ1.3cmで、小孔がある。つまみ部が凹部となっており、小形品であろうか。
- ④ 不明土製品(17～19) 17は直径1cmほどのひも状の製品で、端部が平面をなす。土偶の腕の可能性もある。18は幅3.5cm、残存長4.5cm、厚さ1cmほどの長方形を呈し、中央に径1cmほどの孔がある。片面の縁辺と中軸線、孔の周囲に隆帯を貼る。土器とは考えにくく、土版のような土製品であろうか。19は長さ3.5cmほどの柱状の両端が凹となる。高杯状のミニチュア土器、耳栓状の土製品などの可能性があろう。

E 土偶 図版48-1～11、49-12～19 PL13

全体形を窺える個体、接合個体はない。胴体部から記述する。1は胸部で、沈線による正中線がある。3は幅狭い腹部と思われ、でん部が突出する。7は中空と思われるが、沈線による渦巻文を描いた面を背面とすれば正面は開いた状態を呈し、破断面には見えない。9・12は胸部で乳は高く突出する。9は正面中心を扶るらしい。12は肩部に正面から背面への貫通孔がある。18は板状の上半身が遺存する。顔面はT字状の粘土貼り付けと刺突による小さな目で表現し、背面頭髮状の表現が脱落している。腕はほとんど

ど表現されず、腹部正中線に挟り込みがある。17は胸部で、正面・背面に曲線が描かれ、腹部に18同様の挟り込みがある。16は正面に挟り込みがあり、背面は無文である。15は18に似た頭部幅の広い輪郭である。正面は腹部が輪が広がる沈線文、背面は肩側が広がる沈線文を施す。頭部背面には頭髮表現らしい剥落痕がある。14は正面につま先が伸びる短い脚が付く板状の下半身である。正面・側面・背面に横位細沈線を施す。

5は山形土偶の頭部である。眉は横位隆線1条、中央に寄った目・口を刺突で表現する。4は胴体部から水平に伸びた頸部に付く板状の顔面である。眉と鼻が突出し、目・鼻孔・口を刺突で表現する。13は斜めに伸びた楕円形、平坦な顔面で、Y字状の粘土貼付と刺突で眉・鼻を表現する。6・8は頭頂部が平らで後方に伸び、両肩方向の隆起部に沿って縦方向に孔が貫通する。6には目・鼻・口と耳飾状の表現があり、鼻と口が間延びしている。10は盃状に開いて凹んだ上面視方形の頭部外周に沈線が廻り、3か所に孔があく。鼻と環状の口は粘土貼り付けによる。鼻孔は大きく、鼻中隔を小孔が通る鼻輪状の表現がある。目は離れた位置に沈線で輪郭を描く。

2・11・19は脚部である。2は縦位沈線が残る。11は14と似た横位細沈線が施される。19は無文で長い脚部である。上端はソケット状である。

(3) 石器

本区から出土した石器は、石核・剥片等の石屑類を除いた道具が約4000点に上る。出土地区は4区が約2500点、5区が約1200点、3区が約180点となる。器種の内訳は、石鏃841、尖頭器12、スクレイパー401、石錐141、打製石斧853、磨製石斧47、砥石5、磨石類434、敲石107、棒状敲石99、敲打礫34、石錘43、石皿36、台石946、多孔石40である。器種別の出土傾向としては、未製品を含む石鏃は4区720・5区59、スクレイパーは4区321・5区61、石錐は4区117・5区18と、小形の剥片石器は4区に集中している。打製石斧は4区271・5区472と圧倒的に5区に多い。磨石類は4区245・5区171、石皿が4区16・5区19、台石が4区611・5区301で、大形の礫塊石器は4区が優勢を示すものの、極端な差はない。

これらの大多数が廃棄場と遺物包含層出土のため正確に時期比定できない。図化資料による記述は、帰属時期が特定できる8区出土資料に譲り、本稿では全体の60%を超える4区SQ03出土資料から主要器種を写真掲載し、概要を記述する。

A 原石・石核 PL14

ほぼすべてがチャートである。大きなものは拳大以上、小さなものは鶏卵大より小さい。両極打法の痕跡を残すものが目立つ。

B 石鏃・未製品 PL15・16

チャート製が大部分を占め、黒曜石製が次ぐ。形態は凹基無茎鏃でさほど長身でないものが多い。脇持りが少ないものは少なくないが、平基鏃は少数である。有茎鏃も散見される。未製品は、石鏃より一回り大きく、不整形でも周縁から剝離を施して尖頭部を作り出す資料を比定したが、基部は凸基状のものが多い。

C スクレイパー PL16

ほぼすべてがチャート製である。典型的な刃部を作り出したものは少ない。質量・平面形態が石鏃未製品と類似するものが含まれるが、尖頭部が明確でなく、分厚過ぎて石鏃に加工することを期待できないも

のである。これらには片面からの剥離で断面形が台形に近いもの、中央が分厚い亀甲状を呈するものが特徴的に見られる。他に不定形剥片に部分的に二次加工を施したものがある。

D 石 錐 PL17

チャート製が多く、頁岩なども少数見られる。三角形の幅広い剥片の尖頭部を機能部分とするもの、角柱状の剥片の先端を利用するもの、両面から剥離して全体を細身に仕上げ、頭部を作り出すものといふものがある。

E 打製石斧 PL18

大部分が頁岩製である。形態は側縁が平行する短冊形と、刃部側が幅広い撥形が大差ない比率である。刃部が磨滅し擦痕が観察できるものが少なくない。

F 磨石類 PL20・21

大部分が安山岩円礫を用いた、磨面が特徴的な器種であるが、凹みやあばた状痕を併せもつ、一般的な特徴が見られる。

G 棒状敲石 PL19

長さが最大20cm程度、径が片手で握れる程度の棒状またはやや扁平な安山岩、砂岩を用いる。安山岩は磨石類や石皿の素材より硬質である。一端または両端に加撃による剥離痕や敲打痕を残すもの、扁平面に細かい敲打痕が付くものである。

H 敲打礫 PL19

硬質の安山岩、砂岩を素材とする。扁平な円礫の縁辺に1か所から数か所、加撃による剥離痕を残すものである。長径5cm以下から15cm程度で、石錘と識別しにくいものもある。

I 石 錘 PL19

安山岩の扁平円礫に打ち欠きを施すものである。法量は敲打礫と差がない。2辺または4辺の対称な位置を加工するが、3辺なども見られる。

J 石 皿 PL21

凹み面のある石皿は少数であり、すべて欠損品である。長方形の脚付き石皿が1点見られ、後期の所産と推定される。5区では土坑から出土した、やや遺存状態がよい個体がある。

K 台 石 PL22

石皿の数10倍の数が出土した。安山岩の円礫を用いるものと、節理で剥離した板状礫を用いるものがある。磨面が特徴的な使用痕跡である。全体形がわかる程度の個体は少数に過ぎず、残欠あるいは剥片状となっているため数量が多い。被熱して赤化したもの、表面が剥落したものが多い。完形品は長径50cm、重量40kgを上回るものがある。

L 多孔石 PL21

石皿と同程度の、軟質の安山岩を用いる。大形の扁平礫から厚みのあるものまで素材の形態は齊一的ではない。凹みは片面あるいは両面に多数が集中するものから、2・3個程度までである。

(4) 石製品 図版 253 - 1 ~ 7 PL90・92

A 塊状耳飾 (1)

平面形が円形に近い、半分を欠損するものである。縦約3.6cm、推定幅約4.5cm、厚さ4mm。時期は前期中葉頃と推定される。石質は不明。

B 垂飾 (2～6)

2・3はヒスイ製である。2は半分程度に割れた破断面を研磨している。長さ2.4cm、幅1.5cm、厚さ1.0cm。3は全体が緑色を呈する。全面を研磨し、不整三角形の幅狭い部分に孔がある。4は粘板岩と推定される。長さ5.6cm、最大幅2.1cm、厚さ5mm、全面を研磨し、雨滴状の形態に抉りを施し頭部を作る。この部分に紐をかけると懸垂できるが、装身具かどうか明らかではない。

5・6は自然に孔があいた礫である。5はメノウ、長さ4.7cm、3.8cm、厚さ2.1cm。剥離を施した後全面を研磨している。孔部分には研磨痕がない。6は礫岩、長さ5.4cm、幅4.4cm、厚さ1.5cm。大きな孔は礫が抜けたために開いたものと思われ、研磨痕は認められない。

C 石棒 (7)

結晶片岩製の有頭石棒である。現存長15.9cm、直径3.2cm。

第3節 弥生時代

7区谷状地形 図版42 PL6

千曲川に面した斜面のVII Y23-12地点で、長径1mほどの範囲にまとまって図示した4個体の土器が出土した。壺頸部313、広口壺314は逆位、小形の壺312、蓋315は正位で出土した。出土状態から、土坑に埋納された可能性があるが、土器が露出して確認されたため遺構は捉える事ができなかった。

土器：312・313は壺で、いずれも頸部に沈線で横走沈線文を巡らす。312は口縁部が広く外反する。313は口縁部が受け口状となり、口縁端部に押し引き列点文を巡らす。314は広口壺で、口縁に弧状沈線文を巡らす。315は蓋である。

時期：いずれの土器にも縄文地文が見当たらず、壺・広口壺の文様体も簡略化が認められるため、中期栗林式終末期の所産と考えられる。

第4節 古代

1 遺構

SB01 図版7・22、42 PL6 位置：5区東VII X14・18・19

検出：耕土直下の第1検出面、標高331.7mで検出。切り合い：SK253・1159・1246を切り、SD04、SK1130・1132・1133に切られる。本来は、本跡を切る状況で多くの中世以降の遺構があったものと考えられるが、調査の状況では検出できなかった。埋土：複層である。地山層のにぶい黄褐色シルトブロックや炭化物を含む黒褐色シルトが基本となる。規模・形状：長軸4.2～4.6m、短軸約4.4m、残存深さ約30cmを測る。四隅が直角にはならず、北西壁と南東壁が歪む北西～南東方向に若干長い平行四辺形となる。貼床は全面にあったと考えられるが、SD04に切られた部分以北の中央部に良好に残っていた。ま

た出入口部分が南西壁の西コーナーより約4分の1の所に作られていた。柱穴：東・西・北コーナーに近い場所に3基、カマド北東側に1基確認できた。それぞれ径20～40cm、深さ10～15cmとなる。カマド：南東壁の南コーナーから約3分の1の所に作られていた。SD04によってほとんどが破壊されており、北東側袖部分が残っている程度であった。袖部内側には土師器裏片を貼り付けていたようである。また燃焼部には支脚を埋めていた穴が残存していた。遺物：床面付近から須恵器の鉢（図版42-318）や杯蓋（同316）が、床面から完形の須恵器杯（同317）が出土している。また、カマド内からは土師器裏破片が多く出土している。時期：出土土器から奈良時代後半から平安時代初頭頃と考えられる。

2 遺物

土器：図版42-316は須恵器環A類で底部に回転糸切り痕が残る。同316は須恵器環B類に伴う蓋で天井部の1/3ほどに回転ヘラ削り痕が残る。同318は大形の鉢で、外面の口縁部～胴部にかけてタタキ調整を施す。焼成不良の須恵質土器である。

時期：須恵器環A類が出土する点から、7期と考えられる。

第5節 中世・近世

1 遺構

(1) 掘立柱建物跡

ST 02 図版16 位置：5区東VII X 19・24

検出：耕土直下の第1検出面、標高331.4～331.6mで検出された。切り合い：ビット4がSK784を切る。埋土：ビット1～6は掘方と柱痕跡がはっきり観察できる。若干のちがいはあるものの、基本的には掘方は地山層の黄褐色や黒色のシルトブロックを含む黒褐色シルト土が埋土となり、柱痕跡には明黄褐色のシルトブロックを含む黒褐色シルトが埋土となる。規模・形状：北東～南西方向に2間7.3m、北西～南東方向に1間7.5mとなる1間×2間の6本の柱をもつ掘立柱建物跡である。遺物：ビット2から中世の内耳鍋片が出土している。時期：出土遺物から中世と考えられる。

(2) 柵跡 図版7・15・16

柵跡は14か所検出された。検出面は耕作土直下の第1検出面で共通する。SA10から内耳鍋破片が出土した以外には、掘方埋土から縄文土器破片が出土する例が多く、SA10と掘立柱建物跡ST01の例から中世の遺構と推定している。大部分のビットは掘方と柱痕跡が明瞭に識別できた。掘方の埋土は地山の黄褐色シルトブロックを主体に黒褐色シルトブロックや炭化物・焼土粒を含む。柱痕跡の埋土は黒褐色シルトを主体に黄褐色シルトブロックと炭化物・焼土粒を含む。以下にまとめて番号と位置、軸方向、法量等を簡略に記す。

SA 01：5区東VII X 13・14・19・20、北西～南東方向、4間15.0m、5本柱、ビット1～2・4～5は各4.7m、ビット2～3・3～4は各2.8m。

- SA 02 : 5区東VII X 19、北西～南東方向、3間7.0m、4本柱、ピット1～2は2.0m、ピット2～3は3.5m、ピット3～4は1.5m。
- SA 03 : 5区東VII X 17・18、北西～南東方向、5間9.0m、6本柱、ピット1～2は1.5m、ピット2～3は2.0m、ピット3～4は1.8m、ピット4～5は2.0m、ピット5～6は1.7m。
- SA 04 : 5区東VII X 19、北西～南東方向、3間7.3m、4本柱、ピット1～2は2.0m、ピット2～3は3.2m、ピット3～4は2.1m。
- SA 05 : 5区東VII X 17・18、北西～南東方向、3間4.0m、4本柱、ピット1～2は1.2m、ピット2～3は1.5m、ピット3～4は1.3m。
- SA 06 : 5区東VII X 22・23、北西～南東方向、3間5.5m、4本柱、ピット1～2は1.5m、ピット2～3は2.5m、ピット3～4は1.5m。
- SA 07 : 5区東XⅢ D03、X 22・23、北西～南東方向、5間9.7m、6本柱、ピット1～2は1.5m、ピット2～3は2.7m、ピット3～4は0.8m、ピット4～5は2.9m、ピット5～6は1.8m。
- SA 08 : 5区東VII X 17、北東～南西方向、2間4.5m、3本柱、ピット1～2は2.35m、ピット2～3は2.15m。
- SA 09 : 5区東VII X 19・20、北東～南西方向、2間7.4m、3本柱、ピット1～2は3.7m、ピット2～3は3.7m。
- SA 10 : 5区東XⅢ D03、わずかに南北に振れる東西方向、5間5.4m、6本柱、ピット1～2は1.4m、ピット2～3は0.8m、ピット3～4は1.1m、ピット4～5は0.9m、ピット5～6は1.2m、ピット4から中世内耳銅片が出土。
- SA 11 : 5区東VII X 23、南北方向、2間2.6m、3本柱、ピット1～2は1.35m、ピット2～3は1.25m。
- SA 12 : 5区東XⅢ D 03・VII X 23、南北方向、2間3.7m、3本柱、ピット1～2は1.9m、ピット2～3は1.8m。
- SA 13 : 5区東VII X 22、北西～南東方向、2間7.2m、3本柱、ピット1～2は3.6m、ピット2～3は3.6m。
- SA 14 : 5区東VII X 22、北西～南東方向、2間2.8m、3本柱、ピット1～2は1.4m、ピット2～3は1.4m。

(3) 溝 跡

SD 03 図版12 位置：3区XⅢH 07・08

検出・切り合い：2区と3区の境界壁の南東側断面にかかって、標高327.5mで検出された。縄文時代の遺物集中SQ05上面を切り、SK66に切られる。埋土：2区と3区の境界南北断面東壁8層の黒褐色シルトが埋土となる。規模・形状：調査区内では千曲川方向に開くコの字状となる溝である。方形となるかどうかについては不明。東辺はほぼ南北方向に2.5m、北辺は隅丸に曲がり、東西方向約7.5m、さらに西辺は南方向に約2mの溝として確認された。検出時の幅は上端で40cm前後、深さ15cm前後である。SK66に切られると考えたが、関連遺構の可能性もある。遺物：木製品破片が出土。曲物の可能性もある。時期：検出層位と形状から中世と考えられる。SK66からは珠洲焼が出土している。

SD 04 図版16 位置：5区東XⅢH12・13・18・19・20・25

検出：耕土直下の第1検出面、標高331.7mで検出された。奈良時代後半頃の竪穴住居跡SB01を切る。

埋土：単層で炭化物が混在するにぶい黄褐色シルト土が埋土。規模・形状：ほぼ北西から南東方向に傾斜する。調査区内で長さは約24.5m、幅約1.5m、深さ10～20cmを測る。北西端と南東端での下端高低差は50cmである。良好に遺存していた部分では、北東側斜面上に10～40cm大の礫が、ほぼ隙間なく不規則に並んでいた。遺物：近世陶磁器や瓦が出土。時期：出土遺物から近世の溝と考えられる。

(4) 土 坑

中世・近世に属する土坑はすべて5区東で検出された。検出面は耕作土直下の第1検出面である。遺物を伴い時期が推定できるもの、及び礎石が伴う、あるいは柱痕跡が明らかな建物の柱跡と認められる土坑に限り、番号と位置、法量（長径×短径、深さ）、等を簡略に記す。

- SK 147 : 5区東VII X 14, 45 × 40cm、深 10cm、瀬戸大窯産焼物、16 世紀中頃～後半。
- SK 163 : 5区東VII X 15, 100 × 45cm、深 30cm、唐津産すり鉢、17 世紀後半。
- SK 281 : 5区東VII X 13, 50 × 50cm、深 30cm、唐津産焼物、17 世紀。
- SK 364 : 5区東VII X 20, 25 × 20cm、深 30cm、志野産丸皿、17 世紀前半。
- SK 427 : 5区東VII X 19, 35 × 30cm、深 25cm、唐津産すり鉢、17 世紀後半。
- SK 696 : 5区東VII X 17, 40 × 30cm、深 30cm、瀬戸大窯産焼物、16 世紀前半。
- SK 918 : 5区東VII X 23, 105 × 80cm、深 30cm、唐津産碗、17 世紀後半～18 世紀初頭。
- SK 965 : 5区東VII X 21、掘方 70 × 55cm、深 60cm、柱痕跡 30 × 30cm、深 45cm、礎石。
- SK 966 : 5区東VII X 21、掘方 60 × 50cm、深 60cm、柱痕跡 20 × 20cm、深 50cm、礎石。
- SK 976 : 5区東VII X 22、掘方 55 × 50cm、深 50cm、柱痕跡 30 × 20cm、深 55cm。
- SK 977 : 5区東VII X 22、掘方 55 × 55cm、深 45cm、柱痕跡 30 × 20cm、深 40cm、礎石。
- SK 980 : 5区東VII X 22、掘方 50 × 50cm、深 35cm、柱痕跡 20 × 15cm、深 45cm。

第6節 小 結

1 縄文時代

(1) 遺構について

廃棄場 本区では住居跡は検出されず、中期末葉から後期前葉に至る大規模な廃棄場を検出したことが最大の成果といえる。8区で中期後葉に多数の住居跡を営んだ後、敷石住居を含む住居が3軒に減少し、配石遺構が作られ、中期終末に至って人跡が絶えた時期の遺物が多量に廃棄されている。生活拠点が上流側に移動し、相当規模の集落が調査区域外の北西側に営まれていた状況が推定される。千曲川に臨む廃棄場は傾斜地であり、住居を建てるには不向きな空間と考えられる。そうした地点に位置する掘立柱建物ST01について、住居としての建物ではない記念物的な性格が推定されている。隣接して分布する、柱穴と考えられる土坑の存在から、さらに多くの掘立柱建物跡が存在した可能性もある。土器や石皿を埋納する土坑が注意されるが、土坑群の性格が十分検討できなかったため、墓域を想定してよいか否か結論は保留する。

廃棄場出土遺物の大多数は日常使用される土器、石器が占めているが、このほかに土・石製の装身具、呪具も含まれる。焼獣骨、焼き火跡が検出されたことから、モノ送りのような儀礼が営まれたことが推定されている。廃棄場がこうした精神生活に関わる空間でもあったことが窺える希少な事例である。長野県の縄文時代集落跡の調査で、廃屋となった竪穴住居跡に遺物が投棄される以外の廃棄状況が明らかになった事例は少ない。

墓 域 5区東で後期前葉の墓域が検出されたことも注目される。北側の分布範囲が把握できないものの、10m四方足らずの範囲に土坑墓21基が集中している。ほとんどが楕円形を呈し、覆被葬が2基、墓坑内配石をもつものが4基見られる。覆被葬転用土器から堀之内2式期の新しい段階を含む時期が推定される。3・4基程度切り合う小群が、SM08とSM04・20の間にある空間を残して群在するようにも見える。住居の存在は調査区外の北西側と推定されるため、墓域は段丘上の平坦面で最も千曲川寄りに設けられたと推定される。後期前葉の墓域のあり方を示唆する貴重な事例となろう。7区では傾斜地にかかる地点に埋設土器を伴った円形土坑SK2036があり、これが墓坑とすれば後期初頭の墓域が隣接地に存在したことになる。

陥し穴 1例ではあるが、前期中葉の陥し穴SK27は看過できない。楕円形で逆茂木1本を埋めるタイプである。長野県全域で陥し穴の検出事例は増えているが、これほど河川に近い立地の事例はなからう。

(2) 遺物について

縄文中期土器 本区出土土器のうちで最多量を占める、第Ⅶ群土器と並行期の土器群、すなわち加曾利EⅢ・Ⅳ式期の土器様相については、本遺跡から千曲川上流約30kmに位置する北信地方屈指の中期末葉集落跡、千曲市屋代遺跡群Ⅱ-2層の土器群との対比によって説明される。本区の土器群も基本的に屋代遺跡群の様相に準じるものといえる。屋代遺跡群では、加曾利EⅢ式前半期には加曾利EⅡ式系、本場と差がない個体を含む大木9式系、圧痕隆帯文系土器の主流3系統がほぼ等量ずつ組成し、唐草文系土器、多連渦巻文土器、大波状口縁土器の少数派が伴う。串田新式系は極めてまれである。加曾利EⅢ式後半期には加曾利EⅡ式系が占有率を高め、大木式系は変容を続け、加曾利EⅣ式期には加曾利EⅡ式系が席巻するという変遷を示す（長野県埋蔵文化財センター2000b）。

本遺跡で第Ⅶ群土器を構成する各類別の土器群は、屋代遺跡群でも出土しており、変遷の傾向も近いものといえるが、差異も認められる。本遺跡から千曲川下流約5kmに位置する中野市柳沢遺跡8・12・13区でも同時期の集落跡を調査しているため、その成果を交えながら比較してみる（長野県埋蔵文化財センター2012）。組成比に占める割合は、多い・少ないという感覚的な表現しかできないが、相対的な傾向は指摘し得るであろう。

屋代遺跡群で主流3系統を占めた6類大木式系は、大木9式古段階に属す変容の少ない図版26-46のほかは、地域的に変容を遂げた屋代遺跡群と共通するものである。大木10式の図版26-48は新潟県でも阿賀野川以北に分布する本場の資料に近似し、長野県では唯一例となる。5類圧痕隆帯文土器は屋代遺跡群より相対的に少なく、本遺跡では1・3・6類に次ぐ程度の出土量と思われる。柳沢遺跡でも同様であった。5類c種のうち、口縁部を廻る複数の隆帯間に円文を配するものは、柳沢遺跡独特の土器と指摘されている。一見信濃川上流域に分布する沖ノ原式と類似するが、同型式は平口縁が卓越し、隆帯間に渦巻文を配す。柳沢遺跡独特の土器は至近距離の本遺跡ではごく少数が確認されたにとどまり、県境を越

えて信濃川流域に事例がないため、分布範囲が非常に狭いものと予想される。また8類沖ノ原式は、本遺跡で完形個体が出土したことは注目されるが極めて少数にすぎず、中野市域はほぼ分布圏外となる。

屋代遺跡群で主流3系統に次ぐ種類は、4類多連渦巻文土器と思われるが、本遺跡では少く、むしろ柳沢遺跡のほうが多量であろう。本遺跡では3類大波状口縁部土器が目立つ存在である。双頭波状口縁や刺突列は串田新Ⅱ式に由来する要素であろう。7類串田新式系の存在が示すとおり、上越地方を介した北陸地方の串田新Ⅱ式土器と、1類b種との交流から生じた土器と見られる。7類は種という量ではなく、柳沢遺跡1号住居跡では方形石組炉の炉底に敷設する転用例があり、関係の深さを反映している。

千曲川上流域に分布する郷土式3・4期土器(綿田2008)と屋代遺跡群の加曾利EⅢ式期の土器を比較すると、郷土式は平口縁を原則とし、屋代遺跡群の土器には大木系土器の多さと比例して波状口縁、突起が顕著な傾向が明らかである。本遺跡では平口縁を原則とする4・5類の少なさと対照的に、波状口縁、突起付きの3・6類の卓越が指摘でき、この傾向は屋代遺跡群以上に顕著であろう。平口縁を基本とする沖ノ原式が招来されなかった背景には、土器の口縁部形態に対する嗜好の差が関連してはいないか。

縄文後期土器 第Ⅷ群土器については、1類の時期にはa種加曾利E系が中期末以来継続している可能性がある。変化の要素が乏しいため時期細分が困難である。柳沢遺跡に見られた称名寺式古段階の個体は確認できなかった。c種三十稲場式に凸縮文を施すものは長野県では初見と思われる。2類の時期は、新潟県の南三十稲場式を主体的に構成する264の深鉢形土器と、長野県で堀之内1式期に主体的な214の鉢形土器が見られる。この鉢形土器は中野市栗林遺跡に由来して「栗林型」と呼称する意見もあるが(鈴木徳2012)、本遺跡では新潟県に多い文様が優勢である。

3類c種の197～199は「十腰内第Ⅱ群b類」(磯崎1969)、宝ヶ峯式「華燭土器」(鈴木克2008)などと呼称される。県内では千曲川流域で8遺跡程度出土が知られている(綿田1994、笹澤2012)。他に東北系土器が伴わず、この種のみが伝わっている。新潟県を経由していると予想されるが、状況は不明である。

土製品 土製品の中で、三角埴形土製品は長野県内では20例足らずの事例が知られている希少な資料である。本区出土品は無文であり、詳細な時期は絞り込めないが、SQ04から多量に出土した中期末葉土器の、いずれの時期に帰属しても矛盾しない。貝輪形土製品は上田市測ノ上遺跡に続く2遺跡目の事例となる。関東地方では中期末葉から後期初頭に多数の事例があり、時期的に整合する(谷藤2010)。長野県の事例が極めて少ない状況下で、千曲川下流域で5点出土した本区の例は注目される。

土 偶 本区出土の土偶は土器の時期に対応するとすれば、中期末葉から後期前半頃の所産と予想される。明らかに後期土偶の形態的特徴を備えた個体もあるが、帰属時期が明らかでないものもあるため、次章で報告する中期中・後葉主体の8区出土の土偶、及び屋代遺跡群第Ⅱ—2層出土の中期末葉の土偶と比較して時期比定を試みる。胴部の形態・文様については、図版49—15の沈線文は8区に共通するものがあり、屋代遺跡群にも見られる。同14の形態は8区に多いが、図版48—11と共通の横位細線文を施すもの見られず、屋代遺跡群に類例がある。8区の土偶は頭部がやや細く、15・18のように胴部と幅が同じものは少ない。図版48—9・49—12の突出した乳表現と、9・図版49—16～18の正中線を挟る表現は8区には見られない。頭部が平坦かくぼんで穿孔される図版48—6・8・10のようなものは8区に散見される。

これらの比較から、河童型土偶の頭部表現に通じる6・8・10は中期末葉に帰属する可能性が高い。頭

部形態から4・13は後期前葉、5は中葉に位置付けられる。胴体部16～18、脚部19も後期前葉としてよいであろう。形態が問題となる7も渦巻文は同時期に一般的に見られる。中期末葉に土偶は減少し、後期初頭には中部・関東地方で事例が乏しいといわれる。この時期の土偶に関して明確な事例を指摘することは、本報告でも無理がある。

石器 本区の石器組成で特徴的なことは、台石の多さであろう。残欠が多数を占めるため、実数は推定しがたいが、石皿をはるかに上回るとは確実であろう。被熱による剥落が多いことも特徴的であり、磨面の痕跡から磨石類と対になった製粉機能のほかに、焼石調理の機能も推定される。千曲川の対岸にある中野市栗林遺跡では、湧水点に構築された水さらし場状遺構、クルミ・トチノキ殻が遺存した貯蔵穴群78基が検出され、木の突加工施設の実態が明らかになった（長野県埋蔵文化財センター1994a、関1998）。同地点でも磨面が残る大形の「使用面をもつ礫」が多数出土したことを考慮すれば、同種の施設群が隣接地に存在した可能性が高いと考えてよさそう。

本地区では43点の石鍾が出土した。過半数が4区の出土であり、縄文時代以外に石鍾を用いる時期の遺構がないため他時期の混入は考えにくい。栗林遺跡の16点、長野市村東山手遺跡の38点、中野市柳沢遺跡の39点を上回り、千曲川沿岸でも最多級の石鍾数である。千曲川本流に面した遺跡立地からは、礫石鍾の多さはうなずけるものであるが、いずれの遺跡でも数10点という数は多いとは言えない印象を抱く。ちなみに8区では縄文時代に属する石鍾は10点足らずである。魚網鍾ばかりと断言はできない器種かもしれないが、漁労活動を物語る数少ない根拠として注意したい。

多量のチャート原石・石核・剥片類は8区のそれを上回る量である。数値で示すことはできないが、原石・石核の大きさは8区より大形である。河原の転石を採取したものであろうが、800点の石鎌は縄文中期末葉から後期前半期には極めて多数であり、8区とほぼ同数である。石鎌素材には黒曜石もかなり含まれているが、石錐、スクレイパーはチャートの占有率が高く、石材に恵まれた石器製作活動が盛んであったと推定される。棒状敲石や敲打礫なども工具として用いられた器種の可能性があろう。本区は廃棄場を中心とした調査となったが、狩猟具、漁撈具、植物加工具すべてに関して看過できない知見をもたらした。

2 古代以降

SBO1は唯一の古代遺構である。奈良時代後半から平安時代初頭の時期に属すが、調査対象地区が広大な本遺跡全体でも同時期の遺構は皆無である。下流の斑尾側対岸、川久保・宮沖遺跡では古墳時代以降集落が継続しているが、400m以上離れて存在する。本区では古代の遺物はほとんど見られず、複数の住居が隣接して営まれているとも推定できない。調査成果から古代の状況に言及する材料は乏しいが、千曲川に臨んで住居が単独で存在するあり方に注目したい。

中世・近世には集落が存在していたことが明らかになった。建物や屋敷地を復元する材料には不十分であるが、8区、12区、10区でも集落跡が検出されており、地域史の中で検討される事例となる。

第5章 8・9区の遺構と遺物

第1節 概要

8区は千曲川に面して南東に緩傾斜した、標高326～330.5m前後の河岸段丘面にある。上流側の南西部、下流側の北東部を沢で画された、幅約60m、延長約110mの調査区である。全体が千曲川を起源とする砂質シルトであり、北東部のⅧR区を深さ4m程度掘削しても礫層は確認されなかった。地目は果樹園と畑であったが、地表にも礫は見当たらなかった。

標高329m以上は平坦に近く、地表下30～40cmで地山となり、弥生・古墳・中近世各時代の遺構が同じ検出面で確認された。330m付近では縄文時代中期末葉に属す遺構も一部が同一面で検出された。この調査面を第1面とした。さらに10～30cm掘削すると縄文時代の遺構が検出された。この調査面を第2面とした。329m以下は千曲川に向かって傾斜がやや強くなり、弥生時代以降の遺構はほとんど確認されず、ⅧV10区付近では地表下50～60cmで縄文時代の遺構検出面となった。ⅧQ25・R20・V05付近は厚い縄文時代の遺物包含層が形成され、遺構検出面は地表下1m以上となった。

調査の手順は調査区の中で標高の高い北側半分の同一調査面で検出された弥生時代以降の住居跡、土坑等を調査し、同時にトレンチ掘削を行って全体の土層と遺構面の確認を行い、南側の遺物包含層の掘削を行った。北側半分を中心とする弥生時代以降の遺構調査が済んだ8月以降第2面の調査にかかり、調査区のほぼ全面に分布する縄文中期竅穴住居跡の調査を展開した。縄文時代の住居は標高327mから330mの間に弧状に分布し、ⅧW区は住居分布域の外側、ⅧP区の大半とⅧQ区の北西部は配石遺構と土坑群の分布域となる。このため住居分布域外周90m以上の環状集落を、半分程度調査したものと推定される。

縄文時代遺構の調査は、調査区北東端のⅧR区SB22・25・10等から着手し、南北に並ぶSB32・30・37・40、東に並列するSB41・29・31・35・36、平坦部周囲のSB26・27に進んだ。また工事工程上、下流側から引き渡す必要があり、厚い遺物包含層を掘削した後SB43～46・67を調査して東側半分を引き渡した。この後、住居が密集するⅧQ・ⅧV区西半部のSB14・17・20・21・51～69等と並行して、北半部の土坑群を調査した。

8区の基本土層は、ⅧP10区からⅧW01区へ通した北西-南東方向の調査区短軸土層断面を代表させると、次のとおりである(図版52)。Ⅰ層：10YR5/2 灰黄褐色シルト、細粒砂混じり(耕作土)。Ⅱ層：10YR4/2 灰黄褐色シルト、細粒砂混じり(弥生時代以降の遺構埋土基調)。Ⅲ層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、細粒砂混じり。Ⅳ層：10YR3/2 黒褐色シルト、細粒砂混じり(縄文時代の遺構埋土・遺物包含層基調)。Ⅴ層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、細粒砂混じり(地山層)。

断面図を北西側から見ていくと、Ⅲ層が見られない平坦面にある弥生後期住居跡SB06はⅣ層を掘り込み、Ⅱ層を埋土としてⅠ層に被覆されている。縄文中期末葉住居跡SB07は中期末葉住居跡SB59上層を掘り込む。2軒とも埋土はⅣ層を基調とし、Ⅰ層に被覆されている。隣接する後葉新段階のSB68は他の縄文時代住居跡とともにⅣ層基調の埋土をⅡ・Ⅲ層に被覆されている。古墳後期住居跡SB13はⅢ・Ⅳ層を掘り込み、Ⅱ層を埋土基調とする。緩斜面にある縄文中期後葉住居跡SB46・中期中葉住居跡SB67はⅤ層を掘り込み、Ⅳ層及び近似する6・8層などが上部に堆積している。中期中葉住居跡SB16はⅤ層を

掘り込み、IV層近似の6層が上部に堆積している。

8区は縄文中期中葉・後葉・末葉各期の竪穴住居跡が多数検出され、集落変遷がたどれる地区である。遺構の時期は出土した土器で表記するが、分類の概略は次のとおりとし、中期縄文土器分類の詳細は次節の遺物で説明する。

第IV群：中期前葉土器。勝坂式初期の貉沢式、後沖式土器などに並行。

第V群：中期中葉土器。勝坂式諸段階から曾利Ⅰ式、唐草文系土器第1段階などに並行。新道式、藤内Ⅰ・Ⅱ式、井戸尻Ⅰ・Ⅲ式などの諸段階を含む。北信地方では編年研究が進んでいないため、土器の項で時期を検討し、適宜古段階、新段階などと記す。

第VI群：中期後葉土器。曾利Ⅱ式、唐草文系土器第2段階、大木8b式、柵倉式などに並行。本区の主体を占める土器で、5期に区分する。様々な土器を「類」、「種」に細別する。

第VII群：中期末葉土器。加曾利EⅢ・Ⅳ式、唐草文系土器第4段階などに並行。細別は1～5・7区出土土器の項で記した。

遺構の記述に当たり、遺構名に続く図版・写真(PL)番号の掲載は次のとおりとした。遺構図版は当該遺構を含む割付図、個別遺構実測図、遺物図版は遺構の時期を示すため、出土した土器に関する記述に関わる土器実測図版番号を掲出した。写真は図版に対応する当該遺構及び遺構内施設、遺物出土状況写真、及び土器の写真番号を掲出した。遺構と遺物の図版・写真番号は「」で区切った。

当該遺構の出土遺物に関して、石器を多量に出土した住居跡について多数出土した器種、希少な土製品・石製品などを記述した場合は、本文中に図版番号を示した。石器組成概要の記述について、「剥片石器」は石鏃、尖頭器、スクレイパー、石匙、石錐、打製石斧、磨製石斧、「礫塊石器」は磨石類、棒状敲石、敲打礫、石錘、石皿、台石、多孔石をまとめた。

第2節 縄文時代

1 遺構

(1) 竪穴住居跡

SB 07 図版55・64、119・172 PL23、40 位置：ⅧQ12

経過：短軸ベルトにかかって最初に確認された縄文住居跡。北側は平面的に黄褐色の地山と識別できたが、南側は断面観察を交えてもはっきりせず、床面を掘り下げすぎプランも不整形となった。第2面調査時に南半部の下層にSB59が存在することが判明したが、遺物は混じったものがある。規模・形状：炬及び西側80cmほどの位置にある埋裏から東北東～西南西主軸と推定され、隅丸方形の主体部長4.2m、直交軸4.5m以下と推定。敷石住居の可能性もある。施設：壁に沿って小ピット6基が掘り込まれる。埋裏には把手を欠いた両耳壺を埋置する(119-2)。炬はわずかに出入口方向に偏る。4枚の扁平礫を用いた方形石組炬で、床面より低い炬底に上部を欠損した深鉢を埋設する(同1)。炬内埋土には炭化物が少量含まれる。埋土：褐灰色砂質シルト基調で炭を含む。検出面が浅く、埋土は最大30cm程度で張出部の有無は不明。遺物：遺物量は比較的少ない。炬と埋裏の付近に比較的まとまっていたほか、床面からやや浮いて礫とともに破片が出土した。埋設土器2点と床面出土土器(119-1・2・4・5、172-372)

は第VII群1類に属す。同2類(119-3、172-382)はSB59の遺物の可能性がある。石器は剥片石器13点、礫塊石器は石錘(223-1)、敲打礫(224-1・2)など24点、他に土製円板(194-1)・土偶(198-1)各1点。時期：埋設土器等から中期末葉期。

SB 10 図版62・65、119・120 PL23、40 位置：ⅧR02

経過：SB23・25・11とともに平面・断面観察により検出した。土器埋設炉に接する西側4分の1ほどをSB25に、北東壁をSB23に切られる。規模・形状：南東壁の一部のみが残存し、土器埋設炉中心からの距離が2.70m、北壁側のP6までを含めると推定5.4mを測る。施設：土器埋設炉は深鉢2個体を重ね、第V群8類12が内側、1類6が外側。推定プラン内に大小のピット17基があるが、すべて本跡に伴うか不明。埋土：黄褐色砂質シルト基調。遺物：ピット10から第V群1類(119-7)、ピット15から同4類(120-8)が出土。床面上から3個体程度の土器がまとめて出土した。いずれも第V群に属す。石器は剥片石器・礫塊石器各5点。他に焼成粘土塊1点、土偶2点(198-2)。時期：炉体土器ほか出土土器から中期中葉。

SB 11 図版62・66、121 PL23 位置：ⅧR02・03

経過：土器の出土と焼土跡の検出から住居跡の存在を推定した。時期不明の土坑、近世以降の畝状の掘削が及び、埋土は残存しない。北西側は削平され、東壁は調査区境界にかかる。規模・形状：南側の壁線から推定すると、残存部の長径は4.2m以上。施設：中央部に地床炉がある。推定プラン内に中小のピット6基がある。遺物：遺物は少量で、第V群8類(121-13)、12類有孔鈔付土器(同14)を図示した。石器は剥片石器2点、礫塊石器1点。時期：出土土器から中期中葉。

SB 14 図版56・67、121・122 PL23、41 位置：ⅧV02

経過：第1面の調査時に炭が多量に混じった埋土と、焼けた壁が一部見えたため住居跡の存在がわかった。規模・形状：サブトレンチが北壁を切り、当初の確認面よりやや低いレベルでプラン確認したため、本来もう少し大きい。現存の南北主軸4.9m・現存直交軸4.4m。外径はやや不整の円形。施設：ベッド状遺構を備え、南側は途切れる。これに沿って主柱穴と見られるピット6基が掘り込まれる。中央に長方形石囲炉があり、南半部は掘削される。埋土：上層1～4層は黒褐色・黄褐色砂質シルト基調、下層5～9層は焼土・炭化物を多量に含む層である。8層は建築部材と思われる炭化材を多量に含む。遺物は下層には少量、2・4層から図化できた個体の破片が出土した。遺物：図示した9個体の土器は廃棄時の一括性が高いと思われる。第VI群2類b種(121・122-15・18・19)、4類(同16・17)、7類a種(同20)、8類(同21)、9類(同22)、小形浅鉢(同2)が出土。石器は剥片石器2点、礫塊石器4点。時期：出土土器から中期中後葉4期。

SB 16 図版61・68、123・124 PL24、42 位置：ⅧV05・06、W01・06

経過：短軸ベルト南面に掘削したトレンチにより、早くから存在は確認されていた。規模・形状：東北東～西南西の主軸8.7m、直交軸6.6m以上の卵形。施設：壁際に深い周溝が全周し、壁高が低い千曲川寄りの南壁で途切れるため、出入口と推定。7本の主柱穴が規則的に配列し、ピット1・2・3、ピット4・5の間に間仕切り状の溝がある。中央にやや奥壁寄りに地床炉がある。埋土：黄暗褐色砂質シルト基調。壁高65cmを測る北側から流入する。床直の5層は炭化物と焼土を多く含み、炉周囲では特に多量。遺物：大形の割に遺物量は少なく、床面より20～30cm上から比較的多く出土した。土器は第V群(123-27～124-34)を主体とし、複数の台付土器(123-29・32・33)がある。王冠型土器(172-385)、東北系土器(同384)、釣手土器(同390)など少数例が見られる。第VI群1類a種(123-

24・25)、b種(同26)も混在する。奥壁前の床面に横たわって凝灰岩製の彫刻石棒が出土したが(PL24)、脆弱すぎて取り上げ後修復できない。石器は石鏃16点(209-5~7)など剥片石器31点、磨石17点(228-4~8)、石皿4点(242-1)など礫塊石器27点。他に土偶・石棒各1点。時期：出土土器から中期中葉新段階。

SB 17 図版54・69、173 PL23 位置：Ⅷ P20、Ⅷ Q16

経過：弥生時代住居跡SB05の床面下調査時に炉が現れた。ほぼ床面まで掘削され北壁はプランがほとんど重なる。ピットの多くはSB05に帰属する。南壁がSB50と切り合うと推定されるが新旧不明。規模・形状：南北軸4.8m以上、直交軸5.4m以上のほぼ円形。施設：北東壁際に周溝の痕跡、ピット1・2間にわずかな段差があり、ベッド状遺構の痕跡であろうか。中央部に方形石組炉は1辺2個の大礫を用い、隙間に鶏卵大礫を埋める。土器底部(173-395)を埋設する。埋土：炉内の黒褐色シルト以外残存しない。遺物：少量の土器には第Ⅵ群2類(173-392)、7類(同394)、8類(同395)、9類(同396)などがある。石器は磨石1点。時期：炉形態と出土土器から中期後葉4・5期。

SB 19 図版58・70・71、124・125 PL24、42 位置：Ⅷ V07・08・12・13

経過：本跡南半分は工事用道路であったため、北半部調査後1か月半を隔てて南半部を調査した。北側のSB52を大部分切る。規模・形状：南壁は残存しない。主軸は推定できず、東西5.9m・南北現存長4.5m。外径はやや不整の円形。施設：北・西壁際に周溝があり、二重の部分があるため建て直しの痕跡か。これに沿って大小ピット13基が掘り込まれる。中央に地床炉があり、拳大礫が数個残る。埋土：北側から流入した黄褐色・暗褐色砂質シルト(2・4・5・7・8層)と炭・焼土・骨粉を多量に含む黒褐色シルト(3・6層)が互層となる。床面直上の6層は形状を留める炭化材を含む。遺物：図示した8個体の土器には時期差が認められる。第Ⅶ群1類a種(124-35)と火焰型土器(同36)は床面で隣接し、共伴と見られる。その他はやや離れて出土し、37は第Ⅴ群1類でも古い時期と推定される。173-397~406は、403を除いて第Ⅴ群に属す。SB52・53など斜面上方からの流入した土器の混在が推定される。石器は剥片石器11点、礫塊石器5点。時期：床面直上から出土した土器35・36から中期後葉1期と推定する。

SB 20 図版56・72、125・173・174 PL24、43 位置：Ⅷ Q16・17・21・22

経過：東壁がSB61を切る。南側がSB69北半部の上層を占める。発掘時に断面観察からSB62が本跡南壁の一部を切ると考えたが、炉形態から逆と推定する。SB60とも切り合うが新旧不明。規模・形状：床面が2面あり、平面図は下層床面を図示した。外形と炉形態から推定し、南西の主軸6.6m以上、直交軸6.2mのほぼ円形。施設：壁際に周溝が廻り、南側は途切れる。主柱穴と推定されるピットが6基確認され、他に3基がある。地床炉・石組炉は中央の同位置に重複する。方形石組炉は1辺1~3個の大礫を用い、隙間に鶏卵大礫を込める。炉の南西隅に接して、水磨により凹面ができた安山岩大礫を埋め込む。埋土：斜面上方は深さ約60cm、下方は周辺の遺構検出プラン確認作業の過程で掘削され浅い。黒褐色・暗褐色砂質シルトを基調とし、埋没中に3・4層細粒砂が周囲から流入。11層が上層の床面で10層地床炉が伴う。12層はそれ以前の地床炉。13層は下層の床面とそれに伴う石組炉内に堆積。遺物：埋土量の割に少ない。土器は第Ⅵ群4類(125-44・45)、5類b種(同47)、7類c種(同46)などがあり、破片資料に5類が多い。3類c種(同43)は他より先行すると思われる。石器は石鏃12点など剥片石器32点、礫塊石器12点。他に土製円板(194-3)・土製耳飾(197-1)各1点、ミニチュア土器(195-5・6)・土偶(198-5)各2点、石棒・丸石(252-1・7)各1点。時期：出土土器から中期後葉5期。

SB 21 図版 54・73、125・126・174 PL24、43 位置：Ⅷ P20、Ⅷ Q16・21

経過：第2調査面で検出した。弥生時代住居跡 SB05 に北西壁上部を切られる。規模・形状：主軸は推定の根拠がないが、南北 4.5 m、東西 4.1 m の円形。施設：壁際を中心に小ピット 8 基が掘り込む。やや南寄り方形石組炉がある。大礫の隙間に鶏卵大礫を込める。埋土：層厚 35 cm 前後、黒褐色砂質シルトが基調。炉周囲に貼床。遺物：土器は第Ⅵ群 5 類 b 種 (125 - 47・48・126 - 49・174 - 418・419)、6 類 (126 - 50・51・174 - 422)、7 類 c 種 (同 52・53・174 - 421) などがある。石器は剥片石器 13 点、礫塊石器 8 点。他に土製耳飾 1 点 (197 - 2)。時期：出土土器から中期後葉 5 期。

SB 22 図版 62・74、126・127・174 PL25、43 位置：Ⅷ R01・02

経過：SB10・11・23～25 は検出面が浅く、ほぼ同時に確認された。SB25 に北東壁上部を切られる。炉のみ残存した SB24 を切る。規模・形状：水路で北西壁が掘削され、現存主軸 6.1 m・現存直交軸 5.0 m。外径はやや不整の円形。施設：楕円形のベッド状遺構に沿ってピット 10 基。中央に長方形石囲炉。扁平礫埋設部だけ溝状に掘り、火床は床面レベルと同じ。炉方向とベッド状遺構の形態から南西側へ出入口を推定。埋土：黄褐色砂質シルト基調で水平堆積。5 層は赤化しており、堆積中に火を焚く行為があったと推定される。遺物：出入口部 P2 中に頸部から上を欠損した第Ⅵ群土器 (126 - 55) を横倒しの状態で埋納する。奥壁の P1 上面に磨石と磨製石斧欠損品を埋置する。土器は第Ⅵ群 2 類 a 種 (126 - 54)、b 種 (同 55)、3 類 c 種 (同 56)、8 類 (127 - 57・58) が出土。石器は石鏃 13 点 (209 - 9～13) など剥片石器 20 点、礫塊石器 13 点。他に焼成粘土塊 1 点。時期：中期後葉 4 期。

SB 23 図版 62・75、127 PL25、44 位置：Ⅷ M22

規模・形状：炉を含めて北西側約半分を水路に掘削される。炉から判断した長軸 3.1 m・短軸 4.2 m が残存。不整の円形または楕円形。施設：残存部分はベッド状遺構の内側と推定され、ピット 4 基が廻る。中央に長方形石囲炉。炉石の外側に土器片を貼る。炉方向から南側に出入口を推定。埋土：黄褐色砂質シルト基調、炭多く含む。土器片を多量に含む。遺物：床面上に土器破片が多い。土器は第Ⅵ群 2 類 b 種 (127 - 60)、3 類 b 種 (同 61)、4 類 (同 62)、7・8 類 (同 63～65) が出土。同 59 は第Ⅴ群の火焔型土器である。他より時期は古い。石器は剥片石器・礫塊石器各 4 点。時期：中期後葉 4 期。

SB 24 図版 62・74 PL25 位置：Ⅷ R01

規模・形状：炉跡のみ。SB22・25 埋土内に床面等が確認できず、両者に切られたものと推定。施設：長方形石囲炉。火床は強く被熱する。遺物：なし。時期：炉形態から中期後葉。

SB 25 図版 62・76、127～129・174・175 PL25、44 位置：Ⅷ M22・Ⅷ R02

規模・形状：北西壁を掘削され、炉から判断した現存主軸 3.84 m・現存直交軸 3.0 m。やや不整の円形。施設：残存部分はベッド状遺構の内側と推定され、ピット 6 基が沿う。中央に長方形石囲炉。炉方向とベッド状遺構の形態から南西側へ出入口を推定。埋土：黄褐色砂質シルト基調、炭多く含む。大礫、土器片を多量に含む。遺物：床面上からほぼ完形に復元できた土器が 7 個体出土し、一括性が高い。128 - 72 は倒置状態で出土した。土器は第Ⅵ群 2 類 a 種 (128 - 69)、4 類 a 種 (同 70・71)、7 類 (129 - 75～78) が出土。石器は剥片石器 13 点、礫塊石器 4 点。他に土偶 1 点 (198 - 6)。時期：出土土器から中期後葉 4 期。

SB 26 図版 55・75、130 PL25、45 位置：Ⅷ Q08

経過：周辺に分布する配石遺構群 SH12～19 の検出時に炉跡が現れ、住居跡と確認された。埋土は残存しない。規模・形状：炉及び南側にある埋裏から南北主軸と推定。炉辺部敷石の敷石住居跡と思われる

が、規模・形状不明。南南東に続く礎もプラン内の可能性がある。本跡の付属施設の可能性がある。炉形態から斜面下方の南側を出入口と推定するが、張出部の存否は不明。炉を通る現存主軸5.1m、直交軸は4.8mの円形。施設：ピットは確認されない。炉は4枚石の方形石組炉で2枚分がない。南側90cmに石蓋された埋裏がある(130-81)。主体部が径4~5m程度とするとSH13は西壁あたりとなる。SH14・17は出入口部東側に位置し、SH16・17等同じ検出面にある一連の配石遺構と考えた遺構群の一部は、敷石住居跡の施設となる可能性がある。遺物：遺物は埋裏81のみ。第Ⅶ群1類に属し、加曾利EⅢ式新段階。石器は打製石斧1点、礫塊石器8点。丸石1点(252-8)。時期：埋裏と住居形態から中期末葉期。

SB 27 図版60・77、130・131 PL26、45 位置：Ⅷ Q09・10・14・15

規模・形状：炉を通る南北を主軸、東西を直交軸とするといずれも4.6mの不整形円形。施設：中央に隅丸方形の掘方をもつ炉がある。炉南半から外側の床面に及ぶ焼土がある。石の抜き取り痕が見られないため地床炉と考える。北東・南西壁際の一部に短い周溝がある。壁際に形状がやや不規則なピット7基、その内側に直径がやや大きいピット9基がある。埋土：灰黄褐色粘質シルト基調。壁際に厚い3層と凹みに堆積する2層との境界で土器・礫多出。遺物：遺物はやや少ない。第Ⅵ群1類b種(130-82・83)、3類b種(同84)、8類(同87)、13類(131-89)、14類鉢形(同88)がある。85・86は第Ⅶ群に属し、他より後出と考えられる。埋土中に土坑などがあつた可能性がある。石器は打製石斧8点など剥片石器15点、礫塊石器17点。他に土偶1点(198-7)。時期：主体的な出土土器から中期末葉2期。

SB 28 図版76 位置：Ⅷ Q15

経過：近接する住居跡SB27等とともに検出された。本跡床面の痕跡はなく、弥生時代住居跡SB09にも切られる。施設：長方形石組炉の一部と推定。火床は炉外と同じレベルで、北東~南西に主軸をもつ。遺物：なし。時期：炉形態から中期末葉と推定される。

SB 29 図版62・78、131・132 PL26、45・46・70 位置：Ⅷ R02・03・07・08

経過：SB41、SK1401とともに検出された。埋土の平面的な観察により、両遺構に本跡の北西部を切られることが分かった。規模・形状：南北を主軸とすると4.5m、東西を直交軸とする現存長4.06mの不整形円形とも隅丸方形不整形円形。施設：南壁際に部分的な周溝がある。南東に偏って土器埋設炉があり、口縁部・底部を欠損した縄文施文土器を用いる。壁際に大きめ、炉付近に小さめのピット9基が不規則に並ぶ。埋土：灰黄褐色・黒褐色砂質シルト基調。全体に炭粒が混じる。遺物：床面上から比較的多くの土器が出土した。第Ⅶ群1類(131-91~94・132-99)、3類(131-90)、6類(132-100)、7類(131-98・132-101~103)、9類台付鉢形(131-95)などがある。90は本群の中でもやや新しいと考えられる。石器は剥片石器12点、礫塊石器9点。他に土偶1点(198-8)。時期：出土土器から中期中葉。

SB 30 図版60・79、132~134・175 PL26、46・47 位置：Ⅷ R01・06

経過：第2調査面で北東-南西に1列に連なる住居跡の1軒として検出された。サブレンチの断面観察から北壁がSB32の南壁と接し、南壁上部がわずかにSB37に切られると推定した。整理時に出土土器の様相からSB37が古く、本跡が新しいと考えるにいたつた。規模・形状：床面が高まる南西部を出入口と推定すると、炉を通る現存主軸5.9m、直交軸5.7mの円形。施設：炉は方形石組炉で、炉石2枚を抜かれる。炉に接して北東壁の間に大形ピットがあり、多量の土器が出土した。炉の南西・南東側に不整形の落ち込みがあり、この間は床面が高い。ほかに不整形を含むピット8基がある。ピット6から小形土器(133-112)が出土した。東壁で逆位埋設土器が確認されたが、本跡埋没後の遺構と推定される。埋土：

にぶい黄褐色・褐灰色砂質シルト基調。炭、土器小片を含む。層厚約40cmと厚く、床面上に堆積する6層は一括性の高い多量の土器を含む。遺物：15個体を実測図化した。第Ⅵ群2類a種(133-107・109)、b種(132-105・106・133-108・110・111)、4類(175-448)、5類(133-104)、7類c種(同114・115)、8類(134-117)、9類(同116・118)などがある。175-456は第Ⅴ群に属す火焔型土器である。石器は石鏃22点(209-19~23)、打製石斧11点(215-9~11)など剥片石器46点、磨石30点(231-29~232-35)、石皿4点など礫塊石器41点。他に焼成粘土塊2点、土偶7点(199-11~13)、土製耳飾・簪形土製品(197-3・10)各1点、三角埴形石製品1点(253-12)。時期：出土土器と住居形態から中期後葉4期。

SB 31 図版62・80、134~137 PL27、47・48 位置：ⅧR07・12

経過：第2調査面でも確認された。第1検出面の弥生時代住居跡SB12に東壁を切られる。規模・形状：南東部に出入口があり、炬を通る主軸6.36m、直交軸6.02mの楕円形。施設：壁際に断続して周溝が廻り、南東部で途切れる。ベッド状遺構が全周囲に作られ、主柱と思われる6基の大ピットと、中小の浅いピットが沿っている。中央の炬は卵形の掘方前方に石組があり、後方は1段深く拳大礫と炭が底面に集まる。火床は床面より低く、強く被熱する。埋土：灰黄褐色砂質シルト基調で、全体に炭を含む。深さ65cm前後を測り、層厚の厚い4層には完形品を含む多量の土器と大礫、炭塊・骨片が含まれる。遺物：土器21個体を実測図化した。第Ⅵ群3類a種(134-120)、大形のc種(136-132)、4類(134-121~124)、7類(135-127~130)、8類(134-126・133~137-137)、10類(135-131・137-138)、14類有孔罎付土器(137-139)などがある。石器は石鏃37点(209-24~32)、磨製石斧7点(219-12~15)など剥片石器63点、磨石24点(232-36~233-46)、台石6点(246-3・4)など礫塊石器40点。他に土製円板1点、土偶3点(199-14・15)。時期：出土土器から中期後葉4期。

SB 32 図版60・81、137 PL27、49 位置：ⅧR06・11

経過：第2調査面でも隣接住居跡とともに確認された。南壁がSB30北壁と接する。南西壁は本跡確認前にあけた先行トレンチで掘削されている。規模・形状：周溝が切れる南側を出入口と推定し、炬を通る主軸は5.0m、直交軸は4.7m以上の円形。施設：炬には円形に近い掘方がある。上部は破壊されたと推定され、埋土上部に小形壺形土器(137-140)と土器底部、やや下層に大礫数個が埋められていた。壁際に周溝が廻り、南側は途切れる。中小のピット23基が炬からやや離れて不規則に掘り込まれる。埋土：にぶい黄褐色・褐灰色砂質シルト基調。炭、土器小片を含む。遺物：遺物は少ない。石器は剥片石器5点、礫塊石器3点。他に焼成粘土塊1点、簪形土製品1点(197-11)。時期：土器140は中期後葉と推定され、本跡の時期を示すものである。

SB 34 図版63、137 PL27、49 位置：ⅧR12

経過：第1調査面の弥生時代住居跡SB12に削平され、中期中葉住居跡SB35の北壁から1m程度北に炬跡のみが確認された。施設：南側に大礫1個が残り、石組炬の一部と推定される。北側には南に口を傾けた小形深鉢を埋設する。複式炬の可能性もある。遺物：埋設土器(137-141)は底部を欠損し、結節縄文が施される。剥片石器4点、磨石1点。他に土偶2点(199-16)。時期：埋設土器から中期後葉であろう。

SB 35 図版63・82、137~139 PL28、49・50 位置：ⅧR12・13・17・18

規模・形状：北東~南西の主軸6.2m、直交軸5.0mの楕円形。施設：壁際のやや内側に中小ピット

10基が廻る。中央に地床炉があり、埋設土器が抜き取られたような円形の凹みがある。北西側には床面直下に扁平円礫が疎らに埋設される。古い床面の施設の可能性がある。埋土：北西側は深さ約60cm。灰黄褐色・にぶい黄褐色砂質シルト基調。中層の2層には完形品を含む多量の土器、石器と炭を含む。下層の4層は炭・焼土層。床よりわずかに高い部分で全面に建築部材の可能性がある炭化材が分布する。遺物：床面から浮いて比較的多くの土器が出土し、16個体を実測図化した。第V群1類(137-143~146)、3類(138-147~138-150)、7類(137-142)、8類(138-151・152)、11類(同153・139-155・157)、12類の小形鉢(同156)、有孔罎付土器(138-156)などがある。137-146は小形の火焰型土器で、その他の土器と比較してやや新しいと考えられる。石器は打製石斧9点など剥片石器23点、礫塊石器20点。他に土製円板(194-4~6)・土偶(199-17)各2点、石棒1点。時期：出土土器から中期中葉の古い段階。

SB 36 図版63・83、139・176 PL28、50 位置：Ⅷ R17・22

規模・形状：炉形態から南北主軸と推定すると4.8m、直交軸4.7mの不整円形。施設：壁際と炉周囲に大小のピット13基がある。炉は南側に偏り、五角形石組炉で、大礫の隙間に小礫を埋め込む。火床は床面より低い。埋土：灰黄褐色粘質シルト基調。炭、小骨片、土器小片を含む。遺物：少量である。土器は第VI群1類a種(139-158)のほか、2・3・7類などの破片(176-478・480~484)。石器は剥片石器10点、礫塊石器3点。他に土製円板・土偶(200-18)各1点。時期：出土土器は中期後葉2~4期が多いが、炉形態は5期に適合する。

SB 37 図版60・84・85、139~143 PL28、50・51 位置：Ⅷ Q15・20、Ⅷ R11・16

経過：発掘時にはサブトレンチ断面観察から、北壁がSB30の南壁上部をわずかに切ると考えた。整理時に土器の様相から本跡が先行すると考えるにいたった。規模・形状：南西部に出入口があり、炉を通る主軸8.34m、直交軸7.2mの円形。施設：壁際に周溝が廻り、ベッド状遺構を備える。両者は南西側で途切れ、床面がスロープ状に高まる。東壁下のベッド状遺構に埋設土器がある。炉は長方形石組炉で、扁平礫埋設部だけを溝状に掘り込む、火床が床面レベルと変わらない構造。床面周囲に大小のピットがあり、東側に密である。ピット1上面に石皿が立てて埋設されている。埋土：灰黄褐色砂質シルト基調。深さ70cmに達し、層厚の厚い4・5層には完形品を含む多量の土器と大礫が見られる。5層には炭・焼土塊が混じり、焼き火の痕跡らしい部分がある。遺物：土器は33個体を実測図化した。第VI群2類a種(139-159~161)、3類a種(140-164・165)、b種(同166~168・141-170・171)、c種(同172・173)、7類(142-178~180)、8類(同181・143-183~190)、10類(同191)、12類(141-175・176)などがある。141-177は第V群、142-182は第VII群に属す。石器は石鎌22点(210-36~42)、磨製石斧6点(219-16・220-17)など剥片石器48点、磨石25点(233-51~234-59)、石皿6点、台石3点(246-5)など礫塊石器44点。他に焼成粘土塊2点、土製円板1点、ミニチュア土器6点(195-19・20)、土偶6点(200-19~23)、土製耳飾1点(197-4)、異形凹石1点(253-13)。時期：出土土器から中期後葉3期。

SB 38 図版63・85、177 PL27 位置：Ⅷ R17

経過：本跡確認前に南側に先行トレンチが掘削され、断面で確認された。SB35南壁外1mほどの位置にあり、切り合い関係にある。施設：石組炉の北隅と推定。欠損した石皿を火床に伏せる(242-9)。この石皿はSB35出土品と接合した。遺物：隣接して第V群土器片が少量出土した(177-500~503)。石器は剥片石器4点、礫塊石器2点。時期：炉の形態から中期後葉と推定される。

SB 40 図版 60・86、144・200 PL29、52 位置：Ⅶ Q15

経過：断面観察により、東壁がSB37西壁上部をわずかに切るが、床面を掘り下げすぎた。西壁には上層の小規模な土坑が集まる。規模・形状：炉南側に扁平円礫を敷いた部分敷石住居。先に検出され調査が済んでいた配石遺構 SH11 が出入口部にあたり、本跡の付属施設の可能性がある。炉形態から斜面下方の南側を出入口と推定するが、張出部の存否は不明。炉を通る現存主軸 5.1 m、直交軸は 4.8 m の円形。施設：炉の南側 90 cm に石蓋された埋甕（144 - 192）がある。さらに南側の敷石先端部に低い立石、炉の南東約 2 m の位置にも立石がある。中小のピット 11 基が炉の周囲と壁際に不規則に掘り込まれる。埋土：褐灰色砂質シルト基調。炭やや多く含む。壁高が低く埋土も浅い。遺物：遺物量は少ない。144 - 192・193 は第Ⅶ群に属し、第Ⅵ群 194・195 は先行する土器と推定される。石器は剥片石器 4 点、礫塊石器 12 点。他に土製円板 1 点（194 - 7）、土偶 2 点（200 - 24・25）。時期：埋甕と住居形態から中期末葉期。

SB 41 図版 62・87、144～148・177・178 PL29、52～54 位置：Ⅷ R02・03・07

経過：大形土坑 SK1401 が東壁から炉東半を切る。土坑の調査を先行し、上半部 2 m ほどを掘り下げた後崩落防止の安全対策を講じ、本跡を調査した。SB29 を切る。規模・形状：外形は楕円形で南西部に出入口があり、炉を通る主軸 6.8 m、推定直交軸 5.1 m 以上。施設：壁際に断続的に周溝が廻り、ベッド状遺構を備える。両者は南西側で途切れる。床面とベッド状遺構、周溝付近に大小のピットがある。ピットは南西端にやや密で、出入口施設の可能性がある。やや奥壁寄りに方形石組炉がある。火床面は床面より約 10 cm 低い。埋土：灰黄褐色砂質シルト基調。深さ約 60 cm で、層厚の厚い 3・4 層には完形品を含む多量の土器と大礫が見られる。3 層には炭・骨が多く含まれる。遺物：一部破壊されながらも、遺存状態良好な多量の土器が出土し、24 個体を実測図化した。第Ⅵ群 2 類 a 種（145 - 198・199）、b 種（144 - 197・145 - 200・201）、4 類（145 - 202～146 - 209）、7 類（同 210～147 - 215）、8 類（148 - 217）、9 類（同 218）、14 類約手土器（同 219）などがある。石器は石礫 16 点（210 - 43～45）など剥片石器 30 点、磨石 15 点（235 - 63・64・66～236 - 69）など礫塊石器 19 点。他に焼成粘土塊・土偶（200 - 26）・土製耳飾（197 - 5・6）各 2 点。時期：出土土器から中期後葉 4 期。

SB 42 図版 60、178 PL29 位置：Ⅷ R06

経過：SB30 の検出時、西壁上に半分程度が残存する炉跡が確認された。SB30 に切られると推定される。規模・形状：掘方に拳大礫 20 数個が詰まっている。新潟県に見られる複式炉が破壊されたものか。赤化していないが、集石土坑の可能性もある。遺物：第Ⅴ群土器少量（178 - 517・518）。時期：中期、不詳。

SB 43 図版 61・88、148・178 PL30、54 位置：Ⅷ Q20・25、Ⅷ R16・21

経過：上層の遺物包含層調査後、隣接する住居跡 SB44・45 とともに平面及びサブトレンチでプラン確認を行った。西壁が SB44 と接近している。規模・形状：南西部に出入口があり、炉を通る主軸・直交軸とも 7.2 m の不整形円形。施設：壁際に周溝が廻る。斜面下方の南東壁は不明。ベッド状遺構を備えていた可能性がある。炉はコ字形石組炉で、扁平礫埋設部だけを溝状に掘り込み、火床は床面レベルと同じ。床面周囲にピット 15 基があり、北側は大形、南側には重複のためか不整形、小形のものが多い。7 本主柱か。埋土：暗褐色シルト基調。床面上に多量の炭と焼土塊が分布。遺物：本跡に伴う土器は比較的少ない。復元できたものは第Ⅵ群が多く、7 類（148 - 220）、8 類（同 221）、13 類（同 222）がある。次いで第Ⅴ群が最も多いが、破片ばかりである（178 - 519～525）。石器は磨製石斧 4 点など剥片石器 14 点、礫塊石器 14 点。他に土偶 1 点（200 - 27）。時期：炉形態及びそれと時期的に整合する、最も遺存状態がよい復元個体 222 から、中期後葉 2 期。

SB 44 図版 61・89、149・150 PL30、54・55 位置：Ⅷ Q 20・25

経過：SB43に記した。南壁がSB45北壁を切る。東壁がSB43と接近している。規模・形状：南西部に出入口があり、炉を通る主軸6.6m・直交軸推定6.3mの円形。施設：壁際に周溝が廻る。斜面下方の南東壁は不明。ベッド状遺構を備えていた可能性がある。炉はコ字形石組炉で、SB43と同じ構造。床面周囲にピットが16基ほどあり、重複するものがある。7本主柱か。埋土：炭化物が少ない灰黄褐色シルトと、多量に含んで黒褐色を帯びる層が互層をなす。北側は壁高30cmほどで、埋土1～9層はすべて北から流入している。遺物、礫は床から浮いたレベルに多い。遺物：第Ⅵ群が多く、1類b種（149-223）、3類b種（149-224・225）、8類（149-227～150-230）がある。次いで第Ⅴ群の破片が相当量混じる。石器は剥片石器16点、礫塊石器21点。他に焼成粘土塊2点、土偶3点。時期：炉形態及びそれと時期的に整合的な土器群から、中期後葉2期。

SB 45 図版 61・90、179 PL30 位置：Ⅷ Q24・25、Ⅷ V05

経過：SB43に記した。SB44に北壁、SB46に南壁を切られる。規模・形状：炉を通る北～南を主軸とすれば現存長5.3m、西・東壁が残る直交軸は5.9mの円形。施設：壁際に断続的に周溝が廻る。やや内側にピット5基が規則的に掘られ、主柱穴であろう。中央に奥壁側の石が残る炉があり、焼土の範囲は楕円形である。埋土：床面近くまで掘削してプランを確認したため、極めて浅い。黒褐色シルト基調。遺物：第Ⅴ群に属す少量の破片である（179-537～544）。石器は剥片石器6点。他に土偶1点。時期：出土土器から中期中葉。

SB 46 図版 61・91、150・151 PL30、55 位置：Ⅷ Q24・25、V04・05

経過：短軸ベルト南面に掘削したトレンチにより、早くから存在は確認されていた。下層のSB67ほぼ全面に重なり、プランを識別できずに西壁を外側まで掘りすぎた。SB45の南壁を切る。規模・形状：南側に出入口が推定され、炉を通る南北の主軸6.5m、東西の直交軸推定5.1mの楕円形。施設：西壁は不明ながら、壁際を周溝が廻る。SB67との重複部分はピットが検出できず、プラン外の北壁際のピット4基が本跡に属すと考えた。中央奥壁寄りに長方形石囲炉。埋土：黒褐色砂質シルト基調で炭が混じる。遺物：比較的少量である。土器は第Ⅵ群7類（150-231）、10類（151-233）、13類（151-234・235）が出土した。第Ⅴ群の232は他より古い土器である。石器は剥片石器10点、礫塊石器11点。時期：出土土器から中期後葉4期。

SB 47 図版 63・92 PL29 位置：Ⅷ R22、Ⅷ W02

規模・形状：主軸は特定できず、南北・東西とも約3.0mの不整形円形。北側で深さ約20cmあるが、重機による掘削時には約10cm上位で輪郭不明瞭の落ち込みを確認し、プラン確定のためさらに掘削したために浅くなった。施設：壁の立ち上がりはない。底面は硬化していない。ピットともいえない小さな凹み6か所見られる。埋土：灰黄褐色シルト基調。遺物：なし。時期：本調査区の縄文時代遺構がすべて中期であるため同時期と推定するが、通常の住居跡とは異なる落ち込みである。

SB 48 図版 55、179 位置：Ⅷ Q13・18

経過：第2調査面で早く確認された。後に確認された、約1.5m西にあるSB68に切られたものである。施設：小規模な楕円形石組炉。火床は周囲と同じレベル。遺物：第Ⅵ群土器片が少量出土した（179-551・552）。時期：炉形態から中期後葉であろう。

SB 49 図版 54・92、179 位置：Ⅷ P19・20

経過：Ⅷ P20・25、Ⅷ V01には北西～南東方向の土地境界がかかり、本跡とSB50・57・60は南西側

を一段低く掘削されている。いずれも第2調査面で確認された。規模・形状：残存部は北壁付近のみで東西4.8m、直交方向約1.0m。不整形円形か。施設：ピット1基のみ。埋土：深さ30cm程度、暗褐色シルト主体。遺物：第VI群土器の破片少数（179-553・554）。石器は台石1点。他に土製円板1点。時期：出土土器から中期後葉。

SB 50 図版54・92、179 位置：ⅧP25、ⅧQ21

経過：SB49に記した。弥生住居跡SB05に北東側を掘削される。SB17と切り合い関係にあるが新旧不明。規模・形状：残存部は北西～南東3.6m、直交方向約1.8m。不整形形で小形か。施設：ピット1基のみ。埋土：ほとんど残存しない。遺物：小形土器の底部（179-555）のみ。石器は磨石1点。時期：少量の遺物及び隣接する住居跡群の時期に近いと推定されるため、中期後葉であろう。

SB 51 図版56・93、151・179 PL31 位置：ⅧV01・02・06・07

経過：SB49に記した。本跡側が一段低いため、全体の壁上部を掘削される。規模・形状：炬長軸の南北主軸5.5m以上、直交軸5.2m以上の不整形円形。施設：遺構平面図の外周線はベッド状遺構であり、7本主柱のピットが掘り込まれる。床面に小ピット7基がある。削平された北西壁下に周溝が残る。炬は長大なコ字形石組炬で、SB43・44と同じ構造。埋土：層厚20cm弱。暗褐色・黄褐色砂質シルト基調。遺物：比較的少ない。土器は第VI群1類b種（151-236・237）、8類（151-238・239）がある。石器は剥片石器・礫塊石器各12点。時期：炬形態及びそれと時期的に整合的な土器から中期後葉2期。

SB 52 図版70・71、125・152・179 PL24 位置：ⅧV07・08

経過：SB19北壁に段差があり、土器に時期差が認められたため別の住居跡の存在を推定した。規模・形状：残存する北壁付近は東西4.8m、南北現長1.1m。円形か。施設：小ピット3個がある。埋土：10・12層を本跡の埋土と考えたが、SB19埋土とは極めて近似する。残存部は深さ50cm弱、暗褐色砂質シルトが主体。遺物：SB19出土として図示した125-41は、最上層から出土したが、本跡に帰属する可能性がある第V群12類の台付土器。152-241は同群の縄文施文土器と推定される。179-560～565も同群に属す。石器は剥片石器3点。時期：出土土器から中期中葉。

SB 53 図版58・95、152・180 PL31 位置：ⅧV07

経過：遺物包含層調査時に、復元可能と思われる個体を含む土器がまとめて出土したが、遺構のプランが確認できなかったため原位置記録・付番して取り上げた。その後サブレンチで床面・炬・壁を検出し、土器の時期も考慮してSB54に東壁を切られた住居跡と確認した。斜面下方の南側は壁が残存しない。規模・形状：主軸は推定できず、東西5.50m、南北現長3.7m。不整形円形か。施設：大小ピット6基が掘り込まれる。やや北寄りに埋喪炬がある。深鉢上半部（図化できず）を正位に埋設し、掘方に別個体の破片（180-573）がある。埋土：残存部は深さ15cm前後で、暗褐色砂質シルトが主体。遺物：図示した土器のうち152-246・180-569・573は住居跡遺物、その他は先に住居範囲内から出土した包含層遺物である。第V群1類が主体を占める。石器は磨石1点。時期：出土土器から中期中葉。

SB 54 図版58・95、152・153・180 PL31 位置：ⅧV07

経過：SB53に記した。中期中葉のSB53を切る住居跡である。斜面下方の南側はSB52・19と切り合うが、それらの調査を先行したために掘削された。規模・形状：残存部は北壁東西長約3.0m、北壁から炬まで南北2.9m。北壁は直線的で形状不明。施設：北壁際周溝の一部がある。中規模のピット4基、地床炬2か所がある。埋土：残存部は深さ最大20cm弱で、黒褐色・暗褐色砂質シルトが主体。遺物：図示した土器はすべて住居跡プラン確認前に付番取り上げた包含層遺物のうち、住居範囲内から出土した

ものである。第VI群5類b種(152-248)、7類(153-249)の実測個体がある。第V群に属す152-247・180-574・575はSB53に帰属するであろう。時期：出土土器から中期後葉5期。

SB 55 図版57・96、153・180 PL32、56 位置：VII Q17・22・23

経過：第2調査面の住居跡密集地点の一角に位置する。サブトレンチによりプラン・切り合いを確認した。SB66北壁を切る。北西のSB61とも切り合うであろう。規模・形状：炬形態から南側を出入口と推定。炬を通る南北の主軸5.9m、直交軸5.4mの円形。施設：壁際に周溝が廻り、南側にはない。南半部にはベッド状遺構が見られる。南西壁が浅い掘り込みの隅丸方形に1.2mほど張出し、焼土面がある。本跡の付属施設と考えた。大小ピット27基が壁際に多く掘り込まれる。切り合いもあるため建て替えの可能性がある。中央に長方形石組炬がある。埋土：深さ30cm弱と浅い。灰黄褐色砂質シルト基調。全体に炭を含む。遺物：土器は比較的少ない。第VI群2類b種(153-251)、3類a種(153-250)が見られる。180-585は第V群の唐草文系土器1期に属す。石器は多数出土した。石鏝12点(210-48・49)、スクレイパー11点(214-16~18)など剥片石器は33点、礫塊石器は磨石17点(237-80~238-84)がある。他に土偶1点。時期：炬形態と出土土器から中期後葉3~4期頃。

SB 56 図版53・94、180 位置：VIII P13・18・19

経過：第2調査面で確認された。弥生時代のSB03に南西側半分程度を掘削されていた。規模・形状：残存部最大長の西南西-東北東5.7m、南北4.5m以上の円形または楕円形。施設：北壁際に一部周溝の痕跡。北壁寄りの方形石組炬は1辺1個の巨礫を用い、一隅の隙間に鶏卵大礫を埋める。埋土：層厚20cm弱、灰黄褐色・黒褐色シルト基調。遺物：少量の土器は第VI群2類?(180-587)、5類?(同586)がある。石器はスクレイパー1点。時期：炬形態と出土土器から中期後葉5期。

SB 57 図版56・97、153 PL32、56 位置：VIII P25、VIII Q21

経過：第2調査面で確認された。土地境界にかかり、南西側を掘削されていた。小規模の土坑SK1799、集石土坑SH38などに切られる。北壁がSB21と接する。規模・形状：残存部は南北4.2m、北壁付近5.1mの隅丸方形か。施設：大小ピットが8基ある。中央部に方形石組炬があり、半分以上石を抜かれる。埋土：黒褐色・暗褐色シルトが主体。遺物：少量の土器には第VI群5類b種(153-252)、9類(同253)などがある。石器は剥片石器8点、礫塊石器3点。他に土偶1点。時期：炬形態と出土土器から中期後葉5期。

SB 58 図版57・98 PL32 位置：VIII Q19

経過：第2調査面で確認された。SK1773・1796に壁の一部を切られる。北東壁がSD14とほとんど接する。規模・形状：炬形態から南側を出入口と推定し、炬を通る南北の主軸、直交軸とも5.2mの円形。施設：壁際に周溝が廻り、東側は断続的。5本主柱の大ピットと小ピット数基が掘り込まれる。ピット7上層から欠損した石皿(242-11)が出土した。炬は中央に方形石組炬があり、北・西の石を抜かれる。埋土：にぶい黄褐色・灰黄褐色砂質シルト基調。炭、土器小片を含む。遺物：遺物は少なく破片のみ。第VI群4類(181-595・596)、5類(同592)、7類(同598・599)、第VII群(同600)がある。石器は剥片石器11点、礫塊石器5点。他に焼成粘土塊2点、土偶4点(200-28・201-29・30)。時期：炬形態と出土土器から中期後葉4~5期と推定。

SB 59 図版55・99、153・181 PL32、56 位置：VIII R17・22

経過：第2調査面で確認された。北半部上層を中期末葉の住居跡SB07に切られるが、床面には及ばない。

規模・形状：炉と全体形から南北主軸と推定され5.1 m、直交軸3.5 mの楕円形。**施設**：北側の周溝外側は内側より3cmほど高い。段差の内側から東壁に周溝がある。中規模のピットがおおむね四隅の位置に9基掘り込まれる。やや北側に偏って方形石組炉があり、巨礫どおしが接する部分に割れた灰石の破片を埋め込む。火床は床面より低い。**埋土**：灰黄褐色シルト基調で層厚30cm程度。床面から浮いて径50cm大の礫が散在した。**遺物**：比較的少量である。土器は第VI群5類（153-254・255）、7類（181-601）などがある。254は逆位で出土した。石器は磨石1点。土偶1点。**時期**：出土土器から中期後葉5期。

SB 60 図版56・100、181 PL33 位置：Ⅷ Q21、Ⅷ V01

経過：南西側は土地境界に当たり掘削されていた。東壁がSB62を切る。SB20との切り合いは新旧不明。**規模・形状**：北東側のみ残存し北西-南東4.2 m、直交方向1.8 m、ほぼ円形。**施設**：確認できない。**埋土**：黒褐色シルト。**遺物**：少量の土器破片のみで、第V群（181-606）、第VI群（同605・607・608）がある。石器は剥片石器3点、礫塊石器4点。**時期**：出土土器と切り合いから中期後葉4・5期。

SB 61 図版56・101、154・181 PL33、56 位置：Ⅷ Q17・20

経過：西壁の一部をSB20に、北壁をSK2432・2433に切られる。南側半分程度は周辺の遺構検出・プラン確認作業の過程で掘削され、南東側のSB55との切り合い関係ははっきりしない。**規模・形状**：住居形態不明。炉は検出されなかったため主軸不明。現存部分は南北約3.8 m、東西約4.8 m。北半部の壁線は不整形。**施設**：中小ピット6基が不規則に掘り込まれる。SB55との境界部分に正位で出土した深鉢（257）がある。屋外埋裏と考えSK2431を付したが、底部は本跡床面と同レベルにある。凍結と乾燥のため埋土・掘方は観察できなかった。**埋土**：層厚20cm弱で黒褐色・暗褐色砂質シルト基調。**遺物**：遺物は少量。第VI群7類a種（154-256）、小破片（181-609～611）がある。SK2431の154-257は8類である。石器は剥片石器・礫塊石器各4点。土偶1点。**時期**：出土土器から中期後葉2～4期。

SB 62 図版56・100、181・182 PL33 位置：Ⅷ Q16・17・21・22

経過：第2調査面の遺構密集地点にあり平面観察では識別しにくく、サブレンチで断面観察した。西壁をSB60に切られる。北側半分がSB69の南側上層を占める。SB20南壁との切り合いは前記のとおり本跡が切られると推定。**規模・形状**：炉形態から推定し、南北の主軸5.2 m以上、直交軸4.5 m以上、ほぼ円形。**施設**：中央に五角形石組炉がある。1辺1・2個の礫を用い隙間に鶏卵大礫を定める。**埋土**：プラン確認時に掘削され深さ約20cm弱。黒褐色砂質シルトが基調。炉周囲の2層黄褐色シルトを貼床と考えたが、その外側は床面が褐色土のため周溝・ピットは検出できなかった。**遺物**：少量である。土器は破片資料で、第VI群1類b種（181-613）、2類（182-619）、3類（181-612）、5類（同615）、7類（182-617・618）などがある。SB69の遺物が混入している可能性がある。石器は剥片石器・礫塊石器各8点。**時期**：炉形態及び出土土器から中期後葉4・5期。

SB 65 図版57・102、182 PL33 位置：Ⅷ Q23・24、Ⅷ V03

経過：第2調査面の遺構密集地点にあり、サブレンチの断面観察で最後に確認された。西壁上部をSB66に、北壁を大形土坑SB1801に切られる。北西区の埋土上部に石棒を埋納した土坑SK1800が掘り込む。**規模・形状**：不整形を呈し、主軸を推定できない。等高線方向の断面B-B'が8.2 m、直交方向は最大約7.3 m。山側は壁高約40cmで床面は傾斜に沿ってやや傾く。**施設**：壁寄りに中小ピット20基が掘り込まれる。炉は地床炉が2か所ある。**埋土**：灰黄褐色砂質シルト基調。炭少量含む。**遺物**：遺物量は少ない。第VI群の中期土器を除外し、第II群前期土器を図示した。半截竹管状工具で格子目文などを

描く182-621-623、繊維を含まない羽状縄文土器同624-626は刈羽式に属す。石器は剥片石器2点。時期：発掘時には中期土器片が目付いたため中期に帰属すると推定したが、少量ながら出土土器と住居形態から、整理時に前期後葉と判断した。

S B 66 図版57・103、182 PL33 位置：Ⅷ Q22・23、Ⅶ V02・03

経過：第2調査面の遺構密集地点にある。短軸ベルト南面に掘削したトレンチにより、早くから存在は確認されていた。SB55に北壁を切られる。東側下層の縄文前期住居SB65西壁上部を切ることは明らかであるが、先にSB65を調査する手順となり東壁を掘削してしまった。規模・形状：残存壁と形態から南北主軸と推定され、南北5.7m以上、直交軸推定約4.5mの楕円形。施設：西・北壁際を周溝が廻り、南側にはない。壁際に大ピット4基がある。炉は中軸線上に2か所ある。奥壁寄りの方形石囲炉は大礫の四隅に拳大礫を込める。出入口寄りには底部を用いた土器埋設炉がある。埋土：20cm程度と浅い。灰黄褐色砂質シルト基調で床面上は炭多い。遺物：少量である。土器は第Ⅵ群2類（182-627）、4類（同628）、7類（同629・630）、8類（同632）がある。石器は剥片石器10点、磨石1点。時期：中期後葉4期。

S B 67 図版61・104、182 PL30 位置：Ⅷ Q24・25、Ⅶ V04・05

経過：第2調査面で上層のSB46が検出され、先に調査されたため遺物が混じった可能性がある。SB46埋土の大部分を掘削されるが、床面には及んでいない。北側のSB45とも切り合うであろう。規模・形状：東西の長軸5.4m、東西の短軸4.5mの楕円形。施設：東壁隅に短い周溝がある。不規則に並ぶ大小のピット25基以上を検出したが、SB46のピットを含む可能性がある。南に偏って地床炉がある。埋土：灰黄褐色砂質シルト基調。遺物：第Ⅴ群土器が少量出土した（182-633-637）。石器は剥片石器11点。他に土偶・土製耳飾・垂飾各1点（197-7・13）。時期：中期中葉。

S B 68 図版57・105・106、154-157・182・183 PL33、56・57 位置：Ⅷ Q12・13・17・18・19

経過：第2調査面で遺構検出中に、Ⅷ Q18-01杭の周囲で地山との土色の差から大形の落ち込みが確認された。竅穴住居跡を想定して当該杭を交点とする基準線方向の十字形にサブトレンチを掘削し、壁を確認して4分割で埋土を掘り下げた。規模・形状：炉形態と柱穴配置から、北東-南西の主軸7.7m、直交軸7.0mの円形。出入口と推定される南西側がわずかに張り出す。施設：壁際に周溝が全周し、北西・南東側はわずかに壁から離れる。8本主柱の大ピットが掘り込まれる。ピット7・12、ピット8・11の2か所で重複があり、建て替えの可能性がある。炉は中央に大形の方形石組炉があり、大部分石を抜かれる。直下に楕円形の掘方をもつ跡があり、柱穴の重複と整合する。ピット1に埋設土器（156-271）がある。柱の抜き取り後埋設したと思われる、床面より深く据えて上部に角礫を置く。通常の埋土なら出入口部のピット10に埋置するであろう。埋土：深さ90-50cmと、本地区で最も埋土が厚い。にぶい黄褐色・灰黄褐色砂質シルト基調、周囲から流入。3層は大小の礫、土器破片、炭片、焼骨などを多量に含む。4・5層の境界にも大礫が多い。遺物：埋土量に比例して多量であり22個体を実測図化した。全体が残る個体は見られない。第Ⅵ群5類（154-258・261-263・156-271）、6類（154-259・260・155-265-267）、7類（同268・269）、8類（同270・156-272）、9類（同275）、10類（157-278・279）、11類の沖ノ原式（154-264）、曾利系土器（156-276）、把手付小形壺？（同277）など、多彩な土器群が見られる。石器は石鏃12点（210-57-60）、打製石斧18点（216-23-217-

30)、磨製石斧7点(220-24~30)など剥片石器45点、敲打礫5点(225-15~18)、磨石31点(238-87~240-104)など礫塊石器43点。他に焼成粘土塊4点、土製円板(194-9~11)・土偶(201-31・32)各3点、土製耳飾・尊形土製品各1点(197-8・12)。時期：出土土器から中期後葉5期。

SB 69 図版56・107、157 PL24、57 位置：Ⅷ Q21・22

経過：遺構密集地点の下層にあり、サブトレンチ断面で確認した。上層は西側をSB60、北側半分をSB20、南側半分をSB62に掘り込まれるが、床面には及んでいない。炉内のピット16はSB20のものと推定。規模・形状：炉形態から推定し、南北の主軸6.6m以上、直交軸5.6m以上、楕円形と推定。施設：北・西壁に部分的に周溝があり、ベッド状遺構が認められる。壁際を中心に大小のピット14基が掘り込まれる。中央に長方形石組炉がある。礫埋設部を溝状に掘る火床の浅い構造で、南端には平坦面を上円礫を埋める。南壁の内側に長径約35cmの円礫を半分程度埋め込んだ立石がある。埋土：深さ約25cm。黒褐色シルトが基調で、全体に地山の粘質シルト小塊と炭が混じる。遺物：少量であるが、一括性は高いと思われる。土器は第Ⅵ群3類c種(157-280)、7類(同281)、8類(同282~284)がある。石器は剥片石器6点、礫塊石器3点。時期：出土土器から中期後葉2あるいは3期。

(2) 土 坑

土坑は8区で942基、9区で6基を検出した。8区の分布範囲は時代を問わず調査区北側の平坦面、標高329.0m以上の区域に集中し、それ以下には極めて少ない。北側の平坦面では、第1調査面で縄文時代から近世まで各時代の遺構が同一検出面で確認され、土坑の埋土に明瞭な差は見られない。土坑は第2・3調査面でも検出され、それらの大部分は縄文時代の遺構と思われる。確実な遺物を伴うか、規模・形状、分布状況等から推定の根拠が見いだせない限り時期を特定できず、縄文時代遺構分布図に掲載した土坑にも他時代の土坑が含まれていることであろう。特に小規模なものは時期推定の根拠が乏しい。

本項では多数の土坑のなかから土器・礫等の出土状況が図化・写真記録され、墓坑、貯蔵穴等の性格が推定できる特徴的な例を選んで記述する。礫はほぼすべてが安山岩である。少数の9区遺構は、遺構番号の傍らに「(9区)」と記す。次項も同じ。

第1類：完形に近い土器を一回り大きな掘方に埋納する土坑。屋外埋葬を含む。下記4例がすべてである。

SK 1750 図版57・109、161 PL36、59 位置：Ⅷ V03-02

土器がほぼ露出する状態で検出されたため、土坑は平面円形、浅い皿状の底部付近のみであった。第Ⅱ群5類前期未葉の波状口縁深鉢(161-304)を逆位に置く。当該期唯一の遺構である。

SK 1551・1552 図版55・109、159 PL36、58 位置：Ⅷ Q02-12・16

約80cm離れて二つの土坑が南北に並ぶ。SK1551は径50cm・深さ40cm、1552は径56cm・深さ26cmを測る。SK1551の159-292は完形、SK1552の同293は胴下部を欠損した、第Ⅶ群1類の波状口縁深鉢を正位に埋める。検出面に口縁部が見え、2点とも波頂部を全単位欠損するが故意かどうかは不明。SK1552から磨石1点出土。

SK 1570 図版60・109、160 PL36・59 位置：Ⅷ R06-15・16

平面は円形。口・底径とも土器口縁部とほぼ等しく、口径約30cm。第Ⅵ群7類の中形深鉢(160-300)を逆位に埋納する。

第2類：径50~100cm規模の掘方に、大形破片やほぼ完形の土器を埋納する土坑。下記の土坑が、実測可能な土器を出土した本類土坑のほぼすべてである。

SK 1553 図版 63・110、159 PL36、58 位置：Ⅷ W02 - 04

78 × 54cmの楕円形、深さ 17cm。器高約 50cmの第Ⅵ群3類大形深鉢(159 - 295)を横位に埋める。調査区の低所に位置し土坑分布域から大きく離れる。

SK 1571 図版 56・110、160 PL36、59 位置：Ⅷ Q21 - 12

70 × 50cmの楕円形、深さ 13cm。口径約 50cmの第Ⅵ群7類大形深鉢上半部破片(160 - 301)を重ねて埋める。

SK 1660 図版 59・110、161 PL36、59 位置：Ⅷ Q21 - 12

径50 × 44cmのほぼ円形。2段に掘り込み深さは56cm。底部欠損した第Ⅵ群12類台付鉢?上半部(161 - 302)を埋土上部にほぼ正位に埋める。

SK 1678 図版 59・110、161 PL36、59 位置：Ⅷ Q14 - 04・08

径92 × 84cmのほぼ円形、深さ 44cm。第Ⅳ群7類、現存高約 50cmの大形深鉢破片(161 - 303)を重ねて埋土上部に埋める。

SK 1860 図版 57・110、161・184 PL36、59 位置：Ⅷ Q23 - 01・02

径72 × 約 50cmの楕円形、深さ 56cm。現存高 20cm弱を測る、第Ⅳ群5類(161 - 305)・9類(同306)の中形深鉢2個体の破片を重ねて埋土下部に埋める。他に 184 - 697がある。

SK 1764 (9区) 図版 115、193 PL39、63 位置：Ⅷ N23 - 01

トレンチで北端を切られる。北北西-南南東の現存長軸 106cm・短軸 82cmの楕円形、深さ 11cm。ほぼ中央と推定される埋土上部に第Ⅷ群3類の深鉢(193 - 917)を逆位に埋納する。

第3類：長径 80 ~ 150cm 前後の円形または楕円形掘方の上面に、大礫から巨礫を1~数個と土器破片を埋めた土坑。

SK1558以外の4基は礫・土器が検出面より浮いた状態で確認された。本来は埋土に被覆されていたのであろう。「埋土上部」等の標記は調査時点の状況記録である。実測可能な土器を出土した本類に属す土坑は、下記の5例がほぼすべてである。

SK 1522 図版 54・111、158 PL37、58 位置：Ⅷ Q01 - 15、06 - 03

長径約 120cmの楕円形であるが、掘方の実測図・写真記録がない。埋土上部に長径 30 ~ 50cm 大の礫4個を重ね、隙間や下部に現存高約 45cm、第Ⅴ群1類大形深鉢破片(159 - 291)の外面を上に向け挟み込む。他に磨石類1点(240 - 105)がある。

SK 1558 図版 159 PL37、58 位置：Ⅷ Q02 - 16

上部にSK1552がある。底面に扁平礫・柱状礫各1個と、寝かせた中形深鉢を並べて置く。土器(159 - 294)は第Ⅴ群に属し、現存高約 32cm。

SK 1559 図版 55・111、160 PL37、59 位置：Ⅷ Q08 - 09・13

土坑掘方の実測図・写真記録がない。埋土上部に長径 50cm 大の扁平礫1個を置き、同じ面に復元現存高約 32cm、第Ⅴ群1類大形深鉢破片(160 - 296)の外面を上に向けて置く。

SK 1569 図版 63・111、160 PL37 位置：Ⅷ R17 - 14・22 - 02

148 × 106cmの不整楕円形、深さ 15cm。埋土上部に長径 30cm 大の礫1個を置き、同じ面に第Ⅵ群8類深鉢2個体(160 - 298・299)の底部破片を置く。

SK 1667 図版 59・111、184 PL37 位置：Ⅷ Q15 - 05

径70 × 64cmのほぼ円形、深さ 32cm。埋土上部に長径 20cm ~ 拳大の礫10個程度を置き、同じ面に

第VI群3類深鉢の把手大破片1個(184-690)を置く。

第4類：長径80～150cm前後の円形または楕円形掘方の上面または埋土中に、扁平・柱状などの巨礫1～数個を埋めた土坑。

SK 1765 図版59・112 位置：ⅧQ14-10・13

114×80cmの楕円形、深さ32cm。やや北寄りに底面より浮き長径40cm巨礫1個を置く。

SK 1793 図版57・112 PL37 位置：ⅧQ19-09・10

直径114cmの隅丸方形、深さ62cm。埋土中に長径20～50cm大の円礫・柱状礫数個を埋める。

SK 1796 図版57・112 位置：ⅧQ18-08、19-05

半分程度を切られ、推定径約160cmの円形、深さ現存37cm。底面付近に長径30cm大の柱状礫1個を埋める。

SK 1803 図版57・112 PL37 位置：ⅧQ19-13・24-01

128×88cmの楕円形。埋土上面の中央に1個、東寄りに長径40cm大の扁平礫2個を重ね置く。

SK 2265 図版55・113 PL37 位置：ⅧQ07-10・11

径82×70cmのほぼ円形、深さ24cm。埋土上面に多孔石(251-15)と長径30cm大の台石(248-12)各1個を置く。

SK 2408 図版55・113 PL38 位置：ⅧQ13-06・10

径94×80cmの不整形円形、深さ27cm。埋土上部に長さ50cm大の柱状礫1個を置く。

SK 2409 図版57・113 位置：ⅧQ13-15・Q18-03

径88×80cmの不整形円形、深さ約34cm。埋土上半に長さ60cm大の柱状礫1個が斜位に埋まる。

SK 2410 図版55・113、184 PL38 位置：ⅧQ12-11

径138×104cmの楕円形、深さ16cm。上面中軸上に長さ50cm大の扁平礫2個を水平に置く。第VI群土器184-701が出土した。

SK 2411 図版55・113、184-702 位置：ⅧQ08-15・16、13-03・04

径122×68cmの不整形楕円形、深さ40cm。底面付近に長さ50cm大の扁平礫3個を不規則に置く。第VI群5類土器184-702が出土した。

第5類：長径80～150cm前後の規模、平面形が楕円形の土坑。

SK 1557 図版55・109 PL38 位置：ⅧQ12-05、17-03

径70×54cmの楕円形、深さ約34cm。底面東側に黒曜石剥片、磨石類(240-106)各1個を置く。他に石鏃(211-64)がある。黒曜石剥片は長さ約12cmを測り、全地区から出土した黒曜石中最大である。

SK 1722 図版61・109 位置：ⅧQ20-05・09

径130×76cmの楕円形、深さ29cm。

第6類：径50～100cm前後の円形掘方に、拳大礫かやや大きい礫が多数入る集石土坑。

SK 1700 図版60・109、184 PL38 位置：ⅧR16-02

径44×40cmの円形、深さ18cm。径10～20cm大礫数個が入る。礫は表面が赤化している。埋土には1cm大の炭が多量に混じる。第V群土器184-692が出土した。

SK 1752 図版57・109、184 PL38 位置：ⅧQ18-11・12

径76cmの不整形円形、深さ約17cm。鶏卵大から径20cm大礫が約30個入る。一部は表面が赤化している。第VI群12類土器(184-693)、磨石1点(240-112)が出土した。

第7類：平面形が径100cm以上の円形、深さ50cm以上の土坑。

SK 1560 図版61・114、160・184 PL38 位置：Ⅷ R21 - 09・13・14

径179×158cmのほぼ円形、深さ約84cm。南側上部は50cmほど広く、浅い2段の掘り込みか切り合いがある。上面に大礫が多く、第V群土器(160-297)は上面、第VI群土器の破片184-680-683は埋土から出土した。石器には石鏃1点、スクレイパー2点、打製石斧1点(217-31)、礫器1点(223-8)、棒状敲石1点(227-11)、磨石類7点(240-107・108)各1点がある。

SK 2272 図版55・114 位置：Ⅷ Q07 - 04・08

径158cmの円形、深さ65cm。埋土全体に炭が混じり、土器片は1・2層に多く含まれていた。

SK 2375 図版59・114、184 位置：Ⅷ Q09 - 13

上面をSD12に切られる。径170×147cmの楕円形、深さ105cm。第VI群4類土器(184-699)と石鏃1点(211-66)が出土した。

SK 1401 図版62・114、148・158・183 PL38、58 位置：Ⅷ R02 - 16、03 - 13、07 - 04、08 - 01

第2調査面で検出された。SB29・41を切る。上半部は人力により半截して掘削し、深度が大きくなったため下半部は住居跡の調査後重機で地山ごと掘削した。径328×306cmの円形、深さ約484cm。ほぼ垂直に掘り込まれ、深さ320cmで段が付き、やや勾配のある掘り込みとなって底面に至る。最下層からは水が染み出した。調査時には垂直壁の大形土坑が埋没した後、上部にフラスコ形土坑を掘削したものと推定した。遺物は①層と②上部に多い。出土した土器(158-285～290・183-660～666)は第VI群に属し、中期後葉4期である。多量の遺物を出土した同時期のSB41と共通し、両者から出土した釣手土器(148-219)は同一個体と考えられるため、SB41から転落したものであろう。他にミニチュア土器(196-29)、磨製石斧(221-31)がある。②層上部以下は遺物が含まれなくなり、中部層はシルト主体、下部層は砂主体となる。周囲の地山は砂・シルト・粘土の堆積で、礫は全く含まれていない。剥落した地山の堆積によって複雑な断面を呈する埋土が形成されたと推定される。

本跡が第2調査面で検出されたこと、規模・形状、及び縄文中期の出土遺物から、縄文時代の貯蔵穴と推定した。隣接するⅧ R02・03地点に、第1調査面で検出した近世以降のピット群が分布することから、当該期の遺物は皆無であるが井戸跡の可能性も捨てきれない。

第2～5類の土坑は、一般的な縄文時代の土坑墓の規模・形状に適合するものである。第2類はやや小さく平面形が円形に近いので、貯蔵穴の可能性もあろう。復元可能な土器の出土が貯蔵穴を否定する条件には当たらず、浅いもの、深いもの両者を含んでおり、いずれか性格を推定しがたい。その他の類は掘方の規模・形状が一致している。上面の土器や大礫は、地表から見える状態であれば墓標の性格を備えていたであろう。柱状の礫は埋納されたもの、上面に転倒したもの、傾きながらも検出面に頭を出したものなどが認められる。いくつかは本来墓標の立石であったと推測する。第3・4類土坑の分布には、Ⅷ Q区の一部など多少集中する部分が看取できる。第5類は枚挙にいとまない。これらの分布域は住居域と一部重複するが、住居域の内側から平坦面に土坑域を形成していると見られる。

第7類は貯蔵穴の性格が推定される規模・形状である。SK1401は格段に規模が大きく深いので、別の機能を考えるべきであろうか。本類の条件に適合する土坑は少数である。SK1560は平坦面から隔たる低所にあり、SK2272・2375は平坦面の住居分布域内側に9m離れる。近似する規模・形状の土坑は散見

されるが、集中する傾向は見いだせない。第6類は集石土坑であり、SH07・38も同類と考えられる。礫の被熱から調理施設と推定されるものである。該当する土坑は少数であり、分布にはまとまりが見られない。

(3) 配石遺構

配石遺構としたものは、大小の礫を複数配置した様々な規模・形状のものが見られる。発掘時に遺構記号SHを付したのものの中には、本報告では集石土坑としたもの（SH07・38）のほか、廃棄場の中の礫集中部分（SH04）など、意図的に配置された遺構とは認められないものも含まれていた。それらを除外し21か所を配石遺構とする。8区では低標高部分を除いた中央部、ⅧQ区東半からⅧR区西半の標高328.5m～330.0m地点の平坦面から緩斜面に移る部分にある。分布状況を仔細に見ると、①SB26周辺の一群、②SB26・37南側の一群、③SB65、SD14上層の一群に大別される。ここでは群別に記述する。

配石には台石等大形の礫塊石器が含まれる場合があり、それらは遺構の構成石材と考えられる。石鏃等の小形剥片石器は遺構に伴うか判断は難しい。土器は第3類土坑のように確実に伴うものは認められなかった。破片を土器図版に図示したが、遺構の時期を推定する根拠としては弱いものであるため、記述は略す。なお、配石遺構の石材はほぼすべてが安山岩である。

9区では、前項に記した縄文後期中葉の土坑墓SK1764の他、下部に土坑を伴う配石遺構SH33・34が検出された。これらの一群を④として記述する。

① SH 12～14・16～19 図版61・116 PL34 位置：ⅧQ03・04・08・09

敷石住居跡SB26の炉中心からの位置を示しながら、個々の遺構の形状等を記す。

SH12は3.6m北北西。長さ60cm以上の柱状礫を含む数個の大～巨礫が1.3mほど列状に並ぶ。下部には楕円形土坑SK2156がある。

SH13は約1.5m西。数個の巨礫が南北2mほど1列に並ぶ。磨石（247-121）・丸石（252-10）各1点が出土。SH18は約5.5m南南西。中心部は10数個の扁平大～巨礫が密集し、外側はやや散漫に分布する。打製石斧4点、大形の砥石1点（222-48）、磨石類5点（247-122）、多孔石2点出土。下部には埋土中に大～巨礫が入った楕円形土坑SK2406・2407・2412・2384がある。

SH17は3.4m南にあり、SB26出入口部敷石とほとんど接する。大～巨礫数個が散在し、長さ60cm以上の柱状の礫下部には楕円形土坑SK2414がある。磨石3点、敲打痕ある礫1点出土。SH14は約3m南東。柱状の巨礫数点が扇状に並ぶ。磨石・多孔石各1点出土。

SH16はSB26炉から最寄りの部分で4.8m東、最も遠い北端で約9m。北北東から南南西に列をなす、長さ約6.5mの列石状の遺構。平置きではなく、扁平の礫を用いた立石が2・3枚重なって西側に傾いた状況が見られる。磨石2点、台石1点出土。南西へ延長すればSH14・17の散漫な巨礫も本跡の一部となる可能性がある。SH16の約1m東側に溝跡SD12が並走するよう並ぶ。時期の根拠に欠けるが、検出面は配石遺構に用いられた礫の下部とほぼ同じ。

SH19はSD12を挟んで7.6m南東にある。巨礫10数個がやや散漫に並ぶが、内径1.5m程度の環状にも見える。土製円板1点（194-12）、磨石3点、棒状敲石1点出土。下部には大小の楕円形土坑SK1881～1888がある。

これら配石遺構の最も遠い部分となるSH16北端、SH19東端でも10m以内の範囲となる。SB26を一般的な規模の敷石住居跡とすればSH13は西壁の範囲内に入る。他の配石遺構も検出面が同じであり、南

北約15m、東西約10mの範囲に形成された一体の配石群の可能性もある。また、柱状の礫を含む配石遺構の下部からは、第2調査面で楕円形土坑が検出された。SH13・16を除いた配石遺構のいくつかは、前項第4類のような土坑に伴う墓標であった可能性もある。

②SH05・06・08～11・27・28・30 図版60・117 PL34・35 位置：ⅦQ14・15・19・20、ⅧR11・16

329.0mの等高線に沿って、西から東へSH05・11・28・27・08・30・09・10の順に並ぶ。SH09・10の南側3mにSH06がある。

SH05は東西2.6mにわたり、1個おきに扁平の巨礫の長軸をずらして2列並べる。磨石2点、多孔石1点出土。

SH11は敷石住居跡SB40の出入口付近のわずかに高いレベルにあり、埋裏の蓋石と近接する。北西から南東に向け、長さ約3.3m、幅約1.6mの範囲に大～巨礫30個前後を並べる。最も幅広い部分は4列ほどに見え、一部礫が抜かれた可能性がある。巨礫の間に大礫が散在する。磨石・敲打痕ある礫各1点、多孔石5点(251-16)出土。

SH28はSB37の出入口にある。径約40cmの範囲に拳大の礫10数個が集中する。SH27・08・30(範囲のみ図示)はSB37の南側埋土上部にある。東西約2.5mの範囲にわずかな間隔をあけて3か所の集石が連なる。径50cm前後の範囲に玉砂利様の中礫を敷いたような状態で、掘方は確認できない。

SH09はSB37の東壁埋土上部にある。壁線と同じ南北方向2.8mの範囲に、柱状礫の長軸をそろえて2・3列に並べる。列に直交して欠損した大形石棒(252-4)を交える。ほかに磨石2点、敲打礫1点(225-20)、多孔石4点出土。SH10はSH09の東側1mにあり、扁平礫8個を東西に長い約1.4×0.8mの範囲に並べる。SH06は等高線方向に柱状の礫6個を長さ1.6mの直線状の1列に並べる。棒状敲石1点出土。

上記の群から離れて、ⅧR13にSH31、R22にSH26がある。いずれも径70cm前後の範囲に扁平礫3個前後を並べる。後述するSH01のようなものかもしれないが、積極的に配石遺構ともいえない。

③SH02・03・32 図版57・118 PL35 位置：ⅦQ23・24、ⅧV03

SH02はSB65東壁の約1m外側にあり、SD14の南端付近約20cm上層を横切る。等高線に沿って東西約4.7mにわたり、柱状礫・扁平礫の長軸をそろえて直線状に1・2列並べる。磨石1点、多孔石1点出土。

SH03・32は縄文前期後葉の竪穴住居跡SB65の埋土上部にある。SH03は大形土坑SK1801上部にもかかる。北壁に沿って東北東-西南西約2.5mにわたり、柱状礫・扁平礫20個ほどを直線状に並べる。立石が南側に傾いたような状況が見られる。磨石(247-119)・石皿・多孔石各1点出土。SH32は南壁際に位置し、扁平礫10個ほどを1.5×1.0mほどの範囲に並べる。石皿(243-33)・多孔石各1点出土。

SH01はSB65中央付近に位置し、径50cmほどの範囲に扁平礫数個を並べる。下部に長径75cm、深さ約40cmの土坑があり、第4類土坑とされる。

④SH33・34(9区) 図版115、193 PL39 位置：ⅧS07・08

早く着手した弥生時代住居跡SB64南壁のプランを当初広くとらえ、SH33が南壁際を切るものと考えた。SB64の南東側にあるSH33の調査の進捗により、下部に土坑が存在する縄文後期の配石遺構であることが明らかになり、SB64南壁を再確認してSH33が住居範囲外にあり、南壁に接する遺構と判断した。

SH33は一連の遺構の北西側、SH34は約3.5m離れて南東側に位置し、両者ともおおむね北東-南西方向の直線上に礫を並べる。SH33は礫が連続する部分の長さが約2.4m、散漫な不連続部分を含めると4.5mほどになる。SH34も連続・不連続部とも近似した長さである。SH33の下部に楕円形土坑SK2449

があり、80×50cm、深さ40cmを測る。SH34は下部の二つの土坑上部を結んで作られる。SK1757は150×100cm、深さ約30cm。南壁に立石2個を設ける。SK2450は95×85cm、深さ25cm。低い立石状の礫がある。配石遺構の中間にあるSK1756は105×95cm、深さ30cm。底面に巨礫がある。

SH34からは第Ⅶ群8類に属す193-919-922、SK1756・1757から同918が出土した。9区の縄文土器は、ⅧM24区の谷状部から出土した第Ⅴ・Ⅵ群の中期土器以外ほぼ同時期に属し、配石遺構及び土坑の時期を示す。SK1757の立石が示すように、配石遺構と下部の土坑は一体の遺構と考えられる。

SH34から8m前後東にある南北4.2mのSH36、南東にある南西-北東約2.6mのSH37は列石状である。土坑も共存遺物もないが、周辺に自然礫は散在していないため、同時期の配石遺構の可能性はある。

(4) 溝跡・流路跡

SD 12 図版55・59・116 位置：ⅧQ04・09・13

標準土層Ⅱ層下部からⅢ層上面で確認した。用地界に当たる北北東から南南西に約19mにわたり検出された溝跡。平坦面を等高線方向に走り、比高差は20cm弱。幅40～50cm、深さ5～20cm。時期を推定する根拠は乏しいが、縄文時代の土坑SK2375・2387などの上層にある。配石遺構SH16・14の方向と並行し、検出面が礫の下部と同じ。

SD 11 図版56 位置：ⅧQ21・22

東北東から南南西に約12mにわたり検出された溝跡。等高線方向に走り、比高差は約10cm。幅30～50cm、深さ5～10cm。1か所枝分かれする。時期を推定する根拠は乏しい。

SD 14 図版57・61・108 位置：ⅧQ19・20・24

北東から南南西に約12.5mにわたり検出された溝跡。標高329.0mの等高線に沿ってやや湾曲して緩斜面を走る。比高差20cm前後、幅40～60cm、深さ10cm前後。南端付近の本跡検出面より20cm上層に配石遺構SH02が作られ、本跡が確実に縄文中期の遺構である根拠となる。

SB 15 図版58、170 PL39、63 位置：ⅧV08・09

住居跡SB19と同じく、南側半分が工事用道路にかかり、2分割の調査となった。北側半分の検出時に竪穴住居跡の可能性がありSB15を付番したが、後に流路跡と判明した。北から南へ等高線に直交し、約9.6mにわたり検出された。幅3.5～4m、深さ45～60cm、比高差は検出面で90cm、底面で120cmを測る。底面は凹凸があり側面にも段差があるため、人為的掘削による溝より、千曲川に注ぐ沢状の流路跡と考えた。礫とともに土器が比較的多く出土した(170-363-366)。大部分が第Ⅴ群の新しい時期に属すもので、釣手土器(365)は希少器種である。

本跡から約12m北でSD14が途切れている。本跡北端の検出面標高が327.9m、SD14南端の検出面が328.519mであり、比高差約60cmである。両者は方向を同じくし位置も近いので、一つの遺構であった可能性が高いと思われる。中間で傾斜が強まっているため、雨水などによる穿鑿が進行して本跡の規模となったのであろう。

NR 101 図版63 位置：ⅧR16・17・21

SB43・36住居跡の調査後、下層の遺構・遺物包含層の有無を確認するため重機で掘り下げたところ、自然流路と思われる落ち込みを確認し精査した。樋門工事中心線が本跡を横断するためこの部分は調査していない。等高線方向の長さ約10m、幅7.5mを検出した。遺物は少なく磨石・石錘各1点出土(223-3)。

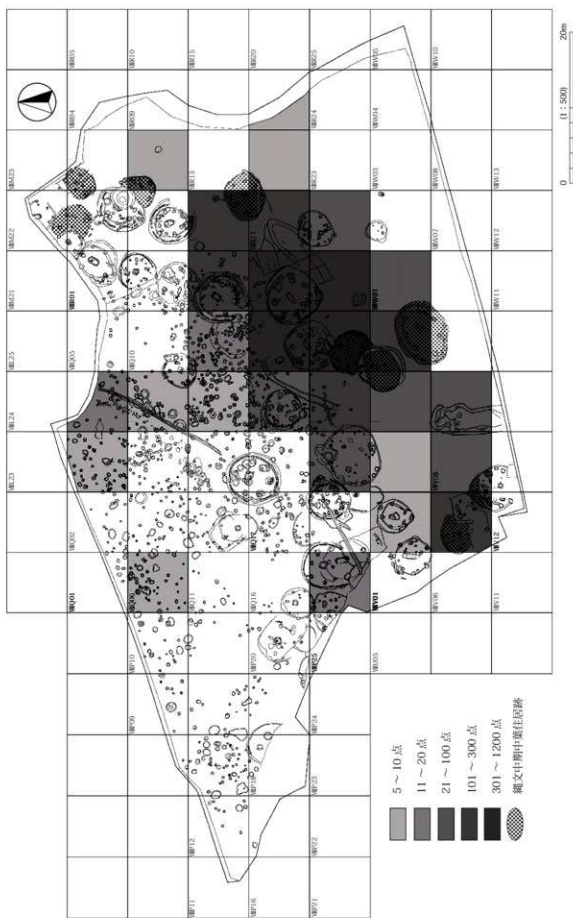
(5) 廃棄場

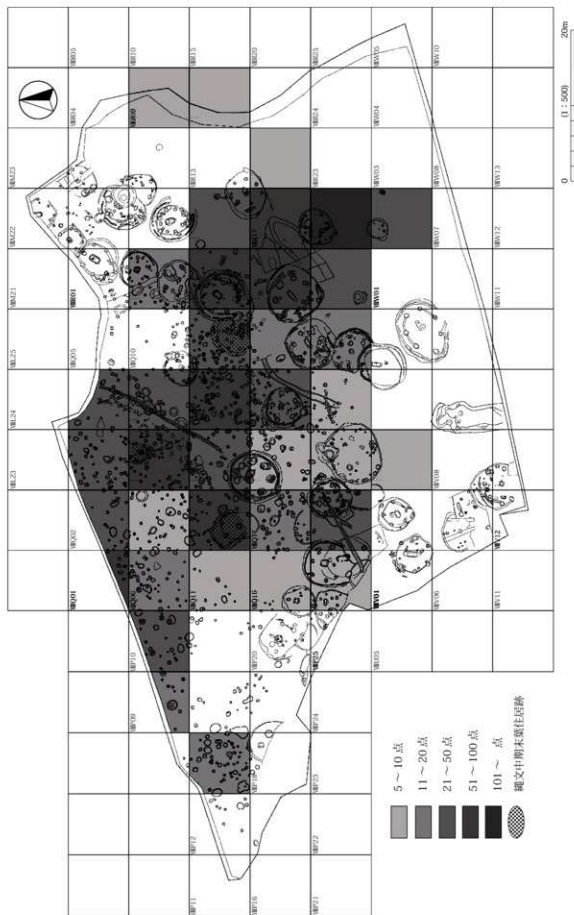
8区で検出された縄文時代の竪穴住居跡53軒のうち、第Ⅱ群4類土器の前期後葉に属す住居跡1軒、第Ⅴ群土器の中期中葉に属す住居跡9軒、第Ⅶ群土器の中期末葉に属す住居跡3軒、炉跡のみ6軒、遺存状態不良、遺物皆無のため時期推定不可能な住居跡2軒を除くと、32軒が第Ⅵ群中期後葉期に属す。遺物包含層出土土器も住居跡数に比例し、多量の第Ⅵ群土器が本区全体から出土している。特にⅧ Q19・20・24・25、Ⅷ R16・17・21・22、Ⅷ V05、Ⅷ W01からは集中して遺物が出土し、調査範囲の中ではこの地点が廃棄場と推定される。ここでは、計数・計量した住居跡出土土器、及び図化掲載の候補として抽出した、その他の遺構と包含層出土土器以外の土器の分布状況にふれる。抽出資料を別に扱ったが、遺物包含層における土器分布の傾向は反映されていると考える。対象とするのは、中期中葉の第Ⅴ群と、中期末葉の第Ⅶ群土器である。接合・分類の作業工程のなかで、2mグリッドが明らかな破片数を集計し、8mグリッド単位で図示したものが、挿図9・10である。いずれも8mグリッド当たり1～4点は除外し、5点以上を網点の濃淡によって表現した。当該時期の竪穴住居跡は粗い網点で示した。

第Ⅴ群土器は①5～10点、②11～20点、③21～100点、④101～300点、⑤301点以上の5階層で区分した。⑤はⅧ Q25の1174点を最高にⅧ Q20、Ⅷ R16・21の4グリッドに集中する。これに次ぐ④もⅧ Q24、Ⅷ R11・12・17で、⑤のグリッドに接する。次いで③はⅧ Q19・23、Ⅷ R22、Ⅷ V04・08・09、Ⅷ W01と、最高集中部に隣接する低所に広がる。第Ⅴ群土器を出土した住居跡SB35・45・67・16がこの部分に分布し、SB35とSB16の間が顕著な集中部分となっている。この位置には中期後葉第Ⅵ群土器の古い段階に属すSB43・44がある。この2軒の埋土は極めて厚く、上層から出土した礫と遺物量はおびただしいものであった。SB43・44出土土器は第Ⅵ群土器が主であるが、第Ⅴ群土器は中葉期の住居跡以外では最多量に近い。特にSB44には第Ⅴ群土器が多量である。この2軒が、先に形成されていた第Ⅴ群土器の遺物包含層を掘削して築造したことを示す状況は、土層断面からは確認できなかった。一度掘削された包含層遺物が、SB43・44廃絶後に周囲から再堆積した可能性も、2軒の上方(北側)に濃密な第Ⅴ群土器の包含層が見られないため、斜面から流入したとは推測しかねる。平坦面における第Ⅴ群土器の少なさを考慮し、人為的作用を推定するなら、SB43・44住居跡の埋没後、整地を交えて地表に散乱していた前代の土器、土製品、石器、礫などを集中的に投棄した可能性が考えられる。

第Ⅶ群土器は第Ⅴ群の半数以下であり、①・②は第Ⅴ群土器と共通、③21～50点、④51～100点、⑤101点以上の5階層とした。⑤はⅧ R22の210点1か所、④はⅧ Q01・08・12・14、Ⅷ R11・16・17である。③はⅧ Q02～04・09・13・15・19・22、R12・21、Ⅷ W02である。残った空間は遺物密度の低い②・①が埋め、調査範囲縁辺の空白地点を除き、異なる階層が全体にモザイク状に広がる状況である。第Ⅶ群土器を出土した住居跡SB07・26・40が所在するグリッドは、遺物が比較的高密度の④・③の地点に当たる。住居跡が少数、占地が狭い割に土器分布範囲は広い。配石遺構が集中するSB26周辺、SB40・37上層周辺に出土量が多く、平坦面を中心とする活動の痕跡を示すものと見られる。配石遺構の時期については、中期末葉期住居跡を含めた遺構分布状況から、第Ⅶ群土器の時期を推定してきたが、土器分布はそれを補強する根拠となる。

第Ⅶ群土器の時期には、8区では少数の住居と配石遺構が営まれる。前章で報告した1～5・7区に大規模な廃棄場が形成され、居住域は調査範囲外の北側に営まれたと推定される。主たる生活域が沢を越えて上流側に移動したことになる。憶測ではあるが、生活拠点の移動という変動の時期に、廃棄された8区の整地と配石遺構の築造が行われたのではないかと推測される。上流にある、おそらく大規模な日常的生活域とは異質





第 10 図 千田遺跡 8 区縄文中期第 VII 群土器分布図

な、精神生活にかかわる要素を備えた領域として再出発し、敷石住居の居住者は配石遺構にかかわる活動を維持したのではなかろうか。

2 遺物

(1) 縄文土器

A 概要

ほぼ縄文中期に限られる8区の集落域では、50軒を超える竪穴住居跡や、土坑及び遺物包含層から多量の遺物が出土した。本報告では8区における集落変遷と土器様相に応じて、新潟県の時期区分に近付け、曾利Ⅰ式とⅡ式、唐草文系土器第Ⅰ段階と第Ⅱ段階の間で中葉・後葉を区分した。中葉期土器を第Ⅶ群土器とし、本区で圧倒的多数を占める中期後葉期土器群を第Ⅵ群土器とした。第Ⅴ群土器は、9軒の竪穴住居跡と土坑、遺物包含層から出土しているが、住居跡のほとんどは後葉期住居跡に切り替わって遺存状態が良くないため、遺構出土資料の一括性があまいで、実測個体も少ない。むしろ土坑と遺物包含層出土資料に良好な実測個体が見られる。第Ⅵ群土器は、住居跡の切り合いとともに豊富な完形個体を含む一括資料が示す土器様相から、1～5期までの5期に区分した。さらに、中期末葉期の加曾利Ⅲ式期土器群(第Ⅶ群土器)を6期として加えて、中期後葉期の土器変遷をたどることとする。

なお、第Ⅴ群土器は、東北南部の大木7b・8a式、新潟県の火炎土器様式(馬高式)、長野県中・南信から南関東に分布する井戸尻編年の新道・藤内・井戸尻・曾利Ⅰ式、唐草文系土器第Ⅰ段階、群馬県から東信の新巻類型・焼町土器、北陸の上山田・天神山式に並行し、第Ⅵ群土器は、おおむね大木8b式、板倉式、古府式、加曾利Ⅱ式、曾利Ⅱ式、唐草文系土器第Ⅱ段階に並行する。

遺物説明は住居跡・土坑等出土の実測個体を優先し、資料多数の第Ⅵ・Ⅶ群土器については少数資料などを除いて遺物包含層出土資料、破片資料は記述を略す。個別の記述に当たっては、「第Ⅶ群第Ⅰ類」を「Ⅶ群Ⅰ類」のように略記する。

B 縄文中期中葉・第Ⅶ群土器の分類

第Ⅰ類：隆帯文系土器

貼付け隆帯の周囲に半截竹管状工具(以下「竹管」とする)による半隆起線、沈線を充填する深鉢。多くはキャリバー形。波状口縁、または小突起が付き、渦巻文を描く個体が多い。頸部が残存する個体は種別に分類できるが、それ以外の破片資料は第Ⅱ類、第Ⅳ類b種、第Ⅵ類との識別も困難である。

a種 頸部で横位区画し、胴部に横S字状、逆U字状の意匠を描くものが多い(図版131-92・93、152-244、160-297)。

b種 頸部で横位区画し、胴部全面を縄文施文するもの(図版124-37、158-291、160-296)。

c種 頸部の横位区画がなく、口縁部・胴部文様が一帯構成となるもの(図版119-6、164-322、165-334)。

第Ⅱ類：火焰型・王冠型系統土器

火焰型土器(図版124-36)、王冠型土器(図版190-862)、及びそれらの要素を備えた類似土器。本類は第Ⅵ群の初期にも存在が知られているが、破片では識別できないため分類は本群に含める。

第Ⅲ類：縄文系土器

隆線・沈線による意匠を有し、縄文を地文とする土器。多岐にわたるものを含むが、次の4種を区別する。破片では第Ⅳ類a種、第Ⅴ類と識別が困難である。

a種 垂下降帯等で意匠を描く、縄文部分の広いもの(図版137-148、138-149、159-294、162-309)。

b種 竹管で幅狭い縦位区画をクランク状に区切る意匠を描くもの(図版138-150)。

c種 沈線で意匠を施文するもの(図版120-10、137-147)。

第4類：新巻類型・焼町土器

a種 新巻類型、焼町土器古段階と称されるもの(図版120-8・9、171-370、187-783)。

b種 焼町土器、同新段階と称されるもの(図版131-90)。

c種 降帯が垂下・屈曲して横位鍵の手状になり、縄文地文を施すもの(図版123-28、124-38、171-370)。

第5類：東北系土器

大木7b式(図版163-316)・8a式系統(図版168-347・351)の土器。

第6類：北陸系土器

上山田・天神山式系統の深鉢形土器(図版176-468・469)。

第7類：中南信系土器

新道式(図版164-326、178-520)、藤内式(図版165-330?)、井戸尻式(図版190-869)の勝坂式諸段階と、曾利1式(図版190-867)、唐草文系土器第1段階(図版185-716)の土器。

第8類：縄文施文土器(図版120-12、124-34)

第9類：無文土器(図版132-101~103)

第10類：台付鉢形土器(図版123-29、125-41、131-95)

第11類：浅鉢形土器

大部分が北陸系土器で、形態・文様が異なる数種類が見られる(図版138-153、139-155・157、168-345、170-366)。

第12類：その他の器種 小形鉢(図版139-156)、有孔罎付土器(図版121-14、138-154)、釣手土器(図版170-365)

C 縄文中期中葉・第V群土器の記載

①住居跡出土土器

SB 10 図版119-6~120-12 PL40

6は1類c種。平口縁に小突起が付き、幅の狭い文様帯に眼鏡状突起を配して横線帯を廻らす。4単位の区画間に描いた渦巻文から降帯が斜行・垂下し、三叉文を多用する。7・11は1類a種。胴部中位で横区画する。11は胴上半に縦長三角形を連ね、7は胴下部に逆U字状文などを配す。8・9は4類a種。口端部に突起が付き、斜行・曲折する降帯に眼鏡状突起を多数付加する。刺突円文が見られる。6~9・11は灰黄褐色の胎土である。8は白色粗粒を多量に含む軽量の土器である。10は3類c種。口縁部の横線間に刺突列が廻り、渦巻文を配して縦区画する。砂を多く含む暗褐色を呈する。12は8類。口端部は肥厚して面を作る。

SB 11 図版121-13・14

13は8類。キャリパー形で、口端部は肥厚し内削状に面を作る。14は12類の有孔罎付土器。降帯で施文する大形品。

SB 16 図版 123 - 24 ~ 124 - 34, 172 - 384 ~ 391 PL42・65・67

27 ~ 30 は 4 類 c 種。27 には環状突起が付き、28・29 とともに口縁部に沈線帯が廻る。隆帯端部にはコイル状装飾を施す。34 は 8 類で有孔小突起が付く。隆帯装飾の 31 は系統不詳であり、他の土器より古い可能性がある。384 は 5 類の大木 8 a 式。撚糸文地文で口縁部に貼付する隆帯は無調整である。385 は 2 類の王冠型土器。24・25・388 は第 VI 群初頭、26・386 はさらに新しい時期に属す。他に 10 類の 32・33、12 類釣手土器の 390 などがある。

SB 19 図版 124 - 35 ~ 125 - 42, 173 - 399 ~ 406 PL42・66・67

床直から出土した 35 は VI 群 1 類 a 種に属し、住居跡の時期も当該期である。近接して出土した 36 は V 群に属す土器が多いため、遺物説明はここで行う。36 は 2 類に属す、新段階の火焰型土器である。37 は 1 類 b 種。波頂部と口縁部の横 S 字状隆帯に眼鏡状突起が付く。横位区画線直下には蓮華文状の爪形文列が廻る。38 は 4 類 c 種。口端部は鋸歯状を呈する。401 は 3 類 a 種と思われ、幅狭い縦区画内に綾杉状沈線を充填する。41・42 は 10 類。41 は隆帯に眼鏡状突起が伴い、区画内に刺突文を施す。砂の多い褐色胎土。42 は半隆起線を施す。軽量の灰黄褐色胎土。8 類の 39 は口縁部外面が肥厚する。

SB 29 図版 131 - 90 ~ 132 - 102 PL46

91 ~ 93・99 は 1 類 a 種。92 は口縁部に小ぶりの環状突起と橋状把手があり、斜行する渦巻文、胴上部に横 S 字状の渦巻文を描き、隙間に三叉文を埋める。99 は頸部の屈曲が強く、口端部付近に爪形文が沿う。93 は口縁部渦巻文の隆帯が横位区画線を跨いで逆 U 字状に垂下する。99 は半隆起線で 93 と類似の意匠を描き、両者とも無地の部分を広く残す。94 は b 種。波頂部の渦巻文間を縦区画し、細沈線に蓮華文風の爪形文列を加える。90 は 4 類 b 種。中空の環状突起と眼鏡状突起が合体した大形突起を備え、頸部を区画する。曲流する隆帯間に隙間なく竹管による沈線を充填し、胴下部に刺突紡錘文を配す。砂の多い赤褐色の胎土である。100 は中形の 8 類、98・101 ~ 103 は大小の 9 類で、98・101 は同じ形態である。95 は 10 類。鉢部に楕円文列が 2 段廻り、上面観 S 字状の突起が付く。

SB 35 図版 137 - 142 ~ 139 - 157, 176 - 464 ~ 477 PL49・50・66

143 ~ 145 は 1 類。胴下部の 143 には逆 U 字状隆帯、145 には隆帯による独立した蕨手文・円文が見える。小形土器 144 は区画線がないが、口縁部に半隆起線による渦巻文が集約する。146 は 2 類。小形の火焰型土器で、把手とともに被熱して赤化し剥落が著しい。把手は別個体の可能性がある。147 ~ 150 は 3 類。148・149 は a 種で、148 は隆帯が口端部から弧状に懸架、149 は眼鏡状突起を伴い曲折懸垂する。ともに隆帯に捻転状の加飾部分がある。150 は b 種。口端部直下から竹管で幅狭に縦区画され鉢形を呈するらしい。147 は胴中で横・縦区画され、区画線はベン先状工具による入り組んだ結節沈線である。466・468・469・471 は 6 類。142 は 7 類であろうか。口縁部を横位、胴部を縦位に楕円区画し、区画線に刺突列が沿う。465 は同じ類であろう。151・152 は 8 類。477 は 10 類。153・155・157 は 11 類。157 は外反口縁の無文小形浅鉢。153 は分厚く、内屈する口縁部に W 字・U 字部がある隆帯が廻り、複列の細かい刺突列が沿う。155 は丸底の大形浅鉢で、口縁部に沿う半隆起線に連なって隆帯で渦巻文を描き、三叉状陰刻部が囲む。154・156 は 12 類。154 は小形有孔罅付土器。隆帯で 4 区画された空間に 2 種の意匠を配す。156 は口端部に馬蹄形の貼付文がある小形鉢。

SB 45 図版 179 - 537 ~ 544 PL66

検出時点で残存した埋土が浅く、遺物は破片少量である。537 は 3 類 c 種または 4 類 a 種、538 ~ 540 は 1 類、544 は 9 類、543 は 10 類。541 は竹管で平行沈線、542 は間延びした蓮華文を浅く施文する。

SB 52 図版 152 - 241、179 - 560 ~ 565

SB19に大部分を切られて遺物は極めて少ないうえ、隣接するSB53などの遺物が混在する可能性がある。560 ~ 563は1類であろうか。241・565は8類、564は11類である。

SB 53 図版 152 - 242 ~ 246

242 ~ 245は1類。244はa種で、波頂から波底まで横S字状の渦巻文を描く。胴部を波頂部下で縦位区画するらしい。245は平縁で、区画・意匠を半隆起線を描く。口縁部の横位区画に刺突列が沿う。胴部は逆U字状文で縦位区画する。口縁部は三角形区画内に弧状文などが描かれ、刺突文を充填する。胴下部の242・243は竹管で縦位沈線を描く。246は12類の小形有孔罅付土器であろうか。横位区画線と罅を結んで橋状把手が付き、胴部に低隆帯でS字状意匠を描く。

SB 67

図示できる遺物がない。本跡の上層ほぼ全面を切るSB46の遺物（図版 179 - 545 ~ 550）には第V群に属するものが含まれ、1類の547、4類c種の548、6類の545、7類の546は本跡に伴う可能性がある。

②土坑等出土土器

SK 1522 図版 158 - 291 PL58

291は1類b種。口縁部に突起が付く。端部が靴手状となる隆帯で円形、三角形などに区画し、玉抱き三叉文などを描く。

SK 1558 図版 159 - 294 PL58

294は3類a種。湾曲が乏しい器形で、肥厚する口端部に面を作り三角陰刻文などを施す。口縁部を無文とし、区画隆帯から直線・蛇行隆帯が交互に垂下する。

SK 1559 図版 160 - 296 PL59

296は1類b種。SB24の図版 131 - 94と近似する。

SK 1560 図版 160 - 297 PL59

297は1類a種。頸部に眼鏡状把手が付き、口縁部の斜行隆帯が渦巻文を描く。胴上部に横S字状の渦巻文が廻り、竹管で上端を楔状に挟る懸垂沈線を施す。

SQ 11 図版 162 - 309 PL57

309は3類a種。湾曲が乏しい器形で、口縁部の幅狭い横位区画の突起部4か所から隆帯が屈曲して垂下する。隆帯は黒褐色を呈し、土器本体と発色が異なる胎土を用いる。

これらの胎土は297が灰黄褐色、その他は暗褐色で砂を多く含む。

流路跡 SB 15 図版 170 - 363 ~ 366、192 - 910 ~ 912 PL63

363・911・912は4類c種。363は平口縁部に沈線帯が廻り、弧状・横S字状隆帯を貼り付ける、縄文地文の小形土器。364は10類。縄文地文で円形透しがある。366は11類。365は12類鈚手土器で最も遺存状態がよい。一对の耳に連なる隆帯が廻る縁は正面・背面で高さ・形状が異なり、三窓式と思われる。内面はやや黒変する。

③遺物包含層出土土器

第1類 図版 163 - 320・321、164 - 322・327、165 - 333・334、166 - 338、168 - 350、169 - 354、170 - 367 PL60 ~ 63

320・327・333・338・367はa種。320は胴部の区画内を隆帯、沈線が斜めに展開する。刺突列もあり、6類の要素が見られる。327は横位区画帯に刻みが施される。胴部の隆帯は横向きの弧状となり、区画内

に縦・横の沈線・隆帯を配す。333は横位区画帯から逆U字状文が懸垂する。338は口縁部に形態が異なる環状突起が4単位あり、下に2段の眼鏡状把手を付ける。297と通ずる。367は口縁部が大きく開く。321はb種。口縁部を三角形に区画し、三叉文を刻んで半隆起線が囲む。322・334はc種。322は口縁部の文様が弧状に描かれる。334は口端部から半隆起線が左下がりに斜行し、継手状に展開して大柄の渦巻文となる。350は367と同じ器形であろうか。354は胴下部が細い筒状の鉢形土器である。SB31の図版134-119は半隆起線だけで施文したc種類似土器で、3類の要素もある。

第2類 図版187-794・795、188-818、190-862、192-905 PL66

火焰型土器には、鋸歯状突起794、鶏頭冠突起795・905、SB37の図版177-496、眼鏡状突起はSB30の図版175-456がある。SB23の図版127-59は胴部が浅い初現的な火焰型土器で、胎土は白色である。鋸歯状突起下が沈線帯となるSB14の図版173-404は新潟県には見られない。王冠型土器には扇形突起の818・862がある。

第3類 図版165-331 PL63

331は口端部直下に爪形文列が沿う。

第4類 図版166-339、169-361、170-368・369、171-370 PL61~63

339・369・370はa種と思われる。339はいわゆる甕状の器形で、3形態の環状突起が4単位配される。突起下の対称の位置に形態が異なる人体文風の意匠を描き、この意匠の間に眼鏡状突起を付したS字状文が垂下する。地文はない。369は口縁部に小ぶりの眼鏡状突起が付き、胴上部のくびれ部で横位区画する。竹管による沈線充填の代わりに菱形文、小波状沈線を施す部分がある。370は口端部が肥厚して面を作り、短い隆帯と半隆起線が垂下する。主文様は横位展開する継手状の隆帯である。361・368はc種。361は鋸歯状口縁部を呈し、横向きに対向する眼鏡状突起にコイル状装飾を加える。隆帯は横位展開し、胴下部に縄文地文を施す。368には2脚の橋状把手が付く。

第5類 図版163-316、168-347・351、187-789、189-819・820・840 PL60~62・66

316・819・820は大木7b式。316は小形土器で、口端部に大突起1個、小突起3個が付き、突起と口縁部には結節沈線、胴部には沈線で施文する。819・820は口縁部に押圧を施す隆帯が廻る。347・351は大木8a式。347は口縁部を楕円区画し、結節沈線と交互刺突が沿う。351は口縁部に突起が付き、竹管で口縁部には横S字状、胴上部には波状文の中に渦巻文を描く。789・840など3本沈線で縦区画、クランク文を描くものも本類と思われる。

第6類 図版186-743、187-769、188-813、189-826・827・830、190-850・854・856・865・871、191-872・877・888 PL67

1類と似るが、爪形文を付す隆帯、半隆起線文に囲まれた平坦面の縁を刻むものを本類とした。830は山形突起部に丸い粘土粒を貼り付けた動物意匠であろう。赤彩される。後葉期住居跡出土資料のSB38図版177-500~502、SB43図版178-519も本類である。

第7類 図版164-326、165-330、168-349、187-791、914-914 PL60・62

326は新道式に属す。筒状の胴部から無文の口縁部が開き、楕円・菱形に区画する隆帯に幅広の爪形文が沿う。器形・文様は群馬県で見られる特徴を備えている。住居跡SB37の図版141-177は口縁部を三角形に区画し、玉抱き三叉文を配す。SB43の図版178-520は胴下部である。914は胴下部に2段の三角形区画文を描く。791は指頭圧痕を残す。本類か第IV群に属す可能性がある。

330は口縁部下と胴中位を隆帯で横位区画し、上段を斜行、下段を垂下隆帯で大きく区画して縄文施文

する。器形と三角形区画、広い縄文施文域は藤内式に類似する。

869は、弧状あるいは楕円区画内に縦位沈線を充填し、縦・横に交互刺突文を加える。井戸尻式に似るが、変容が著しい。525・822の破片も同時期頃であろう。

349は楕円文土器の系譜を引くと考えられる。胴中位を無文帯とし、縦位沈線を充填する上下の弧状区画には乱れがある。唐草文系土器第1段階と推定する。SB54 図版180－585は粘土細線を貼付した口縁部の中空突起で、梨久保B式に属す。756・772・773・781・782・855・883、SH17 図版185－716はこの時期である。867は筒状の胴上部に波状粘土紐が廻り、爪形文を刻むU字状隆帯がある曾利I b式である。

第11類 図版162－308、168－345、187－787、188－810、191－878・885 PL61・67
浅鉢形土器には、内屈する口縁部に半隆起線文、雲形文などを施す810・878、無文のボウル状885、橋状把手付の345など各種があり、住居跡出土例を含めても北陸系が圧倒する。縄文地文に沈線文を施す東北系の787は稀である。

第12類 図版190－858・863、191－887 PL67

釣手土器の可能性のある破片資料である。858は縄文を施す鉢部であろうか。863は深鉢の把手とは考えにくく、釣手部と推定する。887は釣手頂部の可能性がある。

その他 図版190－861・192－886 PL67

861・886は人面意匠がある破片である。886は筒状突起に貼り付けた円形粘土板に目・口を刺突する。人面下部には土偶様の表現があり、人体装飾と見られる。861は胴部破片のようで、隆帯が囲む小さなハート形内部に目・鼻の表現がある。

D 中期中葉土器群の編年の位置

第V群土器には多様な系統があり、相当の時間幅を有するが、本遺跡周辺の土器様相が明らかになっていないことと遺構内の共存関係が不確実のため、正確に土器変遷をたどれない。ここではある程度新旧が判明している土器を指摘し、編年位置の見通しを示す。本群の中で最も変遷過程が明らかなのは、第4類の新巻類型・焼町土器であろう。a種新巻類型は新道式から藤内式前半期、b種焼町土器は藤内式後半期から井戸尻式前半期、c種の口縁部沈線帯、胴下部縄文地文の曲隆線土器は井戸尻式後半期から曾利I式期にそれぞれ並行する（寺内2004、山口2009）。第6類の上山田・天神山式系土器も古府式以前を4段階に区分され（小島1988）、比較できる要素が見られる。

SB10の9・10は環状突起が未発達で口縁部に幅狭い文様帯をもち、4類b種焼町土器古段階に位置する。1類の6も共通の口縁部形態を示す。従って藤内式前半期頃と考えられる。SB29の90は4類b種の焼町土器の環状突起が最も発達する井戸尻式前半期の土器である。しかし他の土器は併行期に位置しないと思われる。1類a種93・99の胴部逆U字状隆帯は新道式頃を下らない要素であろう。同種の92は上山田・天神山式土器様式第II様式、1類b種の94は第I様式でも古い特徴を備える。従って90以外は藤内式頃に位置すると予想される。SB53の1類a種245は口縁部を三角形区画し、胴部に逆U字状隆帯が垂下して広く無地部分を残す。245を7類中南信系とした勝坂式土器に対比すれば新道式に近い。244を上山田・天神山式土器様式に対比すれば、第I様式の特徴をもつ。他の資料にも新しい要素は見出せないため、新道式から藤内式頃と考える。SB35には3類縄文系がまとまる。149の口縁部形態と眼鏡状突起から曲折垂下する隆帯は4類a種でも古い部分に近似する。胴部をクランク状に幅狭く縦区画する150も同様である。7類とした142は横位楕円区画と逆U字状隆帯、円形貼付文があり、新道式頃に

位置する。11 類の浅鉢形土器 155 は北陸地方との交差編年資料となる可能性がある。SB35 は新道式期に位置する土器群がそろった住居跡と考えられる。第VI群土器初期の住居跡 SB19 出土の1 類b 種 37 は、上山田・天神山式土器様式の初期か新崎式末期までさかのぼる時期と推定される。4 類は 401 が a 種で新道式期と時期が近いが、38 は c 種で時期が下る。SB16 は 4 類 c 種 27 ~ 30・387 がそろう。口端部肥厚、口縁部の沈線帯、眼鏡状突起に加えるコイル状装飾、縄文地文を特徴とする。5 類の大木 8 a 式新段階の 384、2 類の新しい段階の王冠型土器 385 も見られ、系統・時期不詳の 31 などを除外すれば、中期中葉終末期に近い井戸尻式後半から曾利 I 式並行期と考えられる。

住居跡資料の帰属時期に対比すれば、1 類 b 種に属す土坑 SK1522 の 291、SK1559 の 296 は新道式期頃となる。遺物包含層出土土器を類別に対比すると、4 類 a 種 339 は藤内式前半期頃、b 種 369 は同後半期頃、c 種 361、368 は井戸尻式後半から曾利 I 式期頃と考えられる。5・7 類は個別説明で時期を述べたとおりである。最多数を占める 1 類隆帯文系土器は変遷過程に未解明な部分が多く、3 類も他類と識別しにくい破片資料や、文様要素が少ない粗製の個体は時期比定が困難である。それらをさておいて、時期が判明する資料から第VI群土器を概観すると、中期中葉初期の新道式期から終末期の曾利 I 式、唐草文系土器第1段階まで、本稿で類として括った各系統とも大きく断絶する時期がなく推移しているありさまが看取される。

E 縄文中期後葉・第VI群土器の分類

第1類：大木 8 b 式系土器

キャリパー形深鉢と、丸みのある胴上部から短い口縁部が外反する深鉢の、2 種の器形がある。キャリパー形深鉢は、頸部無文帯の有無と口縁部文様の差異により、2 区分する。

a 種 キャリパー形深鉢で、頸部を上下に区画し無文とする。口縁部に 2 条単位の隆帯で渦巻文を施す。地文は縄文と縦位・斜位の沈線文がある。胴部は縄文地文を施し、半截竹管状工具による 3 本単位の沈線で縦区画して弧線・渦巻文などを描く（図版 139 - 158、164 - 324・325、169 - 355・359・360）。

b 種 a 種と同じ器形の口縁部小突起から隆帯でクランク文を配し、頸部から胴部まで縄文を施す（図版 130 - 82・83、149 - 223）。

c 種 緩い波状をなす口縁端部に渦巻文とつながる太い沈線がめぐり、以下を縄文地文とする。膨らむ胴部に縦・横の沈線文や蛇行沈線を描く（図版 163 - 315）。

第2類：綾杉文土器

口縁部に 4 または 2 単位の橋状把手を有するものが大多数で、口端部に沈線が巡る。口縁部は横位、胴部は縦位の綾杉文を施す。胴下部が筒状の器形（図版 139 - 159）と、膨らむ器形（同 160）とがあり、b 種は膨らむものが多い。

a 種 頸部下端を画する 2・3 条単位の隆帯から腕骨文を伴う縦位隆帯が胴部を 4 単위에区画し、この間に垂下隆帯を配す（図版 139 - 159 ~ 161、144 - 197、145 - 199）。

b 種 a 種と同じ器形で、頸部下端の区画隆帯が断続・消失するもの。腕骨文は多くが胴中位から向かって右側に枝を出す（分枝腕骨文）。（図版 145 - 200・201、121 - 15、122 - 18・19）。

第3類：口縁無文土器

外反する口縁部が無文となる深鉢で、口端部に沈線が巡る。胴部は第2類と同じ縦位区画、綾杉文地文となり、筒状と下部が膨らむ器形がある。

a種 口縁部が平縁で、2または4単位の把手をもつもの（図版140－164・165）。

b種 口縁部が小波状口縁で、把手がないもの（図版140－166・167、141－170）。

c種 a・b種と同じ器形で腕骨文による縦位の区画間に縄文地文を施し、蛇行沈線などを描く深鉢。平縁（図版141－172・173）と橋状把手をもつもの（図版164－328）とがある。平縁は大形品が目立つ（図版136－132、159－295）。

第4類：半隆起線文土器

胴上部が外反して口縁部が短く直立する平縁の器形が多く（図版145－202、128－70）、把手や小突起（図版145－203、146－204）が付くものは少数である。口縁部に沈線・刺突列が巡るものが多いが（70・202）、施文されないものもある（図版146－205・206・209）。胴部には両端が渦巻文となる3条単位の隆帯を貼付したU字状意匠（弧状腕骨文）を描く。地文には半截竹管状工具による半隆起線文のほか、縄文（図版146－207・208）、条線文（206）がある。

a種 弧状腕骨文の下部に垂下隆帯があるもの（図版145－202）。

b種 弧状腕骨文が独立し、下部に垂下隆帯がないもの（図版146－209）。

c種 胴部に意匠文がないもの（図版134－123）。

第5類：唐草文系土器

a種 頸部に無文の屈曲部がある深鉢で非常に少数（図版132－104、153－254・255、154－258）。

b種 樽形深鉢（図版125－48、126－49、154－261～263、156－271）。本類の大多数を占め、本来の唐草文系土器に近いもの（49）から、著しく変容したもの（271）までである。綾杉文より大ぶりの羽状沈線文を地文とし、横位羽状に施文される。

第6類：加曾利E式系土器

キャリバー形深鉢の口縁部に2条単位の隆帯で上向きの渦巻文を配す。胴部は縄文施文後に沈線で縦位区画する（図版126－50、154－259・260、155－265～267）。

第7類：圧痕隆帯文土器

大・中形の平縁深鉢で、押圧痕を施した隆帯が口縁部を巡る。胴上部が内湾気味のもの（図版142－178、146－210、147－214）、直立に近い器形（図版146－211、147－212）がある。口縁内面に蓋受け状の隆帯を貼付するものと、これがないものがある。地文はRL縄文を縦位に間隔施文するものが大多数で、条線文（114・115・210・211）も見られる。

a種 圧痕隆帯が1条単純に巡るもの（図版142－178、147－212・214）。

b種 剣先文などが4単位配されるもの（図版133－114・115）。

c種 圧痕隆帯の上部に渦巻文が配され、垂下する隆帯が胴部で意匠を描くもの（図版126－52・53、155－268・269）。

第8類：縄文施文土器

全面に縄文を施す平縁深鉢で（図版143－188、149－229）、法量の差が大きい。第7類と共通の器形が多く、小突起（図版143－183、149－228）、隆帯が巡るもの（図版148－217、150－230、151－239）、第1類c種の口縁部形態をもつもの（図版149－227）も見られる。単純に開く口縁部外面を肥厚させる小形品（図版129－79、136－133・134）、蛇行沈線を描くもの（図版143－184）もある。地文も第7類と共通する。

第9類：条線文土器

縦に条線文を施す平口縁の中・小形深鉢である。全面条線文（図版122-22、148-218）の他、口縁部を沈線区画して無文とするもの（図版129-80、153-253）、外面を幅広く肥厚させるもの（図版156-275）も見られる。

第10類：無文土器

第7・8類と同じ器形の平口縁深鉢。図化個体は少数である。裝飾要素を全く持たないもの（図版135-131、137-138）の他、口端部に刻みを施すもの（図版133-116、143-191）も散見される。

第11類：異系統土器

分布域が遠隔地にある希少な土器をまとめる。北陸系の古府系（SB22 図版174-426、SB44 図版178-528、図版182-643、185-724、186-754・761）、曾利系土器（図版156-276）と、分布域は近いものきわめて少数の沖ノ原系（図版154-264）が確認される。

第12類：台付鉢形土器

第3類類似の把手付鉢形土器に脚部が付く（図版141-175・176）。脚部が大形破片以外識別しにくい。

第13類：浅鉢形土器

外面が肥厚する口縁部形態の、無文（図版151-234）または背割隆帯で連続S字文を描く大形品が見られる（図版148-222、151-235）。内面や沈線部分にわずかに赤彩が残るものもあるが、図化できる個体は少数。小形品（図版122-23）は少ない。

第14類：その他の器種

上記以外の器種は極めて少数である。第3類と共通する文様を施す小形鉢（図版131-88）、有孔罎付土器（図版137-139）、釣手土器（図版148-219、186-739、187-796）、ジョッキ形土器？（図版156-277）などが認められる。

F 中期後葉土器群の変遷

前項の分類に従って、良好な一括資料を出土した住居跡を基準として、土器の共存関係を確認して変遷をたどる。その他に同時期の住居跡、土坑を示す。住居跡資料が乏しい1期については、遺物包含層資料も扱う。

1 期

SB19（図版124-35・36 PL42）、遺構外（図版163-315、164-324・325、169-355・356・359・360 PL60・62）

大木8b式初頭は明確に該当する住居跡が確認できない。わずかにSB19床面で1群a種35と火焰型土器36が隣接して出土したが、住居の切り合いのため第V群土器が混在し、この2個体以外に共存する資料が特定できない。35の口縁部隆帯は無調整、胴部は縄文のみである。36はV群2類に属す新段階の火焰型土器。鶏頭冠把手を基準に文様が等分割される。砂をほとんど含まない白色胎土である。SB36では実測個体図版139-158のみ本期に属し、破片は4期に下る

Ⅶ Q24・25、Ⅷ R16・21、Ⅷ V03・04 地点の遺物包含層には、上記のとおりこの時期に該当する実測個体が少なくはない。1類a・c種に8類の一部が伴うと推定されるが、組成は明らかではない。

2 期

SB27（図版130-82～84、131-88・89 PL45）、SB44（図版149-223～150-230 PL54）、SB51（図版151-236～240）、SB69（図版157-280～283 PL57）、その他にSB46（図版151-

233～235 PL55)、SB61 (図版154 - 256・257 PL56)

1類b種、3類b種、8類が組成する。1・3類とも把手は未発達である。1類b種は良好な個体がないが、口縁部はクランク文のみの83・223と、剣先文が付く82・237がある。3類b種は幅狭の腕骨文が縦位区画文となる。1類は縄文地文、3類は繊細な綾杉文地文である。8類は胴上部の内湾、口縁部の外反が明瞭な個体が多く、縄文はすべて縦位間隔施文である。

SB44の8類227・228・230は1類c種の変容型であろうか。平縁の3類c種を含むSB69は次期に下る可能性があるが、281は7類の早い例となろう。図版164 - 328は3類c種のうち把手をもつ唯一の完形例である。把手は前時代の158を継承するものであろう。SB43には13類の赤彩の大形浅鉢(図版148 - 222)がある。

3 期

SB37 (図版139 - 159 - 141 - 176, 142 - 178 - 181, 143 - 183 - 190 PL50・51)、SK1553 (図版159 - 295 PL58)

2類a種、3類a・b・c種と7a・8・10類が組成する。2・3類には把手が発達し、綾杉文地文が定着する。頸部区画が徹底し、口縁部無文の3類が多い。器高10cm未満の小形土器168もある。腕骨文は両端の渦巻文がやや大きくなり、縦位区画の幅がやや広がる傾向に応じて綾杉文は2期ほど繊細なものではなくなる。唯一縄文地文の3類c種に属す173は、腕骨文の2条隆帯間に羽状沈線文を施すが、この種には珍しくない。172にも描かれる錐状の沈線文は、長野県では広域に見られる意匠である。SK1553の295はこの種で、164の頸部装飾と通ずる。169は縄文地文ながら曾利式に通ずる器形・文様であり、隆帯間の爪形文は170・171にも認められる。

12類175は第VI群土器の中で数少ない器形がわかる資料である。7類a種が相当量伴い、8類183・188は前時代と器形・装飾に変化がない。4類及び2類b種を交えず、3類が卓越する本住居跡出土土器の明瞭な特徴から3期を設定したが、他に同様の単純な土器様相を示す住居跡は認められない。2・4期間の極めて短い時間幅に位置する様相を示す事例であろうか。

4 期

SB14 (図版121 - 15 - 122 - 23 PL41)、SB25 (図版127 - 66 - 128 - 78 PL44)、SB30 (図版132 - 104 - 134 - 118 PL46・47)、SB31 (図版134 - 120 - 137 - 139 PL47・48)、SB41 (図版144 - 197 - 148 - 219 PL52 - 54・67)、その他にSB22 (図版126 - 54 - 127 - 58 PL43)、SB23 (図版127 - 60 - 65 PL44)、SB55 (図版153 - 250・251 PL56)、SK1401 (図版158 - 285 - 290 PL58)、SK1570 (図版160 - 300 PL59)、SK1571 (同301 PL59)、SK1660 (図版161 - 302 PL59)、SK1678 (同303 PL59)

8区集落の最盛期にあたり、多数の完形個体を出土した住居跡が多い。2類a種は少数残るもののb種が主体となる。SB55は3期の可能性があるが、3類の把手付きが2個体見られる。251の口縁に描かれた横向きの剣先文は本遺跡では少数、把手の形態は例がない。SB31の132は底部欠損ながら器高70cm近い、復元個体最大例である。4類が新たに登場し、装飾豊富な土器の半数近くを占める。SB25の71は2類との接点を示す希少例である。4類の器形は2類の口縁部を省略することから発生し、胴部文様の弧状腕骨文が、2類b種の分枝腕骨文の横位区画消失による意匠の分解によって現れたことは、いうまでもない。SB31の125は時期が下る可能性があるが、一度描いた沈線文を不完全に磨り消したまま焼成している。

これらに非裝飾的な7類a種、8・9類が相当量伴う。7類a種は8類とともに2期以来の縄文施文法が継承され、袋状の器形が残る一方(77・210・214・215)、胴部の内湾が弱まる直線的な器形がやや増える(75・78・212)。SB30では7類はa種に代わってb種となり(114・115)、114は剣先文が変形した2種の意匠を一対配する。SB41とともに条線文地文が多い。SK1571の301、SK1678の303も同類であろう。8類も2期以来の器形、口縁部裝飾が見られる(126・217)一方、9類(80)とともに、口縁部外面を肥厚させる小形品が現れる(79・133・134)。SB25の72は口縁部に渦巻文、73は胴部に竹管による縦位沈線文を施す少数例である。分類に躊躇されるが、4類と同じ器形を呈する縄文施文土器である。同住居跡には古府式(図版174-426)も見られる。遺物包含層出土の図版185-724、186-754・761は縄文地文で爪形文を施した縦・横位隆帯が見られる。古府式に近似した隆帯である。

本期は資料が豊富で住居跡の切り合いも見られ、細分の可能性があるが、2類b種は組成率が低下するものの前時期から文様等に変化は見出せない。4類は2類b種に型式学的に近似する4類a種が前出で、弧状腕骨文の垂下部がないb種が後出、胴部に意匠文がないc種は更に新しいと推定することもできるが、各種が単独で組成する事例がない。またSB25は4類が優勢な例ではあるが、2類を交えない事例が確認できないため、4類単独の時期は設定できない。

5 期

SB20(図版125-44~47 PL43)、SB21(同48~126-53 PL43)、SB68(図版154-258~157-279 PL56・57)、その他にSB54(図版152-248・153-249 PL55)、SB57(同252・253 PL56)、SB59(同254・255 PL56)、SK1860(図版161-305・306 PL59)

4期までの構成が一変して1~4類が消失し、替わって5・6類が参入する。5類はb種樽形深鉢だけが選択的に組成する。口縁部横帯文をもつ47、交互刺突文を施す把手付きの252、縦羽状沈線文が地文の49は唐草文系土器の中核分布域、中农信地域の土器と変わらない。248は口縁部に交互刺突文が沿う隆帯が弧状に巡り、S字状文から垂下する隆帯は渦巻文より弧状腕骨文に近似する。48・261・263・305等は渦巻文と組紐文をつなぐ弧状隆帯、横羽状沈線地文が見られ、248から変容が進んだものである。271はS字・V字状各一對の意匠から隆帯が垂下し、2種類の縄文を施す、本来の唐草文系土器とはかけ離れた個体である。6類は1・2条の隆帯で口縁部に渦巻文と区画文を描き、胴部文様は縄文後沈線施文という施文順に則る、本来の加曾利EⅡ式に近いものである。しかし265は口端部側の隆帯が省略され、266・267には口縁部区画文内に、唐草文系土器で多用される交互刺突文を施すなど、変容が見られる。

7類は口縁部隆帯が全周していたa・b種が姿を消し、隆帯が分断・垂下して胴部文様を描くc種となる。46などは剣先文が左右に拡大、53は上下に伸長した意匠で、従来知られていた圧痕隆帯文土器第I群の文様構成に近付いている。地文は横位間隔施文による縄文が優勢である。8類は減少するとともに縦位間隔施文の伝統が途絶する。9類275とともに270の口縁部外面を幅広く肥厚させた内湾器形の中形品が特徴的である。272・265・53に結節縄文が認められることから、SB34の8類141を本期と推定する。

6 期

SB07(図版119-1~5 PL40)、SB26(図版130-81 PL45)、SB40(図版144-192・193 PL52)、SK1551・1552(図版159-292・293 PL58)

加曾利EⅢ・Ⅳ式期の第Ⅶ群に相当する本期、住居跡は上記3軒のみとなり、実測個体2・81・192は埋裏、図版41-292・293は屋外埋設土器である。3がⅦ群2類で唐草文系土器第4期、5がⅦ群11類に属す鉢形土器となる以外、Ⅶ群1類の加曾利EⅢ式系に属す。両耳壺の2以外、口縁部文様帯のない深鉢で

ある。81は胴上部に隆帯で渦巻文、下部に沈線で逆U字状懸垂文を描く。192は1帯構成で逆U字状文と鉄手文、193は対向U字状文をいずれも沈線で描く。292・293は太い3条沈線を口縁部と波頂下に施文する。292は縄文を横位間隔施文する地域的な手法を示す。

図化資料が示す通り本期はⅦ群1類が多数を占め、Ⅶ群3類大波状口縁土器（図版167-344）、Ⅶ群4類圧痕隆帯文土器第Ⅱ群（図版172-377）などの在地的な土器群を圧倒する。Ⅶ群5類の串田新Ⅱ式土器（図版130-85）は注目される。口縁部文様は北陸地方では見られない文様である。

G 9区出土縄文土器

縄文中期土器 図版193-929~936

9区からは、8区との境界に当たるⅧM24周辺の谷状地形から、第Ⅵ群を主体とする縄文中期土器が出土した。第Ⅴ群に属するものは929~931・934、第Ⅵ群に属するものは2類932、4類933、7類935・936である。8区側の東傾斜面から出土した土器と比較すれば量ははるかに少ないが、ほぼ同時期である。現在水路となっている浅い沢の両岸が廃棄場となっていた可能性がある。

縄文後期土器

SK 1764 図版193-919~922 PL63

土坑内に逆位に埋納されていた深鉢である。口縁部破片は少なく平縁に器形復元したが、突起が付く可能性がある。くびれ部の区画線から上を無文とし、下は斜行沈線文を施す。

SH 34 図版193-919~924 PL63

919・922は緩い波状口縁、920は平縁に大小の突起が付く深鉢である。919は横位区画された無文部を挟んで羽状沈線文を施す。920は口縁部に幅狭の縄文帯があり、胴部に羽状沈線文を施す。922はくびれない器形で、口縁部に波形に沿って沈線が廻り、胴部を横位区画して連弧状の沈線文を描く。

921は平縁の浅鉢で、内湾気味の口縁部を縄文帯で横位区画し、円文を配する。意匠の接する部分は縄文帯が狭まっている。

SH33・34から出土した923・924は無文土器である。923は強く横ヘラケズリされる。

検出面 図版193-925~928

925は口縁部部の縄文帯、926はくびれ部の列点帯と羽状沈線文の破片である。928は山形の波状口縁、927はまばらな縄文を施された平縁土器である。

土坑、配石遺構、検出面それぞれから出土した土器は、前後の時期を交えない後期後葉第Ⅷ群4類に属するものである。おおむね加曾利B3式と並行する、上ノ段式前半期の土器と見られる。この時期の土器は8区にはほとんど見られず、4・5区に散見される。

(2) 土製品

8区から出土した土製品は245点を数える。内訳は、土製円板50、ミニチュア土器118、土製耳飾8、土製垂飾4、甕形土製品3、土偶196である。その他焼成粘土塊50点がある。

A 土製円板 図版194-1~26 PL68

出土点数は住居跡出土が12点、土坑・配石遺構各1点、その他は包含層の出土である。住居跡出土品には時期的な偏りは見られない。縄文が施文されている部位を利用しているものが比較的多く、使用された土器の時期ははっきりしない。本区出土土器量で最も多い第Ⅵ群土器の中でも立体的な装飾が施される2~4類が含まれていない。破片の部位は胴部と思われ、湾曲するものは少ない。製作法は打ち欠きのみ

の比率が高く、研磨を施すものは1～3・20・25と少ない。図化個体の法量は、最小例で直径2.3cm(1)、最大例で長径4.9cm超(15)、重量は6.4～18.7gまで幅がある。平均値は長さ3.7cm、幅3.6cm、厚さ1.0cm、重量13.5gとなる。形態は円形を基本とする。4は周縁が薄く、穿孔されている。底部破片であろうか。3～5区出土の土製円板と比較するとやや小形で法量・形態にはばつきが少ない。

B ミニチュア土器 図版195-1～196-42 PL69

118点のうち、住居跡出土品(1～28)は41点あり、1～3・16は中葉期、その他は後葉期の住居である。土坑・配石遺構等の遺構出土(29～31)は7点、遺物包含層(32～42)から70点が出土した。住居跡ではSB37:6点(19・20)、SB31(13～15)・68(27・28)から各4点、遺物包含層では、ⅦQ25:11点、ⅦQ20:8点、ⅦV03:5点、ⅦQ19・ⅦR16・21:各4点が多い地点である。

2は船形を呈し、内外面に独特の文様がある。14・30・31・37は椀形。9は1把手付、25は台付の鉢形である。23は口縁部に穿孔がある浅鉢形である。7・9・10・12・13・15・18・22・25・38は第Ⅵ群土器の文様が描かれる。無文土器(14・24・26・30・31・34・40)も多く、縄文施文土器(16・41・42)も見られる。28は土偶頭部、32は土鈴の可能性もある。

C 装身具 図版197-1～11 PL69

希少遺物のため、ほぼ全点を図示した。

① 土製耳飾 図版197-1～9

いずれも滑車形耳飾である。2・3・5・8は外径1～1.5cm前後の小形品で孔がない。2・5は白形に凹み、8は繊細な刺突文が施される。1・4は外径2～3cmの中形、6・7・9は外径3～3.5cmで、出土資料の中では大形の類となる。孔が貫通する1・6・7、孔が貫通しない4・9がある。9は平坦な両面に刺突文が施される。

② 簪形土製品 図版197-10～12

いずれも欠損品である。幅1cm未満で軸部断面は楕円形である。11は頭部に細沈線文が施され、赤彩痕がある。10は頭部に刺突文が施される。類例は知られていないが、土器・土偶等の破片とは考えられない。

③ 土製垂飾 図版197-13～16

13・16は三角形に近い形状で、13は表裏貫通、16は横向きの孔がある。サメ歯牙の模倣品であろうか。14・15は勾玉状で頭部に孔がある。14は丸みがあり、沈線文間に刺突文を施す。15は身が薄く、頭部側縁を刻む。

④ 不明土製品 図版197-18・19

18は中央に孔がある円板状土製品である。19は長さ3.3cmの円柱状で、三叉文と沈線文を刻む。砂が少ない精製された胎土である。

D 呪具 図版197-17 PL69

三角埴形土製品

端部の残欠である。断面はほぼ正三角形を呈し、辺に沿って2本組の沈線文を施す。

E 土偶 図版198-1～208-98 PL70～75

196点のうちほぼ半数を図化掲載した。図の配列は住居跡出土資料をはじめに、遺物包含層出土資料を後に図示し、包含層資料は部位等によってまとめたため、出土地点のまとまりに欠ける部分がある。住居跡出土資料は52点(1～32)、土坑(34)・配石遺構(33)出土品は各3点である。多数出土した住居跡はSB30:7点(9～13)、SB37:6点(19～23)、SB58:4点(28～30)、SB31(14・15)・

44・68 (31・32) : 各3点がある。8区の住居跡の中で、SB58は遺物量が比較的少量、SB44はやや多量であり、その他4軒は遺物量が非常に多い住居跡である。包含層は中グリッドⅧ R21 : 13点 (63・64・68)、Ⅷ R16 : 12点 (60・66・69 ~ 71・80・82)、Ⅷ Q25 : 10点 (49・57・58・81・85)、Ⅷ R17 : 9点 (17・62・73)、Ⅷ Q20 : 8点 (39・42・45・51・53)、Ⅷ 19 : 7点 (46)、Ⅷ Q23 (56)・Ⅷ Q24 (50、86・87) : 各6点、Ⅷ R12 : 5点 (77 ~ 79・83) と多出した。コの字形石組坪を備えた住居跡SB43・44の上層周辺に集中している。大礫を多数含む厚い包含層が堆積し、遺物全般が多量に出土したため、土偶に限った集中地点とはいえない。接合関係は、SB58 - 弥生時代SB12間の2点約28m、SB35 - Ⅷ R16・17間の4点最大8m前後、Ⅷ Q20 - Ⅷ V05間の2点10m前後、Ⅷ Q23・24間の2点数mの4事例が確認された。図示した住居跡出土資料のうち、8・17は中葉期、その他は後葉期の住居跡から出土した。完形例は皆無のため、全身形態が窺える胴体部から記述し、脚・腕・頭部などの破片に進む。

① 全身形態または脚部形状が窺える胴体部

67は胸部から脚部まで現存高17cmの大形である。厚い板状胴部に短い両脚がソケット式に接合する。正面に隆帯で十字形の正中線を描き、腰帯状の部分は背面で殿部表現となる。腰部に横位、胸部に縦位沈線を施す。74は高さ14cmで、板状の胴体は腰部が側方に張り出し、接地面が大きい短い結合脚が付く。殿部を隆帯で縁取り、沈線文が沿う。腕は水平に伸び、肩に平行沈線を描く。頭頂部は平坦で後方に傾き、1孔が通ずる。顔面はハート型で目・口を刺突で表現する。41は最大幅をもつ胴下部正面につま先だけが付き、狭い溝で両脚を表現する。正中線と殿部を沈線で描き、短沈線を縦位に施す。10は平坦な胴下部正面につま先が付き、横位・殿部・刻みなど沈線施文する。56は頭部を欠損し現存高7.8cmで、脚部の表現はなく胴部の幅が狭く、乳のみで文様・顔面表現は見られない。

67に類する、おそらく両脚を有する大・中形の立像型には、2・5・18・30・37・40・64・68・72・73・82・98がある。18・72・82・98にはへそ状の突起がある。胴部文様は隆帯のみの2、沈線のみの18・64・82、殿部隆帯以外沈線の72・73?のほかは、隆帯・沈線を組み合わせる。30は腕骨文を貼り付け、地文に綾杉文を充填する第Ⅵ群3類土器と共通の文様である。極めて珍しい。脚部のみの11・15・27・29・45・51・75・86・87・91は当然この種の破片であろう。86・87は同一個体と思われ、87は足長11.8cmの大形品である。脚部文様には、縦位の隆帯または半隆起線を施す15・51・86・87と、沈線文のみのその他がある。27は刻みを加える。11・91は足指の表現がある。

41に類する分離した短脚が付くものには26・28・80・85・89がある。26・80・89には殿部に沈線が見られる。28は隆帯、他は沈線のみで装飾し、縦位集合沈線が卓越する4・80と、横線がある85・89がある。

10に類する平坦な胴下部につま先が付く坐像型には3・20・25・32・44・58・59・71がある。25のみ正中線隆帯と殿部隆帯が見られる。正中線は隆帯71、沈線20・58、殿部は隆帯3・32、沈線10・20・44・58・59・71の表現がある。41と10の種類は形態差が小さく、文様も似通ったものである。

56に類する胴下半部資料は確認できない。上半部12・34・63・79など胴部断面に丸みがあり、乳以外ほとんど無文の中・小形土偶が同類となる可能性がある。

② 胴体上部から肩・腕部

1・55は正中線隆帯と腰帯状表現がある。背面に1は平行沈線、55は隆帯で下端が棘手となる垂下文を描く。22・74にも同様の背面文が見られる。4は正面に頸部まで達する正中線隆帯があり、背面は

無文である。17は水平の腕先端が細く、刺突列の正中線が胸部で菱形状、背面では三角形区画する横位区画線となる。正面・背面とも太い並行沈線文が描かれる。33・39にも刺突列が見られる。22は正中線隆帯が顔面輪郭となり、刺突を施す抽象的な表現である。頭部は後ろに傾いた凹みとなる。水平の腕は正面・背面とも沈線文が縁取る。

12は腕が水平、幅狭い胸部に乳があり無文である。34は胸部幅が狭く、体側と腹部に沈線文がある。52・53は大形の同一個体と思われる。ほぼ水平に伸びた板状の腕の輪郭に沿って沈線文が縁取り、先端は丸みを帯びる。62は正中線がなく、正面にあいまいな沈線文が見られる。74は正面に正中線隆帯、背面は下端が渦巻となる垂下隆帯で、体側の沈線が腕の輪郭を縁取る。77は腰带状の隆帯が背面で腕先まで伸びる。90は水平の腕の輪郭を2条の隆帯が縁取り、腕の側面がくぼむ滑車状となる。92も近似する。

腕部文様に注目すると、沈線文が先端で連結するもの14・17・19・43・52・53・60・74・90・92、つながらず開放するもの6・21・22・24・38・39・42・57・70・73・76、沈線文がないもの4・12・56・77・79がある。連結するものはやや板状で幅広いもの、開放するものは棒状で幅の狭いものに多い傾向がある。66は現状では中空に見えるが、胸部芯材の粘土塊から剝離したのであろう。

③ 頭部

8はやや凹んだ頭頂部が後方に傾いて1孔が通じ、平坦な顔面に目・口を刺突で表現する。長い頸部に沈線文を施す。23は小形の頭部であろう。後方にかなり傾く頭頂部は凹み、額部に対する突起があり顔面表現はない。46は頭頂部が平坦、隆帯で囲むハート形顔面に目・口を刺突で表現しソケット式で胴体に接合する。47は上面観菱形のくぼんだ頭頂部に1孔が通じ、顔面表現はない。54はやや小振りの同形態で、突出した正面に鼻・口の表現がある。

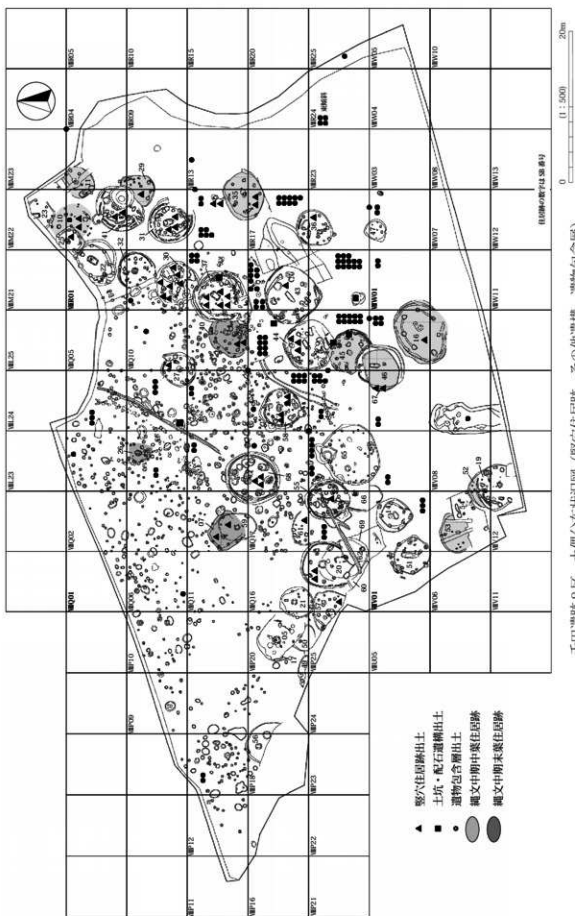
69は凹んだ頭頂部に貼り付けた円文を挟んで2孔が通じ、周囲に沈線文が廻る。ハート形顔面に横長の目・口を刻む。79は凹んだ頭頂部に3孔が通じ顔面表現はない。背面に隆帯が斜行する。93は凹んだ頭頂部に3孔が通じ同心円状に沈線文が廻る。後頭部に隆帯を貼る。頸部に垂下するハート形隆帯と刺突による口で顔面を表現する。白色粗粒を多量に含む灰褐色の軽量胎土を用いる唯一の例である。94は小形で、頭頂部は平坦、弧状隆帯で顔面表現する。接合はソケット式である。95は隆帯で縦長の顔面を囲むらしく、頭部は中空状である。頸部の周囲に沈線文を施す。

頭部はいずれも河童型で、頭頂部形態には平坦のもの、凹んだものがある。顔面表現に注目すると、眉・鼻・目・口などいずれかの表現がある8・46・54・69・73・93・94と、それが見られない22・23・47・56・79とが見られる。

中期前葉の第V群土器の時期に帰属する可能性が高い、12区出土の土偶と比較してみる。刺突列が加わる17は12区の図版-3と共通、39も同時期の可能性があろう。顔面、頭頂部の表現が共通するものは、46・69である。93の胎土はほとんど中葉土器に限られる。三叉文を刻む腕部70も中葉の可能性が高い。

F 焼成粘土塊 PL68

土製品と呼ぶべきか躊躇されるが、本区では50点が出土した。縄文時代の竈穴住居跡18点、土坑4点のほかは遺物包含層からの出土である。住居跡ではSB68:4点、SB30:37・41・44・58:各2点、SB10:22・32・45:各1点が出土。土坑ではSK1430:1点、SK2375:3点出土。8mグリッドではQ25:5点、Q20:4点が出土した。土偶と同じく遺物量が多い住居跡、包含層から複数点出土している。焼成粘土塊には砂が混和されており、土器の胎土と差異がない。小さなものは指頭大、大きなものは片手



第11図 千田遺跡8区土偶分布図

千田遺跡8区 土偶分布状況図(竪穴住居跡、その他遺構、遺物包含層)

で軽く握った程度の大きさである。形状に斉一性は認められないが、団子状、かりん糖状が多い。数本の粘土紐をまとめて握りしめたものも見られる。

(3) 石器

本区から出土した石器は、石核・剥片等の石屑類を除いた道具が3,335点に上る。竪穴住居跡出土が1,100点と約3分の1を占め、土坑78点、配石遺構、遺物集中等の遺構80点、その他2,067点が遺物包含層及び弥生・古墳時代住居跡への混入品として出土した。住居跡から多出した事例としては、SB31:103点、SB37:92点、SB68:88点、SB30:87点、SB16:59点、SB55:50点、SB41:49点、SB20:46点、SB35:44点がある。遺物包含層の多出地点は、8mグリッドではR16:194点、Q25:166点、Q20:148点、R21:134点、R11:91点、Q24:86点が特に多い。

器種の内訳は、未製品を含む石鏃854、尖頭器23、スクレイパー347、石匙14、異形石器2、鉤状石器2、石錐115、打製石斧384、磨製石斧180、砥石6、磨石類854、棒状敲石75、敲打礫227、石錘32、石皿82、台石47、多孔石91である。図化資料は土器によって時期が明確な竪穴住居跡出土の完形資料を優先し、次いで土坑出土資料とし、遺物包含層出土資料は遺構資料に含まれていない類、完形品が乏しいもの、希少器種以外は、ほとんど掲載していない。

A 石鏃・未製品 図版209-1~211-77 PL76

石材は無斑晶質安山岩、頁岩、チャートが大部分を占め、黒曜石が次ぐ。形態は大部分凹基無茎鏃である。正三角形に近いものよりやや長身の形態が主体で、脇挟りが浅いものが多い。平基鏃は少数である。有茎鏃(68)がわずかに見られるが、9区に遺構が分布する後期後葉に帰属する可能性が高い。6・10・17・52・59・60などは石鏃の未製品の可能性がある。石鏃より一回り大きく、剥離が大まかな部分があり、基部が凸基・平基状のものが含まれる。

B 尖頭器 図版212-1~3 PL77

頁岩、無斑晶質安山岩を用いる。平基石鏃と同じ形態の1・2と、柳葉形の3が見られる。1・2は剥離が急角度でやや雑な感があり、3は平行剥離を入念に施す。北信地方に事例は乏しいが、縄文中期遺跡に少数例が見られる器種であろう。

C スクレイパー 図版213-1~214-25 PL77

石鏃と共通の石材を用いる。法量・平面形態が石鏃未製品と類似する2・4・7・9が含まれるが、尖頭部が明確でなく、分厚過ぎて石鏃に加工するには無理であろう。両面加工で平面形態が円形・楕円形・長方形などの3・5・6・10・12・14・17・20、片面から剥離され分厚い亀甲状を呈する8のようなものも見られる。不定形剥片に部分的に二次加工を施した1・11・13・16・22もある。15・21・23・24は典型的なスクレイパーエッジを作出するが、少数である。18・19・25は大形品である。25は剥離された側縁に顕著な摩耗痕があり、横刃形石器の呼称がふさわしいものである。

D 石匙 図版212-4~6 PL77

いずれも横型石匙である。前期後半に見られる形態である。

E 異形石器 図版212-9・10 PL77

9は靴形、10は横型石匙の刃部を抉ったような形態である。

F 鉤状石器 図版212-7・8 PL77

7は扁平で大形、外側に段を作り出す。8は小形で刃部が厚い。

G 石 錘 図版 211 - 79 ~ 92 PL77

石錘と同じ石材を用いる。三角形の幅広い剥片の尖頭部を機能部分とする 82 ~ 85、角柱状の剥片の先端を利用する 79・87、両面から剥離して全体を細身に仕上げ、頭部を作り出す 86・88 と、頭部がない 78・80・81・89 とがある。

H 打製石斧 図版 215 - 1 ~ 218 - 48 PL78・79

大部分が頁岩製で、無斑品質安山岩が少数含まれる。おおざっぱに形態分類すれば、古くから呼称されてきた側縁が平行する短冊形と、刃部側が幅広い楕形のいずれかに含めることになるであろう。仔細に観察すれば素材、基部・刃部形態、側縁部の直線・湾曲、法量、長・幅・厚比の差異など、摩耗痕の状況など多様なものが見られる。片面あるいは両面に第一次剥離面が見られるものが多く、大形礫から剥離した剥片素材と推定される。9・15・20・21・44 は両面に自然面が残り、板状の転石を素材としていることが分かる。刃部に摩耗痕が残るものがあり、線条痕は身の長軸方向である。11 は両面とも基部まで顕著に摩耗する。小形の 2・31・42 には大きな欠損部は見られず、ここまで使いこまれたものであろうか。欠損部のない大形品 38 ~ 40 のようなものは住居跡に見られず、遺物包含層から出土した。

I 磨製石斧 図版 219 - 1 ~ 221 - 41 PL80

石材は蛇紋岩類である。透閃石岩との識別は行っていない。大小さまざまなものが見られ、普通サイズのは定角式である。磨製石斧にも短冊形 1・5・9・10・21・22・35・41 と、楕形 17 ~ 20・34・40 とが見られる。極小形品には刃部が狭いノミ状 4・6 のような形態もある。37 は擦切技法の痕跡がある。38 はわずかな穿孔痕から垂飾転用品であろう。

J 砥 石 図版 221 - 45 ~ 222 - 50 PL83

小形の 45・46 は砂岩、大形の 47 ~ 50 は安山岩である。49・50 には溝状の痕跡が残る。

K 板状石器 図版 221 - 42・43 PL83

図示した 2 点のみである。板状の安山岩に片面から急角度の剥離を施す。

L 研磨礫 図版 221 - 44 PL83

44 は蛇紋岩類と思われる扁平小礫に擦痕が観察される。少数である。

M 石 錘 図版 223 - 1 ~ 4 PL83

出土状況から確実に縄文時代と確認できる石錘は 9 点である。遺物包含層出土資料には古墳時代の石錘が混在する可能性を否定できない。安山岩の扁平円礫に 1 か所 (2)、2 か所 (3)、3 か所 (1)、4 か所 (4) 打ち欠きを施すものである。

N 礫 器 図版 223 - 5 ~ 13 PL81

安山岩を主体とする、やや扁平の転石を素材とする。剥片を用いる 7・8 もある。側縁を両面から剥離する 5・7・11・13、片面剥離の 12、長い礫の端部に剥離がある 6・10 などがある。

O 敲打礫 図版 224 - 1 ~ 226 - 38 PL82

硬質の安山岩、砂岩を素材とする。扁平な円礫の縁辺に 1 か所から数か所、剥離痕を残すものである。礫器と比較して、かなり小形で薄いものが多く、重量を利用した加撃によって対象物を打ち割る効果は低いと思われる。なかには礫器と区別しにくい 5・13 のようなもの、6・16・20・35 など石錘と識別しにくいものもある。平面形は円形、楕円形、不整形円形、不整形楕円形などがある。長径 5cm から 15cm 前後である。円形礫素材のものは、剥離痕が 1 か所から 10 か所程度断続する 6・8・10・16・18・20・34、

1側縁に連続する4・7・11・12・27、全周囲近くまで及ぶ21・26・28・31・36などがある。楕円形、長方形礫素材のものは、長辺に剝離が連続する1・3・9・15・27、短辺を含め対向する2辺に剝離がある14・20・25・29・35・37などが見られる。

P 棒状敲石 図版227-1~14 PL81

長さが最大20cm程度、径が片手で握れる程度の棒状またはやや扁平な硬質安山岩、砂岩を用いる。一端または両端に加撃による剝離痕や敲打痕を残す2・4~7・12、側縁に敲打痕がある2・3・5・6・14、扁平な面に細かいあばた状の敲打痕が付く1・2・8~12がある。複数の痕跡をもつものも多い。長軸に直交する線状の傷を残す9・11も見られる。

Q 磨石類 図版228-1~241-123 PL84~86

大部分が安山岩の円形・楕円形礫で、花崗岩が少数見られる。磨面が特徴的な器種であるが、凹みやあばた状痕を併せもつものをふくめて呼称する。磨面のみ8・23・33・34・46・65・68・79などは少数で、比較的円形に近く厚みのある礫を用いる。凹みがあるものは形状・法量が多様である。形状は扁平ぎみの平面円形かやや長い礫が最も多いが、棒状の3・48・60、大形の35・74、不整形の7・28・40もある。凹みの部位は片面、両面のほか、3面5・15・28・53・73、4面26・38・50・51・59・78があり、57は凹みが短軸全周囲に残る。側縁に敲打痕を残す9・16・20・37・39・41・72・80・83・93~95・97も少なくない。凹みの数は1個または2個が一般的であるが、3個以上の60・81、間隔なく連なる25・40・99・119・120がある。少数例では石鏡形の47、側縁が平坦な磨面となる18・58も見られる。

R 石皿 図版242-1~245-33 PL87・88

比較的軟質の安山岩を用いる。凹み面のある石皿は法量・形状さまざまなものがある。1・7・8・15・20~23は小形で、1・15・20・23は裏面が凹石となっている。10・12・19・24・25・31は平面が円形、その他は楕円形に近い。裏面が平坦な5・9・11・13・14・17・18・19・26・27と、丸みを帯びるその他がある。9・13・28・29ははき出し口がある。27は磨耗し切って孔があいた唯一例である。13は縁の内側が多孔石状に凹みが集中する。敲打成形によって磨面を彫り込んだ痕跡である。裏面は多孔石となるが、加工痕の可能性もあろう。32も同じ痕跡を残す。30・33は未製品である。長径50cm前後、重量40kg以上の礫を素材とし、30は周縁の剝離成形と、水磨でできた凹みへの敲打が見られる。55は敲打成形による磨面部がわずかに凹んだ状態である。石皿の製作段階の資料は非常に珍しい。

S 台石 図版246-1~248-12 PL89・90

板状に近い礫の平坦面に磨面が残るものである。安山岩の円礫を用いる。平坦な磨面が特徴的な使用痕跡である。5・13・15は裏面が多孔石となり、15は石皿状のわずかな凹みがある。12は被熱によって表面が一部剥落している。8は水磨による凹みをそのまま利用した、炉端固定式の台石である。14は裏面を砥石に利用し、側縁の剝離痕は石皿としての成形痕の可能性がある。

T 多孔石 図版249-1~251-18 PL91

軟質の安山岩を用いる。図化資料は径20~30cm前後の扁平礫に、2・3個から多数の凹みが集中するものまで、さまざまな状態の凹みをもつものがある。片面に凹みが残る1・2・13・18もあるが、多くは両面に凹みがある。主に扁平礫を用いるが、厚みのある12・13・16も含まれる。凹みは片面あるいは両面に多数が集中するものから、2・3個程度のものまである。

(4) 石製品

石棒9、丸石6、三角埴形石製品1、異形凹石1、石製垂飾4がある

A 石棒 図版252-1~6 PL92

図示した資料は安山岩製。いずれも径が10cm以上の大型石棒である。1・5・6は彫刻石棒である。1は頭部中ほどに2段の鐮が廻る。先端はやや細い。5は丸い頭部の下に1段の鐮がある。6は2段の鐮があり、鐮の間に大きな上向き三叉文を陰刻する。脆弱で図示できなかった彫刻石棒がSB16から出土している。頭頂部と頭部中ほどの鐮の間に、おそらく表裏2単位の上向き三叉文を陰刻する。4は無頭石棒か基部が明らかではない。縦に削った痕跡が残る。2は自然石を立石に用いたもの。

B 丸石 図版252-7~10 PL92

やや硬質の球状あるいは扁平気味の安山岩である。長径15~25cm前後で、8は卵形に近い。SB20からは石棒1と丸石7、敷石住居SB40からは立石2と丸石9がそろって出土した。丸石8が出土したSB26も敷石住居である。

C 三角埴形石製品 図版253-12 PL90

安山岩の5面を研磨して、整った形状に仕上げている。長さ8.7cm、高さ6.6cm。長野県で三角埴形石製品は非常に少なく、住居跡の出土例は唯一であろう。

D 異形凹石 図版253-13 PL90

長さ約15cmの楕円形安山岩礫が素材。剥離と敲打により、上半部側縁を対称形に段を付けて成形する。中心より下がった位置に、表裏とも凹石と同じ凹みがある。岩偶のような性格をもつ石製品であろうか。

E 石製垂飾 図版253-8~11 PL92

9は翡翠製。長さ3.6cm、幅1.5cm、厚さ0.8cmほどで、厚い部分に小孔を穿つ。10・11は滑石製。10は長さ8.2cm、幅2.3cmと大形である。11は長さ約3.6cm、幅1.6cmで、孔が大きい。8は蛇紋岩類で、長さ約3.4cm。全面を研磨し、穿孔の痕跡がある。弥生住居跡SB05から出土し、帰属時期に疑問の余地は残す。

第3節 弥生時代

1 遺構

(1) 概要

8区ではⅧP・Q区から重機による表土剥ぎを開始し、弥生・古墳時代の遺構は地表下30~40cmの第1調査面で最も早く確認された。黄褐色の検出面に暗褐色の落ち込みが現れ、プランは比較的明瞭に見えた。8区の弥生時代遺構としては、竪穴住居跡6軒がある。いずれも後期前半に帰属する。分布状況は、ⅧP18・20、ⅧQ06にSB03・05・06の3軒、30m弱間隔をあけて東側のⅧQ10・15、ⅧR12・13にSB08・09・12の3軒がある。ほとんどが標高329mの平坦面からその周囲に占地し、SB12のみやや離れて9区に面した緩斜面にある。沢を隔てた9区には同時期の住居跡SB63・64の2軒がⅧN21・22、ⅧS02・07で検出された。SB12との距離は約30mである。遺構の記述はこの3群の順に行う。

遺物のほとんどすべてが竪穴住居跡から出土した。切り合う縄文時代住居跡に混入したものや、遺構外出土遺物は少量である。土器の器種組成は壺・甕・鉢・高坏を基本とし、甕・蓋が伴う場合がある。竪穴住居出土土器で器種分類できたものは、遺物量少量の住居跡を除いて、壺が圧倒的に高い重量比を占める。

(2) 竪穴住居跡

SB 03 図版 255・263、275 PL95 位置：Ⅷ P18・19

経過：縄文中期住居跡 SB56 の南半分を切る。南側は土地境界の段差で掘削される。埋土：北西側で層厚約 25cm。基本Ⅱ層の砂質シルトが主体。粘質シルトで貼床を作る。規模・形状：西北西—東南東の主軸約 7.2 m、直交軸現長 4.9 m、深さ約 25cm。隅丸長方形。施設：周溝が廻り一部途切れる。壁からやや離れて床面に大小ピット 10 基、南東壁に 6 基が集中。炉は北西壁側へ寄り中軸上に地床炉 1 か所。よく焼けている。遺物：埋土は浅いが器種がそろそろ。ピット 3 底面から高環が出土。壺、甕（図版 275-1）、台付甕、鉢、高環、甕がある。時期：出土土器から、弥生時代後期前半吉田式期。

SB 05 図版 256・264、275 PL95 位置：Ⅷ P20、Ⅷ Q16

経過：縄文中期住居跡 SB17 の大部分を切る。北東壁で SB21、南西壁で SB50 を切る。埋土：層厚約 25cm。灰黄褐色・にぶい黄褐色砂質シルトが主体。砂・シルト混合土で貼床を作る。ピット埋土は水没のためほとんど記録できなかった。規模・形状：北西—南東の主軸約 6.4 m、直交軸 4.4 m、深さ約 25cm。隅丸長方形。施設：南東壁を除いて周溝が廻る。壁からやや離れて床面に大小ピット 14 基、南東壁に 4 基が集中。炉は北西壁側へ寄り中軸上に地床炉 1 があり、外周がよく焼けている。南西に寄って炉 2 がある。遺物：土器は比較的少量で、壺（図版 275-2）、甕、台付甕（同 3）、高環がある。時期：出土土器から、弥生時代後期前半吉田式期。

SB 06 図版 256・265、275・PL93 位置：Ⅷ P10・15、Ⅷ Q06・11

埋土：層厚約 25cm。褐灰色・灰黄褐色粘質シルトが主体。床面上の 3 層に一括性が高い遺物と礫を含む。固い貼床を作る。規模・形状：北西—南東の主軸約 7.2 m、直交軸 5.3 m、深さ約 25cm。隅丸長方形。施設：周溝が全壁際を廻る。北隅寄りに短い溝がある。壁からやや離れて床面に大小ピット 12 基、周溝内に 4 基ある。炉は 3 か所。北西壁側へ寄り中軸上に地床炉 1、中央付近に炉 2、やや壁に寄って炉 3 があり、1・2 はよく焼けている。遺物：土器量が多く、壺（図版 275-4～6）、甕（同 7・8）、台付甕（同 9）、甕（同 10）、鉢（同 11・12）、高環（同 13・14）がある。石器には磨製石鏃（図版 282-1）、太形蛤刃石斧（同 9）、砥石（同 11・12）がある。時期：出土土器から弥生時代後期前半吉田式期。

SB 08 図版 257・266、276 PL93 位置：Ⅷ Q05・10

経過：第 1 検出面で大形の落ち込みが確認された。短軸方向のサブトレンチで範囲を確認したところ、北東壁側が調査区境界にかかったため重機で表土を除去し、サブトレンチを延長してプランと床面を確認した。埋土：層厚約 40cm。褐灰色・黒褐色粘質シルトが主体。床直の 5 層に土器片と石器を含む。貼床は不明瞭。規模・形状：北西—南東の主軸約 8.6 m、直交軸 6.7 m、深さ約 40cm。隅丸長方形。施設：周溝が全壁際を廻る。南西壁では内側に旧周溝が残り、拡張されている。壁からやや離れて床面に主柱のピット 1～6、大形の P16、南東壁に P8・9 など大ピット 10 基と、不規則な小ピット数がある。炉は北西壁側へ寄り中軸上に地床炉があり、外周が強く被熱している。遺物：規模の割に遺物量は少ない。壺、甕（図版 276-15～17）、台付甕（同 18）、鉢（同 19）、高環がある。石器には磨製石鏃の製品（図版 282-2・4）と未製品（同 3）、扁平片刃石斧（同 10）、砥石（同 13）がある。ほかに安山岩製の勾玉状石製品（同 14）がある。時期：出土土器から、弥生時代後期前半吉田式期。

SB 09 図版 257・267、276 PL93 位置：Ⅷ Q15

経過：縄文中期跡 SB40 の北壁上層にある。炉跡のみの SB28 を切る。埋土：層厚 15cm 弱と薄く、南側

は削平される。黒褐色砂質シルトが主体。貼床は確認されない。規模・形状：北西—南東の主軸現存長約4.8m、直交軸現存長3.7m、深さ約15cm。不整な隅丸長方形。施設：南西壁際に周溝が廻る。中規模のピット4個がある。遺物：土器は少量で、壺、甕（図版276—20）、台付甕、高環がある。時期：出土土器から、弥生時代後期前半吉田式期。

S B 12 図版259・268、276～280 位置：Ⅷ R12・13

経過：縄文中期住居跡SB31の東壁を切る。炉跡のみのSB34を大部分切る。東側をかなり削平してプラン確認した。埋土：北西側は層厚50cm近く、斜面側の東壁はほとんどない。灰黄褐色・黒褐色砂質シルトが主体。埋土下層の4層に炭化物と一括性が高い多量の完形土器を含む。粘土・シルトを混和して固い貼床を作る。規模・形状：南北主軸6.8m、直交軸5.4m、深さ約36cm。隅丸長方形。施設：周溝が北東隅を除いて壁際を廻る。南壁に浅い方形の掘り込みがありピット7が接する。壁からやや離れて床面に主柱のピット1～4、大形のP16、北壁寄りにあるP6は小規模ながら深い。炉は北壁側へ寄り中軸上に地床炉があり、外周・中央とも強く被熱する。遺物：極めて多量で、8・9区出土弥生土器の過半量を占める。壁際には少なく、2～3m離れて出土した破片が接合して復元可能な個体となるため、投棄されたような状況が窺える。壺（図版276—21～278—34）、甕（278—35～280—48）、台付甕（同49）、蓋（同50）、鉢（同51）、高環（同52～57）がある。石器には磨製石鏃の製品（図版282—5）と未製品（同6・7）、土製勾玉（同15）がある。時期：出土土器から、弥生時代後期前半吉田式期。

S B 63（9区） 図版260・270、281 PL94 位置：Ⅷ N21・22

経過：表土剥ぎ時に遺構の存在がわかり、遺構検出で平面的な観察からプランが確認できた。埋土：層厚約35cm。周囲から流れ込んだ黒褐色・灰黄褐色砂質シルトが主体。細粒砂を多く含む土で固い貼床を作る。規模・形状：北西—南東の主軸約6.3m、直交軸4.7m、深さ36cm。隅丸長方形。施設：南西側半分の壁際に周溝が廻る。壁からやや離れて床面に主柱4本のピットP1～4が掘り込まれる。炉は中央に地床炉1があり被熱が弱い。北西壁側へ寄り中軸上に炉2があり、固く焼ける。遺物：壁際に略完形土器を含む数個体が散在していた。破片は多くない。壺（図版281—58・59）、甕（同60）、甕の蓋（同61）、高環（同62・63）がある。時期：出土土器から、弥生時代後期前半吉田式期。

S B 64（9区） 図版260・271、281 PL94 位置：Ⅷ N21・22、Ⅷ S02

経過：検出時に配石遺構SH33が本跡の南壁際を切ると考えたが、調査の進捗によって時期が縄文後期中葉とわかり、本跡のプランを再確認した。北側のSB63との距離は約3m。埋土：層厚30cm弱。周囲から流れ込んだ暗褐色・黒褐色砂質シルトが主体。細粒砂を多く含む。貼床は確認できない。規模・形状：北北西—南南東の主軸約6.1m、直交軸4.7m、深さ25cm。南側が幅広い隅丸長方形。施設：床面の南東側に偏って等間隔に主柱穴と思われるピットP1～4が掘り込まれる。P4上層から小形壺と小形高環が出土した。炉は中央よりやや北寄りに地床炉1がある。遺物：遺物量は少量である。壺（図版281—64・65）、甕、鉢、高環がある。時期：出土土器から、弥生時代後期前半吉田式期。

（3）土坑

S K 1755（9区） 図版115・260、281 PL94 位置：Ⅷ S07

経過：検出時に配石遺構SH33等と一連の遺構と考えたが、土器の出土によって弥生遺構と判明した。直接切り合う遺構はない。SB64南壁外約1mにある。埋土：層厚30cm弱。周囲から流れ込んだ暗褐色

色・黒褐色砂質シルトが主体。細粒砂を多く含む。規模・形状：北東—南西の主軸約120cm、直交軸約70cm、深さ45cm。落花生のような不整楕円形。遺物：底面から完形の小形壺2点が並んで出土した（図版281—66・67）。時期：出土土器から、弥生時代後期前半吉田式期。

2 遺物

(1) 竪穴住居跡出土遺物

SB 03 図版275 PL95

土器：1は甕で、胴部に複合鋸歯文を施す。

石器：覆土中より頁岩の剥片が3片出土した。

SB 05 図版275 PL95

土器：2は壺で、口縁が広く外反し頸部も広口である。赤色塗彩はない。3は台付甕で、口縁部は長くのび、波状文を巡らす。

SB 06 図版275・282 PL95・102

土器：4・5は壺で、いずれも赤色塗彩を施す。5は沈線で横帯区画を施した後に鋭い窪状工具で区画の中に斜線文を巡らす。その下には2本の櫛で波状文を巡らし、さらにその下に鋭い窪状工具で鋸歯文を巡らす。6は胴部の張りが強い壺で、赤色塗彩を施す。7・8は甕B類で口縁部に波状文を巡らす。このほか台付甕の脚部（9）、鉢A類（11・12）、高環B類（13）、高環の脚部（14）が出土した。

石器：1は磨製石鏃の未製品で頁岩製。このほか覆土中より頁岩の剥片が8片出土した。9は太形蛤刃石斧で、刃部は欠損。11・12は砥石で、いずれも片面に溝状の擦痕がある。

SB 08 図版276・282 PL95・102

土器：15～17は甕B類である。いずれも口縁部に波状文を巡らす。15の胴部には沈線で鋸歯文あるいは羽状文状の文様が認められるが、文様を描く意識が希薄で、不定形である。このほか台付甕（18）、鉢A（19）がある。

石器：2・3・4は磨製石鏃の未製品で、いずれも頁岩製。表裏面を研磨するも、未完成で剝離面が一部残存する。4は無茎式で先端部を凸形に成形する。2・4は1か所の穿孔がある。2は両面穿孔、3の穿孔法は不明。このほか覆土中から頁岩製の剥片が1片出土した。10は扁平片刃石斧で基部の一部を欠損。13は砥石で両面全体に顕著な摩耗痕がある。14は勾玉状の未製品。

SB 09 図版276

土器：20は甕で、口縁部に刻みを施す。

SB 12 図版276～280・282 PL96～100・102

土器・土製品：21～34は壺である。25は沈線で横帯区画を施すが、横帯区画の中に充填される斜線文と横帯文の下に巡らす鋸歯文は鋭い窪状工具を用いて描かれている。30は頸部に補修痕と思われる穿孔がある。類例は柳沢遺跡30号土器集中の壺にもみられる（長野県埋蔵文化財センター2012）。12号住居跡出土壺で赤色塗彩が施されるものは27・29・30・32である。35～48は甕B類で、口径より胴部最大径が大きいBⅠ類は6個体（35～38・40・41）、口径と胴部最大径がほぼ同じBⅡ・Ⅲ類は3個体（42・43・45）、口径より胴最大径が小さいⅣ類は3個体（46～48）である。このうち44以外は口縁部に波状文を巡らす。このほか台付甕（49）、鉢A（51）、高環A（52・53・55）、高環B（56）、高環の脚部片（54・57）がある。高環A（53）と脚部片（57）は長脚指向のⅡ類である。

石器：5・6・7は磨製石鏃の未製品で、いずれも頁岩製。5・6は無茎式で、5は一か所の穿孔で両側穿孔。このほか覆土中より頁岩製の剥片が6片出土した。15は土製の勾玉である。

SB 63 図版 281 PL100・101

土器：58・59は壺である。58は口縁部が垂直を意識して立ち上がり、胴部最大径が口径より極端に大きく通常の形態とは異なる。外面に赤色塗彩を施す。60は甕B類で口縁部に波状文を巡らす。このほか高坏A類(63)、B類(62)、蓋(61)が出土した。

SB 64 図版 281 PL101

土器：64・65は壺である。65は頸部に2連止めの廉状文を巡らし、その下にボタン状の貼付文と鋸歯文を施す。

(2) 土坑出土遺物

SK 1401 図版 282 PL101

石器：8は磨製石鏃の未製品で、先端部を凸形に整形する。基部は無茎式。このほか覆土中より頁岩の剥片が1片出土した。

SK 1755 図版 281 P101

土器：66・67は壺で、いずれも小形で頸部に等連止めの廉状文、その下に波状文を巡らし、外面に赤色塗彩を施す。

第4節 古墳時代

1 遺構

(1) 概要

8区で竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡1棟が検出された。表土剥ぎ開始から間もなく弥生時代住居跡とともに、第1調査面でSB04とST05が明瞭に確認された。SB04・18は標高330.0m前後の平坦面、SB13は328.5mの緩斜面に、30m前後の間隔をあけて分布する。ST04はSB04・18の中間に位置し、SB04と方位がそろう。弥生時代住居跡と占地在りが近いが、切り合わない。

(2) 竪穴住居跡

SB 04 図版 255・272、283 PL94 位置：Ⅷ P14・15・20

経過：第1検出面の表土剥ぎ時に現れ、土色の差から平面観察で明瞭にプラン確認できた。規模・形状：北西—南東の主軸6.8m、短軸6.9m、深さ37cm。隅丸方形。施設：周溝が壁際を全周する。カマド反対側の南東壁中央が張り出し、周溝がカーブする。出入口部であろう。壁からやや離れて四隅に主柱穴ビットP1・3・5・6の4個がある。いずれも口径・深さとも80cm前後で、柱痕跡が観察される。P5に接して薄い焼土が広がる。中央のP7は径1mと大形であるがやや浅い。カマド：北西壁の中央にある。住居埋土除去後はカマドが大礫で覆われた状況であった。袖先端から煙道端部まで長さ約220cm、袖残存部幅約100cm。扁平河原石を立てて芯材とし、砂と粘質土を混和し袖を構築する。最下層の7層には骨片が含まれる。埋土上部からミニチュアの鉢形土器(図版283-1)が出土した。向かって左側に灰溜ビツ

トP2がある。埋土：灰黄褐色・黒褐色砂質シルトが主体。夾雑物と色調の差により20層ほどに分層される。カマド前を中心に、床面付近には大礫が多い。遺物：壁際の床面から石鍾（図版284-4～14）が集中して出土した。規模の割に土器量は少ない。土師器は甕（図版283-6・7）、鉢（同3）、環（同2）、高環（同5）などが出土。分厚い方形鉢は希少（同4）。須恵器には瓶と壺の破片がある。時期：古墳時代中・後期1期。

SB 13 図版258、283 位置：Ⅷ Q18・19・23・24

経過：検出面が暗褐色シルトの部分にありプラン確認はやや困難のため、短軸トレンチ断面観察を交えて行った。縄文中期住居跡SB58の南壁上層を切る。規模・形状：北西-南東6.0m、直交軸5.8m、深さ約25cm。不整形。施設：北-西壁際を周溝が断続的に廻る。壁からやや離れてピット14基が見られる。四隅に主柱穴ピットP7・14・12の3基がある。北東のP4またはP5は掘削不足であろうか。P4・P12は間仕切り溝に似る。カマド：精査したが確認できなかった。埋土：灰黄褐色・黒褐色砂質シルトが主体。遺物：北半部は床面に礫が散在した。西隅の床面から石鍾（図版285-17～31）が集中して出土した。土器量は少ない。土師器は壺、甕（図版283-8・9）、手づくね土器など出土。時期：古墳時代後期。

SB 18 図版257、283 PL103 位置：Ⅷ Q04

切り合い：縄文時代の配石遺構SH16を切る。縄文時代の可能性もあるSD12と重複するが、直接接する部分は調査できず、明確な新旧関係は捉えられなかった。用地北端に当たり大部分を掘削される。規模・形状：北西-南東の壁線が残り、この部分の残存長約6.2m、深さ32cm。隅丸方形。施設：周溝が壁際を廻る。南隅にピット2基がある。埋土：褐灰色砂質シルトが主体。遺物：南西隅から土師器甕（図版283-12）が完形で出土。他に鉢（同10・11）、高環が出土。時期：古墳時代1期。

（3）掘立柱建物跡

ST 05 図版256 位置：Ⅷ Q02・06・07

経過：第1検出面の表土剥ぎ時に現れ、土色の差から平面観察で明瞭にプラン確認できた。同地点の小規模の土坑よりピットの規模が大きく、検出時に掘立柱建物跡として識別できた。切り合い：住居跡と切り合いはない。第1調査面ではピット列内外に多数の土坑が分布するが、直接切り合うものはほとんどない。第2調査面の縄文時代土坑SK1558などを切るピットがある。埋土：ピット1～17とも掘方埋め戻し土は黒色シルトで、柱痕跡が明瞭に検出された。規模・形状：北東-南西の長軸は芯々で9.0m、短軸は4.8m。桁行5間・梁行3間の側柱構造である。掘方の口径は60～90cm、深さは四隅のピットP1・5・10・13が60～90cm、その他の内側のピットは、例外は見られるが30～40cmである。桁行・梁行とも、四隅の柱と1列内側の柱との間隔は芯々で1.7m前後、内側の柱の間隔は芯々で1.4m前後である。遺物：ピットから縄文中期土器片が少量出土した。ピットP4・5・10・11からは古墳時代後期の土師器片が出土した。時期：ピット出土遺物と、第1調査面ではもっとも黒味の強い埋土が共通するSB04と同じ、古墳時代後期と推定する。

2 遺物

SB 04 図版283-1～7、284-1～16 PL103・104

土器：2は環C1類で口縁端部が短く外反し、底部は平底である。鉢は口縁端部を短く外反させる個体（3）と、口縁と底部の外周形状が隅丸長方形を呈する個体（4）がある。長胴甕は器面にハケ調整を施すB

類(6)とミガキ調整を施すC類(7)がある。(5)は高環D類で脚部に透かしを有する。このほかにミニチュア土器(1)がある。

石製品：1は砥石で表裏面にV字状の研磨痕がある。2・3は凹石である。2は表面、3は表裏面にロート状の凹みを有する。4～16は石錘で、長軸縁辺部の両側あるいは片側に抉りを入れる。平均的な法量は長軸約13cm、短軸約10cmにあり、重さ約796gを測る。

時期：環C1類が出土する点から、1期と考えられる。

SB13 図版283-8・9、285-17～31 PL103・104

土器：長胴甕は器面にナデ調整を施すA類(8)と、ハケ調整を施すB類(9)がある。

石器：17～31は石錘で、長軸縁辺部の両側あるいは片側に抉りを入れる。平均的な法量は長軸約13cm、短軸約10cmにあり、重さ約695gを測る。

時期：長胴甕A・B類は1～4期を通して存在するため、時期を限定できない。

SB18 図版283-10～12 PL103

土器：12は球胴に近い甕で胴部中央部付近に最大径があり、胴部最大径と口径の差は6.2cmを測る。このほか小型甕(10・11)がある。

時期：甕12は古墳時代中期に特徴的な器形であり、長野市榎田遺跡の甕C類に対応する(長野県埋蔵文化財センター1999)、榎田編年ではⅡ期を中心に出土し、川久保・宮沖編年に対応させると1期となる。

第5節 中世・近世

1 遺構

(1) 概要

8区北東隅のⅧR01・02・06～09・11～13地区では、第1調査面で密集する小規模なピット群が検出された。方形掘方が並ぶ掘立柱建物跡が確認されたことから、中世あるいは近世の遺構面と考えた。先に表土剥ぎを行ったⅧP・Q区では、弥生・古墳時代住居跡が検出されていたが、この地区では確認されなかったため、全体を中世・近世の遺構群と推定した。遺物は極めて少ないが、平坦面の土坑や縄文・弥生・古墳時代遺物にカワラケなどが混在して出土しており、活動範囲はⅧR区北半に止まるわけではない。

(2) 掘立柱建物跡

ST04 図版254・259 位置：ⅧR01・02・06・07

経過：縄文中期住居跡SB31・32・41など上層にあり、ピットが住居跡埋土に達する。プランを掘削する切り合いはない。第1調査面ではピット列内外に多数の土坑が分布するが、直接切り合うものはほとんどない。検出時にSK番号を付番したピットをP1～10と改称した。埋土：ピット埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。柱痕跡はほとんど確認できない。規模・形状：北西-南東の長軸はピット中心で約8.1m、短軸は3.2m。桁行4間・梁行1間の側柱構造である。ピットは隅丸方形に近いものが多く、長径は40～60cm、深さは20～45cm。桁行の柱間隔はピットの中心で2.0～2.4m前後。本跡東側の

SK1403・1406・1407・1410・1411・1415の配列も規模・形状が本跡近似し、軸線も共通である。遺物：本跡に伴う遺物はない。ピットP4・5・10・11からは古墳時代後期の土師器片が出土した。時期：ピットの規模・形状から中世あるいは近世と推定する。

2 遺物 図版281-1~6

1~5はカワラケである。2・5は口径9~10cm、深さ2.6~2.8cmを測る大形品である。1・3・4は口径6.4~6.8cm、深さ1.6~2.0cmを測る小形品である。いずれも砂が少ない灰黄褐色の軟質の胎土で、底部に回転系切り痕がある。6は古瀬戸の甕で、刻印がある。

第6節 総括

1 縄文時代

(1) 縄文時代集落跡の変遷

8区調査における最大の成果は、住居分布域の外径約90mという大規模な環状集落跡の、南側約半分を明らかにしたことである。第2節で各種遺構を種別に記述し、遺物報告において中期土器の編年位置に見通しをつけた。本節では第V群中葉古・中・新段階、第VI群後葉1~5段階とした時期区分に基づいて集落の変遷をたどってみる。

本区の住居分布を概観すると、分布南限付近、ⅧV09に位置する流路跡SB15周辺には住居跡が見られず、この部分が開口部となる馬蹄形集落とも見られる。流路跡東側の住居跡群を東群、西側を西群と呼び、住居跡の移り変わりを見る。西群は切り合いが激しく住居跡の遺存状態がよくない上、住居跡分布域の外側を掘削されているため、東群ほど変遷が明らかにはならない。8区の集落形成に先立って12区に第IV群猪沢式期のSB88が営まれた。その後中期中葉古段階、新道式期と推定されるSB35が東群に、SB53が西群に現れる。中段階藤内式期には東群にSB10・29が営まれた。2軒の時期差は明らかではない。次いで新段階井戸尻式後半から曾利Ⅰ式期に、東群ではもっとも低所にSB16が営まれた。中葉期には東群にSB45・67も見られるが、詳細な時期がわからない。西群のSB52も中葉期と思われるが、詳細不明である。大局的には東西対称的に、環状部の最も外側に1・2軒の住居が散在する状況が想定される。中葉期の炉には、土器埋設炉と地床炉の2種がある。

大木8b式、曾利Ⅱ式と並行する中期後葉期の初頭1期は、火焔型土器を出土したSB19のみが西群に見られる。2期にはSB27・43・44が東群、SB51・69が西群に現れ、コの字形石組炉、長方形石組炉を備える。中葉期からこの時期までは住居数が少ないが、SB43・44周辺の上層、ⅧQ24・25、ⅧR16・21、ⅧV03・04に厚く堆積した遺物包含層からは、完形個体を含む相当量の当該期土器が出土している。未調査部分を含め、さらに住居が存在したものと推定する。後葉3期に該当するのは東群のSB37のみである。短い時間幅を反映した単純な土器様相と考えられ、住居数が一時的に減少したわけではなからう。ベッド状遺構が廻り、長方形石組炉を備えている。続く4期には30数軒が該当する集落のピークを迎える。東群のSB22・23・25・30・31・41・55は遺物量も多量である。これらは隣接住居の一部と切り合い

ながら、北北東—南南西方向に列をなして分布する。西群はSB14のみである。SB23が不確定である以外、これらの住居跡はベッド状遺構を備えている。土器様相から細分できなかったが、この時期にやや短くなった長方形石組炉、四隅に石を埋め込む方形石組炉、あるいは五角形に近い石組炉という変化があるので、時期細分の手がかりとなる。

5期には土器様相が大きく変わるとともに、住居もベッド状遺構がなくなり、炉底が深い方形石組炉に統一される。それまで劣勢だった西群に大形のSB68をはじめ、SB20・21・54・57・59が密度高く分布する半面、東群には新たな住居が現れていない。この時期、SB20・68では床面が複数見られるが、どのような理由であろうか。時期がはっきりしないSB17・62・56なども炉形態から5期頃と推定される。第Ⅶ群中期末葉加曾利EⅢ式期に至り、方形石組炉と埋嚢を備えた敷石住居SB26・40とSB07の3軒が環状部の最も内側に分布する。敷石住居に接して配石遺構群が数か所に築造される。このころSB43・44の上層周辺に、若干の地形改変を伴う盛土が行われたのではないかと推定される。

住居群が盛衰を繰り返す期間、中央部の広場部分にも各時期の土器を伴う土坑が作られた。本来立石だったと推定される大へ巨礫や土器の埋納状況から、墓域の可能性が高いと推定される。このような変遷から、東群と西群の住居群占地にはかなり異なった状況がうかがえることと、一貫して住居分布域と墓域推定部分の区分が維持されてきたことが推定できる。調査範囲では貯蔵穴エリアと顕著な廃棄場は明らかにならなかった。長野県の縄文中期環状集落では、貯蔵穴の分布が顕著ではない傾向が知られており、8区も同じ状況なのであろう。4区の成果を見ると、廃棄場はさらに千曲川に寄った斜面部分にあり、すでに残存していない可能性が高い。

8区の集落が縄文中期の終焉を待たずに廃絶した後、後期中葉加曾利B3式頃には9区に墓域が形成される。糞被葬と立石を伴う土坑墓10基足らずが検出された。弥生時代の遺構に破壊された可能性はあるが、さほど広い範囲とは考えられない。5区東で後期前葉、7区で後期初頭の墓域が検出され、12区では後期末葉の墓の可能性のある土坑数基が確認されている。いずれの時期も居住域は判明していない。墓域より低所の千曲川付近に住居を構えるとは考えにくいので、居住域からやや離れた平坦地に、千曲川を臨む小規模な墓域を設けたと推定されよう。おそらく居住域の移動に伴い、短時間で墓域も移動したのであろう。

土器様相に共通する部分が多かった新潟県の縄文中期住居と若干比較を試みる。8区の集落に見られる住居形態は円形または楕円形、一部卵形の竪穴住居であり、隅丸方形、長方形住居及び掘立柱建物も確認されなかった。新潟県中越地方の縄文中期集落では、円形住居と長方形住居が併存し、長方形柱穴（掘立柱建物跡）が伴う（津南町教育委員会2005）。一方上越地方では円形系統の竪穴住居に方形系統の住居が伴い、長方形住居や長方形柱穴は見られない（上越市誌編さん委員会2004）。従って中越地方の住居形態とは相違点が多く、上越地方と共通する部分が多いと言える。本遺跡でフラスコ状土坑の存在が不明確だったことも、中越地方とは異なる。第Ⅶ群土器の時期、斬倉式土器の分布域として共通の地域性を示すものの、7類の圧痕隆帯土器を伴う上越地方とは集落構造もより近似する。反面、圧痕隆帯土器が皆無に等しい中越地方とは集落構造も相違している。

(2) 土偶について

8区から出土した土偶は破片数で196点、接合破片を減すると190点となり、調査区内では最大個体数であろう。12区では中期前葉期に属す7点、3・4・5区で中期末葉から後期中頃頃に属す35点が出土し、

接合例が見られないから遺跡全体で232点に上る。長野県における土偶の集成は、1992年現在で1,167点を数え、全国第3位の多さであった(宮下1992)。このうち中期土偶は812点で約70%を占めた。その後県レベルの集成は行われていない。松本市エリ穴遺跡360点以上、安曇野市北村遺跡100点、小諸市郷土遺跡67点、飯田市中村中平遺跡67点などの土偶多出遺跡に本遺跡を加えると、長野県の土偶点数は1900点を超え、おそらく県全体で2000点に達しているであろう。エリ穴遺跡は後・晩期主体であり、中期に限れば本遺跡は断然1位の数となる。1遺跡220点を上回る土偶を出土した遺跡は国内で11遺跡に過ぎず(中村他2012)、中期に限れば大差はあるものの青森県三内丸山遺跡、山梨県釈迦堂遺跡群に次ぐ点数となる。ここに本遺跡の特異性が現れているといえる。

土偶の編年の位置は正確に指摘できないが、猪沢・新道式期に比定できるものを除けば過半数は中期後葉期に帰属すると推定される。長野県北部に比較の対象となる遺跡がないため、150点の土偶を出土した津南町道尻手遺跡の事例と比較してみる(津南町教育委員会2005)。本遺跡の土偶は板状で有脚の立像とつま先が付く坐像風のものがある。顔面表現のあるものといないものが相半ばする。腕はほぼ水平である。正中線を隆帯で表現するものが多く、腰带状の隆帯と交わるものが少なくない。殿部は隆帯・沈線2種の表現がある。道尻手遺跡の土偶は、胴体下部につま先が付く坐像風のものはいくつかある。顔面表現を省略する例も少ないようである。腕はやや上方に伸ばすものが多く、正中線隆帯は普遍的であるが、腰带状の隆帯は見られないようである。殿部は沈線で表現するものが多いらしい。脚部の形態・文様は共通する。40kmほどの距離に位置し、ともに河童型の板状土偶を作る集落でありながら、差異が目立つように思われる。

(3) 自然科学分析の結果

8区の調査に関して委託により実施した科学分析には、黒曜石産地推定、放射性炭素年代測定、樹種同定、種実分析がある。詳細な結果報告はDVD版に収録されているので、概要のみ紹介する。

A 黒曜石産地推定

8区の竪穴住居跡から細別時期が明らかな資料を選び、時期が下る1～5区の遺物集中出土資料を加えた。石鏃・石錐とその未製品、原石・石核・剥片から選定した。分析試料数は、8区出土資料600点、1～5区出土資料250点、合計850点である。分析方法は蛍光X線分析法により、沼津工業高等専門学校望月明彦教授に委託した。分析可能だった838点の黒曜石産地組成は、諏訪・星ヶ台732点(87.35%)、和田・鷹山73点(8.71%)、和田・土屋橋北・西各7点(各0.84%)、和田・芙蓉ライト6点(0.72%)、和田・高松沢2点(0.24%)、蓼科・冷山2点(0.24%)となった。この結果から、縄文中期を通じて諏訪・星ヶ台産黒曜石が9割近い圧倒的な比率を保持して使用されてきたことが明らかとなった。残りの1割程度は鷹山を中心とする和田各地を産地とする黒曜石であった。

B 放射性炭素年代測定

8区の住居跡から出土した炭化材を試料として、自然科学的な年代値を得るため、年代測定を実施した。年代測定試料を選定した3軒の住居跡SB14・31・43からは、縄文中期後葉の第VI群に属する土器が出土していた。暦年較正結果(δ)はSB14C9がcalBC2,905 - calBC2,886、SB31炭化物がcalBC2,914 - calBC2,893、SB43床直炭がcalBC3,087 - calBC2,931である。土器編年上、SB43は中期後葉2期、SB14・31は同4期に属し、測定結果と整合的である。

C 樹種同定

縄文時代住居跡には多量の炭化物が遺存していた例がある。それらの中から住居構築材と考えられる形

状をとどめた炭化材を選び、縄文中期の住居に利用された木材の樹種を同定した。結果は、縄文中期中葉の住居跡SB16、後葉のSB14・31・43、末葉のSB40、計5軒の住居跡から出土した13点の試料すべてがクリであった。長野県の縄文中期竪穴住居建築部材に関する、多くの同定結果と同じ結論となった。

D 種実同定

炭化物を多量に含む住居内堆積土を水洗選別したところ、種実の可能性のある試料を採取することができた。このため、炭化物を多く含む土塊と採取した種実の可能性のある炭化物を試料に、食用植物の利用状況を明らかにするため種実同定を実施した。試料は縄文時代及び弥生時代の住居跡から出土した、時期と出所が明らかなものに限った。

結果は、縄文中期中葉の住居跡SB16、後葉のSB19・43からは炭化したオニグルミの核の破片が多量に検出されたほか、クリの子葉やブナ科の果皮片も確認された。オニグルミの核は非可食部分であることから、利用後の残滓と推定されている。クリは明るい林地を好み林縁など人里近くに生育する。オニグルミは河畔や林縁に生息する。本遺跡の立地から、これらの木材や種実は入手しやすい環境であったと推定される。SB31からは種実遺体は検出されなかった。中期末葉の住居跡SB07 炉内埋土からは栽培種のイネ、アワ近似種、ヒエ近似種、オオムギ、コムギが検出された。

弥生後期前半の住居跡SB12からは、栽培種のモモとイネが検出された。

2 弥生時代

(1) 弥生時代における集落の様相

本項では替佐遺跡群（千田遺跡、川久保・宮沖遺跡）における主要遺構の時期別変遷を検討する。

中期：替佐遺跡群においては、川久保・宮沖遺跡で中段階新相（寺島1999）を中心とした土器集中と水田域の可能性が高い範囲を検出した（長野県埋蔵文化財センター2013）。しかし千田遺跡では中期末に7区谷状地形で土器が若干出土しただけである。以後、生活の痕跡はしばらく途絶える。

後期：後期初頭に千田遺跡8・9区に居住域が形成される。竪穴住居跡8軒、土坑1基が検出された。時期は松原遺跡2段階（長野県埋蔵文化財センター1998）にあたる。

千田遺跡の竪穴住居跡は8区のAブロック3軒（SB03・05・06）とBブロック3軒（08・09・12）、9区のCブロック2軒（SB63・64）に分かれる。これら居住域は、北西→南東方向に走る谷地形により区切られた段丘上に点在する。同一ブロック内の住居跡の配置については、BブロックのSB08と09、CブロックのSB63と64において住居跡間が2.5mと近接しており、同一段階における建て替えも想定される。このため一時期における1ブロックの住居跡軒数は1～2軒の可能性はある。

竪穴住居跡の形状は、いずれも隅丸長方形である。千曲川下流域の北信地方における弥生時代住居平面形態は「中期一円形→後期一長方形」と変遷することが判明しており（長野市教委1987）、千田遺跡の住居形態は後期的様相を示すといえる。住居跡の規模は大形（長軸8.5m 短軸6.7m）と小形（長軸4.9～7.2m、短軸3.6～5.4m）に分かれる。大形は1軒（SB08）、小形7軒（SB03・05・06・09・12・63・64）となる。住居跡の規模・形状については吉田高校グラウンド遺跡における検討がある。それによれば住居跡の形状はいずれも隅丸長方形を呈し、住居址の規模は大形（長軸8～9m）と小形（長軸5m内外）に分かれ、大形住居は「集落内での特殊な機能を設定できる可能性がある」としている（長野市教育委員会1987）。千田遺跡における大形住居はSB08の1軒であり、出土した遺物の質と量が他の住居

跡に比べて優れることはないが、集落の中で何らかの優位な立場の人物が居住した可能性は残しておきたい。

替佐遺跡群では、川久保・宮沖遺跡でも後期初頭の居住域が確認された。千田遺跡のCブロックから斑尾川を挟んで対岸に直線距離で東へ約360m離れた場所に位置する。住居跡1軒(SB13)と、洪水による浸食地形NR1bが検出された。住居跡の形状は削平を受けて不明瞭である。

替佐遺跡群における後期初頭の居住域は、千曲川左岸の河岸段丘上に数軒単位で点在することが判明した。しかし居住期間は1～2世代と短く、以後は生活痕跡が途絶えてしまう。千田遺跡で次に居住域が確認できるのは弥生後期末となる。12区で竪穴住居跡2軒(SB82・84)を検出した。続く古墳時代は前期では居住域と水田跡が川久保・宮沖遺跡で確認できる。しかし千田遺跡では中期に居住域が登場するまで生活の痕跡は確認できない。

(2) 弥生後期前半土器の様相

本稿における弥生土器の器種分類と段階区分は長野市松原遺跡における調査成果に準拠することとして(長野県埋蔵文化財センター1998)、第1章に分類と段階区分を示した。それと比較しながら、8区出土の弥生後期前半土器の編年位置と特徴を検討する。千田遺跡8区で検出された6軒(SB03・05・06・08・09・12)の竪穴住居跡からは後期初頭吉田式の良好な資料が出土した(図版275～281)。本稿では図化資料を基に主要器種の形態・文様等の特徴を検討し、吉田式における位置付けを明らかにしたい。

甕: 20個体を抽出した。千田遺跡ではⅠ類が9個体(1・15・17・35・36・37・38・40・41)、Ⅱ類が1個体(43)、Ⅲ類が2個体(42・45)、Ⅳ類が5個体(7・16・46・47・48)、形状不明が3個体(8・39・44)ある。このうち口縁端部が受け口状となるものは15個体ある。

文様についてみると、口縁部に波状文を巡らせる資料が圧倒的に多く、無文の資料は4個体(17・35・38・44)と少ない。また口縁端部に刻み文を施す資料が3個体(36・38・39)ある。頸部には櫛描の麻状文を2段巡らせるものが大部分を占める。いずれも等連止めで2連止めは確認できない。胴部は上位に櫛描波状文を巡らす資料が多い。波状文の施文法は、回転台を用いずに櫛描文を施文し、文様に不連続部分が認められる中部高地型櫛描文(佐原1959)が主体を占めている。回転台を用いて櫛描文を施文し、文様が連続して描かれる畿内型櫛描文(佐原1959)は明確に確認できない。胴部中位にも施文する資料が多く、複合鋸歯文4個体(1・37・40・41)、斜線文2個体(36・43)、羽状文2個体SB12(38・42)、文様構成の不明瞭なもの2個体(15・35)などがある。

台付甕: 4個体(3・9・18・50)を確認した。器形の分かるものうち3・50は口径と胴最大径が器高に比べて長く、鉢の様な器形となる。

壺: 全体が判明した個体は少ない。17個体を抽出した。うち口縁端部が残存するものは11個体あり、口縁端部が受け口状となるものは8個体(2・21・23・24・26・27・33・34)ある。しかし明確に受け口となるのは(27)だけであり、他の個体は、やや受け口もしくは受け口の痕跡程度で目立たない。口縁を単純に整えるものは3個体(4・22・31)ある。胴部形状は最大径が中位にあるもの3個体(2・28・34)、下位にあり無花果形となるもの2個体(29・32)となる。

文様についてみると、頸部文様帯には沈線文、篋描文、櫛描文等を巡らしている。沈線文だけが5個体(22・23・26・33・34)。沈線文と篋描文の組み合わせが4個体(5・21・25・32)、櫛描文だけのものが4個体(2・24・28・29)、櫛描文と沈線文や篋描文との組み合わせは2個体(27・30)、無文のもの

が2個体(4・31)ある。櫛描麻状文を施す個体は等連止めが基本であり、2連止めは(29)のみである。このほか櫛描文に篋描で垂下文を等間隔に巡らすものが1個体(28)ある。赤色塗彩については7個体(4・5・25・27・29・30・32)ある。

鉢：4個体(11・12・19・51)を抽出した。いずれも体部が椀形を呈するA類である。鉢の口径は13～16cmの範囲に収まる。

高環：8個体を抽出した。A類は3個体(52・53・55)、B類は2個体(13・56)、脚部のみ残存3個体(14・54・57)である。高環の口径はA・B類とも19～27cmの範囲に収まる。脚部の高さは、I類(環部に対して脚部高が短い)の資料が2個体(14・54)、II類(環部器高≤脚部器高)の資料が2個体SB12(53・57)ある。いずれも三角透かし孔は認められない。

8区出土の吉田式土器の特徴を列挙すると、次のような点が指摘できる。

- ア 裏の中には、中期栗林式の要素(口径<胸部最大径)と、後期箱清水式の要素(口縁部が長く外反し波状文を廻らす)を併せもつ個体(36・40・41)が見受けられる。特に36には栗林式の要素である口縁端部の刻みも認められる。
- イ 裏の胸部中位に複合鋸歯文を施すものが4個体ある(1・37・40・41)。これは中期栗林式に特有の文様であり、善光寺平南部における後期初頭の裏にはほとんど確認できない。遺跡もしくは地域的な特徴の可能性はある。
- ウ 壺の中には、中期栗林式の要素(肩がナデ肩、胸部下半のくびれがない)と、後期箱清水式の要素(口縁部が長く朝顔形に開く)を併せもつ個体(2・29・34)が見受けられる。
- エ 壺の赤色塗彩は、全体の3割程度であり、完全に定着しない。
- オ 壺の頸部文様帯は、中期栗林式の要素(沈線文)と箱清水式の要素(櫛描文)と篋描文が混在する。篋描文は吉田式の壺頸部において斜線文や鋸歯文、また麻状文を区切る縦線等で用いる点が笹澤浩氏により指摘されており(笹澤1970)、吉田式の指標の一つと考えられる。千田遺跡では(5)や(25)の頸部文様帯において横帯区画を沈線で巡らした後に、区画の中を鋭い篋描で斜線文や鋸歯文を巡らす資料があり、明確に工具による文様の描き分けが認められる。類例は中野市柳沢遺跡25号土器集中の壺にも確認できる(長野県埋蔵文化財センター2012)。上記の篋描文の中には極めて鋭い工具で施文されるものが確認できる。これは木や竹等の先端を金属工具で鋭利な篋状に加工した、もしくは施文工具自体が金属でないと描けない鋭さを有する。弥生時代後期は鉄器が普及し始める時期であり(長野県埋蔵文化財センター1994)、施文具の加工に金属器が用いられた可能性がある。
- カ 壺や甕に見られる麻状文の静止回数は等連止めが圧倒的に多い。吉田式土器の指標である「吉田高校グランド遺跡」出土資料では等連止めが62%を占めることが指摘され、後期初頭から後期にかけて「等連止め主体→2連止め主体→3連止め主体」と変遷する時間的な流れが想定されている(長野県埋蔵文化財センター1998)。千田遺跡8区出土資料で等連止めが多いのは吉田式期に共通する傾向と考えられる。
- キ 高環は中期栗林式から継続するA・B類が存在する。しかし後期箱清水式に特有なC類(環部に段を有する)は確認できない。

- ク 高環の脚部は、中期栗林式的なⅠ類（短脚）に加え、Ⅱ類（長脚指向）が登場する。しかし脚部には後期箱清水式に特徴的な三角透かし孔は確認できない。
- ケ 高環と鉢の口径については、中期は鉢が大きいのに対して後期は高環が大きくなる傾向が指摘されている（長野県埋蔵文化財センター 1998）。8区資料は鉢より高環の口径が平均的に大きく、後期的様相を示す。

以上、千田遺跡8区出土土器の傾向を提示した。これを松原の段階区分（長野県埋蔵文化財センター 1998）に合わせると、裏口縁部に波状文が定着する点、高環脚部が長脚指向である点など2段階以降の特徴が存在する一方で、胴部にくびれを有する壺や長脚で透かしを有する高環など3段階以降の特徴が存在しない点から2段階に伴うものと考えられる。上記の他、9区で検出された遺構出土資料についても、裏には口縁部に櫛描文を施す個体（60）や、壺には頸部が広口で長く外反し、肩部がナデ肩で、胴部にくびれない個体（65・66・67）が存在しており、2段階に伴うものと考えたい。

（3）8区出土の石器について

磨製石鎌の未製品及び剥片、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、砥石、勾玉状の未製品が出土した。

磨製石鎌の未製品は、判別できるものはいずれも無茎式である（4・5・6・8）。8区にある2か所の居住域から計8点出土した。Aブロック1軒（SB06）、Bブロック2軒（SB09・12）である。両ブロックの周辺からは少数ながら磨製石鎌製作時に出たと思われる頁岩製の剥片も出土しており、磨製石鎌の製作跡が住居内もしくは住居周辺に存在したと考えられる。

後期初頭の石器組成については、笹澤浩氏により「中期的な石器が見いだせなくなる」点が指摘されている（笹澤 1982）。千田遺跡における後期初頭の石器点数が少ない点は、当該期の石器組成をそのまま反映している可能性がある。しかし千田遺跡における石器の組成は磨製石鎌・扁平片刃石斧・太形蛤刃石斧が存在しており、中期的様相が濃いのが特徴である。一方で剥片刃器が確認できない点は後期的な組成を示すと思われる。後期初頭の石器組成については、今後の資料の増加を待って検討したい。

第6章 12区の遺構と遺物

第1節 概要

12区は10区とともに本遺跡の最も千曲川下流側に位置する。立地は、蛇行する斑尾川右岸の段丘上である。現地表面の標高は331m前後の地点、地目は水田である。調査区は北北西から南南東に長く、長さ約90m、幅約25mの範囲である。JR飯山線替佐駅から飯山方面へ向かう線路が調査区北西端を画す。東側は段丘崖が地形を画して低地部分へ下る。

平成17年秋に行った重機掘削によるトレンチ調査で、12区は縄文・古墳・中世各時代の集落跡と予想されていた。低地部北半の11区は計画高水位に抵触し、トレンチ調査のみとした。低地部南半部の10区はトレンチ調査の結果に基づき、12区と並行して平成18年度、面的に調査した。

12区は表面積が約2,600㎡だが調査面は中世、弥生・古墳時代、縄文時代の3面であり、延べ7,800㎡を調査した。第1調査面の中世遺構の分布範囲は北側3分の1程度であった。それ以南は第2調査面の古墳時代集落跡の調査と同時に着手した。北側の中世遺構調査後に同一の調査面まで間層を掘削し、全面的に古墳時代集落跡の調査を進めた。第2面では弥生時代後期の住居跡、縄文時代後・晩期の土坑も調査した。トレンチ調査によって縄文時代の遺物包含層が確認されていたため、人力で調査区長軸にトレンチ1本をあげたところ、中期前葉の竪穴住居跡が検出された。このため調査区の北側約半分を重機で掘削し、第3調査面で縄文時代遺構を調査した。本区で検出された主な遺構には竪穴住居跡19軒があり、内訳は縄文時代中期1、弥生時代後期2、古墳時代後期16である。

本区の標準土層を、JR飯山線法尻に近い北側外周と、水田となっている西側外周の断面で代表させる。北側断面(A-A')は深さ約1.5mを掘削した。上層1～3層は耕作土で、有機物が多い黒褐色・黄褐色などのシルトである。4層の黒色シルトが中世の遺物包含層となり、土坑・ピット埋土の基調をなす。層厚は15～20cm。5層の風化礫を多量に含む黒褐色シルトが古墳時代後期の遺物包含層となり、住居跡埋土の基調をなす。層厚は20～30cm。弥生時代後期住居跡も古墳時代住居跡と検出面は同じ。褐色の風化礫層6層を挟んで、7層の褐灰色シルトが縄文時代の遺物包含層となる。遺物は前・中・後期の土器が含まれ、中期が最も多い。層厚は30cm前後。西側中央付近の断面(B-B')では、北側4層の中世包含層は4層に相当、5層の古墳時代後期包含層は5・5a層に相当する。北側7層の縄文時代包含層は9層に相当し、この下部で縄文時代中期前葉の住居跡SB88が検出された。やや南に寄ったC-C'では上部が攪乱されているが、4層の黒褐色シルトが古墳時代後期の包含層となり、住居跡SB73が検出された。

12区の縄文時代遺物包含層である上記の7・9層は前・中・後期の土器を含み、他の時代の包含層に比べて時間幅が長く層厚が厚い。3・4・5区や8区がそうであるように、通常縄文時代の遺物包含層を掘削すると、竪穴住居跡のような遺構が見られなくとも、チャート、黒曜石等の碎片や炭粒を必ず含んでいる。しかしながら本区の遺物包含層は、土器・石器等の含有量が希薄なことにとどまらず、碎片や炭が不思議なほど目につかなかった。

第2節 縄文時代

1 遺構

(1) 竪穴住居跡

S B 88 図版 288・291、319・321 PL105 位置：Ⅱ V01・06・07

経過：人力で掘削したトレンチによって検出した炉体土器から存在を確認した。西側は調査区外にかかり、東側半分強を調査した。埋土：12層の黒褐色シルトが北壁下床面に堆積する。11層の暗褐色シルトがほぼ床面全体に堆積する。埋土上層に遺物包含層と近似する9層の黒褐色粘質シルトが厚く堆積する。勾配を付けて掘削しているため、上部を削られた10層が9層より下部に見えるが、本跡の炉体土器（図版 319-3）より新しい第Ⅵ群土器（同5）が出土した。上層から掘り込んだ土坑と推定される。規模・形状：現存長5.6m、深さ約50cm。円形。施設：周溝。壁からやや離れて床面に大小のピット5個がほぼ等間隔に廻る。炉は中央に土器埋設炉1か所。地山の礫層を掘り込んだ一回り大きい掘方に、胴部下半を欠損した第Ⅳ群深鉢を据えて外側を埋め戻す。遺物：少量である。ピット4の埋土中ほどから小形磨製石斧、北壁下の12層から土偶頭部（図版 321-5）が出土。時期：炉体土器から縄文時代中期前葉。

(2) 土坑 図版 288・290、319・320

縄文時代の調査面としては、Ⅱ P20・25、Ⅱ Q16・17・21～23、Ⅱ V01～03・06～08を第3面として調査した。本区北側半分程度を占めるこの地区では、性格不明の大小ピット約100基を検出した。検出面からこれらの多くは縄文時代に属すると推定する。Ⅱ Q22・23、Ⅱ V03など小ピット数個が直線上に並ぶ部分も見られるが、建物、柵などの遺構と認めるには至らない。

Ⅱ Q22にあり、第2面で確認された大形の円形土坑 SK3317・3318・3319は3基が隣接する。SK3317は径95×100cm、深さ18cm、SK3318は径150×170cm、深さ26cm、SK3319は径104cm、深さ55cmを測る。SK3317から図版 320-11が出土したことから、時期は縄文後期末葉と推定される。規模・形状から墓坑の可能性がある。これらと近いⅡ V03-01杭西側にあるSK3204から無文土器（図版 319-7）が出土した。同時期か縄文晩期の可能性がある。

(3) 集石遺構

S H 48 図版 288、319 位置：Ⅱ Q11-09

切り合い：古墳時代住居跡 SB87の東壁下層にある。規模・形状：長径130cm・短径90cmほどの範囲に鶏卵大～小児頭大の安山岩礫を平面的に並べる。礫に被熱痕は確認できない。遺物：第Ⅳ群土器1個体が出土（図版 319-6）。時期の根拠となる。

2 遺物

(1) 土器

A 遺構出土土器 図版 319-3～7、320-8～12 PL108

SB 88 図版 319-3~5 PL108

3・4は第IV群に属す。3は灰土器。口縁部・胴上部に楕円区画文を連ね、隆帯に刺突列と複列の小波状半沈線が沿う。区画内には連続する半円内に円点を付す意匠、弧線、斜行沈線などを施す。胴部には大柄の渦巻文が描かれるらしい。4は垂下降帯が付く胴下部破片。5は住居跡埋土上部から出土した第VI群2類の胴下半部破片。

SH 48 図版 319-6

第IV群の指頭瓦痕文土器。比較的小形の深鉢である。

土坑 図版 319-7~12

SK3413出土の8は中期前半と推定される縄文施文土器。口縁部の横位隆帯上にも縄文が施され、結節部が見える。SK3340出土の9は縄文施文の口縁部破片。中期前半であろうか。SK3072出土の10は口縁部に太い平行沈線文が廻る。後期末葉頃であろうか。SK3317出土の11は胴部にまばらな羽状沈線文を施す。10と時期が近い。SK3192出土の12は細密条痕文を施す甕形土器であろう。上部は斜位、下部は縦位に施文する。SK3202・3322出土の7は無文の深鉢である。外面は横ヘラケズリの後、縦ヘラミガキし、一部ハケメ状の調整痕が残る。内面は横ヘラケズリの後、ヘラミガキする。後・晩期のどの時期にも帰属する可能性がある。

B 遺物包含層出土土器 図版 319-1・2、320-13~29

第II群土器 図版 320-13・20・22・29

非常に少量ながら、前半・後半の土器が見られる。22は0段多条原体による羽状縄文を施す繊維土器。1類または2類である。29はやや薄手で口端部を押圧する。無文の口縁部に斜位の擦痕を施す。2類に属す中越Ⅱ式である。13は横位羽状縄文を地文とし、集合沈線で口縁部上下を横区画する。区画内を縦位区画して縦に弧線文を描く。20は口縁部上部に爪形文列が廻り、横に弧線文を描く。ともに4類の刈羽式大倉崎類型である。

第IV群土器 図版 319-1・2、320-21・23~25)

1・2はⅡV19にある古墳時代住居跡SB74から出土した。1は胴下部で、横位隆帯から逆U字状の隆帯が垂下する。空白部に縦・横の複列沈線文をまばらに施す2は大形の指頭瓦痕文土器で、口縁部に楕円区画文、胴部に垂下降帯が付く。21・23・24は斜行沈線文土器、25は縄文地文に半截竹管状工具でおそらく幅狭の縦区画文を描く、ほぼ同時期の土器であろう。

第VII群土器 図版 320-14・18・19・24

14は口縁部に縄文を施す横位区画がある。18・24は口縁部が短く内屈する。18は無文、24は縄文があり、胴部にまばらな羽状沈線文を描く。いずれも後葉期の土器である。19は注口土器であろう。

第VIII群土器 図版 320-15~17・27・28

15・27・28は第IV群土器の10と似た平行沈線文が口縁部に廻る。沈線が太く内湾気味の27は佐野式とも思われるが、外反気味の15・28は12に近い時期の可能性はある。無文土器16・17も晩期末葉であろう。

(2) 土製品

A 土偶 図版 321-1~6 PL108

7点出土し、6点を図示した。4は頭部を欠損するが、全体形がわかる。正面観は腰幅が広く、腕はや

や上方に向く。側面観は腹部が膨満し、上半身は平板な作りでやや後方に傾く。短い両脚が付いた文様を施さない立像である。1・2・6は腹部の破片である。1・6の正面は正中線を挟んで弧線を重ねる。2・6の側面に円文・三叉文があり、1・2・3とも背面は輪郭線で縁取る。3・5はハート形の顔面に目・口を沈線で刻み、鼻は輪郭上部の隆起で表現する。頭部の輪郭は顔面より広く、3は河童形の上面に円文を描き、縁に縦方向の孔が貫通する。胸部正面は乳房表現を囲んで沈線文と刺突文が腕に伸びる。背面も同じ文様である。5はSB88出土であり、他の土偶も形態・文様の共通性、他時期の土器量の少なさから、5と同時期の土偶と考えられる。

5以外の出土地点は、6：Ⅱ Q11の古墳時代住居跡SB86カマド、4：Ⅱ Q22-15、2がⅡ V03、3：Ⅱ V07-02、1：Ⅱ V24-02、図示しなかった1点がⅡ V07-07である。おおよそ調査区の全体に散在し、しいて言えばⅡ Q22、Ⅱ V03・06・07といった中央部にややまとまりを見せる。

B 土製円板

土坑SK3319から2点出土した。縄文中期と思われる。

(3) 石器

縄文時代の石器は、石鏃1、スクレイパー2、石錐1、打製石斧16、磨製石斧3、磨石類39、敲石6、石皿1、多孔石3の各種が出土した。原石・石核・剥片類については、Ⅱ Q11-13第Ⅱ調査面下層で黒曜石原石が数点まとまって出土したほかは、非常に少量であった。8区の事例から、ほぼ確実に古墳時代に帰属する石鏃は除外したが、磨石類のうち19点と敲石4点は古墳時代住居跡から出土し、時期が識別できないものが混入している可能性がある。

第3節 弥生時代

I 遺構

(1) 竪穴住居跡

SB 82 図版293・298、320 PL105 位置：Ⅱ P24、U04

切り合い：北外周トレンチの西端にあり東隅付近3分の1程度が調査できた。古墳時代住居跡SB81に北側を切られる。埋土：礫を多く含む黒褐色シルトが主体。湧水のため床面の状況は不良。規模・形状：主軸は不明だが北東-南西現存長約4.3m、深さ約50cm。隅丸長方形？施設：ピット2個は柱穴であろう。遺物：遺物は少量。弥生後期の赤彩鉢（図版320-30）がある。時期：出土土器から、弥生時代後期後半箱清水式期。

SB 84 図版293・299、320 PL117 位置：Ⅱ P15・20、Q11・16

切り合い：北外周トレンチの中央付近にあり、東隅を含む3分の1程度が調査できた。古墳時代住居跡SB76・85・87に切られる。埋土：黒褐色シルトが主体。規模・形状：主軸は不明だが北西-南東現存長約5.4m、深さ約20cm。隅丸長方形？施設：周溝が廻る。ピット3個が検出されたが柱穴不明。地床炉1か所、被熱で硬化。遺物：遺物は少量。弥生後期の壺（図版320-31）・高環（同32-33）がある。時期：出土土器から、弥生時代後期後半箱清水式期。

2 遺物

(1) 土器 図版 320 PL117

SB 82 図版 320 - 30 PL117

30は鉢A類で、内外面に赤色塗彩を施す。鉢A類は弥生時代中期～後期まで出土するため時期を明確にできないが、図化掲載外の破片から後期と考えられる。

SB 84 図版 320 - 31 ~ 33 PL117

31は壺で、受け口状の口縁部外面に波状文を巡らす。32は高坏で脚部に円形の透かしを施す。33は高坏C類で坏部に屈曲部を有する。高坏C類が存在するものの、脚部に円形の透かしのある高坏は古墳時代前期的であり、弥生後期でも終末期の所産と考えられる。

第4節 古墳時代

古墳時代の竪穴住居跡 16軒は本区の主だった遺構である。調査区ほぼ全面に分布するが、II Q23、II V03・07・08には見られず、この空間を挟んで南側・北側の2群に分かれる。南群はSB70～75、北群はSB76～81・83・85～87である。竪穴住居跡はカマド石や煙道焼土が露呈するものもあり、遺構検出作業時の平面的な観察で比較的容易に所在が把握できた。しかし、北群の住居跡は床面とピットの検出が困難なものが見られた。第1調査面から掘り込まれた中世の小規模土坑群との切り合いは、記述を省略する。

1 遺構

(1) 竪穴住居跡

SB 70 図版 296・300、322 PL105 位置：II V12・13

経過：東側1mにあるSB71とともに南側を前年度の試掘トレンチで掘削される。埋土：風化礫を含む黒褐色シルトが主体。床面付近は焼土・炭化物が多量。規模・形状：北西壁にカマド。主軸3.4m、直交軸4.6m、深さ42cm。隅丸長方形。施設：直交軸にピットP1・2の2個。いずれも直径15cm程度と小さいが支柱穴であろう。カマド：北西壁の中央にある。袖・天井石が一部残る。袖下部は地山削り出し。向かって右側にピット。遺物：遺物量は少ない。土師器は小型甕（図版322-1・2）、坏などが出土。石製品には凹石がある（図版330-1）。時期：古墳時代中・後期。細別時期不詳。

SB 71 図版 296・301、322 位置：II V13

埋土：風化礫を含む黒褐色シルトが主体。地山層の黄褐色シルトで貼床を作る。規模・形状：北西壁にカマド。主軸残存長約3.5m、直交軸4.3m、深さ50cm。隅丸長方形。施設：三方の隅にピット3個。4本主柱と推定。カマド：袖石が両側1枚ずつ残る。天井石は落下。他の袖石がずれ、破壊されたか。煙道右側に旧煙道か切られた住居の煙道先端部が残り、土師器甕が入っている。遺物：少量だがカマド付近を中心に床面から出土。土師器壺・甕（図版322-7）・鉢（同5）・甕（同8）・坏（同3・4）・高坏（同6）が出土。時期：古墳時代中・後期4期。

SB 72 図版 296・302、322・323 PL105 位置：Ⅱ V09・14

埋土：白色粒子を多く含む黒褐色シルトが主体。さほど固くない貼床を作る。規模・形状：北西壁にカマド。主軸長約 4.6m、直交軸 4.8m、深さ 40cm。隅丸方形。施設：床面を剥がして四隅の内側にビット 4 個検出、4 本主柱。カマド右のビット P5 は炭多く骨粉混じりの埋土で完形の土師器甕が横転して出土した。左のビット P6 は浅く袖材と同質のシルトが入る。カマド：袖石が左右それぞれ 1・2 枚残り、土器も芯材に用いたか。他はカマド付近床面に散る。遺物：多量である。カマド付近床面に土師器甕が転がる。土師器壺（図版 323 - 18・19）・甕（322 - 12 ~ 16）・鉢（同 11）・甕（323 - 17）・坏（322 - 9・10）・把手付鍋（323 - 20）が出土。時期：古墳時代中・後期 4 期。

SB 73 図版 296・303、323 位置：Ⅱ V18・23

埋土：風化礫を多く含む黒色シルトが主体。湧水で床面は軟弱、貼床を作るらしい。規模・形状：北西壁にカマド。主軸長 4.6m。南西側ほぼ半分が調査区外となり、直交軸長 3.3m 以上、深さ 48cm。隅丸方形。施設：床面を剥がして北・東隅の内側にビット 2 個検出、4 本主柱と推定。カマド：袖石が両側 2・3 枚ずつ残る。火床両側の立石はしっかり固定する。火床は被熱で硬化。遺物：土器は少量。土師器壺・甕（図版 323 - 21）・坏が出土。時期：古墳時代中・後期。細別時期不詳。

SB 74 図版 296・304・305、323・324 PL105 位置：Ⅱ V13・14・18・19

経過：地山と埋土の差が識別しにくく、サブレンチを多数あけてプラン確認した。埋土：風化礫を多く含む黒色シルトが主体。さほど固くない貼床を作る。規模・形状：北西壁にカマド。主軸長・直交軸長とも 7.0m、深さ 42cm。隅丸方形。施設：床面を剥がして四隅の内側にビット 4 個検出、柱痕跡残る。4 本主柱。カマド右にビット P5。カマド：袖石が両側 1 枚ずつ残り、土が赤化。スサ入り焼土と炭化材がカマド付近床面に散る。遺物：土器は多量。カマド付近に多い。土師器甕（図版 324 - 31 ~ 33）・鉢（323 - 28）・甕・坏（同 22 ~ 26）・高坏（同 29・30）、須恵器坏（同 27）が出土。刀子 1 点（図版 331 - 1）。南壁際から石錘状の礫が 20 個ほど集中して出土。時期：古墳時代中・後期 4 期。

SB 75 図版 297・305、324 位置：Ⅱ V24、Ⅷ B04

埋土：風化礫を多く含む黒褐色シルトが主体。湧水で床面は軟弱、貼床を作るらしい。規模・形状：北東壁長 4.5m。南西側ほぼ半分が調査区外のため、直交軸長 2.6m 以上、深さ 58cm。隅丸方形？施設：床面を剥がして北・東隅にビット 2 個検出、4 本主柱と推定。カマド：位置不明。遺物：土器は少量。南側床面から土師器甕（23）が出土。時期：古墳時代中・後期。細別時期不詳。

SB 76 図版 283・306、324 105・106 位置：Ⅱ P20・25

経過：北西壁が外周トレンチにかかる。検出当初から遺構の重複が予想されたが切り分けは困難で、多数のサブレンチ断面観察によった。本跡の床面が弥生時代住居跡 SB84 の周溝を切る。SB87 の床面が本跡東隅を切る。従って SB84 → SB76 → SB87 の順序と判明。埋土：上層は風化礫を多く含む黒褐色シルト、床面付近は風化礫を含まない。湧水で床面は軟弱。規模・形状：北西～南東軸長 7.0m 以上・直交軸長 7.3m、深さ 43cm。隅丸方形。施設：四隅の内側にビット 4 個検出、主柱穴。カマド：南東壁際に暗赤褐色焼土があり、人頭大礫が散乱していたためカマド痕跡と考えた。逆側の可能性もある。遺物：土器は多量であるが、SB77・78・87 に比較して完形個体が少ない。土師器壺（図版 324 - 41）・甕（同 40）・鉢・甕・坏（同 35 ~ 37）・高坏（同 39）、須恵器坏（同 38）が出土。南側埋土中に拳大から人頭大礫が集中し、石錘状の礫も出土。時期：古墳時代中・後期 4 期。

S B 77 図版 293・307、324・325 PL105・106 位置：Ⅱ P25、Q21、U05、V01

埋土：黒褐色砂質シルトであるが風化礫を多量に含む部分とない部分がある。埋土中にある多量の礫と地山の礫が判別しにくく、床面の識別が難しかった。規模・形状：北東壁にカマド。主軸長 5.6 m、直交軸 5.1 m、深さ 36 cm。隅丸方形。施設：四隅の内側にビット 4 個があり、柱穴。カマド：焚口の両袖に扁平礫を埋めシルトで覆う。土師器甕を入れ子状に重ね天井部構築材とする燃焼部から多量の焼骨が出土した。火床は被熱で硬化する。遺物：カマド付近に完形品を含む土器が集中する。土師器壺・甕（図版 325 - 49・50・57）・鉢（同 45 ~ 48）・甕（同 51）・坏（324 - 42 ~ 44）・高坏が出土。他に土製紡錘車（図版 330 - 8）がある。床面南側に拳大礫が集中する。時期：古墳時代中・後期 4 期。

S B 78 図版 294・308、325 PL106 位置：Ⅱ Q16・21・22

経過：プランは明瞭に見え、本跡が SB79 北隅をわずかに切る。埋土：風化礫を多量に含む黒褐色砂質シルト。床面付近に拳大礫が散在する。規模・形状：北西壁にカマド。主軸長 5.0 m、直交軸 4.9 m、深さ 26 cm。隅丸方形。施設：北西壁を除き周溝が廻る。四隅の内側にビット 4 個があり、柱穴。南東壁中央に P6 がある。カマド：両袖に 2 個ずつ扁平礫を埋めシルトで覆う。赤化した火床奥に支脚石があり、煙道入口に土師器鉢を伏せて置く。左脇に天井石らしき大礫が転がる。遺物：カマド右側、北西壁際に完形品を含む土器が集中する。土師器壺・甕（図版 325 - 55 ~ 56）・鉢（同 53）・坏（同 52）・高坏（同 54）が出土。時期：古墳時代中・後期 5 期。

S B 79 図版 295・306、326 PL106 位置：Ⅱ Q21・22、V01・02

経過：平面的に検出し、SB78 南隅が本跡をわずかに切る。埋土：上層は風化礫を多量に含み、下層は含まない黒褐色砂質シルト。褐色シルトで掘方を埋め戻し、床面を作る。規模・形状：南東壁にカマド。主軸長 6.4 m、直交軸 6.3 m、深さ 34 cm。隅丸方形。施設：北隅を挟む壁際を除き周溝が廻る。四隅の内側にビット 4 個があり、柱穴。カマド：東隅に寄った位置にある。壁際の袖石 2 個にシルトが付着していた。火床は痕跡のみ。大礫が転がる。遺物：土器量はやや少ない。カマド左脇と火床付近からまとまって出土した。土師器壺・甕・鉢（図版 326 - 60・61）・甕（同 62）・坏（同 58・59）・高坏が出土。他に凹石（図版 330 - 2）、石製垂飾（同 3）がある。西隅の P2 付近、北隅の P4 付近に拳大礫が集中する。こも編み石のようでもあるが、性格が明らかではない。時期：古墳時代中・後期 4 期。

S B 80 図版 295・310、326 PL106 位置：Ⅱ Q17・20

埋土：風化礫を多く含む黒褐色シルトが主体。埋土上部に礫が散在する。灰黄褐色粘質シルトで貼床を作る。湧水のため軟弱。規模・形状：北西壁にカマド。主軸長 5.6 m、直交軸 6.1 m、深さ 60 cm。隅丸方形。施設：床面を剥がして四隅の内側にビット 4 個検出、4 本主柱。カマド：地山を削り出して袖を作り、構築材らしい被熱した大礫がカマド前に倒れる。火床周辺はよく赤化する。遺物：中程度の出土量であるが、完形に復元された個体は少ない。土師器壺・甕（図版 326 - 63）・鉢・坏・高坏が出土。他に鉄製品 2 点（図版 331 - 2・3）がある。時期：古墳時代中・後期、細別時期不詳。

S B 81 図版 293・298 位置：Ⅱ P24

経過：外周トレンチで確認され大部分が調査区外。弥生時代住居跡 SB82 を切ることが断面観察で明らか。埋土：風化礫を多く含む黒褐色シルトが主体。湧水で床面は軟弱。規模・形状：東隅のみ検出。北東 - 南西壁長 3.7 m 以上、深さ約 60 cm。隅丸方形？施設：確認できた施設はない。遺物：きわめて少量。土師器壺・甕・高・高坏の破片。時期：古墳時代中・後期。細別時期不詳。

SB 83 図版 293・311、326 PL107 位置：Ⅱ P24・25、U04・05

経過：南西側ほぼ半分が調査区外。西側外周トレンチで壁・床面を確認。埋土：上層は西外周5層相当の褐色粘質シルト。下層は黒褐色シルトで拳大以上の礫を多く含む。湧水のため床面は軟弱。規模・形状：北西壁にカマド。主軸長4.6m以上、直交軸長4.5m以上、深さ44cm。隅丸方形。施設：北・東西隅の内側にピット3個検出、4本主柱と推定。カマド：袖石がほとんどなく、天井石が火床に落下。火床は赤化。遺物：土器はやや少量で復元個体は少数。土師器壺・甕（図版326-65・66）・鉢・甕・環（同64）・高環が出土。時期：古墳時代中・後期4期。

SB 85 図版 294・312、326・327 PL107 位置：Ⅱ Q06・11・12・16、Ⅱ R15

経過：北西壁が外周トレンチにかかる。広い黒色土の落ち込みに遺構の重複が予想されたが、サブトレンチ断面観察によって1遺構と判断した。しかし遺物整理の結果、本跡に切られると考えていた下層に床面があるSB86の土器様相が新しかった。埋土が同質の両住居跡が入れ子状に重複したため、平面・断面とも識別が困難で、切り合いが逆となった。中世土坑SK3114・3121などに切れ、弥生時代住居跡SB84を切る。埋土：風化礫を多量に含む黒褐色砂質シルト。規模・形状：カマドは北西壁。主軸長8.6m以上、直交軸長8.7m、深さ28cm。隅丸方形。施設：柱穴は確認できなかった。カマドの向かって左側にあるピット1は100×120cmの楕円形、深さ約50cm。埋土上部に径40cmの扁平礫があり、その下に板状の炭化材と土師器壺(83)、さらに下層から皿状の炭化材が出土した。貯蔵穴であろうか。カマド：北西壁中央に火床の痕跡があり、煙道断面が北外周に見えた。遺物：土器は本区最多量。カマドがある壁際にややまとまる。土師器壺（図版326-75・327-81～83）・甕（同76～78）・鉢（326-73・74）・甕（327-79・80）・環（326-67～72）・高環、須恵器甕が出土。南側埋土中に拳大から人頭大礫が集中し、石錘状の礫も出土。時期：古墳時代中・後期4期。

SB 86 図版 294・313、328 PL106 位置：Ⅱ Q11

経過：SB85に、発掘時の判断と遺物整理後に切り合いが逆となった経過を記した。本跡がSB85の埋土・床面を半分ほど掘り抜く。SB85を床面まで掘り下げて本跡のプランを確認したため、本跡埋土上部に帰属する遺物がSB85の遺物として取り上げられた可能性がある。中世SK3121に南東壁を切られる。埋土：風化礫を多く含む黒褐色シルトが主体。規模・形状：北西壁にカマド。主軸長約5.9m、直交軸5.8m、深さ36cm。隅丸長方形。施設：北東壁際の一部に周溝が廻る。ピットは四隅の内側4個が柱穴、柱痕跡がある。他にピット1個。カマド：北西壁のやや右寄りにある。袖石はなく褐色シルトのみ。火床奥に支脚石がある。土師器甕が横転して壊れているが、カマド構築材が不明。燃焼部には炭化物層、焼土層が互層をなす。火床はよく赤化する。遺物：多量。カマド脇から前面床面に完形品を含む土器が集中し、遺棄されたものであろう。土師器壺・甕（図版328-99～102）・鉢（同96・98）・甕・環（同84～94）・高環・ミニチュア土器（同95）、須恵器高環（同97）が出土。時期：古墳時代中・後期5期。

SB 87 図版 294・314、329 PL107 位置：Ⅱ P20・Q16

経過：第1調査面で住居跡の存在を予想した。SB76北東壁精査中にカマドが現れ、SB84・76を切る住居跡と判明。本跡南西壁は壊れたが床面は残る。南東側の検出面が埋土と近似するため、方形プランを想定して拡大しすぎた。埋土：黒褐色シルトが主体。規模・形状：北西壁にカマド。主軸長約3.7m、直交軸5.4m、深さ18cm。隅丸長方形。施設：壁際に周溝が廻る。ピットは北東隅の1個が確実。カマド：両袖に扁平礫を埋めシルトで覆う。両袖脇に土師器甕を半割して平置き。天井石は袖石に乗り、土師器甕

2個体は燃焼部に埋没。支脚石抜き取り痕がある。カマドを破壊せず廃棄したか。遺物：多量。カマド付近床面に完形品を含む土器が集中する。土師器壺（図版329-113・114）・甕（同110）・鉢（同107～109）・甕（同111・112）・環（同103～106）・ミニチュア土器（同115）が出土。時期：古墳時代中・後期5期。

（2）掘立柱建物跡

ST 12 図版295 位置：Ⅷ Q22・23

経過：SK2868・2871・3173～3176・3458のピットが柱穴に該当する。ピット列内外に多数の小土坑が分布するが、直接切り合うものはない。埋土：腐れ礫を含んだ黒色シルト。柱痕跡は確認できなかった。規模・形状：桁行・梁行とも2間の方形。ピットは径30～50cm。1辺3.5m前後。隣接する竪穴住居跡SB78～80などと同じ軸方向をとる。南側・北側に分布する住居跡群がない部分に位置する。時期：ピットからの出土遺物はない。埋土は古墳時代住居跡の埋土と共通する。調査面が同じ古墳時代後期と推定する。

ST 13 図版295 位置：Ⅷ V02

経過：ST06の南側に近接する。SK2867～2870・2913・3202・3203のピットが柱穴に該当する。埋土：ST06と同じ腐れ礫を含んだ黒色シルト。規模・形状：梁行2間・桁行3間の長方形。ピットは径35～50cm。2.5×3.5m前後の規模。ST06とはやや軸方向がずれ、竪穴住居跡SB70・77などに近い軸方向をとる。時期：ST06と同じ理由で古墳時代後期と推定する。

2 遺物

大多数が竪穴住居跡の出土遺物である。土器のほか、土製紡錘車・白玉等の少数器種の土製品・石製品は実測図示したが、石錘は図化していない。石錘は8区SB04・13出土品と同じく、安山岩の扁平礫を用いた大形の打穴石錘である。土器以外は少数のため種別の項を設けず、住居ごとに説明する。

SB 70 図版322-1・2、330-1 PL109

土器：小型甕1・2がある。石製品：凹石1点がある。小児頭大の安山岩円礫に半球形の深い凹みがある。

時期：小型甕は中期～後期を通して存在するため、時期を限定できない。

SB 71 図版322-3～8 PL109

土器：3・4は環C5類で底部が平坦に近く口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。6は高坏E類で環C5類に脚部を付けた形状となる。5は鉢で口縁端部を外反させる。7は長胴甕A類で器面にナデ調整を施す。8は小型の甕で単孔のA類である。

時期：環C5類が出土する点から4期と考えられる。

SB 72 図版322-9～15、323-16～20 PL109・110

土器：9・10は環C5類で底部が平坦に近く、口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。甕は長胴で器面にハケ調整を施すB類16と中～小型12～15のものがある、このほか鉢11、小型で単孔の甕A類17、把手付鍋20、壺C類19、小型壺18がある。土製品：焼成粘土塊2点。石製品：泥岩製の垂飾1点。

時期：環C 5類が出土する点から4期と考えられる。

SB 73 図版323-21

土器：小型甕21がある。石製品：石錘4点。

時期：小型甕は中期～後期を通して存在するため、時期を限定できない。

SB 74 図版323-22～29、324-30～33、331-1 PL111

土器：22～25は環C 5類で底部が平坦に近く、口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。26は環K類で胴部が直線的に外反する。27は須恵器坏身で底部に手持ちヘラケズリを施す。口縁の立ち上がり短くなるため器高は4cm程と低くなりⅡ型式5段階頃の特徴を有する（大阪府立近つ飛鳥博物館2006）。高環は身に環C類を用いたC類29と脚部に透かしを有するD類30がある。このほか鉢28、小型甕31～33がある。土製品：焼成粘土塊3点。石製品：石錘1点。鉄製品：331-1は刀子で、鋒と茎の一部が欠損する。鬘の一部が欠損するが、両鬘と推測される。

時期：環C 5類が出土する点から4期と考えられる。

SB 75 図版324-34 PL111

土器：34は長胴甕B類で器面にハケ調整を施す。

時期：甕B類は1～4期を通して存在するため、時期を限定できない。

SB 76 図版324-35～41 PL111

土器：35・37は環C 5類で底部が平坦に近く、口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。36は環E類で須恵器環の横做形態で底部に手持ちヘラケズリを施す。38は須恵器の坏身H類で口縁端部を丸く収め、立ち上がりはやや内径する。底部の回転ヘラケズリ範囲は1/3ほどとなる。口径は10cmと小さめである。Ⅱ型式4～5段階頃の特徴を有する。このほか、小型甕40、高環の脚部39、壺C類41がある。石製品：台石1、石錘10点。

時期：環C 5類が出土する点から4期と考えられる。

SB 77 図版324-42～44、325-45～51・57、330-8 PL102・109

土器：42～44は環C 5類で底部が平坦に近く、口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。鉢は口縁の内湾する個体45と外反する個体46～48がある。甕は長胴で器面にハケ調整を施すB類49と工具によるナデ調整を施すA類50、ケズリ調整を施すD類57がある。このほか甕A類51がある。土製品：330-8は紡錘車で、直径6cm、厚さ3.2cmを測る。側面と上面は静止ヘラケズリにより整えられる。石製品：砥石1、石錘9点。

時期：環C 5類が出土する点から4期と考えられる。

SB 78 図版325-52～56 PL113

土器：52は環C 5類で口縁と底部の境の屈曲部が痕跡となり、底部が半球形状を呈する。長胴甕は器面にナデ調整を施すA類56、ハケ調整を施すB類55がある。このほか鉢53、高環E類54がある。

時期：本住居跡の環C 5類は底部が半球形となる。土師器環類の底部半球形化は5期以降に顕著に認められる。加えて器面をケズリ調整する長胴甕D類も5期以降に主体的に存在する点から、遺構の時期は5期と考えられる。

SB 79 図版326-58～62、330-2・3 PL109

土器：59は環C 5類で底部が平坦に近く、口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。外面底部から胴

部にかけてタタキ状の痕跡がある。この他に坏K類58、鉢60・61、甌C類62がある。石製品：2は小児頭大の安山岩を用いた凹石で、表面にロート状の凹みがある。3は泥岩製の垂飾で、長方形を呈し、各面は研磨して面取りを施す。上端部中央に両面から穿孔するが、孔の部分で欠損する。他に石鍾6点がある。

時期：坏C5類が出土する点から4期と考えられる

SB 80 図版326-63、331-2・3 PL109

土器：63は長胴甕B類で器面にハケ調整を施す。石製品：凹石・石鍾各1点。鉄製品：331-2は板状鉄製品である。両端を欠損し全体形状は不明である。断面形は長方形を呈する。同3は棒状鉄製品である。直径は2mm以下と細い。

時期：長胴甕B類は1～4期を通して存在するため、時期を限定できない。

SB 83 図版326-64～66、330-4・7、331-4 PL113

土器：64は坏C5類で底部が平坦に近く口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。このほか長胴甕B類66、壺65がある。石製品：330-4・7は石製の装身具の可能性がある。4は泥岩製、平面形が三角形を呈する。表裏面の研磨は荒く穿孔もないため、未製品と思われる。7は菱形の安山岩扁平鏢をそのまま利用したと思われ、表裏面とも明確な加工痕が認められない。水磨によってできた表面の凹みを利用して穿孔したと考えられる。大形であるが垂飾品の可能性がある。他に石鍾1点。鉄製品：331-4は刀子である。刃部長は6.5cmを測る。両面で茎の一部を欠損する。

時期：坏C5類が出土する点から4期と考えられる。

SB 85 図版326-67～75、327-76～83 PL114

土器：67～69は坏C5類で底部が平坦に近く口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。71は坏E類で須恵器の模倣形態。口縁が外反し底部に手持ちヘラケズリを施す。70・72は坏K類で底部に手持ちヘラケズリを施す。73・74は鉢で口縁部をやや外反させる。甕は器面にケズリ調整を施す長胴のD類76と小型甕77・78がある。このほか胴部に一对の把手を有する甌B類80、小形で多孔の甌C類79、大形の壺82、壺C類83、小型壺75・81がある。石製品：石鍾1点。

時期：坏C5類が出土する点から4期と考えられる。

SB 86 図版328-84～102、330-5 PL115

土器：92・93は坏C5類で底部が平坦に近く、口縁と底部の境の屈曲部が不明瞭である。91は坏I類で底部が半球形を呈する。須恵器環の模倣形態については口縁の外反するE類84・85・87・88と口縁の内湾するF類86・89・90・94がある。いずれも底部は手持ちヘラケズリである。97は無蓋の須恵器高環で脚部に透かしがなく、Ⅲ型式1・2段階頃の特徴を有する（大阪府立近つ飛鳥博物館2006）。長胴甕は器面にハケ調整を施すB類101、ケズリ調整を施すD類99・100がある。このほか鉢96・98、小型甕102、ミニチュア土器95がある。石製品：330-5は白玉で滑石製。断面が1.2cmと長く、表面の研磨が荒い点から未製品と思われる。他に石鍾1点。

時期：坏I類と甕D類が出土する点から5期と考えられる。

SB 87 図版329-103～115 PL116

土器：103～106は坏I類で底部が半球形を呈する。110は長胴甕C類で器面にミガキ調整を施す。このほか、鉢107～109、ミニチュア土器115、大型の甌B112、小型の甌C111、壺C類113・114がある。

時期：環Ⅰ類が出土するため、5期と考えられる。

その他 図版330-9 PL102

平成17年試掘の第6トレンチから馬形土製品の頭部破片が出土した(330-9)。地点はⅡP20・25が該当する。8区のSB03出土品(同10)と同様に手づくねて作り、目と鼻は棒状工具による刺突で表現する。形態・技法的特徴から奈良時代の所産と思われる。

第5節 中世・近世

1 遺構

(1) 掘立柱建物跡

中世・近世の遺構は調査区の北側に集中し、ⅡP15・19・20・24・25、ⅡQ06・11・12・16・17・21・22・23、ⅡU05、ⅡV01・14グリッドにわたる。第1調査面検出の遺構は大部分が中小規模のピットであり、調査時には検出して間もなくすべてにSKを付番して遺構登録した。配列から複数の掘立柱建物跡や柵跡の存在が予想されたが、ほとんど埋土に差異が見られず、プランが確定できなかった。調査終了後、基礎整理時に柱筋を確認し、次のとおり掘立柱建物跡と考えられる遺構を抽出した。SK番号をピット番号に変更する操作は行わなかった。埋土は白色・黄褐色粒子を含んだ10YR2/1 黒色シルトでほぼ共通するため、差異がある場合に限って記述する。小規模ピットの切り合いは記述を略す。該当ピットは、北側から南側の桁行または梁行の列へ、西側から東側へ列挙する。次項の柵跡も同じ。

ST 06 図版317 位置：ⅡQ21・22

該当ピット：SK2645・2981・2984・3001・2646・2980・2673・2908・2664・2674・2682・2651・2666・2676・2684

規模・形状：長軸5.00m、短軸3.40mの長方形。ピットは径30～40cm、深さ10cm～30cm。埋土等：SK2666・2684に柱痕跡が残る。配列：中央の列ではSK2664と2665、2674と2675、2682と2683が梁方向に隣接する。北側の列ではSK2645と2646、2981と2980、2984と2673が梁方向に隣接するが、3001に対応するものが検出できなかった。また、SK2984の北側延長上にSK2671・2670・2988・3055・2991が並ぶ。SK2991・3055は北側に隣接するST07に属すと考えた。12区においてもっとも明瞭な掘立柱建物跡となるため、後述するSD18・19・20とともに建物の規模や方向性の基準となろう。

ST 07 図版317 位置：ⅡQ17・22

該当ピット：SK2659・2991・2686・2692・2660・3055・2685・2693・2658・2672・2681・2694

規模・形状：長軸5.20m、短軸2.60mの長方形。ピットは径16～40cm、深さ10～30cm。

配列：短軸が2.60mと短い。梁行は西から2659・2660・2658が一行、2991・3055・2672が一行、2686・2685・2681が一行、2692・2693・2694が東の一行と判断した。2660の位置が北に片寄る点、2693が他の柱穴と比較し小さく浅いことなどが疑問として残る。2687・2679も2692・2659を結ぶ線上に位置するがそれと対応する柱穴は検出できなかった。

ST 08 図版317 位置：Ⅱ Q17

該当ピット：SK2757・2763・2764・2766・2759・2795・2765・2767・2668・2677・2689・2691

規模・形状：長軸4.40m、短軸3.80mの台形。ピットは径20～40cm、深さ10～30cm。

配列：SK2757・2763・2764・2766の柱筋、SK2668・2669・2677・2691の柱筋が梁行で対応し、SK2757・2759・2768の柱筋と、SK2766・2767・2991の柱筋が桁行対応する。SK2763のみ角穴であることが疑問である。

ST 09 図版316・317 位置：Ⅱ Q21

該当ピット：SK2587・2623・2972・2965・2964・2956・2957・2961・2593・3148・3149・2630・2650

規模・形状：長軸4.80m、短軸3.00mの長方形。ピットは径20～40cm、深さ10～30cm。埋土：SK2587に扁平な角礫がみられる。礎板か。SK2593・2630に柱痕跡が明瞭に観察できる。配列：北側のSK2587・2623・2972の列と、南側のSK2593・3148・3149・2630・2650の列が桁行方向に対応するが、北側の柱列には検出できなかったピットが2個程度あるのであろうか。SK2965・2964・2956・2957・2961はわずかに軸がずれるが、本跡のプラン内に並ぶ。その他の所見：北東から南西に一直線に並ぶSK2966・2950・2962・2957・2958・2634をSA15と考えるが、本跡と重複する。

ST 10 図版316 位置：Ⅱ P20、Q16

該当ピット：SK2537・3054・2569・2548・3046・2566・3131・2568・2560・2946・2626

規模・形状：長軸4.20m、短軸3.20mの台形。ピットは径20～40cm、深さ10～30cm。配列：北側の列SK2537・3054・2569の柱筋と、南側の列SK2560・2946・2626の柱筋とが対応する。両者の中間の列SK2548・3046・2566・3131・2568も直線状に並ぶが対応しない。3054のみ角穴である。その他の所見：SA17（SK2635・2539・2640・2541・2542・2543）と重複する。ST10に帰属するSK2548が、SA17に帰属するSK2543を切っているため、ST10の方が新しいと判断した。

ST 11 図版316 位置：Ⅱ P15

該当ピット：SK2776・3036・3067・3115

規模・形状：おそらく半分以上が調査区外にかかるため、不明。調査区外周の排水溝に接し、湧水が著しく掘り下げは困難であった。ピットは径30～40cm、深さ10～30cm。その他の所見：SK2776・3036の中間に位置し、SD20を破壊する、厚さ10cm・径20cmの礫は本跡柱穴の礎板と思われる。北西側を通るSD19が本跡と異なる時期の溝として、無関係の遺構と考えれば、SK2720・2706・2704・2703・3060・2701まで拡大する可能性も考えられる。

(2) 柵跡

ピットの埋土、規模は掘立柱建物跡と同様である。

SA 15 図版316 位置：Ⅱ Q21

該当ピット：SK2966・2950・2962・2958・2634

方向・規模：北東-南西方向に3.8m。

南東に隣接するSK2634・2958・2049・2963、やや離れたⅡ P24・25にあるSK2512・2513・2514・3102・3101・2501・3100・3099も方向が近い。

SA 16 図版 316 位置：Ⅱ Q16・21

該当ピット：SK2951・3138・2940・2941・2627・2969・2970

方向・規模：北-南方向に 5.2m。座標軸よりわずかに西に振れる。

西側にある SK2576・3129・2574・3132・2567・3131・3047・2937・2619・2620・2939・2953 もほぼ並行する。やや離れたⅡ Q11・17にある SK2731・2728・3008・2738・2746・2747・3049、Ⅱ P25 の SK2544・2507・2506・3044・2520・3096・2522 も方向に近い。

SA 17 図版 316 位置：Ⅱ P20

該当ピット：SK2638・2639・2640・2641・2642・2643

方向・規模：西-東方向に 3.2m。座標軸よりわずかに南に振れる。

北側Ⅱ P20、Q16にある SK2534・3107・3108・3098・2564・2570・2571、SK2562・2582・2579・2736・2738 も方向に近い。

SA 18 図版 316 位置：Ⅱ Q06・11

該当ピット：SK2699・2700・2711・2709・3016・2717・2718

方向・規模：北北西-南南東方向に 5.2m。

西側にある SK2701・3060・2703・2704・2785・2720・3035 もほぼ同じ方向に配列する。

(3) 溝跡

SD 18・19・20 図版 316・317 位置：Ⅱ P15・20、Ⅱ Q11・12・16・17

SD20はⅡ P15・20の調査区境界にかかり、南北約 5.6mを検出し、直角に西に曲がる。SD18はⅡ P15からⅡ Q12までほぼ東西に走り、約 14mを検出した。SD20の北端と接続するか切り合うか不明であるが、Ⅱ P15-11で接することは確実であろう。SD19はⅡ Q11を北西-南東に走り、Ⅱ Q17西端が末端となる。約 12.6mを検出した。Ⅱ Q11-11でSD18を切る。3条とも幅 30～40cm、深さ 10～20cmである。

(4) 土坑

検出された穴の大多数は、土坑とするよりピットと呼ぶ規模・形状であることから、柱穴とみられる。それ以外の性格が推定される土坑は数少なく、次の3基を紹介する。

SK 2653 図版 317 位置：Ⅱ Q16-12

規模は 145～160cm のほぼ円形。上部はやや開き検出面下約 50cm で垂直に近くなる。深さ 85cm で地山となり湧水が見られた。埋土は腐れ礫を多量に含んだ黒褐色シルト。所々暗褐色粗粒砂の大ブロックが入り、人為的な埋め立てと考えられる。規模・形状から井戸の可能性はある。

SK 3114 図版 316 位置：Ⅱ P15-12・16

南北に長軸。長さ 210cm、幅 90cm の長方形。上部を削平され、深さ約 30cm。短辺は丸みをもつ。埋土は黒褐色シルト基調。壁は垂直、底面は平坦である。古墳時代住居跡 SB85 の西壁を切り、中世溝跡 SD18 に切られる。規模・形状から土坑墓の可能性はある。

SK 3121 図版 317 位置：Ⅱ Q11-12、12-09

東西に長軸。長さ 245cm、幅 90cm の長方形。深さ 62cm。埋土は上部が褐色シルト、下部が黒褐色シルト。壁は垂直に近く、底面は平坦である。SB85・86 の東壁を切る。規模・形状から土坑墓の可能性はある。

2 遺物

遺物は極めて少量の陶磁器破片が出土したに過ぎず、図化できるものはなかった。時期が判明した資料には、鎌倉時代前期13世紀の白磁、12世紀後半から13世紀の常滑焼3筋壺がある。いずれも中世・近世遺構群の分布範囲内からの出土であり、時期を推定する唯一の根拠となる。

第6節 総括

1 縄文時代

中期の住居跡1軒、集石遺構1基のほか、後・晩期土器を伴った土坑と、多数の小規模なピット、中期主体の少量遺物の検出にとどまった。住居跡と集石遺構は、8区の集落形成に先立つ第IV群土器の時期に属し、他地点で出土していない。8区の環状集落の住居分布域外径が現状で東西80～90mであるから、直径約100mと推定される。8区北端からSB88まで約150m隔たるので、8区の集落域には含まれないと考えられる。第IV群が沼沢式・後沖式、第V群土器の古い段階が新道式と推定されるので、本区など隣接地から8区に移動して継続的な集落形成が開始されたことと推定される。

住居跡1軒で遺物は少量、包含層には石材破片もほとんど見られない地点から土偶7点の出土は不釣り合いに思われる。調査区外に小規模な中期前葉集落が広がっていたと推定しても、土偶ばかりが住居域からはずれた場所に廃棄されたありさまは、感覚的な表現ではあるが、土偶の墓場とでもいふべき状況に映る。土偶の廃棄状況に新たな知見となる事例であろう。

中期以外の少量の縄文土器も、本遺跡では他の調査地区で見かけないものが含まれている。II群2類に属す中越Ⅱ式土器は北信地方ではまれである。これまで長野市村東山手遺跡が千曲川沿岸で最下流の出土事例として知られていたが、さらに20km余り北に分布を広げた。第VII群のうち縄文後期後半に属す土器は、9区の配石遺構、3～5区の遺物包含層から少量出土している。SK3317が墓坑であれば、出土土器から後期末葉に属す、小規模な墓域を推定してもよいであろう。隣接地に住居域が存在したのであろうから、希薄な分布ながら意外に広い活動領域をもっていたのであろうか。

2 古墳時代

本区の最大の調査成果が、竪穴住居跡16軒を検出した古墳時代後期集落である。ここでは当該期から、5区で住居跡が構築された奈良時代までの集落変遷をたどってみる。本項では千曲川・斑尾川の合流地点に当たる替佐地区における集落の様相として記述するため、千田遺跡とは斑尾川を挟んで対岸に立地する川久保・宮沖遺跡の調査成果（長野県埋蔵文化財センター2013）にも触れたい。なお、本報告で使用する古墳時代の時期区分と年代観は川久保・宮沖遺跡の成果に従う。

(1) 集落の動向について

A 古墳時代前期

千田遺跡では12区で弥生時代後期後半の住居跡が2軒(SB82・84)検出されているが、以後古墳時代中期まで生活の痕跡を確認することはできない。一方、川久保・宮沖遺跡では宮沖で住居跡群、川久保で水田跡が検出されており、斑尾川を隔てて様相が大きく異なることが窺える。

B 古墳時代中期～後期・奈良時代

1 期 千田8区に2軒(SB04・18)、川久保2区に1軒(SB15)住居跡が存在する。当該期に新たな居住域として成立したと考えられる。両地点は直線距離で約200m離れる。いずれも住居跡軒数は1～2軒と少ない。千曲川縁辺部の段丘上に数軒単位の小規模な集団が距離をおいて点在したと考えられる。

2 期 住居跡出土土器の組成からみると、1期～2期への移行期と純粋な2期に大きく分かれる。1～2期への移行期は千田6区に1軒(SB02)、川久保1区に2軒(SB41・42)、同2区1軒(SB16)、同5区1軒(SB38)存在する。続く2期は川久保1区に3軒(28・49・55)、同2区に1軒(SB17)、同5区に2軒(SB32・35)、宮沖1区に3軒(SB9・23・27)、同5区に1軒(SB3)存在する。

千田遺跡では1～2期の移行期以降、3期にかけて住居跡が確認できなくなる。一方、川久保・宮沖遺跡では数軒単位の小規模集団が各地区に拡散する傾向がある。また宮沖では2期に1辺が8m以上の大型住居跡が2軒確認された(SB9・27)。小形住居に比べて遺物の質や量が圧倒的に優れることはないが、住居跡の床面積には大小の明確な法量分化が確認できるため、大型住居跡は小型住居跡に対して何らかの優位性を有した人物が居住していたと思われる。

3 期 千田遺跡では住居跡は確認できない。川久保1区1軒(SB50)、同2区3軒(SB5・6・7)となる。3期は2期に拡散した数軒単位の居住域が急激に減少し、川久保1・2区しか確認できなくなる。また2期に見られるような大形住居跡は確認できない。

4 期 千田12区に6軒(SB71・72・74・77・79・83)、川久保5区に5軒(SB53・54・59・60・62)、宮沖1区に1軒(SB16)となる。3遺跡で合計12軒を数え、古墳時代の中で住居跡数が最も多くなる時期となる。しかし4期は住居跡同士が近接して存在する例(千田SB77・79、SB71・72、川久保5区SB60・62)や、切り合う例(川久保5区SB53・54)があり、両遺跡とも同時期内における建て替えや移住が推測できる。このため4期の中でも一時期に存在したのは3軒程のまとまりであったと考えられる。千田遺跡は4期の住居跡軒数が最も多く、1辺が8m以上の大型住居跡も1軒確認でき(SB85)、古墳時代の中で最盛期を迎える。また千田12区には南北2つの住居跡群に挟まる形で4～5期に伴う掘立柱建物跡が2棟(ST12・13)検出されている。

5 期 千田12区に3軒(SB78・86・87)、川久保1区に1軒(SB51)、宮沖1区に3軒(SB13・19・28)、同5区に1軒(SB2)となる。千田遺跡では4期同様12区に居住するものの、住居跡軒数は再び減少する。川久保・宮沖遺跡は前段階の居住域から離れた場所に分散して居住する。

6 期 古墳時代最終末期と推定される。千田遺跡は住居跡が確認できない。宮沖は1区に6軒(SB5・6・14・15・25・29)となる。しかし住居跡が切り合うため(SB14・29、5・25・29)、一時期に存在したのは3軒程のまとまりであったと考えられる。

7 期(奈良時代) 千田5区に1軒(SB01)、川久保2区に1軒(SB8)、同5区に6軒(SB30・36・37・40・58・61)、宮沖1区に3軒(SB8・10・17)、同5区に1軒(SB1)となる。川久保・宮沖遺跡では住居跡が切り合うため(SB36・37)同時期内における建て替えや移住が推測できる。よって一時期に存在したのは3軒前後のまとまりと考えられる。

以下、3遺跡の時期別遺構分布状況についてまとめを行う。

ア 3遺跡においては古墳時代中期から奈良時代にかけて生活の痕跡が認められる。一つの居住域における住居跡軒数は古墳時代中期から奈良時代まで一貫して数軒であり、同時期内でも各居住域が広範囲に分散する傾向がある。

- イ 各居住域は千曲川・斑尾川によって形成された段丘上の縁辺部に作られるが、同じ場所に定住せず、1～2世代程度居住すると移動する。
- ウ 替佐地区では千曲川左岸沿いに総延長950m 程調査をしたが、古墳時代中期～後期については、2遺跡ともに斑尾川の両岸の段丘上200m以内を選択する場合が多い。
- エ 斑尾川両岸の居住域のうち、比較的長期に渡り居住地として選択されたのは、川久保遺跡・宮沖遺跡である。千田遺跡は住居跡軒数が最も多くなる4・5期に、斑尾川沿いの12区に居住する。しかし他の時期は千曲川沿いを居住地として選択するものの、いずれも1～2軒単位で1期間の居住だけで、1期：8区、2期：6区、7期：5区というように、近隣地域に定着しない傾向がある。
- オ 3遺跡共通で住居跡軒数は3期に減少する。千田遺跡と宮沖遺跡では3期の住居跡は確認できない。しかし4期には再び増加し古墳時代における最盛期を迎える。
- カ 住居跡の大きさは1辺が4～6m台に平均があり、明確な大きさの規格性は認められない。一方で2期の宮沖遺跡と5期の千田遺跡では1辺が8m台の大型住居跡が存在する。これら住居跡は通常規模の住居跡から比べると明らかに規模が突出しており、何らかの格差が存在すると考えられる。しかし大形と通常規模の住居跡から出土する遺物に質的な差はなく、あくまで居住単位内における優位性程度のもと思われる。しかし、地域内における複数の居住域をまとめる有力者が存在したことを示す遺構は調査区内では確認できない。千曲川・斑尾川から離れた河岸段丘上の高所などに、たとえば標高約384m地点にある風呂屋古墳を残した集団などが居住した可能性が残るであろう。
- キ 千田遺跡では12区の4～5期で3世代程度連続して居住したと考えられるが、この時期に大型住居跡と掘立柱建物跡が確認できるのは、定住期間が比較的長い点と関係する可能性がある。
- ク 竪穴住居跡の主軸方位は3遺跡ともに北西方向が圧倒的に多い。主軸方位が計測可能な住居跡についてみると、千田遺跡は住居跡軒数が最も多い12区で、座標北を起点として西方向へ23～68°を向く住居跡が14軒中13軒あり、その平均は49.4°である。川久保遺跡は同方向へ1～77°を向く住居が29軒中28軒あり、その平均は36.6°である。宮沖遺跡は同方向へ2～89°を向く住居が22軒中20軒あり、その平均は40.1°である。上記方向に傾く理由としては、居住地域の等高線や河川（斑尾川）など自然地形に沿うように作られた可能性を考えたい。
- ケ 住居跡の長軸が北西方向を指向するのは1期（古墳時代中期）～7期（奈良時代）まで一貫する。

(2) 遺物について

A 土器

形状の判明するものを中心に図示した。土師器の器種分類および編年観は川久保・宮沖遺跡における古墳後・奈良編年に従う（長野埋文2013）。ただし本遺跡において出土事例が少ない器種の消長や、編年案の細分については、長野市榎田遺跡における編年案を参考とする（長野県埋蔵文化財センター1999）。須恵器の編年・年代観については、近年の出土資料を踏まえて編年を行っている大阪府立近つ飛鳥博物館の成果を基にする（大阪府立近つ飛鳥博物館2006）。

川久保・宮沖遺跡における古墳時代土器の変遷は、土師器環類の形態変化と器種消長を基に以下のように時期区分が提示されている。報告書における編年時期の正式名称は「古墳後・奈良1期～7期」であるが、本報告書では略して1期～7期と呼称する。

- 1 期 黒色土器環C類の中で、口縁端部を短く外方に折るもの（C1類）や、同C類の器高1/3ほどで口縁が屈曲するもの（C2類）が存在する。
- 2 期 黒色土器環C類の中で、器高の1/2から3/4ほどで口縁が屈曲するもの（C3類）が存在する。
- 3 期 黒色土器環C類の中でC類の器高の3/4以上ほどで口縁が屈曲するもの（C4類）が存在する。
- 4 期 黒色土器環C類の中で底部脇にわずかに段を残すもの（C5類）と底部が半球形の黒色土器環I類が存在する。
- 5 期 黒色土器環I類が存在する。
- 6 期 黒色土器環I類と須恵器G類（宝珠つまみを有する環蓋とそれに伴う身の深い無台の坏身）が存在する。
- 7 期 少量の黒色土器環I類と須恵器環A類（無台）・B類（有台）が主体となる時期

上記環類の消長を川久保・宮沖編年に千田遺跡の竪穴住居跡出土資料を対比させると、1期2軒（SB04・18）、2期1軒（SB02）、4期8軒（SB71・72・74・76・77・79・83・85）、5期3軒（SB78・86・87）となる。このほか時期を特定できる資料が少なく時期不明の住居跡が5軒（SB13・70・73・75・80）存在する。

千田遺跡において実年代を想定できる資料は、4期のSB74・76でⅡ型式4～5段階の特徴を有する須恵器坏身、5期のSB86でⅢ型式1～2段階の特徴を有する須恵器高環が出土した。これら須恵器を基に各期の実年代を想定すると4期が6世後葉～7世紀前葉頃、5期は7世紀中葉頃となる。他の時期については川久保遺跡・宮沖遺跡における編年案に基づき、1期は5世紀の中葉～後葉、7期は8世紀代を想定したい。

B 石製品について

砥石、凹石、装身具と思われる石製品が少量出土している。本項では古墳時代中期から後期にかけて千田遺跡・川久保遺跡・宮沖遺跡で使用された石鍾について若干触れる。

3遺跡で使用された石鍾は定型化しており、平面形は楕円～長楕円形状、断面形は扁平を意識した石を用い、長辺側縁を打ち欠くのが特徴である。平均的な法量は長軸約13cm、短軸約10cmで、重さは約744gを測る。これほどの法量は、いずれも縄文中期末葉から後期前葉を中心に営まれた中野市柳沢遺跡、長野市村東山手遺跡の事例でも及ぶ数値ではない大形品である。千田遺跡8区ではSB04（1期）から13点、SB13（時期不明）から15点出土した。12区の住居跡出土の石鍾は図示していないが、SB73・74・76・77・79・80・83・85・86の9軒から34点が出土した。SB76から10点、SB77から9点、SB79から6点が多出例である。形状・法量は8区の事例と変わらない。

一方、川久保遺跡・宮沖遺跡では5・6期の住居跡から単品で出土し、一遺構で複数出土する出土例はみられない。替佐地区において石鍾は1期と5・6期に出土するが、形状に大きな変化が認められないため、2～4期にも継続して存在した可能性がある。また同形状の石鍾が千曲川流域で替佐地区のみで使用されたのか、広域に分布するかについても不明瞭である。千曲川本流で用いた魚網鍾と推定するが、用途についても検討が必要である。時期決定の根拠がない状況で出土した打欠石鍾は、縄文時代の所産と考えられる傾向があるかもしれない。替佐地区の事例を念頭において、今後の資料の増加を待ちたい。

3 中世・近世

掘立柱建物跡と柵跡は、ピット配列から推定したものであり、配列の歪みや柱穴の欠落など疑問点が少なくない。しかしながら、おおむね南北・東西の正方位に近い掘立柱建物跡 ST06・07・09、柵跡 ST16・17（A群）と、西に軸が振れる ST08・10・11、SA15・18（B群）の2群に大別できる。両者は時期差を有するものと推定される。SA17 - SK2543を ST10 - SK2548 が切り、ST10 が新しいことは前述した。このことを根拠に、A群の建物群が古く、B群の建物群が後出するものと推定する。むしろA・B各群の建物が群内で同時存在したというわけではない。

溝跡 SD18・20 は座標北よりわずかに東に振れるものの、ほぼ正方位に合う方向に走る。B群建物群に属す ST10 のピットが SD20 を切ることを根拠に、A群建物群と SD18・20 が共通の軸を有する、あるいは地割に従った遺構群と考えられよう。土坑墓と推定した SK3114・3121 は、小形の遺構ながら東西・南北に長軸が合い、SK3114 が SD18 下層で検出されたことから、A群期遺構群の中でも前出の遺構と推定する。SD19 が SD18 を切る溝跡であることと、走行方向が B群建物群に近いことから、これらと同じ第1調査面のなかでも後出の遺構群ととらえておく。

少量の遺物には近世の陶磁器も見られたが、確実に近世と考えられる遺構は指摘できないため、時間幅はあろうが中世前期の遺構群と把握する。

第7章 10区の遺構・遺物

第1節 概要

10区は斑尾川・千曲川合流地点の右岸の氾濫原内に位置する。平成17年度のトレンチ調査で洪水砂層に被覆された水田跡や、焼土跡・土坑が検出され、斑尾川の川床面より一段高い場所でHLW（計画洪水水位）にかからないことから、平成18年度に氾濫原内の土地利用状況とその時期を探ることを目的として10区北部の3,000㎡ほどを面的調査した。南部は耕作遺構の広がりを捉えるトレンチ調査とした。10区の調査面はトレンチ調査の結果を踏まえながら、洪水砂層で被覆された水田跡1・3～5面と、焼土跡や土坑が確認できた2面の合計5面とした。調査期間中の7月に千曲川の洪水に伴い調査区内が水没し、その排水や洪水時に堆積した土砂の除去に手間取ったが、平成18年の9月には調査を終了した。

1 地形と土層

10区は斑尾川沿いに広がる帯状の平坦地で、西側の12区の段丘上面から緩やかに傾斜して一段低くなり、地表面にわずかに段丘崖の段差を残す。10区は千曲川との合流地点方向へ徐々に低く傾斜し、同じ氾濫原内にある北側の11区は一段下がる。10区は斑尾川流路移動後に洪水土層が堆積し、斑尾川に浸食されなかったために11区より高く残ったが、11区は近世以後に斑尾川の河道で浸食されて低い地形となった可能性がある。さらに、11区は現在の水田造成で若干10区側を削平した可能性がある。

このように氾濫原内は、洪水土層が堆積しながらも斑尾川が移動して、浸食していたと捉えられる。斑尾川の移動に関し、10区5面の下層で捉えられた河道跡が最も古く、12区寄りの段丘崖直下を流れ、この河道跡が12区から続く段丘上の古墳時代後期以後の土器を包含する黒色土層を切っている。それに続く10区5面では、斑尾川が10区内を大きく蛇行するように流れ、それが砂礫で埋没した後の10区4面では東側へ移動し、2面ではほぼ現位置近くに落ち着くという変遷が捉えられた。3・4面水田間には類似位置で流れながらも若干の浸食や堆積による川岸の位置が変化しと捉えられたが、3面以下の流路があった場所は2面以上では埋積が進みわずかな窪みとしか視認できない。

10区の土層は、最下層に旧斑尾川河床の砂礫層や、黒色土などの河道跡内堆積土層があり、その上面に10区5面前後からシルト、細砂、粘土などの細粒堆積物を基調とする洪水土層と耕作土層が重なる。上述したように斑尾川は時期を追って現位置へ移動し、10区5面以後の土層が浸食されずに堆積したと捉えられる。これらの細粒堆積物は千曲川由来のものもあるが、5面、3面水田跡を被覆する洪水土層は砂礫が混じり、斑尾川の洪水土層も加わっている。なお、12区北部では古墳時代後期以後～中世前期の間に堆積したと思われる黄褐色シルト層が認められたが、10区では分布が確認されなかった。3面以上はシルトや細砂が堆積しながらも、2面で畑跡や掘立柱建物跡が検出されたように比較的安定した環境と思われる。近世以後は斑尾川流路に近い場所は砂質の強い堆積物が認められるが、1面水田跡を被覆する洪水砂層以外は粒度の細かい堆積土が中心となっている。このなかで、10区の1・3～5面は洪水砂層で被覆された遺構面を調査し、2面のみは暗褐色腐植土層を埋土とする掘り込まれる遺構を3面水田跡被覆洪水砂層上面で検出した。

2 検出遺構

10区では確認された最下層の遺構は5面水田跡で、それより下層は砂礫や河川の堆積物となることから、氾濫原内では中世以前の遺構は残存していない。検出遺構は、1面の近世水田跡と畑跡、2面の中世末の掘立柱建物跡や土坑、焼土跡と畑跡、3～5面の中世水田跡がある。斑尾川氾濫原内は中世において水田利用がはじまり、やがて中世末の16世紀頃に畑地と居住地になって水田は途絶し、近世には水田・畑に利用された変遷が捉えられた。中世末に水田から畑へ土地利用状況が大きく変わるが、居住遺構が確認されたことから当該期は洪水が少ない環境と思われる。近世では10区2面の畑は南部に継承されるが、北部は水田が新たに造成されている。

なお、斑尾川対岸の川久保1区との対比だが、10区では遺物に恵まれないため遺物からの対比は難しいが、10区1面は、水田の畦配置の類似や近世での厚い洪水砂層に被覆される状況から、川久保1区4面水田跡に対比されると思われ、10区2面は川久保1区に対比しうる土層はなく、千田10区3～5面水田跡は同様に中世の比較的厚い洪水砂層で被覆された調査面として川久保1区8～10面水田跡に対比しうる可能性がある。

第2節 10区1～5面の遺構

1 1面と関連遺構

10区の土層上部は近世から現代に至る水田耕作土層と薄い洪水砂層が重なるが、その中に厚い洪水砂層に被覆された10区1面水田跡が認められた。トレンチ調査では10区の北部と南部で類似した洪水砂層が捉えられたが、北部トレンチでは若干高い標高で水田跡、南部トレンチでは若干低い標高で畑跡が認められ、層高と検出遺構の違いがあって10区両端の土層が対比できなかった。そこで、平成18年度には10区中央に新たに南北方向のトレンチを掘削し、東西方向に流れる現在の用水を境にその南北で土地利用が異なることが捉えられた。また、北部水田跡を埋める洪水砂層は1枚だが、東西方向の用水を挟んで南部では洪水砂層が2枚認められた。改めて土層観察を行ったところ、上層洪水砂層で覆われた畑耕作土層が10区北部1面水田跡を覆う洪水砂層の上層に続くこと捉えられ、下層の洪水砂層で覆われた畑跡が北部水田跡と同一面と結論した。調査は重機で水田面の直上まで洪水砂層を除去し、人力で洪水砂層を除去して水田面を露出させ、さらに足跡などの窪みを掘りだした。なお、水田域と畑跡の境界に位置する用水跡は、水田が造成されてから現代まで類似位置に継続的に構築されており、10区1面に伴う用水跡をSD17、1面の調査面に残存した後代の用水跡をSD16とした。また、SD17に先行する用水跡SD24・25を下層の10区2面調査時に検出した。

10区1面の地形は北西隅が最も高く、斑尾川寄りの東側と南側へ向かって緩やかに傾斜する。水田跡のある北部が一段高く、畑跡のある南部が一段低い。1面は比較的厚い洪水砂層に被覆されていたために、遺構遺存状態は比較的良好であったが、水田跡の北西寄りの高い場所は洪水砂層が及んでおらず、耕作土分布や水田区画の段差から水田区画を捉えた。また、斑尾川沿いの北東部は1面以後の斑尾川の浸食によって削平され、1面の遺構自体が遺存していなかった。

10区1面以後も同じ土地利用が継承されており、水田部分の1面以上の土層は還元化した粘土層、畑跡の上層は還元化していない土層が認められる。その土層は、上層ほど粘土質の強い連続耕作の土層となり、下層は比較的シルト質となって薄い洪水砂層が数枚挟み込まれる。また、10区1面の水田耕作土層下層では斑尾川寄りに薄い洪水砂層が1枚挟まれ、その下層は連続耕作となる粘土層と酸化鉄の集積層が2枚認められた。水田が造成された時期は中世末以後だが、10区1面より遡った時期から耕作が継続していたと捉えられる。

10区1面の遺構は、北部の約2/3ほどが水田跡、南東1/3ほどに畑跡があり、その境にSD17が位置する。調査区壁の土層観察では近世に水田化された以後、現代まで土地利用状況には大きな変化は認められず、畦跡も踏襲するところが多い。水田跡は10区2面以後に造成されたもので、調査区西側と北側に広がると思われる。南部の畑跡は10区南部トレンチでも畑跡が連続することが確認され、千曲川近くまで畑跡が連続すると思われる。本調査面では高台を水田、千曲川寄りの低い場所を畑としているが、これは洪水被害の受け方と関係すると思われる。畑作物のほうが収穫までの時期が短いことから、洪水に遭いやすい場所でも洪水の頻発する時期を外せば収穫が期待できるといった考え方があったと思われる。

10区1面の時期は、出土遺物が少なく仔細不明であるが、水田域全体を通る畦で区画され、等高線方向に比較的細長い水田区画を造り出している様相と、近世で比較的厚い洪水砂層に覆われている特徴から川久保1区4面に対比しうる。耕作土層のトレンチ内から唐津呉器手碗が出土したことからも年代的に類似すると思われる。これらのことから、10区1面を被覆する洪水砂層は川久保1区4面水田跡と同様に、いわゆる「戊の満水」(寛保二年(1742)に伴う可能性がある。

(1) 水田跡 図版334～336 PL118

水田跡は10区北部のSD17より北側の一段高い場所にある。水田内は10区中央をほぼ東西に通る畦を境に、北側は等高線方向の幅6～7mのほぼ等間隔に配する畦で7段の細長い水田が形づくられ、南側は東側先端部分に三角形、西側は北側同様に等高線方向に細長い水田が並ぶ。東西方向の畦は比較的大方に近く、畑跡内の道と推測される帯状の窪地とも類似した方位である。この東西方向の畦は他の畦と大きな違いはないが、畦北側と南側では等高線方向の畦の接続位置が異なり、さらに東端のSD17へ注ぎ込む水口を除くと水口は構築されておらず、配水においても大きな境となる。この傾斜方向に伸びる畦で大きな区画をつくり、その中を等高線方向に細長い等間隔の水田に区画する。水田内では9ヶ所水口が確認され、中央東西畦を境に南北に大きく2分される区画内で、それぞれ下方の水田に水を流すように設置されている。北部では6基水口が検出され、そのうち4基は等間隔に区切られた南北に細長い水田の交互に北側と南側に設けられ、最終的に北東部の斑尾川沿いの低地に向かって水口5から斑尾川へと、水口9からSD17へ排水するようにしている。南側は同じように西側の高台から東側の低地へ向かって落ち、最終的に水口9からSD17へ排水している。

畦は石で補強するものと土を盛り上げた畦の2者があるが、石で補強するものは10区を東西に貫く畦跡の1条のみで、畦下端に石を並べて土留めとしたもので石芯ではない。また、上層から打ち込まれた畦に伴うと思われる杭痕跡がいくつか確認できた。それ以外は土で盛り上げたのみの畦を基本とする。

1面水田面では足跡状の窪みしか検出されなかった。その形状から人間の足跡と思われるものが大部分で、他に植物の根痕が、小動物の生痕と思われる小円形の落ち込みがある。足跡と思われる窪みは斑尾川沿いや東側の低い場所では深く、高台の北西部は浅い。耕作時では低い水田ほど湿田であった可能性が高

いと思われる。また、足跡はあまり規則的には認められず、一部は複数の水田跡を横断していると見受けられ、洪水時には稲が積っていなかった可能性がある。洪水は春先か秋と思われるが、水口が開放状態であったこと、水田面は荒起された状態ではなかったことから、秋の可能性が高いと思われる。

(2) 溝跡 図版 334～336、339 PL118

10区1面に伴う溝跡はSD17があり、調査面では上層溝跡SD16も底面近くが残存していた。また、近世の溝跡と捉えられた2面検出のSD21～25もここで触れる。

SD 16・17 図版 334～336 PL118 位置：1面ⅧI01・05、ⅧD03・08・12・13・19・21・22

10区1面の畑跡と水田跡の境に位置し、同じ場所で繰り返し溝が構築されている。SD17は1面水田跡に伴う用水だが、下層の2面の同位置で検出されたSD24・25を継承したもので、SD16は本調査面に残存したSD17以後の上層溝跡と捉えられる。この場所に継続的に溝が造られているが、この溝は水田への取水用水ではなく、水田域の用水を排水する溝とみられる。SD17は砂層で埋没し、その北側の水田側に道と思われる幅の狭い平坦地が付属する。また、水田域から本跡へ注ぎ込む排水口付近に石組みが認められたが、排水で畦側面が崩れることを防いだ施設とみられる。

SD 21～23 図版 339 PL118 位置：2面 II W23・24、ⅧC03・04・08

SD21～23は2面で検出したが、1面水田跡の畦と類似した走行方向で、一定間隔で平行するように検出されたことから1面の近世水田跡に関連する遺構と捉えた。SD21～23は並行して位置し、SD21が最も西側の高台にある。埋土はいずれも灰黄褐色粘質土の単層で砂を含まず流水は認められない。出土遺物はない。

SD21は幅約70cm前後で、北端は調査区外へ延び、南端は浅く立ち消える。検出面から底面までの深さは約5cmと浅い。SD22は北端が調査区外へ延び、南端は浅く途切れる。長さ約5mを検出した。幅は約50～80cm前後で断面形は傾斜上側が急傾斜で傾斜下方が緩やかな形状である。水田の造成で斜面を削平した痕跡の可能性もある。SD23はSD22の東側に並行するように位置し、幅約70cm前後で断面形は浅いU字形で検出面から底面までの深さは8cmほどである。北端は調査区外に延び、南端は浅く途切れる。埋土はSD21に同じである。本跡も近世水田造成に関わる痕跡とみられる。

SD 24・25 図版 338 PL118 位置：2面 ⅧD05・08・12・13・16・17・21・22、ⅧH05、ⅧI01

SD24・25は2面検出ながら、位置や走行方向から1面SD17に先行する溝跡と捉えられる。

SD24は幅80cm前後でほぼSD25と並行して延び、北東先端はやや不明瞭となって浅く立ち消え、南西端は調査区外へ続く。埋土はシルト質の灰黄褐色土で砂等を含まない。2面で検出したが、東端は斑尾川へ向かっての傾斜地にあつて遺存状態は悪い。また、検出した本跡底面には数条の窪みが重なって認められ、本跡は掘り直された可能性がある。カワラケが出土した（図版331-2）。

SD25は1面SD17脇の位置し、直線的に延びて両端は調査区外へ延びる。残りの良い西側で上幅約1.7mを測り、西側は北側が浅く緩やかな傾斜で南側約1.1mと幅が狭い。底面は流水によると思われる数条の浅い窪みが認められる。埋土は砂を含み、底面は酸化鉄の集積が認められることから流水があつたとみられる。また、断片的に礫が並んで検出され、石の護岸が伴っていた可能性がある。石の面は南側に揃っている。出土遺物は近世陶磁器の小片がある。

(3) 畑跡 図版334・335 PL118

10区南部のSD17より南側に位置する。畑跡は旧地形を大きく改変せず、凹凸のある波打つような地形のまま利用している。調査では洪水砂層を除去して畑跡の畝を検出した。検出された畑跡はほぼ類似した間隔で長い畝が連続する。比較的幅の広い浅く窪む道跡とみられる溝状遺構を挟んで畝方向を違えており、調査区内では少なくとも3つの区画が捉えられる。各区画内は類似した間隔・形状の畝跡が広域に連続することから、ほぼ同じ作物が大量に栽培されていた可能性がある。

畝の方向は北側の区画で東西方向、東側と南側の区画が南北方向で、いずれも畝の幅は20～40cmほどで、40cmほどの間隔で作られている。長さは長いもので24mほどであり、高さは数cmと非常に低い。畑跡の断面観察では耕作土層が比較的深くなく、根が深く張らない作物を栽培したとみられる。栽培種は発掘調査で特定できなかったが、耕作土や畝の規模等から、根の深く張らない作物で、成長しても幅は60cm前後を超えないものとみられる。また、畑跡の規模から大量に生産・収穫する作物であると予想され、大豆、麦、稗、粟などの穀類とも想像される。

2 2面の遺構

平成17年度に行った10区北側のトレンチ調査で焼土跡、土坑が検出され、あわせて内耳鍋の破片や石臼が出土したことから、中世末の居住遺構が北側トレンチ周辺に存在する可能性が捉えられた。平成18年度では、トレンチで検出された焼土と類似層高の3面水田跡を被覆する洪水砂層上部の粗砂中心の黄灰褐色シルト層上面まで掘削し、その上面で柱穴や土坑、焼土跡を検出し、斑尾川寄りの場所では黒褐色土を埋土とする溝状遺構が並列するように検出され、斑尾川沿いには畑跡が存在することが判明した。

調査の進展に伴って畑跡の畝間溝を切るSKが捉えられ、南東隅の斑尾川寄りの低い場所には畑跡が上層にもう1面存在すること、焼土跡はこの2面との中間に位置することが判明した。そこで南東部の上層畑跡は2A面として追加調査し、焼土跡は2面で調査した。この2面では洪水砂層で被覆された遺構ではなく、掘り込まれる遺構を調査した。検出遺構は同時存在と言いきれないが、少なくとも畑跡とそれを切る土坑・焼土跡の2時期の遺構が含まれる可能性がある。ただし、遺物から近接時期の遺構面と思われる。

2面の地形は北西側が高く、緩やかに斑尾川側へ向かって傾斜し、10区南東部にある下層の埋没河道跡の周辺が低く窪む地形となる。検出土層は3面被覆砂層の細かい砂礫層の上ののる灰黄褐色ぎみのシルト層であるが、場所によっては粘質の強い土層とやや砂質の強い土層数枚に分層できるところもある。また、斑尾川沿いではこの2面の上層に2A面とした畑跡を検出した土層が挟み込まれる。この検出土層は北部から東部にかけては明瞭に捉えられたが、南西部については遺構が確認できなかった。なお、2面北東部は畑跡が断続的にしか検出できなかったが、これは遺存状態が悪いことに加え、検出面をやや深めに設定してしまったことによる。

2面の遺構は北西部に掘立柱建物跡や土坑や焼土跡など居住関連遺構が集中し、斑尾川寄りの東部で畑跡、土坑・焼土跡若干が検出された。

(1) 掘立柱建物跡

北西部の土坑や焼土跡が集中的に検出された場所で柱穴跡が多数検出され、調査時にも建物跡の可能性が捉えられたが、帰属する柱穴跡の認定は基礎整理作業で行った。いずれも近接して位置することから、一つの屋敷跡を構成していたと思われる。

ST 14 図版 339 PL118 位置：Ⅷ C02・07・08

2面北西部西端に位置する。調査時に掘立柱建物跡は想定できたが、基礎整理作業で長方形に並ぶSK2804・2807・2805・2806・2825・2826・2829・2830からなる本跡を認定した。桁行中間の距離が長すぎてSK2809を含む可能性がある。梁行1間1.7m×桁行3間6.4mで、SK2809を含むと桁行4間となる。梁行1間としたが、調査区外に延びて2間となる可能性もある。柱間寸法は桁行北・南端は1.5～2.0mで中間は3.2mを測り、桁行中間にSK2809を入れると約1.5～2.0m前後となる。柱穴跡はいずれも平面形が直径30～40cmの円形で、断面形はU字形で深さ約20～30cmを測る。SK2829から鉄釘が出土した(図版331-8)。

ST 15・16 図版 339 PL118 位置：2面Ⅱ W23、Ⅷ C03

2面北側のトレンチ脇に位置し、北側へ延びる可能性がある。隣接するST16と重なるが、直接重複せず前後関係は不明である。調査時にSK2850・2814・3165・2816・3166・2812・3080・3172がほぼ長方形に並ぶと捉えたが、柱間寸法が短すぎることから、基礎整理作業で同じ場所に2棟が重複する建物跡と捉えた。ST15はSK2850・2845・2816とSK3166・3080の梁行1間2.5m×桁行2間3.4mである。ST16はSK2814・3165・2812・3080の梁行1間2.5m×桁行1間2.0mで、桁行の東西いずれかの柱穴跡がSD21か22と重複しており、桁行2間の建物であった可能性がある。柱間寸法はいずれも桁行1.8～2.0mを測る。柱穴は平面形が直径20cm前後の円形で、断面形は底面が緩やかなU字形で検出面から底面の深さは30cm前後を測る。

ST 17 図版 338・339 PL118 位置：2面Ⅱ W23・24、Ⅷ C03・04

ST15・16の東側のトレンチ脇に位置し、北側部はトレンチにかかった可能性がある。ST16範囲に重複し、時期差があるとみられる。基礎整理作業で長方形に配置するSK3082・2930・2915・2931・3088・2818・2815を、梁行1間4.2m×桁行3間7.8mの側柱建物跡と捉えた。梁行が長過ぎ、中間に1間入っていた可能性がある。柱間寸法は桁行2.4～2.6mでST14～17より広い。柱穴は直径20～50cmの円形の平面形で断面形はU字形で検出面から底面までの深さは30cm前後を測る。

(2) 土坑 図版 338・339 PL118

柱穴以外の円形、楕円形の大き目の掘り込まれる遺構を土坑と捉えた。10区北西部の掘立柱建物跡が集中する周辺と、北東部、南東部の畑跡に重なって分布するものがある。

10区北西部で検出された土坑にはSK2918・2920・2824・2927・2832・2833・2834・2835・2843・2844・2846・2847がある。類似土坑が近接する例として掘立柱建物跡群の東側のSK2918・2927、同南側にSK2834・2835がある。これらは掘立柱建物跡と重複せず屋敷境か、その周辺の施設とみられる。また、SK2843・2820、SK2847・3076はそれぞれ類似形状の土坑で掘立柱建物跡の分布範囲内に位置する。建物内施設の可能性もあるが、断定できなかった。なお、SK2824、2853は土坑に加えたが、遺構と断定できず、植物の根痕の可能性も残る。

北東部の畑跡内で検出された土坑にはSK2936・3077・3081の3基がある。いずれも畑跡を切り、形状が類似することから同様の性格の土坑と思われる。掘立柱建物跡の集中箇所に隣接し、関連する施設の可能性もある。3基の土坑の構造はSK3077を代表としていずれも本来は方形の配石を備えていたとみられるが、SK3081内の配石は残っておらず、SK2936は中央に礫が投げ込まれた状態で検出された。重複関係ではSK3081をSK3077が切り、古い土坑の礫を新しい土坑に転用したとも考えられる。

南東部の畑跡内で検出された土坑はSK3075・3086・3087の3基がある。これらの土坑も畑跡と重なって位置し、畑跡の畝間溝跡を切る。同じ畑跡内に位置するSK2936・3077・3081とは形状が異なり、性格も異なると思われる。SK2936から内耳鍋の破片と鉄釘（図版331-9）が出土した。

SK 2929：2面Ⅱ W24 前年度の試掘で存在が確認されていた。重複する遺構はない。平面形は長軸150cm、短軸124cmの長方形、断面形は箱形である。検出面から底面までの深さは34cmを測り、底面には凹凸がある。埋土の上部は炭化物片を多く含む土層、下層は粗粒砂を多く含む灰黄褐色土である。補修孔がある内耳鍋（図版331-5）が出土した。

SK 3076：2面Ⅷ C03 他遺構との重複はないが、掘立柱建物跡内に入る可能性もある。中央がトレンチにかかった。平面形は長軸120cm、短軸90cmのやや不整形な長方形で、壁際に部分的に拳大礫が並ぶように検出された。断面形は箱形で検出面から底面までの深さは12cmほどと浅く、底面は平坦である。

SK 2918：2面Ⅱ W24 SK2927と並列するように位置し、他遺構との重複はない。平面形は長軸74cm、短軸54cmほどの不整形な楕円形で、壁は若干斜めで底面は凹凸がある。埋土は褐灰色土の単層である。形状の類似するSK2927と隣接し、屋敷地の境に関連する遺構か、植栽の痕跡と思われる。

SK 2927：2面Ⅱ W25 SK2918と並列するように位置し、他遺構との重複はない。平面形は長軸90cm、短軸70cmの楕円形で、底面は凹凸がある。深さ16cmと浅く、埋土は褐灰色土の単層である。類似した形状のSK2918と並列し、SK2918と同じ性格の土坑と思われる。

SK 2820：2面Ⅱ W24 他遺構との重複はないが、掘立柱建物跡内に入る可能性はある。平面形は直径54～56cmの円形で、断面形は長方形で深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層で出土遺物はない。形状が類似するSK2843とは近接し、関連があると思われる。

SK 2824：2面Ⅷ C02 他遺構との重複はない。平面形は長軸66cm、短軸48cmの隅丸長方形で、平面形は整った形状ながら、底面の凹凸が著しい。植物の根痕の可能性もある。出土遺物はない。

SK 2832：2面Ⅷ C08 他遺構との重複はない。平面形は直径38～42cm前後の円形で、断面形は長方形で深さ8cmと浅い。埋土は灰黄褐色土の単層である。平面形は柱穴だが、浅いタライ状で土坑とした。

SK 2833：2面Ⅷ C04 単独で位置する。平面形は直径32cmの円形で、断面形はU字形で深さ10cmを測る。出土遺物はない。

SK 2834：2面Ⅷ C04 SK2835と並列するように位置し、他遺構との重複はない。平面形は長軸64cm、短軸50cmの楕円形で、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。深さ約17cmで、埋土は灰黄褐色土の単層である。類似形状で隣接するSK2835と関連するとみられ、建物跡と重ならず内部施設ではないと思われる。

SK 2835：2面Ⅷ C09 SK2834の南側にあり、重複する遺構はない。平面形は56×54cmの方形で、断面形は長方形で深さ約20cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層である。類似形状で近接するSK2834は関連があると思われる。掘立柱建物跡とは離れており、建物内施設ではないと思われる。

SK 2843：2面Ⅱ W24 他遺構との重複はないが、隣接するSF07との関連を探るためにいれたトレンチで一部掘り壊してしまった。また、近接して形状が類似するSK2820がある。直径68cm前後の円形の平面形で、断面形はタライ状である。底面は平坦で検出面から底面までは22cmを測る。埋土は3層に分層され、中層に小ブロックが含まれる。性格は不明で、建物内の施設とも断定できないが、近接するSK2820とは形状も類似し、関連すると思われる。珠洲焼の小破片が出土した（図版331-4）。

SK 2844：2面Ⅱ W24 本跡西側に焼土跡SF07があるが、本跡埋土中にも炭化物や焼土粒を多く含

み関連する遺構と捉えられる。平面形は長軸122cm、短軸74cmの楕円形で、壁は斜めで底面との境が不明瞭なU字形の断面形である。深さ20cmほどである。埋土は中・上層の炭化物・焼土粒が少ない土層と焼土粒・炭化物を含む土層が交互に認められた。ST17内にあり、建物内施設の可能性がある。

SK 2846：2面Ⅱ W23 SK2813に切られる。平面形は直径62cmの円形、断面形は中段をもつ逆台形形で、深さ26cmを測る。埋土は下層に炭化物を多く含む灰黄褐色土、上層に炭化物を少量含む灰黄褐色土が認められた。掘立柱建物跡内に位置し、建物内施設の可能性がある。

SK 2847：2面Ⅷ C03 SK2848に切れ、南側壁がトレンチにかかった。平面形は長軸72cm、短軸58cm以上の楕円形で、断面形はU字形で深さ20cmを測る。埋土中からは拳大の礫が二個が重なって検出された。

SK 2936：2面Ⅷ C05 10区北東部に畑跡を切って位置する。近接するSK3077・3081と関連する遺構とみられる。平面形は長軸約190～210cmの不整形円で、深さ40cmほどで、壁は緩やかで底面中央が若干窪む。埋土は中層にブロック土を多く含む埋め土と思われる土層があり、下層は炭粒を多く含み、上層は窪地に流入した土層とみられる。中層以下で礫が多く検出された。礫は中央に密集するが、本来はSK3077と同様に組まれていた可能性がある。出土遺物には内耳鍋片がある。

SK 3077：2面Ⅷ D01 SK2936の東側にあり、畑跡とSK3081を切る。平面形は長軸262cm、短軸219cmの不整形な楕円形で、壁は斜めで底面中央が若干窪む。深さは32cmを測る。底面中央の窪みを囲むように礫や礫の抜き取りと思われる痕跡が検出され、本来は礫が方形に並べられていた可能性がある。大部分は抜かれて遺存していない。埋土はブロック土を含む埋め土と見られ、下層に炭化物が多く含まれる。検出時に井戸跡に類似する土坑と考えたが、浅く、井戸跡と断定できない。SK2936・3081は本跡と類似した性格の土坑とみられる。

SK 3081：2面Ⅷ D01 SK3077に切られる。平面形は長軸214cm、短軸192cmの不整形円で、断面形は壁の傾斜が緩やかな逆台形である。底面は平坦だが、中央付近が窪み、SK2936やSK3077と類似する。埋土は中層にブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性があり、上層もその可能性がある。下層は炭化物を多く含む。近接するSK2936・3077と同様の土坑と思われる。本跡内では礫が残存していなかったが、造り替えに際して抜き取られた可能性がある。出土遺物は内耳鍋片がある。

SK 3075：2面Ⅷ D13 10区南東部にあり、畑跡を切る。平面形は長軸約116cm、短軸80cmの不整形楕円形で、中央が深い不整形な形状である。埋土中で人頭大～拳大礫が出土。礫を埋めた穴跡か。

SK 3087：2面Ⅷ D03 10区南東部畑跡内に位置する。礫の分布から本跡が畑跡を切るとみられる。平面形は南北100cm強、東西92cmの隅丸方形で、主軸方向は畝と同方向である。断面形は浅いU字形で、埋土中に拳大礫を多く含む。ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されているとみられる。礫を片付けた遺構の可能性があり、2面畑跡より後出する時期の土坑と思われる。

SK 3086：2面Ⅷ D13・14 10区南東部に畑跡を切って位置する。平面形は直径76～94cmほどの円形で、断面形は箱形である。埋土中には炭化物が多く含まれる。炭化物を含む特徴は周辺の焼土跡と類似するが、深さは24cmで明らかに掘り込まれている。出土遺物は内耳鍋片がある。

(3) 焼土跡 図版338・339 PL118

10区北西部でSF04～08・14、南東部畑跡でSF09～13の計9基の焼土跡を検出した。SF04～08・14はやや小型の直接被熱で赤化したものが多いが、SF09～13は焼土や炭化物が顕著に検出されたが、

浅い掘り込みを伴う。SF11からわずかだが、骨片が出土した。検出面はSF04～08・14が2面で検出した。SF09～13は2面畑跡上層で検出したが、2A面では確認されなかった。SF10～13は2面の畑跡を南北方向に貫く道跡とみられる溝状の浅い落ち込みに並行して並ぶ。

SF04：2面ⅡW23 北東部をSK2845に切られる。平面形は直径20～25cmの被熱による赤化範囲が並ぶように検出された。出土遺物はない。近接して火が焚かれた痕跡で建物内の火処とも思われる。

SF05：2面ⅡW23 SD22際に位置する。平面形は直径20cmほどの被熱で赤化した浅い窪みが二つ並列する。単一の遺構と捉えたが、2基の焼土跡の重複の可能性がある。

SF06：2面ⅡW24 単独で位置する。平面形は直径25cmほどの円形に被熱による赤化範囲が認められた。遺物はない。

SF07：2面ⅡW24 SK2844肩に位置する。平面形は直径40cmほどの赤化範囲と認められた。炭化物や焼土範囲が重なって焼土がSK2884底へ傾斜し、関連すると考えられる。

SF08：2面ⅡW23 単独で位置する。半月形の被熱による赤化範囲が認められた。遺物はない。

SF14：2面ⅡW23 3面の掘削途中で検出したが、掘り込みを伴う2面遺構と思われる。平面形は直径50cmほどの円形で、中央東寄りに直径20cmほどの赤化範囲が認められた。遺物はない。

SF09：ⅧD23 南東部2面畑跡上層で検出。平面形は長軸50cm、短軸40cmほどの不整形な楕円形で、断面形はU字形で深さ6cmを測る。焼土や炭化物が顕著に認められて焼土跡としたが、浅い掘り込みを伴うと思われる。

SF10：ⅧD19 南東部2面畑跡上層で検出。平面形は直径60cmほどの円形で深さ8cmほど。南北に本跡～SF13が列状に並ぶ。埋土は炭化物と焼土粒を多く含む。被熱による赤化は認められない。

SF11：ⅧD19 南東部2面で検出。平面形は長軸110cm、短軸90cmほどの楕円形で、断面形は深さ30cmほどのU字形の土坑。北東壁付近が被熱で赤化し、埋土上層に灰黄褐色土、底面上に炭化物・灰・炭化物層が顕著に認められた。埋土から骨片が出土した。

SF12：ⅧD19 南東部2面畑跡上層で検出。平面形は直径30cmほどの円形で、西側20cm前後に灰層が広がる。内部で火が焚かれたとみられるが、性格は不明である。

SF13：ⅧD24 南東部2面畑跡上層で検出したが、2A面では検出されず。平面形は長軸30cm、短軸20cmの楕円形の浅い窪みで底面隅が被熱で赤化する。本来はもっと大きな規模であったと思われる。

(4) 2面畑跡 図版338 PL118

10区東部の斑尾川寄りの2面で、黒褐色土の溝状の落ち込みが並列して検出され、畑跡と認定した。検出できたのは畝間の溝で、北端付近と西側は上層水田造成で削平され、黒褐色土層の残存も不良で検出できなかった。掘立柱建物跡に関連すると思われるSK1077、関連不明ながらSF09～13、SK3975・3807・3086が畑跡の畝間溝を切っており、2面北西部の掘立柱建物跡とは時期が異なる可能性がある。

畝間溝は斑尾川と直交方向でほぼ等間隔に並列し、若干緩やかな弧を描く。南東部では3面の河道跡のある窪地中央で、浅い南北方向の溝状の浅い窪みが検出された。道の可能性があり、これを境に畑跡は大きく二つに分かれる。この道を挟んで西側では最大58m畝が連続する。道と思われる溝状の窪地西側の南西部ではわずかに残存する畝間の溝がずれるところがあり、これにより南西部には別の畑が存在する可能性がある。さらに、南北方向では道の可能性がある浅い溝状の窪み内に約5m間隔で礫が検出されたが、これも何等かの耕作の単位を表す可能性はある。

畝間溝の間隔は0.5～1.0mほどで、畝間溝自体の幅は50cm前後である。断面はU字形で深さは約10cmほどである。畑では栽培毎に畝をつけかえる作業を行うため、畝間溝が錯綜して重なると思われるが、検出された畝間溝はほぼ並列して一部ずれや重複が認められる程度である。類似作物の単一栽培を行った可能性もある。本跡時期は出土土器から16世紀とみられる。

(5) 2A面の畑跡 図版337

調査区壁の土層観察で、2面畑跡土層に位置する畑跡が存在することが確認できた。2面の中世末～近世水田造成以前の遺構と捉え、2面上部の畑跡を2A面として調査した。調査は畑跡の遺存する南東部の河道跡窪地内のみとし、2面上部にある洪水土と思われるシルトで被覆された畝を重機で検出面まで露呈して人力で精査した。その結果、遺存不良ながら南北27m、東西16mの範囲で畑跡が検出できた。畑跡は2面同様に斑尾川と直交方向に幅20cm前後の畝間溝が36条ほど検出された。西端は被覆土層が減少して畝間溝跡先端も不明瞭で検出されず、東側は調査区外へ延びる。検出範囲はほぼ1枚の畑の一部と思われ、道跡などの他施設は検出されなかった。出土遺物は内耳鍋片などがあるが、2面でも同様の遺物が出土しており、あまり大きな時間差はないと思われる。ただし、2面の畑跡内の道跡と同じ場所では道跡が検出されておらず、土地区画は2面とは異なる。また、2面では畑跡を切る焼土跡や土坑が検出されているが、本調査面では検出できていないので、2面の畑跡と2A面畑跡との間に異なる土地利用があった可能性もある。

3 3面の遺構

(1) 3面水田跡 図版340・341 PL119

平成18年度に10区調査区北壁土層を観察したところ、2面直下に砂・砂礫に被覆された畦と思われる盛り上がりを確認できた。水田面を被覆する砂層を除去して水田面を露出するように調査を進めたが、7月19日に千曲川増水による洪水で調査区全域が水没し、調査を一旦凍結した。洪水後の排水と道路の復旧作業を8月2日まで実施し、調査区内に堆積した泥の乾燥を待って除去作業を行い、遺構精査を再開した。

千田10区3面の地形は2面までの北西部から緩やかに傾斜する地形と異なり、西側に段丘崖が明瞭に現れ、水田跡はこの段丘崖に画された氾濫原内の平坦地に立地する。氾濫原内は1・2面よりも高低差は小さいながら、北西部が若干高く南東側に向かって緩やかに傾斜し、南東端にある斑尾川河道跡の窪地へ向かって大きく落ち込む。この河道跡は3面を被覆する砂層を堆積させた斑尾川の河道跡と思われ、1・2面でも浅い窪みとして残存する。3面水田跡を被覆する洪水砂層は、比較的厚く、西部から南部にかけて砂質が強いが、東側の斑尾川寄りには粒子の粗い直径1～5cm前後の砂礫が中心で、北西部ほど被覆する砂層が厚く斑尾川寄りには薄い。洪水土層中に粒度の大きな砂礫が含まれること、さらに粘土の3面水田跡の畦が洪水で流出している状況が認められたことから、斑尾川の流速のある洪水に見舞われて埋没し、この洪水によって3面の斑尾川河道跡は現位置に近い場所へ移動したとみられる。3面水田跡の耕作土層は比較的粘性の強い灰白色ぎみの粘土層ながら、全体的に砂を多く含む。耕作土層直下には粘性の強いやや黒色を帯びる褐色水田耕作土層があり、その下部に酸化鉄の集積が認められた。その下は部分的に薄い砂層を挟み込みながらも水田耕作土層が連続している。

3面水田跡は砂礫の堆積が認められる北東～東部周辺は洪水時に流速のある流れで浸食されたために畦が削られて遺存せず、水田区画の様相は明らかにできなかった。西～南部にかけては比較的畦の残りも良好で区画は明瞭に把握できた。この3面の水田区画は地形に合せながらも、方位に合せた畦も認められる。長く調査区を貫くような畦や、大畦と捉えられる畦も捉えられなかった。3面水田跡は比較的傾斜のある西側と北東側に比高差をもつ細長い水田区画が配置され、南部は比較的平坦でやや大きな区画となる。その境界部分では狭い水田跡が並ぶ。下層の4面水田跡と畦の位置は全く一致せず、水田区画は3面水田に踏襲されていない。

水田面は凹凸が少なく、耕作痕や足跡も判然としなない。ただ、斑尾川寄りの水田では粗砂や小礫が入る窪みが列状に長方形水田の長軸方向に並んで認められ、窪みを足跡等の痕跡とすれば稲は東西方向に植えられていたと思われる。

畦は土を盛り上げたもののみがあり、畦には水口が10カ所検出された。水田内の配水は水口を通してのものと同捉えられ、水田面の標高差から北西側の最も高い水田跡から東に隣接する3つの水田跡に配水し、そこから南東側へ向かって順次低い水田へ水を流したと思われる。南端の畦で確認できた水口10は中央に粘土塊が認められ、流水で畦が崩れたものかもしれない。

また、水田面では南部で円形に巡る溝跡SD27とそれに連続する浅い溝跡SD26・28～30が検出された。これらの溝跡はそれぞれと接続すると共に、溝脇には若干小高い畦とも思われる盛り上がりが見られた。この盛り上がりは周囲の畦ほどの高さはない。洪水以後の復旧作業に伴う遺構とも考えたが、低いながらも水田面に畦状の盛りあがりを作ることや、3面を被覆する洪水砂礫層は厚さ50cm前後あり、かなり深いことから復旧に際しての作業の溝跡とは断定はできなかった。

3面水田跡は5面水田跡以来の水田跡の最終的な水田面にあたり、上層の2面では畑跡となって水田耕作が途絶する。水田耕作が途絶えた理由は明らかにし得なかったが、洪水砂礫層が比較的厚いことから地形が大きく変化し、用水などのシステムが復旧できなかったこともあると思われる。水田跡の時期は出土遺物がなく2面以前としか捉えられなかった。斑尾川対岸の川久保1区の水田跡に対比すると、中世の大きな洪水土層としては層順から川久保1区8面水田跡に対比しうる可能性があり、それからすると14世紀前後と捉えられる。川久保1区では8面水田跡以後は部分的にしか水田跡が捉えられなくなり、洪水が減少したと捉えられたが、これも千田10区と同様と思われる。

(2) 溝跡

SD26～30 図版340・341 PL119 位置：3面ⅧD11・12・16・17・21・22

10区南部の3面水田面上で円形にめぐるSD27、北側に続くSD26、南側に続くSD29、東側に続くSD28、その先端に南北方向に延びて接続するSD30が検出された。接続することから関連した溝跡で、区画を形づくるようにもみえる。SD30はSD28が途中で接続するが、接続部分では、SD30のほうが深く、SD29は南側に検出された東西方向の畦跡を壊すが、SD30はこの東西畦付近で途切れる。溝の接続の様相から、SD27かSD30が最初に構築され、SD26・28・29がそれに続いて構築されたとみられる。埋土はいずれも粘土ブロックを含む砂礫で、ところどころ溝脇にも粘土ブロックが認められているが、明瞭な畦を伴っていない。SD30も同様ながら、南部では若干低い盛り上がりが見られた。明瞭な畦を伴わないことから、水田面に付属する恒常的な施設とは考えにくく、溝跡が一方のみでないことから用水など配水に関わる施設ではないと思われる。

4 4面の遺構 図版342・343 PL119

トレンチ調査で3面下層にも厚い砂層に被覆された比較的レベルに堆積する粘土層が捉えられていたが、畦が判然としないうえ水田跡とは断定しきれなかった。しかし、平成18年度に調査区壁の土層を再確認したところ、西端の段丘崖際が階段状に落ちて東側の平坦な地形に続き、人工的に削られている可能性が想定された。さらに、トレンチ調査では4面の下層50～70cmの砂礫層が最終面と捉えられていたこともあり、3面に先行する水田跡が存在するか、試みに一部を掘り広げた。その結果、北西部で窪みや稲株と推測される酸化鉄の集積が認められ、さらに掘り広げたところで東西方向の畦が確認されて水田跡と断定するに至った。調査は洪水砂層を水田面上まで重機で除去し、人力で水田面を露出させ、礫が部分的に認められた畦の解体と水田面にトレンチを入れて土層観察を行った。

なお、調査面の大部分は洪水砂層に被覆されているが、北西部の高台は上層水田で削平されていた。3面水田跡下層に4面水田跡被覆土層と類似した黄灰褐色シルト層があり、これを層順や土質の類似から4面水田跡を被覆する洪水土層と捉えて4面水田跡の一部と捉えた。また、3面の河道跡の窪地内は、南側トレンチの観察から水田面自体が削平されて遺存していないと捉えられたため掘り下げは実施しなかったが、10区南東部の岸際には河道跡方向に3面の砂層とは異なるシルト質の土層が分布し、その下面で畦が検出できたことから、若干流路を変化させるなかでわずかに4面水田跡が残っていることが判明した。5面水田跡では河道跡岸斜面にも極めて小さな水田を柵状に並べており、同様に岸際までも水田を造成している可能性がある。

4面水田跡の地形は3面と同様に北西部がやや高く、南東側へ傾斜する地形で、南東端は3面水田跡で検出された河道跡に切られる。北西部は段丘崖の裾が調査区側へ広がり、北部は比較的平坦ながら、南部ほど傾斜がきつくなる傾向がある。

水田面を被覆する砂層はシルトに近い細砂を基調とし、段丘側側の斑尾川から離れた西部ほどシルト質で、東側の斑尾川寄りでは砂質が強い。また、水田面直上にハナ泥と呼ばれる粒子の細かい堆積物が比較的厚く堆積しており、北部では耕作土層と土質が類似して水田面の認定が難しかった。南西部は洪水砂層も場所によって色調差や層厚に違いが認められ、薄いところでは上層水田の造成で削平されている。また、砂層がシルトと混じり合ったブロック状を呈する部分は洪水以後の耕作が及んだと推測される。

4面水田跡の耕作土層は暗褐色気味の粘土層で、西側の段丘崖に近いほど黒味が強く段丘上の土層に由来すると思われる風化礫粒を含む。斑尾川寄りでは風化礫粒の混入は少なく、シルト質傾向が強い。耕作土層より下層は連続耕作の粘土層が続くが、数枚薄い砂層が確認できたところもあり、特に南部では砂層が厚く挟み込まれるが、調査区全体には及ばない。これらの連続耕作土層と洪水土層の下には5面河道跡を埋める砂礫層となる。4面水田跡は5面水田跡の埋積で平坦化した後、ほぼ連続耕作されるなかでの洪水砂層で被覆された1時期の水田跡と認められる。

10区4面水田跡は斑尾川寄りの東部や、低い南部ほど遺存良好で、北西部の高い地点は上層水田耕作で削平されて遺存状態が悪い。特に北西部の水田1筆は東側が上層水田で削平され、耕作土層自体が残っていない。また、中央西部の水田に伴う畦は調査時にも盛り上がりは認められず、上層水田耕作で削平された可能性がある。中央南寄りでは下層の洪水砂層が帯状に検出されたが、これは4面水田跡の盛り上がり後代の水田耕作で削平され、擬似畦畔として下層の洪水砂層が露出したものと思われる。これらは洪水砂層が薄く上層水田耕作の削平を受けたと捉えられる。なお、調査区南東部の河道跡の岸付近の畦跡は段差のみが認められて盛り上がりは残存していない。洪水時に流失した可能性がある。

以上のように遺存不良ながら、全体的に北西部が高く、北東部が平坦で河道跡寄りの南東側へ向かって緩やかに傾斜する地形上に北部ほど広い水田、南東部ほど等高線方向の細長い水田区画が分布する。水田面積にもばらつきが大きく、北部の水田面積は認定に不安を残すが、中間に畦が検出されない1筆とみられる非常に広い水田跡で、530㎡以上である。

畦は土を盛り上げたものがあるが、斑尾川寄りの一部の畦に礫を埋め込んだものがある。南部の本水田面下に入れたトレンチ調査では畦下にも洪水砂礫が確認され、この部分では畦が踏襲されることなく、ずれた場所に作られていることが確認できた。それは3面水田畦も同様で、同じ位置に畦を維持する志向は見受けられない。地形に合わせた区画であることから、畦が土地所有を表すばかりでなく、耕作や耕作地の都合に応じて変化し、固定化していないとみられる。水田内の水回しは、用水は確認されず、水口を通しての配水と思われるが、水口も明瞭には捉えられなかった。

水田面積は西側の段差際周辺ほど足跡の窪みが顕著に認められたが、東側の斑尾川寄りではあまり足跡等は認められなかった。ただ、水田耕作土層とハナ泥が類似して識別しにくい傾向があるため、窪みが認識しにくく見逃した可能性もある。一方で、足跡状の窪みが判然としないうところでは稲株と思われる痕跡が認められた。ごく一部の検出にとどまったが、現代のような明瞭な直線的な列状とは認めにくく、湾曲したラインとなっている。

千田10区の水田跡は3面水田跡と類似した地形に合わせて造成された水田跡と捉えられるが、よりカーブする地形の等高線に近い水田区画となっており、類似した水田区画とすることや、方位を合せる区画を造成する志向はあまり感じられない。出土遺物がないため、時期の詳細は不明であるが、斑尾川対岸の川久保1区の水田跡に対比させると9面水田跡に対比しうと思われ、その対比から13世紀頃と思われる。

5 5面の遺構 図版344～346 PL119

平成17年度のトレンチ調査では10区北側トレンチで最下層の礫層まで掘削したが、その砂礫層の30cmほど上層で洪水砂礫に埋められた薄い粘質土が捉えられた。しかし砂礫が混じっていることから、下層の砂礫の一部として水田跡とは断定できなかった。平成18年度も、調査区北壁の上層を再精査したところ、畦と思われる盛り上がり確認され水田跡の可能性が捉えられた。そこで、水田跡の有無を確認するために斑尾川と直交方向のトレンチを3本設定し、一定範囲で面的精査を試みた。10区北端のトレンチ脇に入れたトレンチでは、砂礫で被覆された斑尾川と直交方向の畦が検出され、その畦を追って掘り広げたところ、急斜面に小さな水田が連続する様相が確認された。

また、中央やや北より西部に入れたトレンチでは、4面調査面の70cmほどの深さに、北側トレンチで捉えられた5面水田跡を被覆する砂礫層に対比される可能性がある砂礫層が確認された。しかし、掘削したところでは砂礫層が連続して深くなる可能性があり、一旦砂礫層中で掘削を止めていたが、西側トレンチを延長したところで畦が検出され、その水田面を東側へ追って掘り下げたところ、急速に落ち込んで当初トレンチを入れた場所が斑尾川の河道跡内にあたることが判明した。この2本のトレンチで斑尾川が大きく西側へ流れ込む河道跡の右岸に沿ってきわめて小さな水田が並んでいることが捉えられた。

さらに、10区南端にトレンチを入れたところ、西端は深く落ち込んでいるが、中央付近で急速に立ちあがって浅くなるのが判明し、斑尾川の河道跡の東岸が捉えられた。

5面の斑尾川河道跡は幅約16m前後で10区北東部から入り、10区中央西寄りで大きく南東にカーブして調査区を抜ける。水田跡はその河道跡の右岸の肩付近に棚田状の小水田が並ぶ様相が捉えられた。河

道跡内は砂礫層で埋積されているが、埋積する砂礫層は河道跡周囲に広がらず、岸際から5～10mほどしか分布しない。そのため、岸上では堆積土層の被覆も薄く、5面水田跡が確認されたのは河道跡岸際のみで、上層水田跡耕作で削平された岸上では5面水田跡が遺存していない。河道跡は底面まで掘り下げなかったが、少なくとも水田面のある高差より2m以上落ち込むことは確認した。

水田耕作土層は基本的に粘土質土層で、河道跡内と周辺のみが砂礫層で埋まっている。砂礫中には非常に大きな礫も含まれ、かなり流速のある斑尾川の洪水で埋積したことが捉えられた。この砂礫が河道跡内に埋積したことにより、河道跡が移動したと捉えられる。

水田跡は斑尾川旧河道の岸際しか調査し得なかったが、岸際に極めて小さな水田跡が斜面に沿って棚田状に並んで検出された。ほぼ等高線方向に細長い区画をつくり、そのなかを高低差に合わせて細かく区切った長方形の水田跡をつくっている。岸上上方は水田面が遺存せず、小水田が全域に広がるかどうかは断定できないが、北端で検出された水田区画は比較的大きく、平坦な場所ではやや広い水田跡となると思われる。また、4面水田跡の南東部の河道跡脇の様相を見る限り、河道岸周辺のみ小区画水田跡を作った可能性が高いと思われる。水田の配水は用水ではなく、水口がいくつか確認されたことから、隣接する水田に水を落とすように水口を介した配水を行い、最終的には斑尾川の旧河道へ落としている。

水田面を覆う砂礫堆積にみられるように流速の早い斑尾川の洪水で埋没したもので、その洪水時の流水で水田面が削られており、水田面の様相はあまり詳細には捉えられなかった。しかし、岸上方の流速の違いと思われる砂質土が堆積した地点では水田面で足跡状の窪みが検出された。

水田跡の時期を示す遺物は採取されずに時期の詳細は捉えられなかった。しかし、この調査面が確認しえた氾濫原内の最も古い水田跡であり、耕作土下はあまり連続耕作の耕作土層が認められずに砂礫層となることから、氾濫原内での水田造成開始からあまり時間を隔てていないと思われる。川久保1区水田跡と対比すると、川久保1区10面水田跡に対比しうる可能性が捉えられる。川久保1区10面水田跡では帯状の低地のみを水田とし、千田側の川久保1区南西部は畑となり、その下層に竪穴建物跡が検出された。この場所に竪穴建物跡が存在したことは、やはり斑尾川が大きく西側へ迂回していたことも関連すると思われる。川久保1区10面に対比しうるならば、その年代は12世紀末～13世紀前半の所産となる。また、川久保1区10面遺構は、耕作地の継続的な維持を特徴とする川久保遺跡の中世の初源的な景観を表していると捉えられたが、この時期には斑尾川の氾濫原内も耕地化されたことが窺える。

第3節 10区南のトレンチ調査

10区南トレンチ 図版332・333

10区南は10区の面的調査で確認された耕作遺構の広がりを確認するために設定した。氾濫原内の河床面の砂礫層まで掘削し、その深度は現地表面から深さ約5mに及ぶ。土層は途中で斑尾川に大きく浸食され、その下層はほぼ水平に堆積する洪水土層と畑跡が連続し、浸食された以後は地形に沿った畑跡が連続する。基盤の砂礫層より上層は畑跡を中心とする耕作土層と洪水土層が連続して認められ、これも河道跡の移動以後から耕作地に利用された可能性が窺えた。最下層に水田跡が残存する可能性があるが、ほぼ畑跡として利用されている。

第8章 総括

千田遺跡発掘調査の最大の成果は、8区において、竪穴住居跡 50 軒を超える縄文時代中期の大規模な環状集落の内容を明らかにしたことであろう。期中中葉から後葉、勝坂式古段階から加曾利 E Ⅲ 式にかけて、外径約 90m の環状集落が形成され、多数の土坑が分布する中央部は墓域と推定される。中期後葉期には集落が隆盛期を迎えた。竪穴住居跡にはベッド状遺構やコの字形炉など、新潟県に多い内部施設を備えたものが多い。中期末葉になると住居跡が減少するとともに配石遺構が築造され、生活拠点は千曲川の上流側 1～7 区へ移動する。

期中中葉期の土器は火焰型・王冠型土器を含む越後系が主体を占め、群馬県から長野県東信地方を中心に分布する新巻類型・焼町土器、南関東から長野県中南信地方に分布する勝坂式、南東北の大木 7a・8b 式、浅鉢の主体を占める北陸系土器が見られる。後葉期には柵倉式土器が立体装飾豊かな中・小形土器、在地的な平縁の庄痕隆帯文土器が大形土器として両者がセットになる。北信には稀な釣手土器が複数個体出土し、分布最北端の例となる。

広域な地域の土器が顔をそろえる土器組成には、長野県の土器型式として知られていたものが非常に少なく、「信州系土器」を異系統土器として扱うべきか戸惑うほどであった。調査当初、本遺跡は新潟県の縄文人が作ったコロニー、あるいは越後系土器分布域が北信北半に及んでいたものかと考えた。住居形態、貯形態も初見であり、一層その感を強く抱いた。しかし整理段階に専門家の指導を受け、資料調査を進めるうちに、中葉期は本遺跡周辺地域が中越・上越地方と一体となった土器分布圏を形成していること、後葉期には新潟県より柵倉式土器のパラエティが豊富で、遺跡の中で自律的に変化を遂げていることが明らかとなってきた。むしろ柵倉式は長野県北部に分布の中核があり、新潟県側へ進出し、標式遺跡の長岡市柵倉遺跡あたりは分布の北限に近いことが実態であるらしい。長野県中南信地方を中心に分布する唐草文系土器は、千田遺跡周辺に分布の中心がある、綾杉文土器の要素を取り入れて変化を遂げた可能性が高くなってきた。

中期末末に生活拠点が上流側に移動した後、千曲川に下る斜面に大規模な廃棄場が残された。こうした性格の遺跡調査事例は長野県では稀である。遺物量は多数の住居跡を検出した 8 区を上回り、県内では例のない大木 10 式土器や貝輪形土製品が含まれていた。堆積中に焼き火行為や焼獣骨を残す儀礼行為も行われたと推定された。石器には大量の台石、大形のチャート石核・剥片、中期遺跡には桁はずれな数の石鏃が含まれ、8 区出土の石皿未製品、これまで報告された例がない多数の敲打礫の存在とともに、大河川に面する集落で営まれた生産活動、モノづくりと交流の拠点という一面を物語る。このような遺跡の性格が広域に及ぶ多系統の土器が集まり、全国的にも相当上位に位置する数を誇る土偶を作った集落の背景にあろう。

8 区出土の石器は 3,300 点を数え、石鏃、打製石斧、磨石類などが多数を占める。蛇紋岩類の産地に遠い遺跡ながら磨製石斧の多さも注目される。土製品、石製品には三角壙形土・石製品、耳飾、垂飾、簪形土製品、土製円板、ミニチュア土器、土偶などがある。長野県では初見・希少・最多などの資料は枚挙にいとまないが、多岐にわたる遺構・遺物が物語る成果を検討することは、報告書刊行後の課題として残す

こととなった。

縄文時代以降も、弥生・古墳・古代・中世にわたる各時代の集落が現われた。また、斑尾川付近の10区では何層もの厚い堆積物に覆われながら、調査面としては最下層の5面で「千田」と呼ぶにふさわしい小区画の水田が見られ、水田や畑が営まれ続けた。発掘に要した5か年で2度の洪水に見舞われ、千曲川の厳しい側面、自然の威力をも、遺跡の中で実感した。

発掘調査開始から報告書刊行まで、自然災害を含めてさまざまな問題に対応していただいた、国土交通省北陸地方整備局、長野県教育委員会、中野市教育委員会、旧豊田村教育委員会の皆様に感謝申し上げます。また、発掘調査に御協力いただいた中野市豊津地区の皆様、発掘作業・整理作業に従事された皆様、発掘調査から報告書刊行に至るまで貴重な御教示をいただいた皆様に御礼申し上げます。本書が千田遺跡を記録保存する事業の成果品として、資料の公開・活用のよすがとなることを祈って擲筆します。

参考・引用文献

A 論文、資料集等

- 秋田かな子 2008 「加曾利B式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 安部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』未完成考古学叢書6
- 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究集録』5 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛他 1990 「称名寺式土器に関する交流研究会の記録」『調査研究集録』7 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』9 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1998 「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』9
- 石坂圭介 2008 「三十稲場式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 石坂 茂 2004 「関東・中部地方の環状列石」『研究紀要』22(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 磯崎正彦 1968 「十勝内遺跡」『岩木山』
- 今福利恵 1999 「中期後半(曾利式土器)」『山梨県史』資料編2
- 今福利恵 2005 「曾利式土器編年再考—甲府盆地域を中心に—」『山梨県考古学協会誌』15
- 今福利恵 2008 「勝坂式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし—陶色の須恵器—』
- 小矢部市教育委員会 2006 『桜町遺跡縄文土器検討会資料—縄文時代中期末・後期初頭について—』
- 加藤三千雄 2008 「新保・新崎式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 狩野 睦 2008 「串田新式・大杉谷式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 上條信彦 2007 「敲打製石製品の製作技術—石皿の素材採集から製作までを中心に—」『考古学研究』54—1
- 神村 透 2003 「下伊那系(タイプ)土器は唐草文系土器ではない」『長野県考古学会誌』101
- 桐原 健 1965 「住居址内における火使用の問題」『井戸尻』
- 桐原 健 1981 「縄文時代における千曲川漁撈について」『高井』54
- 桐原 健 1984 「縄文の石鈎」『中部高地の考古学』Ⅲ
- 藤原功一 1999 「曾利式土器の編年私案」『山梨県考古学論集』Ⅳ
- 藤原功一・今福利恵 2001 「中部・東海・北陸地方における集落変遷の両期と研究の現状」『第1回研究会縄文時代集落研究の現段階』
- 藤原功一 2008 「曾利式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 藤原功一 2010 「縄文中期後半の竪穴住居の変遷」『山梨県考古学協会誌』19
- 国立歴史民俗博物館研究報告 1992 「土偶とその情報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- 小島俊彰 1988 「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 小島俊彰 2008 「上山田・天神山式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 小林達雄 1988 「火炎土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 小林康男 1980 「三角埴形土製品考」『長野県考古学会誌』37
- 小林康男 1984 「松本平における縄文時代中期後半の方位に関する一考察」『中信考古』創刊号
- 新谷和孝 1993 「縄文中期後半から後期に見られる釣手付深鉢について」『長野県考古学会誌』68
- 間根慎二 2008 「諸磯式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 笹澤 浩 1970 「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』Ⅲ・22—11
- 笹澤 浩 1982 「長野吉田高校グラウンド遺跡」『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』
- 笹澤 浩他 2001 「上浅野遺跡、明神前遺跡、大久保遺跡」『豊野町誌1 豊野町の資料(1)考古資料』豊野町
- 佐原 真 1959 「弥生式土器製作技術に関する二、三の考察 柳描文と回転台をめぐって」『私たちの考古学』
- 澁谷昌彦・鶴飼幸雄 2001 「長野県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究会縄文時代集落研究の現段階』
- 澁谷昌彦 2008 「塩原式・木島式・中越式」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 清水克彦 2012 「富山県における中期中葉後半の様相」『第26回縄文セミナー—縄文中期中葉土器研究の現状と課題』
- 下平博行 2008 「神ノ木式・有尾式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 鈴木克彦 2008 「宝ヶ塚式・手稲式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帯の系統」『土曜考古』16

- 鈴木徳雄 1999 「称名寺式間沢類型の後裔」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 2012 「堀之内式土器研究の諸問題—堀之内式の概観と周辺諸型式—」『第25回縄文セミナー—縄文後期土器研究の現状と課題』
- 関 孝一 1998 「縄文クルミ考」『長野県立歴史館研究紀要』4
- 高橋 保 1992 「縄文中期後半の沈線を多用する土器群」『新潟考古学談話会会報』10
- 谷藤保彦 2011 「関東内陸部における縄文時代中期末・後期初頭の「土製貝輪形陶輪」『栢楨林の考古学』
- 千野 浩 1989 「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」『信濃』Ⅲ・41-4
- 津南町教育委員会 2006 『火焔土器の時代—その文化を探る—』津南学叢書第4冊
- 津南町教育委員会 2012 『三十稲場式土器—その文化を探る—』津南学叢書第10冊
- 寺内隆夫 1984 「後沖式土器への系譜—千曲川流域における中期前葉（初頭）、斜行沈線文系の土器について」『長野県の考古学』Ⅱ
- 寺内隆夫 1991 「長野県上水内郡三水村上赤塚遺跡出土の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌』61・62
- 寺内隆夫 2003 「山屋敷1遺跡出土土器に見る中部高地地域・関東地方との交流関係」『上越市史資料編2考古』
- 寺内隆夫 2004a 「千曲川流域の縄文時代中期中葉の土器「焼町土器」および北関東地域との関係を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
- 寺内隆夫 2004b 「千曲川流域における火焔型土器、および曲隆線文の系譜」『火炎土器の研究』同成社
- 寺崎裕助他 2003 「第2章縄文時代」『上越市史資料編2考古』
- 寺崎裕助 2005 「新潟県の串田新式土器・古串田新式土器」『新潟考古学談話会会報』
- 寺崎裕助 2012 「新潟県における中期中葉後半の様相—桶倉式を中心に—」『第26回縄文セミナー—縄文中期土器研究の現状と課題』
- 寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」『99シンポジウム長野県の弥生土器編年 発表要旨』長野県考古学会
- 「土偶とその情報」研究会 1996 「中部高地をとりまく中期の土偶 シンポジウム発表要旨」
- 長崎元廣・宮下健司 1984 「長野県における縄文集落の変遷」『日本考古学協会昭和59年度大会資料』
- 長野県史刊行会 1988 「長野県史考古資料編全1巻(4)遺構・遺物」
- 長野県史刊行会 1989 「長野県史通史編第1巻原始・古代」
- 中村 大他 2012 「第2章 数字からみる土偶」『土偶・コスモス』MIHO MUSEUM
- 中村耕作 2010 「釣手土器の展開過程」『史泉』3
- 中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』
- 中村孝三郎 1978 「越後の石器」
- 中村山克 2011 「旧石器時代における石斧の石材鑑定」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』19
- 新潟県 1983 「新潟県史資料編Ⅰ 原始・古代1考古篇」
- 新潟県立歴史博物館 2009 「火焔土器の国 新潟」
- 新潟県立歴史博物館 2011 「にいがたの土偶 発掘された新潟の歴史2011」
- 新潟県考古学会 1999 「新潟県の考古学」
- 新潟県考古学会 2003 「新潟県の縄文集落—中期前葉から中葉を中心に—」
- 貫田 明 2008 「塚田式・中道式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 細田 勝 2008 「加曾利E式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 松井 水・水沢教子他 2011 「遺構土壌の水洗選別法による原代遺跡群の縄文中期集落における生業活動の再検討」『長野県立歴史館研究紀要』17
- 三上敏也 2002 「所謂「唐草文土器」の構造・変遷と型式名に関する考察」『長野県考古学会誌』98
- 水沢教子 1996 「大木8b式の変容（上）—東北、越後そして信濃へ—」『長野県の考古学』
- 水沢教子 2002 「千曲川水系における柄鏡形敷石住居の成立」『長野県の考古学』Ⅱ
- 宮城孝之 1982 「縄文時代中期の釣手土器」『中部高地の考古学Ⅱ』
- 宮下健司 1992 「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- 宮本長二郎 1985 「縄文時代の竪穴—長野県—」『信濃』Ⅲ・37-5 (1996『日本原始古代の住居建築』所収)
- 百瀬忠幸 2003 「中信地域における唐草文系土器の成立と展開 殿村遺跡再考1」『異貌』21
- 百瀬忠幸 2004 「鱗状短沈線文土器に関する覚書」『異貌』22

- 百瀬長秀 2012 「中部高地後期後半の土器の様相」『第 25 回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』
- 守矢昌文 2006 「八ヶ岳西南麓・霧ヶ峰南麓における縄文時代の落し穴について」『新尖石縄文考古館開館 5 周年記念考古論文集』
- 山口逸弘 2008 「新巻・埴町系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 山梨県考古学協会 2002 「縄文土器製作関連遺構・遺物」『土器から探る縄文社会』
- 吉川金利 2003 「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』102
- 吉川金利 2005 「下伊那唐草文土器～縄文中期後葉伊那谷南部の地域性」飯田市上郷考古博物館
- 吉川金利 2008 「唐草文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 綿田弘実 1988 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 綿田弘実 1989 「長野県東北信地方の中期末葉縄文土器群」『第 3 回縄文セミナー縄文中期の諸問題』
- 綿田弘実 1990 「長野県の縄文後期前葉の土器」『第 4 回縄文セミナー縄文後期の諸問題』
- 綿田弘実 1997 「長野県伊那市手良出土の靴形土器」『長野県立歴史館研究紀要』3
- 綿田弘実 1999a 「長野県富士見町札沢遺跡出土の釣手土器」『長野県立歴史館研究紀要』5
- 綿田弘実 1999b 「千曲川水系における縄文中期末葉土器群」『縄文土器論集 縄文セミナーの会』
- 綿田弘実 2000a・b 「長野県の縄文早期末葉土器群」『第 13 回縄文セミナー早期後半の再検討』・『同記録集』
- 綿田弘実 2002a 「縄文中期の釣手土器—長野県の事例—」『土器からさぐる縄文社会』
- 綿田弘実 2002b・c 「長野県の縄文後期前葉土器群Ⅱ」『第 15 回縄文セミナー後期前半の再検討』・『同記録集』
- 綿田弘実 2003a・b 「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第 16 回縄文セミナー中期後半の再検討』・『同記録集』
- 綿田弘実 2005 「2 縄文時代」『信州高山村誌歴史編』
- 綿田弘実 2007a・b 「中部高地における縄文中期末から後期初頭の在地系土器について」『第 20 回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』・『同記録集』
- 綿田弘実 2008 「郷土式・圧痕隆帯文・大木系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 綿田弘実 2009a・b 「中部高地における縄文中期初頭土器群」『第 22 回縄文セミナー中期初頭の再検討』・『同記録集』
- 綿田弘実 2010a 「中部地方の様相—長野県千田遺跡を中心に—」『フォーラム火焔街道往来 2010』
- 綿田弘実 2010b 「中部山岳洞窟遺跡の縄文土器」『縄文時代』21
- 綿田弘実 2011a 「郷土式土器の変遷と分布」『佐久考古通信』107
- 綿田弘実 2011b 「北信濃縄文中期後半の圧痕隆帯文土器」『土曜考古』34
- 綿田弘実 2012a 「形と文様は交流を語る—縄文土器—」『平出博物館ノート』26
- 綿田弘実 2012b 「北陸・中央高地の生活・生業施設の変遷 中央高地（長野県・山梨県）」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅲ 生活・生業』雄山閣
- 綿田弘実 2012c 「縄文中期の釣手土器—長野県を舞台に—」『異形の縄文土器』十日町市博物館
- 綿田弘実 2012d 「北信地域縄文中期遺跡の推移と特徴」『長野県考古学会誌』143・144 合併号
- 綿田弘実 2013 「長野県北東部における縄文中期後葉土器群」『第 26 回縄文セミナー縄文中期末葉土器研究の現状と課題』

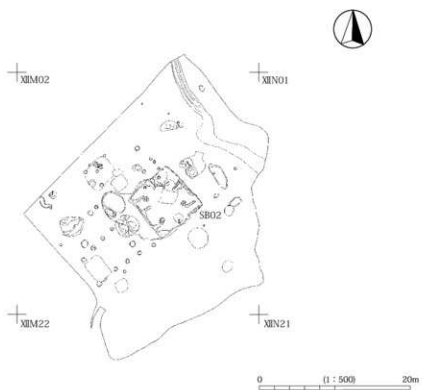
B 発掘調査報告書

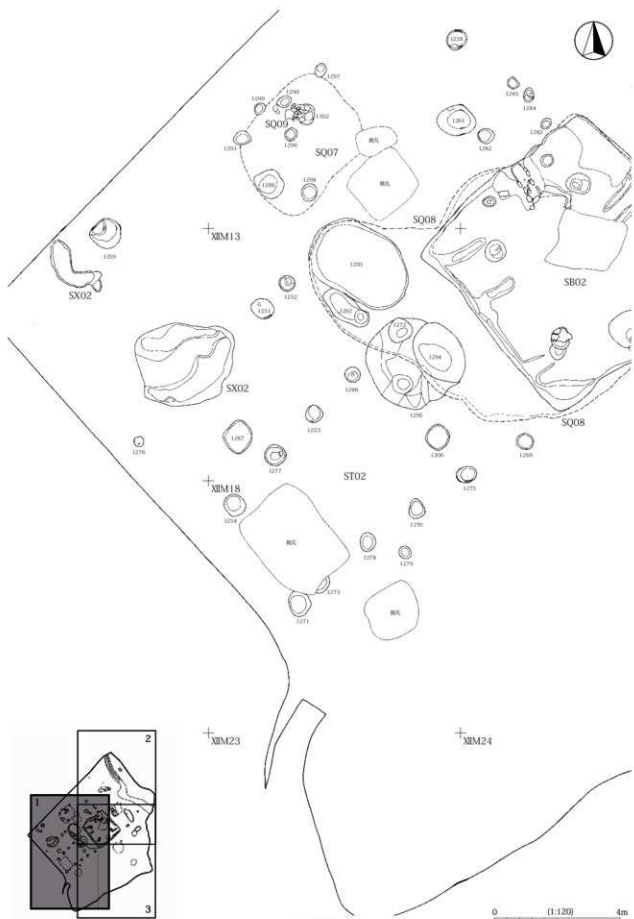
(1) 長野県内

- 飯田市教育委員会 2011 『中村中平遺跡（遺物編）』
- 岡谷市教育委員会 1972 『梨久保遺跡 長野県岡谷市梨久保遺跡第三・四次発掘調査報告』
- 茅野市教育委員会 1990 『細畑遺跡』
- 小川村教育委員会 1991 『夜道跡—北信濃中央山地における縄文中期集落址の研究—』
- 小諸市教育委員会 1994 『石神遺跡群 石神』
- 佐久市教育委員会 1995 『中条峯遺跡・寄山遺跡群』
- 須坂市教育委員会 1982 『橋場遺跡』
- 高山村教育委員会 1983 『八幡添遺跡』
- 戸倉町教育委員会 1990 『円光房遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11—明科町内—北村遺跡』

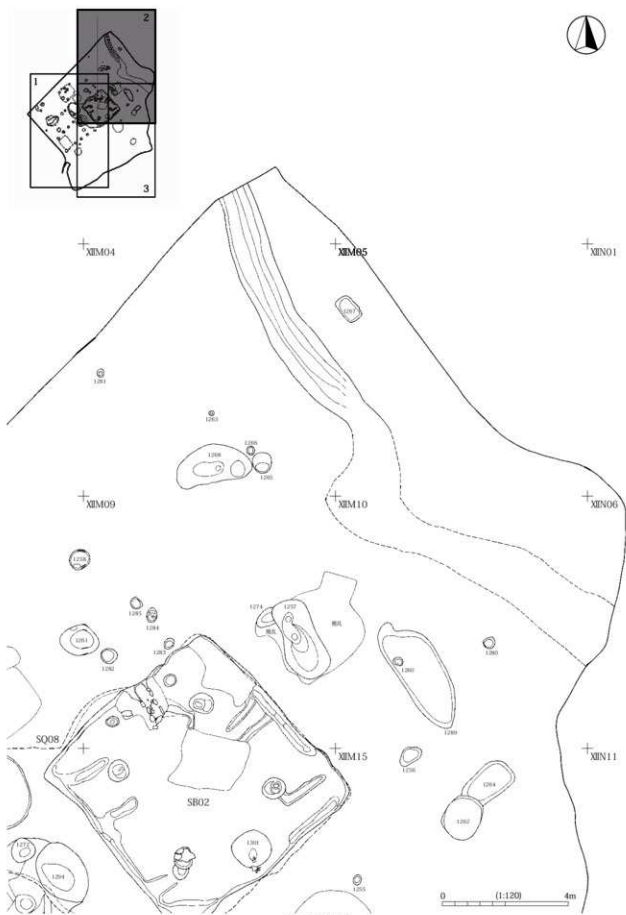
- 長野県埋蔵文化財センター 1994a 『栗林遺跡』『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書—長野県中野市内—』
- 長野県埋蔵文化財センター 1994b 『赤い土器のクニ』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998a 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5—長野市内その 3—松原遺跡 弥生・総論 6 弥生後期・古墳前期』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998b 『風呂屋遺跡』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 14—豊田村内—』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 12—長野市内その 10—榎田遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a 『三田原遺跡群、岩下遺跡、郷土遺跡』『上信越道埋文 19—小諸市内 3—』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 24—更埴市内その 3—更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）—縄文時代編—』
- 長野県埋蔵文化財センター 2002 『千田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報 19 2002』
- 長野県埋蔵文化財センター 2003 『千田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報 20 2003』
- 長野県埋蔵文化財センター 2005a 『担い手育成基盤整備事業（芹ヶ沢地区）国道 292 号線バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 聖石遺跡・長峯遺跡（別田沢遺跡）』
- 長野県埋蔵文化財センター 2005b 『千田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報 22 2005』
- 長野県埋蔵文化財センター 2006 『千田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報 23 2006』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009 『千田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報 26 2009』
- 長野県埋蔵文化財センター 2010 『千田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報 27 2010』
- 長野県埋蔵文化財センター 2011 『千田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報 28 2011』
- 長野県埋蔵文化財センター 2012a 『中野市柳沢遺跡 千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—中野市内その 3—』
- 長野県埋蔵文化財センター 2012b 『千田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報 28 2011 年度』
- 長野県埋蔵文化財センター 2013 『中野市川久保・宮沖遺跡 千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—中野市内その 2—』
- 長野市教育委員会 1987 『古田高校グラウンド遺跡』
- 長野市教育委員会 2004 『夏川扇状地遺跡群 檀田遺跡（2）』
- 丸子町教育委員会 1994 『岡ノ上遺跡Ⅱ』
- 御代田町教育委員会 1997a 『滝沢遺跡』
- 御代田町教育委員会 1997b 『塩野西遺跡群川原田遺跡—縄文編』（2）新潟県他
- 柏崎市教育委員会 2001 『十三本塚北』
- 下田村教育委員会 1990 『長野遺跡発掘調査報告書』
- 津南町教育委員会 1977 『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』
- 津南町教育委員会 2005 『道尻手遺跡』
- 津南町教育委員会 2011 『堂平遺跡』
- 十日町市教育委員会 1998 『笹山遺跡発掘調査報告書』
- 十日町市教育委員会 2007 『福上遺跡発掘調査報告書』
- 十日町市教育委員会 2011 『野首遺跡発掘調査報告書Ⅰ〈遺構編〉』
- 新潟県教育委員会 1992 『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』
- 新潟県教育委員会 1996 『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡Ⅱ』
- 新潟県教育委員会 2004 『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅻ 前原遺跡・丸山遺跡』
- 新潟県教育委員会 2005 『上信越自動車道関係発掘調査報告書ⅧⅧ 蛇谷遺跡・炭山遺跡』
- 新潟県教育委員会 2012 『一般国道 17 号湯沢交差点改良工事関係発掘調査報告書 川久保遺跡』
- 栃尾市教育委員会 1961 『栃倉』
- 富山県教育委員会 1991 『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編 6—境 A 遺跡土器編』
- 長岡市教育委員会 1998 『中道遺跡』

遺構・遺物図版



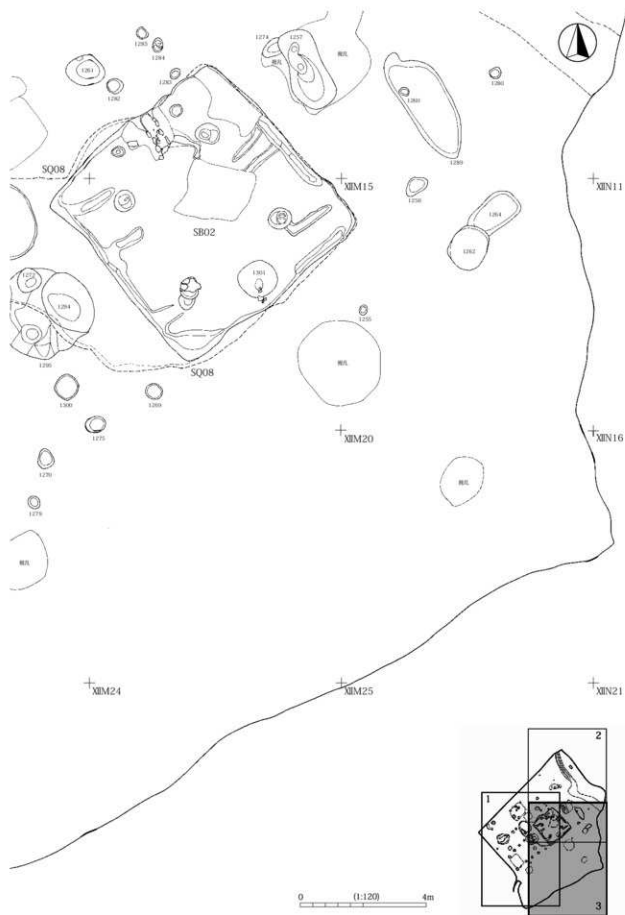


6区剖付图1



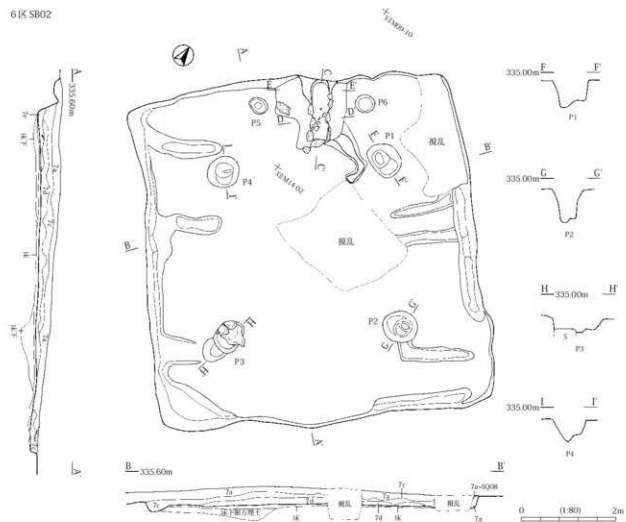
6区剖付图2

图版 4 6区剖付图3



6区剖付图3

6区SB02



SB02

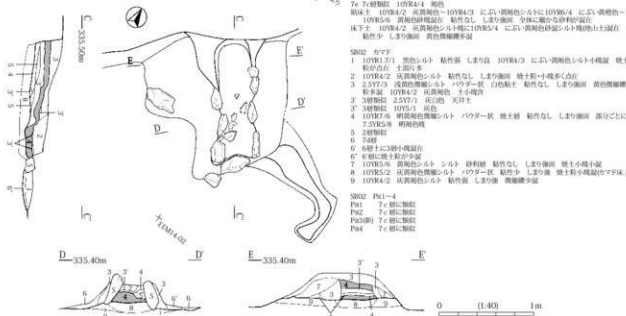
- 7a 10YR3.7/1 栗色シルト 粘り弱 黄色腐植層付 10YR5/4 に近い黄褐色～赤土層 古墳中・後遺跡層上 50cm 古墳中 腐植層
- 7b 10YR4/2 灰黄褐色～灰 土に多い黄褐色シルト φ1~5cm 砂 粘性なし 少量腐植層の黄褐色シルト残す 縄文前期遺跡層上
- 7c 7c層付 黄褐色腐植層付砂土層に多量
- 7d 7d層付
- 7e 7e層付 10YR6/4 褐色
- 7f 7f層付 10YR4/2 黄褐色～10YR4/3 に近い黄褐色シルトに10YR6/4 に近い黄褐色～10YR5/6 黄褐色砂質土 粘性なし 少量腐植 全体に腐植層付砂土層
- 7g 7g層付 10YR4/2 灰黄褐色シルト層に10YR5/4 に近い黄褐色シルト層の土層に粘り弱 少量腐植 黄色腐植層多量

SB02 中層

- 1 10YR1.7/1 栗色シルト 粘性强 少量腐 10YR4/3 に近い黄褐色シルト腐植 粘土粒が点在 土層均多
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性なし 少量腐植 粘土粒～塊多(点)
- 3 2.5Y7/3 淡紫色腐植層シルト パウダー状 (粘土 粘性なし 少量腐植 黄色腐植層 粘り強 10YR4/2 灰黄褐色 土小塊)
- 3' 3'層付 2.5Y7/3 灰褐色 土小塊
- 3'' 3''層付 10Y5/3 灰色
- 4 10Y7.5/6 明黄褐色腐植シルト パウダー状 粘土粒 粘性なし 少量腐植 部分に土
- 5 2'層付
- 6 7d層
- 6' 6'層上土層付砂土層
- 6'' 6''層に粘土粒が少量
- 7 10YR5/6 黄褐色シルト シルト 砂質 粘性なし 少量腐植 粘土小塊(点)
- 8 10YR5/2 灰黄褐色腐植シルト パウダー状 粘り弱 少量腐植 粘土小塊(点)7d層上
- 9 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性强 少量腐植 腐植層多量

SB02 中層

- P1 7c層に付
- P2 7c層に付
- P3 7c層に付
- P4 7c層に付



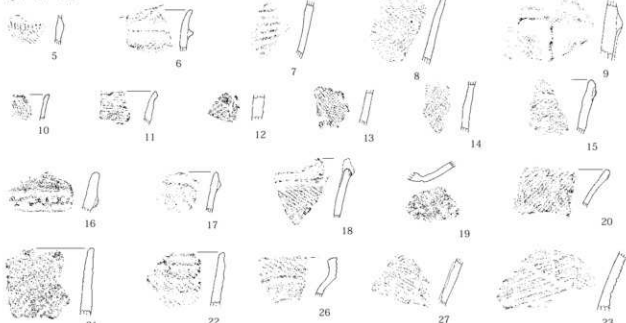
6区古墳時代整穴住居跡 (SB02)

图版 6 6区绳文土器、古墳時代土器

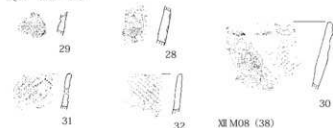
SB02 (1~4)



SQ08 (5~27)



SQ07 (28~32)



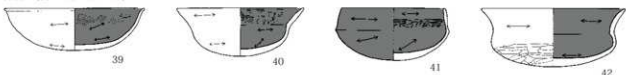
SX01 (33~36)



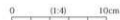
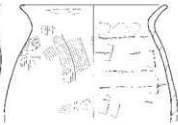
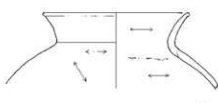
XI M08 (38)



SB02 (39~42・44~47)



SK1260 (43)



6区縄文土器、古墳時代土器



1~5·7区遗构分布图 1



1~5·7区遗构分布图2



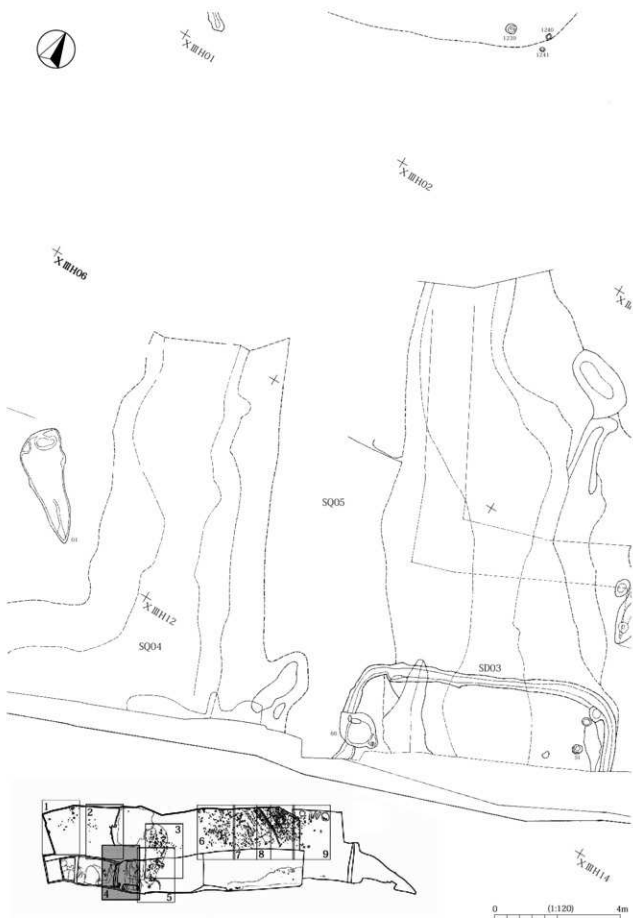
1~5·7区剖付图1



1~5·7区割付图2



1~5·7区剖付图3

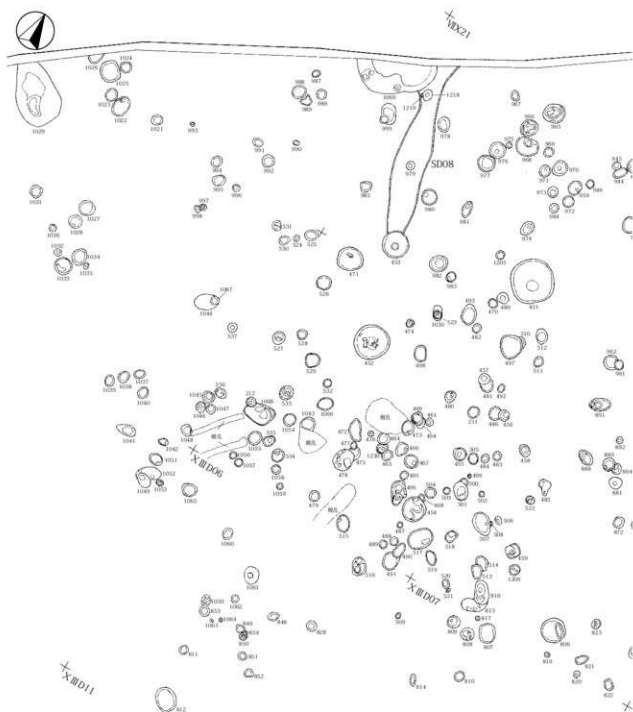


1~5·7区割付图4



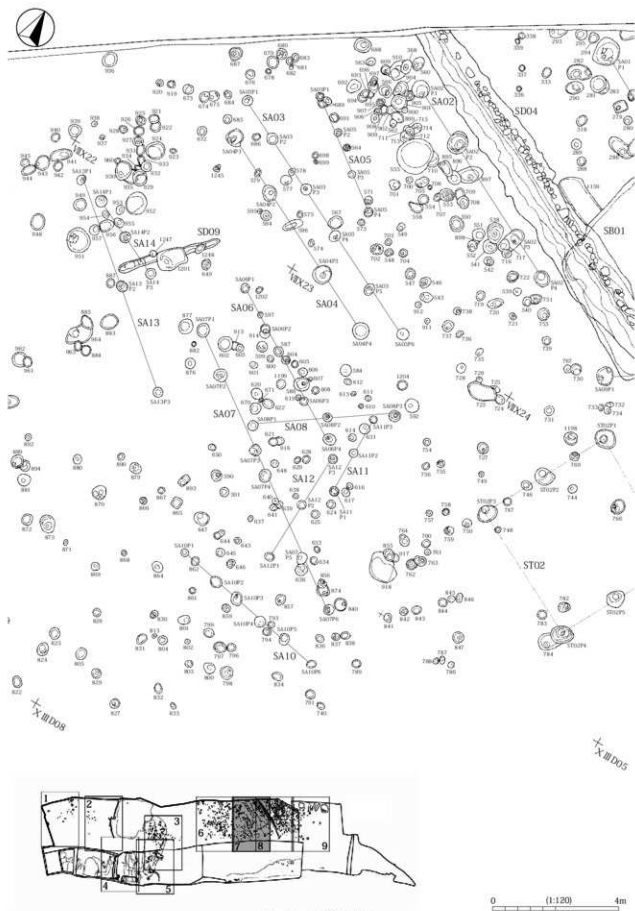
1~5·7区附图5

图版 14 1~5·7区割付图6



1~5·7区割付图6

0 (1:20) 4m



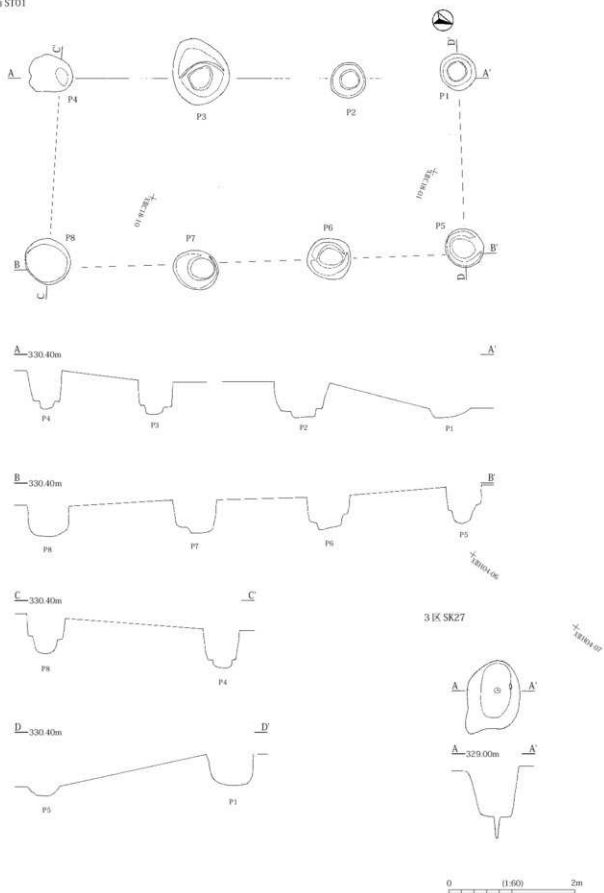
1~5·7区附图7





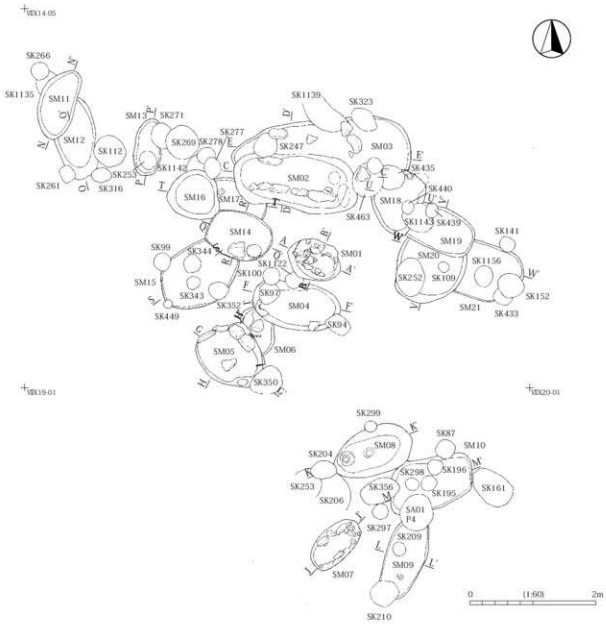
1~5·7区剖付图9

5区西ST01



1~5・7区縄文時代個別遺構図1 (掘立柱建物跡ST01、陥し穴SK27)

5区SM01～21



1～5・7区縄文時代個別遺構図2 (土坑墓群SM01～21)

図版 20 1～5・7区縄文時代遺構図3

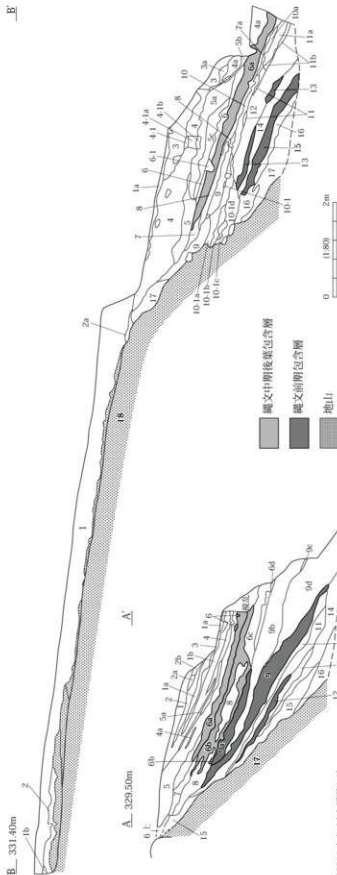


SM01-11・13-15
10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性少 しまり強 炭化物微細粒混 10YR6/4 紅褐色
粘土質土山十層地点

- SM02
1 10YR4/3 紅褐色シルト 粘性少 しまり強 10YR6/6 黄褐色シルト地多
数地点
2 10YR4/2 灰黄褐色ワグダー状シルト 粘性 しまり強 10YR5/6 黄褐色シルト
大小塊多量 10YR3/1 黒褐色シルト塊多量
3 10YR4/2 灰黄褐色ワグダー状シルト 粘性 しまり強 炭化物微細粒十層地点 黄褐
色シルト塊多 黄褐色土塊多
4 10YR3/2 黒褐色ワグダー状シルト 粘性 しまり強 黄褐色シルト小塊混 炭化
物少量
5 10YR4/4 褐色ワグダー状シルト 粘性 しまり強 黄褐色シルト塊混
6 4層に黄褐色シルト塊混
7 2層に塊混 黄褐色シルト塊少量混
8 10YR5/6 黄褐色ワグダー状シルト・10YR4/2 灰黄褐色ワグダー状シルト等混 粘
性しまり強 10YR3/1 黒褐色シルト塊混

0 1.00 2m

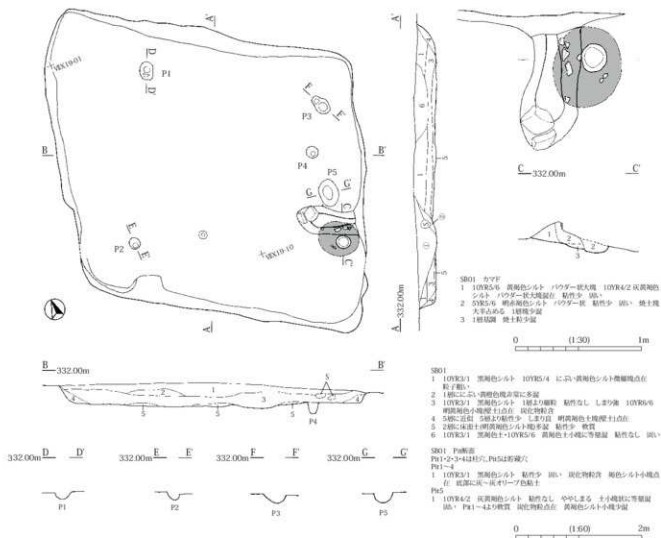
1～5・7区縄文時代個別遺構図3（土坑墓群SM01～21断面図）



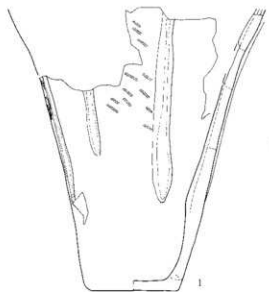
1 / 5 · 7 区縄文時代個別遺構図 4 (SQ03 土層断面図)

- 4区 SQ03 西側面北へ向断面B-B'
- 1 100K2/3 黒褐色シルト質土 土表より厚さ 遺物多量
 2 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.3m厚 黒色シルト多
 3 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 4 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 5 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 6 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 7 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 8 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 9 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 10 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 11 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 12 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 13 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 14 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 15 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 16 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 17 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 18 100K2/3 黒褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
- 1 100K4/4 褐色シルト 耕土
 2 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 3 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 4 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 5 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 6 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 7 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 8 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 9 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 10 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 11 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 12 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 13 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 14 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 15 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 16 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 17 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
 18 100K4/6 褐色シルト 3層厚 黒色シルト多
- 1 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 2 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 3 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 4 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 5 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 6 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 7 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 8 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 9 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 10 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 11 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 12 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 13 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 14 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 15 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 16 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 17 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多
 18 100K3/4 褐色シルト質土 土 0.5m厚 黒色シルト多

5区 SB01



1区
SK03 (1)



SQ01 (2)



グリッド (3～6)



2区
SQ04 (7～12)



3区
H 2 (13)



SQ01・02 (14～18)



H 2 (21～23)



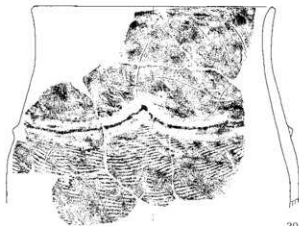
H 3 (24～28)



0 (1-4) 10cm

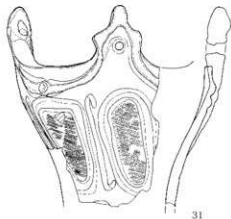
1～3区縄文土器 (土坑 SK03、遺物集中 SQ01・02・04・05 他)

SK79 (30)



30

SK80 (31)



31

SK81 (32・33)

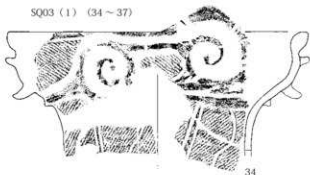


32



33

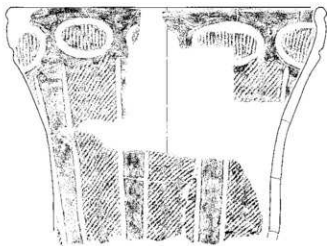
SQ03 (1) (34~37)



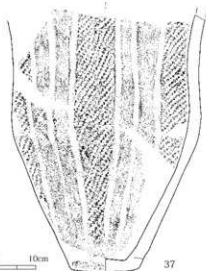
34



35



36

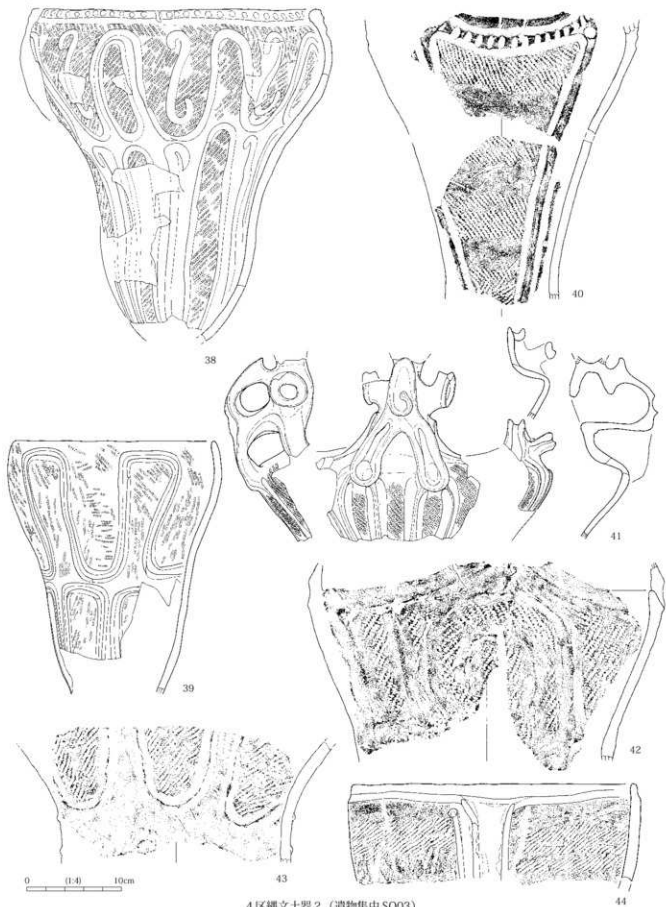


37

0 (1:4) 10cm

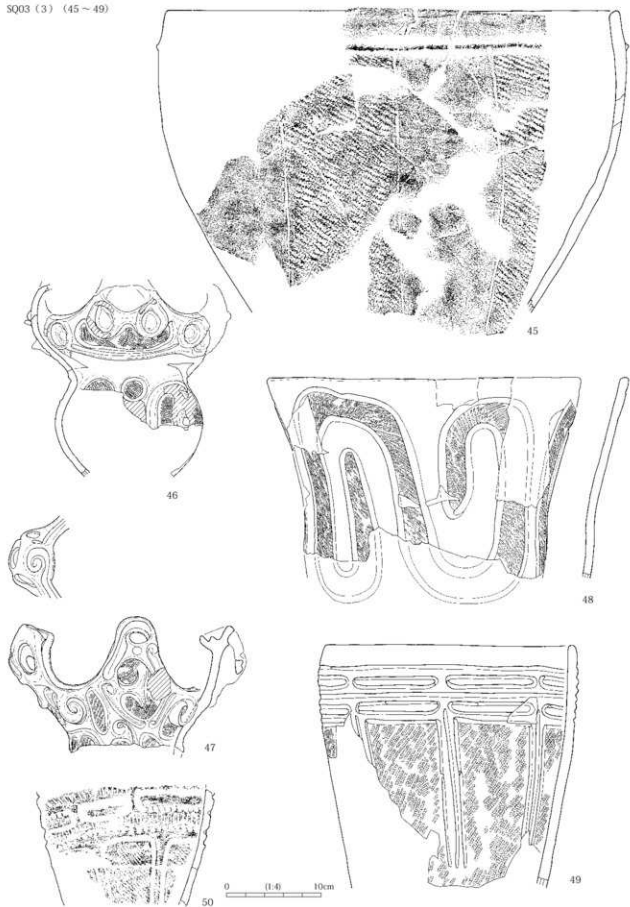
4区縄文土器1 (土坑SK79~81、遺物集中SQ03)

SQ03 (2) (38~44)



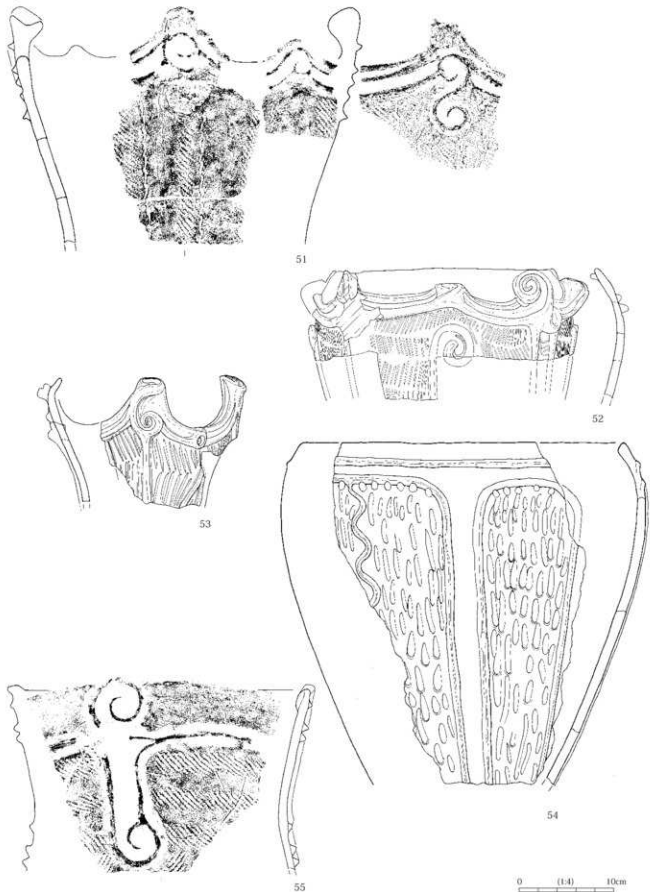
4区縄文土器 2 (遺物集中SQ03)

SQ03 (3) (45~49)



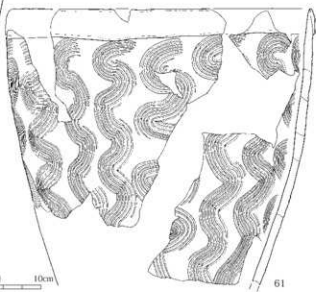
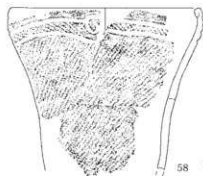
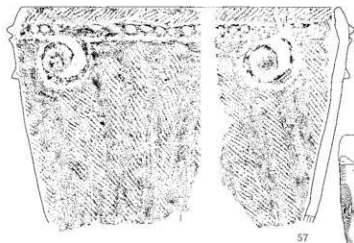
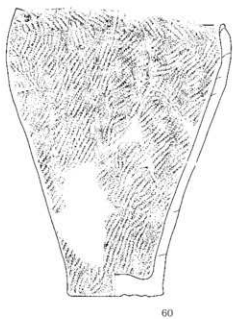
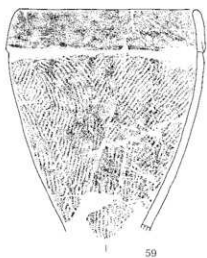
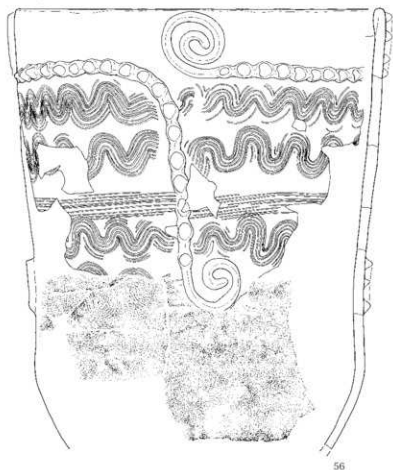
4区縄文土器 3 (遺物集中SQ03)

SQ03 (4) (51~54)



4区縄文土器4 (遺物集中SQ03)

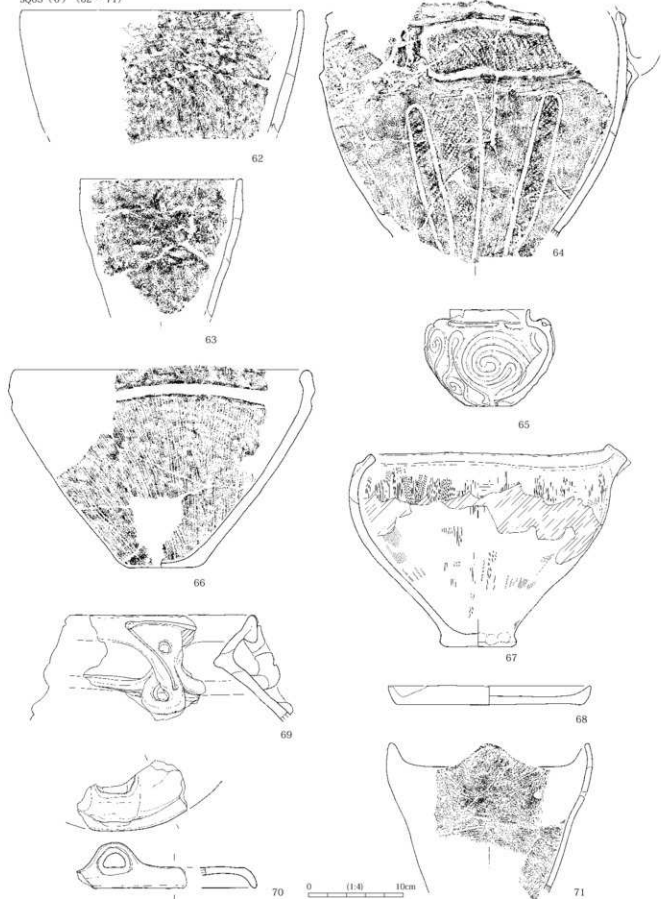
SQ03 (5) (56~61)



0 1:4 10cm

4区縄文土器 5 (遺物集中SQ03)

SQ03 (6) (62~71)



4区縄文土器6 (遺物集中SQ03)

SQ01 (72~74)

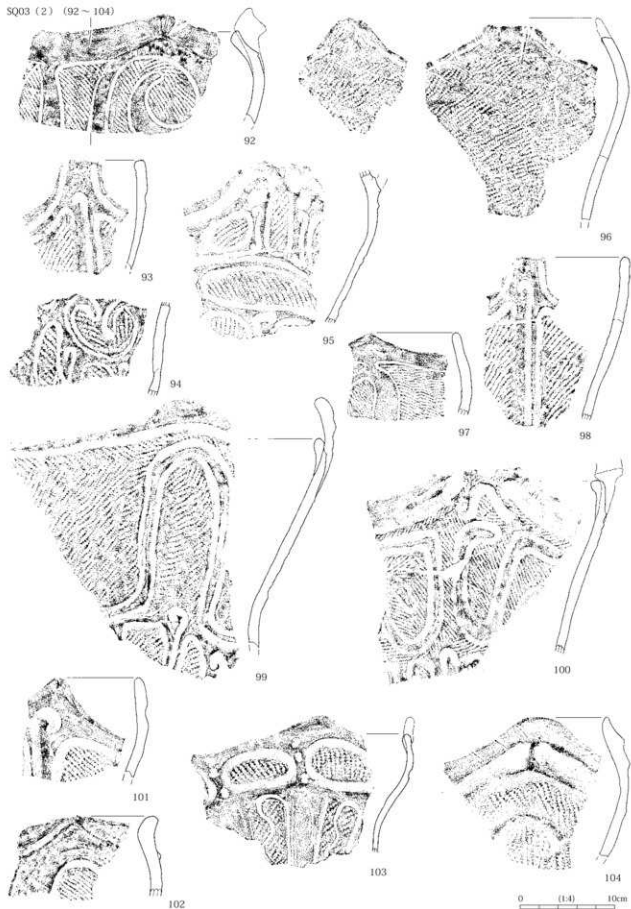


SQ03 (1) (75~91)



4区縄文土器7 (遺物集中SQ03)

SQ03 (2) (92~104)



0 (1-4) 10cm

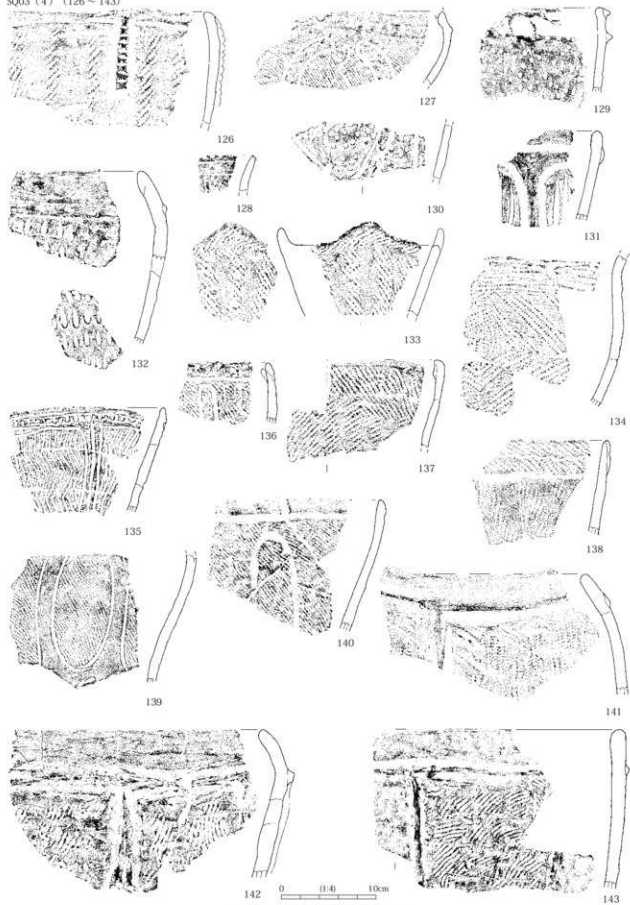
4区縄文土器 8 (遺物集中SQ03)

SQ03 (3) (105 ~ 125)



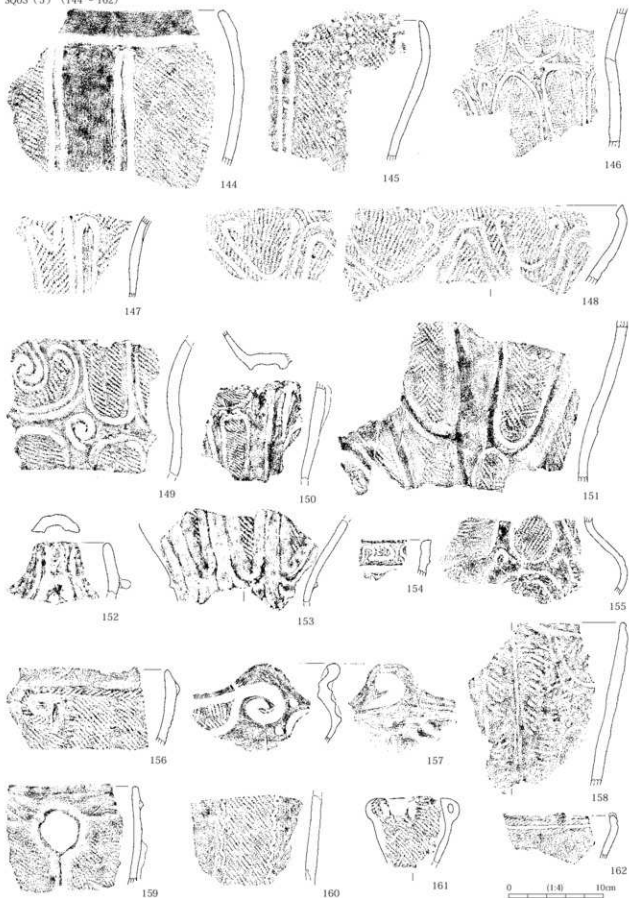
4区縄文土器9 (遺物集中SQ03)

SQ03 (4) (126~143)



4区縄文土器 10 (遺物集中SQ03)

SQ03 (5) (144~162)



4区縄文土器 11 (遺物集中SQ03)

SQ03 (6) (163~178)



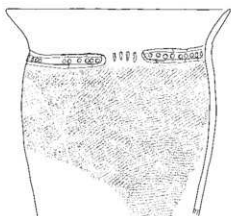
4区縄文土器 12 (遺物集中SQ03)

SQ03 (7) (179~209)



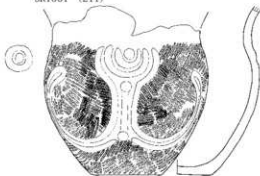
4区縄文土器 13 (遺物集中SQ03)

SK669 (210)



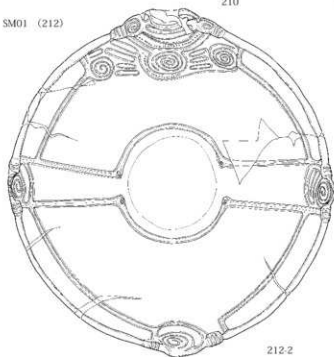
210

SK1061 (211)



211

SM01 (212)



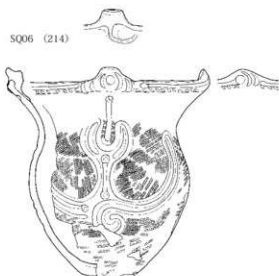
212-2

SM08 (213)

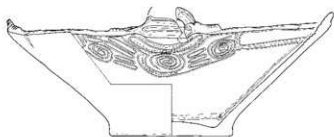


213

SQ06 (214)

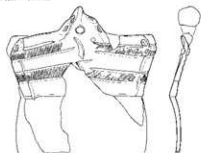


214

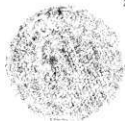


212-1

試掘 (215)



215

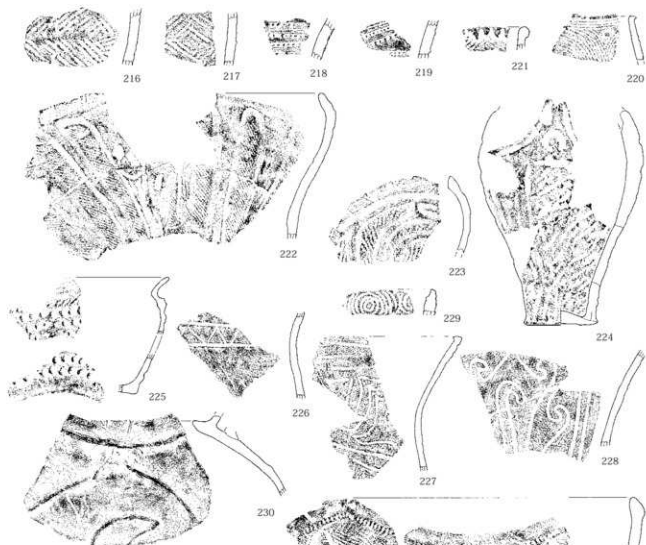


212

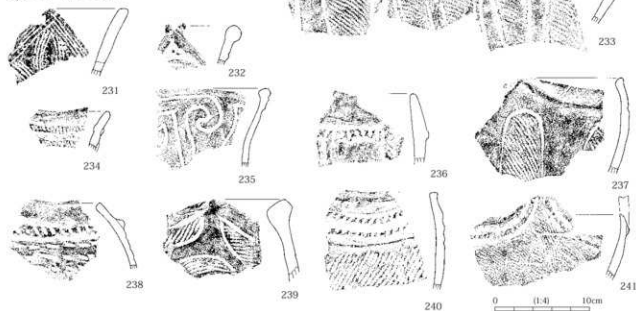


5区縄文土器 1 (土坑SK669・1061、土坑墓SM01・08、遺物集中SQ06他)

SQ01 (216~230)

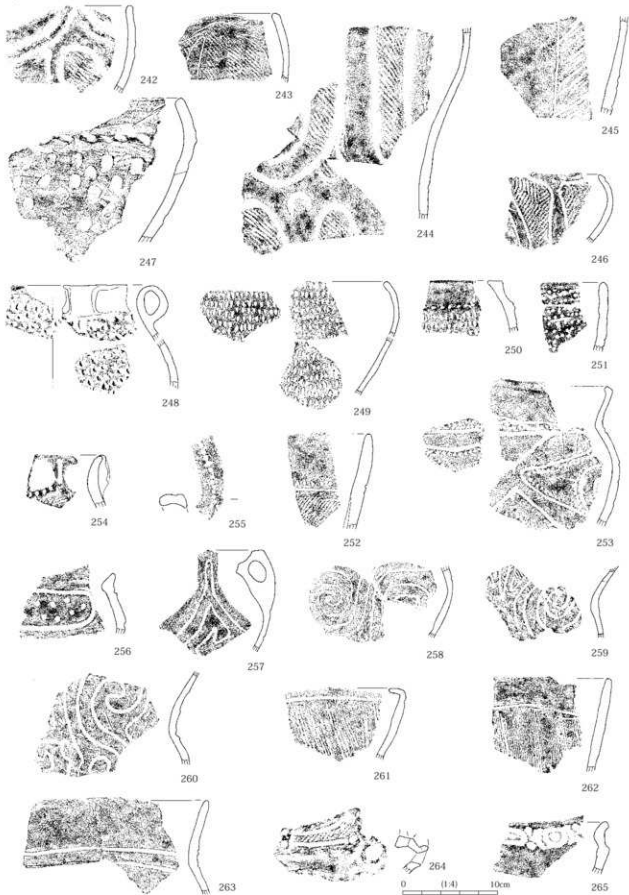


SQ06 (1) (231~241)



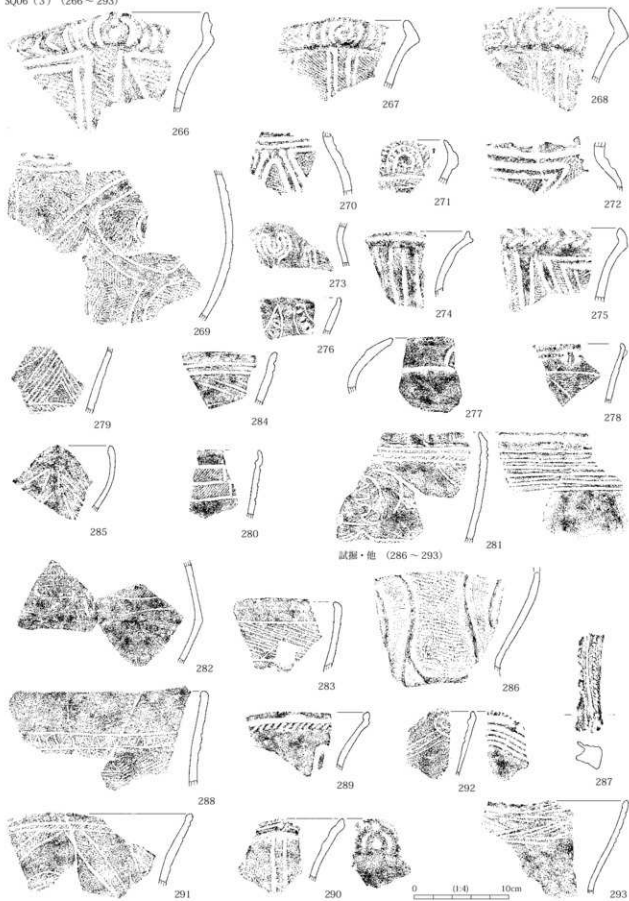
5区縄文土器 2 (遺物集中SQ01・06)

SQ06 (2) (242~265)



5区縄文土器 3 (遺物集中SQ06)

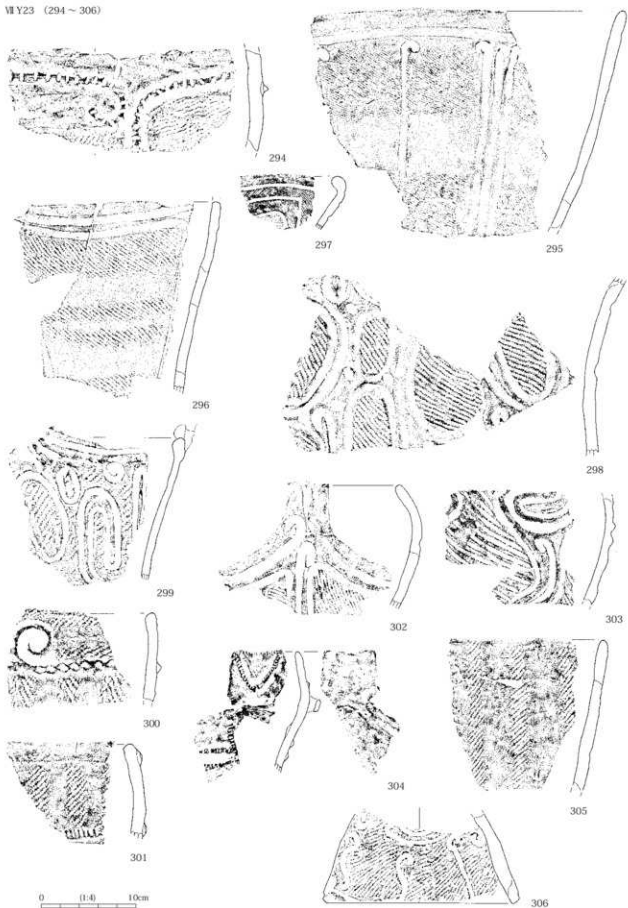
SQ06 (3) (266~293)



試掘・他 (286~293)

5区縄文土器4 (遺物集中SQ06)

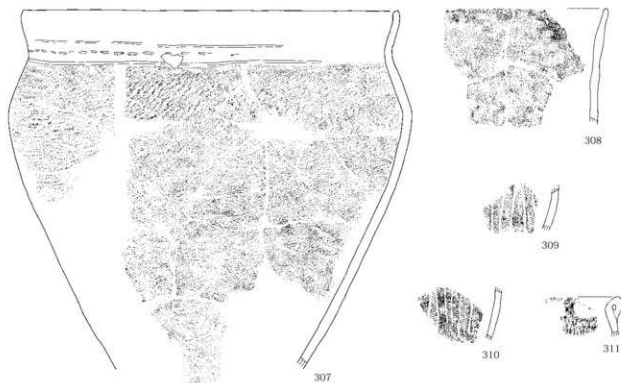
ⅦY23 (294~306)



7区縄文土器 I (ⅦY23)

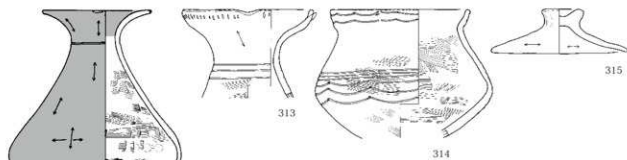
7区

SK2036 (307~311)



7区

ⅦY23-12 (312~315)

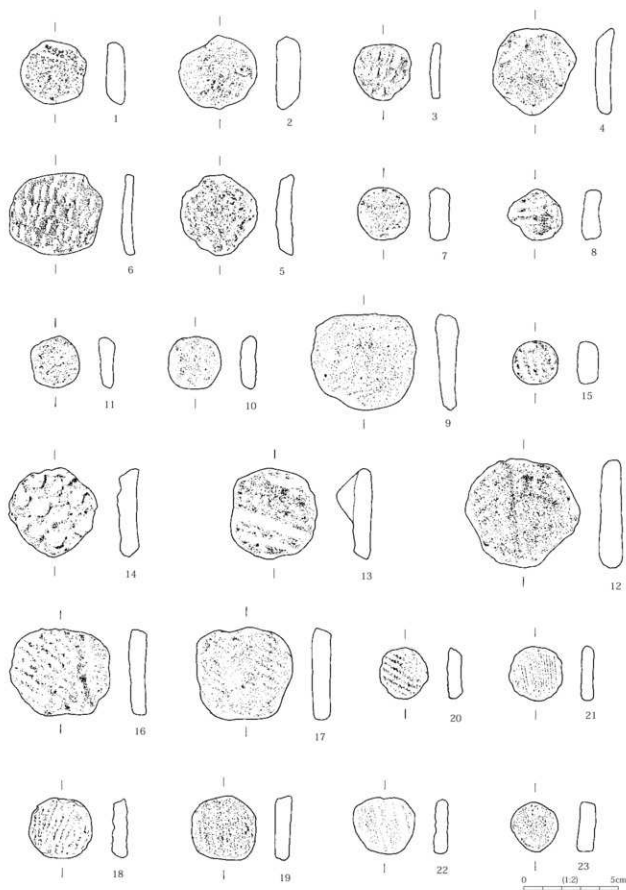


5区

SB01 (316~318)

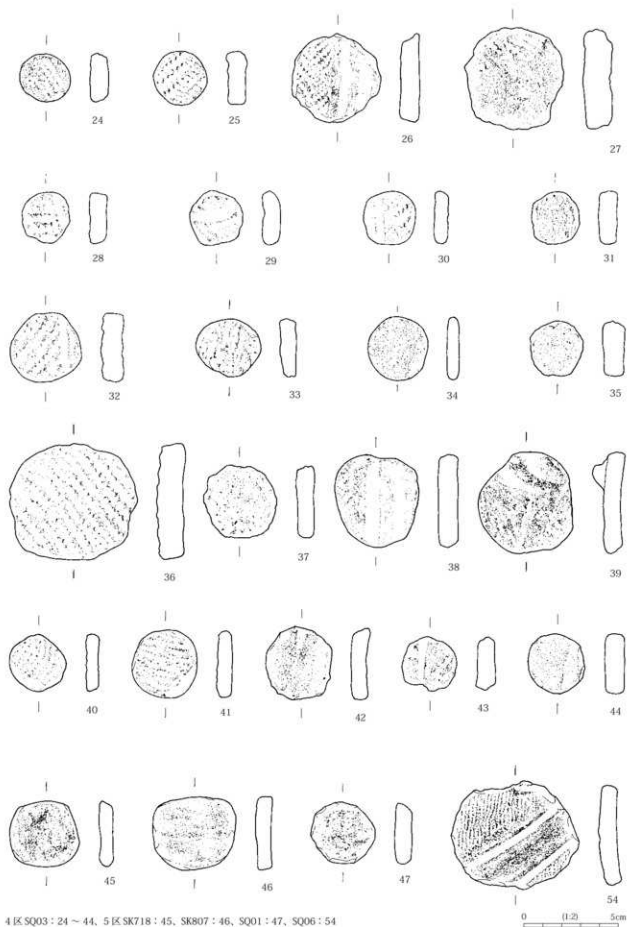


7区縄文土器2 (SK2036)、弥生土器 (ⅦY23)、5区古代土器 (SB01)



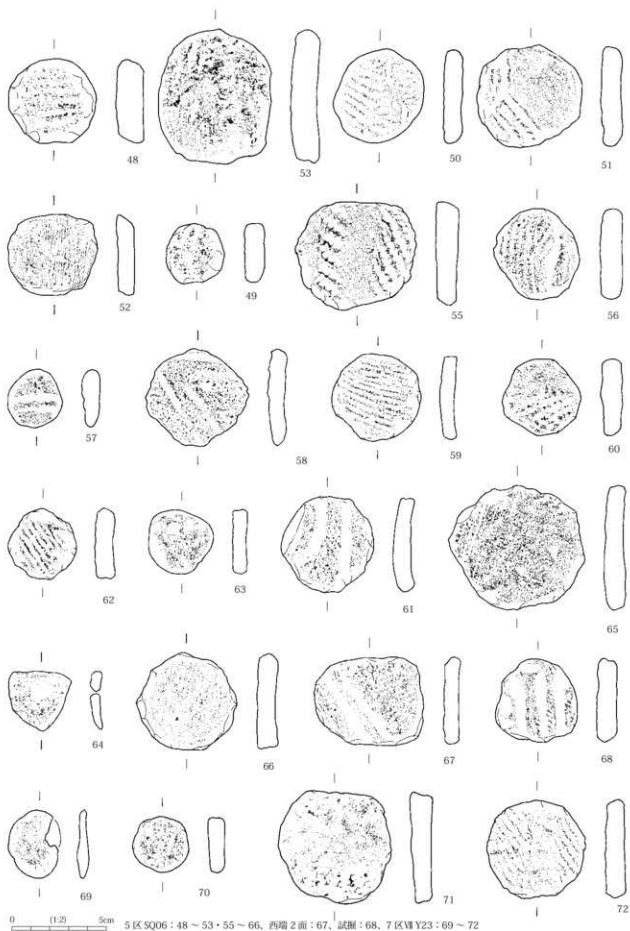
3区SK03:1, SQ01:2~9, SQ05:10·11, XHH03:12·13·16, XHH23:14, XHH08:15·17, 4区SQ03:18~23

3·4区土製円板



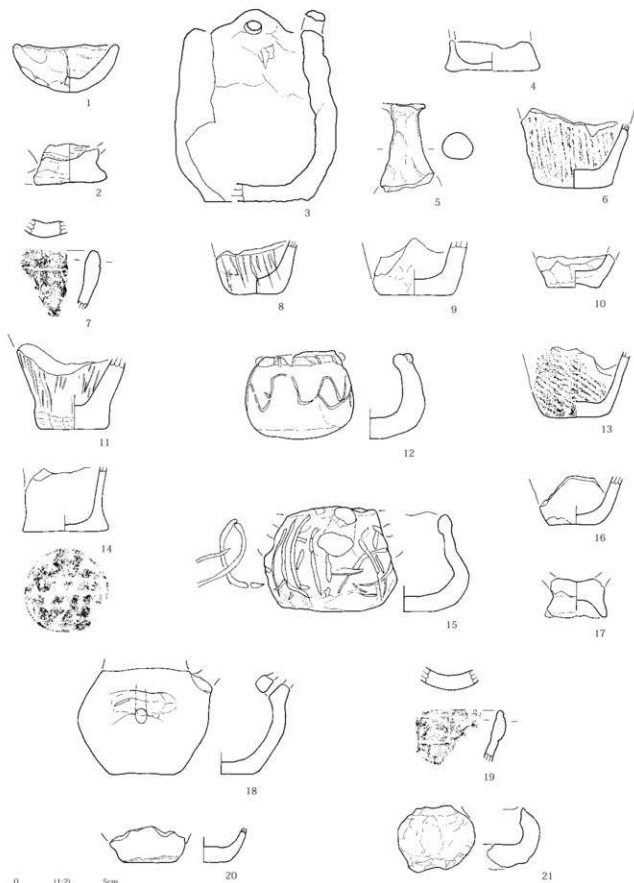
4区SQ03: 24~44, 5区SK718: 45, SK807: 46, SQ01: 47, SQ06: 54

4·5区土製円板



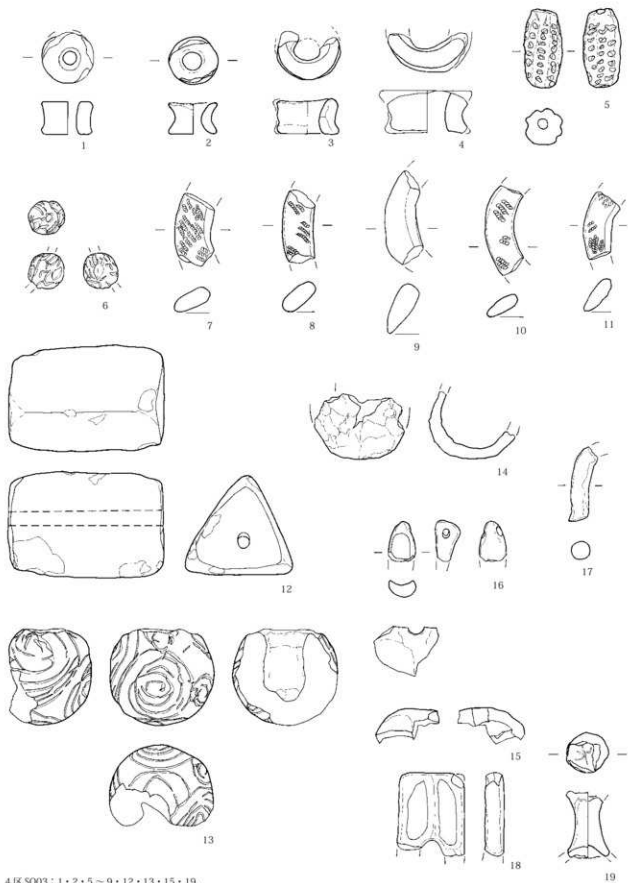
5区SQ06: 48~53・55~66, 西端2面: 67, 試掘: 68, 7区ⅦY23: 69~72

5・7区土製円板



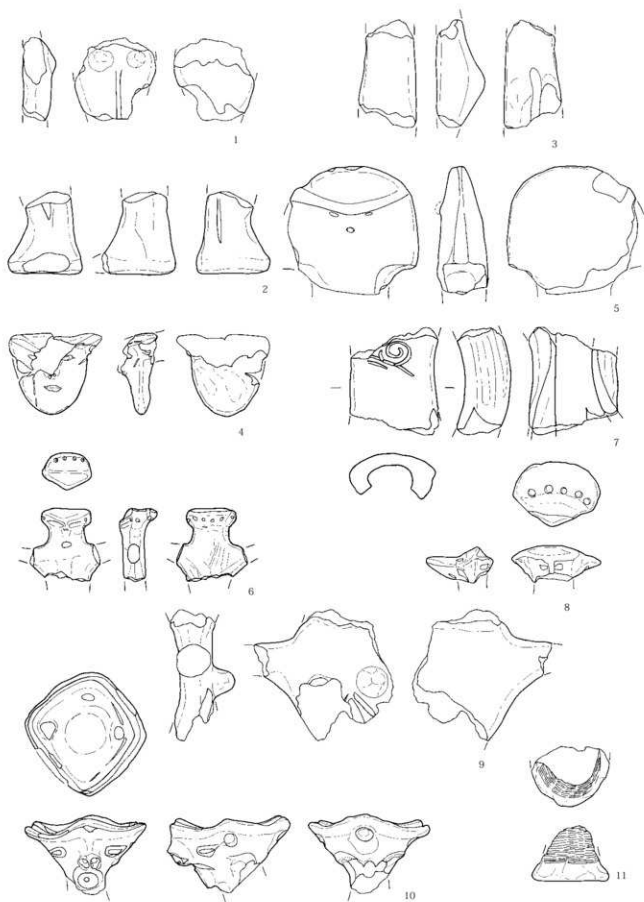
1区XHG19:1, 3区SQ01:3, XHH08:4, 4区SQ03:2・5～17, 5区SK451:18, SK454:20, SQ01:19, SQ06:21

1～5区ミニチュア土器



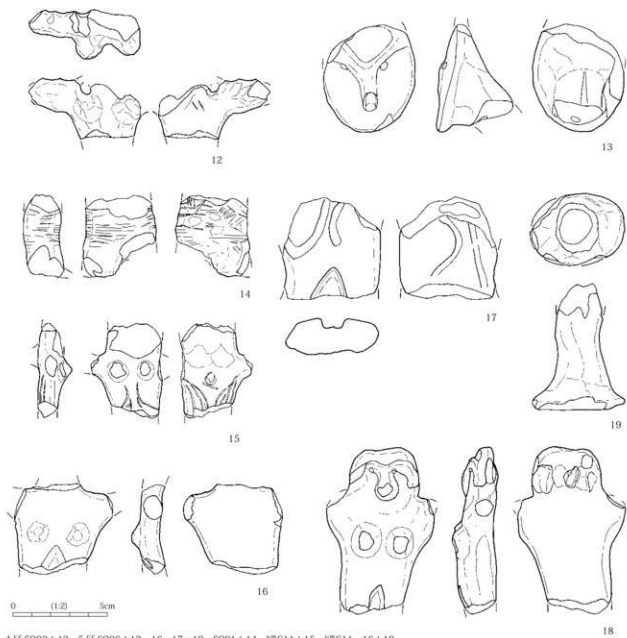
4区SQ03:1·2·5~9·12·13·15·19,
5区XHG02~04:4, SQ06:3·10·11·17·18,
7区谷:14, 3区SK42:16

3~5·7区土製品



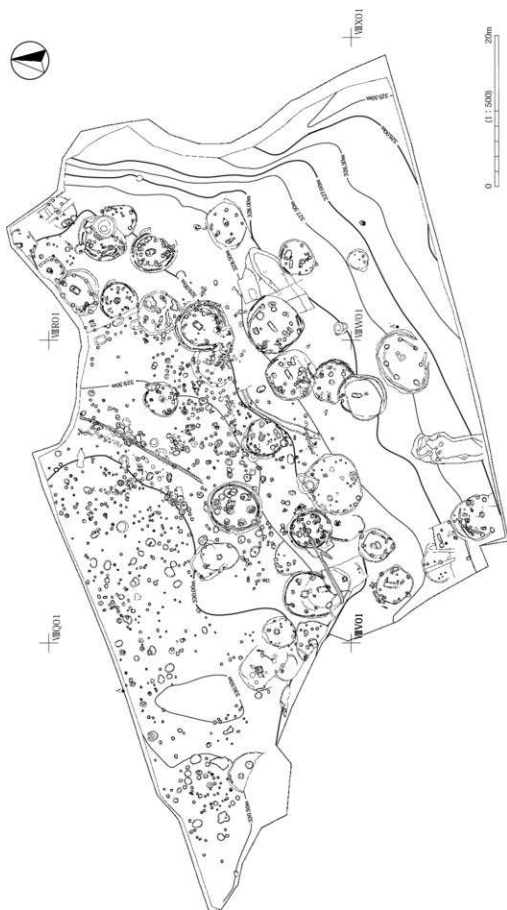
3区 XIIIH08: 1, XIIIH03: 3, SQ05: 2, 4区 SK81: 4, SQ03: 5~11

3·4区土偶

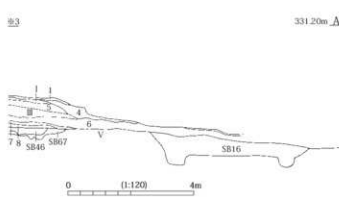
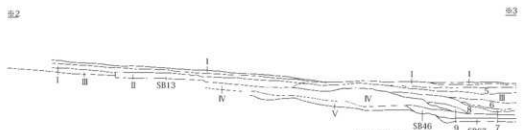
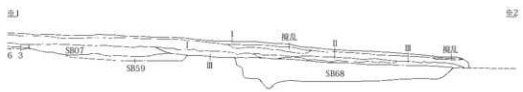




8区縄文時代遺構分布图

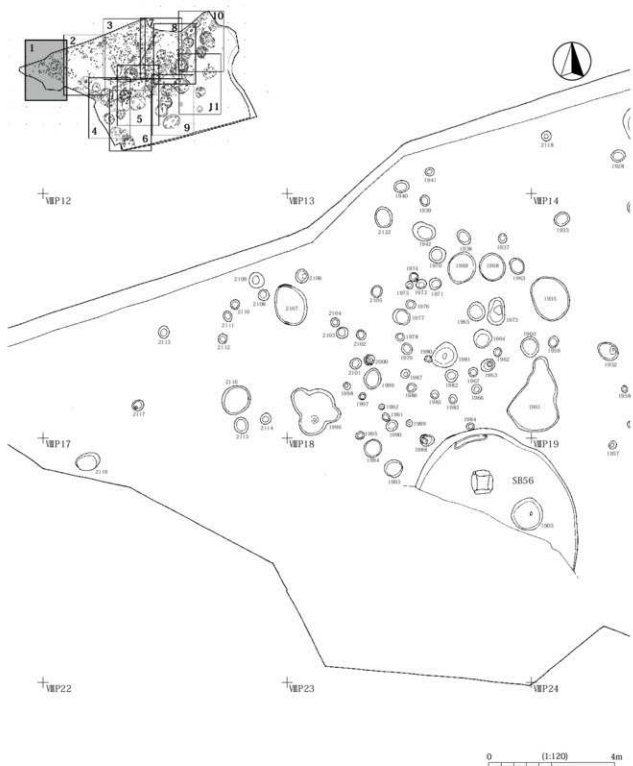


8区縄文時代遺構検出面地形図

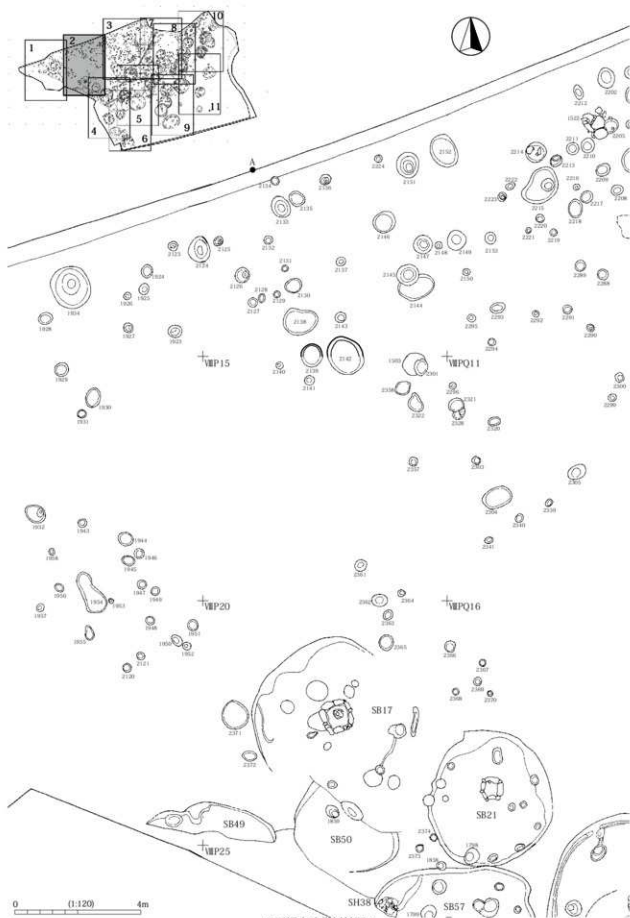


- 8区縄文面 A-A'
- I 10YR5/2 灰黄褐色シルト 細粒砂混 植物による空隙多 耕作土
 - II 10YR4/2 灰黄褐色シルト 細粒砂混 粘性あり 弥生時代に際る遺構埋土基調
 - III 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 細粒砂混 白色粘土含
 - IV 10YR3/2 黒褐色シルト 細粒砂混 細粒・灰含む 縄文時代の遺構埋土・遺物包含層基調
 - V 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 細粒砂混 埋瓦小ブロック含地山
 - 1 2.5Y/2 灰黄土 2004年10月洪水埋積の細粒砂
 - 2 10YR4/1 褐色シルト 炭化物少量混
 - 3 10YR5/4 に近い黄褐色粘土 重層のシルト混 空隙少 高は黒い
 - 4 最近の焚火による灰が混じる部分 埋瓦
 - 5 2.5Y/2 暗黄褐色土 細中粒砂
 - 6 10YR4/1 褐色シルト 細粒砂混 V層より灰味強い 灰多
 - 7 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 細粒砂混 黄褐色土粒多
 - 8 10YR4/1 褐色シルト 細粒砂混 6層と近接するが砂多
 - 9 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 細粒砂混 5YR4/3 に近い赤褐色粘土多 灰多

8区土層断面図



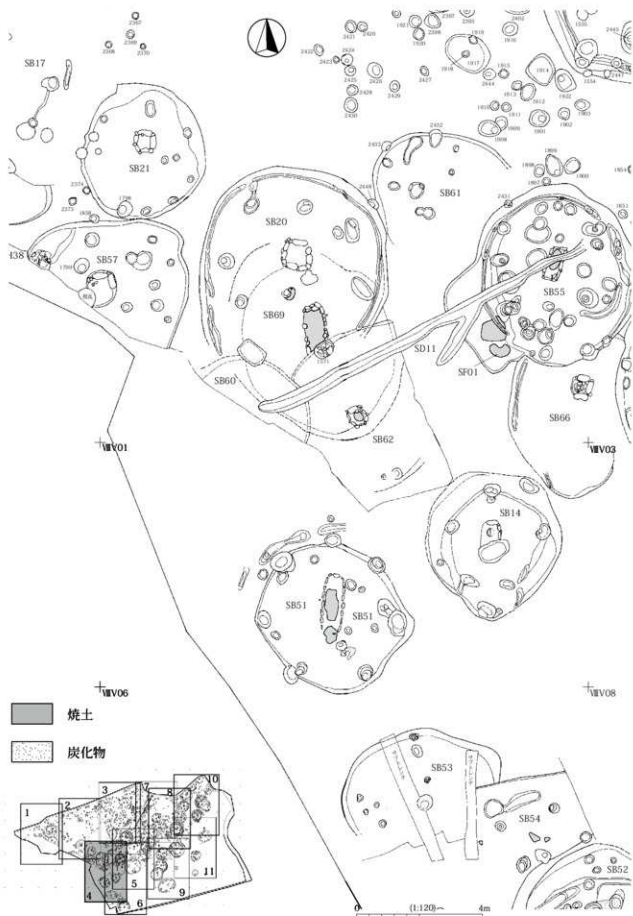
8区縄文時代割付图 1



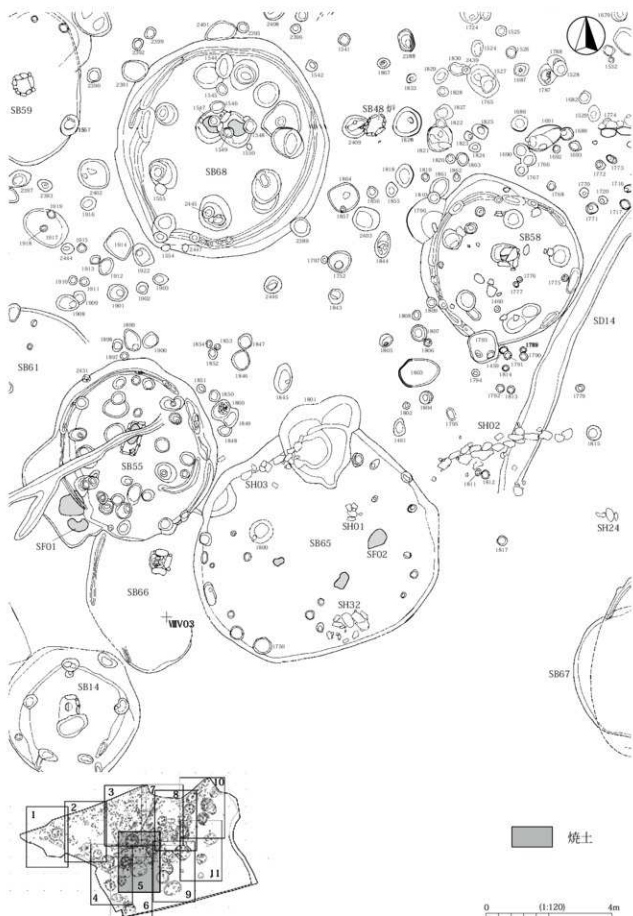
8区縄文時代割付图2



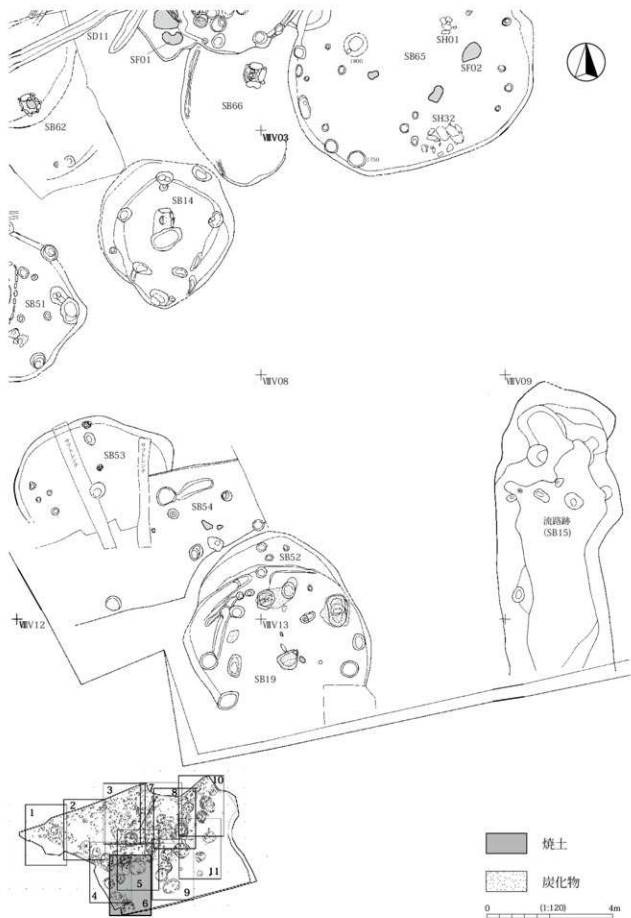
8区縄文時代剖付图3



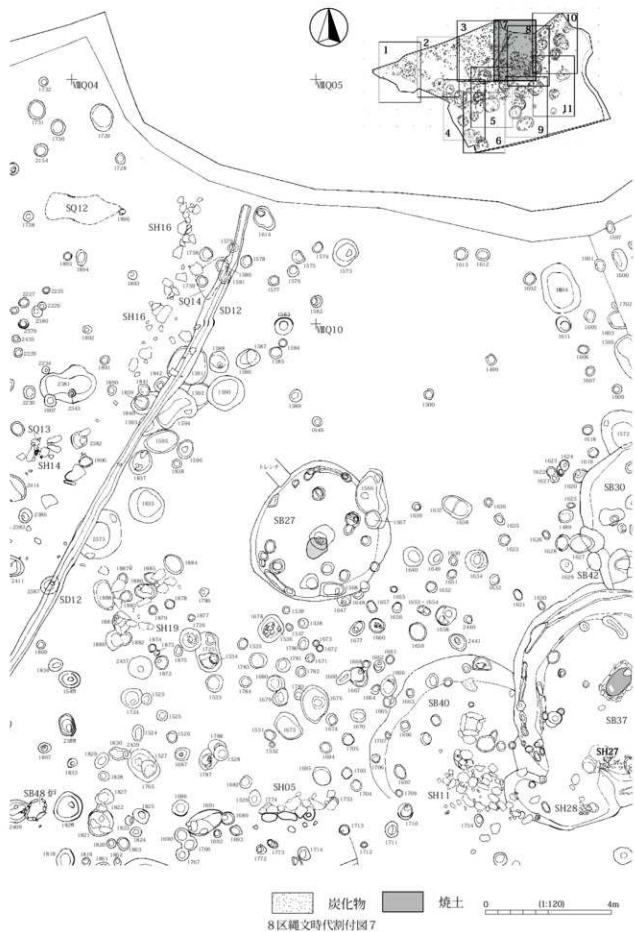
8区縄文時代割付图 4

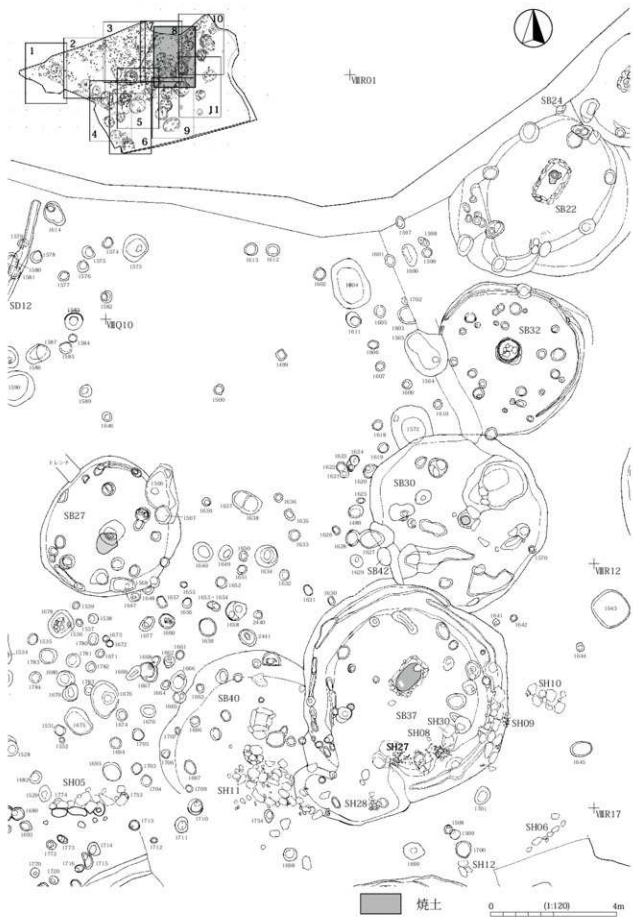


8区縄文時代剖面图 5

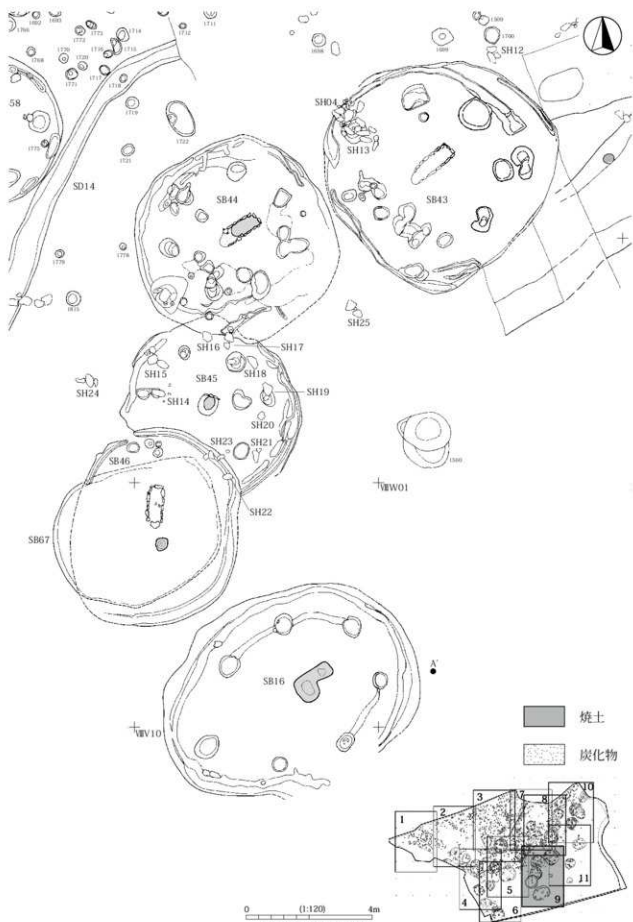


8区縄文時代割付图6

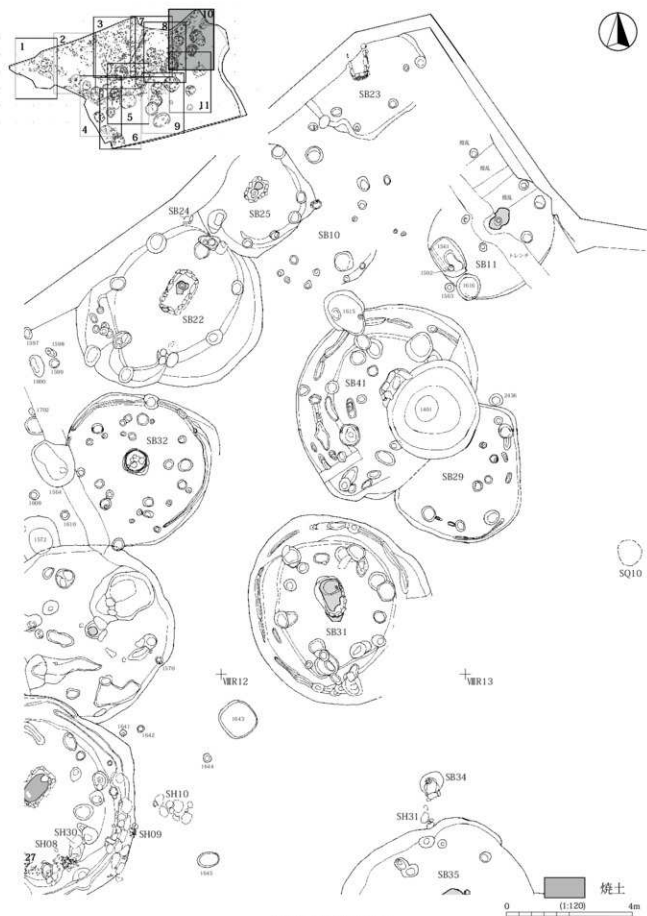




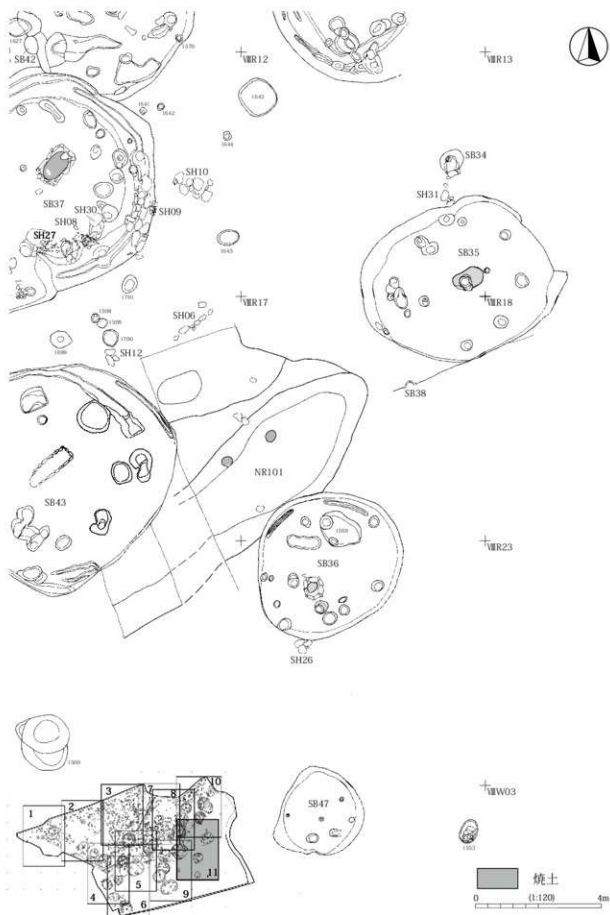
8区縄文時代割付图8



8区縄文時代剖付图9



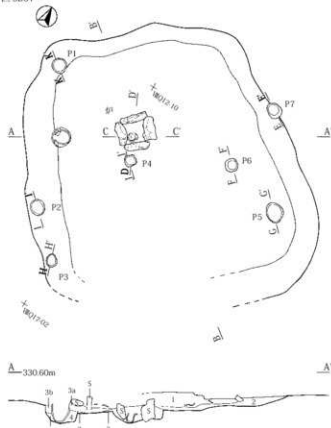
8区縄文時代制付图 10



8区縄文時代剖付图 11

図版 64 8区縄文時代整穴住居跡1

8区 SB07

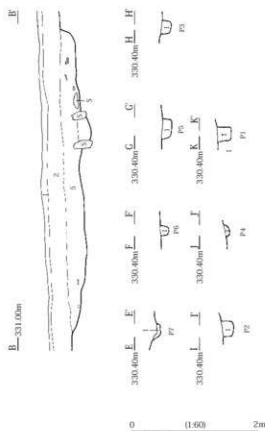


SB07 OP 表土 A A' 1-2層

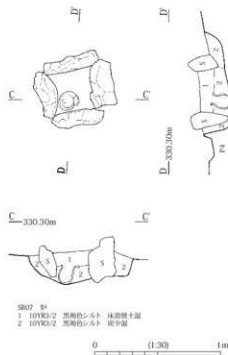
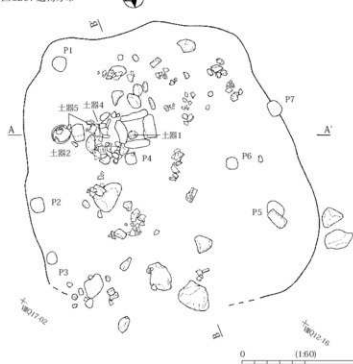
- 1 2.0YR6/2 灰褐色 2004年10月洪水跡
- 2 10YR4/2 灰黒褐色シルト 礫和砂層
- 3 10YR4/3 濃い黄褐色シルト 暗褐色シルト混 空堀 しまり面
- 3a 3R1混 中硬砂岩面
- 3b 3R1混 黄褐色面 軟土
- 4 10YR2/3 黒褐色シルト基層 10YR4/4 黄褐色泥炭
- 5 10YR4/1 暗褐色シルト 炭化物多

SB07 Pit-3

- 1 自然堆土石積と円 暗褐色シルト



8区 SB07 遺物分布

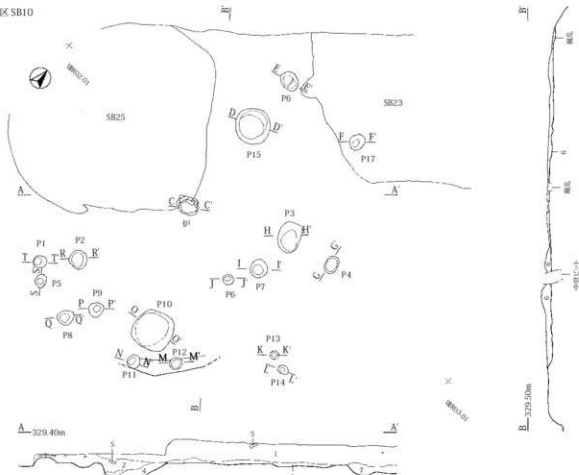


SB07 土器

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 片断焼土器
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト 灰少混

8区縄文時代整穴住居跡1 (SB07)

8区SB10

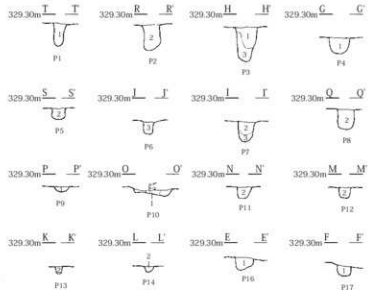
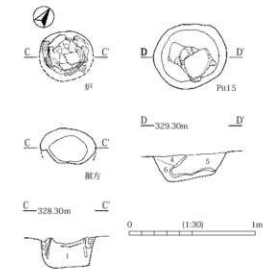


SB10(SPA-A)

- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト 耕作土 燻烟層跡 この付近燻烟もあぶり
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト SR25中層 灰水砂凝結 中々粘性 灰質・大粒・土層厚多
- 3 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト SR25表土層 φ100mm程度の土多 灰土層厚多
- 4 10YR5/4 に近い黄褐色粘質シルト SR25表層(土層 黄褐色土層層)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト SR25内層(土層) 中粘砂質土層
- 6 10YR5/1 灰褐色粘質シルト SR10表土層 弱い 黄褐色シルト土層層
- 7 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルト SR25表土層 粘質土層 遺物混在

SB10(SPB-B)

- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト SR22下層 φ5mm以下白色粒子・灰質粘土層に多



SB10 P11~17
(B=一般観察用土層)

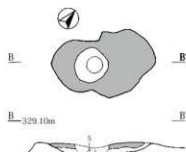
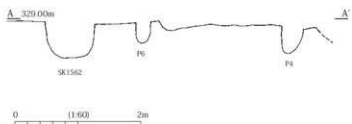
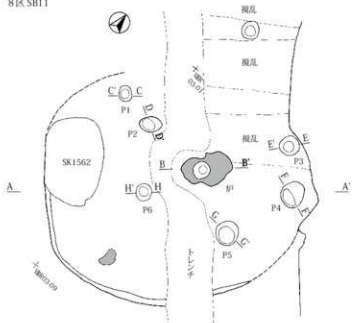
- 1 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト 灰質 粘性 しまり度 φ5mm黄褐色シルト少 灰質粘土層
- 2 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 1層厚 粘性 灰質 中々粘
- 3 10YR5/4 に近い黄褐色粘質シルト 粘質土層 黄褐色シルト土層土層
- 4 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 灰水砂質 不粘の粘質砂質シルト層
- 5 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト φ100mm程度の土層 灰質 粘
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 均質 粘性 しまり度

SB10 SP

- 1 10YR4/4 粘質粘質シルト 砂土層(土層) しまり度 粘質なし 土層厚 粘質
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 砂土層(土層) 均質 粘性 弱い 砂質シルト土層(土層) 粘質

8区縄文時代整穴住居跡2 (SB10)

8区SB11



SB11 P1
1 10YR4/2 灰黒褐色砂質シルト 中々粘性 砂質シルト層状 周へ焼土なし

0 (1:30) 1m



SB11 P1
1 10YR4/2 灰黒褐色砂質シルト 中々粘性 砂質シルト層状 周へ焼土なし

SB11 P2
1 10YR5/3 に濃い黄褐色砂質シルト 強い 粘り 灰黒
2 10YR5/4 に濃い黄褐色砂質シルト 腐状に砂シルト層



SB11 P3
1 10Y5/4 に濃い黄褐色砂質シルト
2 10Y5/3 に濃い黄褐色砂質シルト

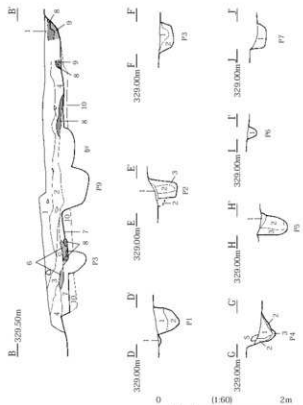
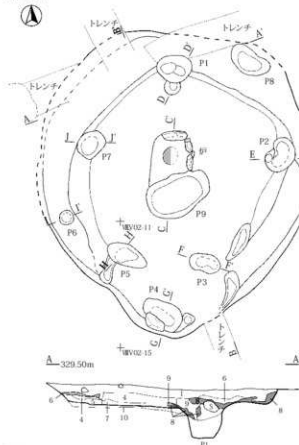
SB11 P4
1 10Y5/1 黄褐色砂質シルト 強い 粘り 灰黒
2 10Y5/2 灰黒褐色砂質シルト



SB11 P5
1 10YR4/2 灰黒褐色砂質シルト #1mm篩残状
2 10YR5/1 黄褐色砂質シルト
3 10YR4/3 に濃い黄褐色砂質シルト 中々粘性 腐状 埋戻し土の

SB11 P6
1 10YR4/2 灰黒褐色砂質シルト

8区SB14

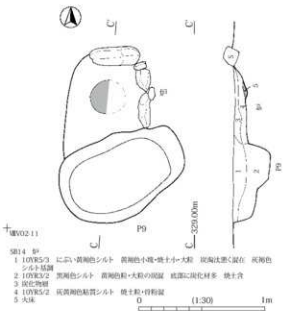
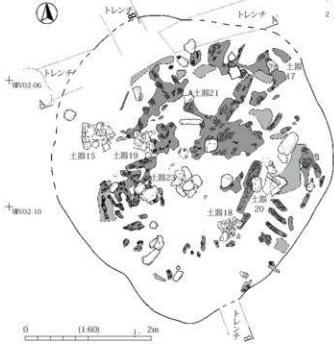


- SB14
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 白色腐葉・炭少 しまり目 灰黄褐色シルト炭少
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト 1層上段黒色 中・中褐色
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト 1層に灰黄褐色シルト小塊状に多量
 - 4 10YR4/2 灰黄褐色シルト 1層に灰黄褐色シルト小塊状に多量 炭土少量
 - 5 10YR4/1 黒褐色シルト 1層に灰黄褐色シルト小塊状に多量 炭土より多
 - 6 10YR5/3 暗赤褐色シルト 5層と6層境界 炭土・炭土多 ϕ 6mm未満
 - 7 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 2層褐色結晶シルト併存 暗褐色シルト炭 炭少
 - 8 10YR1/7 黒褐色シルト 炭化材・木片も多 7層少
 - 9 10YR5/6 暗赤褐色シルトが中心に 土質軟 10YR5/2と2層褐色シルト30%
 - 10 10YR5/4 に近い黄褐色シルト 炭土 炭 灰白色・黄褐色小塊

- SB14 Pn1
- 1 10YR4/4 褐色砂質シルト ϕ 1.5cm黄褐色小塊 10% 褐色炭質も多 木粒も多
 - 2 10YR5/2 黒褐色シルト炭質小塊 ϕ 1cm黄褐色シルト炭30% しまり目
- SB14 Pn2
- 1 5YR3/4 暗赤褐色シルト 炭土 炭塊多量 骨 炭質
 - 2 10YR5/2 黒褐色シルト 腐植炭 ϕ 1.5cm黄褐色小塊20% 小粒炭多
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 灰白色小塊
- SB14 Pn3
- 1 10YR5/3 に近い黄褐色シルト 黄褐色小塊・炭土・木粒・腐植炭・炭質に富む 黄褐色シルト炭質
 - 2 10YR5/2 黒褐色シルト 黄褐色小塊・大粒炭質

- SB14 Pn4
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト
 - 2 1層に炭土炭質
 - 3 1層上段 黄褐色塊状砂子
- SB14 Pn5
- 1 10YR5/3 に近い黄褐色シルト 炭化材炭 しまり目なし
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト 炭少
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色結晶シルト 2層炭30%
- SB14 Pn6
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 炭褐色小塊20%
- SB14 Pn7
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト

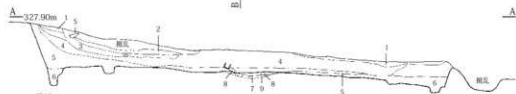
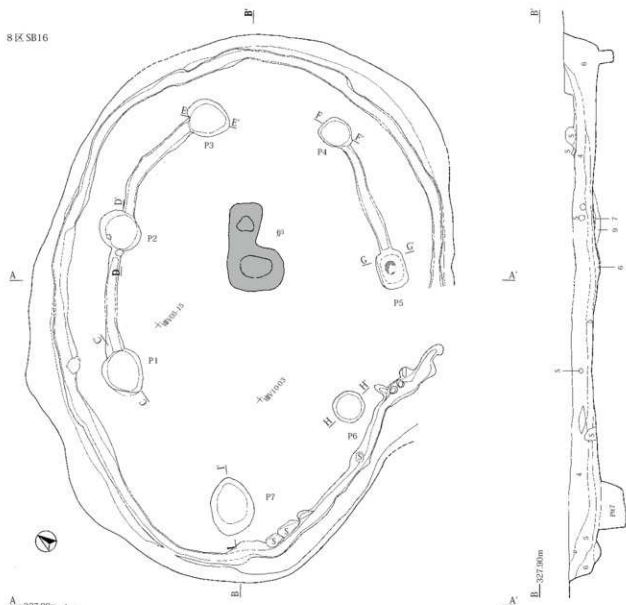
8区SB14 遺物分布



- SB14 Pn8
- 1 10YR5/3 に近い黄褐色シルト 黄褐色小塊・炭土・木粒 炭質に富む炭に 炭褐色シルト炭質
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト 黄褐色小塊・大粒の腐植炭 炭質に炭化材多 炭土骨
 - 3 炭化材炭
 - 4 10YR5/2 灰黄褐色結晶シルト 炭土炭・骨粒炭
 - 5 木炭

8区縄文時代竪穴住居跡 4 (SB14)

8区SB16

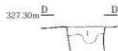


SB16

- | | |
|---|----------------------------|
| 1 10YR5/3 土質・黒褐色粘り土 | 6 10YR3/2 黒褐色シルト 粘り砂質 しまり土 |
| 2 10YR5/4 土質・黒褐色粘り土 黒一中粘り砂 粘り土 ベルトのみにある | 7 10YR4/2 黒褐色シルト 粘り砂質 粘り土 |
| 3 10YR4/3 土質・黒褐色粘り土 粘り砂質 粘り土 粘り土 粘り土 | 8 2.5YR5/8 赤褐色粘り土 粘り土 |
| 4 10YR4/4 粘り土 粘り砂質 粘り土 粘り土 粘り土 | 9 5YR5/6 赤褐色粘り土 粘り土 粘り土 |
| 5 10YR4/4 粘り土 粘り砂質 粘り土 粘り土 粘り土 | |



- SB16 P1
- | |
|-------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色シルト 粘り土 粘り土 |
| 2 10YR3/3 黒褐色シルト 粘り土 粘り土 |
| 3 10YR4/4 粘り土 粘り砂質シルト 粘り土 粘り土 |
| 4 10YR4/5 粘り土 粘り砂質シルト 粘り土 粘り土 |



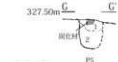
- SB16 P2
- | |
|-------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色シルト 粘り土 粘り土 |
| 2 10YR4/4 粘り土 粘り砂質シルト 粘り土 粘り土 |



- SB16 P3
- | |
|-------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色シルト 粘り土 粘り土 |
| 2 10YR4/4 粘り土 粘り砂質シルト 粘り土 粘り土 |



- SB16 P4
- | |
|-------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色シルト 粘り土 粘り土 |
| 2 10YR4/4 粘り土 粘り砂質シルト 粘り土 粘り土 |



- SB16 P5
- | |
|-----------------------------|
| 1 10YR3/3 黒褐色シルト 粘り土 粘り土 |
| 2 10YR5/3 土質・黒褐色粘り土 粘り土 粘り土 |



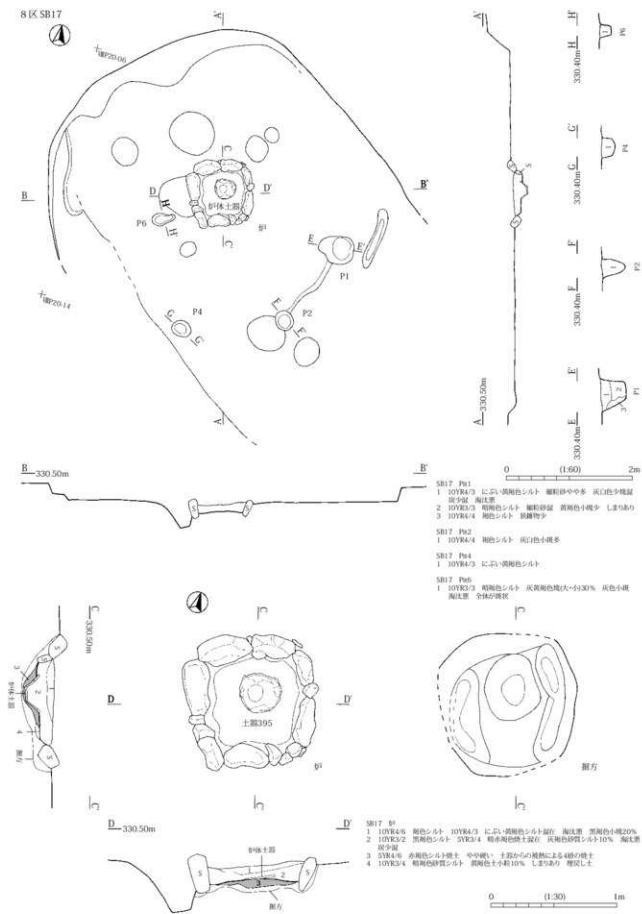
- SB16 P6
- | |
|-------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色シルト 粘り土 粘り土 |
| 2 10YR4/4 粘り土 粘り砂質シルト 粘り土 粘り土 |



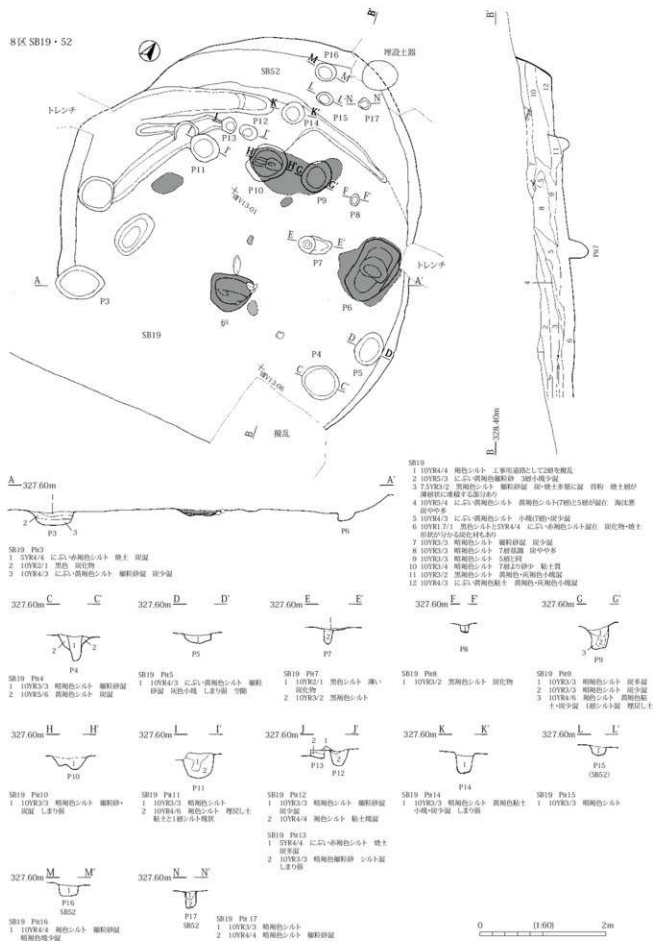
- SB16 P7
- | |
|-------------------------------|
| 1 10YR4/4 粘り土 粘り砂質シルト 粘り土 粘り土 |
| 2 10YR3/2 黒褐色シルト 粘り土 粘り土 |
| 3 10YR4/5 粘り土 粘り砂質シルト 粘り土 粘り土 |

0 (1.30) 1m

8区縄文時代竪穴住居跡5 (SB16)

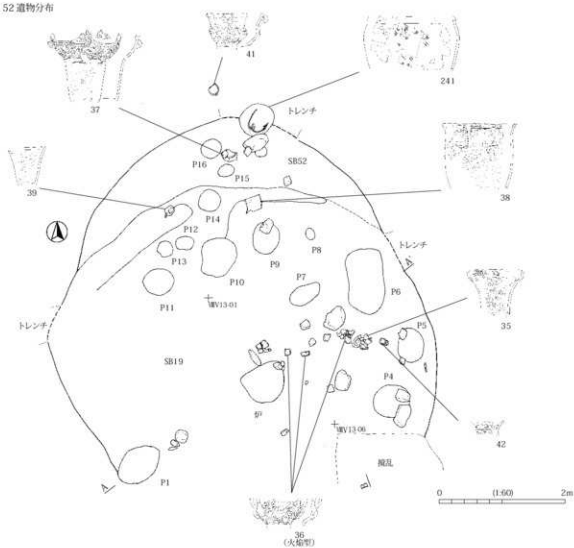


8区縄文時代竪穴住居跡6 (SB17)

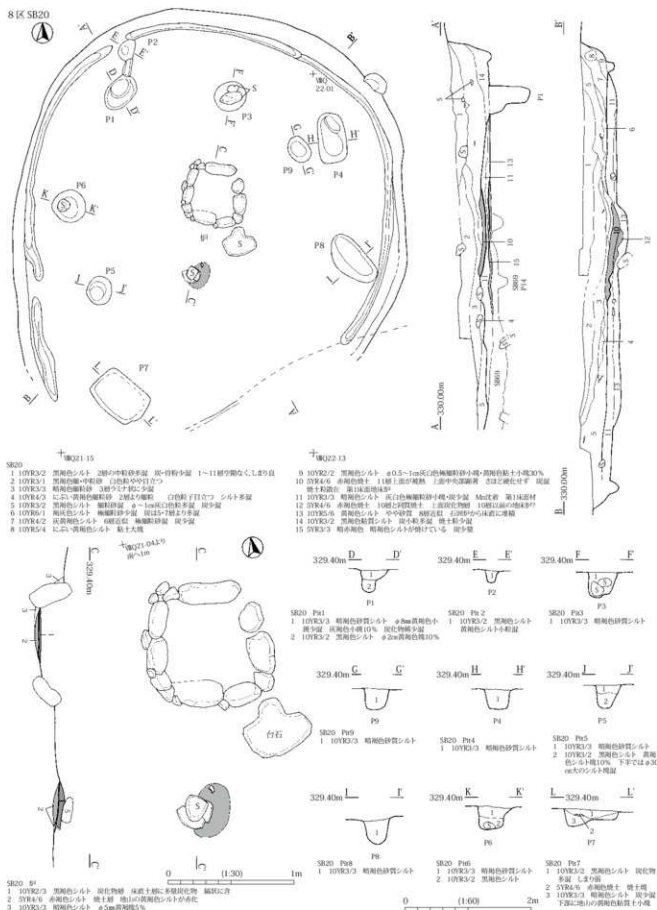


8区縄文時代竪穴住居跡7 (SB19・52)

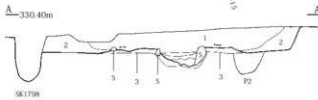
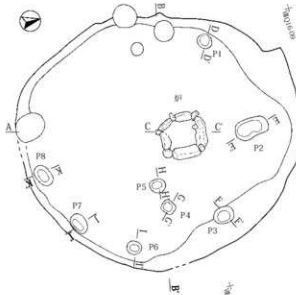
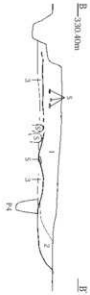
8区SB19・52遺物分布



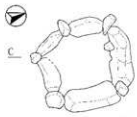
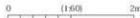
8区縄文時代竪穴住居跡 8 (SB19・52)



8区SB21



- SB21
 1 10YR3/2 黒褐色シルト 礫砂・礫中埋没し、まじり且、全体に炭屑
 2 10YR5/4 にごい・黄褐色シルト 1層に其褐色シルト40%、礫の埋没性
 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト 1層に其褐色シルト40%、小礫状で炭屑 炭少炭



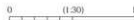
P1



P2



- SB21 P1
 1 10YR3/2 黒褐色シルト 礫砂埋没 炭少炭
 2 10YR5/3 黄褐色シルト 炭少炭
 3 10YR5/3 にごい・黄褐色砂質シルト 地中の埋没した



330.20m D D'



P1

- SB21 P1
 1 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト
 灰褐色小礫中埋没
 2 10YR3/2 黒褐色シルト

330.20m E E'



P2

- SB21 P2
 1 10YR3/2 黒褐色シルトに
 φ~1.5m大礫灰化物・白炭屑
 少炭
 2 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト
 砂が少量で炭屑

330.20m F F'



P3

- SB21 P3
 1 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト
 炭化物
 2 10YR3/2 黒褐色シルト 炭化物
 乏し

330.20m G G'



P4

- SB21 P4
 1 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト
 2 10YR3/2 黒褐色シルト

330.20m H H'



P5

- SB21 P5
 1 10YR3/2 黒褐色シルト

330.20m I I'



P6

- SB21 P6
 1 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト
 土層
 2 10YR3/2 黒褐色シルト

330.20m J J'



P7

- SB21 P7
 1 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト
 φ1.5m黄褐色小礫10%炭

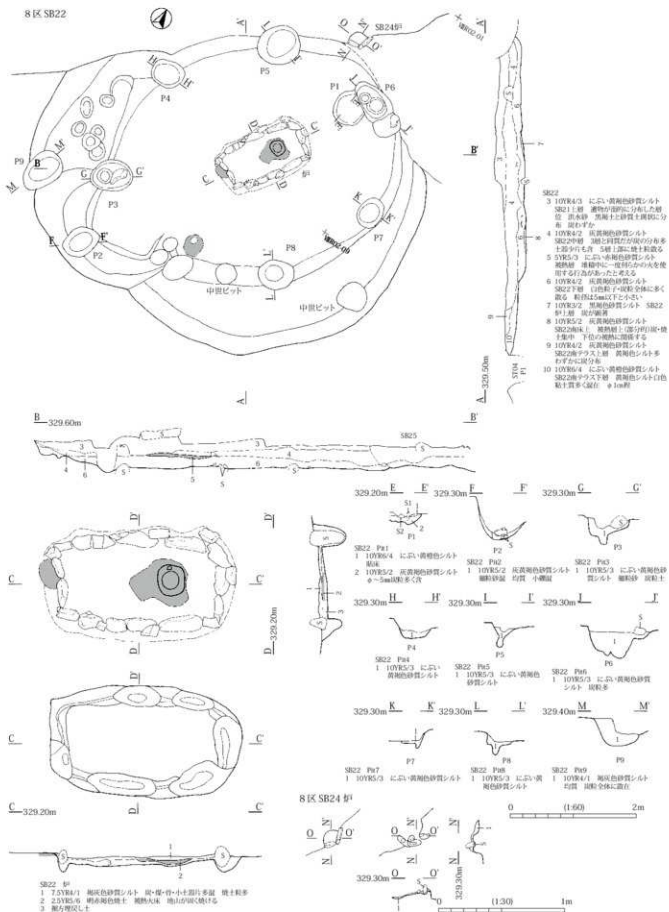
330.20m K K'



P8

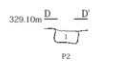
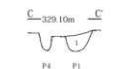
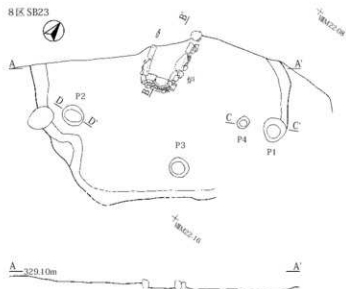
- SB21 P8
 1 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト
 2 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト
 φ1.5m黄褐色小礫10%炭

8区縄文時代整穴住居跡 10 (SB21)



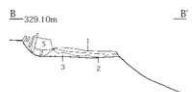
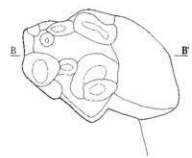
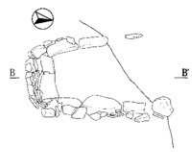
- 3 10YR4/3 靑灰色砂質シルト
- SR21土層 遺物が部分的に分布した層
- 4 黄褐色土 黄褐色土質質土層内に分布
- 5 5YR5/3 靑灰色砂質シルト
- 6 10YR4/2 赤黒色の砂質シルト
- 7 10YR3/2 黒色の砂質シルト
- 8 10YR5/2 赤黒色の砂質シルト
- 9 10YR4/2 赤黒色の砂質シルト
- 10 10YR6/4 靑灰色砂質シルト

8区縄文時代整穴住居跡 11 (SB22)



SB23 P1
1 10YR5/3 にごい・黄褐色砂質シルト
均質 段全体に散在

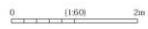
SB23 P2
1 10YR5/3 にごい・黄褐色砂質シルト



SB23 P4
1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 砂内埋土 管孔・穴・ ϕ 1cm程度
半環状に 黄褐色粘質
2 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト 四方型して 3層位
3 10YR5/4 にごい・黄褐色 地山礫に包没 2層少層位

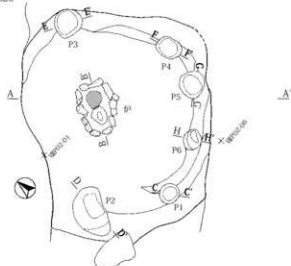


SB26 看石部・埋没部
1 10YR3/2 にごい・黄褐色砂質シルト 粘質 しまり目 シルト塊状 埋戻し土
2 10YR4/1 黄褐色砂質シルト 粘質・しまり目 埋戻し全体に含
3 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘質・しまり目 段・埋全体に含
4 10YR3/2 黄褐色砂質シルト 粘質 しまり目 小シト塊状 砂内埋土少



8区縄文時代整穴住居跡 12 (SB23・26)

8区 SB25



SB25
 1 10YR6/4 灰黄褐色砂質シルト SB25中層 赤土砂質田 中層粘性 灰黄多 丸礫・土器片多
 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト SB25上層 φ10m黄褐色土塊多 灰黄 土器片有
 3 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト

329.20m C C'



SB25 P1
 1 10YR5/4 にごい黄褐色砂質シルト 均質 しまり直

329.20m D D'



SB25 P2
 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまり直 均質 灰全体に露出

329.20m E E'



SB25 P3
 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 砂・シルト層状に分布 灰露出
 2 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 均質 露出なし

329.20m F F'



SB25 P4
 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト

329.20m G G'



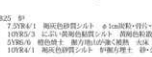
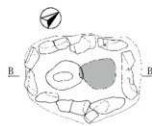
SB25 P5
 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
 2 10YR5/4 にごい黄褐色砂質シルト 均質

329.20m H H'



SB25 P6
 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト

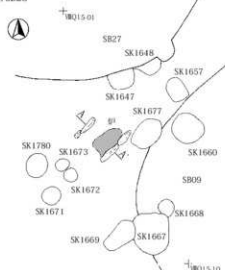
0 (1:50) 2m



SB25 P3
 1 7.5YR6/1 黄褐色砂質シルト φ10m礫・骨片・焼土塊露出
 2 10YR5/2 にごい黄褐色粘質シルト 粘黄褐色露出 埋戻し土が
 3 5YR6/0 褐色焼土 東方地山の赤土・黄鉄 石灰
 4 10YR4/1 黄褐色砂質シルト 砂・シルト小塊露出

0 (1:30) 1m

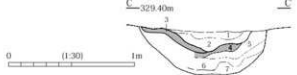
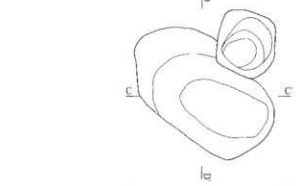
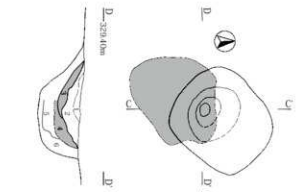
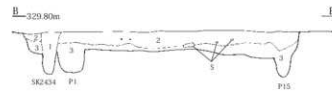
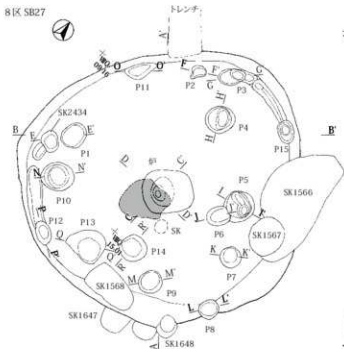
8区 SB28



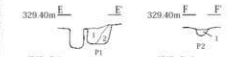
SB28 P3
 1 5YR6/4 にごい黄褐色砂質シルト 焼土
 2 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 均質 埋戻し土

0 (1:50) 2m

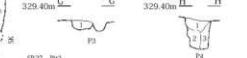
8区 SB27



- SK27
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト SK1648・2434・シルト層 粘性なし。土中の小石 直径 SK27層下のみに存在
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性 強い 炭質 少量
 - 3 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト 砂質 黄褐色シルト層全体に分布 炭質 少量



- SK27 P1
- 1 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 粘性 強い 炭質 少量
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 中粒砂シルト層



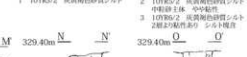
- SK27 P3
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト



- SK27 P5
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 小礫石 ϕ 1-2cm程度・ ϕ 2-4cmシルト塊あり
 - 2 10YR6/2 灰黄褐色粘質砂質シルト ϕ 0.5-1cm程度多量 中粒砂



- SK27 P7
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト



- SK27 P9
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト



- SK27 P10
- 1 10YR5/3 灰色・黄褐色粘質シルト 中粒砂主体 炭質 少量
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 中粒砂主体 中粒砂
 - 3 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 土塊あり粘性あり シルト塊多



- SK27 P11
- 1 10YR5/1 灰黄色粘質シルト ϕ 5mm程度多量 中粒砂主体

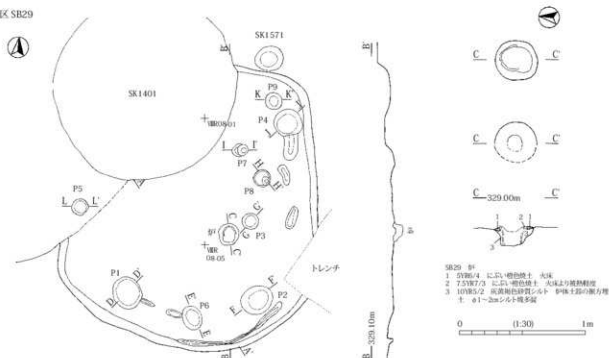


- SK27 P12
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト

- SK27 P1
- 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 埋土 粘性 強い 炭質少量に存在
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性 強い 炭質少量
 - 3 2.5YR6/6 褐色粘土 AC6 炭く塊
 - 4 2.5YR6/3 灰色・黄褐色粘土 AC6の一部分 粘土粒・炭粒多
 - 5 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 中粒砂 炭粒多
 - 6 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 中粒砂 ϕ 1-6mm程度 粘土粒減少
 - 7 10YR5/6 灰黄褐色粘質シルト 粘性 中・強しり 炭質・塊状の塊あり

8区縄文時代整穴住居跡 14 (SB27)

8区 SB29



- SB29 部
 1 5YR5/4 にごい・褐色粘土 丸床
 2 7.5YR7/3 にごい・褐色粘土 丸床より掘削程度
 3 10YR3/2 灰黒褐色砂質シルト 円床土部の掘方層
 土 0.1-2mシルト堆多量



- SB29
 1 10YR4/2 灰黒褐色砂質シルト 0.5m前後全体に分布
 2 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 掘方 シルト層直下
 3 10YR5/4 にごい・灰褐色砂質シルト 掘方 灰褐色シルト塊状に多



- SB29 Pit1
 1 10YR4/2 灰黒褐色砂質シルト 均質 掘削少
 2 10YR4/1 暗灰褐色砂質シルト 均質



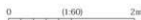
- SB29 Pit2
 1 10YR5/3 にごい・灰褐色砂質シルト 砂多 均質



- SB29 Pit3
 1 10YR4/2 灰黒褐色砂質シルト 砂多 土層均

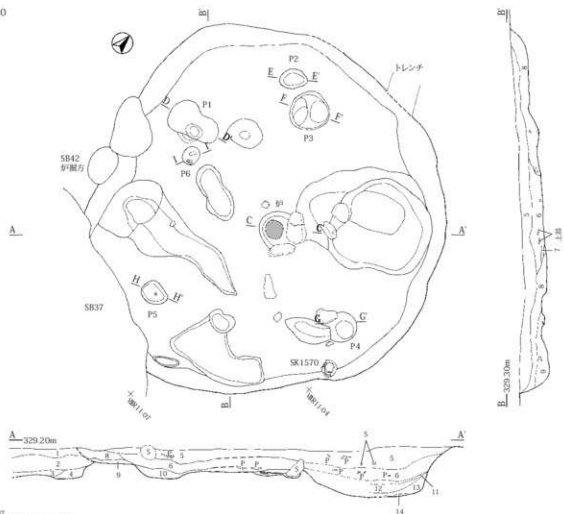


- SB29 Pit4
 1 10YR4/2 灰黒褐色砂質シルト 均質均
 2 10YR5/4 にごい・灰褐色砂質シルト 粘質 上よりやや均 砂-シルト塊状



8区縄文時代整穴住居跡 15 (SB29)

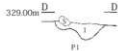
8区SB30



SB30-37

(SB30:5~14棟, SB37:1~4棟)

- 1 10YR5/2 灰褐色粘質シルト 縦中斜紋・シムト模様に混 凝結少 SB37上層
- 2 10YR4/1 灰褐色粘質シルト 1層以上最大・小穴・傾斜が全体に多 SB37中層
- 3 10YR5/6 灰褐色粘質シルト 砂物や炭灰に混在 厚減少 SB37下層
- 4 10YR4/4 灰褐色粘質シルト 凝結少・砂質 凝結少・凝結層下層 両面に凝結
- 5 10YR4/2 灰褐色粘質シルト しまり目 ϕ 10cm以内・上部小穴全体に混在 SB30埋土上層
- 6 10YR4/1 灰褐色粘質シルト しまり目 やや粘性 ϕ 10mm以内・多量 一様性高い・上部多 SB30中央から北東部の中〜下層
- 7 10YR5/4 にごい・黄褐色粘質シルト しまり目 黄褐色シルト多量に混在 SB30中央〜一部に凝結層下層にある
- 8 10YR5/3 にごい・黄褐色粘質シルト 凝結少・上部小穴 SB30の両層の下層 赤水砂層
- 9 10YR3/3 灰褐色粘質シルト やや粘性 小礫含 混在分多 SB30内外の最下層
- 10 10YR4/1 凝結粘質シルト しまり目凝結多 SB30の埋土層の中心部〜北東部に凝結
- 11 10YR3/1 黄褐色中〜凝結粘質シルト粘・灰褐色 凝結多 SB30埋土層の大部分に凝結
- 12 10YR5/3 にごい・黄褐色 中〜凝結粘質シルト 均質 凝結少 1層と同層に付
- 13 10YR5/4 にごい・黄褐色 中〜凝結粘質シルト粘・12層より多 しまり目 11層と同層に付
- 14 10YR5/1 灰褐色シルト質粘質シルト多 粘性 しまり目 11層と同層の最下層



SB30 P1

- 1 10YR5/4 にごい・黄褐色粘質シルト ϕ 10cm以下層全体に分布 粘土層・上部小穴・小穴凝結



SB30 P4

- 1 10YR5/2 灰褐色粘質シルト 均質
- 2 10YR5/4 にごい・黄褐色粘質シルト粘



SB30 P2

- 1 10YR5/4 にごい・黄褐色粘質シルト
- 2 10YR5/3 にごい・黄褐色粘質シルト 粘土層



SB30 P5

- 1 10YR5/4 にごい・黄褐色粘質シルト



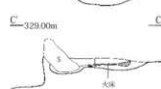
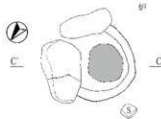
SB30 P3

- 1 10YR5/4 にごい・黄褐色粘質シルト
- 2 10YR5/3 にごい・黄褐色粘質シルト



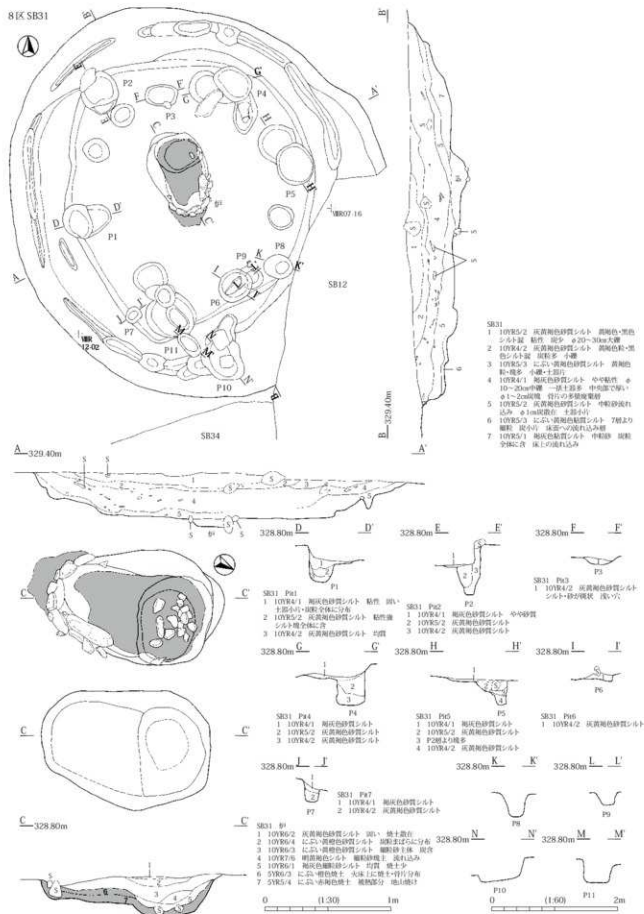
SB30 P6

- 1 10YR5/4 にごい・黄褐色粘質シルト

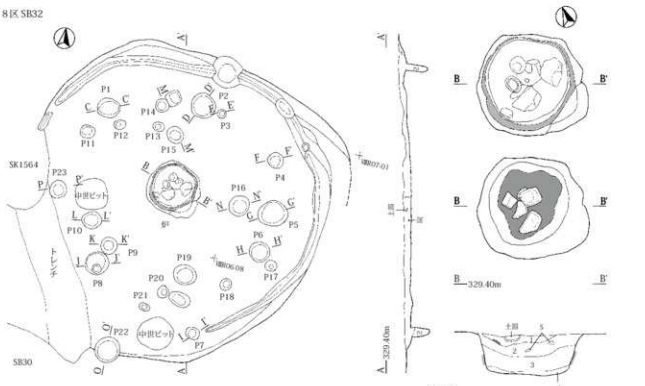


- SB30 P4
- 1 10YR4/2 灰褐色粘質シルト 粘性 しまり目 凝結・粘土層全体に混在

8区縄文時代整穴住居跡 16 (SB30)



8区 SB32



- SB32
 1 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト シルト粗面状に分布 3mm程度×10mm小片
 2 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルト 断面内に埋蔵 石質 1.5×0.4×0.2

- SB32 8号
 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 断面・4.2cm程度 小型土器
 2 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト 断面・小片・4~1.5cm程度に
 3 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 断面全体に露出 灰黄粘粒
 (白濁・4.2cm程度)
 4 10YR5/1 黄褐色シルト 灰黄色粘



- SB32 P#1
 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 石質 中粒砂
 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 腐植・中粒性 腐植少



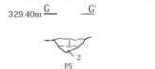
- SB32 P#2
 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 断面・φ0.5~1cm程度 シルト塊露出
 2 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルト 中・小粒性 シルト粘 土塊露出
 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 石質



- SB32 P#3
 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト



- SB32 P#4
 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト



- SB32 P#5
 1 10YR4/3 に近い黄褐色粘質粘質シルト 断面・腐植
 2 10YR4/3 に近い黄褐色粘質粘質シルト



- SB32 P#6
 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質粘質シルト



- SB32 P#7
 1 10YR4/3 に近い黄褐色腐植中粒砂 石質



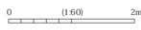
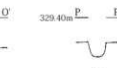
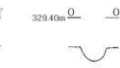
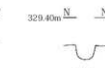
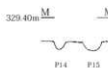
- SB32 P#8
 1 10YR4/1 に近い黄褐色粘質粘質シルト 石質 断面
 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質粘質シルト



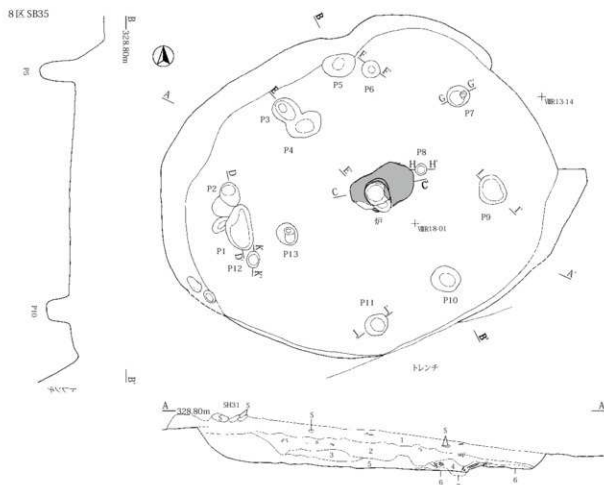
- SB32 P#9
 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト



- SB32 P#10
 1 10YR4/4 断面中粒砂 石質
 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質粘質シルト

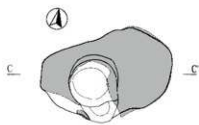


8区縄文時代整穴住居跡 18 (SB32)



SB35

- 1 10YR5/3 にごい・黄褐色砂質シルト 粘質質 しまり良 小溝・土器小片・φ10m程度全体に散在 SB35埋土層
- 2 10YR4/1 褐色色砂質シルト 石部・大小土器片・灰土部多 腐植層薄く土色乱雑なうえ SB35埋土中層
- 3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 腐植全体に含 腐土 SB35埋土中下層
- 4 10YR4/3 にごい・黄褐色砂質シルト 腐・埋土層 基よりわずかに高い部分で腐植層材が残った状態 床面全体に分布 大小・段の腐材あり
- 5 10YR4/1 褐色色砂質シルト 埋下段層 埋下より小・土器全体に多量 機土多
- 6 10YR5/3 にごい・黄褐色砂質シルト 柱土 腐植多 色むらがるに腐植
- 7 10YR4/1 褐色色砂質シルト ヒツジ牧の跡みに腐植 φ=10m程度に含



SB35 Pt1

- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 機土・腐植材多
- 2 10YR5/3 にごい・黄褐色砂質シルト しまり良 腐植層状に分布

SB35 Pt6

- 1 10YR4/3 にごい・黄褐色粘質シルト



SB35 Pt4

- 1 10YR4/3 にごい・黄褐色砂質シルト しまり良 砂・シルトの小段層状に分布 小ピット内に埋積
- 2 5YR5/6 明赤褐色粘土 灰土 腐植層

SB35 Pt7

- 1 10YR4/3 にごい・黄褐色砂質シルト 腐植物多
- 2 10YR4/3 にごい・黄褐色砂質シルト

SB35 Pt9

- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 2 10YR5/3 にごい・黄褐色砂質シルト
- 3 10YR4/3 にごい・黄褐色粘質シルト

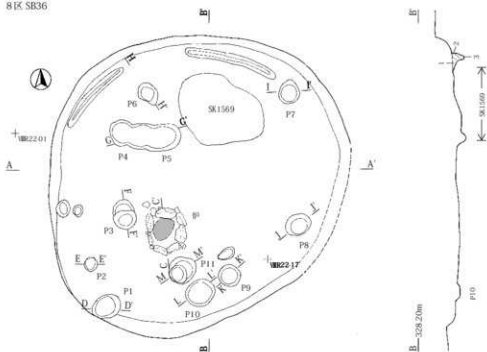
SB35 Pt11

- 1 10YR4/3 にごい・黄褐色砂質シルト



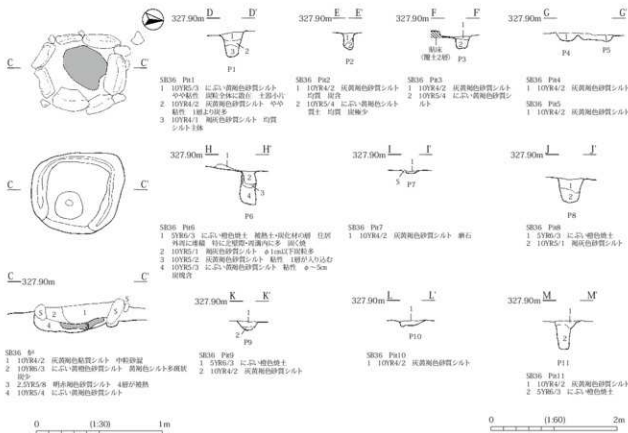
8区縄文時代型穴住居跡 19 (SB35)

8区 SB36



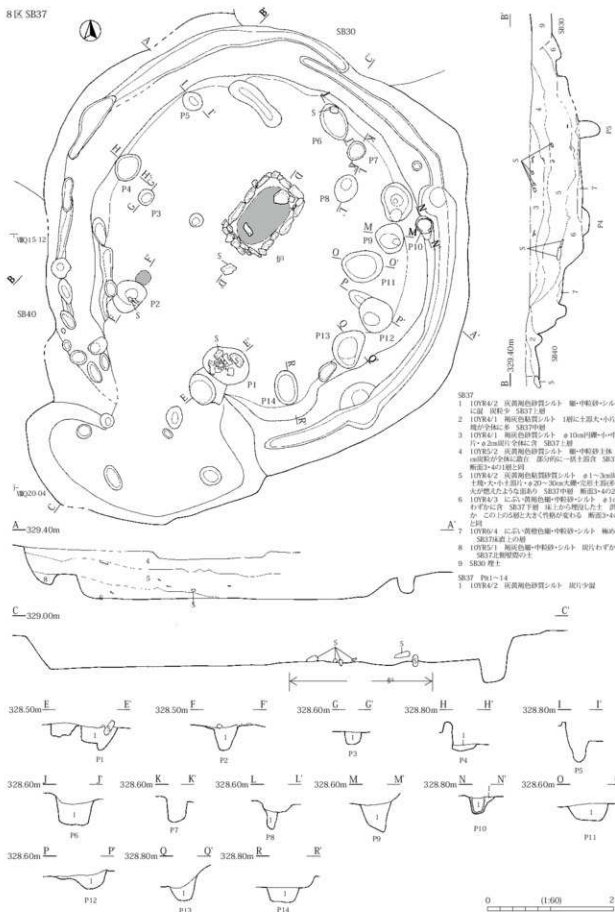
SB36 庭中穴
1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 中粒砂粒 礫径の ϕ 1.0m以内の小石目・小片片全部に含む
2 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト 中粒砂・シルト礫粒に凝結 礫床 微小石散在

SB36 溝(浅溝)
1 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト 細い 底面直
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 底面直
3 10YR3/2 灰褐色粘質シルト 粘付 底面粗多

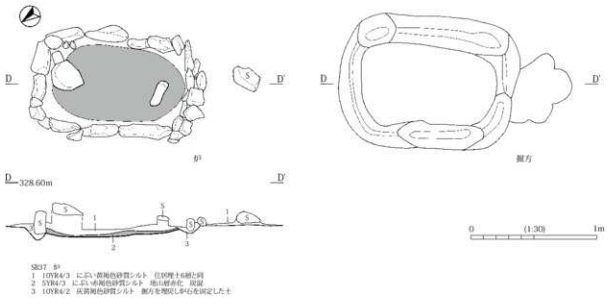


8区縄文時代整穴住居跡 20 (SB36)

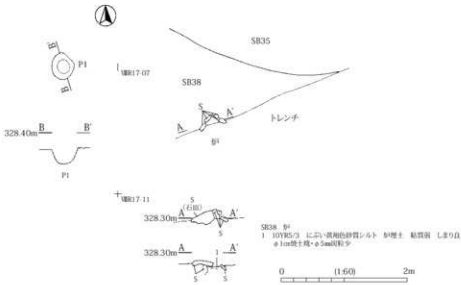
8区 SB37



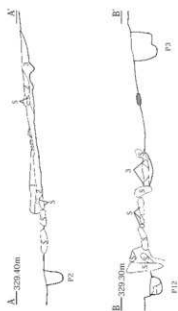
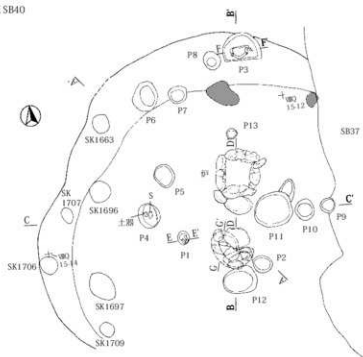
8区SB37 跡



8区SB38

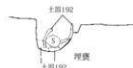
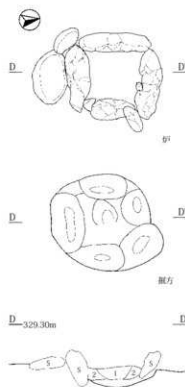


8区SB40



- SB40
- 1 10YR7/4 濃い黄褐色砂質シルト 砂多 断面全体に散在シルト混入
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 礫石混入層 取壊多量
 - 3 10YR5/1 黄褐色砂質シルト 炭粉多量混入 φ1cmシルト散見 取壊多 下位層

- SB40 P11-3
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト

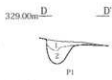
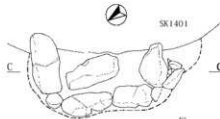
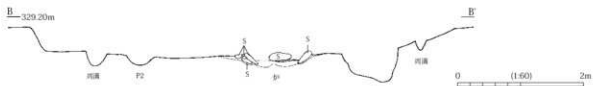
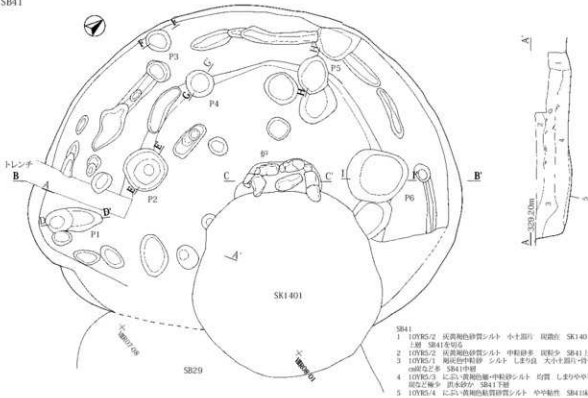


- SB40 埋溝
- 1 10YR3/3 黄褐色砂質シルト

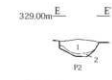
- SB40 P1
- 1 10YR5/4 濃い黄褐色砂質シルト 粘質-しまり少 均質
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 中砂混入 φ5mm断面全体に散

8区縄文時代整穴住居跡 23 (SB40)

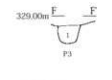
8区SB41



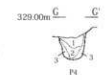
SB41 P1
 1 10YR4/1 黄褐色砂質シルト 粘土層以下層 図説少
 2 10YR5/3 濃い黄褐色砂質シルト 1層より石質 中粒砂主層



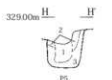
SB41 P2
 1 10YR4/3 濃い黄褐色砂質シルト 20cm以下層 粘土層
 粘全体に分布 しまり強



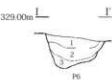
SB41 P3
 1 10YR4/1 黄褐色シルト 石質



SB41 P4
 1 10YR4/3 濃い黄褐色砂質シルト
 2 10YR4/3 濃い黄褐色砂質シルト 1層より砂多
 3 10YR5/6 黄褐色シルト



SB41 P5
 1 10YR4/3 濃い黄褐色砂質シルト
 2 10YR4/3 濃い黄褐色砂質シルト
 3 10YR5/6 黄褐色シルト



SB41 P6
 1 10YR4/3 濃い黄褐色砂質シルト
 2 10YR4/3 濃い黄褐色砂質シルト
 3 10YR5/6 黄褐色シルト

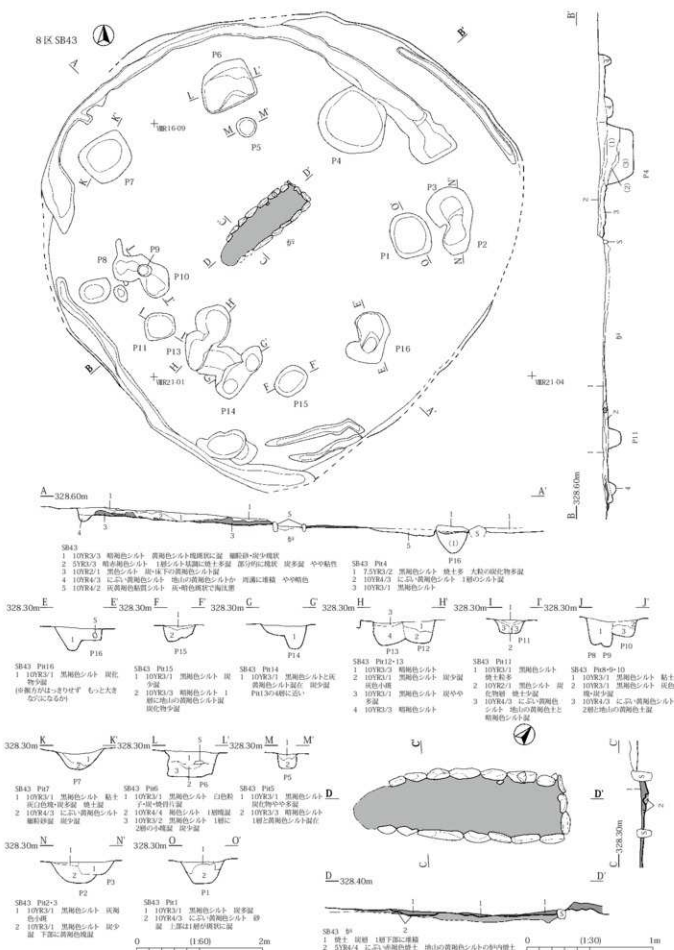


SB41 P4
 1 砂質シルト 大粒 2層目埋土
 2 10YR5/4 濃い黄褐色砂質シルト 側方埋戻し土

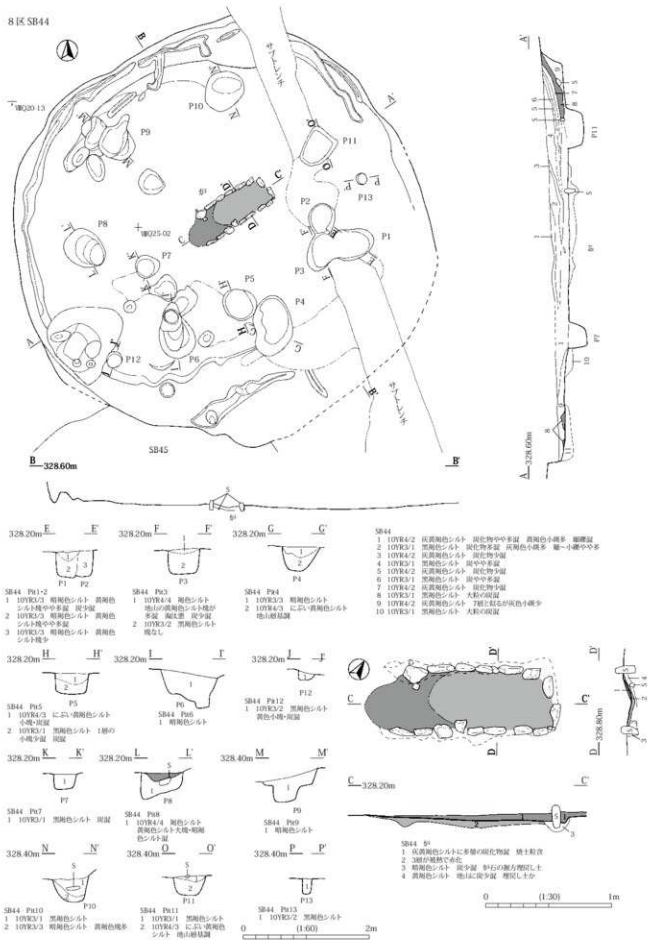


8区縄文時代整穴住居跡 24 (SB41)

図版 88 8 区縄文時代整穴住居跡 25

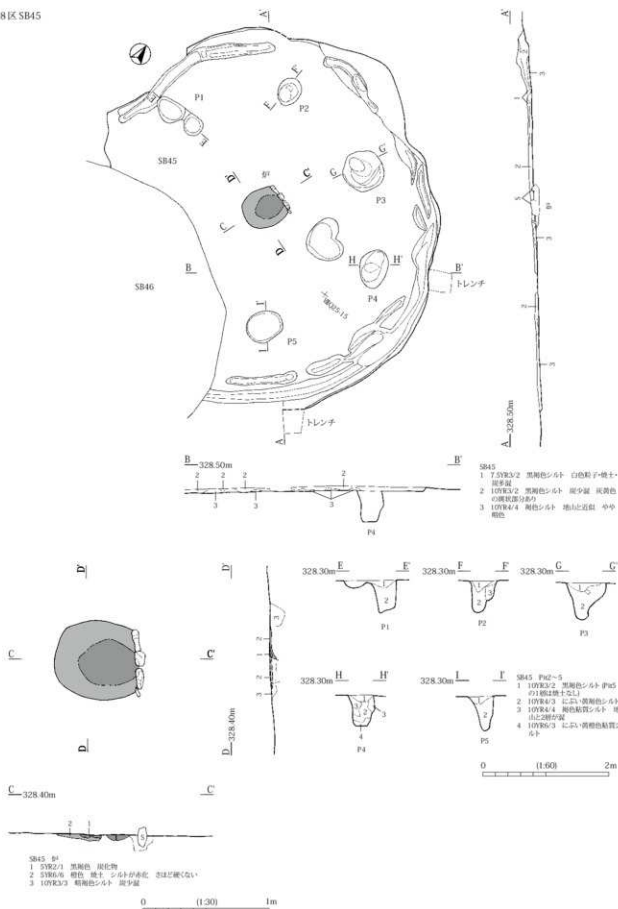


8 区縄文時代整穴住居跡 25 (SB43)



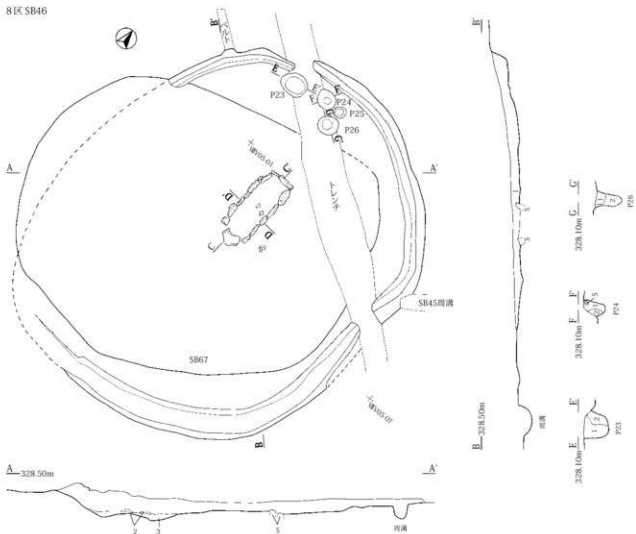
8区縄文時代整穴住居跡 26 (SB44)

8区SB45



8区縄文時代整穴住居跡 27 (SB45)

8区SB46



SB46

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 白色燧石片 炭屑
- 2 10YR5/3 にごい・黄褐色粘質シルト 部分で薄い
- 3 10YR2/2 赤褐色シルト 1層地溝 丸形炭化物多量

SB46 P23

- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 2 10YR6/3 にごい・黄褐色砂質シルト 砂・埋土

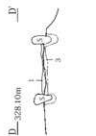
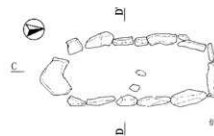
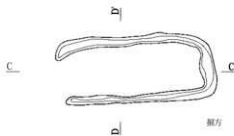
SB46 P24

- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 2 10YR6/3 にごい・黄褐色砂質シルト

SB46 P26

- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 2 10YR6/3 にごい・黄褐色砂質シルト

0 (1:50) 2m



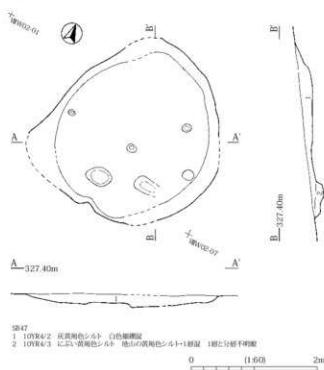
SB46 P23

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 白色燧石片 炭屑
- 2 5YR4/6 赤褐色シルト 3層が連続して埋土
- 3 10YR4/3 にごい・黄褐色シルト 炭屑少量

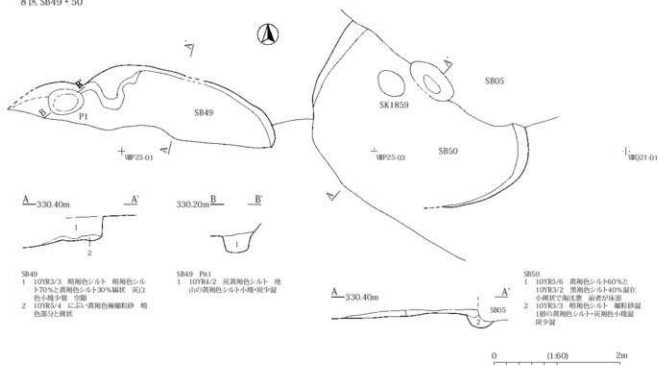
0 (1:20) 1m

8区縄文時代整穴住居跡 28 (SB46)

8区SB47

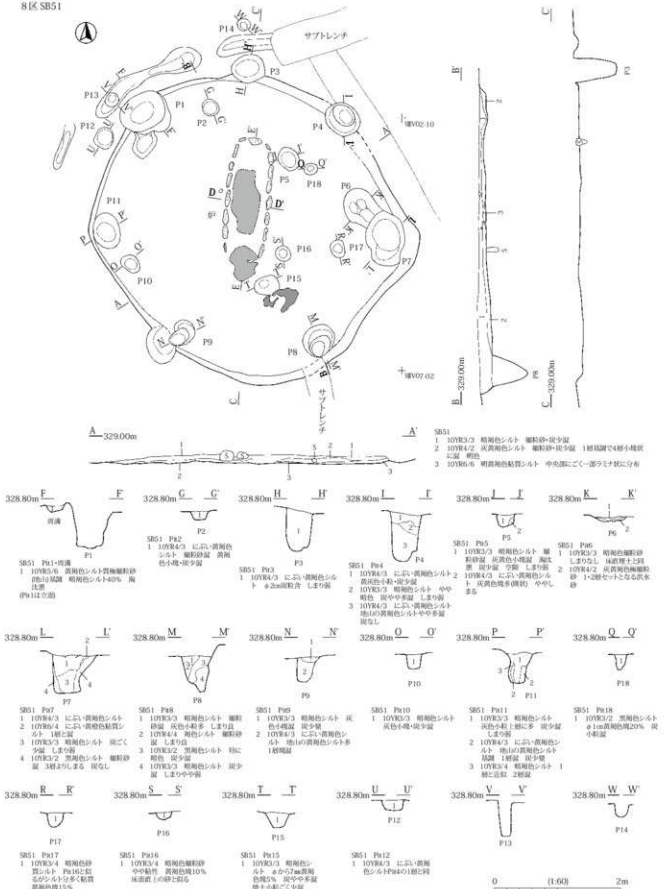


8区SB49・50



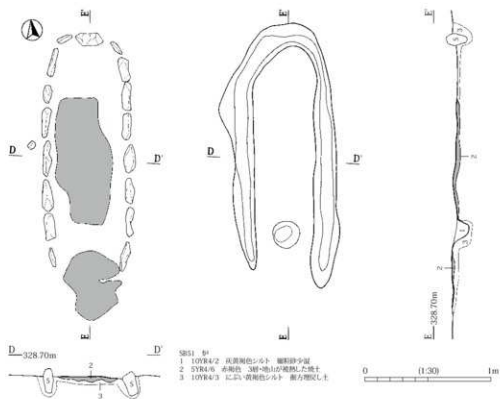
8区縄文時代竪穴住居跡 29 (SB47・49・50)

8区SB51

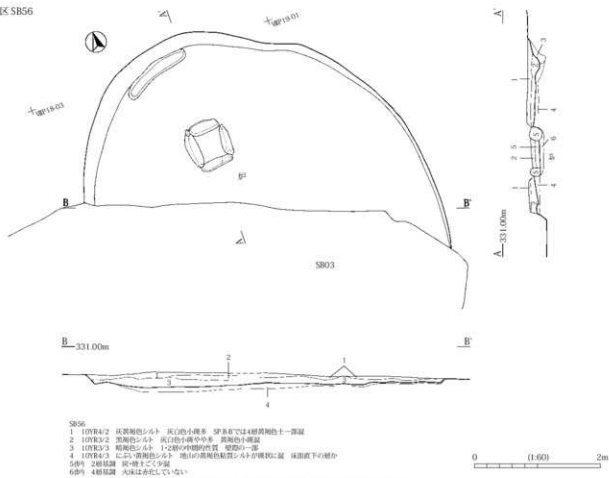


8区縄文時代整穴住居跡 30 (SB51)

8区 SB51 跡

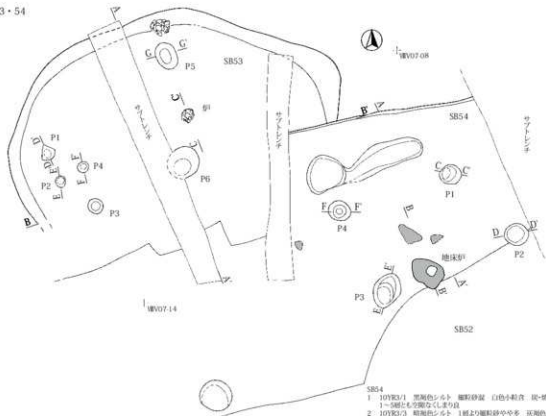


8区 SB56



8区縄文時代竪穴住居跡 31 (SB51・56)

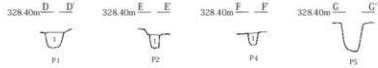
8区 SB53・54



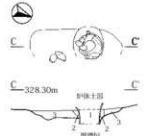
- SB53
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 燧石中や多量 灰土中少量
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト 1層に分布 中や褐色 燧石中少量
 - 3 10YR3/1 黒褐色シルト 灰土中や多量 黒褐色シルトがラミナ状連続 燧石である



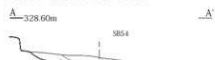
- SB53
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 燧石中や多量 灰土中少量
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト 1層に分布 中や褐色 燧石中少量
 - 3 10YR3/1 黒褐色シルト 灰土中や多量 黒褐色シルトがラミナ状連続 燧石である



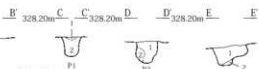
- SB53 P1-2-4
- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト



- SB53 P4
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 灰土中少量 燧石中少量
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト 少量 暗褐色シルトがラミナ状連続
 - 3 灰10YR4/2 黄褐色シルト 白色燧石中や多量 灰土中少量



- SB54
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 燧石中や多量 白色土中や多量 1層に分布 燧石中少量
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト 1層より燧石中や多量 灰褐色土塊状に分布 燧石中
 - 3 10YR3/4 暗褐色シルト 灰土中
 - 4 5YR3/3 粘赤褐色土 6層に分布
 - 5 10YR3/3 暗褐色シルト 燧石中や多量

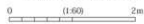


- SB54 P1
- 1 10YR4/4 暗褐色シルト 燧石中少量
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト 燧石中少量
- SB54 P2
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 燧石中少量
 - 2 10YR4/3 灰色土 燧石中少量
- SB54 P3
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 燧石中少量
 - 2 10YR4/3 灰色土 燧石中少量



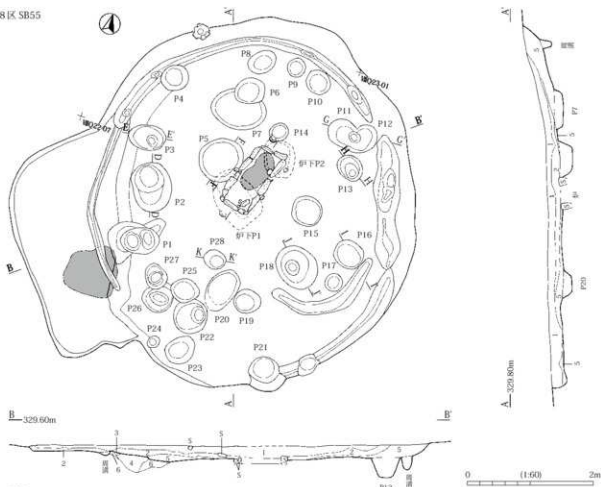
- SB54 P4
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 燧石中少量

- SB54 地味P4
- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト 灰土中少量
 - 2 5YR4/4 粘赤褐色土 燧石中少量
 - 3 10YR4/3 灰色土 燧石中少量



8区縄文時代整穴住居跡 32 (SB53・54)

8区SB55



SB55

- 1 109R5/2 灰黄褐色砂質シルト 深い 4cmほど下層全体に含 上層堆積土
- 2 109R4/1 灰黄色砂質シルト 扇形 壁中央に位置した状況(φ2-3cmほど)
- 3 109R5/2 灰黄褐色砂質シルト 砂少 土に透過したに非難 比較的均質 土盛り目

- 4 109R4/2 灰黄褐色 シルト塊層(シルト塊層:厚 10cmほど)0.7:0.3
- 5 109R4/2 灰黄褐色砂質シルト 塊層(厚 10cmほど)0.7:0.3
- 6 109R5/2 灰黄褐色シルト(厚 10cmほど)0.7:0.3

329.30m D



SB55 P2

- 1 109R4/1 灰黄色砂質シルト φ10cm程度 粘性 柱状の?
- 2 109R5/3 に近い灰黄色砂質シルト φ2-3cmほど多数 傾斜した上
- 3 109R5/2 灰黄褐色砂質シルト 塊状
- 4 109R5/3 に近い灰黄色砂質シルト シルト塊層 砂粒少
- 5 109R4/2 灰黄褐色砂質シルト 均質 土盛り目

329.30m E



SB55 P3

- 1 109R5/3 に近い灰黄色砂質シルト
- 2 109R4/2 灰黄褐色砂質シルト

329.30m F



SB55 P5

- 1 109R4/1 灰黄色砂質シルト φ10cm程度多数
- 2 109R5/3 に近い灰黄色砂質シルト シルト塊層 扇形全体に含

329.30m G



SB55 P11-12

- 1 109R5/2 灰黄褐色砂質シルト 塊状 粘性 均一
- 2 109R5/3 に近い灰黄色砂質シルト
- 3 109R4/2 灰黄褐色砂質シルト
- 4 109R5/3 に近い灰黄色砂質シルト

329.30m H



SB55 P13

- 1 109R5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 2 109R4/1 灰黄色砂質シルト
- 3 109R5/2 灰黄褐色砂質シルト

329.30m I



SB55 P16

- 1 109R4/1 灰黄色砂質シルト
- 2 109R4/2 灰黄褐色砂質シルト
- 3 109R4/2 灰黄褐色砂質シルト 均質砂
- 4 109R5/3 に近い灰黄色砂質シルト

329.30m J



SB55 P18

- 1 109R5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 2 109R4/1 灰黄色砂質シルト
- 3 109R5/3 に近い灰黄色砂質シルト
- 4 109R4/2 灰黄褐色砂質シルト

329.30m K



SB55 P28

- 1 109R5/2 灰黄褐色砂質シルト(扇形)
- 2 109R4/1 灰黄色砂質シルト(扇形)

329.20m C



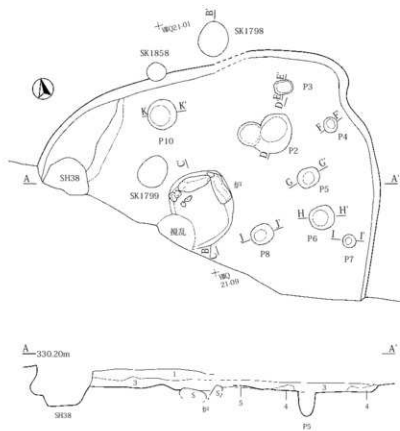
SB55 K'

- 1 109R5/2 灰黄色砂質シルト 粘性 土盛り目 φ1-2cm程度多数に含 粘土粒層
- 2 109R6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性 灰・粘土粒層に含
- 3 109R6/2 灰黄褐色砂質シルト 塊土層全体に含 灰土層で厚さ5-10cm程度
- 4 109R6/2 灰黄褐色砂質シルト 灰土層の中心部 粘性 土盛り目

0 (1:30) 1m

8区縄文時代竪穴住居跡 33 (SB55)

8区 SB57



SB57

- 1 10YR2/3 暗褐色シルト 細砂質・白色小礫少量 灰黄褐色小礫あり。土まじりよく空層なし。
 - 2 10YR2/4 にごい・黄褐色粘質シルト 粘土質。底少量
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト 1層に透氣し、まじりよく空層なし。
 - 4 10YR2/4 にごい・黄褐色シルト 地山層・黄褐色シルトと3層が混
 - 5 10YR2/4 にごい・黄褐色粘土 底層 黄・褐色少
 - 6 10YR3/2 黒褐色シルト 3層混濁 塊土小礫 中砂質に堆積
 - 7 5YR2/2 暗赤褐色シルト 粘質 粘土小礫 中砂質、暗赤褐色粘土和20% 灰・白砂少量
- 断面土層
- 9 10YR3/2 黒褐色シルト 粘質 ϕ 1cm7層小礫20% 埋戻し土か
 - 10 10YR2/3 暗褐色粘質シルト 黄褐色シルト小礫3% 断面埋戻し土か
- (※6-7層は砂層流でも懸濁)

SB57 Pit2

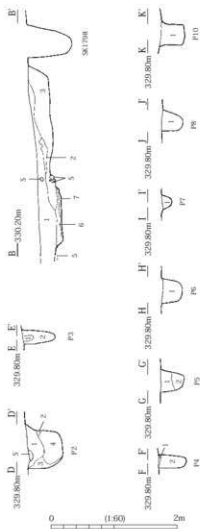
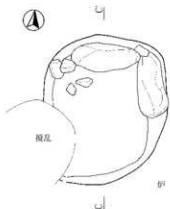
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 灰白小礫多 底少量
- 2 10YR6/4 にごい・黄褐色粘質シルト 粘質シルト塊
- 3 10YR2/3 暗褐色シルト 黄褐色小礫30%
- 4 10YR2/3 暗褐色シルト 黄褐色塊10%

SB57 Pit3

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト 灰白小礫多 底少量
- 2 10YR5/4 にごい・黄褐色シルト 灰白小礫多

SB57 Pit4

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 2 10YR5/4 にごい・黄褐色シルト



SB57 Pit5

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト 灰白小礫多 細砂質 中・多
- 2 10YR5/4 にごい・黄褐色シルト

SB57 Pit6

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト

SB57 Pit7

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト

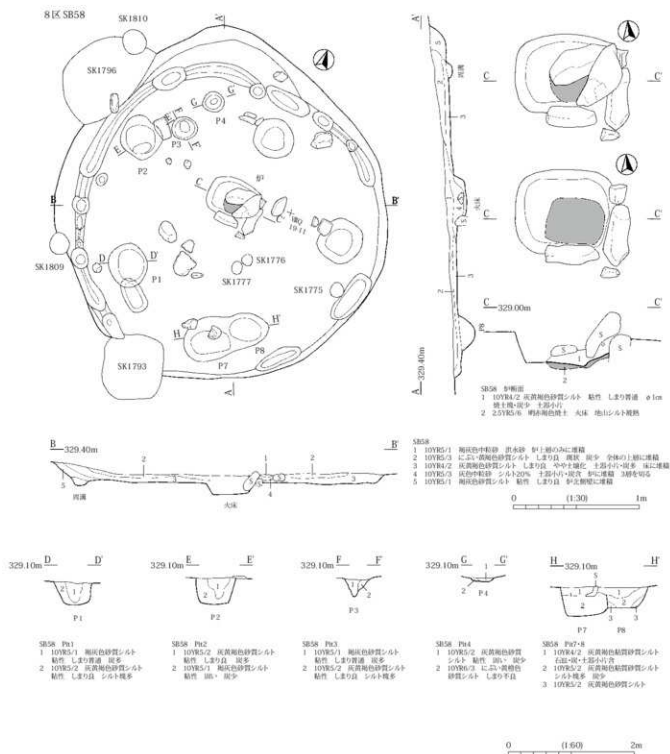
SB57 Pit8

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト

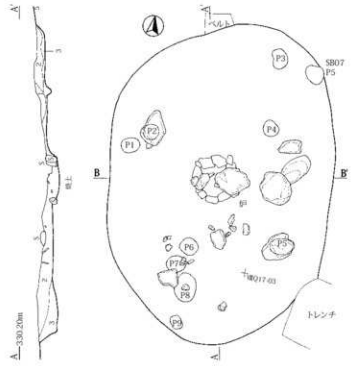
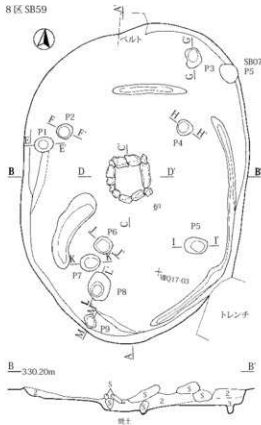
SB57 Pit10

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト 灰白小礫多 細砂質 中・多 底少

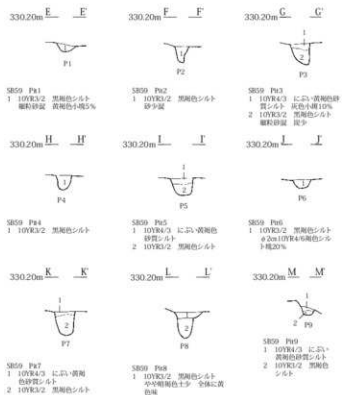
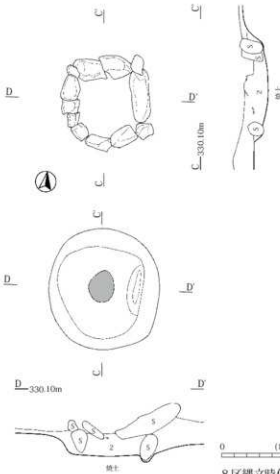
8区縄文時代整穴住居跡 34 (SB57)



8区縄文時代竪穴住居跡 35 (SB58)

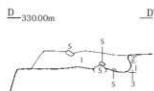
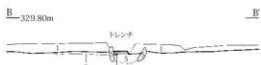
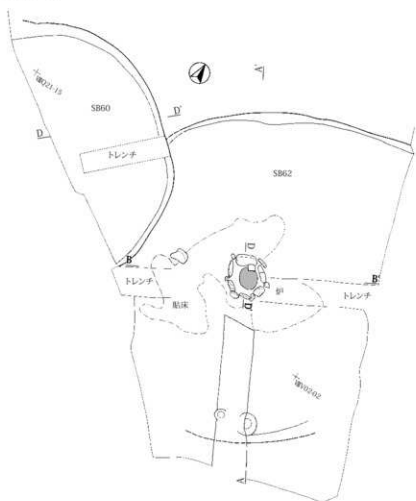


- SB59
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 黒褐色小礫混、白色礫粉少量 粘に富む
 - 2 10YR4/2 灰黒褐色シルト 灰黒褐色小礫多
 - 3 10YR4/3 に富み、黄褐色シルト 2層に区別 地中の黄褐色シルト塊状に混



8区縄文時代整穴住居跡 36 (SB59)

8区SB60・62



- SB62
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 礫粒砂質 白色砂子・炭粒少量
 - 2 10YR5/6 暗褐色粘質シルト 少量に分布 礫・炭粒
 - 3 5YR4/6 赤褐色 砂質粘土
 - 4 5YR4/6 赤褐色 大塚の焼土 上面に炭化物が分布する
 - 5 10YR3/4 暗褐色粘質砂質 礫1mm炭褐色0% 中層方

- SB60
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 炭褐色の細礫質 炭中少量
 - 2 10YR4/4 褐色シルト 粘土粘質か 炭粒混
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 1~2層が混在

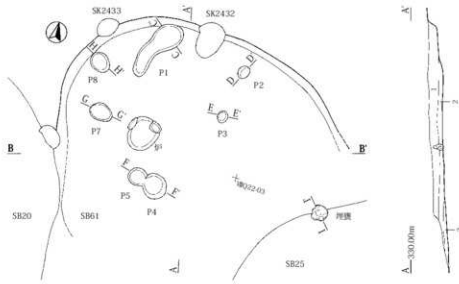


- SB62 B'
- 1 5YR4/6 赤褐色土 大塚の焼土 上面に炭化物が分布する
 - 2 10YR3/4 暗褐色シルト 礫粒砂質 炭褐色0.1mm0% 中層方



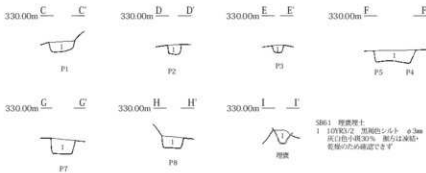
8区縄文時代竪穴住居跡 37 (SB60・62)

8区SB61



- SB61
- 1 10YR3/2 黄褐色シルト ϕ -6mm以上の細砂小礫20%
灰-10%粘土少量 空堀なし(1)
 - 2 10YR3/3 黄褐色シルト 1層シルト基調 30%砂質シルト
小礫灰に混 中黄褐色 灰少量 1-2層の分層は不明瞭
 - 3 10YR3/4 土色 黄褐色砂質シルト 灰色粘土50%

- SB61 P41-5-7-8
- 1 10YR3/3 黄褐色シルト 灰化物少量 住居埋土と同と近似

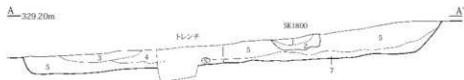
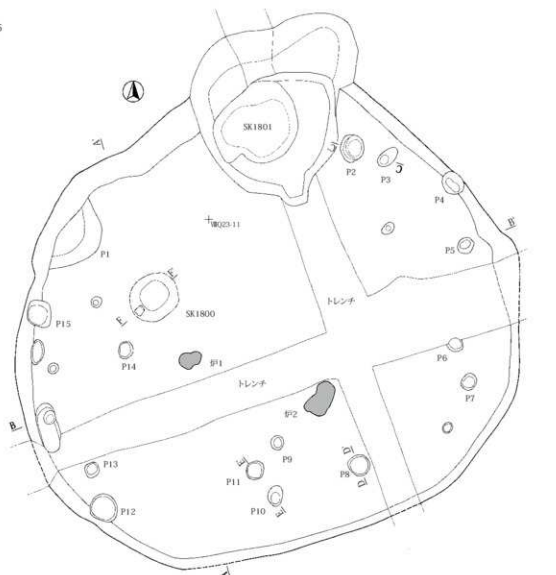


- SB61 埋居土
- 1 10YR3/2 黄褐色シルト ϕ 3mm
灰口色小礫30% 灰方は凝結・
乾燥のため確認できず

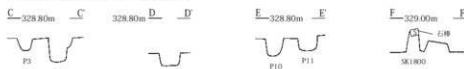


8区縄文時代整穴住居跡 38 (SB61)

8区 SB65



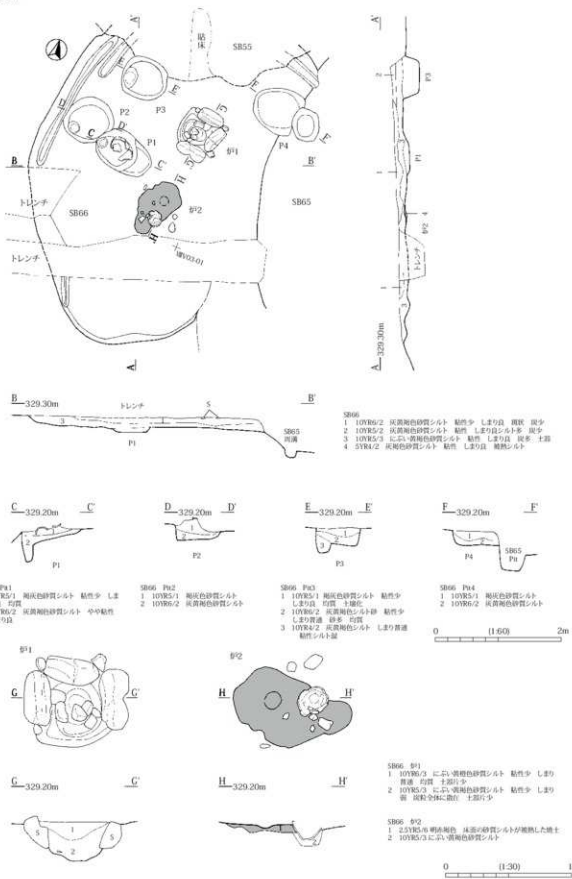
- SB65
- | | | | |
|---------------------|--------------|-------------------------|---------------------|
| 1 10YR5/4 褐色細砂質シルト | しまり目 中粒砂 | 5 10YR5/2 灰黄色の中粒砂 | 盛り込み φ1m以下(埋没) 土層不齊 |
| 2 10YR5/2 灰黄色細砂質シルト | 80・シムラ6・中粒砂 | 6 10YR5/3 にじみ・灰褐色細砂質シルト | しまり目 砂・シルト混在 土層不齊 |
| 3 10YR5/2 灰黄色細砂質シルト | しまり目 石質 融結砂凝 | 7 10YR5/4 にじみ・灰褐色細砂質シルト | しまり目 やや土層化 埋没不齊 |
| 4 10YR6/6 褐色細砂質シルト | 60・均質 シルト基質 | | |



- | | | | | | |
|---------------------------|----------------------|---------------------------------|---------------------|---------------------------|------------------------------|
| SB65 土層不齊 | P84 10YR5/1 褐色細砂質シルト | 黏性 しまり目 φ2m以下(埋没) 埋没 他とは異なる土層不齊 | P88 10YR5/1 褐色シルト質砂 | φ1m以下(埋没) 埋没 全体に散在 土層化 | P13 10YR5/2 灰黄色シルト質砂P12と同 |
| P81 10YR5/1 褐色シルト質砂 | 粘質普通 しまり目 均質 | P85 10YR5/2 灰黄色シルト質砂 | P12と同 | P89 10YR5/2 灰黄色シルト質砂P12と同 | P14 質頁 10YR5/1 褐色細砂質シルトP13と同 |
| P82 10YR5/2 灰黄色シルト質砂 | 粘質普通 しまり目 均質 硬少 | P86 10YR5/2 灰黄色シルト質砂P12と同 | P10と同 | P90 10YR5/1 褐色シルト質砂P13と同 | |
| P83 10YR5/2 灰黄色シルト質砂P12と同 | | P87 10YR5/2 灰黄色シルト質砂P12と同 | | P11 10YR5/1 褐色シルト質砂P13と同 | |

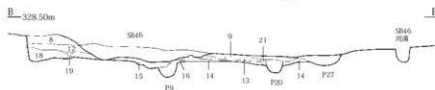
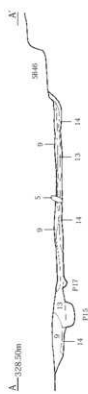
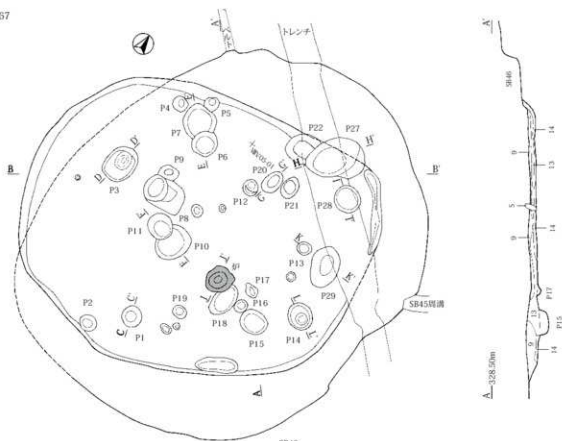
8区縄文時代整穴住居跡 39 (SB65)

8区 SB66

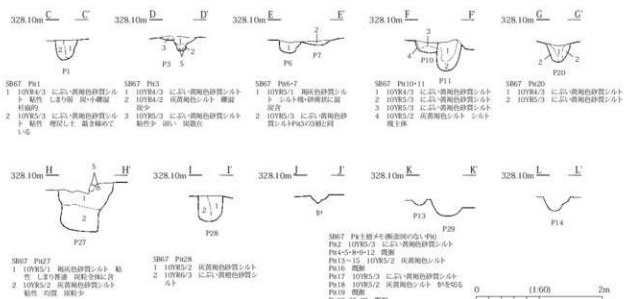


8区縄文時代整穴住居跡 40 (SB66)

8区 SB67

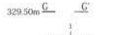
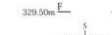
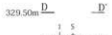
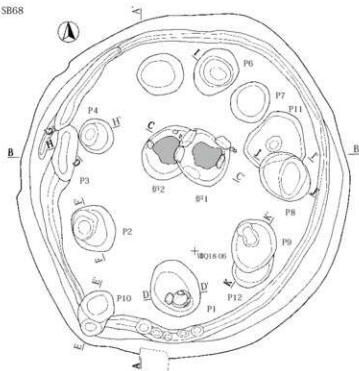


- SB67(50460)下
- 8 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト φ10cm以下埋差 粘質
 - 9 10YR6/3 紅褐色砂質シルト φ10cm以下埋差 弱粘 腐植
 - 12 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 埋差 腐植
 - 13 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘質 φ10cm以下埋差 中粘土埋差
 - 14 10YR5/2 灰黄褐色シルト 床土埋差 φ10cm以下埋差シルト埋差
 - 15 10YR5/1 細灰褐色シルト 小穴への埋差 粘質 腐植埋差
 - 16 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 埋差 腐植
 - 18 10YR6/2 紅褐色砂質シルト 埋差 腐植
 - 19 10YR5/2 灰黄褐色シルト埋差



8区縄文時代竪穴住居跡 41 (SB67)

8区 SB68



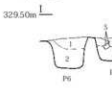
- SB68 Pn1
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性少、土質均整、硬多、地土粘少
 - 2 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性少、土質均整、硬多、地土粘少、埋没

- SB68 Pn10
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトPn4 の2層と同
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトPn4 の2層と同

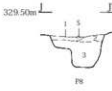
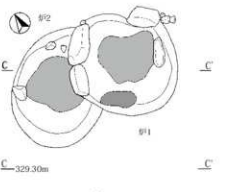
- SB68 Pn2
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトPn10 粘性
 - 2 10YR6/3 に近い黄褐色砂質シルト ϕ 1cm程度、地土粘附、粘性
 - 3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト ϕ 1cm 程度、粘性

- SB68 Pn3
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性、土質均整、硬多
 - 2 10YR6/2 黄褐色砂質シルト 粘性、土質均整、硬多、小礫シルト多量

- SB68 Pn4
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトPn1 の2層と同
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性、土質均整、 ϕ 1-2cm程度、硬多、小礫シルト多量
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性、土質均整、硬多、 ϕ 1cmシルト多量



- SB68 Pn6
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性、土質均整、シルト硬多
 - 2 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性、土質均整、シルト硬多
- SB68 Pn7
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
 - 2 10YR6/3 に近い黄褐色砂質シルト
 - 3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト



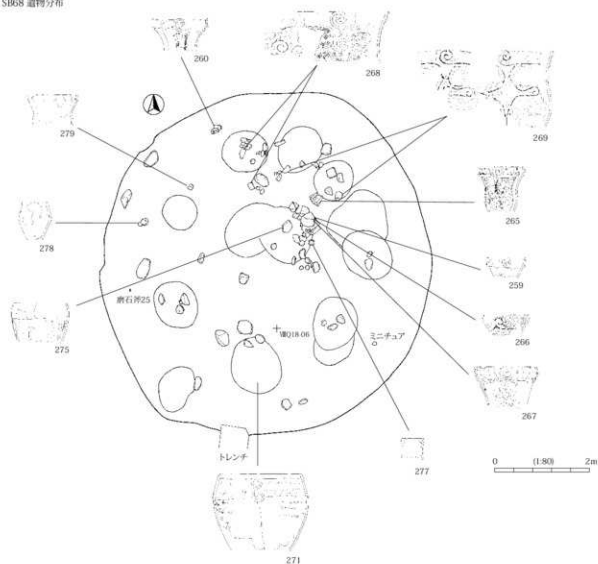
- SB68 Pn8
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 硬多、土質均整
 - 2 10YR6/3 に近い黄褐色砂質シルト
 - 3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト

- SB68 Pn9
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
 - 2 10YR6/3 に近い黄褐色砂質シルト
 - 3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト

- SB68 Pn12
- 1 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 硬多、 ϕ 1-2cm、土質均整
 - 2 2.5YR5/6 明赤褐色砂質シルトが埋没、土層中の大礫
 - 3 2.5YR5/6 明赤褐色砂質シルトが埋没、土層中の大礫

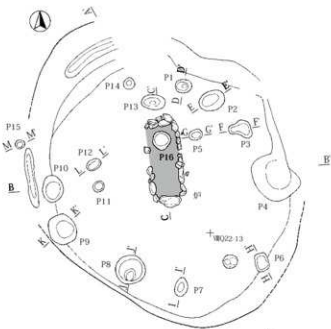
8区縄文時代整穴住居跡 42 (SB68)

8区SB68 遺物分布



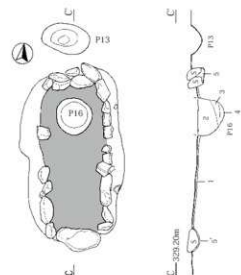
8区縄文時代竪穴住居跡 43 (SB68)

8区 SB69



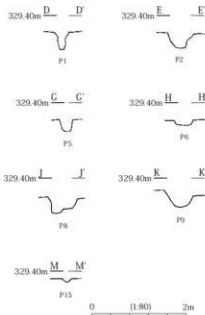
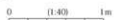
SB69

- 14 109K3/2 黒褐色粘質シルト 炭小粒多 粘土粒少
 - 16 109K2/3 暗褐色シルト a2~5mm黄褐色小塊10% 全体に濃色灰 炭粒少量(準)正多
 - 17 109K2/1 黒褐色シルト 炭多量 a0.5~1mm黄褐色小塊10%
 - 18 109K3/2 黒褐色シルト a0.5~2mm黄褐色小塊30% 炭粒少量
 - 19 109K5/4 に近い黄褐色シルト 暗褐色シルト基調 黄褐色シルト小塊50% 炭粒少量
 - 20 109K5/3 暗褐色シルト a2~5mm黄褐色小塊3% 炭粒少量
 - 21 109K5/4 に近い黄褐色粘質シルト
- 黄褐色相は地中の粘質シルト被殻面と想われる



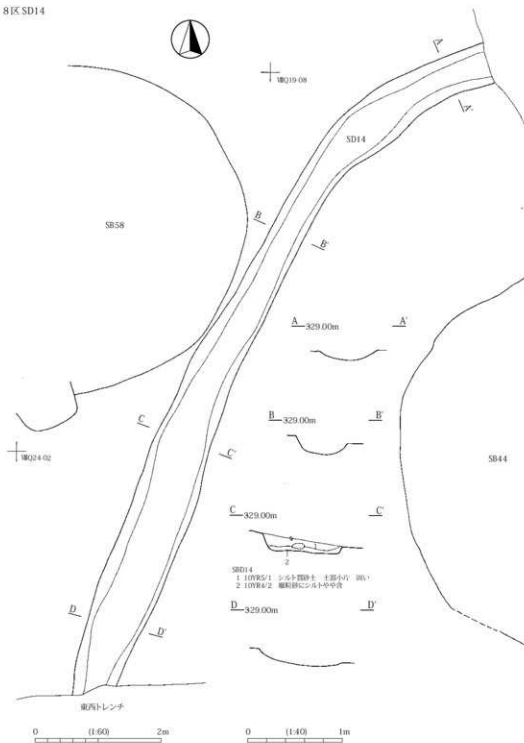
SB69 中

- 1 5YR3/4 暗赤褐色土 地中の黄褐色シルト 縦なくがらび
- 2 109K5/4 暗褐色シルト 地中のa1cm黄褐色小塊10% 炭少
- SB205(中)の可能性大
- 3 109K3/1 黒褐色シルト a2cm黄褐色小塊20% 炭少
- 4 3層109K2/1黄褐色シルトa10%黄褐色小塊10%炭粒少量
- 5 109K4/3 に近い黄褐色シルト 粘土層での埋戻し主
- 6 東方とはどなし 暗褐色シルト



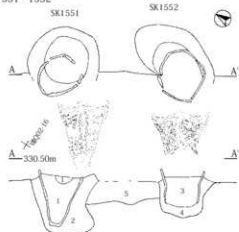
8区縄文時代整穴住居跡 44 (SB69)

8区SD14



8区縄文時代溝跡 (SD14)

8区 SK1551・1552



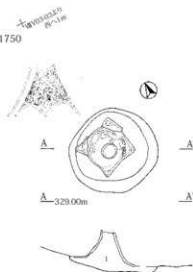
SK1551・1552

SK1551 1-2層、SK1552 3-5層

- 1 10YR5/1 褐色砂質土 砂利 φ2m以下の礫約50% 中粒砂
- 2 10YR4/1 褐色砂質シルト 砂
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト 黏土 しまり目 黄褐色シルト粒・φ1m黒褐色シルト粒全体に混 埋裏層方の埋戻し土
- 4 10YR4/1 褐色砂質シルト φ1m(白)砂子全体に混在 砂
- 5 10YR4/3 に近い黄褐色 土砂と混在 砂

SK1552 1-5層黄褐色砂質シルト φ1.5m炭粒全体に混在 φ1-2m層部に黄色砂質土・黒褐色土が7:3で混在

8区 SK1750

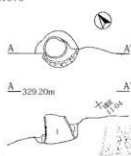


SK1750

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 中粒砂にシルト混

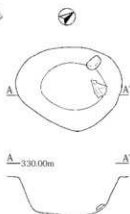
8区 SK1557

8区 SK1570

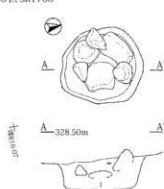


SK1570

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト シルト混主体 埋戻し土



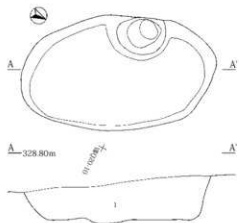
8区 SK1700



SK1700

- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 黏性強 φ1m炭粒・礫・土屑あり

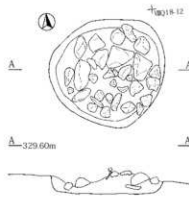
8区 SK1722



SK1722

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 黏性少 しまり目 砂粒全体に混在

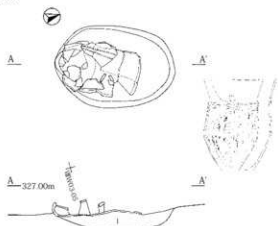
8区 SK1752



0 (1:25) 50cm

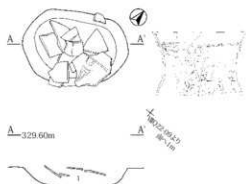
8区縄文時代土坑1 (SK1551・1552・1557・1570・1700・1722・1750・1752)

8区 SK1553



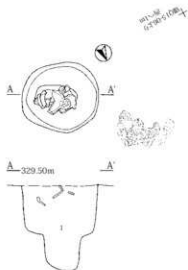
SK1553
1 10YR3/3 相褐色シルト 細砂少 しまり有 空層なし

8区 SK1571



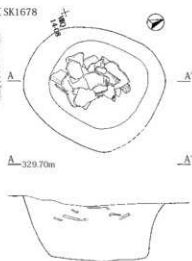
SK1571
1 10YR4/1 相白色砂質シルト 粘性 灰土層小

8区 SK1660

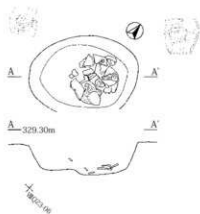


SK1660
1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性 しまり良 φ1cm
以下に泥多 φ1cm黄褐色シルト混多

8区 SK1678

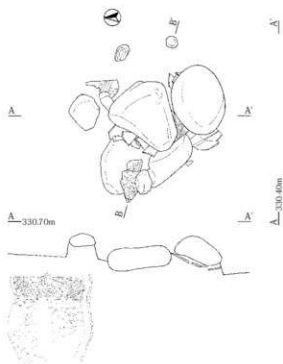


8区 SK1860

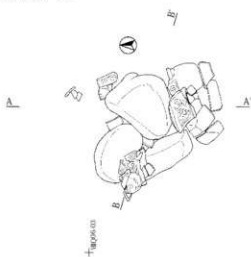


0 (1.25) 50cm

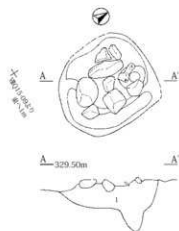
8区SK1522 1面



8区SK1522 2面

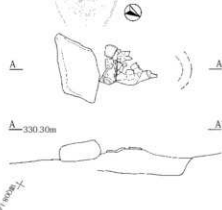


8区SK1667

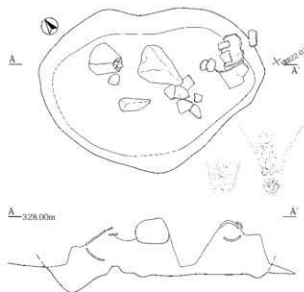


SK1667
1 100W/2 灰黄褐色砂質シロト 粘土少 焼土 埋土

8区SK1559

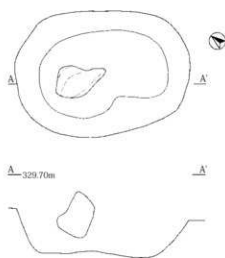


8区SK1569

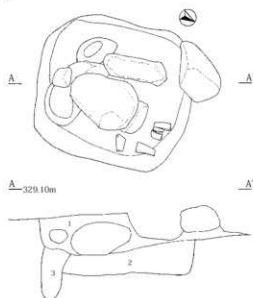


8区縄文時代土坑3 (SK1522・1559・1569・1667)

8区 SK1765

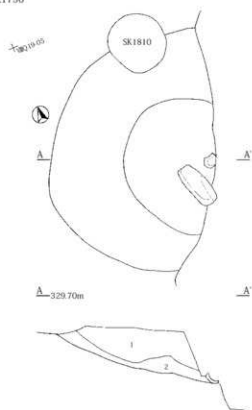


8区 SK1793



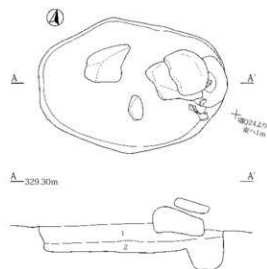
- SK1793
 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 跡、周壁直 大断面
 2 10YR6/4 赤い黄褐色 0.4m以下シルト塊多 壁土
 3 10YR6/1 黄褐色砂質シルト 断面 均質 完全無底直

8区 SK1796



- SK1796
 1 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 均質
 2 10YR6/3 赤い黄褐色 シルト上層 土壁均直

8区 SK1803

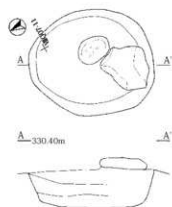


- SK1803
 1 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 均質
 2 10YR6/3 赤い黄褐色砂質シルト シルト多 均質 底土土

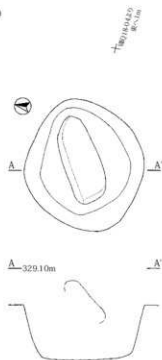
8区縄文時代土坑4 (SK1765・1793・1796・1803)

0 (1:25) 50cm

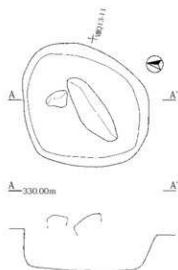
8区 SK2265



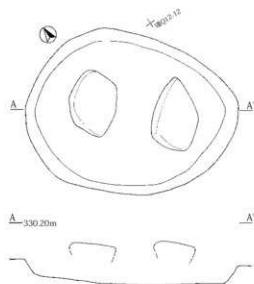
8区 SK2409



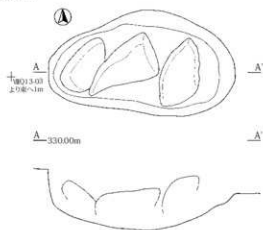
8区 SK2408



8区 SK2410

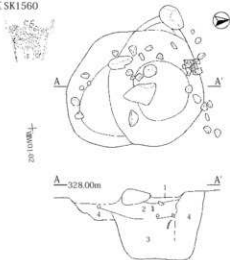


8区 SK2411



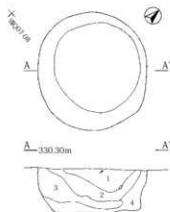
0 1.25 50cm

8区 SK1560



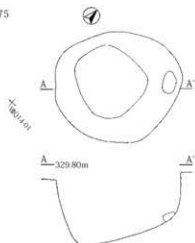
- SK1560
 1 10YR3/2 黒褐色シルト 細粒砂・炭少層
 2 10YR2/3 黒褐色シルト 炭多層 竹筒・埋戻
 3 10YR3/4 暗褐色シルト 炭少層 4層層の黒色腐葉びら
 4 10YR3/3 暗褐色シルト 灰色小塊多 しまり目

8区 SK2272

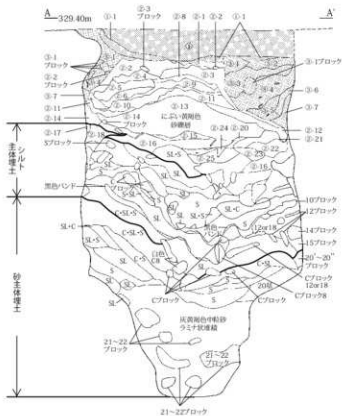
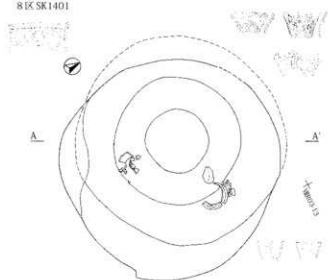


- SK2272
 1 10YR4/1 褐色砂質シルト 粘性 しまり甚速 土器片・燻・e1cm程度
 全層に入る
 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや速 土器破片含
 3 10YR5/3 灰色黄褐色砂質シルト シルト主 炭少 埋土
 4 10YR5/1 褐色砂質シルト 粘性少 しまり目 炭多

8区 SK2375



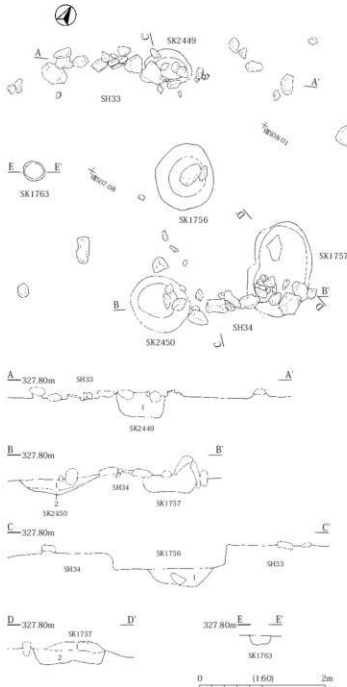
8区 SK1401



- ① 上層被覆埋土 S : 砂
 ② 再掘削穴の壁方と埋土 SL : シルト
 ③ 当初の壁方と埋土 C : 粘土

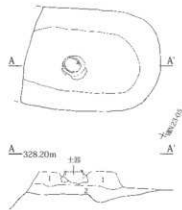
8区縄文時代土坑6 (SK1401・1560・2272・2375)

9区SH33・34, SK1756・1757・1763・2449・2450

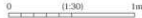


- SK1756
 中間層の底より15cm以上で発見した
 1 10YR4/3 褐色細砂質シルト 壁土が崩れり赤みを帯びる部分あり 灰・竹炭少 地上は均色 しまり面
- SK1757
 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト 灰白色小粒多 細砂砂質
 2 10YR3/2 黒褐色 1粒と近型 黒褐色シルトや中多 細砂砂やや多 白色細粒含まザラザラした土層
- SK1763
 1 10YR4/2 黒褐色シルト 細砂砂質 白色細粒砂質
- SH33 下層土坑近辺
 平面ではよく見えたが、断面では不明瞭な層がない
- SK2449
 1 10YR4/2 灰黄褐色 地上の砂層よりわずかに均色でシルトが多 しまり面 均質なし
- SH34下層土坑中・下層下 (0032)
 SK2450
 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト 細砂砂質 白色細粒やや多
 2 10YR4/3 にごい黄褐色 1粒と近型 白色粒少 やや均色
 3 10YR4/4 均色シルト 細砂砂質 白色粒子をほとんど含まない均色
 4 1-2粒と近型 均質なし(均色)
 5 10YR4/4 均色細砂砂 均質物なし

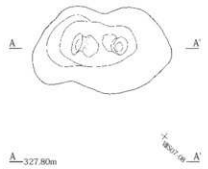
9区 SK1764



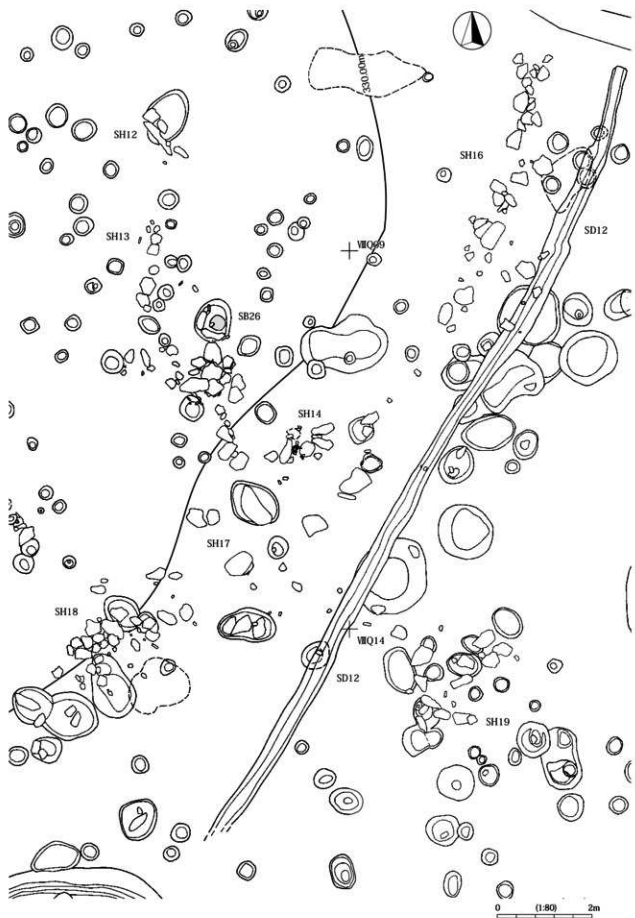
- SK1764(0033)
 1 10YR3/2 灰褐色シルト 黄褐色細砂質 白色細粒少 しまり面
 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト 地上の黄褐色細砂質 地表に露出し均色ない しまり面 均色面では白色細粒が見えるが層上にはこの層がない



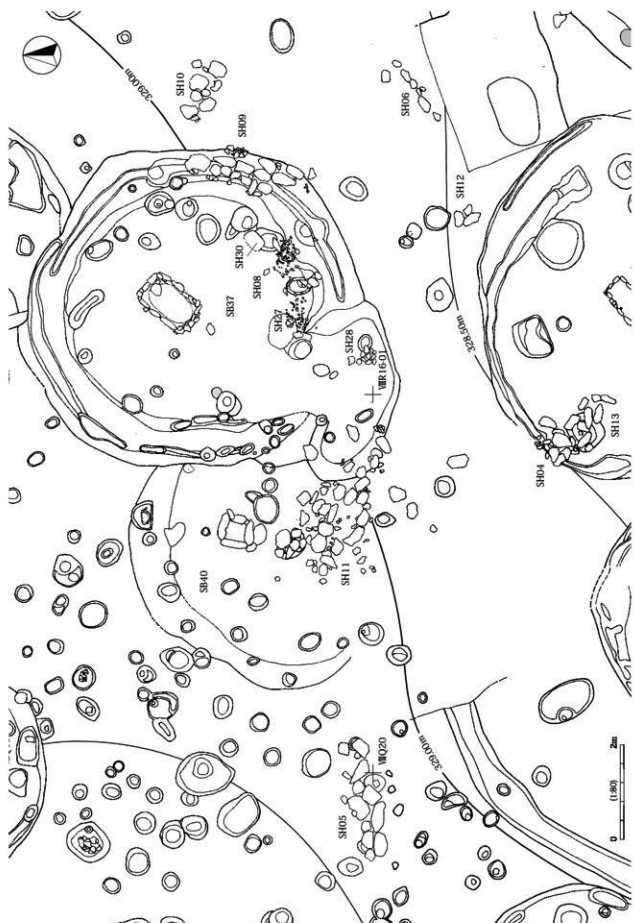
9区 SK1755



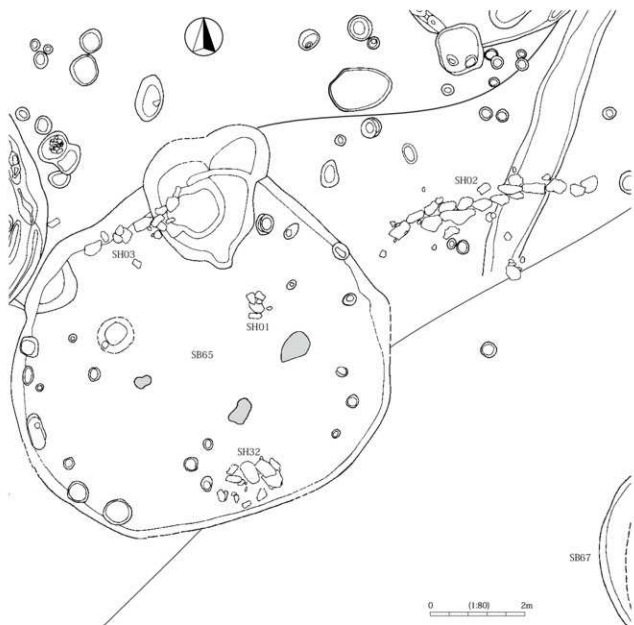
9区縄文時代配石遺構 (SH33・34)、土坑 (SK1756・1757・1763・2449・2450)、弥生時代土坑 (SK1755)



8区縄文時代配石遺構 1 (SH12 ~ 14 · 16 ~ 19)

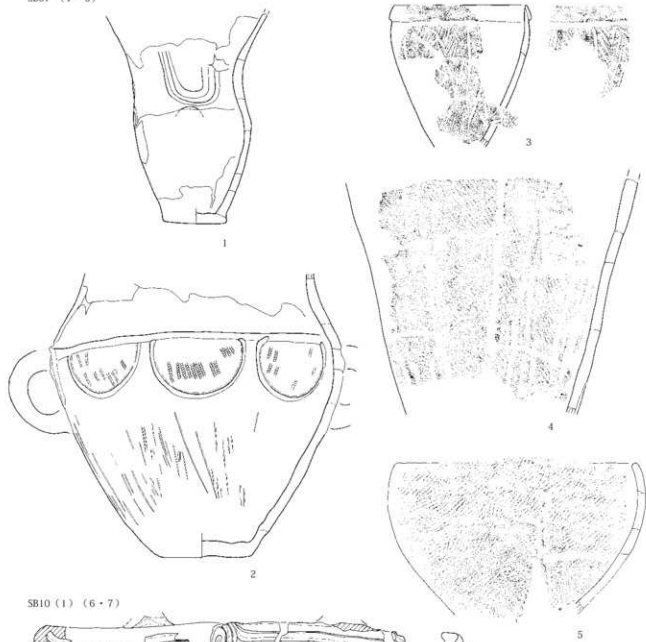


8区縄文時代配石遺構 2 (SH05・06・08～12・27・28・30)

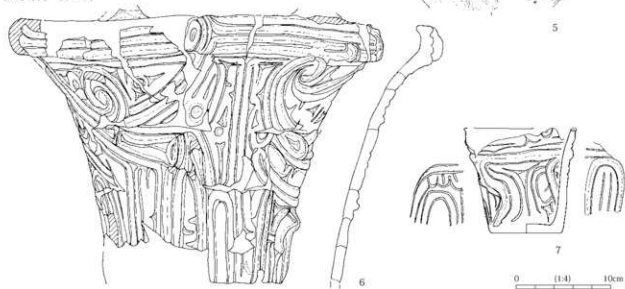


8区縄文時代配石遺構3 (SH01 ~ 03・32)

SB07 (1~5)

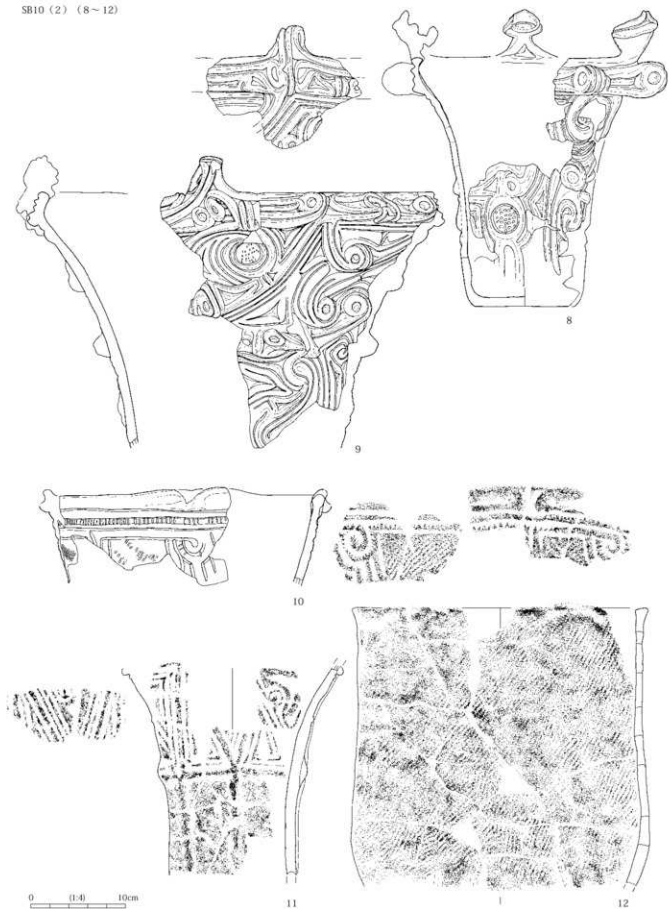


SB10 (1) (6-7)



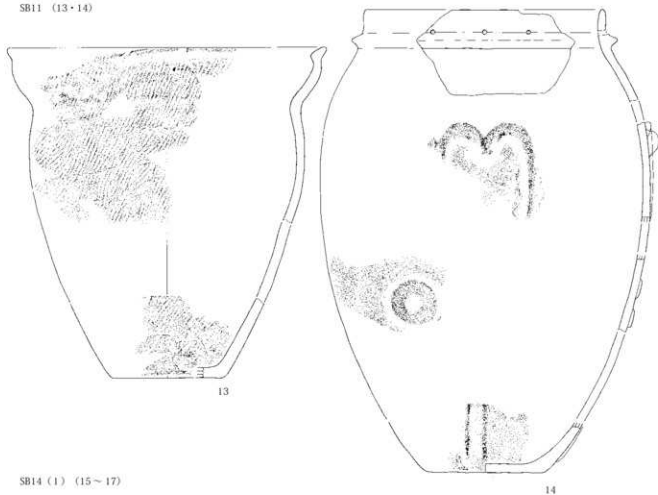
8区縄文土器 1 (SB07・10)

SB10 (2) (8~12)

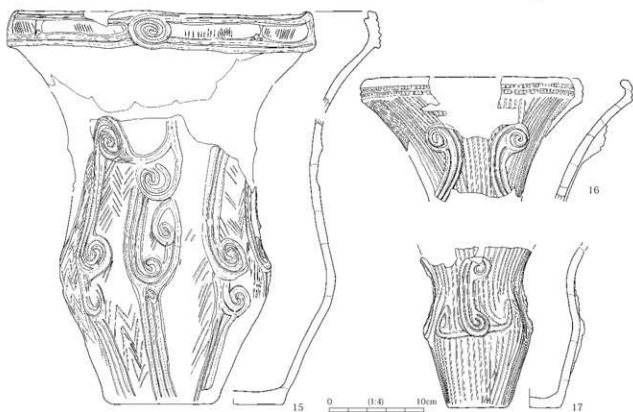


8区縄文土器 2 (SB10)

SB11 (13・14)

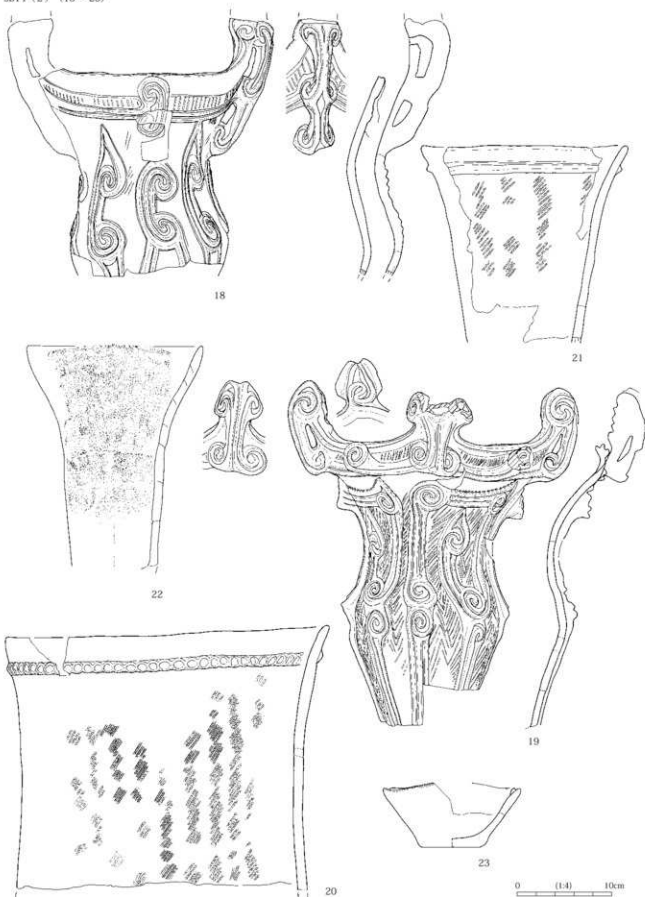


SB14 (1) (15~17)



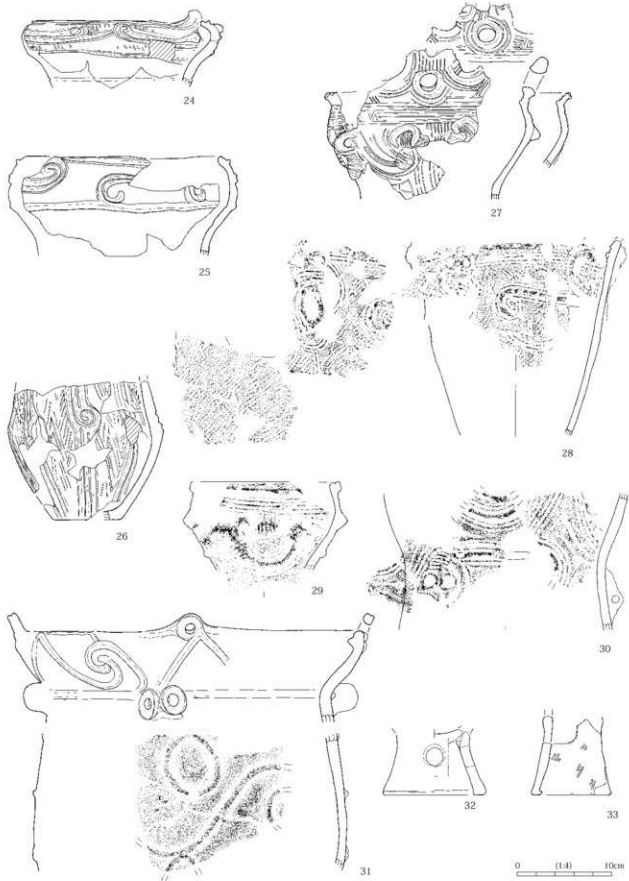
8区縄文土器 3 (SB11・14)

SB14 (2) (18~23)



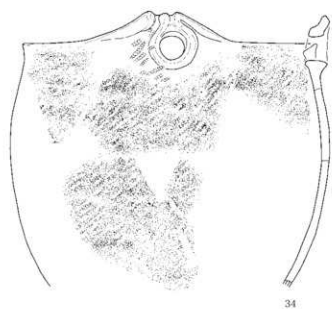
8区縄文土器 4 (SB14)

SB16 (1) (24~33)

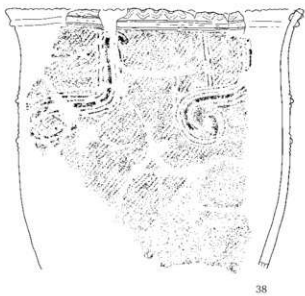
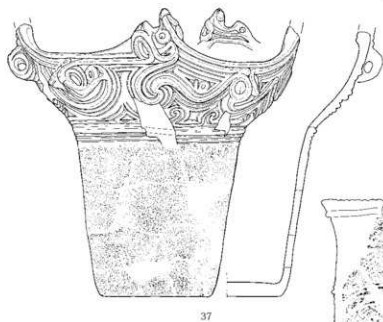
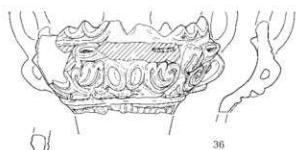
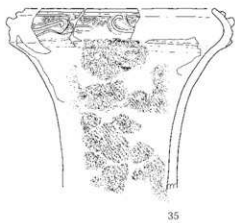


8区縄文土器 5 (SB16)

SB16 (2) (34)



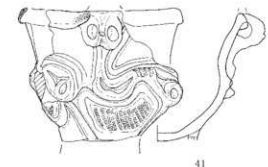
SB19 (1) (35~40)



0 (1-4) 10cm

8区縄文土器 6 (SB16・19)

SB19 (2) (41·42)

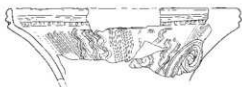


41

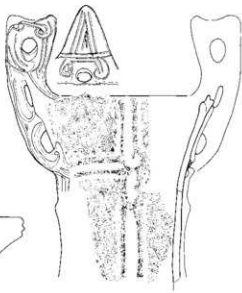


42

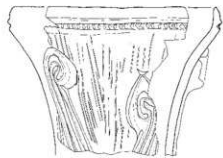
SB20 (43~47)



44

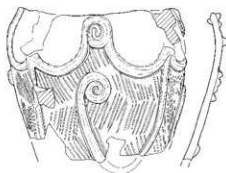


43

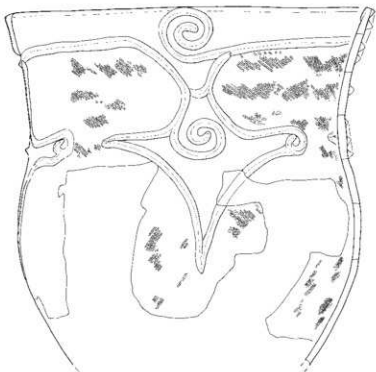


45

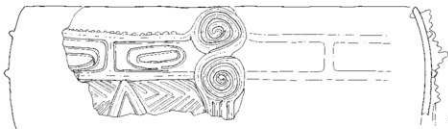
SB21 (1) (48)



48



46

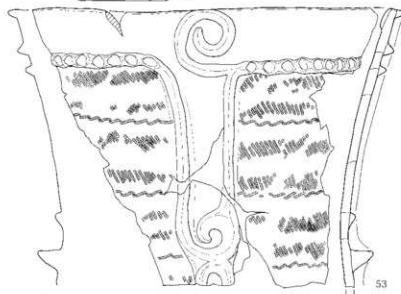
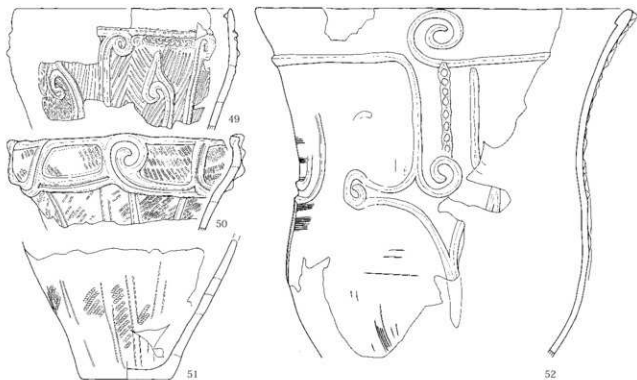


47

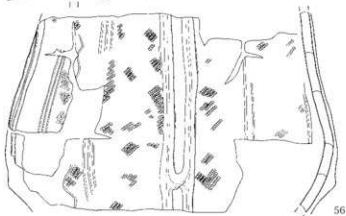
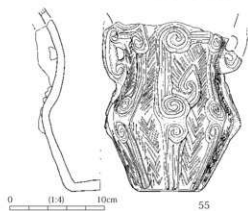
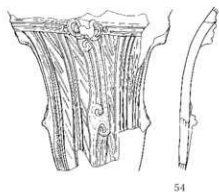
0 (1:4) 10cm

8区縄文土器 7 (SB19·20·21)

SB21 (2) (49~53)



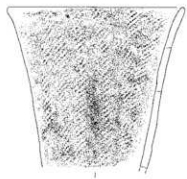
SB22 (1) (54~56)



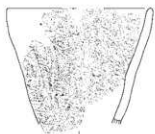
0 1:4 10cm

8区縄文土器 8 (SB21・22)

SB22 (2) (57・58)



57

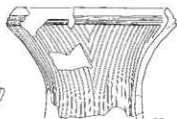


58

SB23 (59~65)



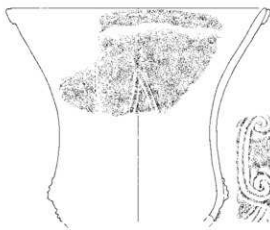
59



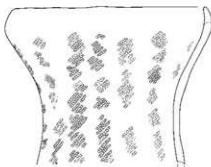
62



60



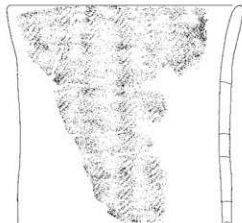
61



63



64



65

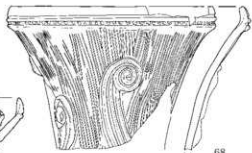
SB25 (1) (66~68)



66



67



68

0 (1:4) 10cm

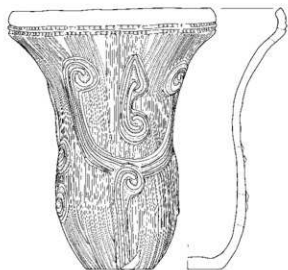


8区縄文土器9 (SB22・23・25)

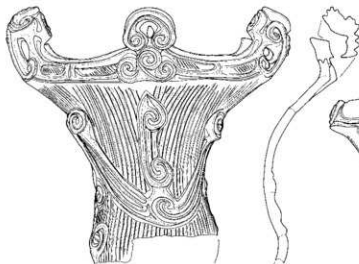
SB25 (2) (69~74)



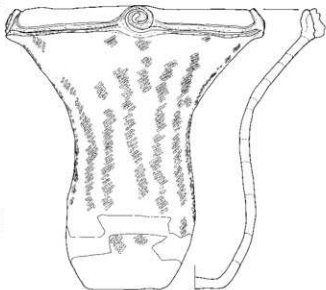
69



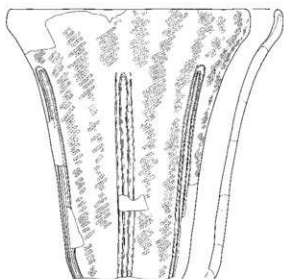
70



71



72



73

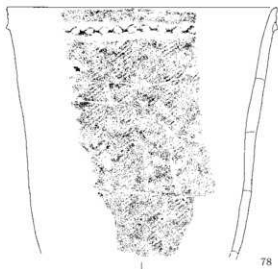
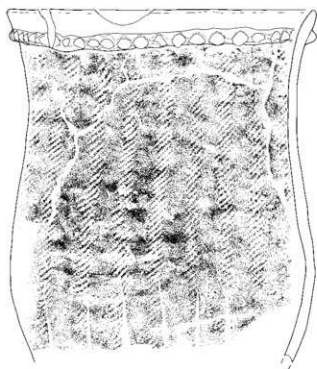
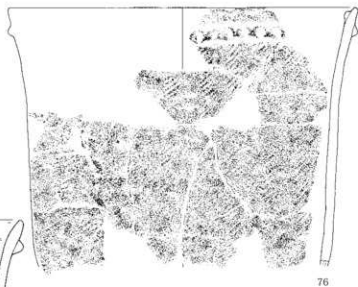
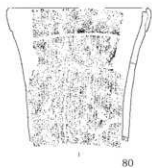
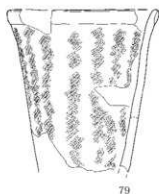
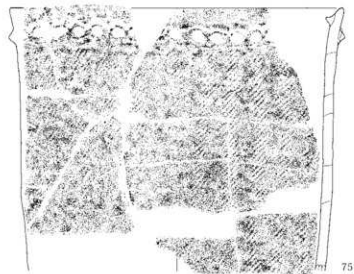


74

0 (1:4) 10cm

8区繩文土器 10 (SB25)

SB25 (3) (75~80)



0 (1-4) 10cm

8区縄文土器 11 (SB25)

SB26 (81)

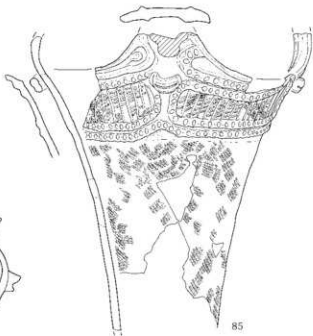


81

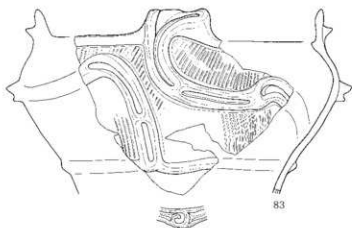
SB27 (1)
(82~87)



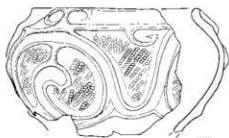
82



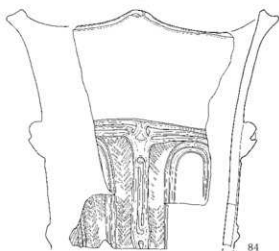
85



83



86



84

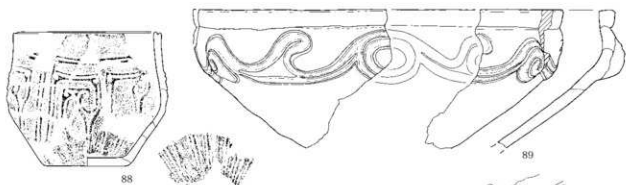
0 1:4 10cm



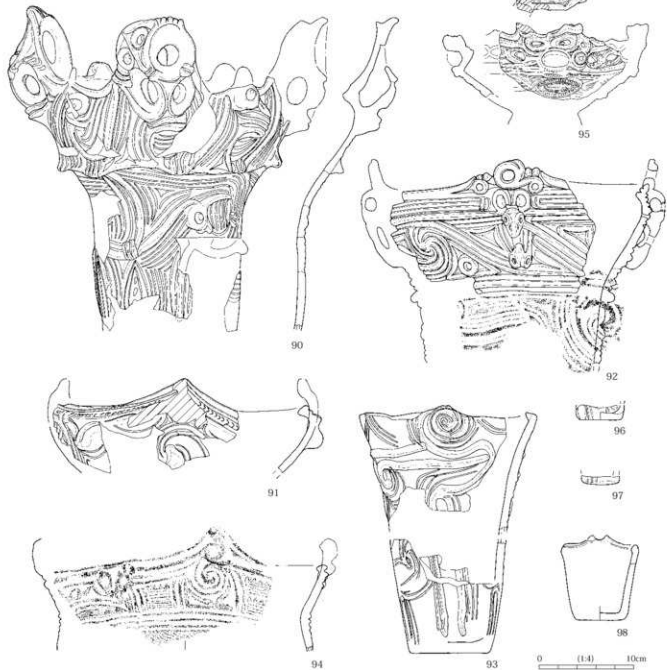
87

8区縄文土器 12 (SB26・27)

SB27 (2) (88・89)

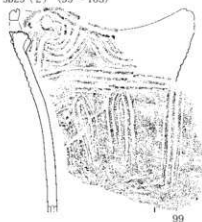


SB29 (1) (90~98)

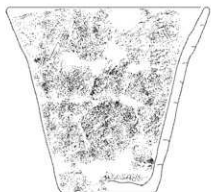


8区繩文土器 13 (SB27・29)

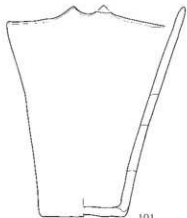
SB29 (2) (99~103)



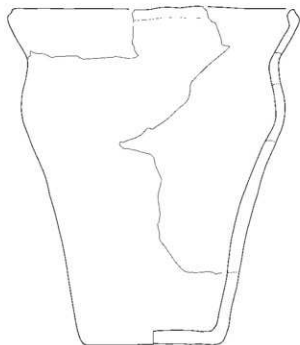
99



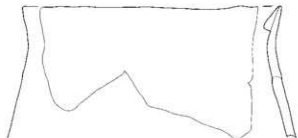
100



101



102

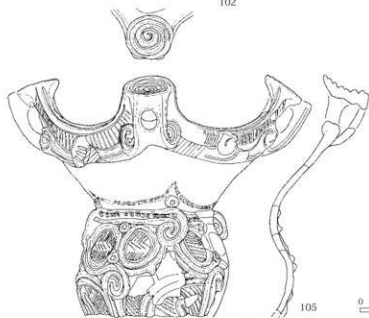


103

SB30 (1) (104~106)



104



105

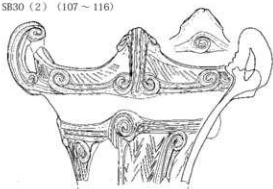


106

0 (1:4) 10cm

8区縄文土器 14 (SB29・30)

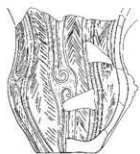
SB30 (2) (107~116)



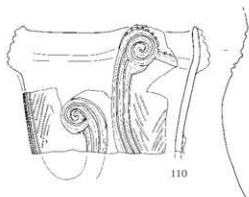
107



108



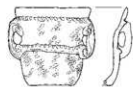
109



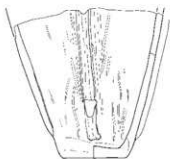
110



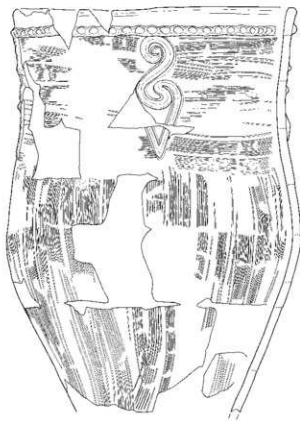
111



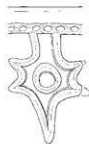
112



113



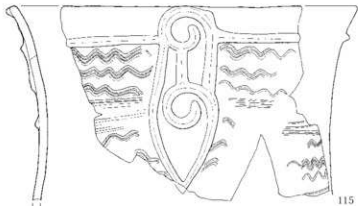
114



115



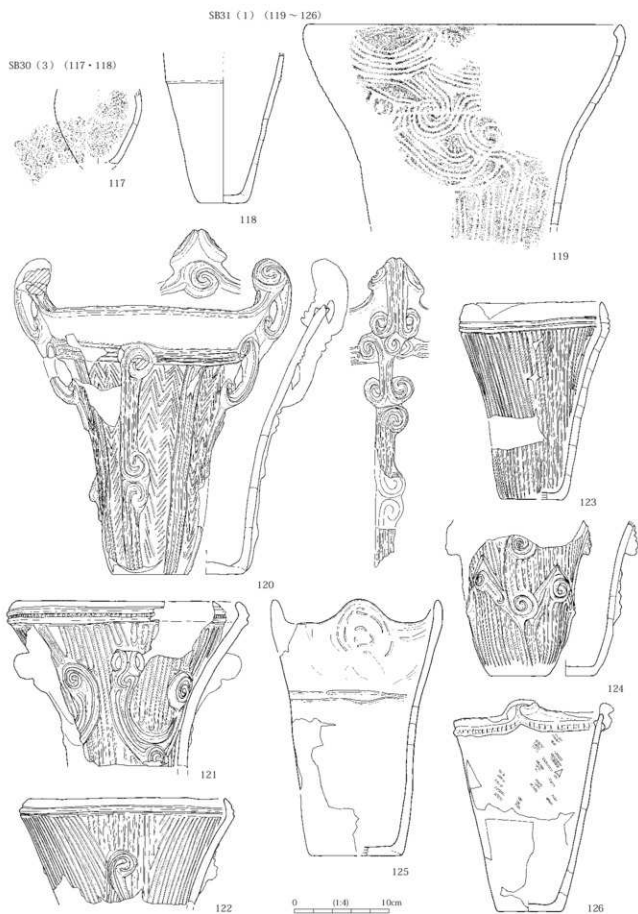
116



115

0 1:4 10cm

8区绳文土器 15 (SB30)

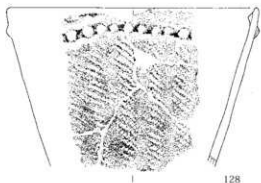


8区縄文土器 16 (SB30・31)

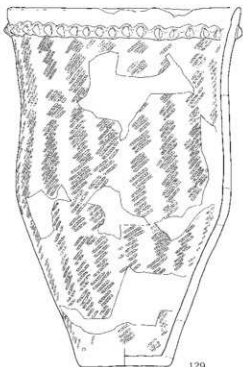
SB31 (2) (127~131)



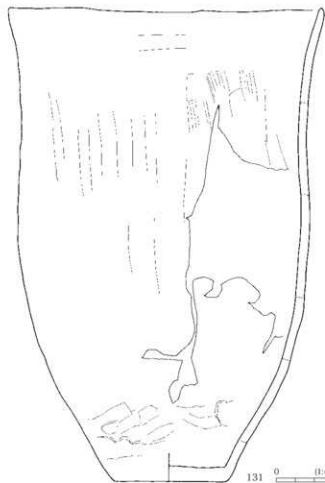
127



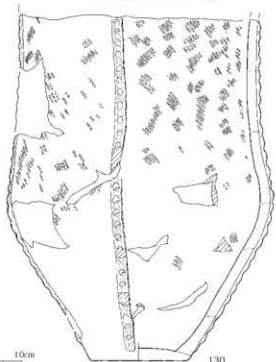
128



129



131

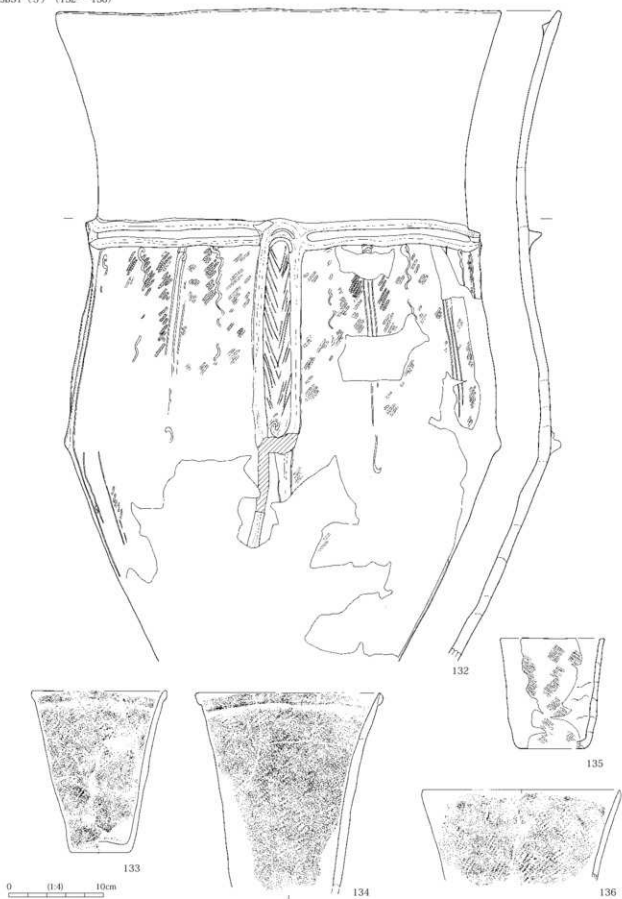


130

0 1-4 10cm

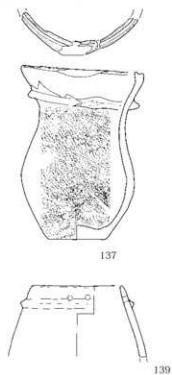
8区縄文土器 17 (SB31)

SB31 (3) (132~136)



8区縄文土器 18 (SB31)

SB31 (4) (137 ~ 139)

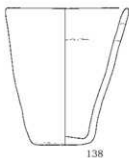


SB32 (140)



SB34 (141)

140

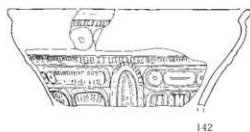


138

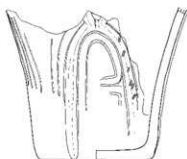


141

SB35 (1) (142 ~ 148)



142



143



144



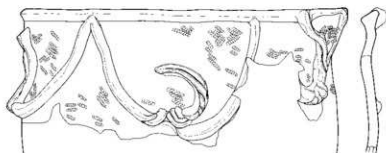
147



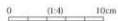
145



146

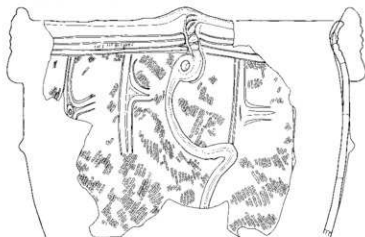


148

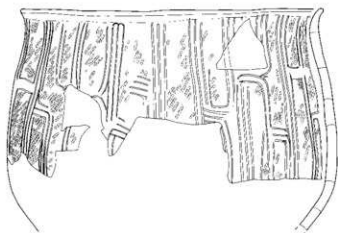


8区縄文土器 19 (SB31・32・34・35)

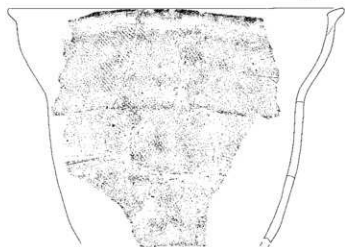
SB35 (2) (149~154)



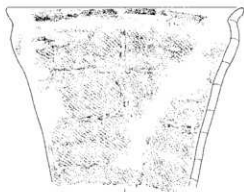
149



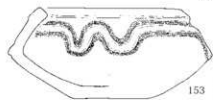
150



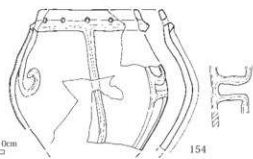
151



152



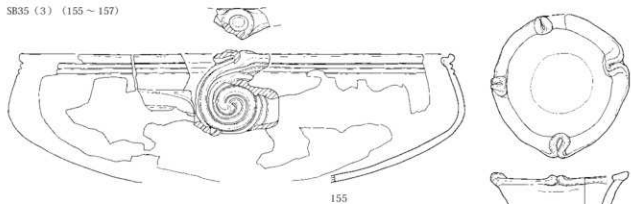
153 0 1:4 10cm



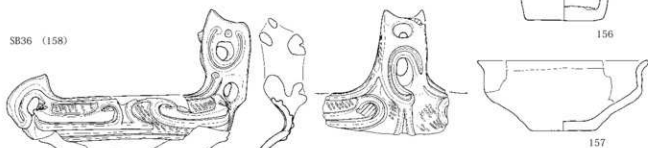
154

8区縄文土器 20 (SB35)

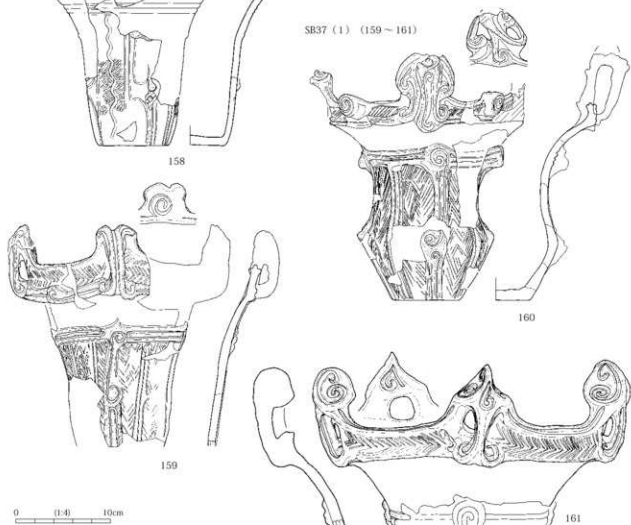
SB35 (3) (155 ~ 157)



SB36 (158)



SB37 (1) (159 ~ 161)



0 1:4 10cm

8区縄文土器 21 (SB35・36・37)

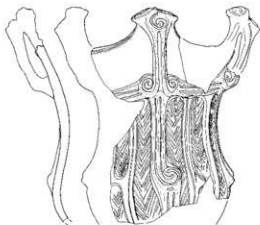
SB37 (2) (162~169)



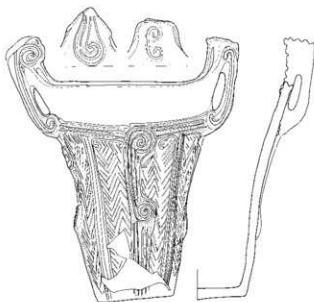
162



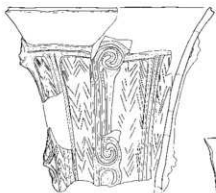
163



165



164



166

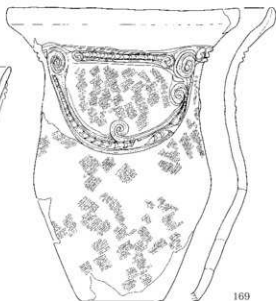


168



167

0 1:4 10cm



169

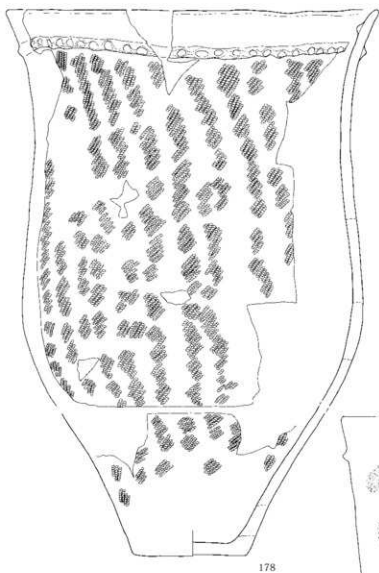
8区縄文土器 22 (SB37)

SB37 (3) (170~177)

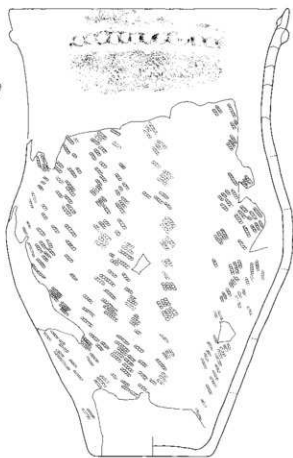


8区縄文土器 23 (SB37)

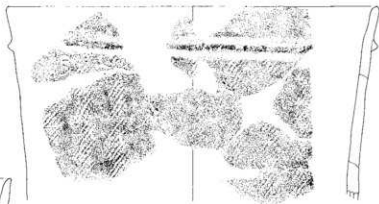
SB37 (4) (178~182)



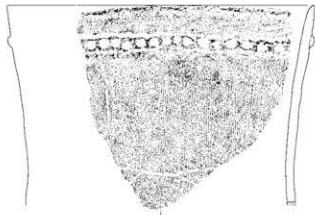
178



179



181



180

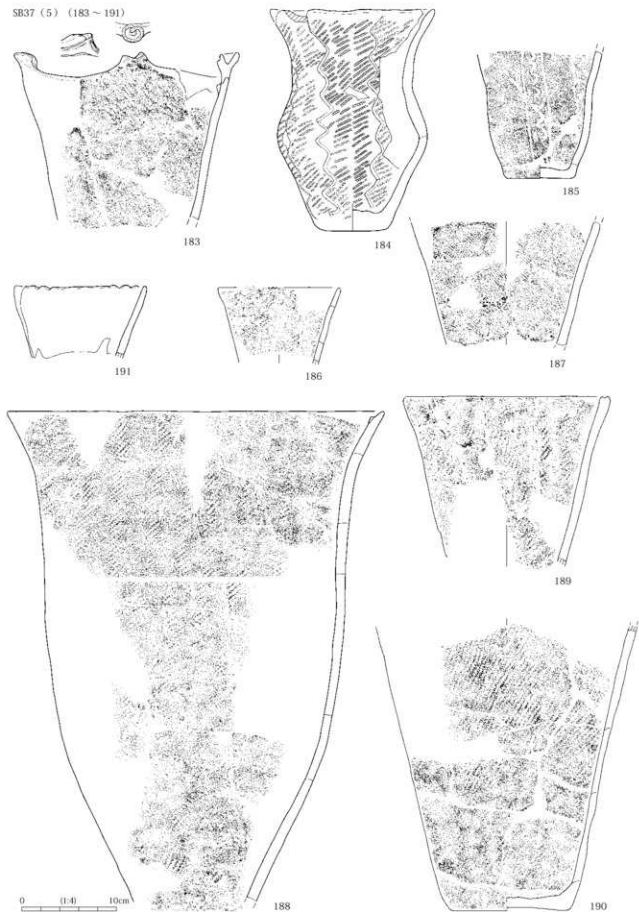


182

0 (1-4) 10cm

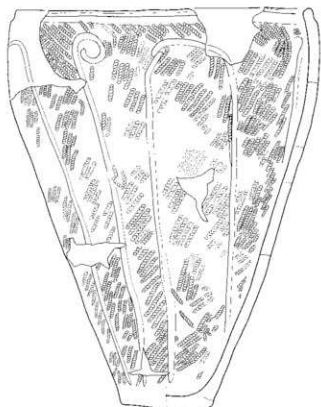
8区縄文土器 24 (SB37)

SB37 (5) (183~191)

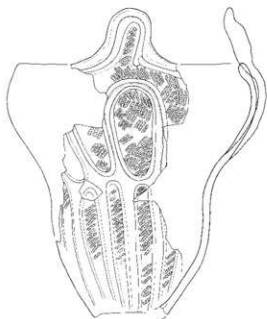


8区縄文土器 25 (SB37)

SB40 (192~195)



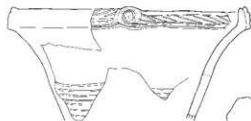
192



193

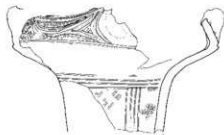


195

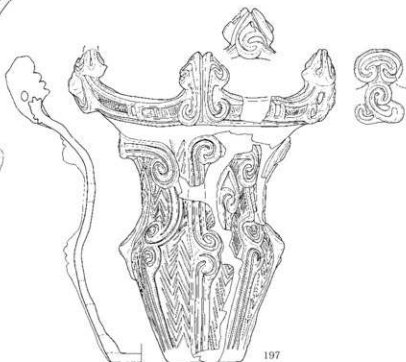


194

SB41 (1) (196~197)



196

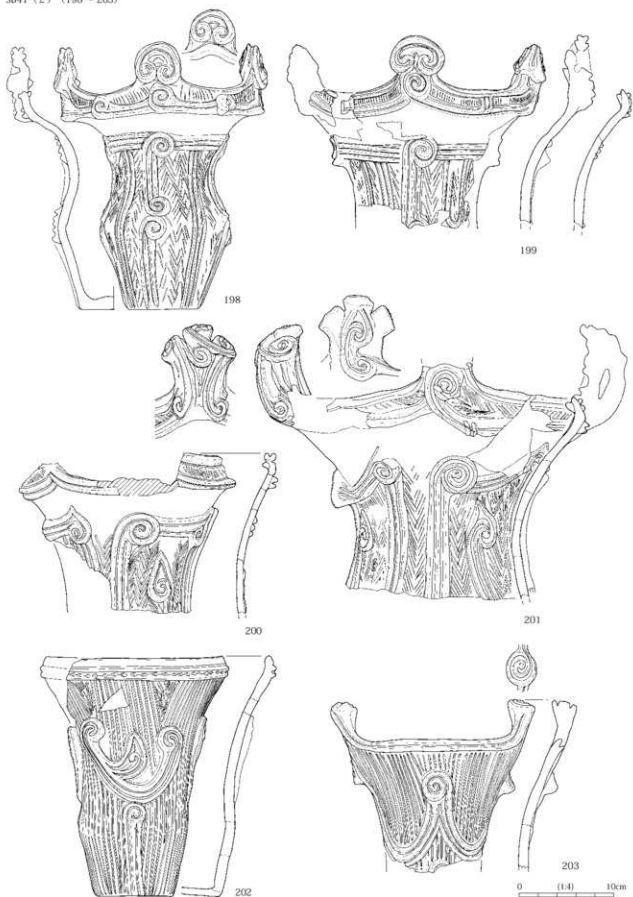


197

0 1:4 10cm

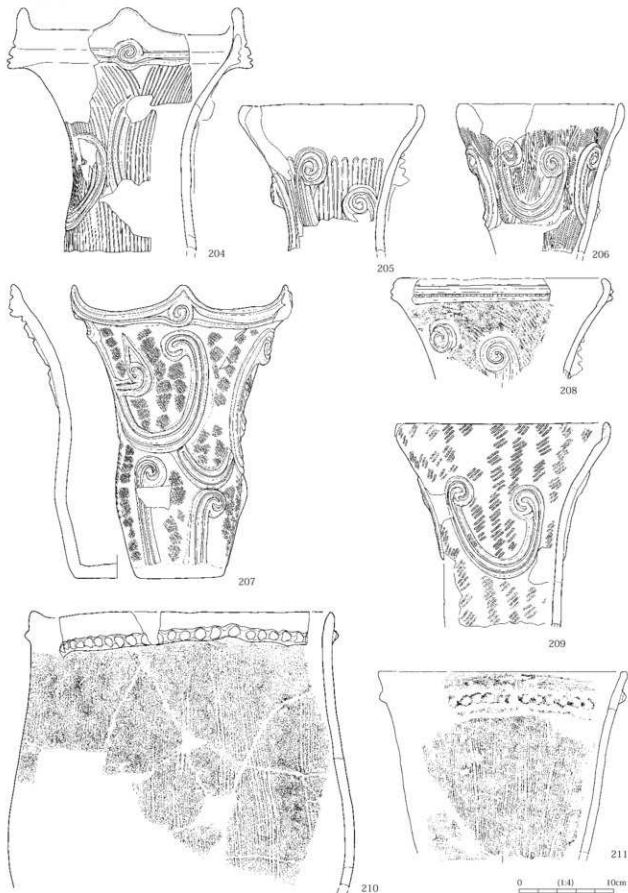
8区縄文土器 26 (SB40・41)

SB41 (2) (198~203)



8区縄文土器 27 (SB41)

SB41 (3) (204~211)

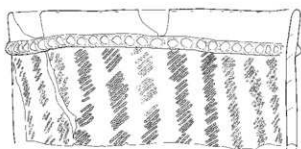


8区縄文土器 28 (SB41)

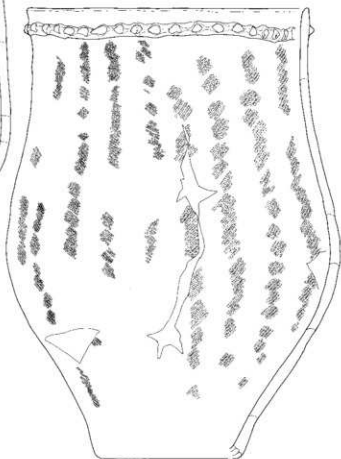
SB41 (4) (212~216)



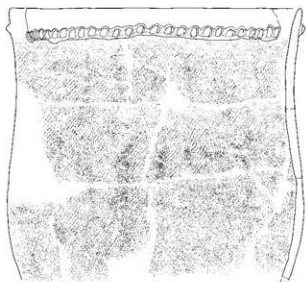
212



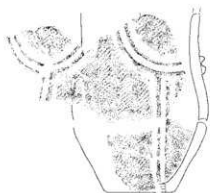
213



214



215

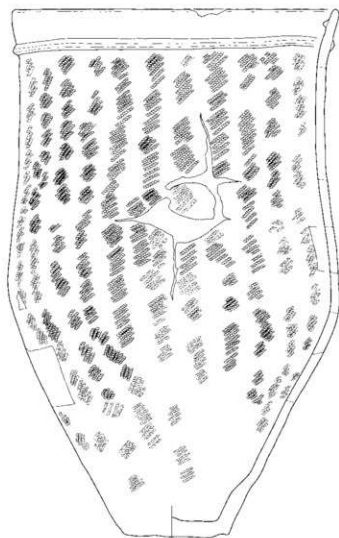


216

0 1:4 10cm

8区縄文土器 29 (SB41)

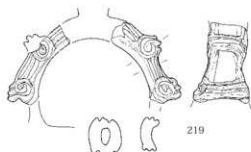
SB41 (5) (217~219)



217

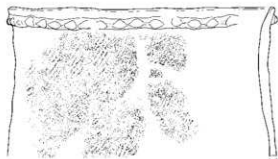


218



219

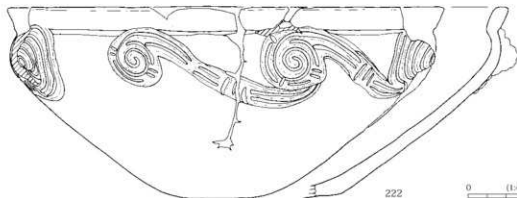
SB43 (220~222)



220



221



222

0 (1-4) 10cm

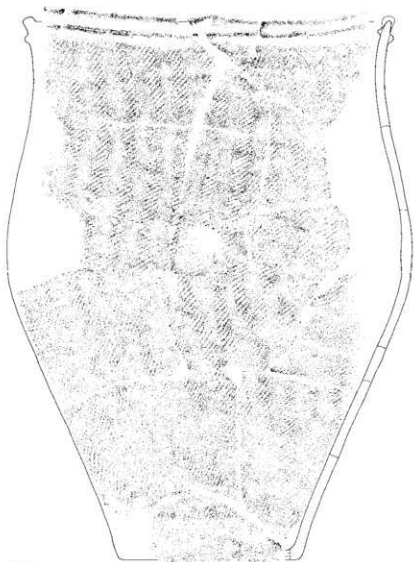
8区縄文土器 30 (SB41・43)

SB44 (1) (223 ~ 229)



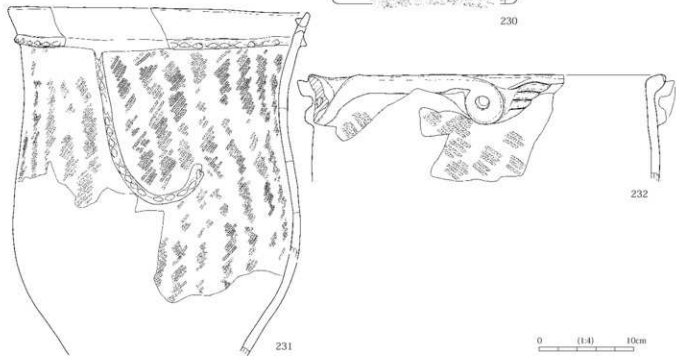
8区縄文土器 31 (SB44)

SB44 (2) (230)



230

SB46 (1) (231・232)



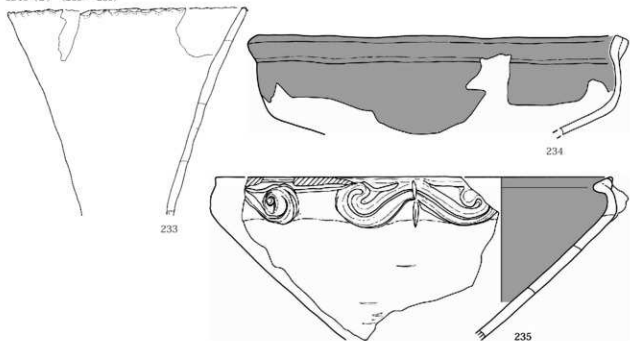
232

231

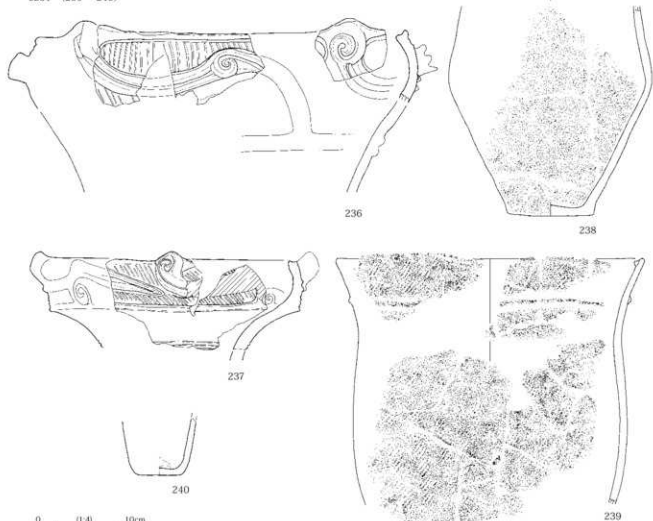
8区縄文土器 32 (SB44・46)

0 (1-4) 10cm

SB46 (2) (233 ~ 235)



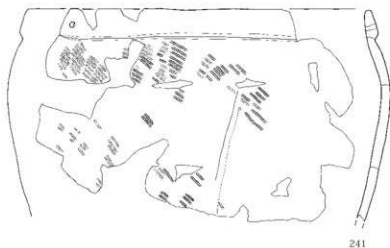
SB51 (236 ~ 240)



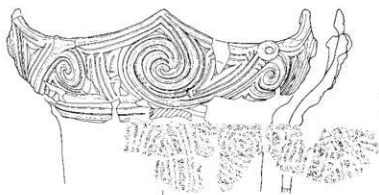
0 1:4 10cm

8区縄文土器 33 (SB46・51)

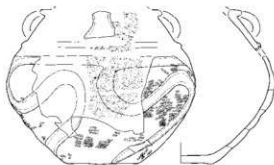
SB52 (241)



241



244



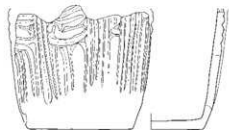
246

SB54 (1) (247・248)

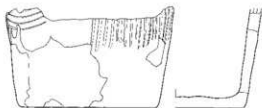


247

SB53 (242~246)



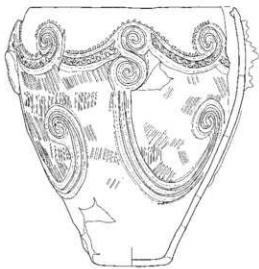
242



243



245

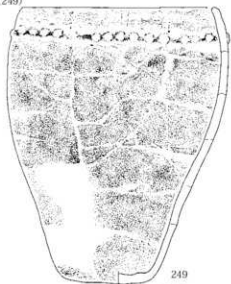


248

0 1:4 10cm

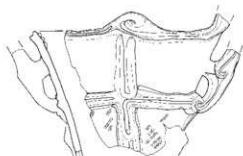
8区縄文土器 34 (SB52・53・54)

SB54 (2) (249)

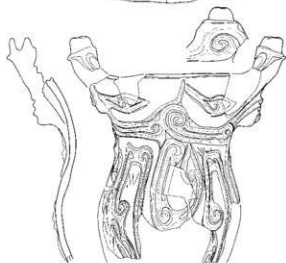


249

SB55 (250・251)



250

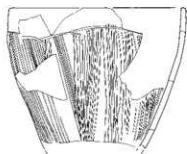


251

SB57 (252・253)



252

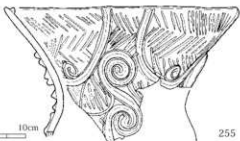


253

SB59 (254・255)



254

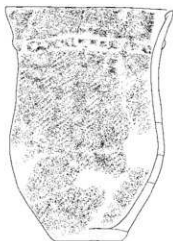


255

0 (1:4) 10cm

8区縄文土器 35 (SB54・55・57・59)

SB61 (256・257)



256



257

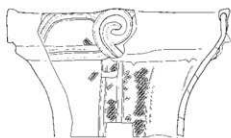
SB68 (1) (258 ~ 264)



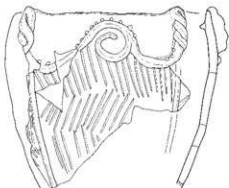
258



259



260



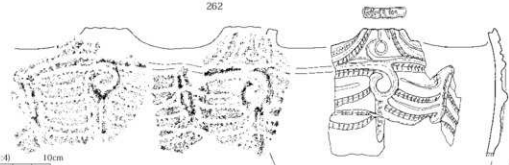
261



262



263

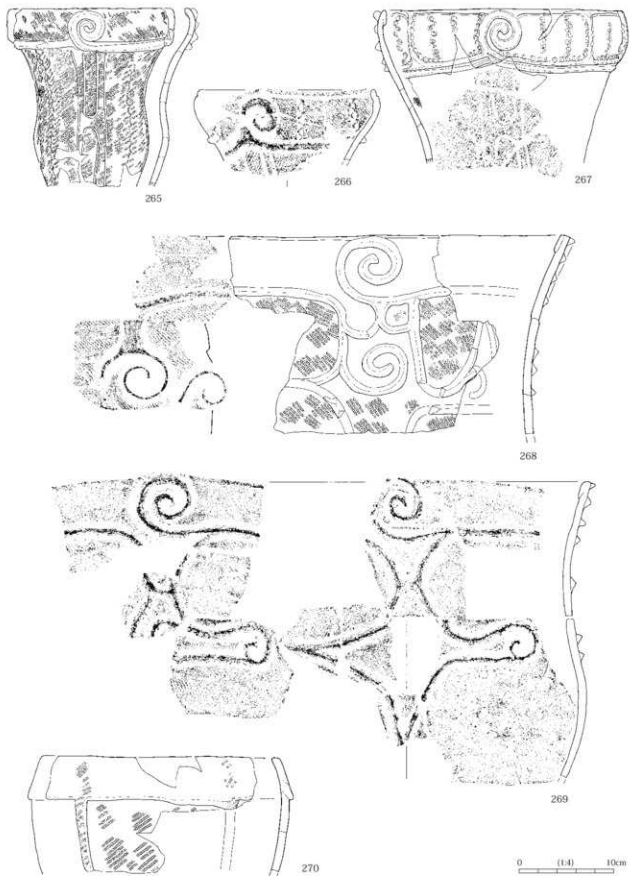


264

0 1:4 10cm

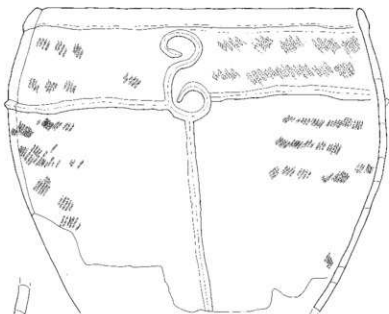
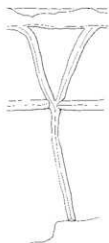
8区縄文土器 36 (SB61・68)

SB68 (2) (265~270)



8区縄文土器 37 (SB68)

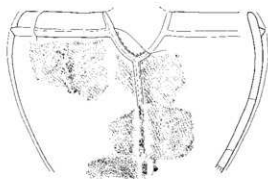
SB68 (3)
(271~277)



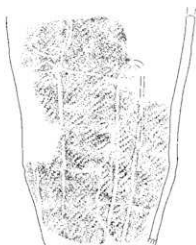
271



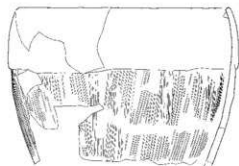
273



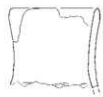
272



274

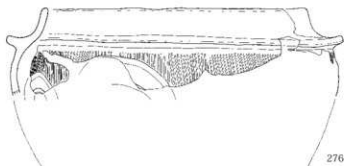


275



277

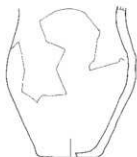
0 1:4 10cm



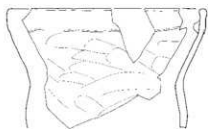
276

8区縄文土器 38 (SB68)

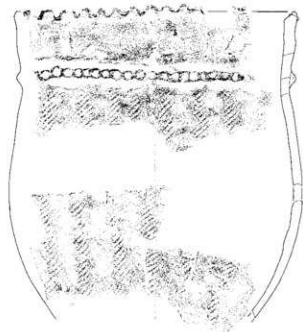
SB68 (4) (278・279)



278



279



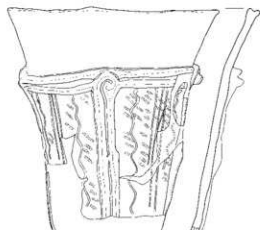
281



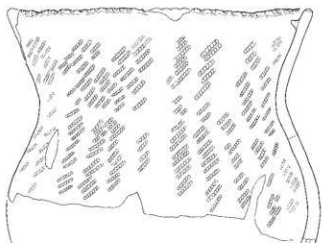
284

0 1:4 10cm

SB69 (280~284)



280



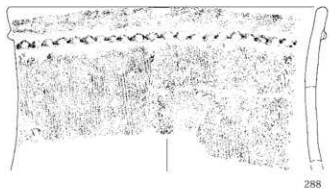
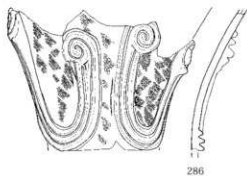
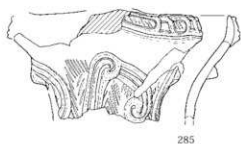
282



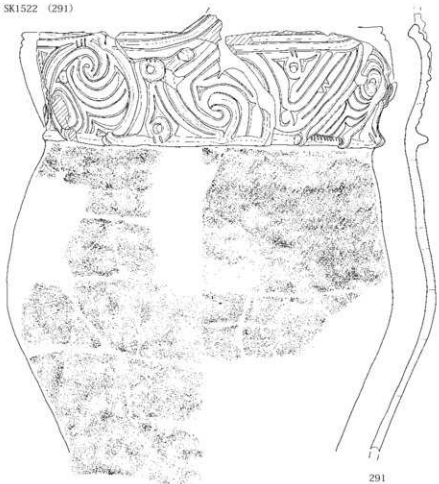
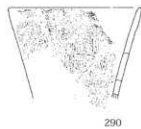
283

8区縄文土器 39 (SB68・69)

SK1401 (285~290)



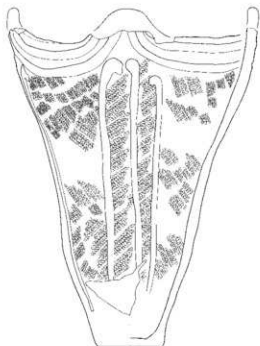
SK1522 (291)



0 (1:4) 10cm

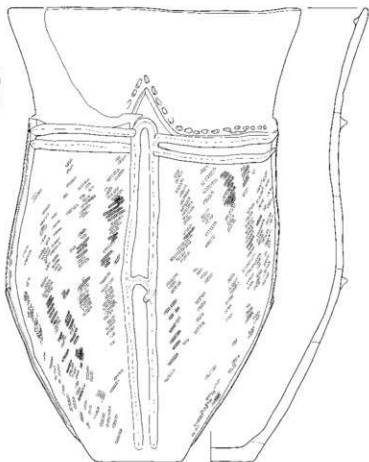
8区縄文土器 40 (SK1401・1522)

SK1551 (292)



292

SK1553 (295)



295

SK1552 (294 上部)

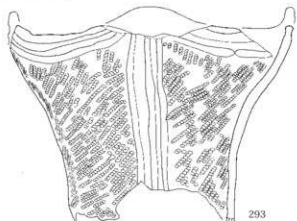
SK1558 (294 下部)



294



SK1552 (293)



293

0 1:4 10cm

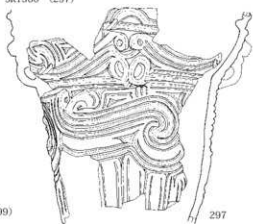
8区縄文土器 41 (SK1551・1552・1553・1558)

SK1559 (296)



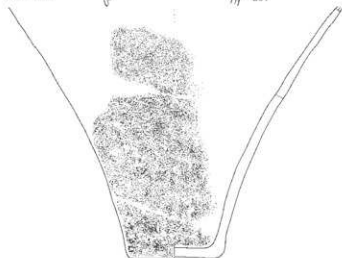
296

SK1560 (297)



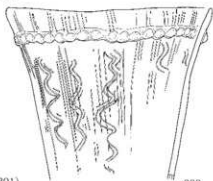
297

SK1569
(298・299)



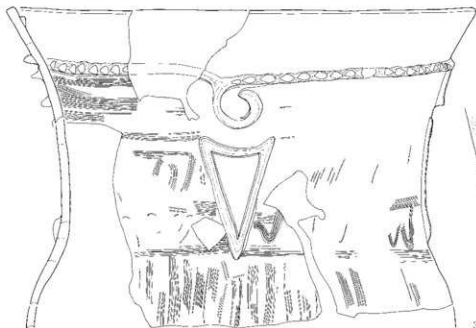
298

SK1570 (300)



300

SK1571 (301)



301

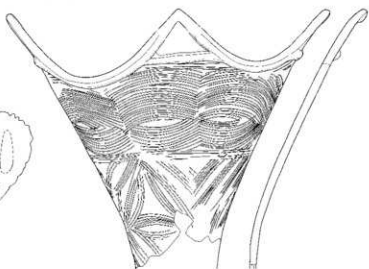


299

0 (1:4) 10cm

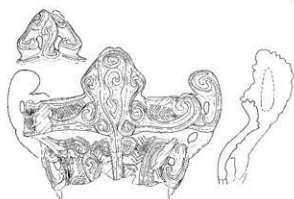
8区縄文土器 42 (SK1559・1560・1569・1570・1571)

SK1750 (304)



304

SK1660 (302)



302

SK1678 (303)



303

SK1860 (305・306)



305

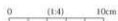


306

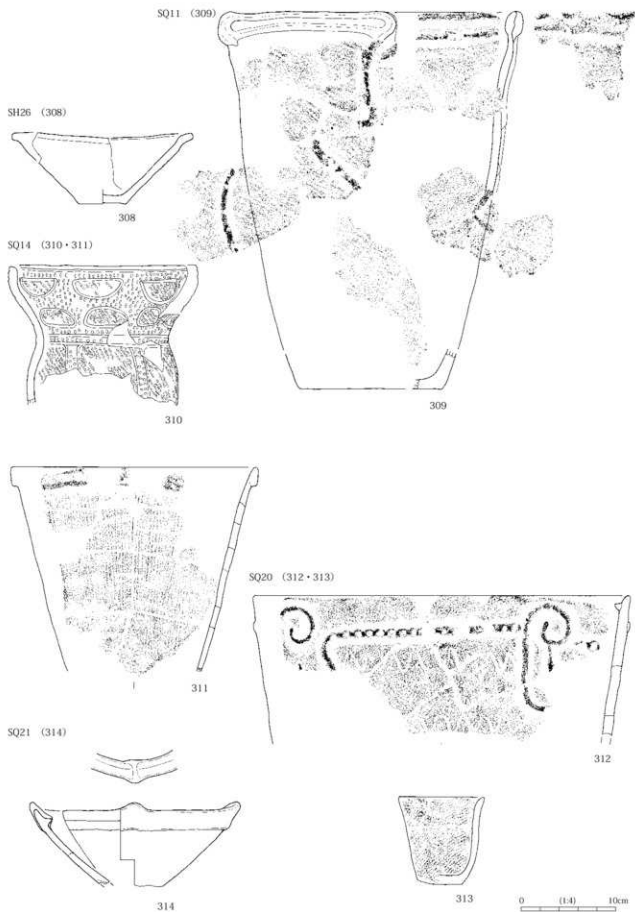
SK2407 (307)



307

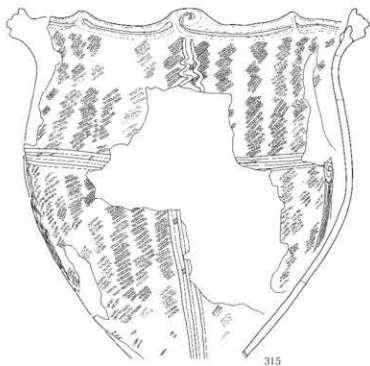


8区縄文土器 43 (SK1660・1678・1750・1860・2407)



8区縄文土器 44 (SH26、SQ11・14・20・21)

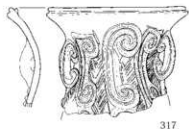
Q24 (315)



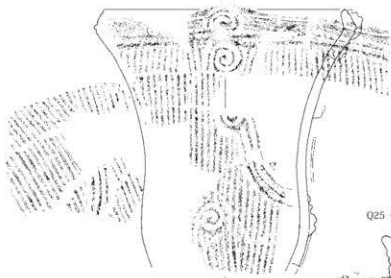
Q24·25 (316~319)



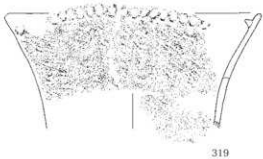
316



317

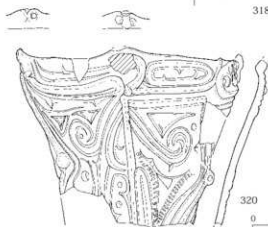


318



319

Q25 (1) (320~321)



320



321

0 (1:4) 10cm

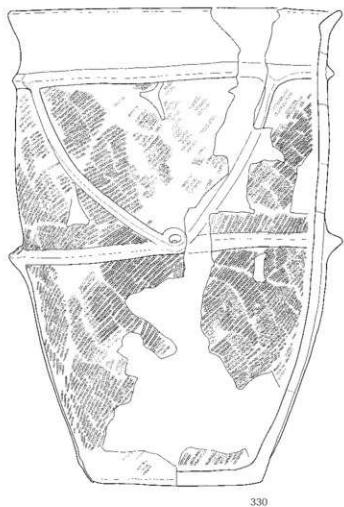
8区縄文土器 45 (Ⅷ Q24·25区)

Q25 (2) (322~329)

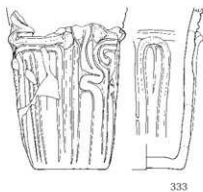


8区繩文土器 46 (Ⅷ Q25 区)

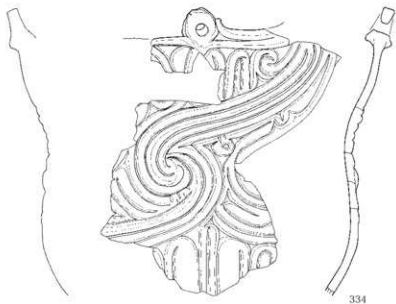
Q25 (3) (330 ~ 332)



R01 ~ 03·06 ~ 08 (333)



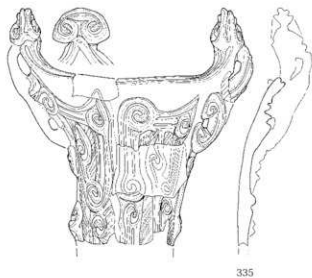
R11 (1) (334)



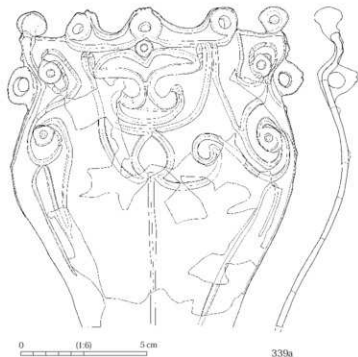
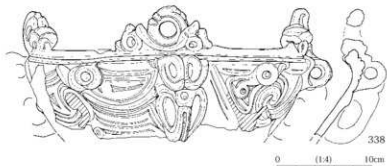
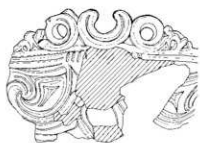
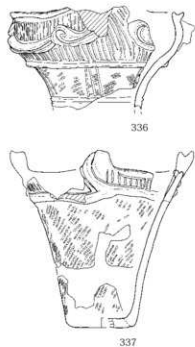
8区縄文土器 47 (Ⅷ Q25・R01 ~ 03・06 ~ 08・11区)

0 (1:4) 10cm

R11 (2) (335)

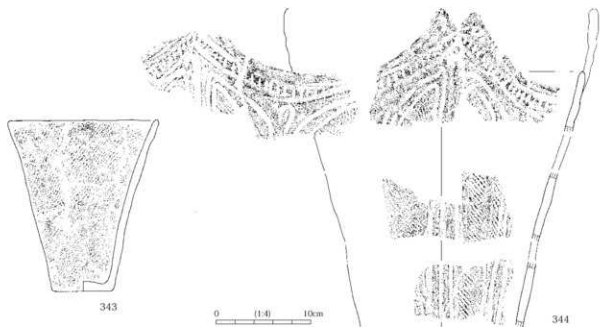
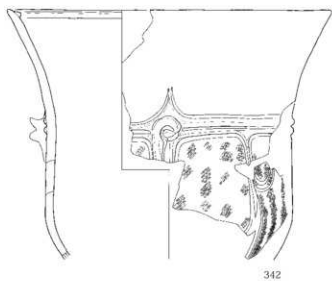
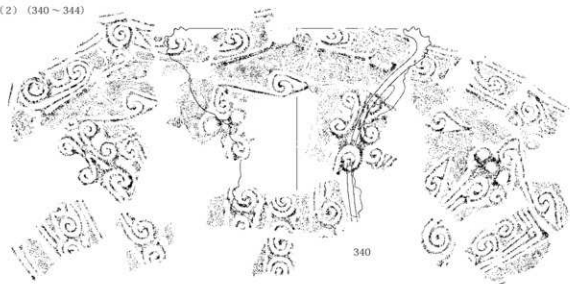


R16 (1) (336~339)



8区縄文土器 48 (Ⅷ R11・16区)

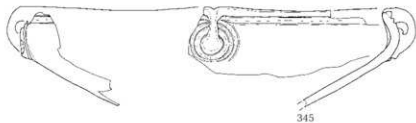
R16 (2) (340~344)



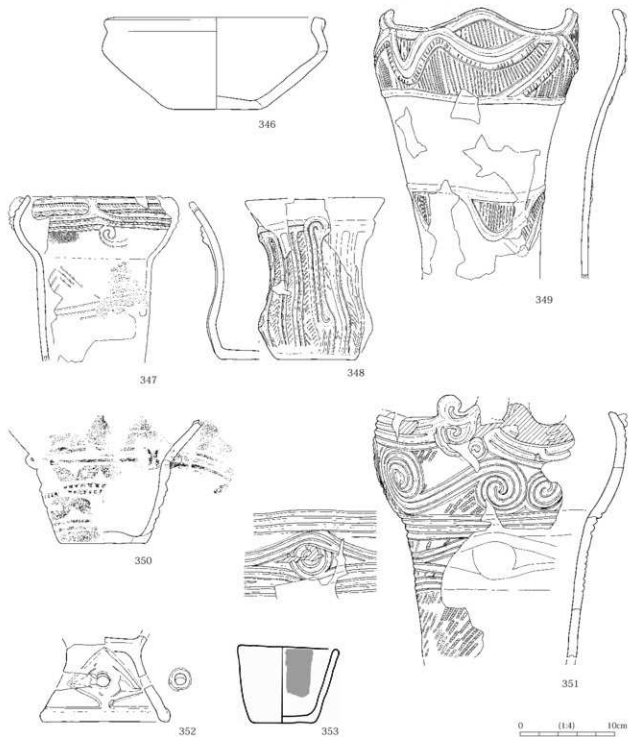
0 1:4 10cm

8区縄文土器 49 (ⅧR16区)

R16 (3) (345·346)



R17 (347~353)

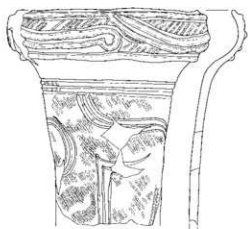


8区縄文土器 50 (Ⅷ R16·17区)

R21 (354 ~ 356)

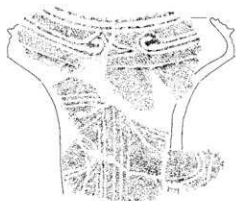


354



355

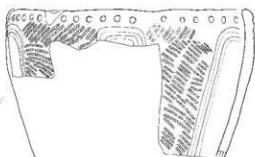
R22 (357 · 358)



356



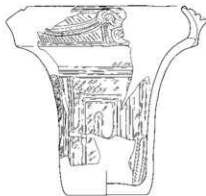
357



358

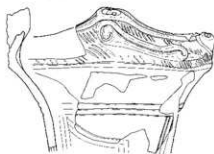
V05 (1) (361)

V03 (359)

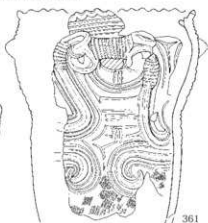


359

V04 (360)



360

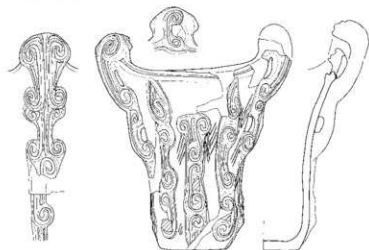


361

0 (1-4) 10cm

8区縄文土器 51 (Ⅷ R21 · 22, V03 · 04 · 05 区)

V05 (2) (362)

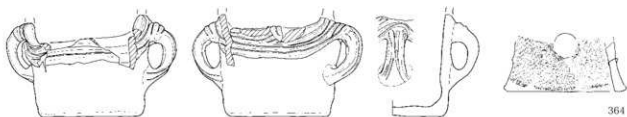


362

流路跡 (SB15)
(363 ~ 366)



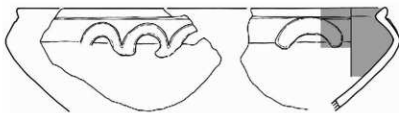
363



365

364

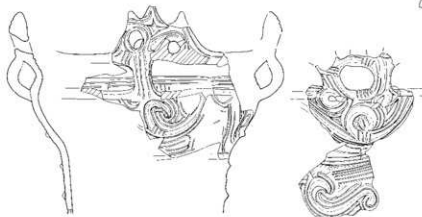
東傾斜面 (1) (367 ~ 369)



366



367



368

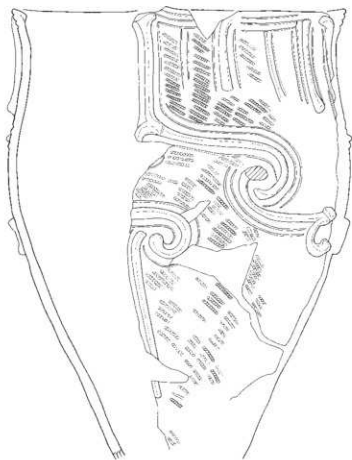


369

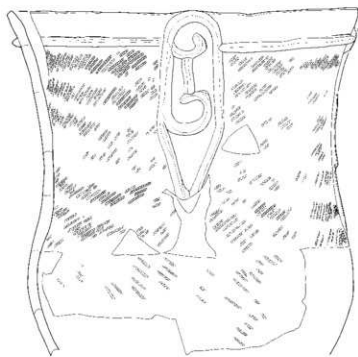
0 1:4 10cm

8区縄文土器 52 (Ⅷ V05区、流路跡、東傾斜面)

東傾斜面 (2) (370・371)



370



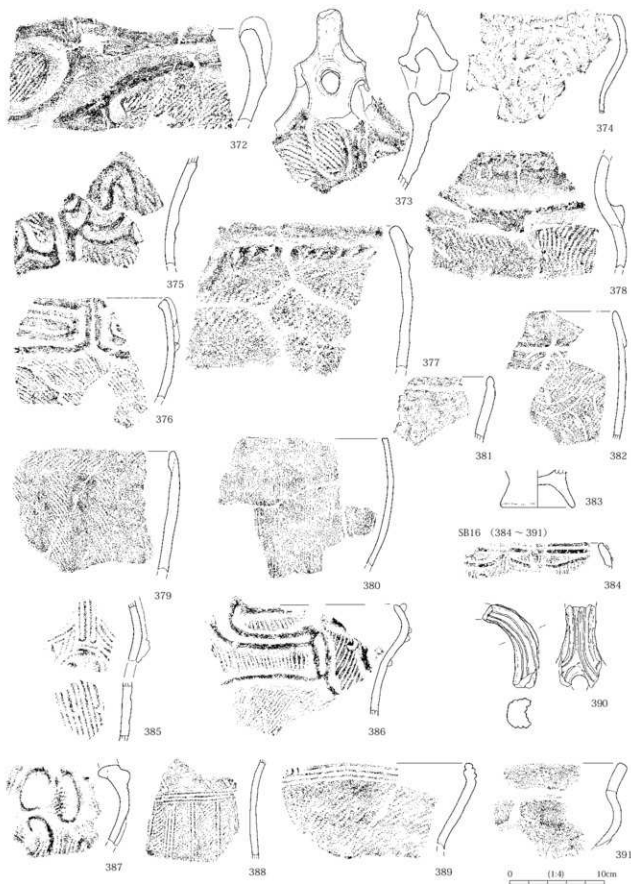
371



0 (1-4) 10cm

8区縄文土器 53 (東傾斜面)

SB07 (372~383)



8区縄文土器 54 (SB07・16)

SB17 (392 ~ 396)



392



393

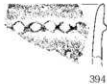


395

SB19 (397 ~ 406)



397



394



396



398



399



400



401



402



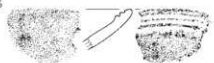
403



405



404



406

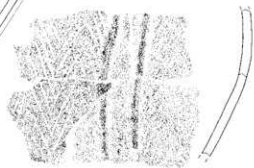
SB20 (1) (407 ~ 412)



407



410



411



408



409



412



8区縄文土器 55 (SB17・19・20)

SB20 (2) (413~417)



413



414



415

SB21 (418~423)



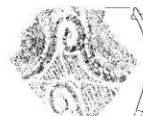
416



417



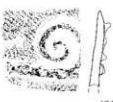
418



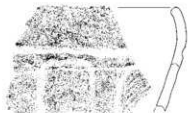
419



420



421



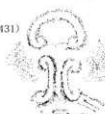
422



423

SB22

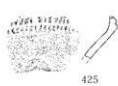
(424~431)



424



425



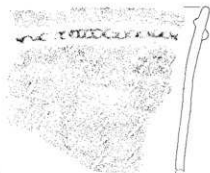
425



426



427



428



429

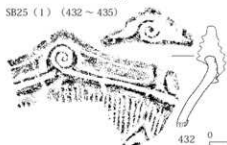


430



431

SB25 (1) (432~435)



432



433



434

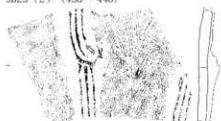


435

0 (1:4) 10cm

8区縄文土器 56 (SB20・21・22・25)

SB25 (2) (436~440)



436



437



438



439



440

SB30 (441~457)



441



442



443



444



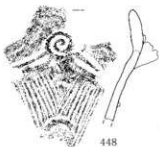
445



446



447



448



449



450



451



452



453



454



455



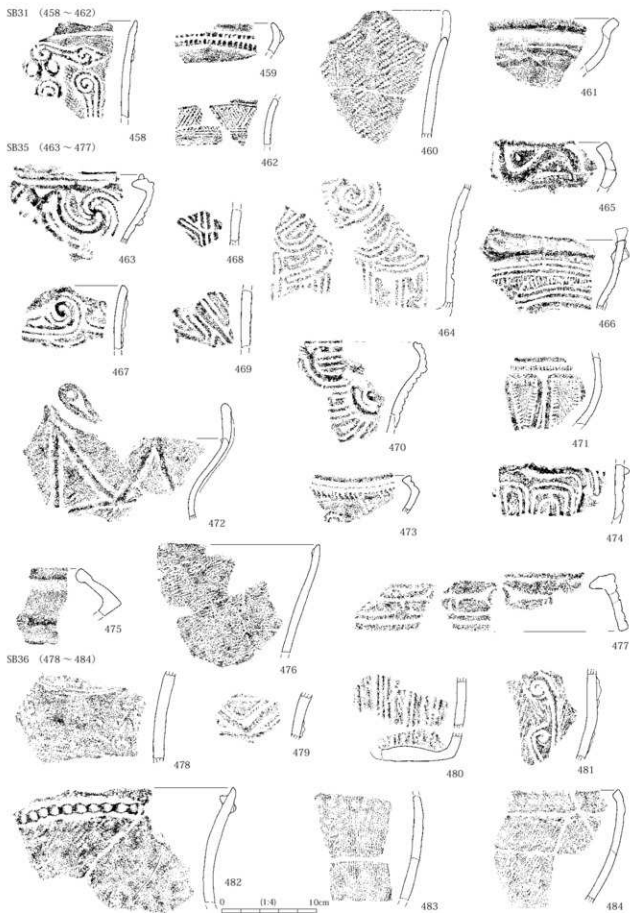
456



457

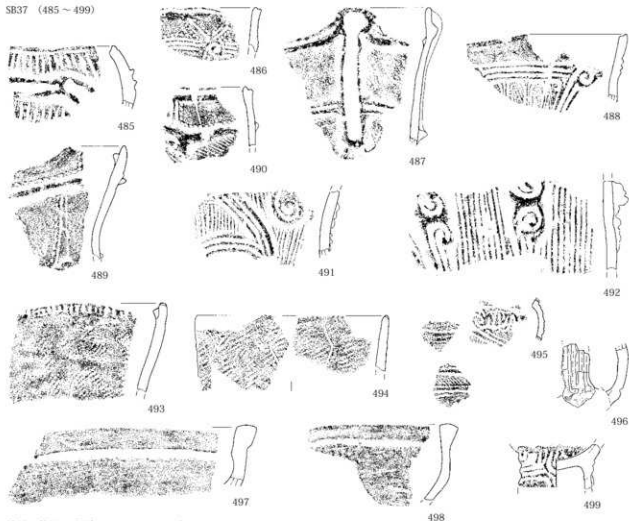
0 (1:4) 10cm

8区縄文土器 57 (SB25・30)

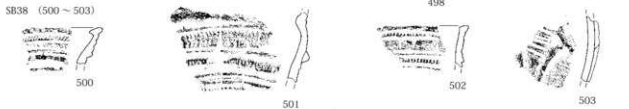


8区繩文土器 58 (SB31・35・36)

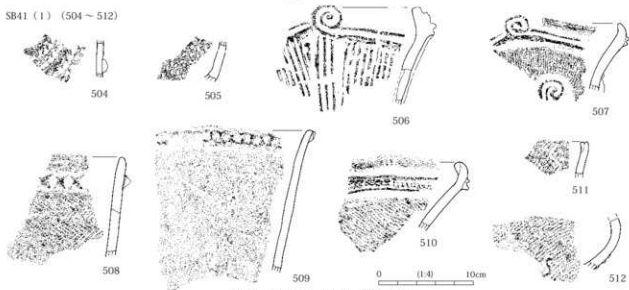
SB37 (485 ~ 499)



SB38 (500 ~ 503)

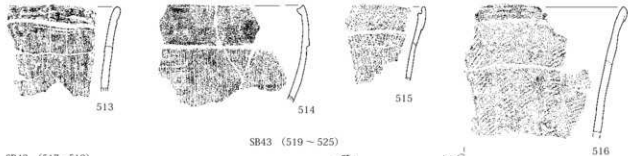


SB41 (1) (504 ~ 512)



8区縄文土器 59 (SB37・38・41)

SB41 (2) (513~516)



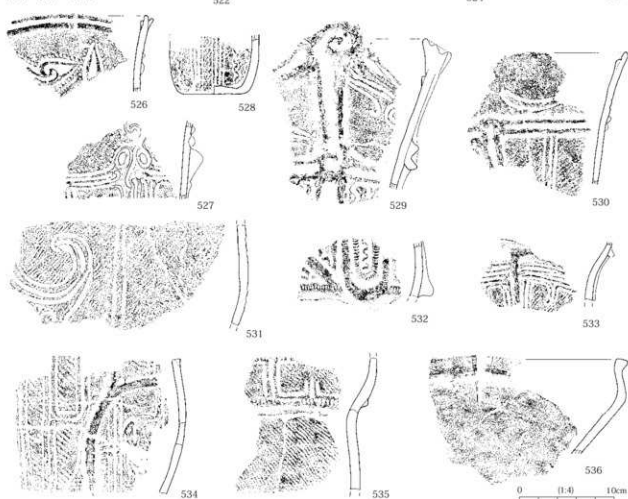
SB42 (517~518)



SB43 (519~525)



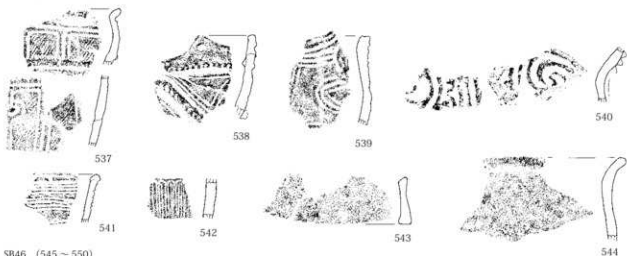
SB44 (526~536)



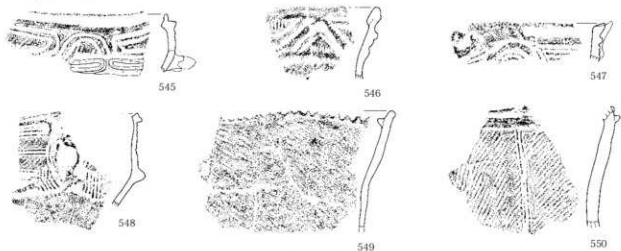
0 (1-4) 10cm

8区縄文土器 60 (SB41・42・43・44)

SB45 (537 ~ 544)



SB46 (545 ~ 550)



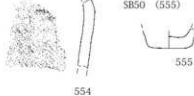
SB48 (551 ~ 552)



SB49 (553 ~ 554)



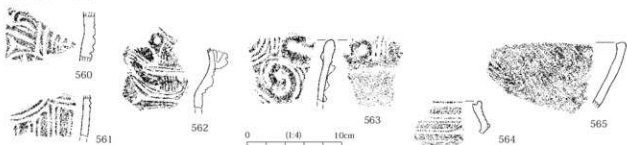
SB50 (555)



SB51 (556 ~ 559)

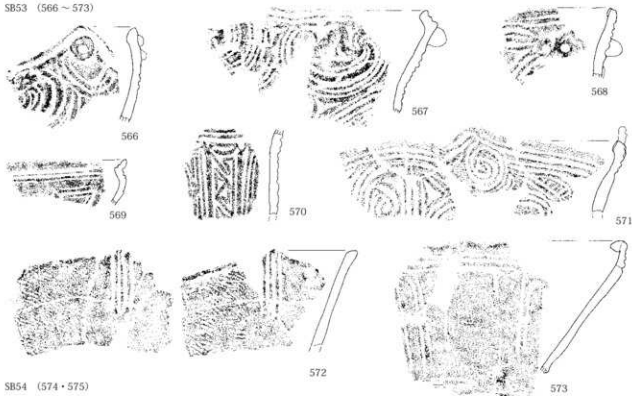


SB52 (560 ~ 565)

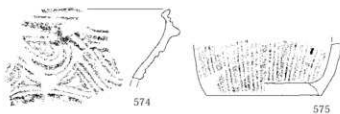


8区縄文土器 61 (SB45・46・48・49・50・51・52)

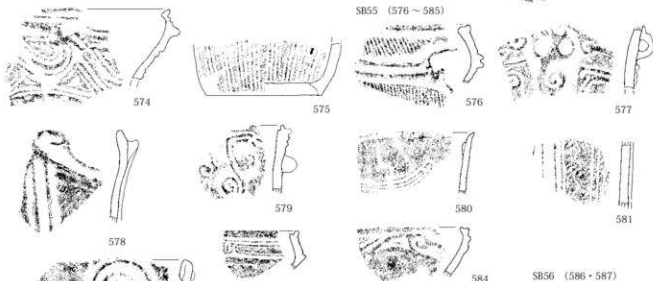
SB53 (566 ~ 573)



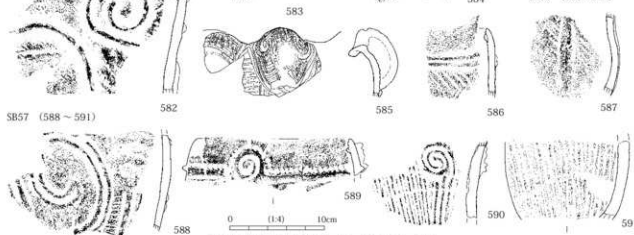
SB54 (574 ~ 575)



SB55 (576 ~ 585)



SB56 (586 ~ 587)

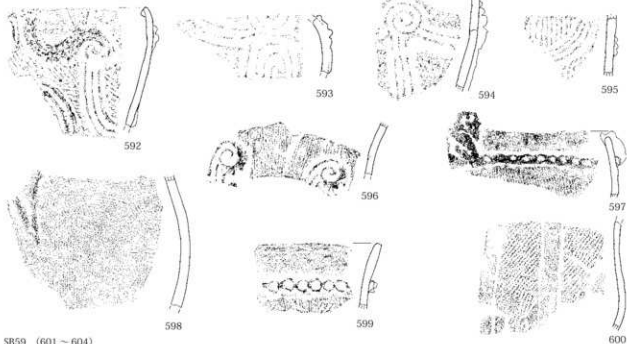


SB57 (588 ~ 591)

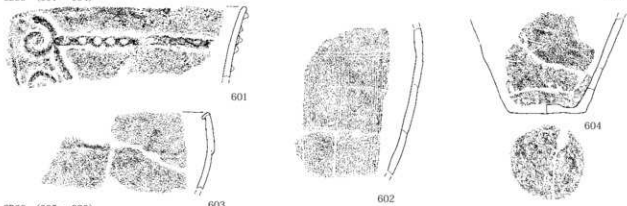
8区縄文土器 62 (SB53・54・55・56・57)

0 (1:4) 10cm

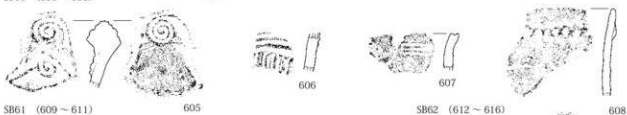
SB58 (592~600)



SB59 (601~604)



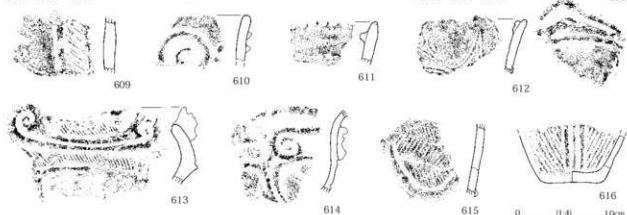
SB60 (605~608)



SB61 (609~611)



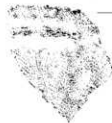
SB62 (612~616)



0 (1:4) 10cm

8区縄文土器 63 (SB58・59・60・61・62)

SB62 (617 ~ 619)



617



618



619

SB65 (620 ~ 626)

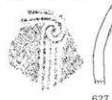


620



621

SB66 (627 ~ 632)



627



623



624



625



626

SB67 (633 ~ 637)



632



633



634



635



636

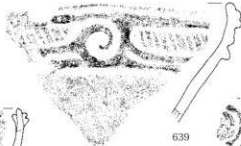
SB68 (1) (638 ~ 648)



637



638



639



640



641



642



643



644



645



646



647

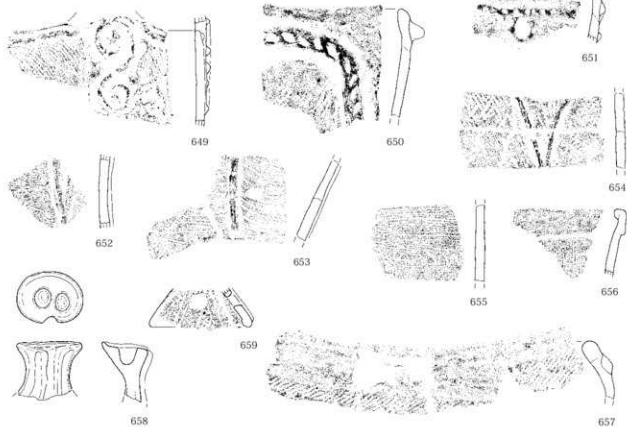


648

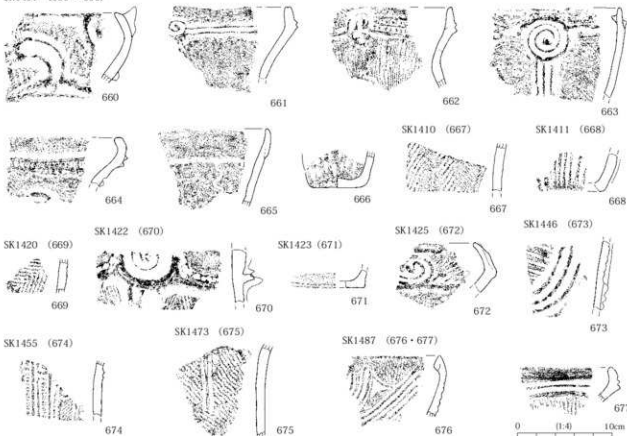
0 (1:4) 10cm

8区縄文土器 64 (SB62・65・66・67・68)

SB68 (2) (649~659)



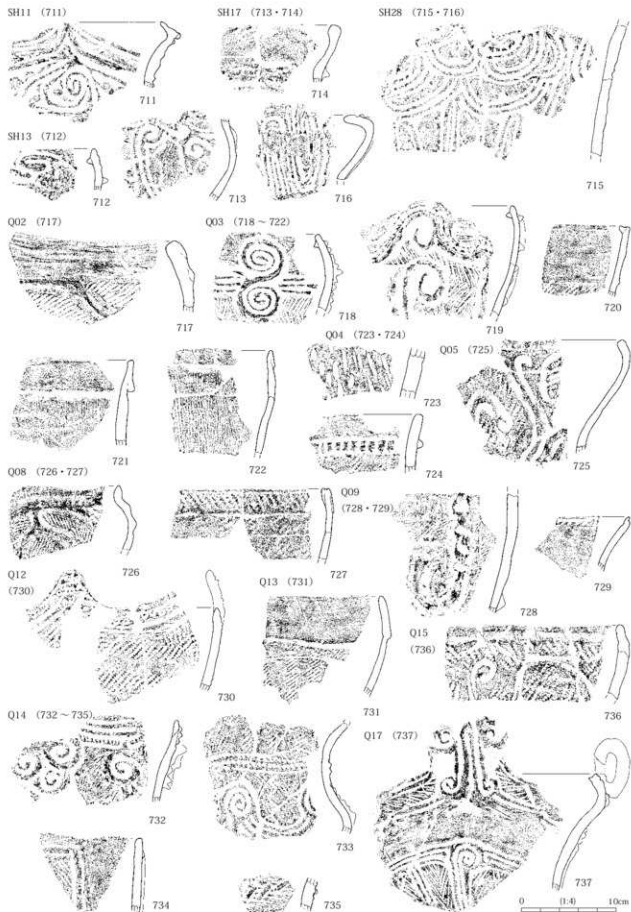
SK1401 (660~666)



8区縄文土器 65 (SB68, SK)

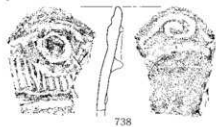


8区縄文土器 66 (SK, SH)

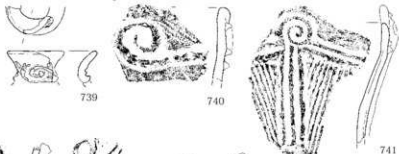


8区縄文土器 67 (SH、ⅦQ区)

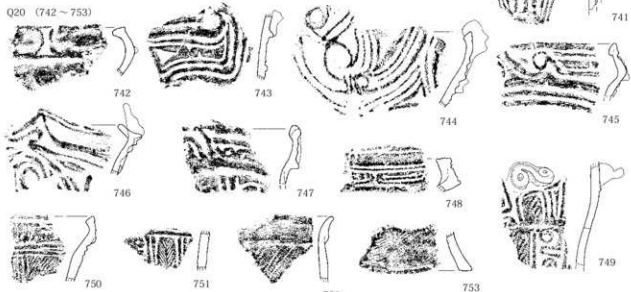
Q18 (738·739)



Q19 (740·741)



Q20 (742~753)



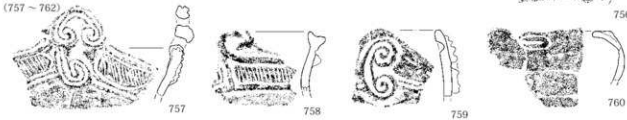
Q21 (754)



Q22 (755·756)



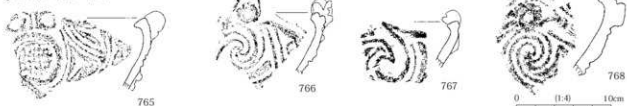
Q23 (757~762)



Q24 (763·764)



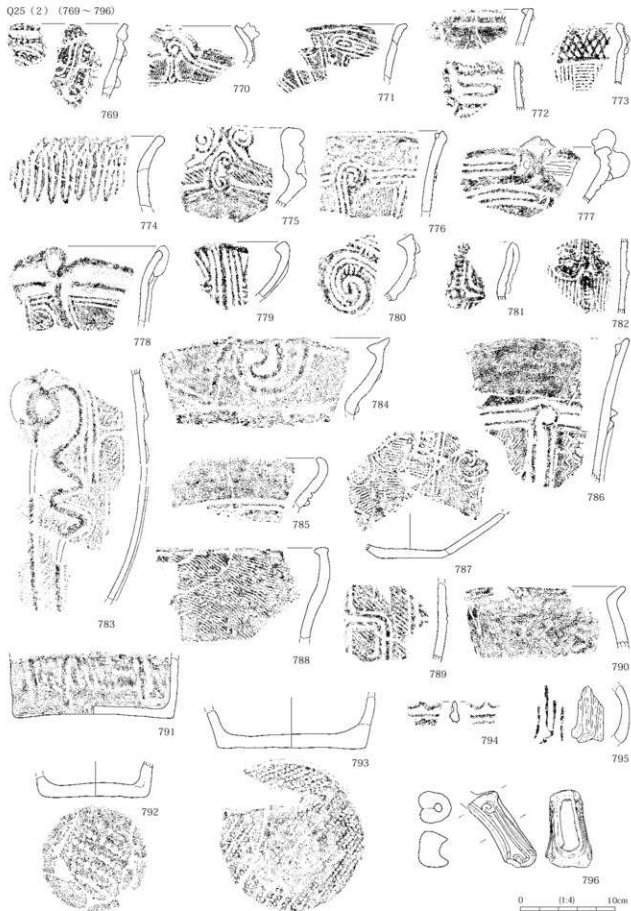
Q25 (I) (765~768)



0 (1-4) 10cm

8区縄文土器 68 (ⅧQ区)

Q25 (2) (769~796)



8区縄文土器 69 (ⅧQ区)

R02 (797~799)



797



798



799

R06 (800~802)



800



801

R08 (803~808)



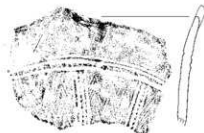
803



804



802



807



808



805



806

R11 (809~817)



809



810



811



813



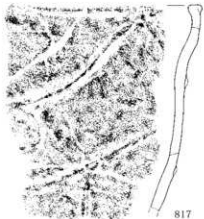
814



812



815



817

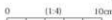
R13 (818)



818



816



8区绳文土器 70 (ⅧR区)

R16 (819~848)

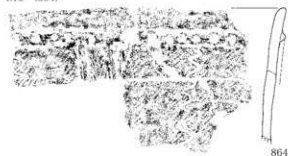


8区縄文土器 71 (ⅧR区)

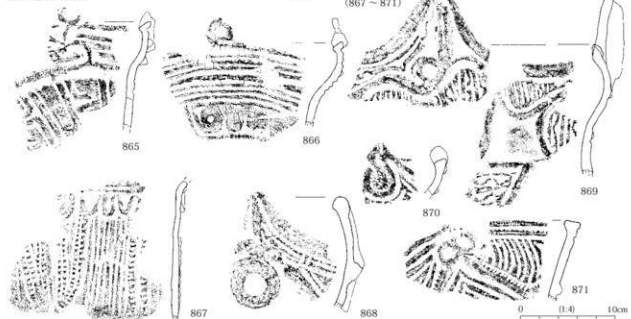
R17 (849~863)



R18 (864)



R20 (865~866)

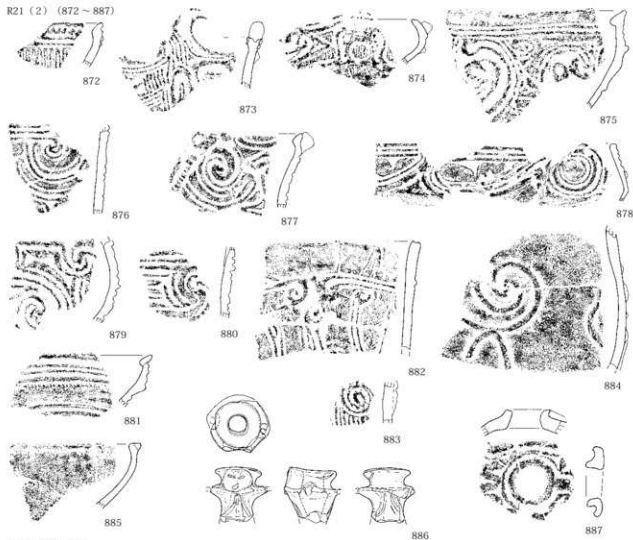


R21 (1)
(867~871)

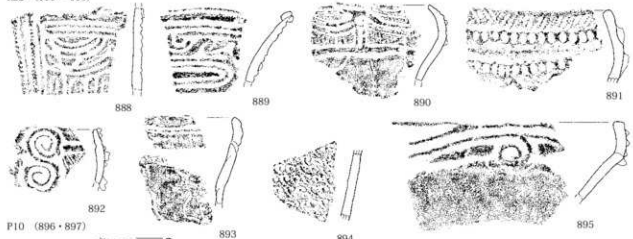
8区绳文土器 72 (Ⅷ R区)

0 (1-4) 10cm

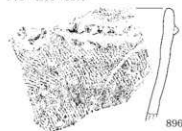
R21 (872~887)



R22 (888~895)



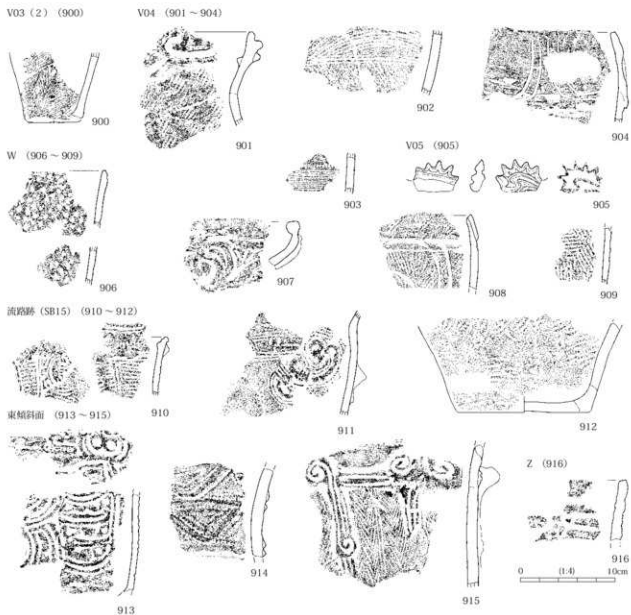
P10 (896~897)



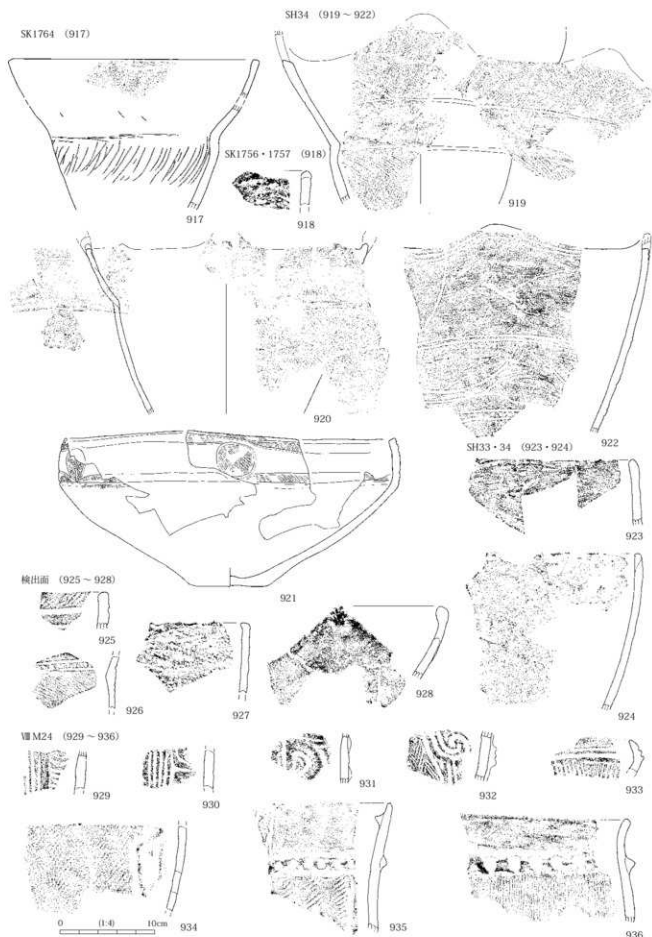
V03 (1) (898~899)



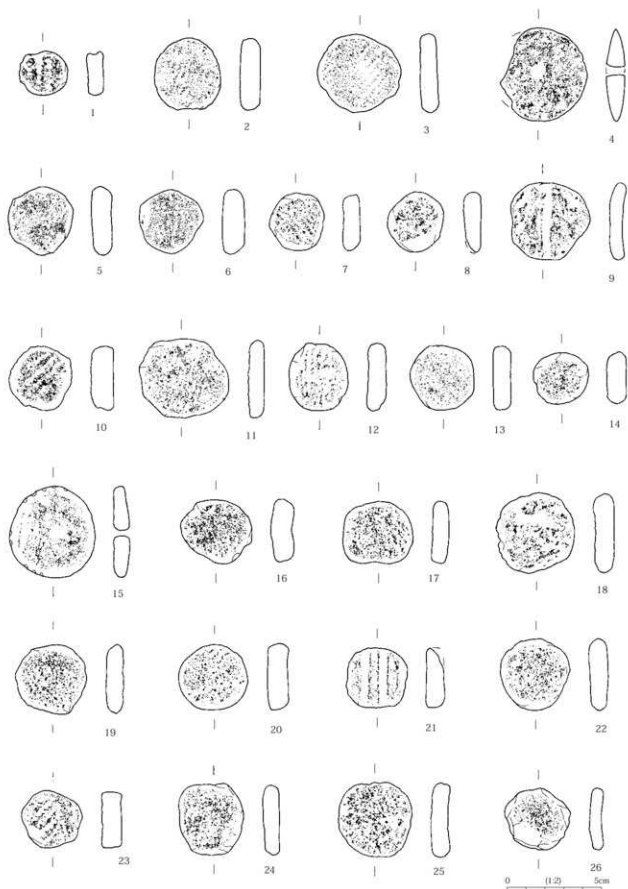
8区縄文土器 73 (ⅦR・P・V区)



8区縄文土器 74 (ⅡV・W区・SB15・東傾斜面)



9区縄文土器



SB07 : 1, SB12 : 2, SB20 : 3, SB35 : 4 ~ 6, SB40 : 7, SB44 : 8, SB68 : 9 ~ 11, SH19 : 12, SK1846 : 13, VII P10 : 14, VII Q13 · 14 · 18 · 19 : 15, Q14 : 16, Q20 : 17, Q25 : 18 · 19, VII R16 : 20, R21 : 21 · 22, R22 : 23 ~ 25, R25 : 26

8区土製円板



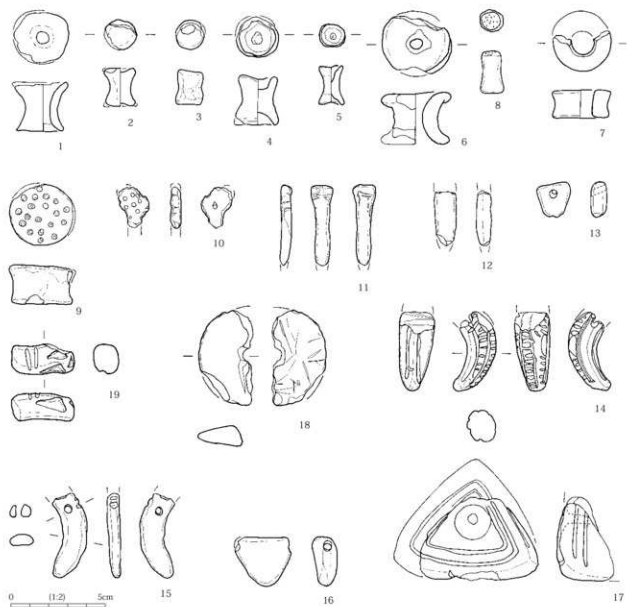
SB10・SB24 : 1, SB11 : 2, SB16 : 3, SB19 : 4, SB20 : 5・6, SB22 : 7, SB23 : 8, SB25 : 9, SB30 : 10 ~ 12, SB31 : 13 ~ 15, SB34 : 16, SB35 : 17, SB36 : 18, SB37 : 19・20, SB41 : 21・22

8区ミニチュア土器 1

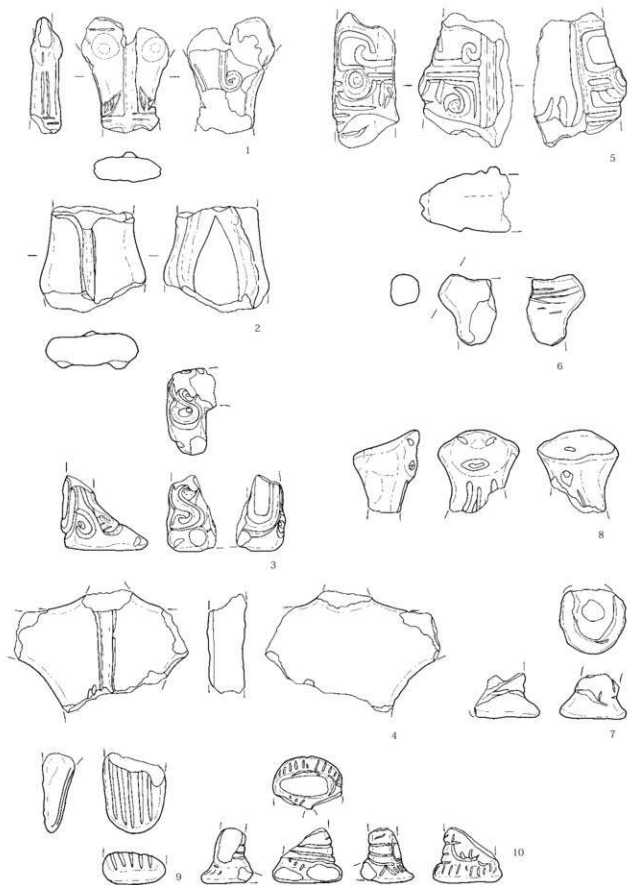


SB41 : 23・24, SB46 : 25, SB54 : 26, SB68 : 27・28, SK1401 : 29, SK2230 : 30, SQ13 : 31, VII Q07 : 32, Q09 : 33, Q18 : 34, Q20 : 35・36, Q22 : 37・38, VII R20 : 39, VIII R20 : 39, R18 : 40, R1・2 : 41, R17 : 42

8区ミニチュア土器2

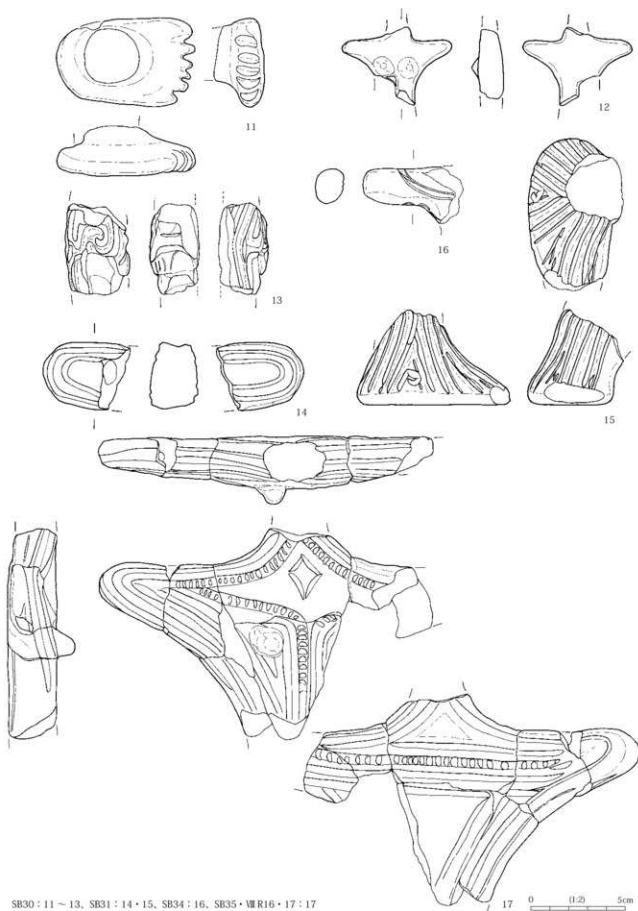


SB20 : 1, SB21 : 2, SB30 : 3·10, SB37 : 4, SB41 : 5·6, SB67 : 7·13, SB68 : 8·12, VII Q03 : 9, SB32 : 11, VII R03 : 14, R16 : 15, R21 : 16, VII Q24 : 17, Q25 : 18, Q20 : 19



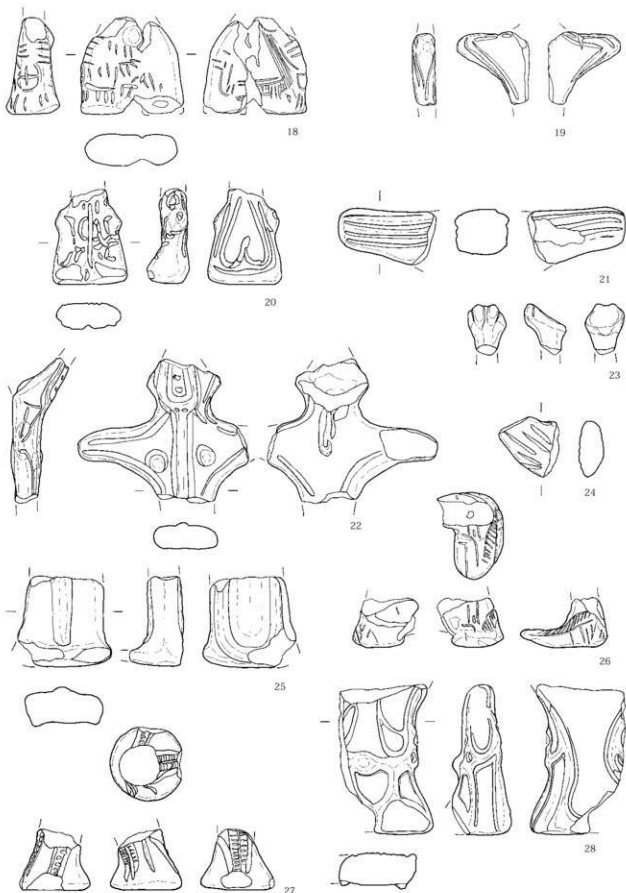
SB07 : 1, SB10 : 2, SB12 : 3, SB13 : 4, SB20 : 5, SB25 : 6, SB27 : 7, SB29 : 8, SB30 : 9 · 10

8区土偶 1



SB30 : 11 ~ 13, SB31 : 14 • 15, SB34 : 16, SB35 • VII R16 • 17 : 17

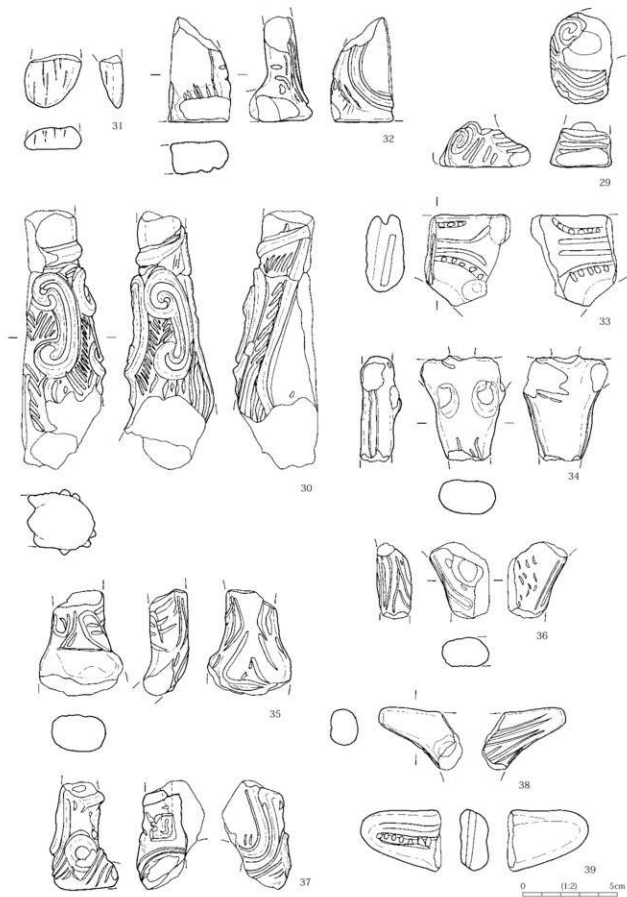
8区土偶2



SB36 : 18, SB37 : 19 ~ 23, SB40 : 24 • 25, SB41 : 26, SB43 : 27, SB58 : 28

8区土偶3

0 1:2 5cm



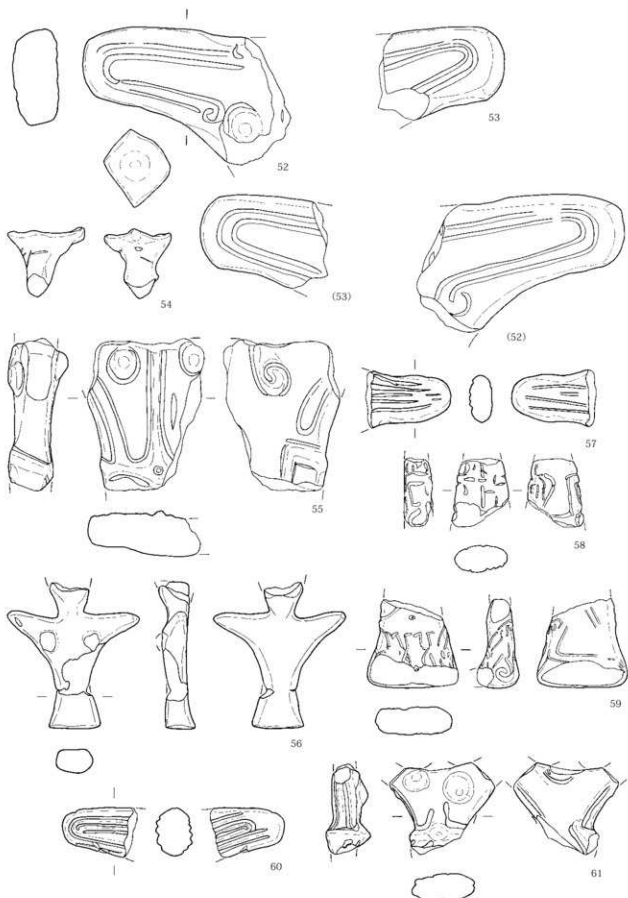
SB58 : 29 · 30, SB68 : 31 · 32, SH04 : 33, SK1494 : 34, Ⅷ Q09 : 35, Q03 : 36, Q18 · 19 · 23 : 37, Q13 : 38, Q20 : 39

8区土偶4



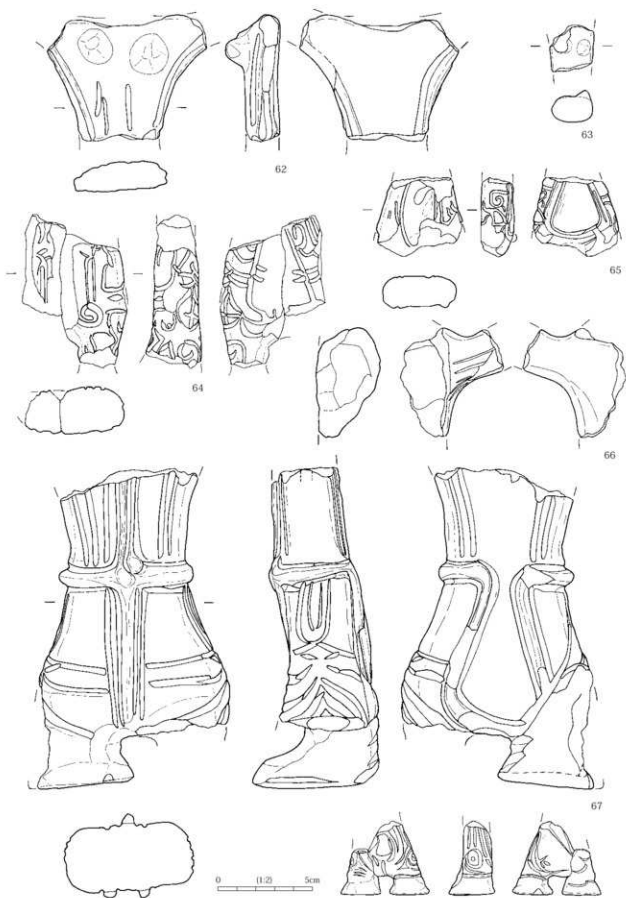
Ⅳ Q08·R25:40, Q14·15·19·20:41, Q20:42·45·51, Q14:43, Q18:44·47, Q19:46, Q22:48, Q25:49, Q24:50

8区土偶5



0 (1:2) 5cm Ⅷ V05 : 52, Ⅷ Q20 : 53, Q21 : 54, Q22 : 55, Q23 : 56·58, Q25 : 57, V02 : 59, Ⅷ R16 : 60, V04 : 61

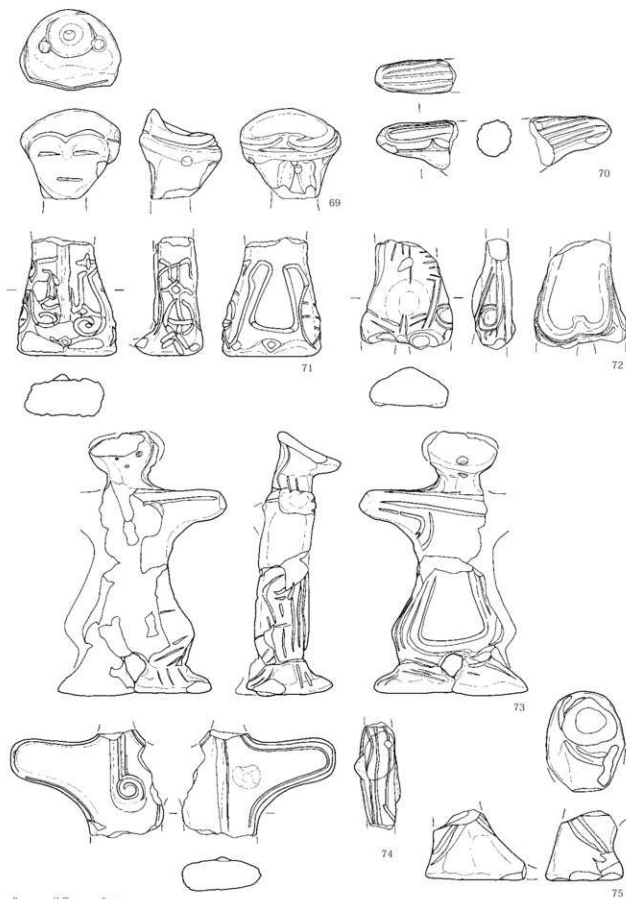
8区土偶6



Ⅷ R17: 62, R21: 63·68, R21·(27): 64, R22, Ⅷ W02: 65, R16: 66, Ⅷ V02: 67

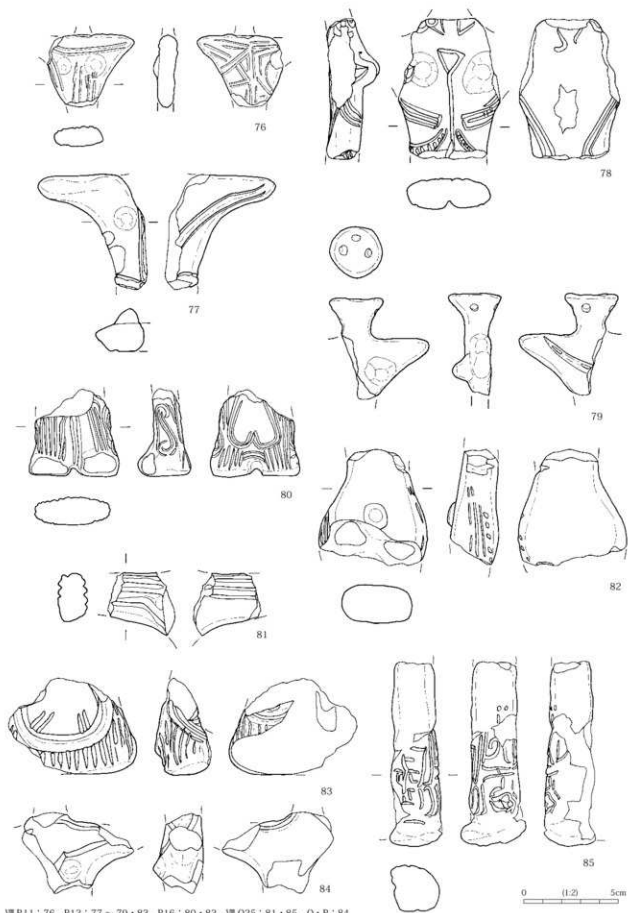
68

8区土偶7



0 1.2 5cm Ⅷ R16:69~71, R11:72, R17:73, R13:74, Ⅷ Q28:75

8区土偶8

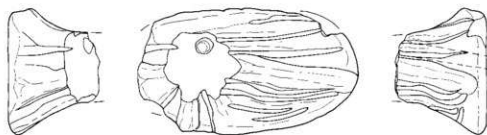


Ⅷ R11: 76, R12: 77~79·83, R16: 80·82, Ⅷ Q25: 81·85, Q·R: 84

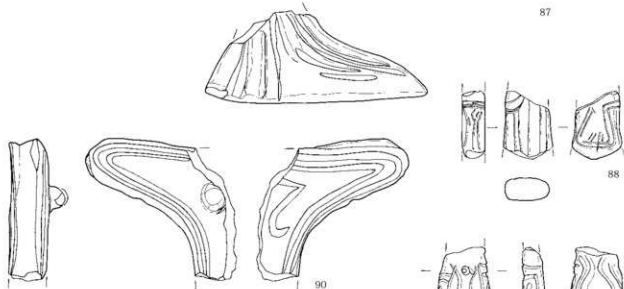
8区土偶9



86

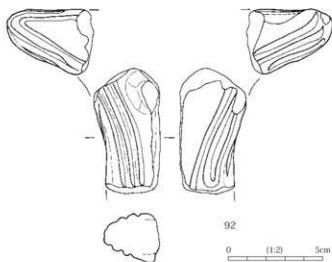


87



88

89



90

92

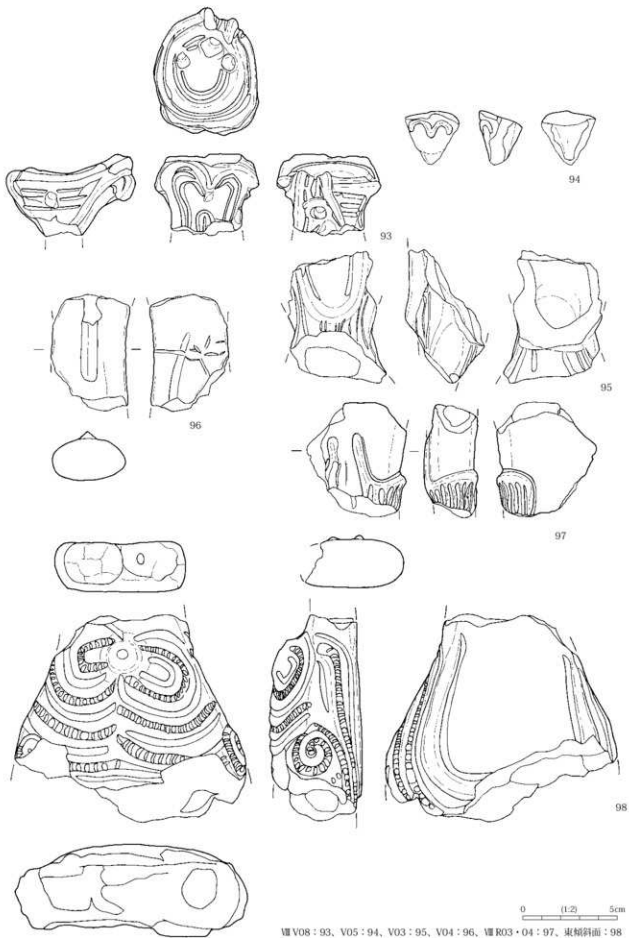
0 (1:2) 5cm



91

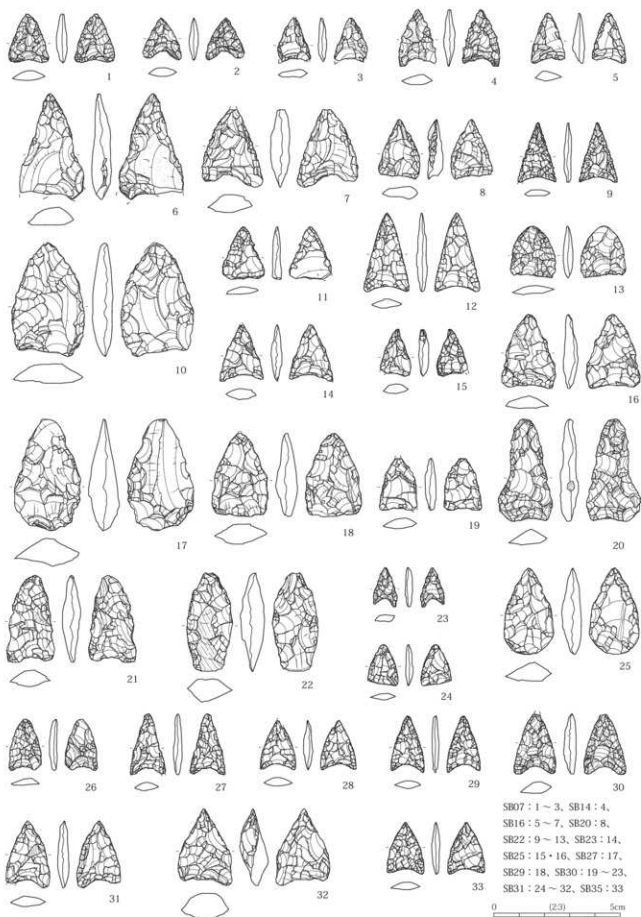
Ⅱ Q23 : 86、Q24 : 87、Ⅱ P13 : 88 · 89、Ⅱ W02 : 90、W01 : 91、束相斜面 : 92

8区土偶 10

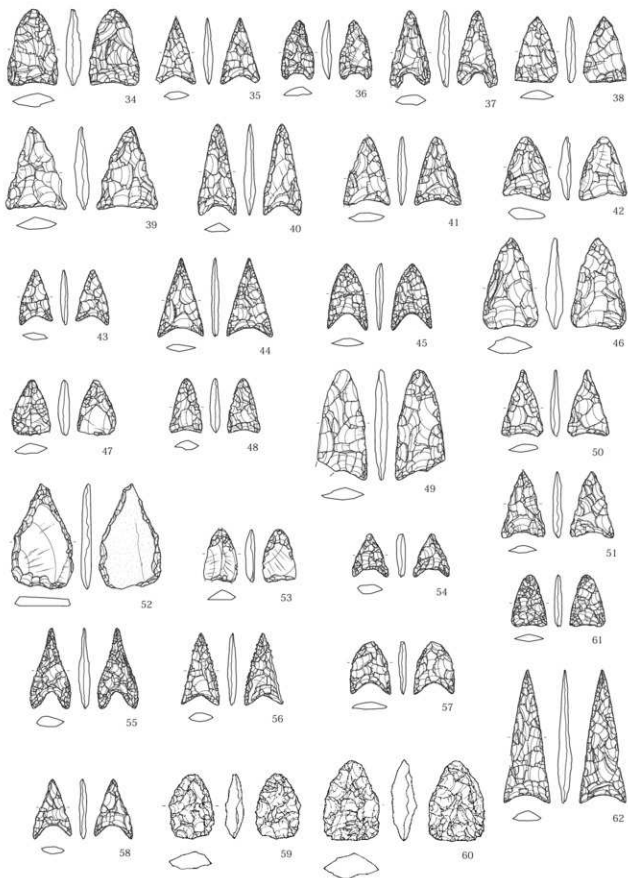


ⅧV08: 93、V05: 94、V03: 95、V04: 96、ⅧR03·04: 97、东斜侧面: 98

8区土偶 11

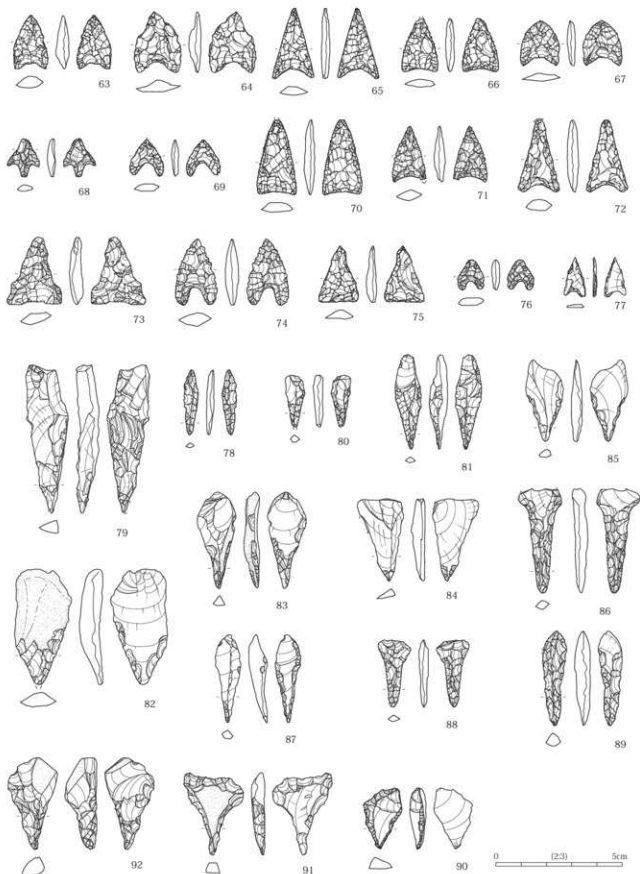


8区縄文時代石礫 1



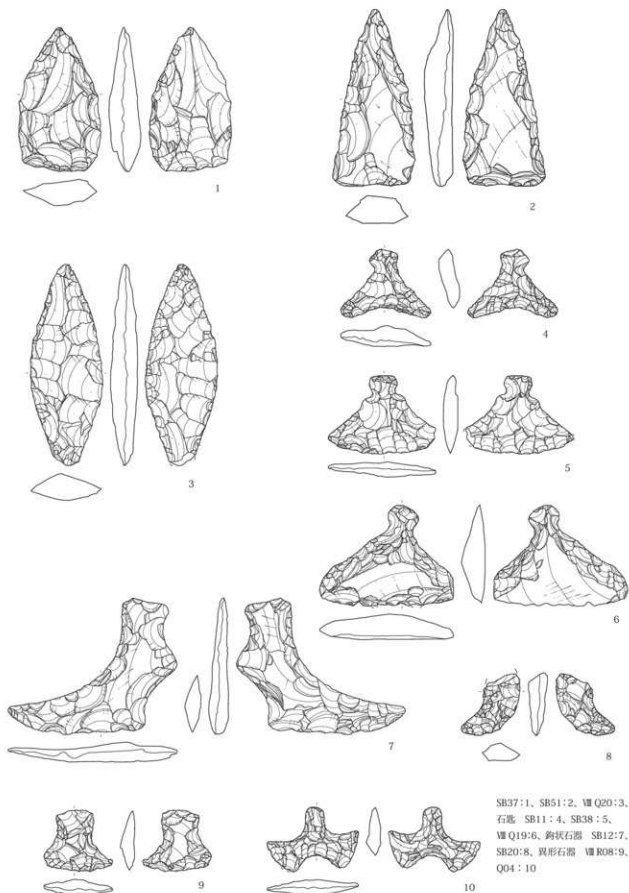
SB35 : 34・35, SB37 : 36～42, SB41 : 43～45, SB44 : 46・47, SB55 : 48・49, SB57 : 50, SB58 : 51, SB61 : 52, SB62 : 53, SB66 : 54, SB67 : 55・56, SB68 : 57～60, SB69 : 61・62

0 (2.3) 5cm



石鏃SK1509:63、SK1557:64、SK1826:65、SK2375:66、ⅧQ19:67、Q09:68、ⅧQ24:70、Q25:69・71・72、ⅧR11:73・76、R12:74、R16:75・77、石錐SB20:78、SB22:79、SB30:80~84、SB31:85、SB36:86、SB37:87~89、SB40:90、SB66:91、SB67:92

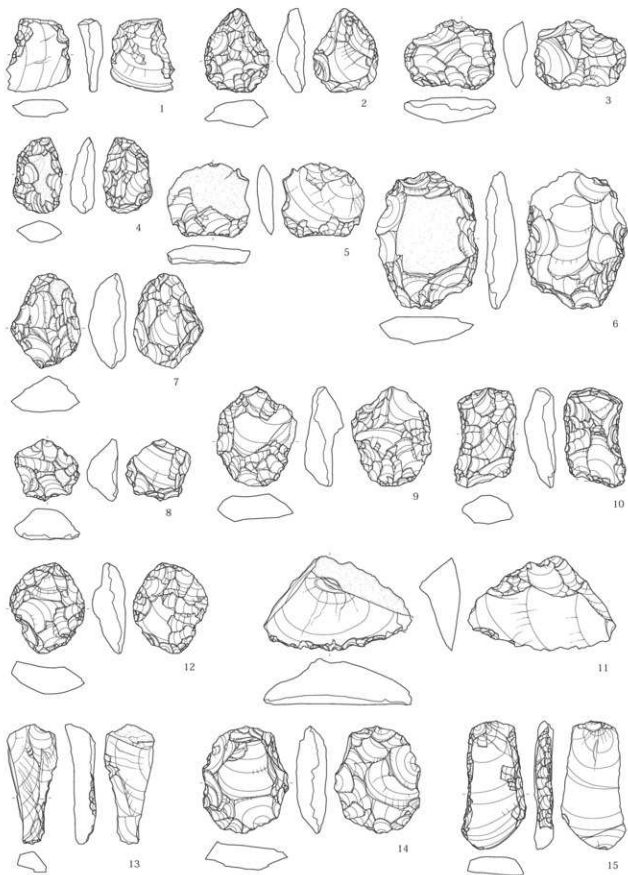
8区縄文時代石鏃3、石錐



SB37:1, SB51:2, Ⅷ Q20:3,
石匙 SB11:4, SB38:5,
Ⅷ Q19:6, 鉤状石器 SB12:7,
SB20:8, 異形石器 Ⅷ R08:9,
Q04:10

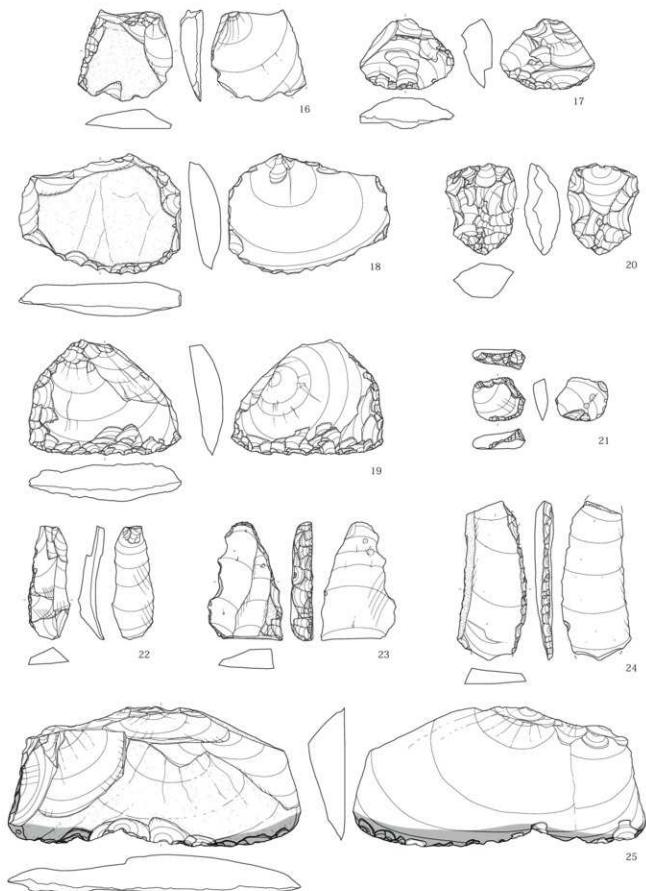
0 (2.3) 5cm

8区縄文時代尖頭器、石匙、鉤状石器、異形石器



SB16 : 1, SB20 : 2, SB21 : 3, SB22 : 4, SB23 : 5, SB30 : 6, SB31 : 7・8, SB37 : 9・10, SB40 : 11,
SB41 : 12, SB45 : 13, SB46 : 14, SB56 : 15

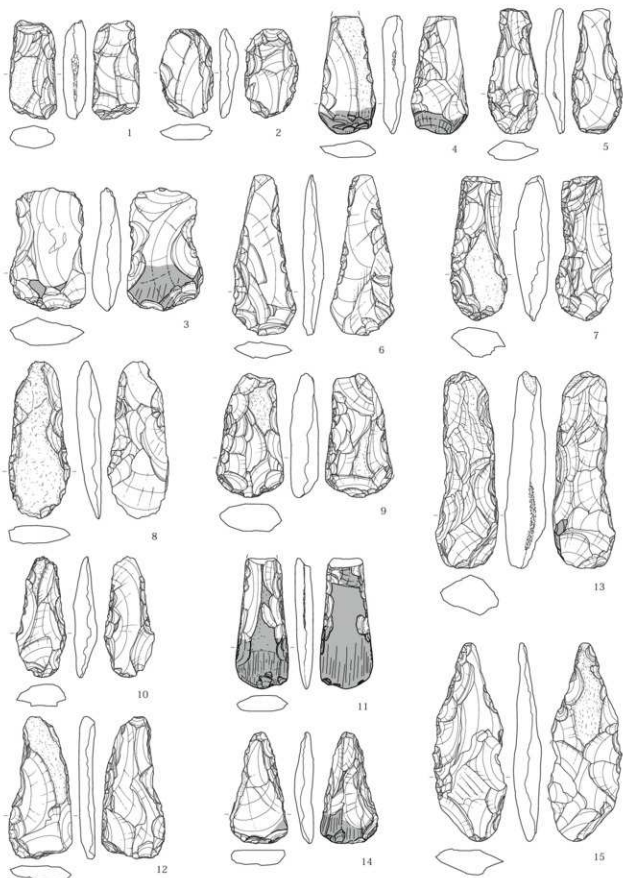
0 (2.3) 5cm



SB55 : 16 ~ 18, SB65 : 19, SB68 : 20, Ⅷ R16 : 21, Ⅷ Q09 : 22, Q20 : 23, R21 : 24, SK1616 : 25

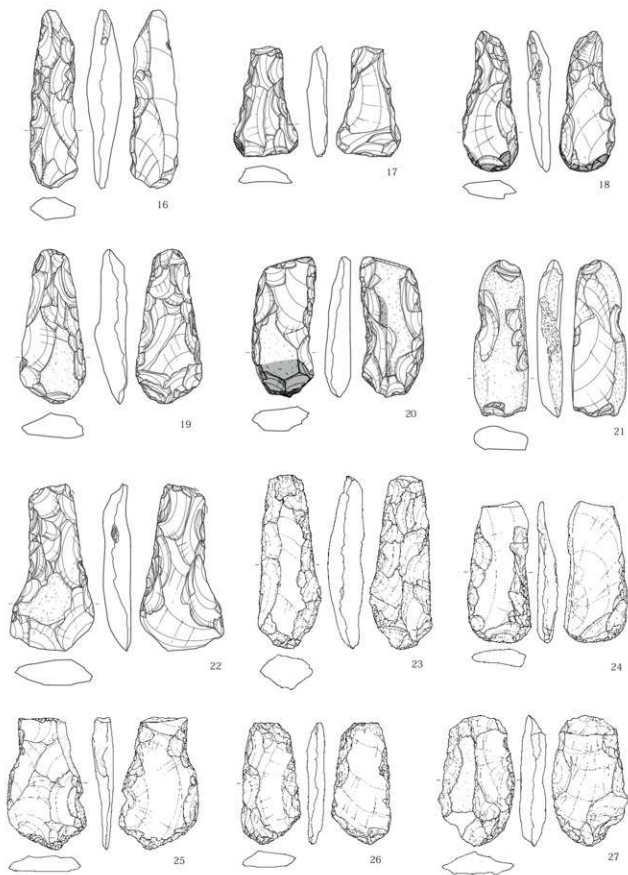
0 (2.5) 5cm

8区縄文時代スクレイパー2



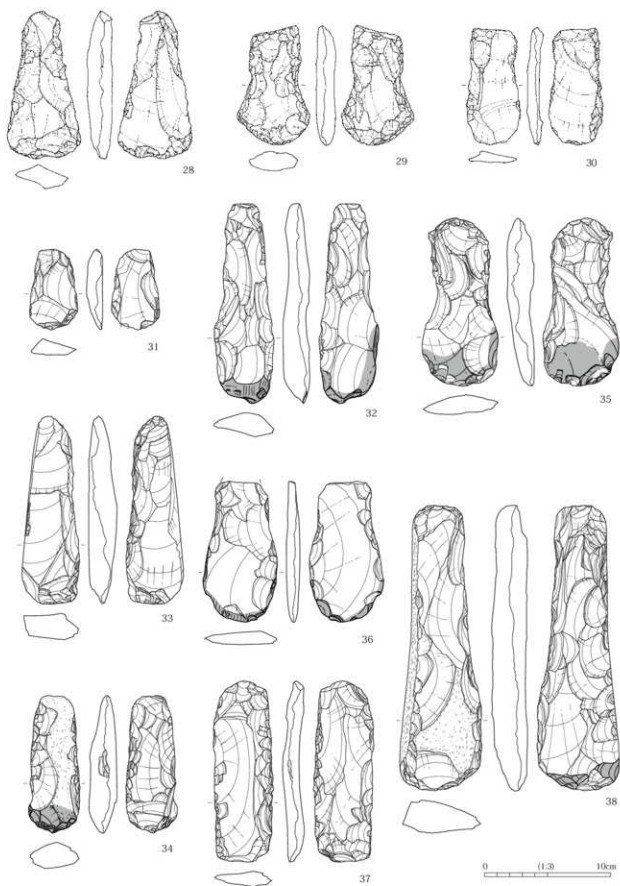
SB07 : 1, SB16 : 2, SB19 : 3, SB20 : 4, SB21 : 5, SB27 : 6 ~ 8, SB30 : 9 ~ 11,
SB31 : 12, SB35 : 13, SB37 : 14・15

8区繩文時代打製石斧 1



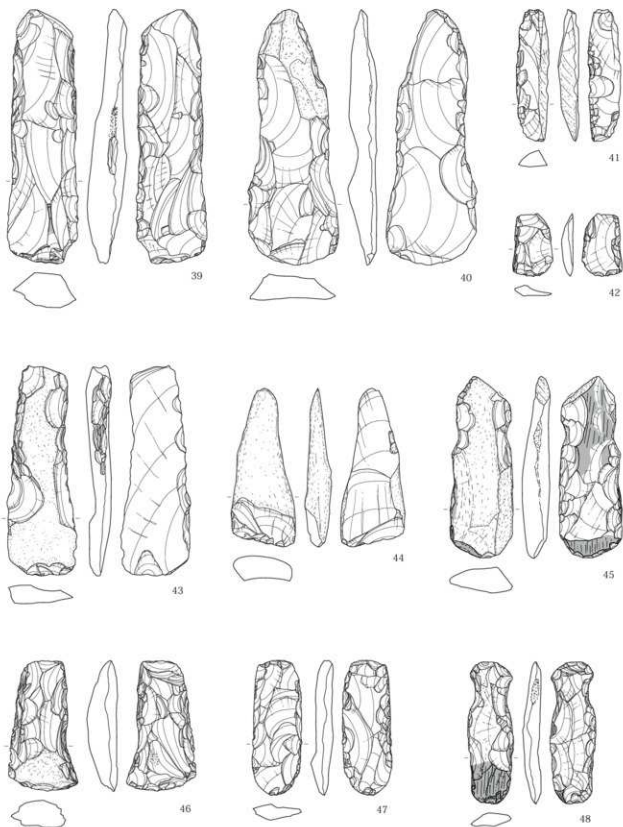
SB39: 16, SB40: 17, SB41: 18・19, SB44: 20, SB55: 21・22, SB68: 23~27

8区縄文時代打製石斧2



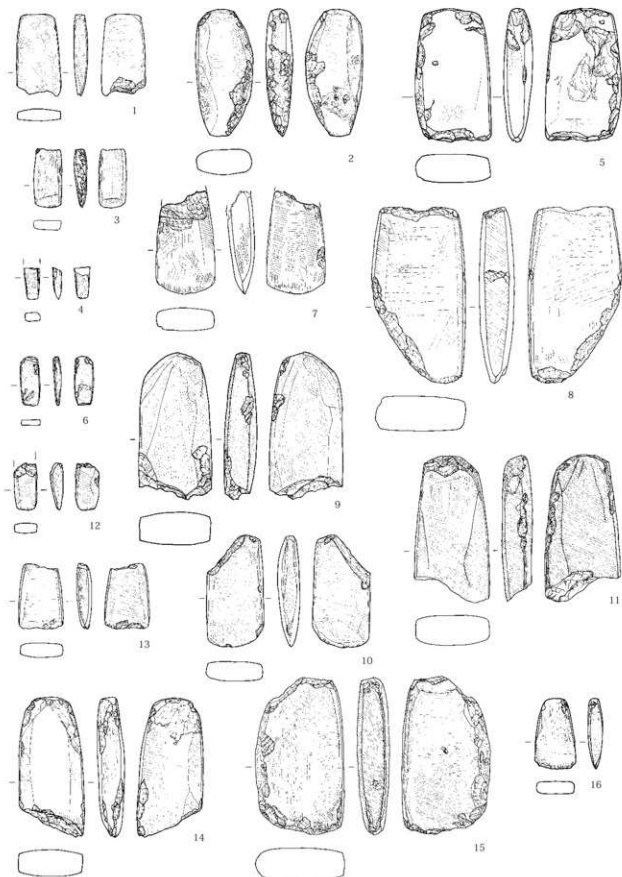
SB68 : 28 ~ 30, SK1560 : 31, SK2163 : 32, SK2415 : 33, SK2433 : 34, SB06 : 35, VII P10 : 36, VII Q02 : 37, Q09 : 38

8区繩文時代打製石斧3



Ⅷ Q17: 39, Q18: 40・44, Q19: 41, Q23: 42, Q10: 43, Q22: 45, Ⅷ R09: 46, R11: 47, Ⅷ V03: 48

8区繩文時代打製石斧 4

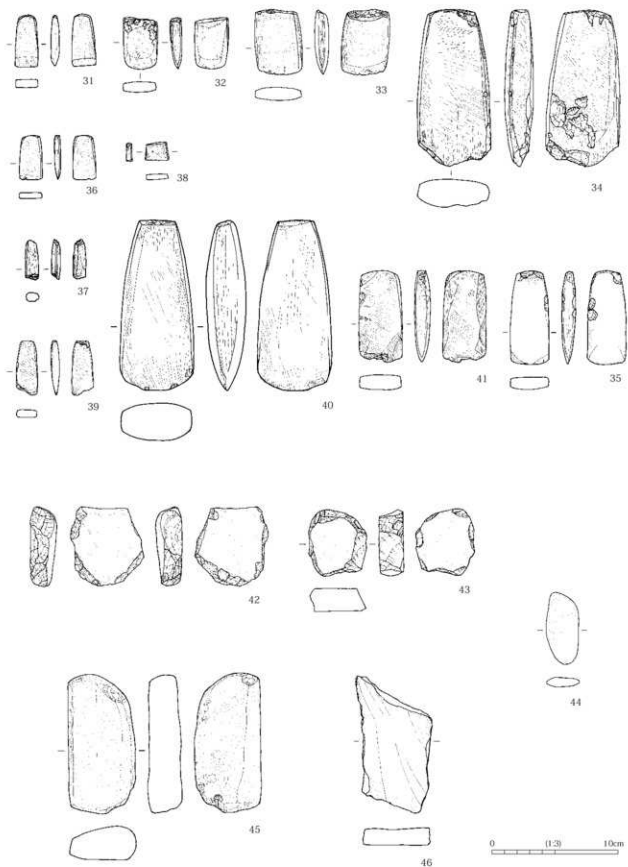


SB07 : 1, SB10 : 2, SB16 : 3, SB20 : 4・5, SB21 : 6, SB22 : 7・8, SB25 : 9, SB29 : 10,
SB30 : 11, SB31 : 12~15, SB37 : 16

8区縄文時代磨製石斧1

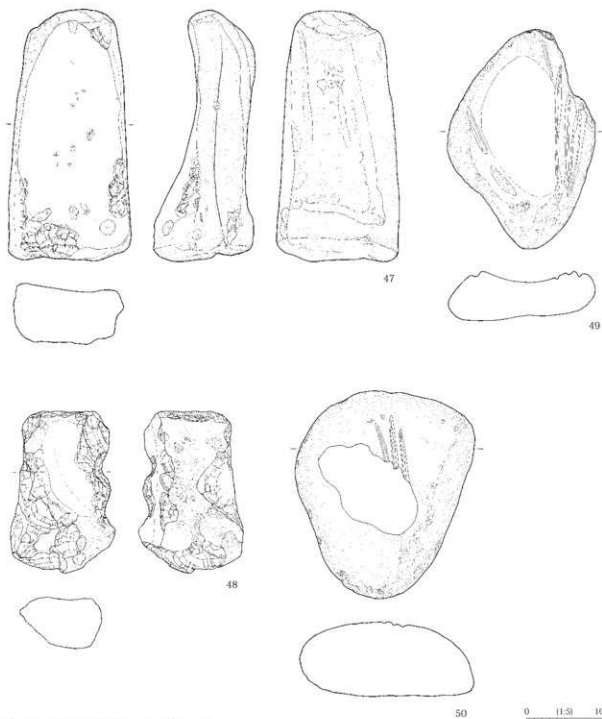


8区縄文時代磨製石斧2



磨製石斧 SK1401:31, SK2387:32, SK2417:33, ⅧQ08:34, Q10:36, Q23:37, ⅧR23:38, R07:39, R16:40, Q·R:41, 板状石器 Q24:42, R:43, 砥石(小) SB26:45, Q25:46, 研磨碟 R16:44

8区縄文時代磨製石斧3、板状石器、砥石1、研磨碟



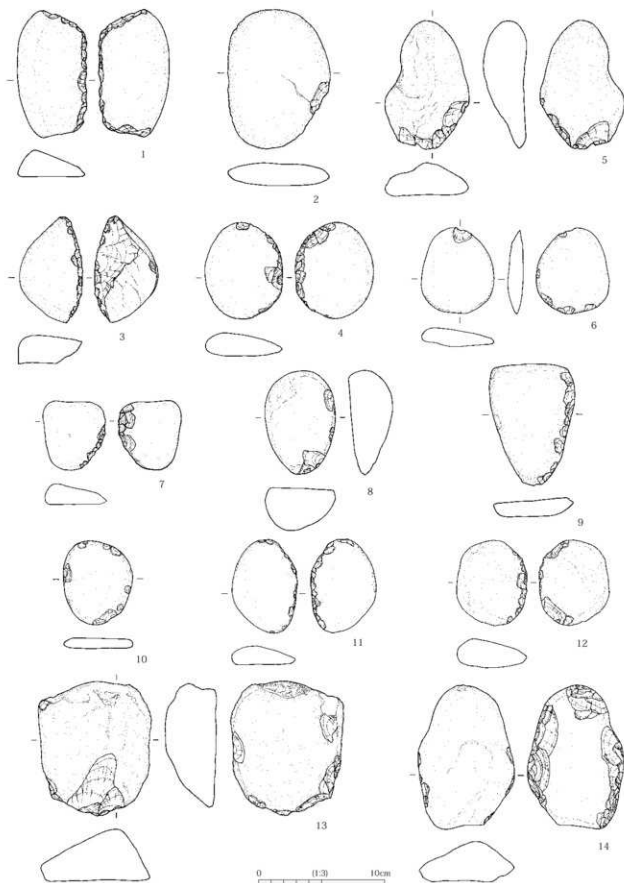
SB07 : 47、SH18 : 48、VW20 : 49、VW R12 : 50



石錘 SB07: 1, SB41: 2, NR101: 3,
 VII R17: 4, 磔器 SB20: 5, SB37: 6,
 SB46: 7, SK1560: 8, SK1801: 9,
 VII Q24: 10・11, R09: 12, VII V05: 13

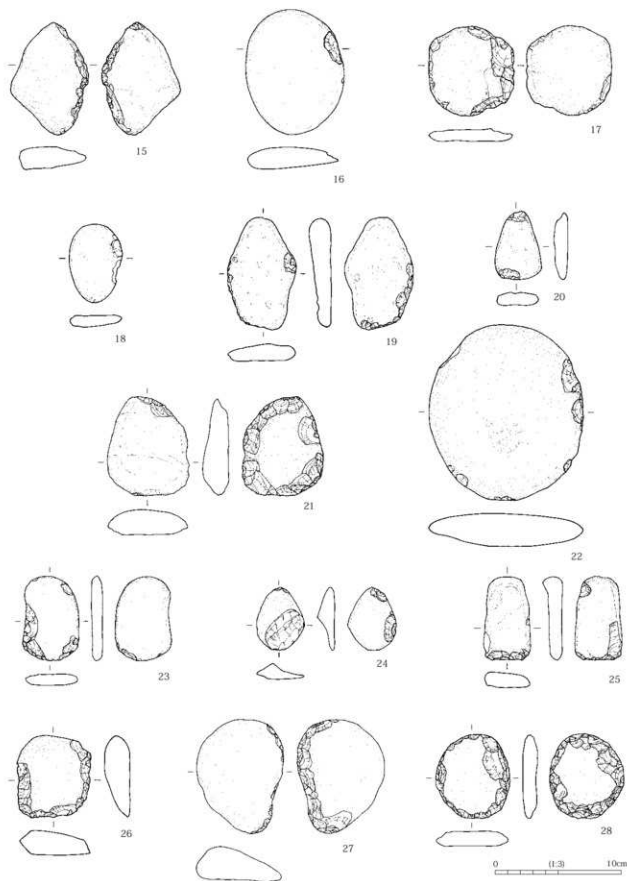
0 1:4 10cm

8区縄文時代石錘、磔器



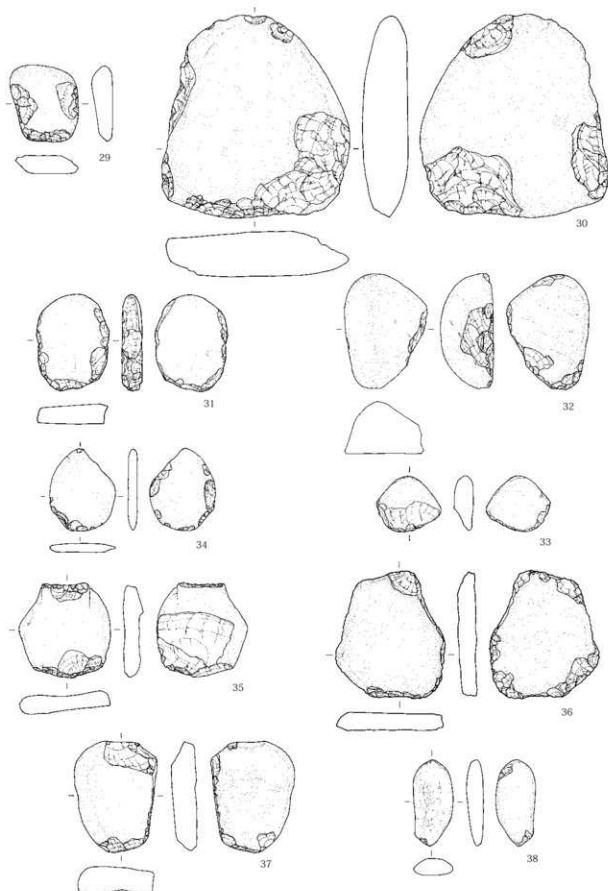
SB07: 1・2, SB27: 3・4, SB30: 5, SB31: 6~9, SB37: 10・11, SB41: 12, SB43: 13, SB44: 14

8区縄文時代鼓打礫 I



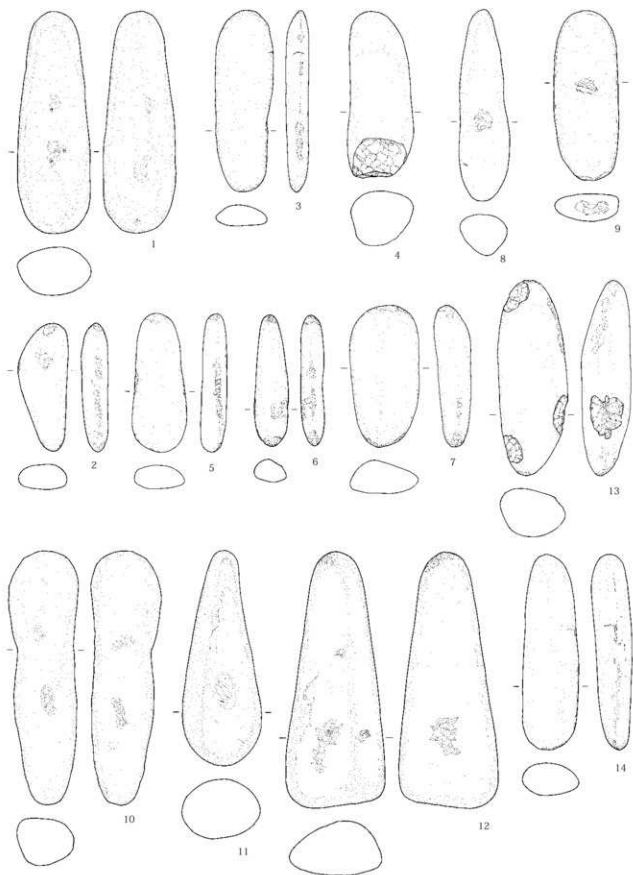
SB08 : 15 ~ 18, SK2375 : 19, SH09 : 20, VII P12 : 21, VII Q08 : 22, Q16 : 23, Q23 : 24, Q24 : 25 • 26, Q25 : 27 • 28

8区縄文時代鼓打磔2



Ⅷ R11 : 29, R16 : 30 ~ 32, R17 : 33, R21 : 34, Ⅷ V02 : 35・36, V05 : 37・38

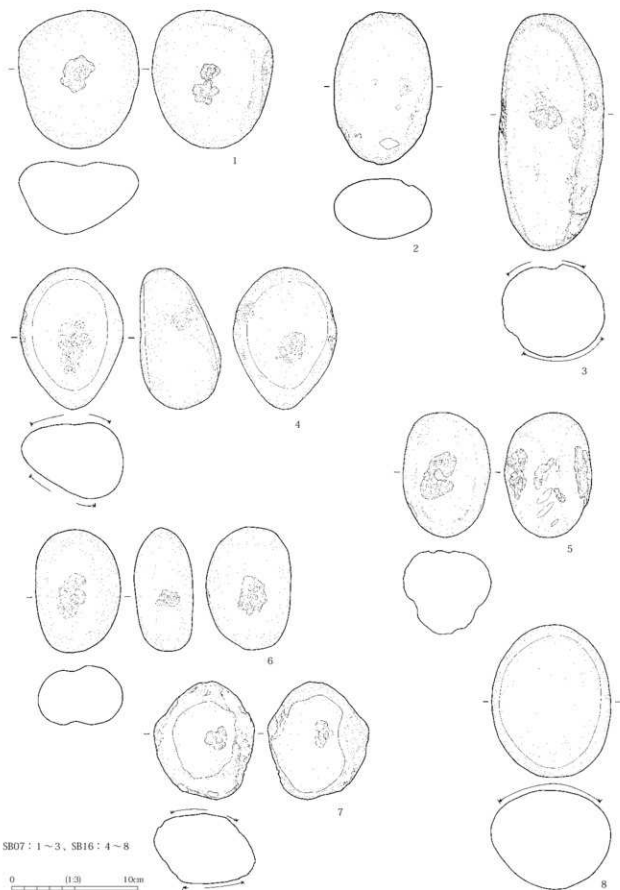
8区縄文時代敲打礫3

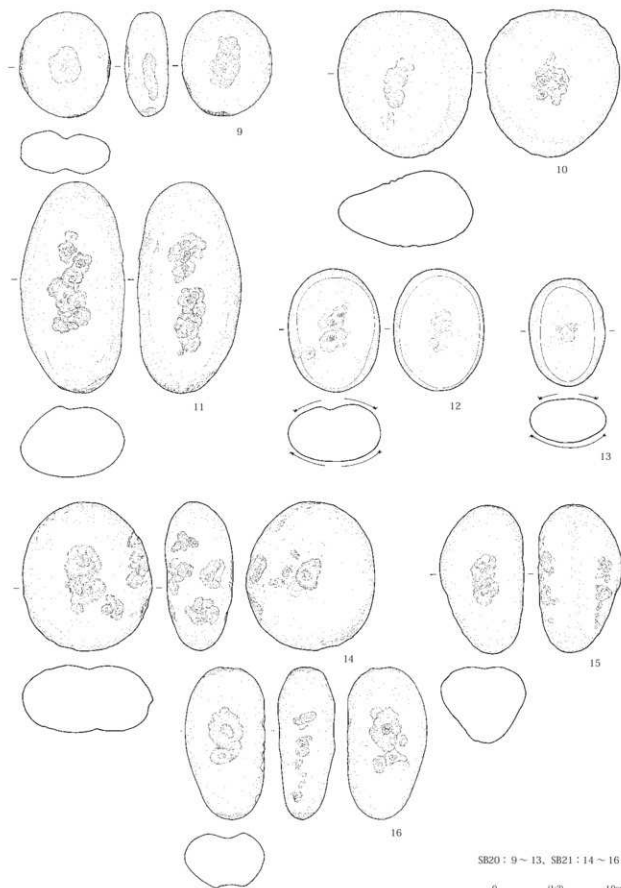


SB20 : 1, SB22 : 2, SB26 : 3, SB29 : 4, SB30 : 5, SB37 : 6, SB41 : 7, SB61 : 8, SB68 : 9・10,
SK1560 : 11, VP13 : 12, VQ20 : 13・14

0 11.3 10cm

8区縄文時代棒状鼓石

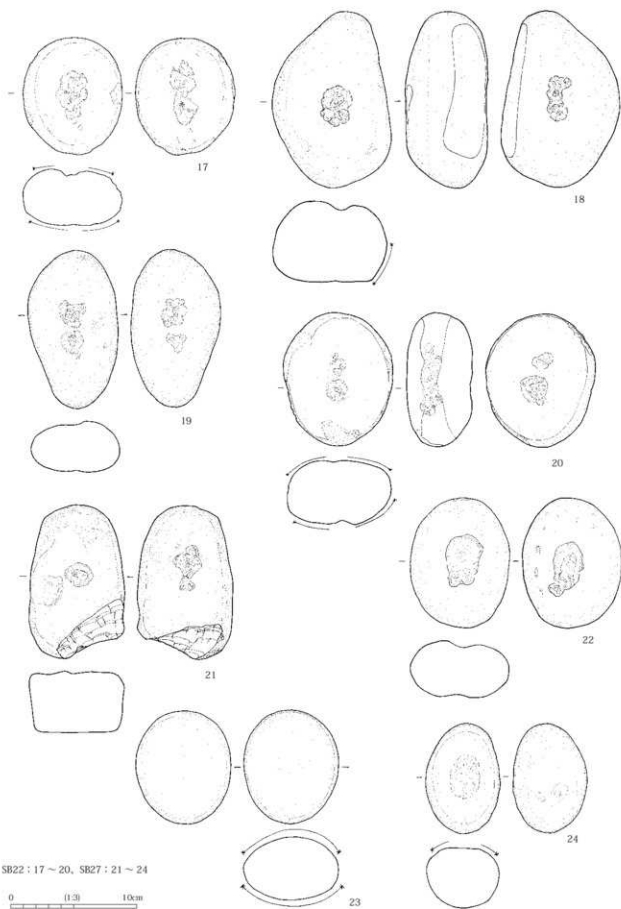




SR20: 9~13, SB21: 14~16

0 1.5 10cm

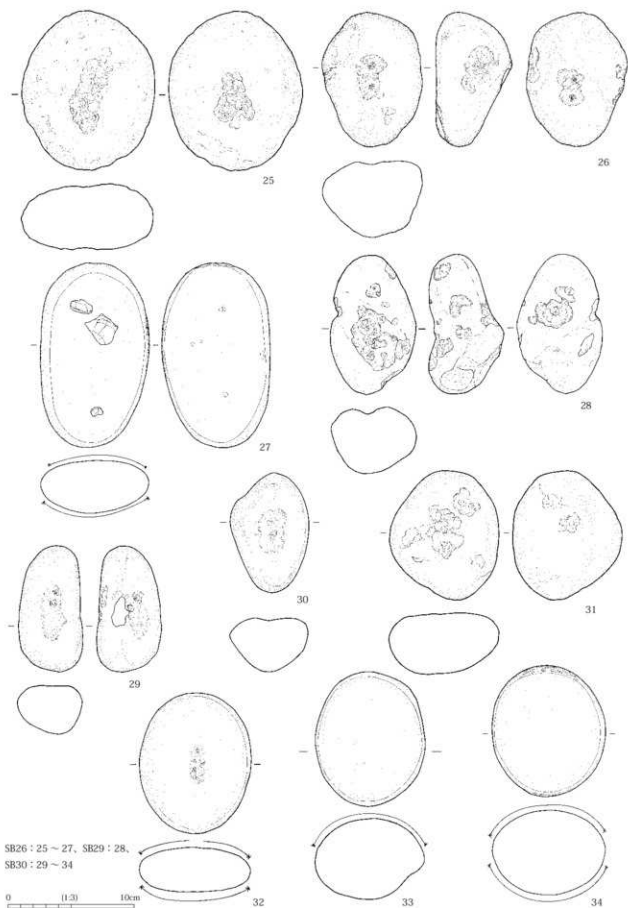
8区縄文時代磨石類 2



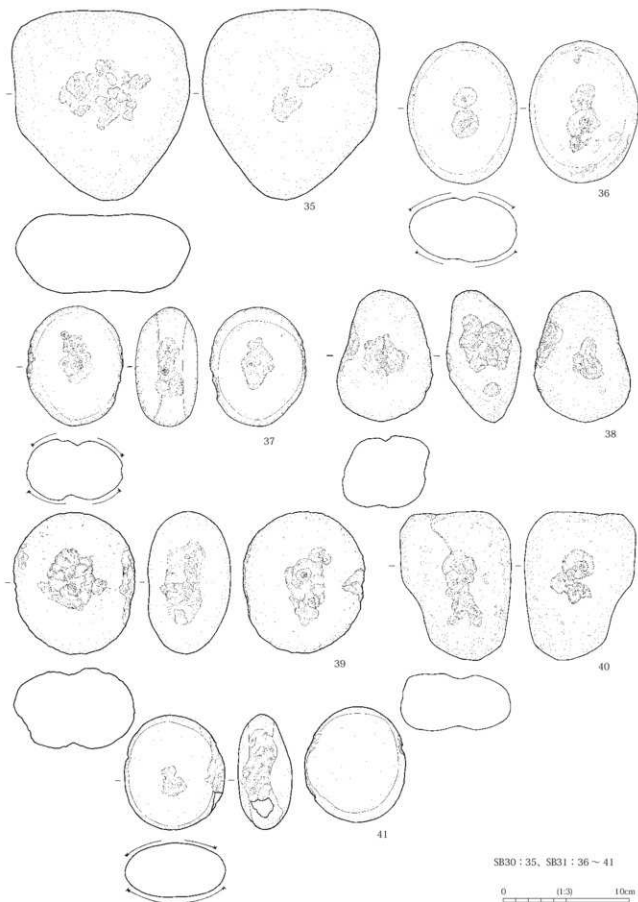
SB22 : 17 ~ 20, SB27 : 21 ~ 24

0 1.0 10cm

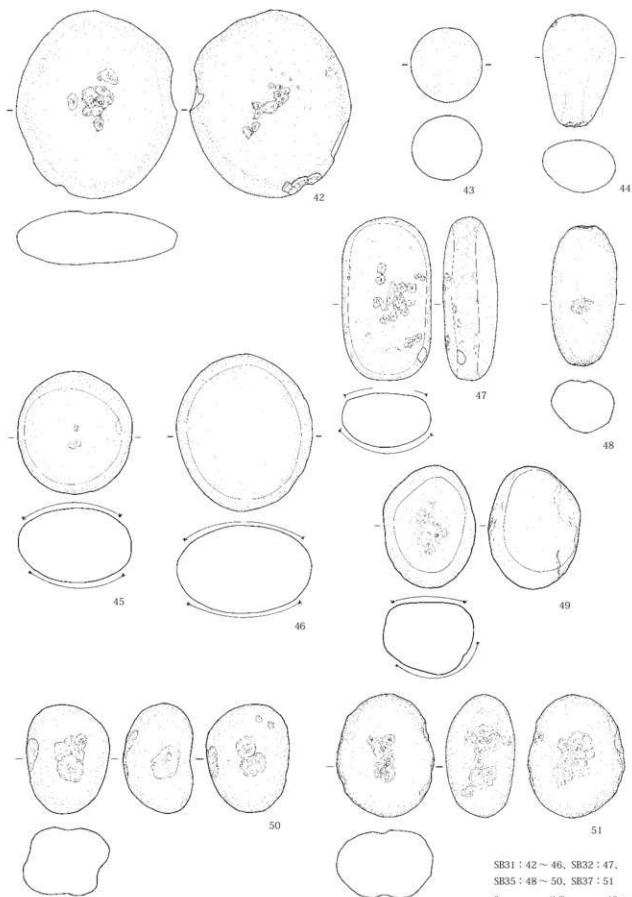
8区縄文時代磨石類3



8区縄文時代磨石類 4



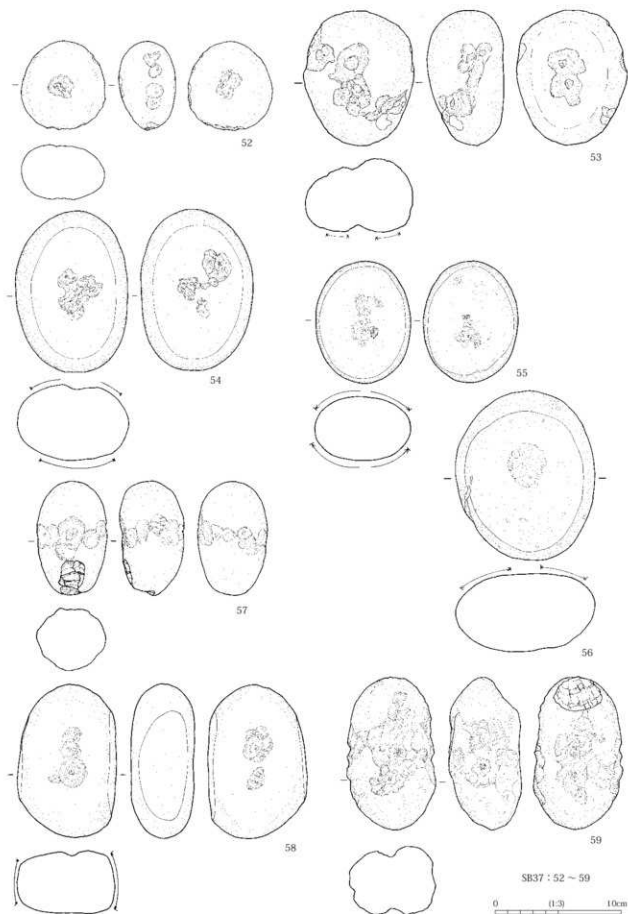
8区縄文時代磨石類 5



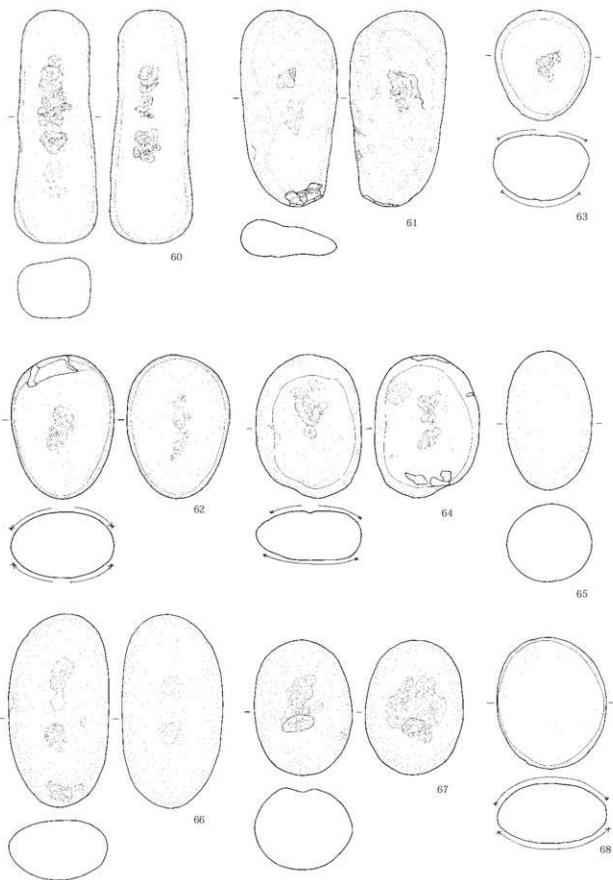
SB31 : 42 ~ 46, SB32 : 47,
 SB35 : 48 ~ 50, SB37 : 51

0 1.3 10cm

8区縄文時代磨石類6

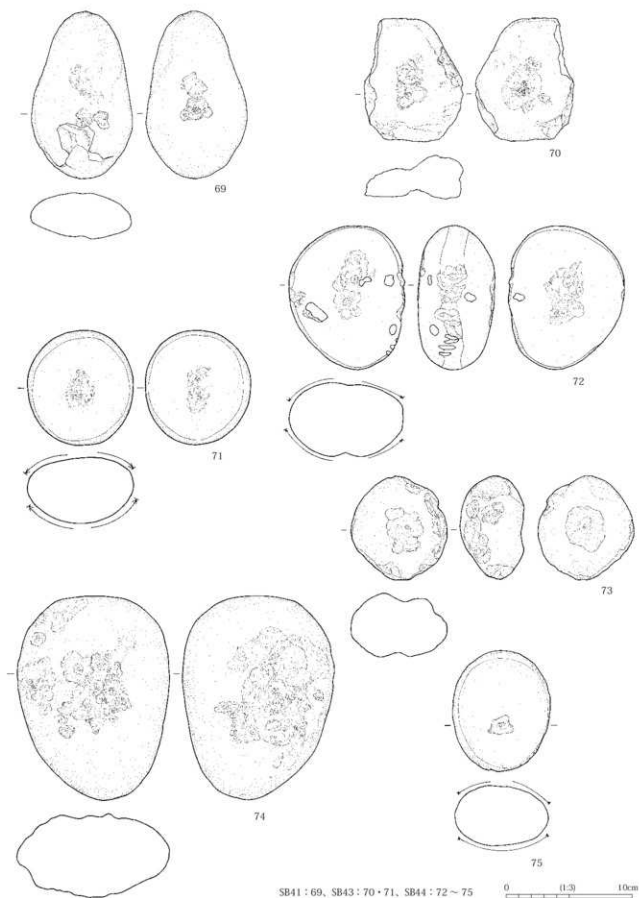


8区縄文時代磨石類 7



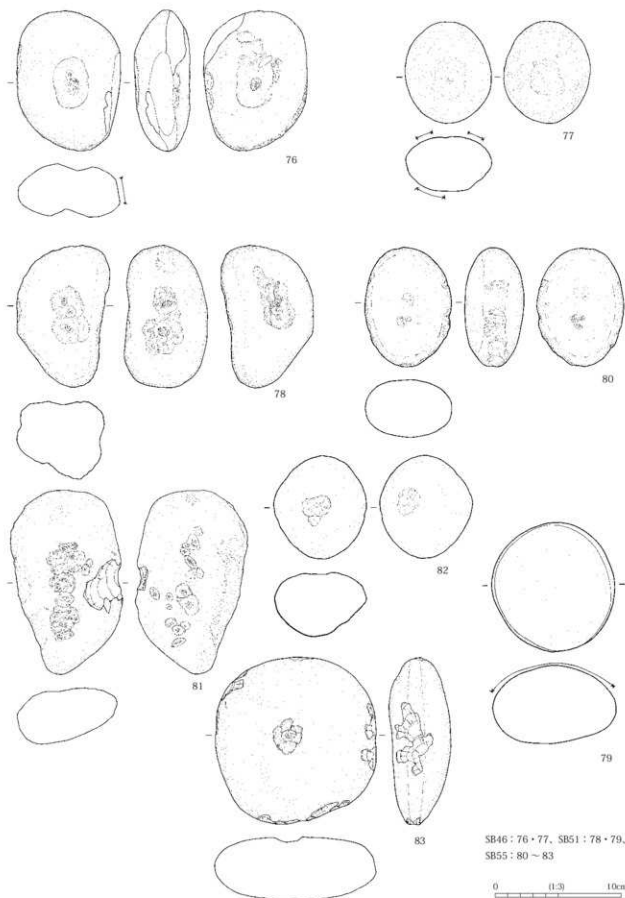
SB39 : 60, SB40 : 61・62・65, SB41 : 63・64・66～68

8区縄文時代磨石類8

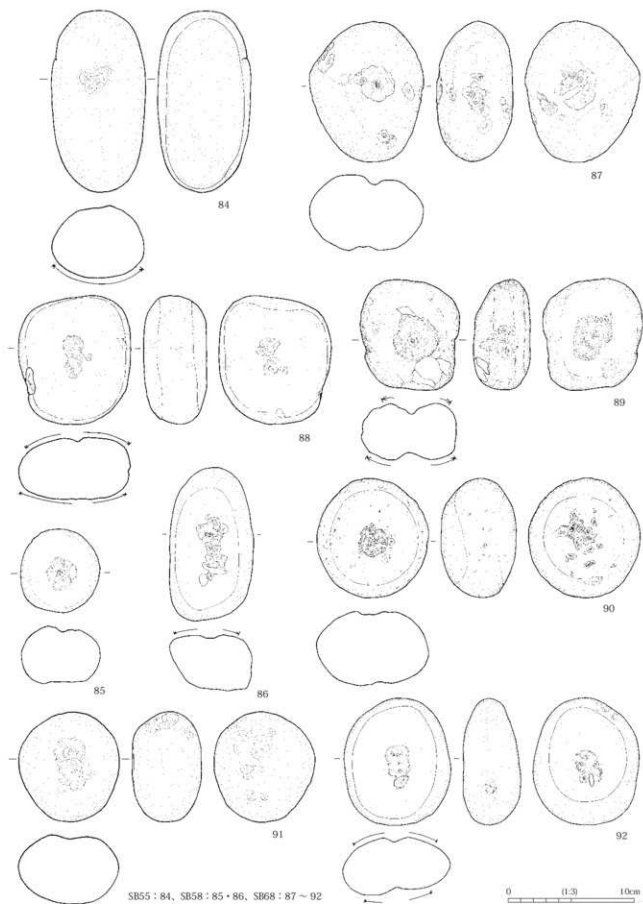


SB41: 69, SB43: 70・71, SB44: 72~75

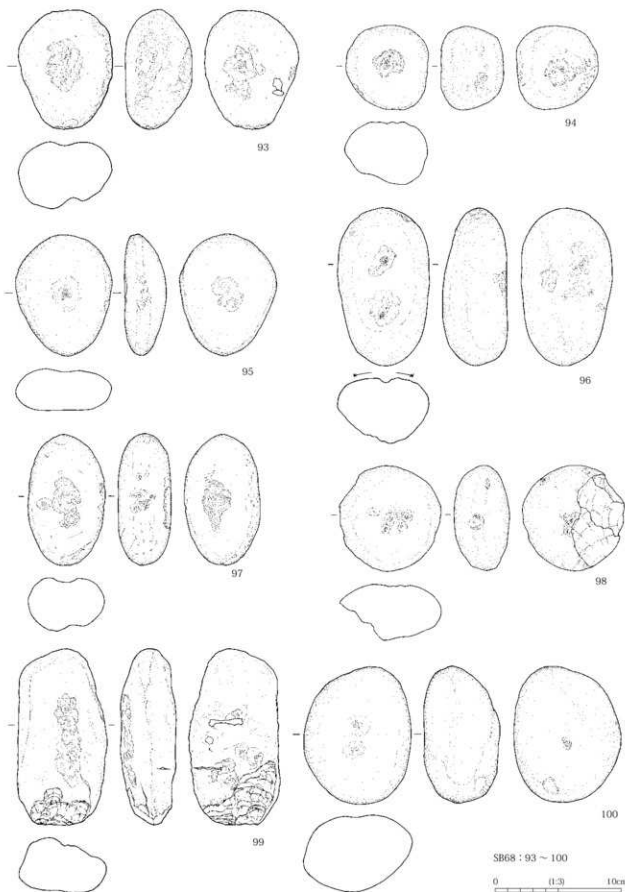
8区縄文時代磨石類9



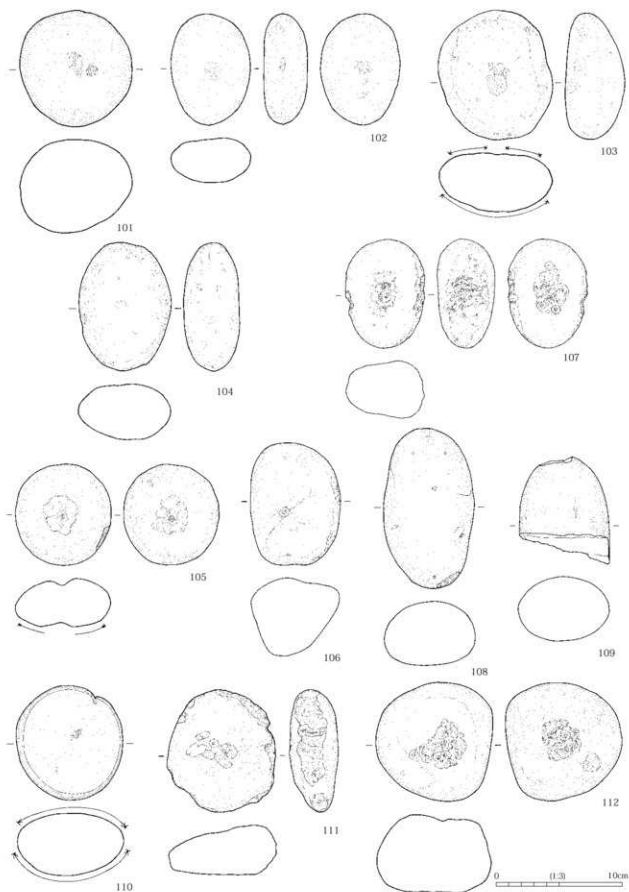
8区縄文時代磨石類 10



8区縄文時代磨石類 11

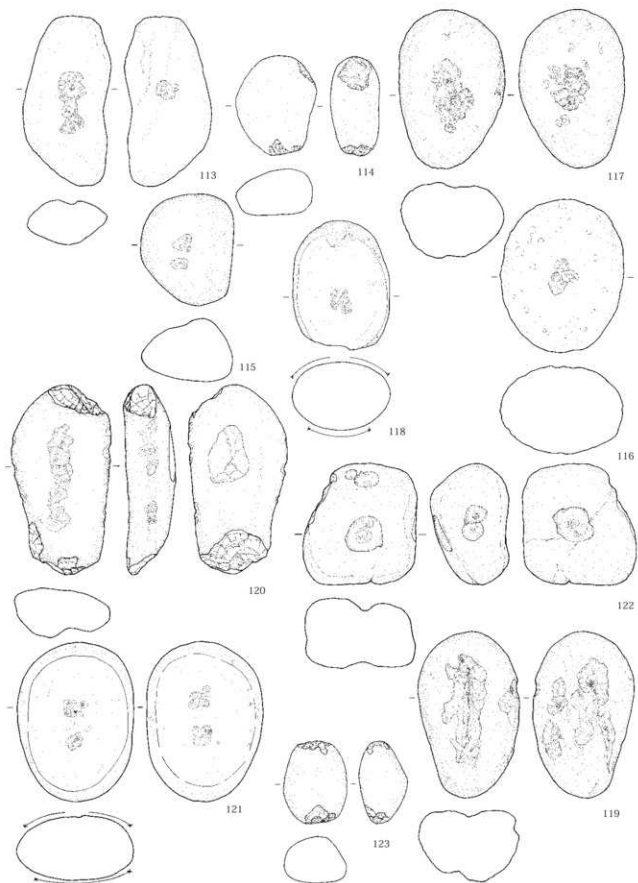


8区縄文時代磨石類 12



SB68 : 101 ~ 104, SK1522 : 105, SK1557 : 106, SK1560 : 107・108, SK1564 : 109, SK1590 : 110, SK1591 : 111, SK1752 : 112

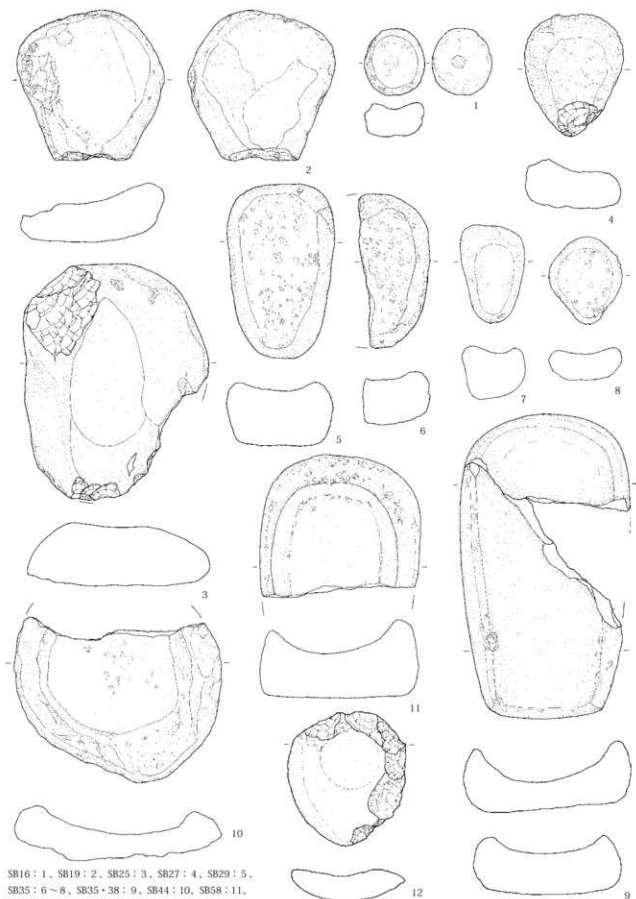
8区縄文時代磨石類 13



SK1640 : 113, SK1837 : 114, SK1914 : 115・116, SK2398 : 117, SK2418 : 118, SH03 : 119, SH09 : 120,
SH13 : 121, SH18 : 122, SQ12 : 123

0 1.5 10cm

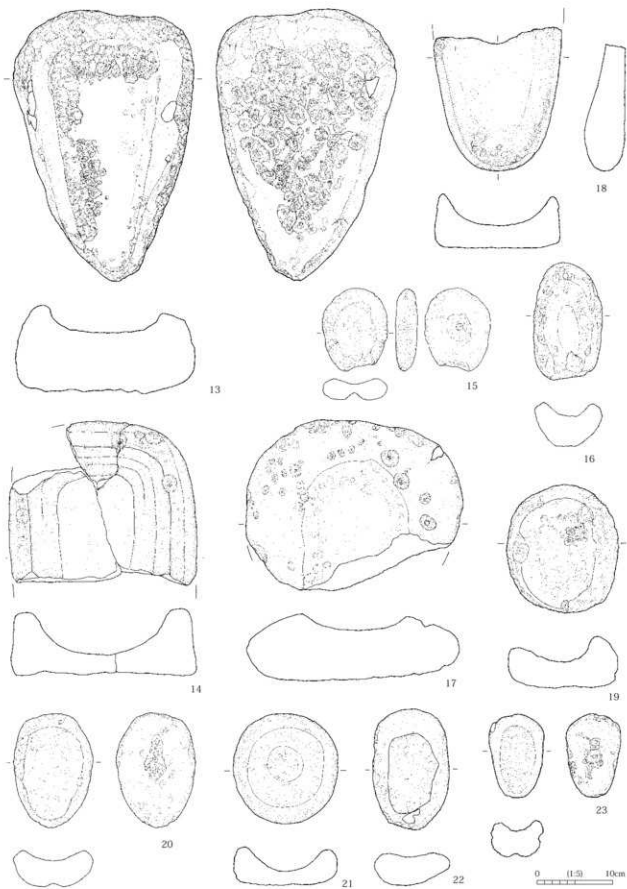
8区縄文時代磨石類 14



SB16 : 1, SB19 : 2, SB25 : 3, SB27 : 4, SB29 : 5,
SB35 : 6~8, SB35・38 : 9, SB44 : 10, SB58 : 11,
SB61 : 12

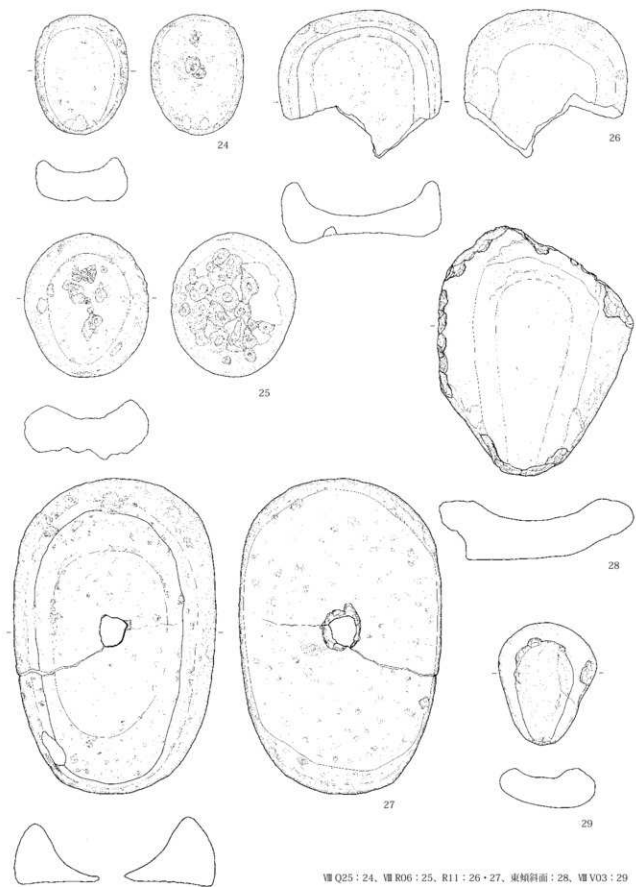
8区縄文時代石皿 1

0 1.5 10cm



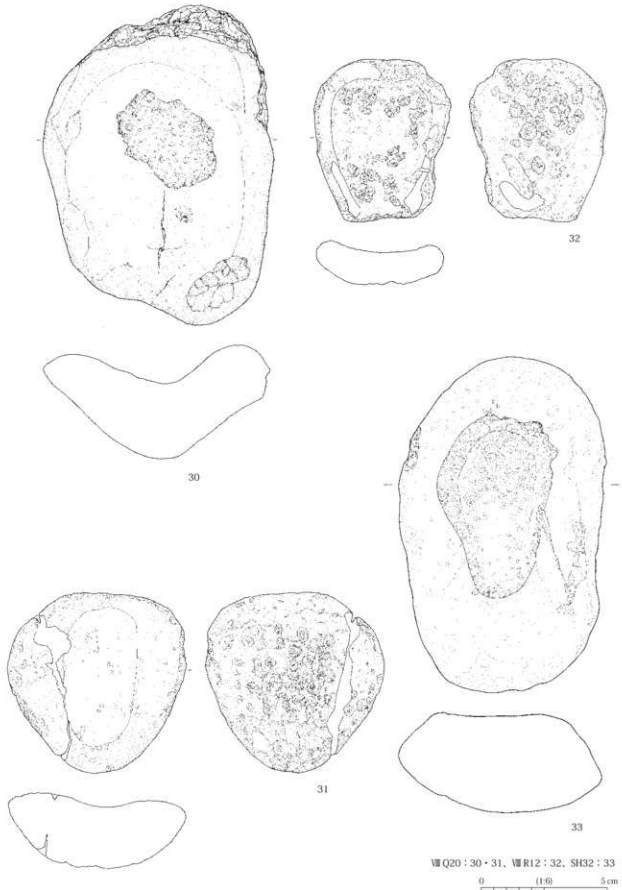
SB31 : 13・14, SB35 : 15, SB36 : 16, SK2182 : 17, SK2268 : 18, ⅧR16 : 19・20, R11 : 21, R21 : 22, ⅧQ25 : 23

8区縄文時代石皿2

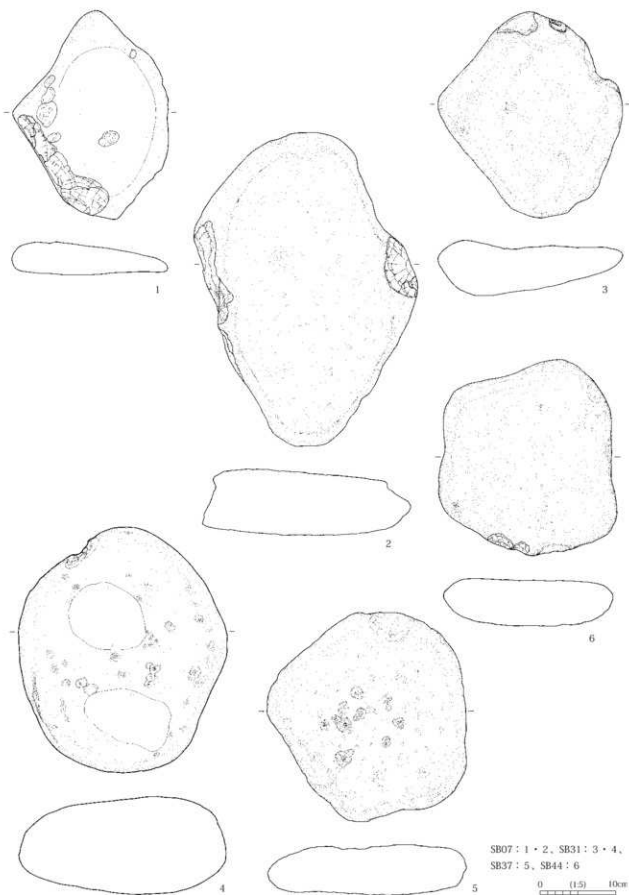


Ⅷ Q25 : 24, Ⅷ R06 : 25, R11 : 26・27, 東傾斜面 : 28, Ⅷ V03 : 29

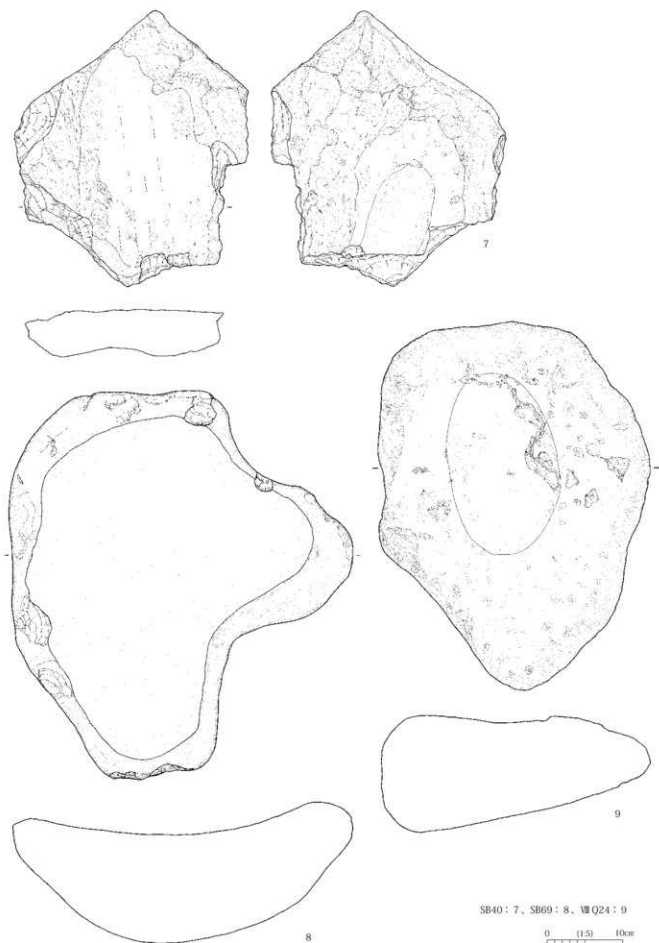
0 1.5 10cm



8区縄文時代石皿4



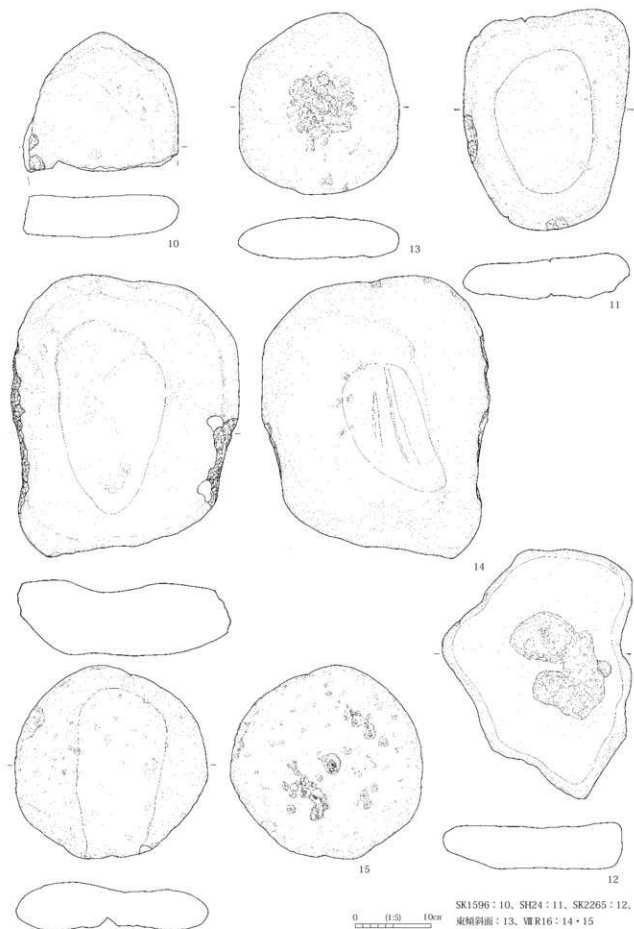
8区縄文時代台石 1



8
8区縄文時代台石2

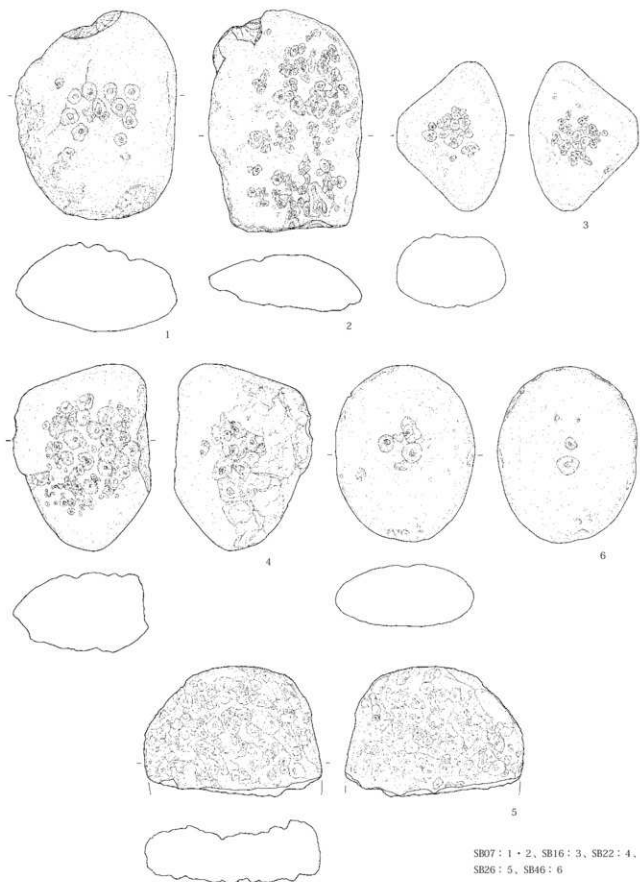
SB40: 7, SB69: 8, VII Q24: 9

0 1.5 10cm



SK1596 : 10, SH24 : 11, SK2265 : 12,
東傾斜面 : 13, VII R16 : 14・15

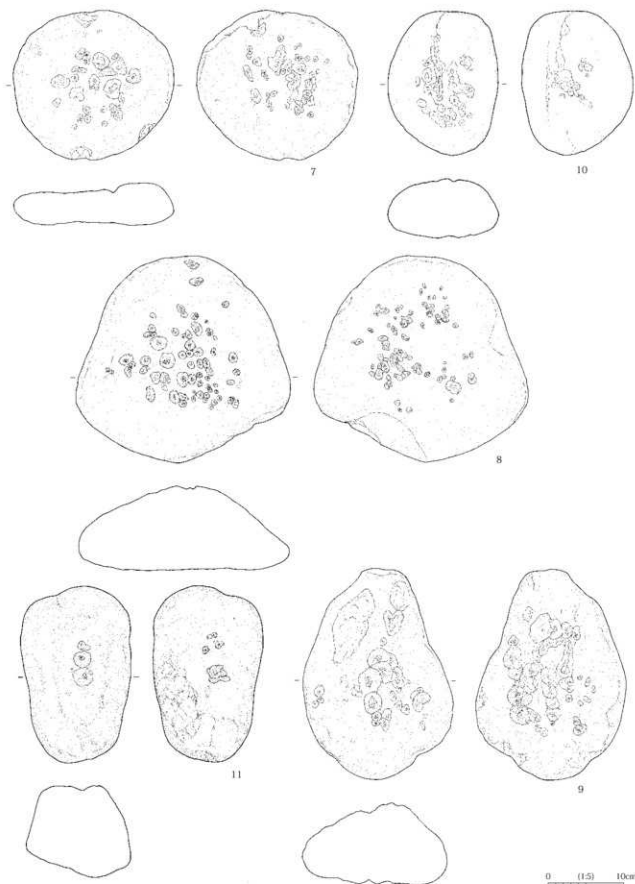
8区縄文時代台石3



SB07 : 1・2、SB16 : 3、SB22 : 4、
SB26 : 5、SB46 : 6

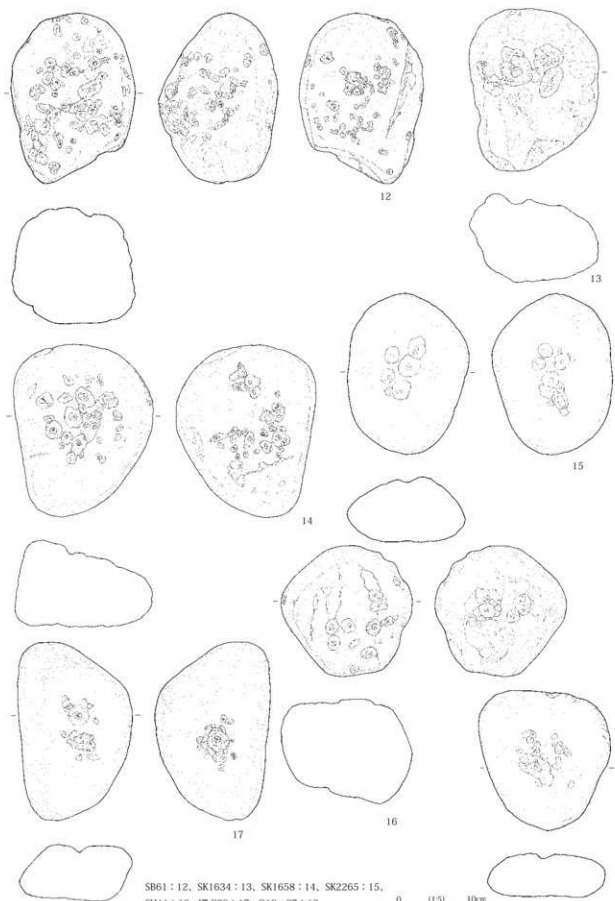
0 (15) 10cm

8区縄文時代多孔石 1



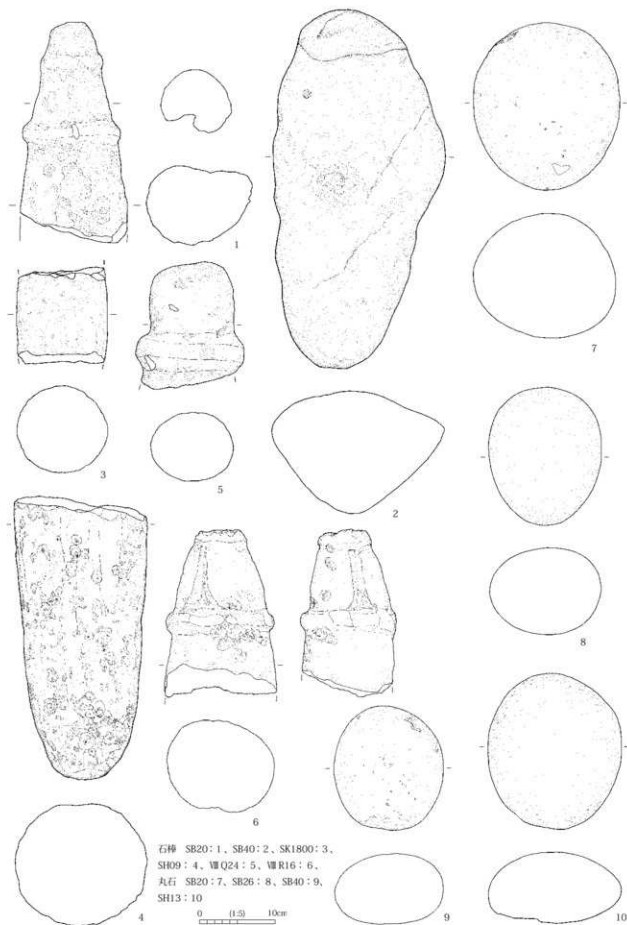
SB31: 7・8、SB35: 9、SB37: 10・11

8区縄文時代多孔石2

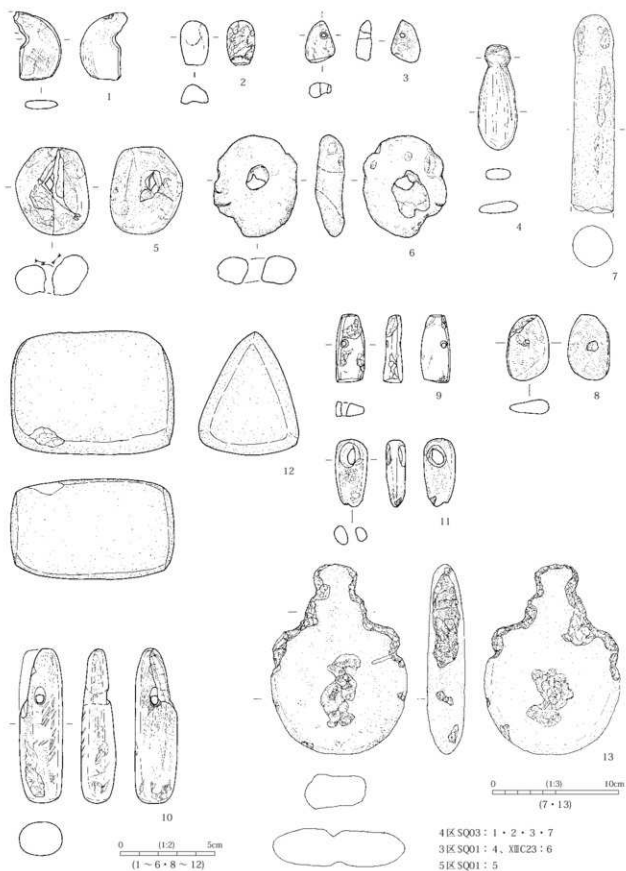


SB61 : 12, SK1634 : 13, SK1658 : 14, SK2265 : 15,
SH11 : 16, Ⅷ Q20 : 17, Q19・27 : 18

8区縄文時代多孔石3



8区縄文時代石棒・丸石



4区SQ03: 1・2・3・7

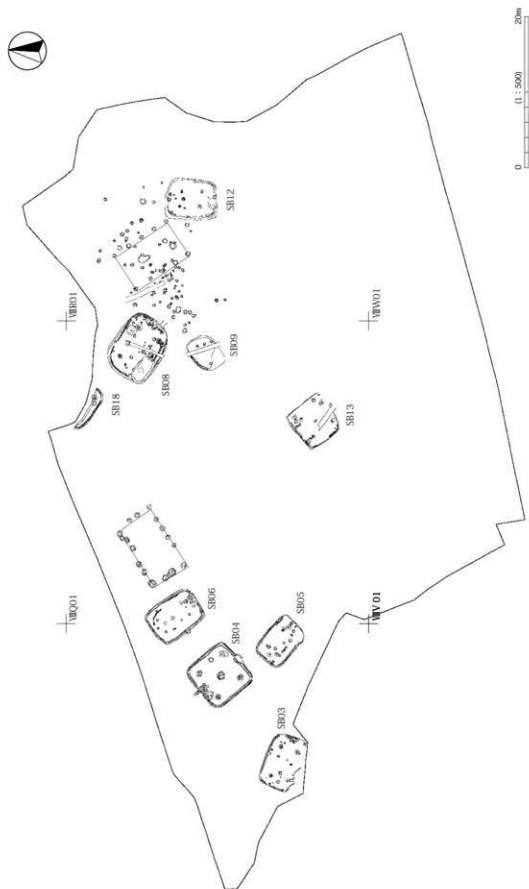
3区SQ01: 4, XIC23: 6

5区SQ01: 5

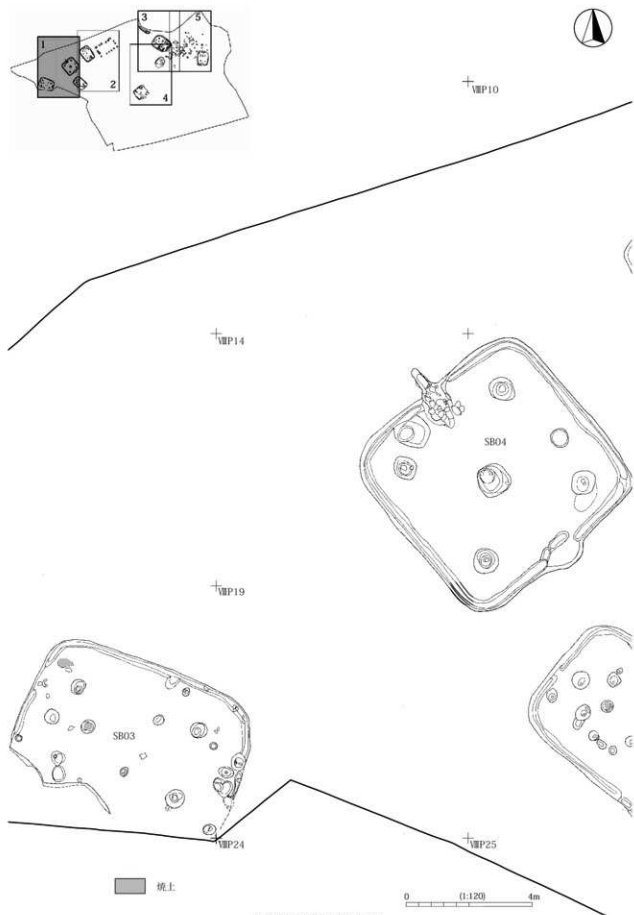
8区SB05: 8, VII Q13: 9, VIII R14: 10,

Q14: 15: 11, SB30: 12, SB37: 13

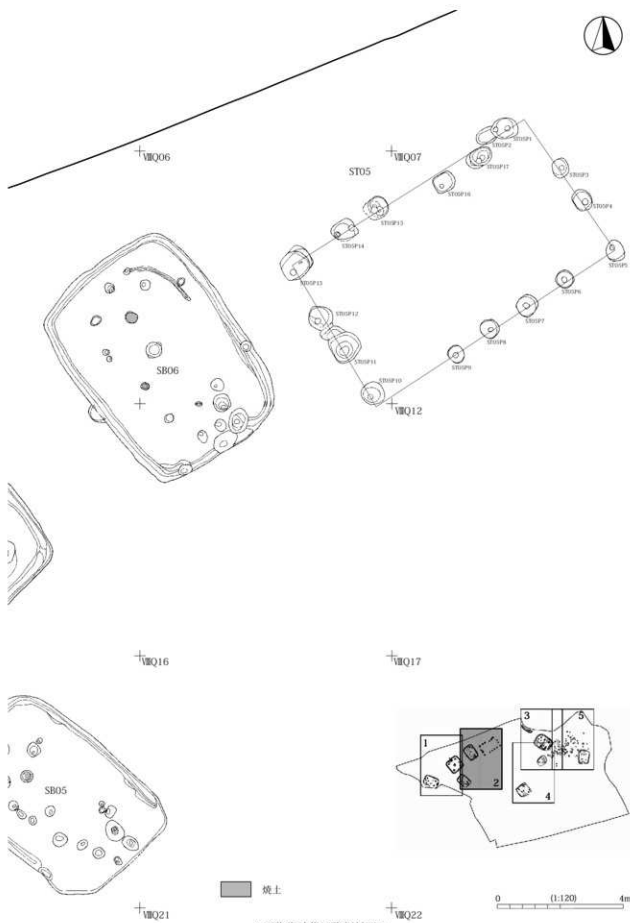
3~5・8区縄文時代石製品



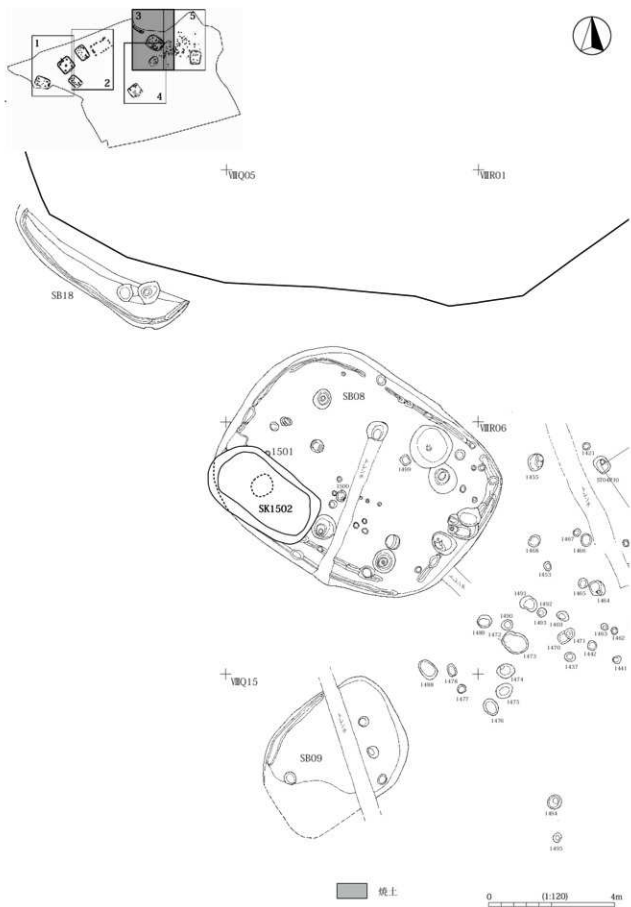
8区弥生时代以降遺構分布图



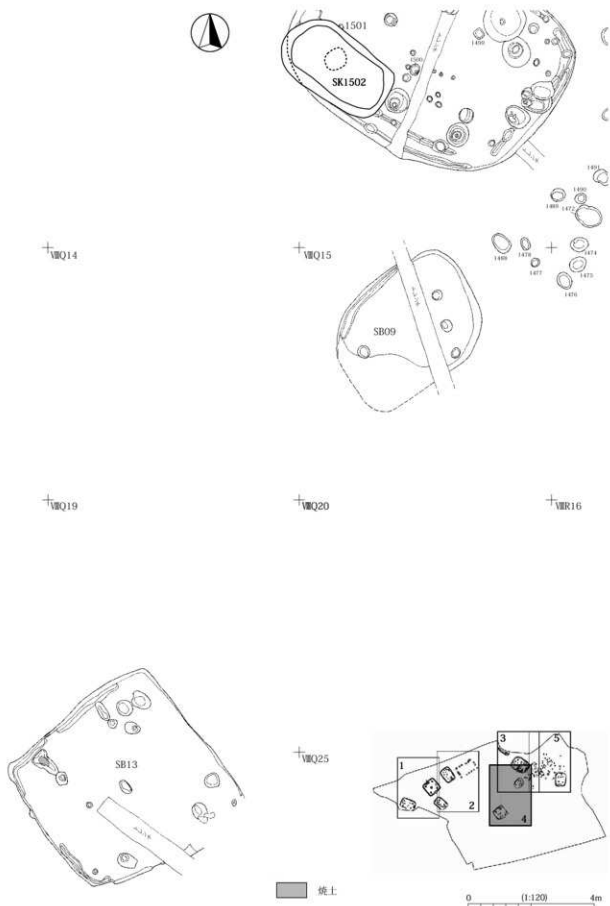
8区弥生時代以降附図 1



8 区弥生時代以降附圖 2



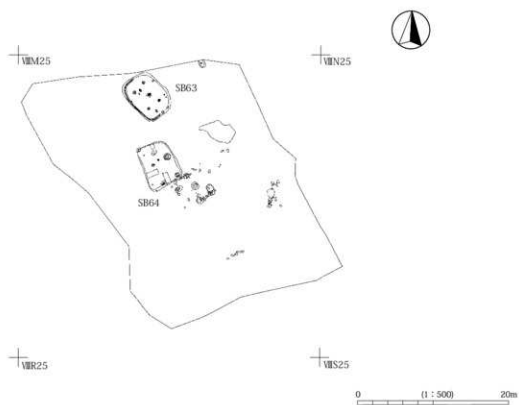
8区弥生時代以降割付図 3

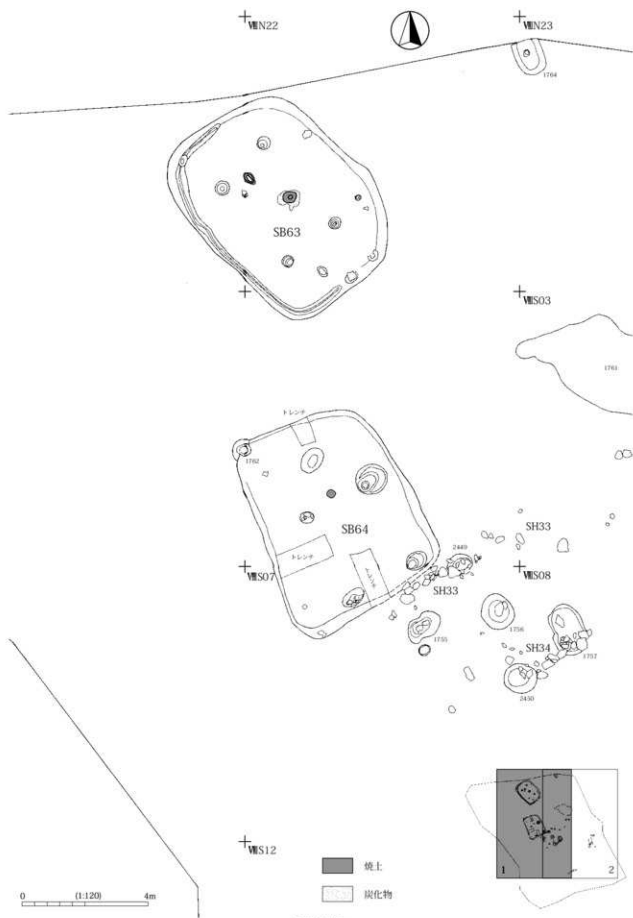


8区弥生时代以降附图 4



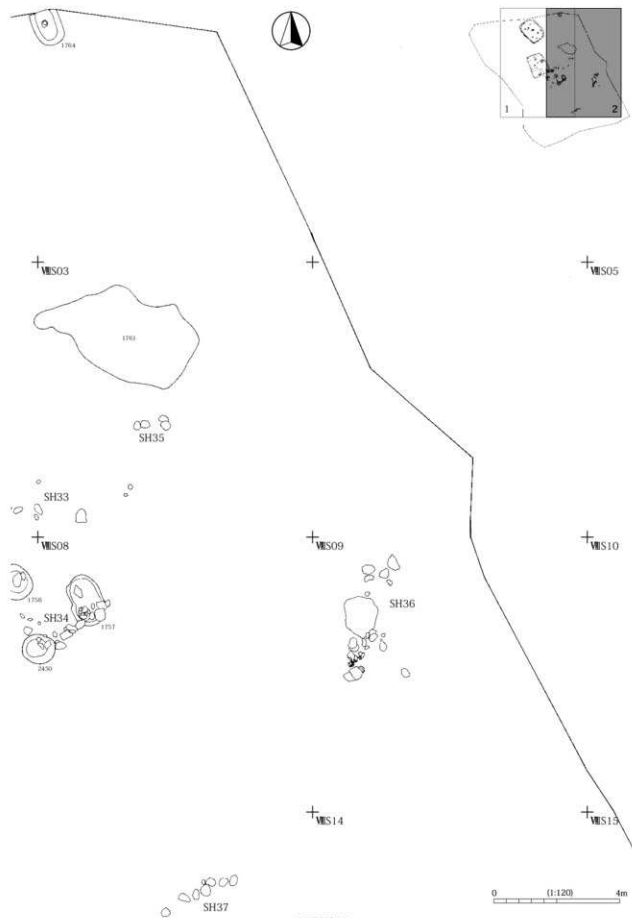
8区弥生时代以降附图 5



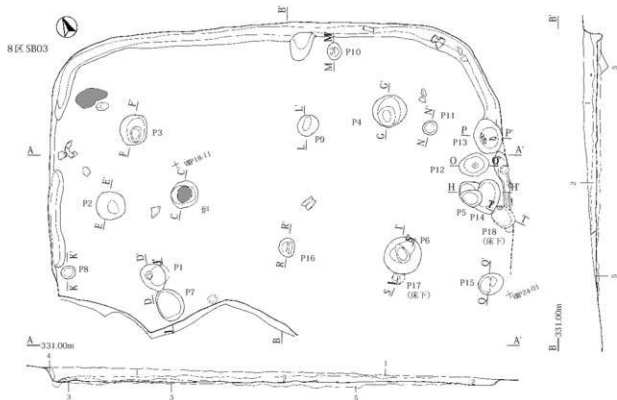


9区割付图 1

图版 262 9区剖付图 2



9区剖付图 2



SB03

- 1 10YR4/1 褐色粘質シルト 粘質土 比較的均一な粗砂混 黄褐色シルト粘中や微砂に分布
- 2 10YR4/2 黄褐色粘質シルト 粘質 しまり目 ϕ 10mm以下の黄褐色シルト微砂に分布
- 3 10YR5/2 黄褐色粘質シルト 粘質 2階に上部均一な粗砂混 北の階に分布
- 4 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト 粘の面減少 黄褐色シルト塊主体
- 5 10YR4/2 黄褐色粘質シルト 粘質 粘質 面 ϕ 10mm黄褐色シルト・黒褐色シルト層混

330.60m C C

SB03 P1

- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト ϕ 10mm微砂
- 2 2.5YR6/6 褐色 灰黄色の ϕ 10mm以下の粗砂混

330.60m D D

P1

330.60m E E

P2

330.60m E F

P3

330.60m G G

P4

SB03 P11

- 1 10YR4/1 褐色粘質シルト 粘質 しまり目 黄褐色シルト層混
- 2 10YR5/1 黄褐色粘質シルト 粘質 しまり目 粗砂混
- 3 黄い ϕ 1-2mm 黄褐色シルト塊主体 粗砂混
- 4 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト ϕ 3-10mm微砂
- 5 10YR4/2 黄褐色粘質シルト しまり目や ϕ 10mm 粗砂混
- 6 10YR5/4 に近い黄褐色粘質シルト 黄褐色粘質シルト層混 面混
- 7 10YR5/2 黄褐色粘質シルト 5階土と互混

SB03 P12

- 1 10YR5/1 黄褐色粘質シルト
- 2 10YR5/4 に近い黄褐色粘質シルト 面混
- 3 10YR5/2 黄褐色粘質シルト

SB03 P13

- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト ϕ 10mm微砂
- 2 10YR5/1 黄褐色粘質シルト 粗砂混
- 3 10YR5/4 に近い黄褐色粘質シルト 面混 ϕ 2-30mm
- 4 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルト
- 5 3階土混 ϕ 3-5mm

SB03 P14

- 1 10YR4/1 褐色粘質シルト
- 2 10YR5/1 黄褐色粘質シルト
- 3 10YR4/1 褐色粘質シルト 粗砂混 しまり目 粗砂
- 4 2階土階混黄褐色シルト層混
- 5 10YR5/4 に近い黄褐色粘質シルト

330.60m H H

P14

330.60m I I

P15

330.60m J J

P16

330.60m K K

P18

330.60m L L

P9

SB03 P15-14

- 1 10YR5/1 黄褐色粘質シルト 面混 ϕ 10mm黄褐色シルト層混 粗砂混
- 2 10YR4/4 褐色粘質シルト しまり目 粘質土
- 3 10YR4/2 黄褐色粘質シルト 黄褐色粘質シルト層混 中や微砂

SB03 P16

- 1 10YR5/1 黄褐色粘質シルト 面混 面混
- 2 10YR4/4 褐色粘質シルト しまり目 ϕ 10mm黄褐色シルト層混
- 3 10YR4/4 黄褐色粘質シルト
- 4 10YR5/2 黄褐色粘質シルト

SB03 P17

- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト 面混 面混
- 2 黄褐色シルト層混
- 3 粗砂混

SB03 P18

- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト 面混
- 2 面混

SB03 P19

- 1 10YR5/4 に近い黄褐色粘質シルト 面混
- 2 10YR4/4 に近い黄褐色粘質シルト 黄褐色粘質シルト層混 ϕ 3-30mm粗砂

330.60m M M

P10

330.60m N N

P11

330.60m O O

P12

330.60m P P

P13

330.60m Q Q

P15

SB03 P10

- 1 10YR4/1 褐色粘質シルト 面混
- 2 黄褐色粘質少

SB03 P11

- 1 10YR4/1 褐色粘質シルト

SB03 P12

- 1 10YR5/3 黄褐色粘質シルト 面混
- 2 10YR5/4 に近い黄褐色粘質シルト 黄褐色粘質シルト層混

SB03 P13

- 1 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト ϕ 10mm 黄褐色シルト層混 粗砂混
- 2 10YR4/2 黄褐色粘質シルト 粘質 しまり目 ϕ 10mm以下の黄褐色シルト層混
- 3 10YR4/2 黄褐色粘質シルト 面混

330.60m R R

P16

330.60m S S

P17 (K下階)

330.60m T T

P18 (K下階)

SB03 P16

- 1 10YR4/1 褐色粘質シルト

SB03 P17 (K下階)

- 1 10YR4/1 褐色粘質シルト 黄褐色シルトに ϕ 1-3mm 黄褐色 ϕ 1-2mm10-20%
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルト 1階に粗砂混 黄褐色シルト10-20%

SB03 P18 (K下階)

- 1 10YR4/1 褐色粘質シルト 面混
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト 1階に粗砂混
- 3 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト 黄褐色シルト層混

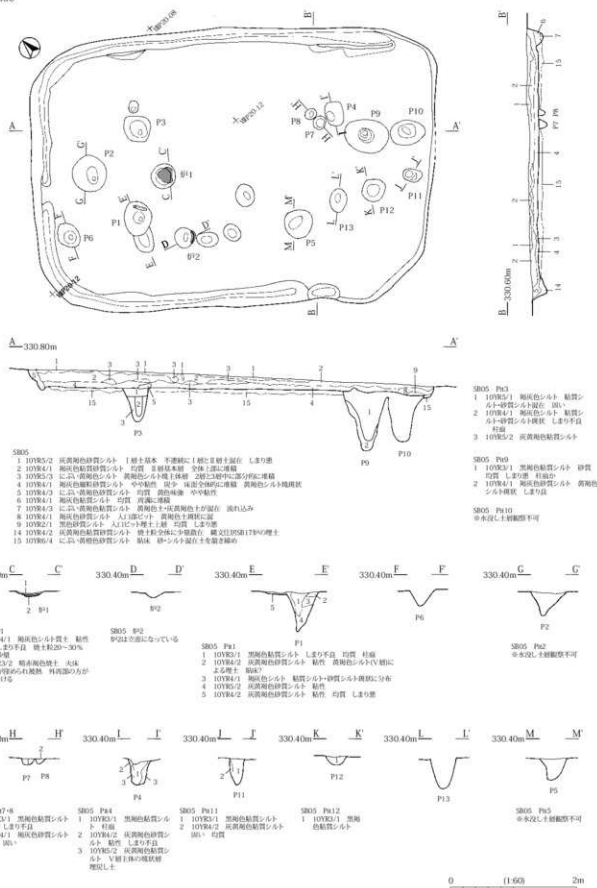
SB03 P18 (K下階)

- 1 10YR4/2 黄褐色粘質シルト 黄褐色シルト層混
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト 1階に粗砂混
- 3 10YR5/3 に近い黄褐色粘質シルト 黄褐色シルト層混

8区弥生時代竪穴住居跡 1 (SB03)

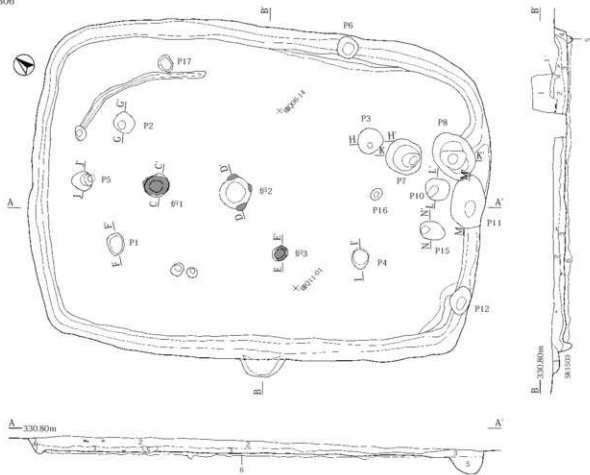
図版 264 8区弥生時代聚穴住居跡 2

8区SB05



8区弥生時代聚穴住居跡 2 (SB05)

8区 SB06



SB06

- 1 10YR5/3 土色、黄褐色粘質シルト SK150埋土、中層遺構内、壁跡に属する層
- 2 10YR4/1 黄褐色粘質シルト、埋土層、石層、土層、瓦礫土層、瓦礫土層、遺物層
- 3 10YR5/2 黄褐色粘質シルト、中層遺構、中層遺構に属する一時的な遺物層
- 4 10YR4/1 黄褐色粘質シルト、壁跡の埋積層、瓦礫土層
- 5 10YR5/3 黄褐色粘質シルト、粘土質、黄褐色粘質シルト、均質
- 6 10YR5/3 土色、黄褐色粘質シルト、土色、黄褐色粘質シルト、均質
- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト、黄褐色粘質、中層遺構
- 1 10YR4/1 黄褐色粘質シルト、土層化遺構



SB06 B1

- 1 10YR4/1 黄褐色粘質シルト
① 1m黄褐色粘質シルト全体に
属する
- 2 5YR5/6 褐色粘土、土塊、柱
束、土層化遺構、黄褐色粘質
シルトに属する層

SB06 B2

- 1 5YR5/6 褐色粘質
シルト、土層化遺構に
属する
- 2 5YR5/6 褐色粘質
シルト、土層化遺構に
属する

SB06 B3

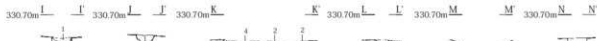
- 1 10YR5/1 黄褐色粘質シルト、
石層、土層、中層遺構
- 2 5YR4/6 赤褐色粘土
土層、遺物層に属する層

- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層

- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層

- 1 10YR4/1 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層

- 1 10YR4/1 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層



SB06 P4

- 1 10YR4/1 黄褐色粘質シルト
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
- 3 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層

SB06 P5

- 1 10YR4/1 黄褐色粘質
シルト
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
- 3 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層

SB06 P6

- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
- 2 10YR4/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層
- 3 10YR4/1 黄褐色粘質シルト、
均質、土層化遺構に属する層
- 4 10YR5/1 黄褐色粘質シルト、
土層化遺構に属する層
- 5 10YR5/5 黄褐色粘質シルト、
土層化遺構に属する層

SB06 P10

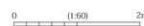
- 1 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層
- 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層

SB06 P11

- 1 10YR4/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層
- 2 10YR4/2 黄褐色粘質シルト
土層、遺物層に属する層

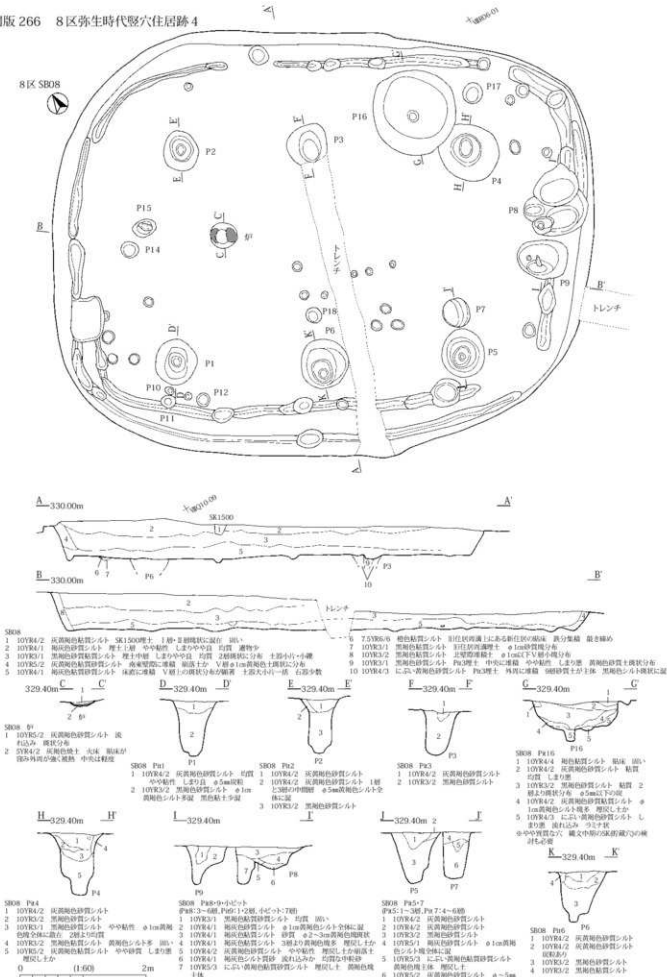
SB06 P15

- 1 10YR5/6 黄褐色粘質
シルト、土層化遺構に属する層
- 2 10YR5/6 黄褐色粘質
シルト、土層化遺構に属する層



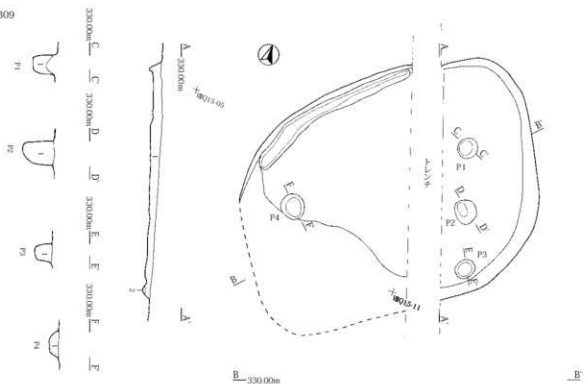
8区弥生時代竪穴住居跡3 (SB06)

図版 266 8区弥生時代竪穴住居跡 4



8区弥生時代竪穴住居跡 4 (SB08)

8区SB09



SB09

- 1 10YR5/2 黒褐色粘質砂質シルト 炭質的シルト粒全体に含
2 10YR4/2 灰褐色粘質シルト 再凝集土 炭質的シルト粒主体

SB09 Pn1

- 1 10YR4/2 灰褐色粘質シルト 粘性少 炭質的シルト+砂質土

SB09 Pn2

- 1 10YR5/1 黒褐色粘質シルト 砂質 砂+炭質的シルト+炭質

SB09 Pn3

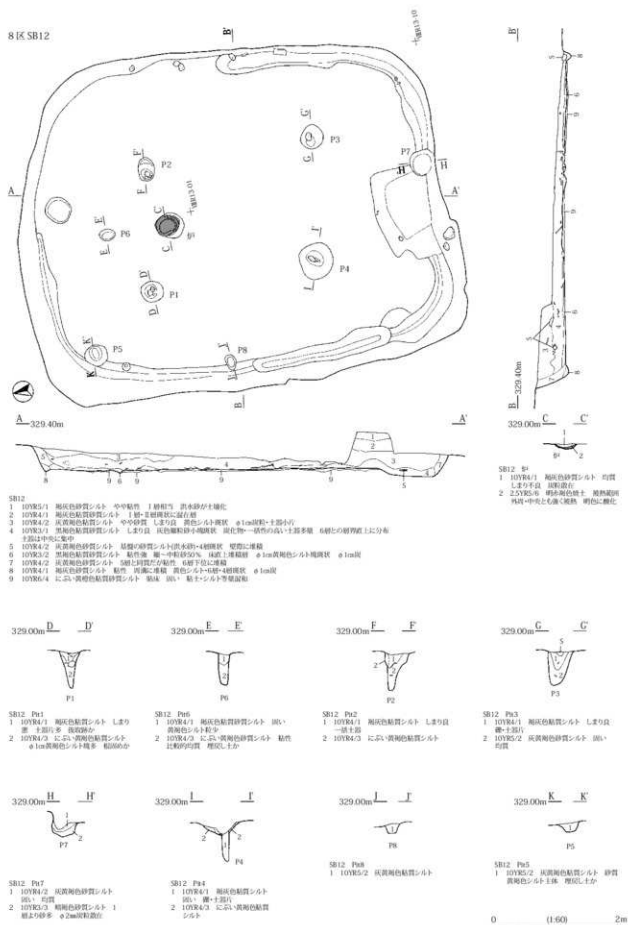
- 1 10YR4/1 黒褐色粘質シルト 凝結したシルト凝

SB09 Pn4

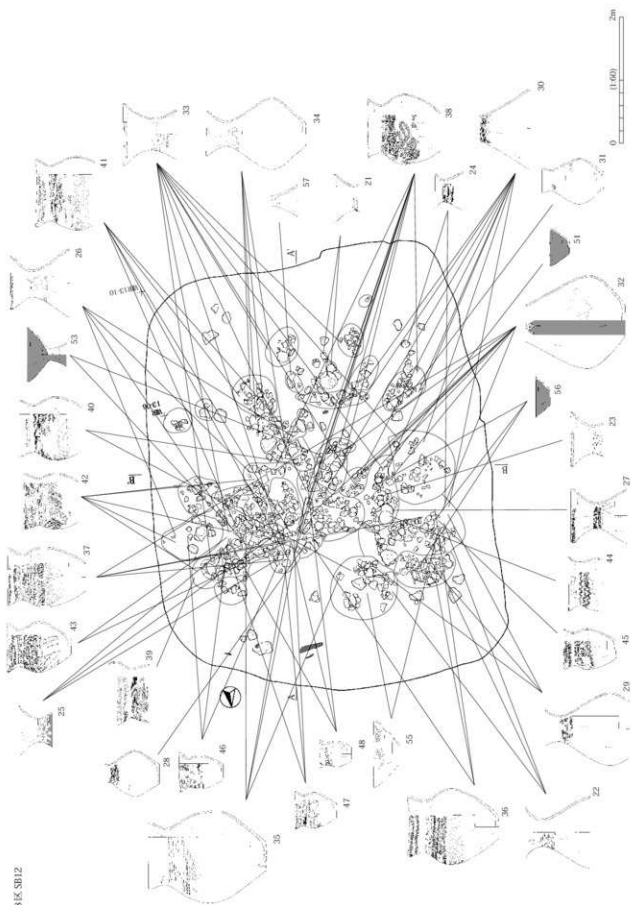
- 1 10YR4/1 黒褐色粘質シルト

8区弥生時代竪穴住居跡5 (SB09)

図版 268 8区弥生時代整穴住居跡6



8区弥生時代整穴住居跡6 (SB12)

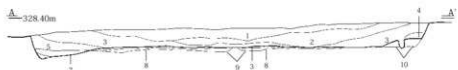
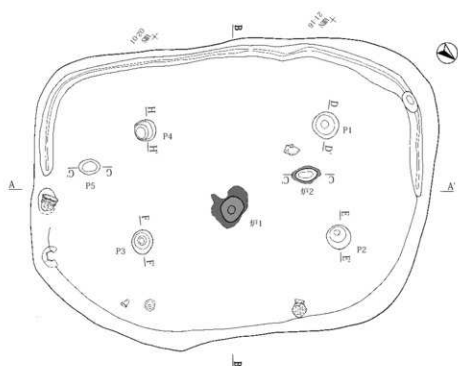
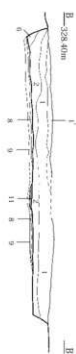


8区SB12

8区弥生时代聚穴住居跡7 (SB12)

図版 270 9区弥生時代整穴住居跡1

9区 SB63



SB63

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 凝縮砂状 しまり目 炭化物層
- 1 10YR4/1 黒褐色シルト 凝縮砂状 白色凝縮砂
- 2 10YR4/2 黒褐色シルト 凝縮砂 しまり目 砂多量
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト 凝縮砂 白色凝縮砂+黒褐色シルト凝縮
- 4 10YR4/2 黒褐色凝縮砂 しまり目
- 5 10YR4/2 黒褐色シルト 凝縮砂状 一部に黒褐色凝縮砂 しまり目

- 6 10YR3/1 黒褐色シルト 凝縮砂+黒褐色シルト凝縮
- 7 10YR3/2 黒褐色シルト 凝縮砂 体面の凝縮砂が多量
- 8 10YR3/8 黒褐色凝縮砂 地中の凝縮砂量 多く認められる Fe2+ 黄鉄
- 9 10YR3/2 黒褐色シルト+10YR4/4 黒褐色凝縮砂(白) 黒褐色シルト凝縮
- しまり目 埋没し
- 10 10YR3/3 黒褐色凝縮砂

SB63 P1

- 10YR4/4 紅褐色
- 粘土 数箇の粘土 基
- 部は中心部より黒褐色
- 凝縮砂が多量

328.20m C C



SB63 P2

- 1 自然埋土層
- 2 10YR3/5 黒褐色凝縮砂 3箇の赤土埋没
- 3 埋没内面
- 4 10YR4/4 黒褐色凝縮砂 黒褐色シルト多量

328.20m D D



SB63 P1

- 10YR3/3 黒褐色シルト

328.20m E E



SB63 P2

- 1 10YR3/3 黒褐色シルト 凝縮砂多量
- 2 10YR4/4 黒褐色凝縮砂 しまり目 地中に凝縮

328.20m F F



SB63 P3

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 2箇の埋没内面
- 2 10YR3/3 黒褐色シルト
- 3 10YR4/4 黒褐色凝縮砂

328.20m G G



SB63 P5

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト+黒褐色シルト+黒褐色凝縮砂 埋没内面 凝縮砂 黒褐色凝縮砂+黒褐色シルト多量

328.20m H H



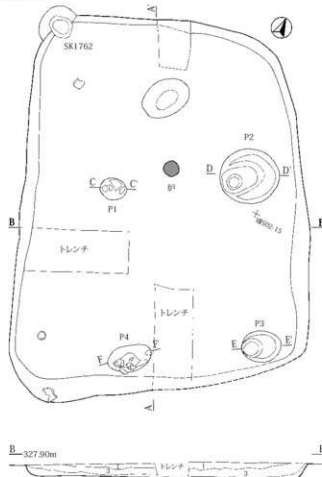
SB63 P4

- 1 10YR3/3 黒褐色シルト しまり目



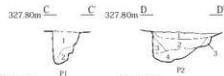
9区弥生時代整穴住居跡1 (SB63)

9区SB64



SB64

- 1 10YR3/3 黒褐色シルト 1層(2)直柱、柱頭
- 2 10YR4/2 灰黒褐色腐植シルト層(1)直柱、柱頭
- 3 10YR6/1 黒褐色シルト 2層(2)直柱シルト 地山の黒褐色腐植シルト層(2)直柱、柱頭
- 4 10YR4/3 黒褐色シルト 1層(2)直柱、柱頭

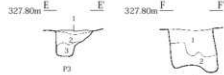


SB64 P1

- 1 10YR3/3 黒褐色腐植シルト 1層(2)直柱、柱頭
- 2 10YR4/2 灰黒褐色腐植シルト層(1)直柱、柱頭

SB64 P2

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 白色腐植腐植 下部4層直柱の土が腐
- 2 10YR4/3 灰黒褐色シルト 腐植 中層(2)直柱、柱頭
- 3 10YR4/4 黒褐色腐植シルト 地山の黒褐色腐植
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト 直柱、柱頭



SB64 P3

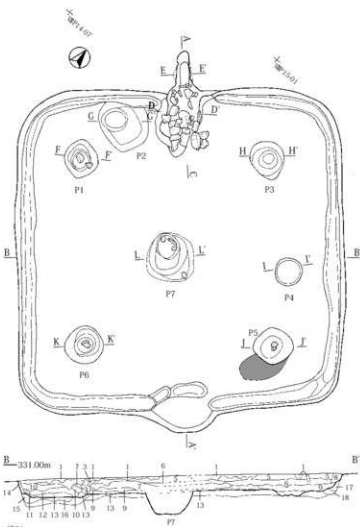
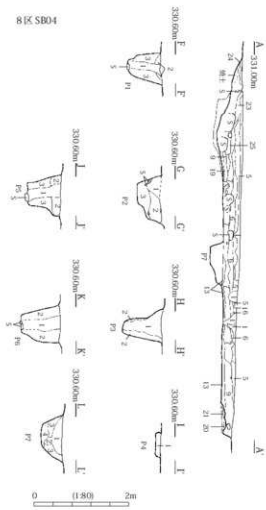
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
- 2 10YR4/3 灰黒褐色腐植シルト 腐植腐植 下部4層直柱の土が腐
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト 直柱、柱頭

SB64 P4

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 腐植腐植 下部4層直柱の土が腐
- 2 10YR4/3 灰黒褐色腐植シルト 腐植腐植 下部4層直柱の土が腐



8区SB04



SB04

- 1 10YR5/2 灰黄色粘質砂質シルト 築土層1層に付着 全面付着 断面内縁端が 波打
- 2 10YR5/1 灰黄色粘質砂質シルト 黄褐色粘土付着 粘付面 断面内縁端
- 3 10YR6/2 灰黄褐色粘質砂質シルト 黄褐色粘土付着 粘付面 断面内縁端
- 4 10YR5/1 灰黄色粘質シルト φ20cm黄褐色土塊 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 5 10YR6/2 灰黄褐色粘質砂質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 6 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 土器小片等 φ10cm黄褐色土塊に付着
- 7 10YR5/6 黄褐色土 黄褐色多量60-70% 粘付面付 φ5cm黄褐色土 小塊状分布
- 8 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 9 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 中砂状 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 10 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 11 10YR5/3 土器小片等付着断面内縁に付着 断面内縁縁端
- 12 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 13 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 14 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 15 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 16 10YR4/2 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 17 10YR5/2 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 18 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 19 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 20 10YR6/8 黄褐色粘土 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 21 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 22 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 23 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 24 7.5YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 25 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端

SB04 ケマフ

- 1 10YR5/3 土器小片等付着断面内縁に付着断面内縁縁端
- 2 7.5YR5/3 土器小片等付着断面内縁に付着断面内縁縁端
- 3 5YR6/2 灰黄褐色粘質砂質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 4 断面内縁縁端
- 5 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 6 5YR6/2 灰黄褐色粘質砂質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 7 10YR5/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端

SB04 Pn1

- 1 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 2 10YR4/2 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 3 10YR5/3 土器小片等付着断面内縁に付着断面内縁縁端

SB04 Pn2

- 1 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 2 10YR4/2 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 3 10YR5/3 土器小片等付着断面内縁に付着断面内縁縁端

SB04 Pn3

- 1 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 2 10YR5/4 土器小片等付着断面内縁に付着断面内縁縁端

SB04 Pn4

- 1 10YR5/1 灰黄色粘質砂質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端

SB04 Pn5

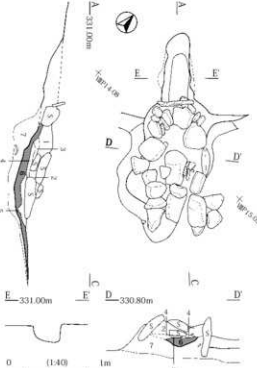
- 1 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 2 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 3 10YR4/2 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端

SB04 Pn6

- 1 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 2 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端

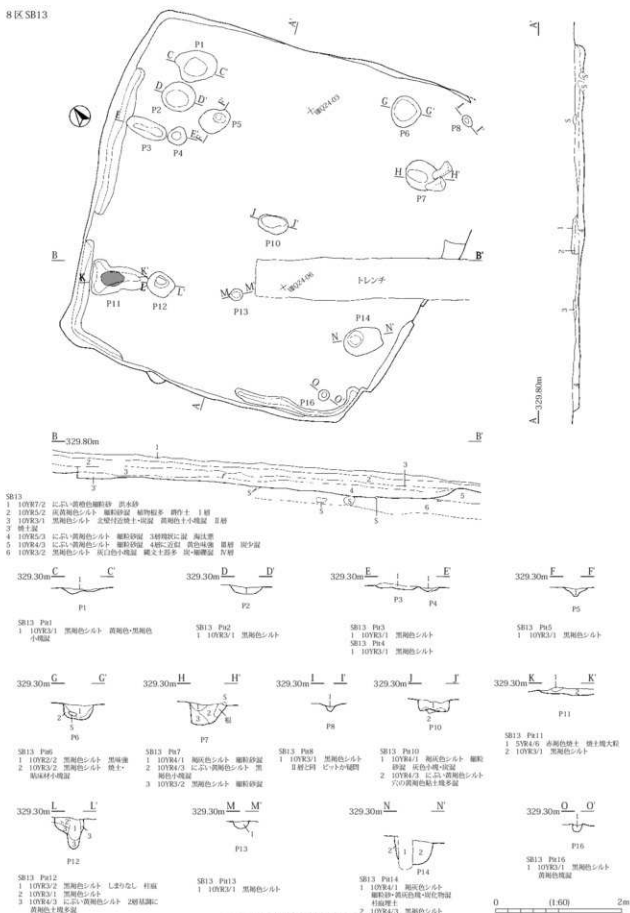
SB04 Pn7

- 1 10YR5/1 灰黄色粘質砂質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 2 10YR4/1 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 3 10YR4/2 灰黄色粘質シルト 断面内縁に付着断面内縁縁端
- 4 10YR5/3 土器小片等付着断面内縁に付着断面内縁縁端



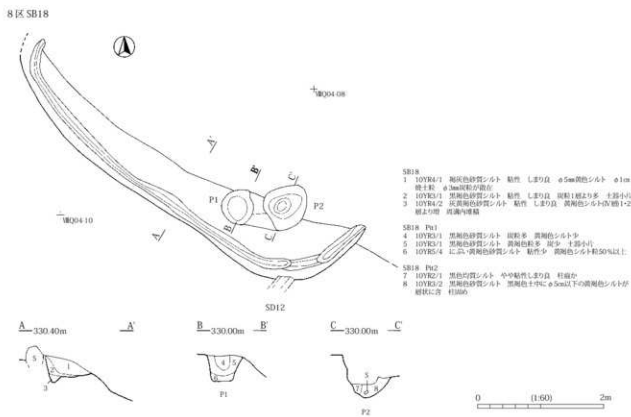
8区古墳時代整穴住居跡1 (SB04)

8区SB13



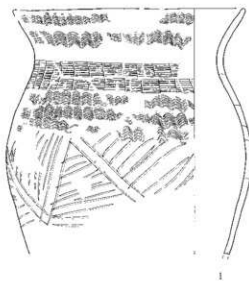
8区古墳時代整穴住居跡2 (SB13)

図版 274 8区古墳時代整穴住居跡 3

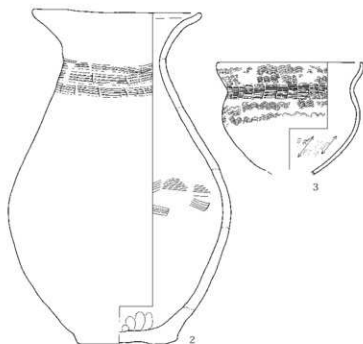


8区古墳時代整穴住居跡 3 (SB18)

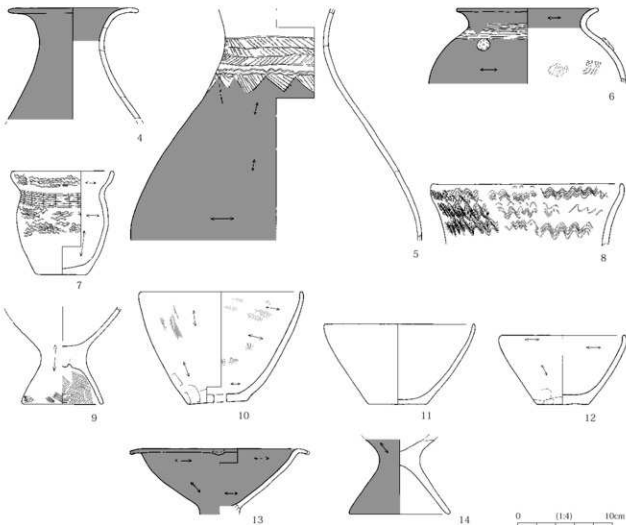
SB03 (1)



SB05 (2·3)



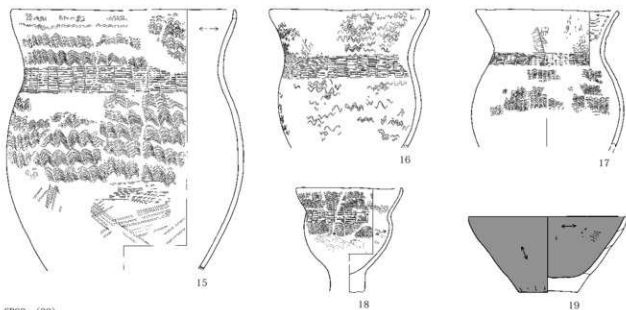
SB06 (4~14)



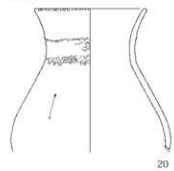
8区弥生土器 1 (SB03·05·06)

0 (1:4) 10cm

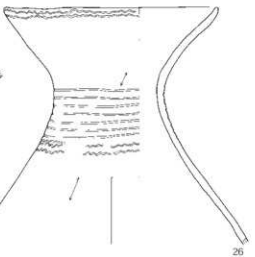
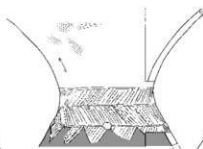
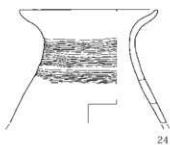
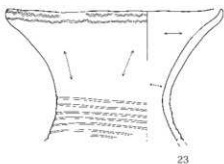
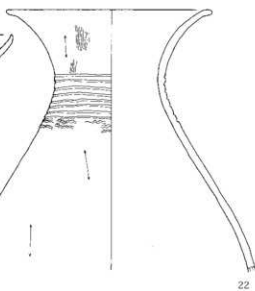
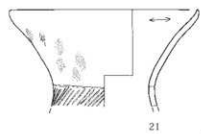
SB08 (15~19)



SB09 (20)



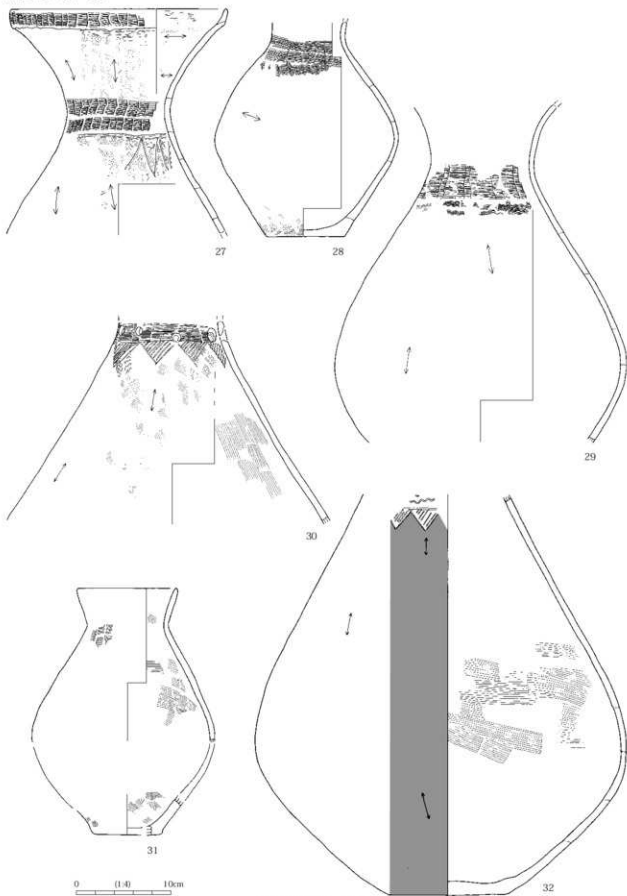
SB12 (1) (21~26)



0 1:1 10cm

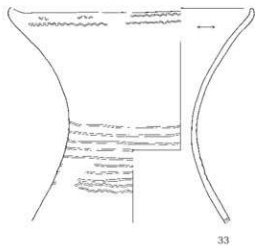
8区弥生土器 2 (SB08・09・12)

SB12 (2) (27~32)

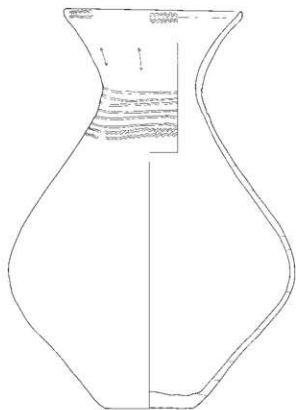


8区弥生土器 3 (SB12)

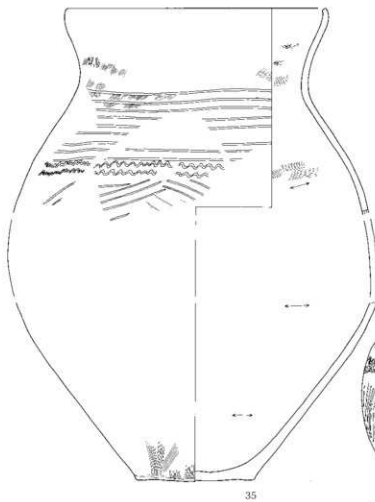
SB12 (3) (33~36)



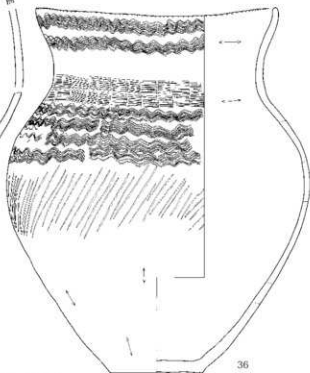
33



34



35

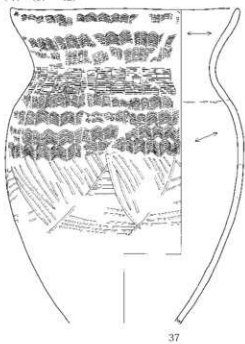


36

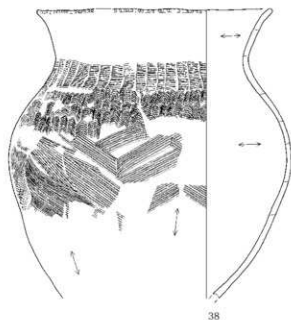
0 1:4 10cm

8区弥生土器4 (SB12)

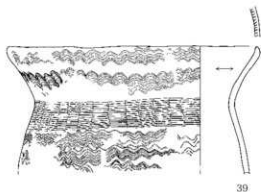
SB12 (4) (37~42)



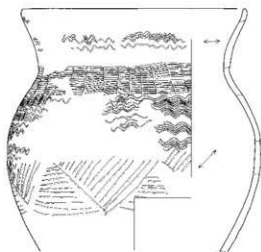
37



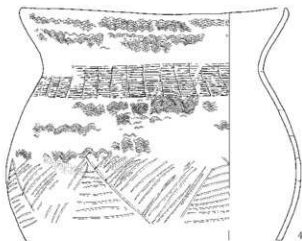
38



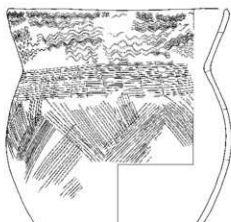
39



40



41

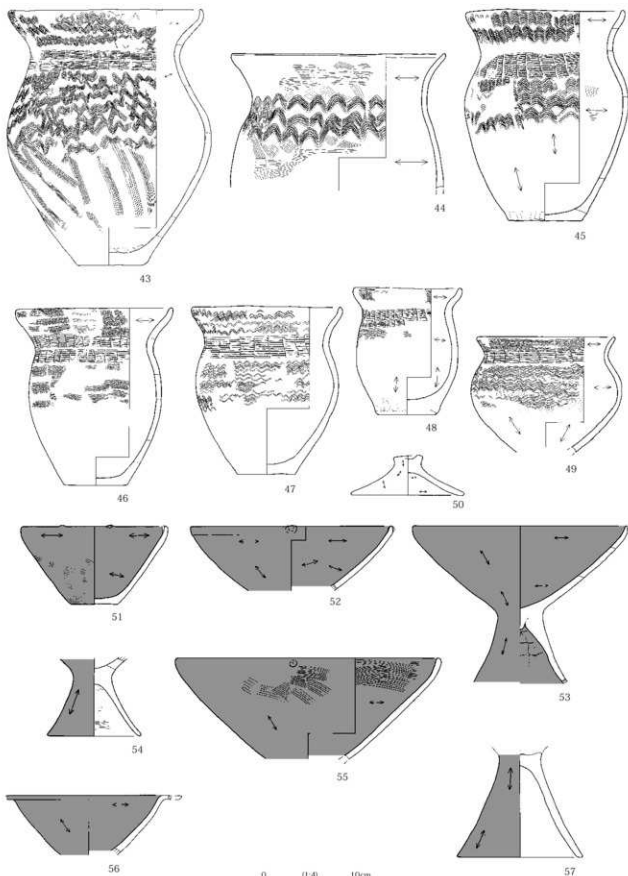


42

0 (1:4) 10cm

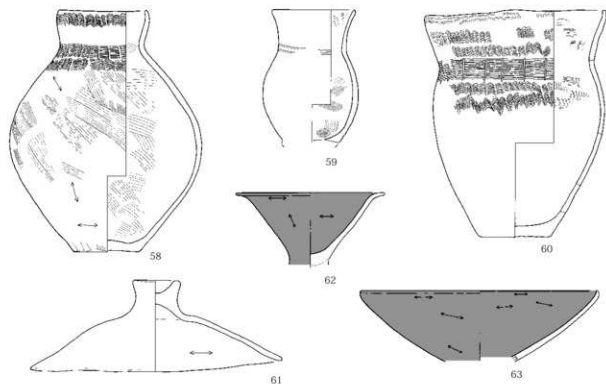
8区弥生土器 5 (SB12)

SB12 (5) (43~57)

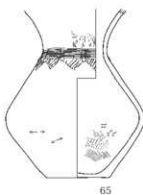
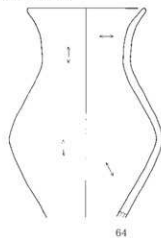


0 1.4 10cm
8区弥生土器6 (SB12)

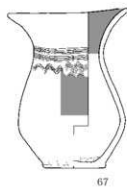
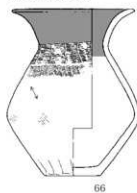
9区
SB63 (58~63)



SB64 (64・65)



SK1755 (66・67)



0 (1:4) 10cm

8区
SB08 (1・2)



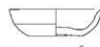
SK1401 (3)



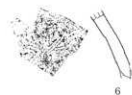
SK1674 (4)



Q07 (5)



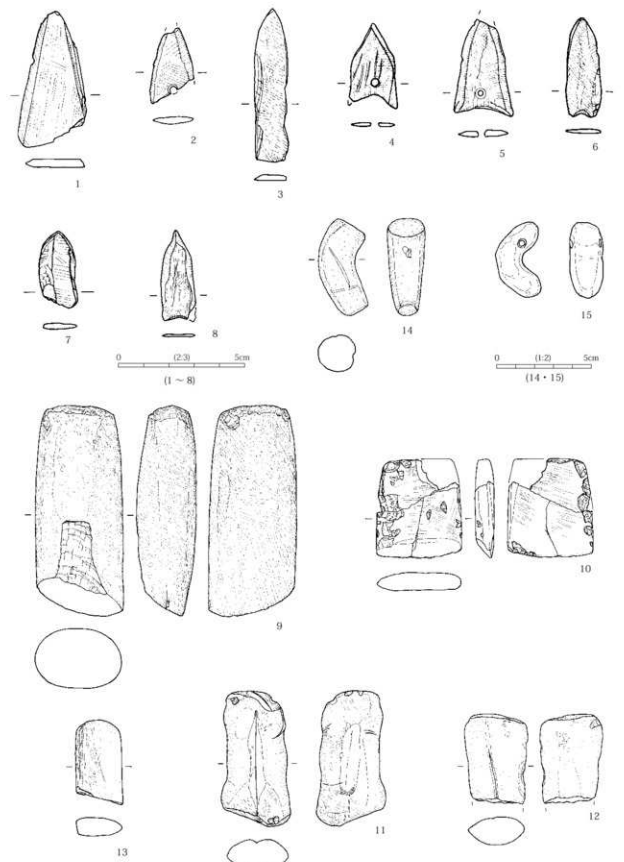
R06 (6)



0 (1:4) 10cm

9区弥生土器 (SB63・64、SK1755)・8区中世统物

图版 282 8区弥生时代石器·石製品·土製品



磨製石鏃 SB06: 1, SB08: 2~4、
SB12: 5~7, SK1401: 8

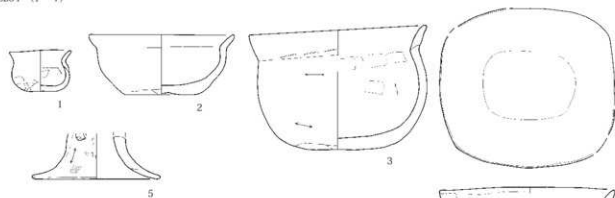
磨製石斧 SB06: 9, SB08: 10

石製品 SB08: 14
破石 SB06: 11, 12, SB08: 13

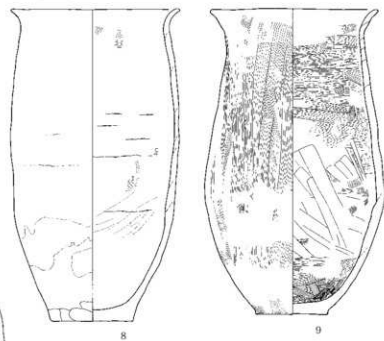
土製品 SB12: 15

8区弥生时代石器·石製品·土製品

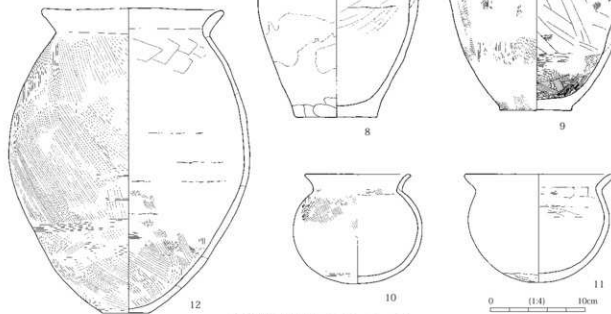
SB04 (1~7)



SB13 (8·9)

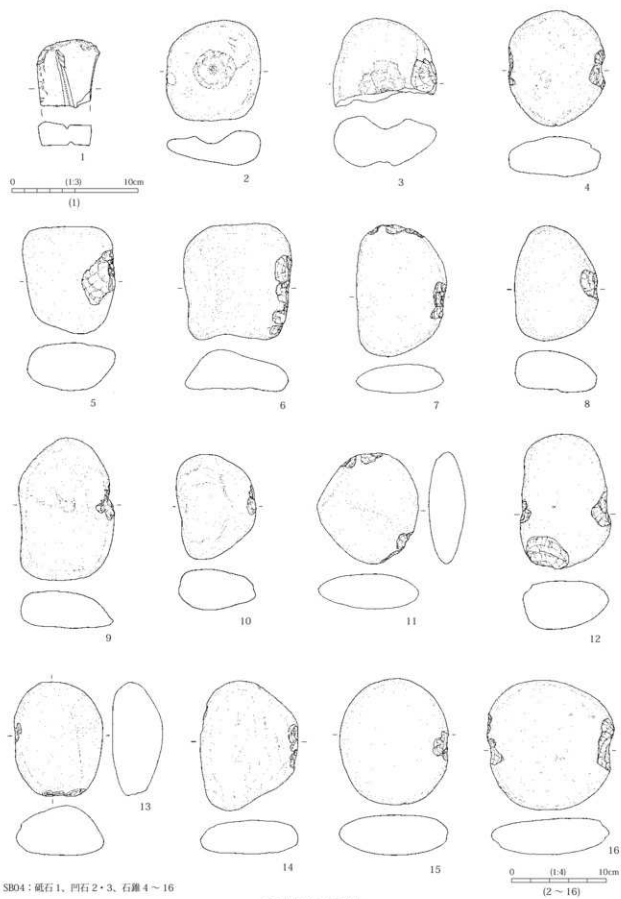


SB18 (10~12)

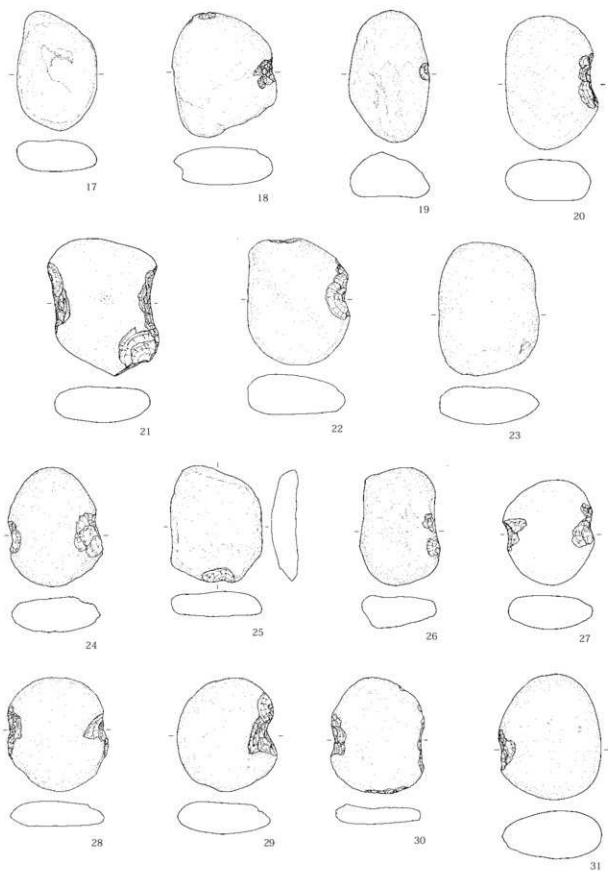


8区古墳時代土器 (SB04・13・18)

0 (1:4) 10cm

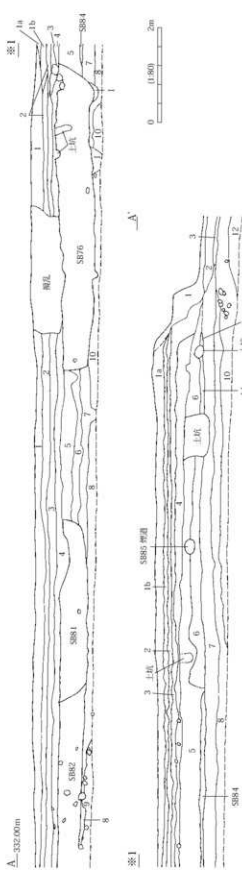


8区古墳時代石製品 1



SB13: 石鏃 17~31

8区古墳時代石製品2



- 12区B-一 概況
- 1 10195/1 黒色シルト 腐植土 腐植層
 - 2 10195/3 土色黄褐色土 腐植層の下部
 - 3 10195/11 粘土 粘土層 砂 - 2mm粒状子 少量
 - 3a 10194/1 黒褐色シルト - 3層より中下部
 - 3b 編み目砂 砂
 - 4 10192/1 黒色シルト (中層) 5層の白色・黄褐色砂
 - 5 10192/3 黒褐色シルト (中層) 6層の腐植層 20%
 - 5a 5層下部 6層の腐植層 20% B V12 粘付層に遷多
 - 5b 10194/2 土色黄褐色シルト・中粒砂等 白色
 - 6 10193/3 黄褐色土 腐植層 腐植層
 - 6a 10192/1 黒色土 腐植層
 - 7 10194/4 腐植土 粘付層 シルト 白色
 - 8 10194/6 (腐植) 5%以下
 - 9 10193/3 黄褐色土
 - 9 10193/2 黄褐色土 (硬土)
 - 11 10195/4 土色黄褐色シルト 粘付層 少量
 - 11 10195/4 黄褐色粘付層シルト 粘付層 少量

- 12区C-一 概況
- 6 10195/4 腐植土 腐植層 シルト 20% 5-8層下部
 - 7 10194/1 黒褐色シルト $\phi 1 \sim 2$ mm粒状子少量 腐植層
 - 8 10194/6 粘土 粘土層
 - 8 10194/6 黒褐色シルト Fe 量少 砂付砂(粘付層)・粘付層
 - 9 1019 腐植
 - 10 10194/3 土色黄褐色シルト 中粒砂 50% 砂人層
 - 11 10194/3 土色黄褐色シルト 腐植土 粘付層
 - 12 10194/6 腐植土 $\phi 20$ mm粒状子 中粒砂
 - 1 10195/2 黒褐色シルト 中々粘付 粘子は (S19/D層) より少ない
 - 1 10195/2 黒褐色シルト 中々粘付 粘子は (S19/D層) より少ない
 - S185 黄砂 10195/3 土色黄褐色シルト 粘付層 $\phi 1 \sim 20$ mm粒状子 10% 泥少

- 12区A-A' 概況
- 1 10193/1 黒褐色シルト 土色白色 腐植層 腐植層
 - 1 10193/1 黒褐色シルト 土色白色 腐植層 腐植層
 - 1b 1019 粘付層 粘付層
 - 2 10194/2 黄褐色シルト 腐植層 粘付層
 - 3 10195/4 土色黄褐色シルト 腐植層 腐植層 $\phi 1 \sim 3$ mm粒状子 腐植層
 - 4 10192/1 黒色シルト 中粒砂 腐植層 $\phi 1 \sim 2$ mm白色粒状子 5% $\phi 1 \sim 3$ mm粒状子 5%
 - 5 10193/2 黒褐色シルト 粘付層 粘付層 6層の $\phi 1 \sim 1$ mm腐植層 20%

12区土層断面図



- 12区C-C' 概況
- 1 10195/4 土色黄褐色シルト 粘付層 腐植層 腐植層 腐植層
 - 3 10194/1 黒褐色シルト 粘付層 $\phi \sim 2$ mm白色粒状子 2層より中多 Fe 量少
 - 4 10194/2 黒褐色シルト 土色白色 粘付層 腐植層 腐植層 腐植層 腐植層 $\phi 1 \sim 3$ mm白色粒状子 腐植層 腐植層 腐植層 腐植層 腐植層
 - A 10193/1 黒褐色シルト 粘付層 腐植層
 - B 10194/1 黒褐色シルト 粘付層 腐植層
 - C 10195/5 黄褐色粘付層シルト

- 12区C-C'' 概況
- 1 10193/1 黒褐色シルト 土色白色 腐植層 腐植層
 - 1 10193/1 黒褐色シルト 土色白色 腐植層 腐植層
 - 1b 1019 粘付層 粘付層
 - 2 10194/2 黄褐色シルト 腐植層 粘付層
 - 3 10195/4 土色黄褐色シルト 腐植層 腐植層 $\phi 1 \sim 3$ mm粒状子 腐植層
 - 4 10192/1 黒色シルト 中粒砂 腐植層 $\phi 1 \sim 2$ mm白色粒状子 5% $\phi 1 \sim 3$ mm粒状子 5%
 - 5 10193/2 黒褐色シルト 粘付層 粘付層 6層の $\phi 1 \sim 1$ mm腐植層 20%

12区土層断面図

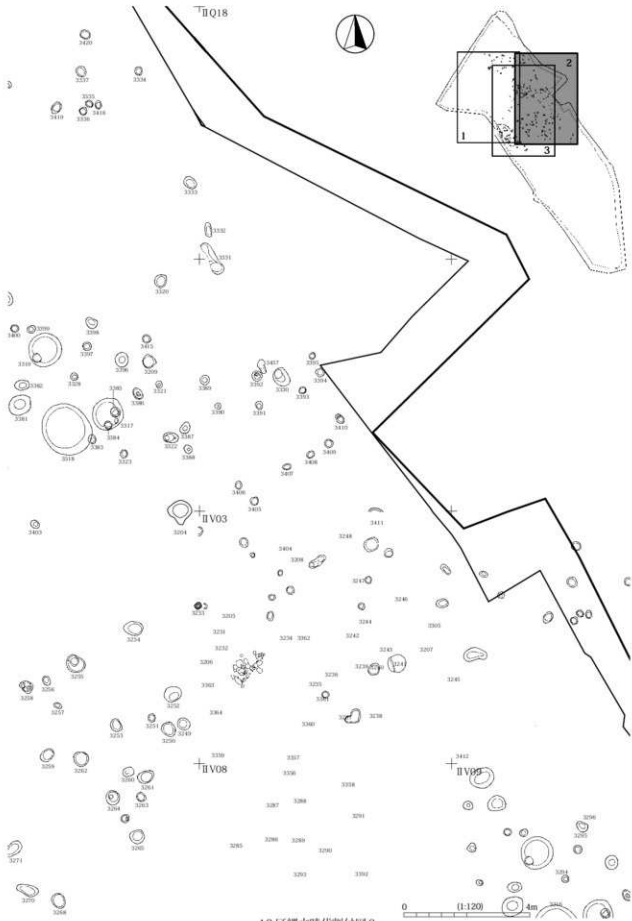


12 区縄文時代遺構分布図

图版 288 12区縄文時代割付图 1

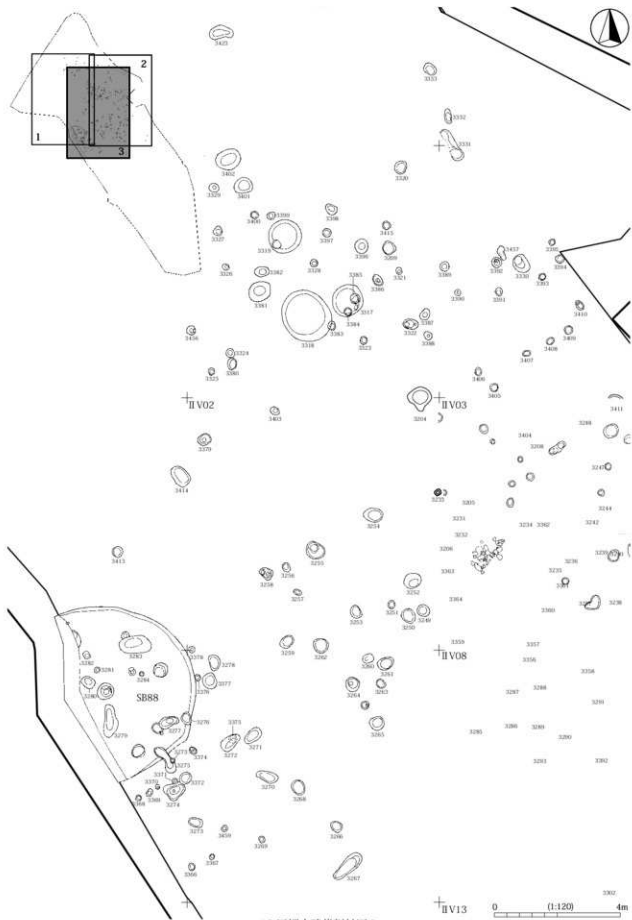


12区縄文時代割付图 1



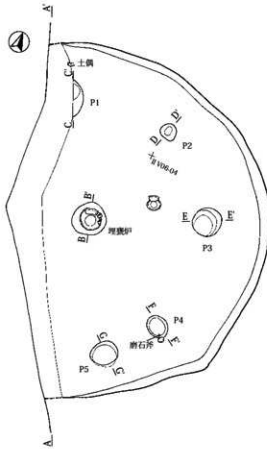
12 区縄文時代割付図 2

图版 290 12区縄文時代割付图3



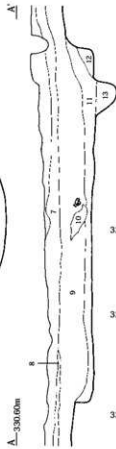
12区縄文時代割付图3

12区SB88

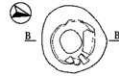


SB88縄文中期

- 7 10YR4/4 褐色粘質シルト層
- 8 10YR4/4 褐色シルト 7層砂少量
- 9 10YR2/2 黒褐色粘質シルト $\phi 10\text{cm}$ の筒状子実層 $\phi 4\text{mm}$ 層 $\times \phi 1\text{cm}$ 炭少量
- 10 10YR2/2 黒褐色シルト 中砂質20% 土中少量 埋没は中~褐色
- 11 10YR2/3 褐色粘質シルト
- 12 10YR2/2 黒褐色シルト 地中の黒褐色粘質砂少量 埋没 小砂少 北側から流れ込み
- 13 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ビット1層土



埋没P1



B—330.00m B



- SB88 埋没P1
- 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 上部に $\phi 1.5\text{cm}$ 褐色土炭20%以下
 - 2 10YR2/3 褐色シルト 地中の黒粘質砂 中~中砂質層が埋没した

0 (100) 1m

329.80m C—C' 329.80m D—D'



329.80m E—E'

329.80m F—F'



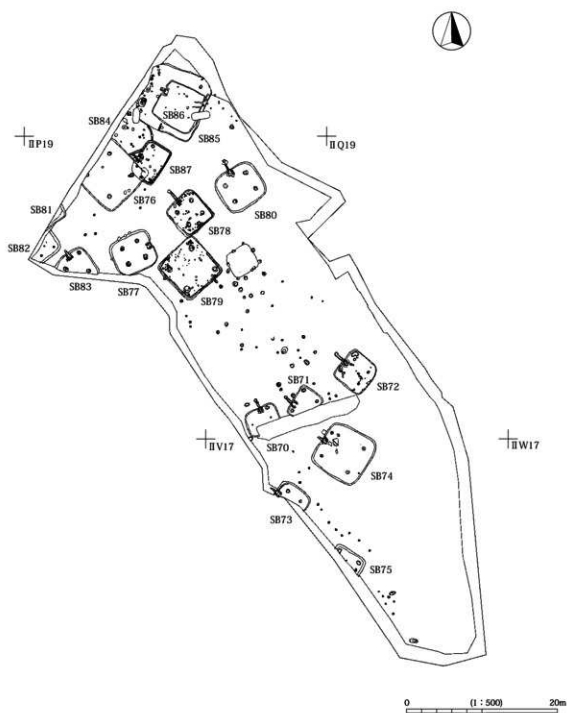
329.80m G—G'



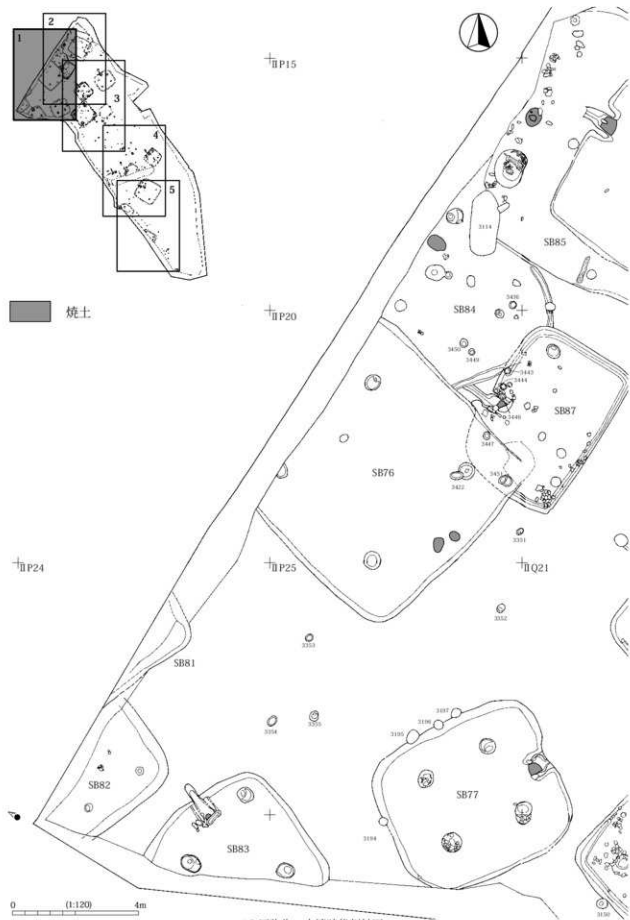
0 (150) 2m

SB88 Pa1-5 P5

- 1~4P1埋没P1北壁
- 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 5層の黒粘質砂が約近位の距離に散在 埋没物少ない
 - 1 地中の表は土色(10YR4/3)に近い褐色粘質シルト~粘質砂10%以上混じるのほかに砂の量が少ないこと

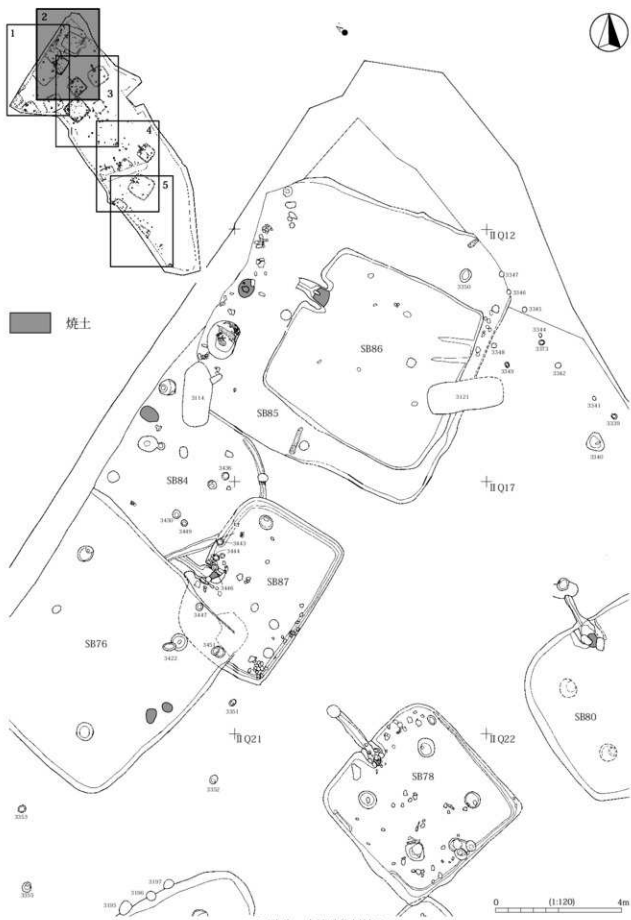


12区弥生・古墳時代遺構分布图

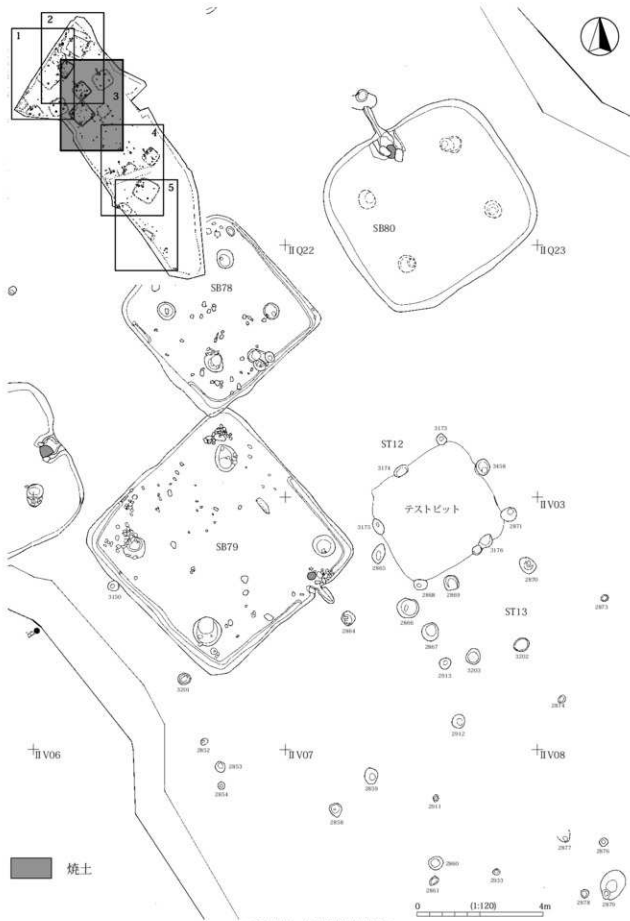


12区弥生・古墳時代割付图 1

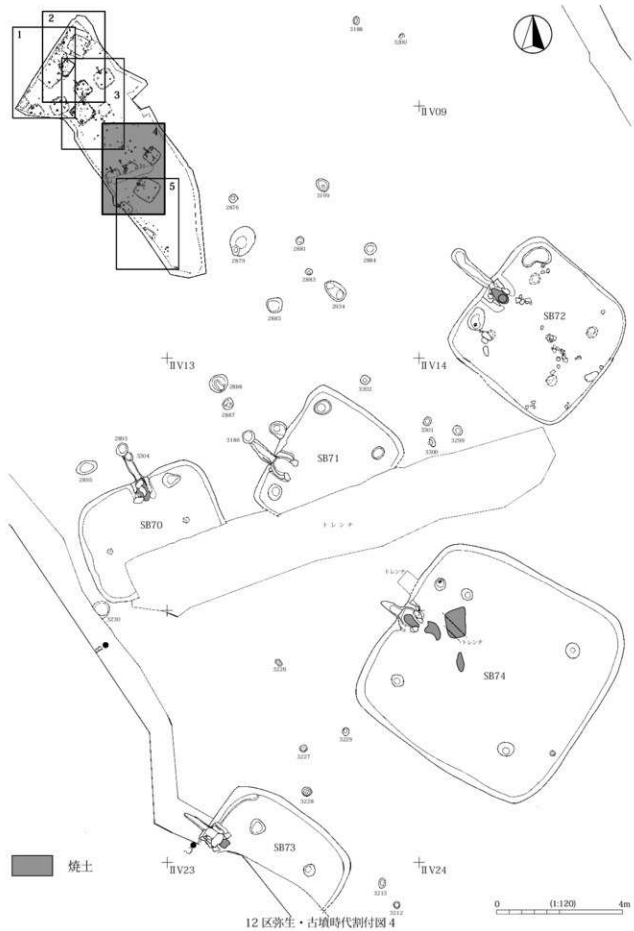
图版 294 12区弥生・古墳時代割付図2

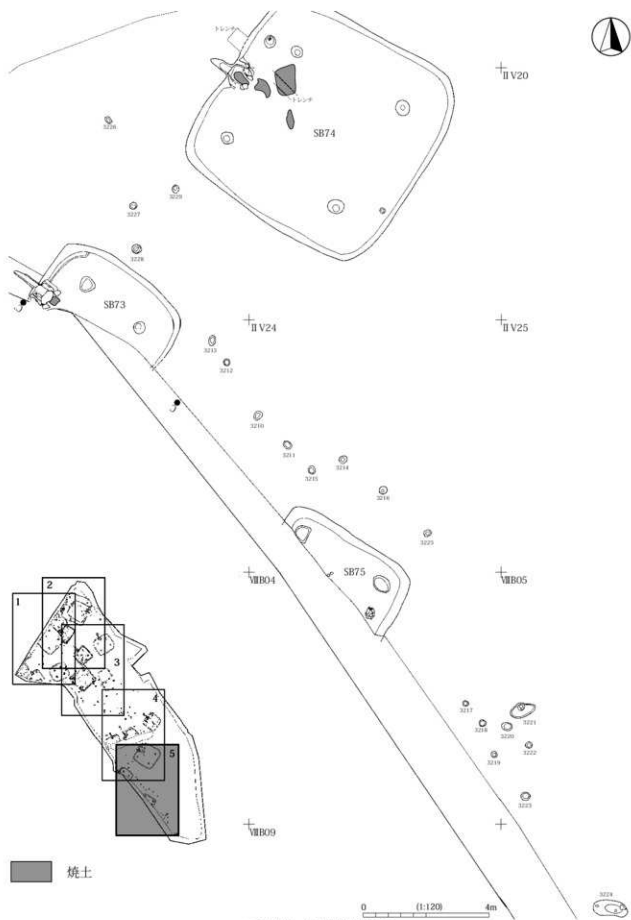


12区弥生・古墳時代割付図2



12区弥生・古墳時代割付図3

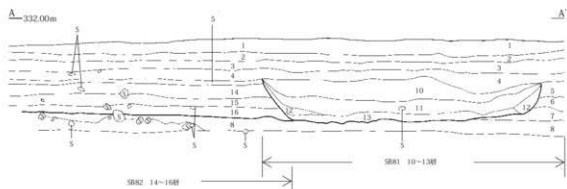




12区弥生・古墳時代割付図 5

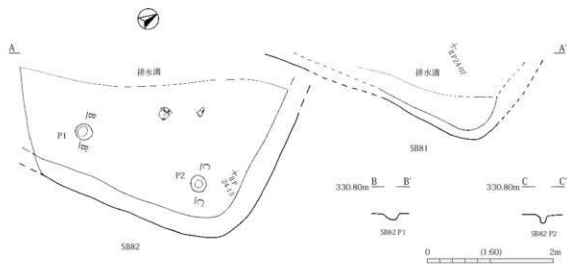
図版 298 12区弥生・古墳時代聚穴住居跡 1

12区 SB81・82



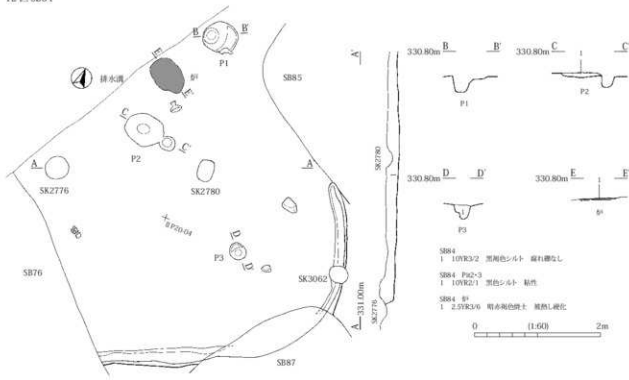
SB82
 5 10YR2/1 黒色シロト、5粒磁器 雑多
 14 10YR2/1 黒褐色シロト、5粒磁器 雑多
 15 10YR2/1 黒褐色シロト、5粒磁器 雑多
 16 10YR2/1 黒褐色シロト、5粒磁器 雑多
 (9-5粒磁器) 白色粘土-炭灰層の含有率で分類

SB81
 10 10YR2/2 黒褐色シロト、5粒磁器 (白粘土質粘土)5%
 11 10YR2/2 黒褐色シロト、a3mm(白色粘土)・a7mm(炭灰)10%
 12 10YR2/1 黒褐色シロト、土C(炭灰)層 (白粘土質粘土)5%以下
 13 7-8粒磁器 a3mm(磁器) 磁器の占拠率 10%以下



12区弥生・古墳時代聚穴住居跡 1 (SB81・82)

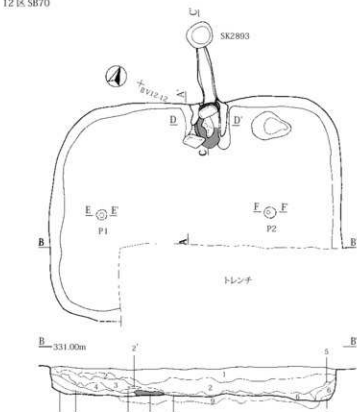
12区SB84



12区弥生時代竪穴住居跡2 (SB84)

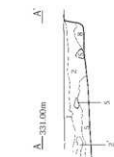
図版 300 12区古墳時代竪穴住居跡3

12区 SB70



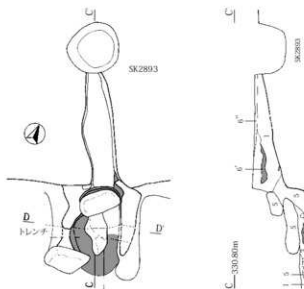
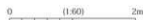
SB70(測量範囲)

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト φ=1.0m縦穴遺構多はφ=1m白色粘り多層 φ=2.0m10YR5/4C(白)褐色粘り少10% 和泥少
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト 1級土壌改良 縦穴跡中少 黒褐色粘り40% 断面以下半級で最大φ=5m
- 3 20B2/1F古砂
- 4 10YR2/1 黒褐色粘りシルト 最大φ=5m黒褐色粘り少層20% 断面以下級 基盤に縦穴跡粘り多 和泥
- 5 10YR2/1 黒褐色粘りシルト 縦穴跡に多い和泥 2.5YR4/6赤褐色粘り土 6級粘り 断面以下土が厚中
- 6 2.5YR4/6 赤褐色粘り土 断面に多い 最大φ=7m
- 7 10YR2/1 黒褐色粘りシルト 断面に多い 断面に多い 断面に多い 断面に多い
- 8 10YR2/2 黒褐色粘りシルト 縦穴跡多層 縦穴跡粘り 和泥
- 9 10YR2/1 黒褐色粘りシルト 断面に多い粘りシルト 最大φ=2.0m30%粘り
- 9 10YR4/2 に近い赤褐色粘り土 断面に多い粘りシルトφ=2.0m断面10% 断面に多い粘り土



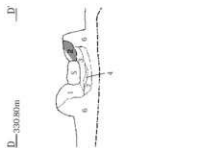
SB70 P1-2

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト 粘り 断面に多い粘りシルト最大φ=2.0m
- 2 10YR4/2 に近い赤褐色粘りシルト 断面に多い粘り土 断面に多い粘り土 断面に多い粘り土 断面に多い粘り土



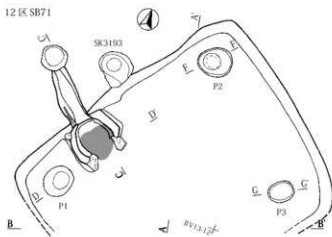
SB70 ママド

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト φ=1.0m白色粘りφ=0.5m黒褐色粘り断面5%以下 φ=1m 断面に多い 断面に多い断面以下φ=0.5m断面10%
- 2 20YR3/6 粘り黒褐色シルト ママド材の断面の断面に多い 断面に多い断面以下
- 3 10YR4/2 粘り黒褐色シルト 6級粘り 断面に多い断面以下
- 4 10YR2/1 黒褐色粘り土 断面に多い断面以下
- 5 10YR2/1 黒褐色粘り土 断面に多い断面以下
- 6 ママド材付 断面に多い断面以下 断面に多い断面以下 断面に多い断面以下
- 7 ママド材付の断面に多い断面以下 断面に多い断面以下 断面に多い断面以下
- 8 10YR2/2 粘り黒褐色シルト 断面に多い断面以下 断面に多い断面以下
- 9 最大φ=2.0m断面20% 断面に多い
- 9 20Y2/4 粘り黒褐色シルト 断面に多い断面以下



12区古墳時代竪穴住居跡3 (SB70)

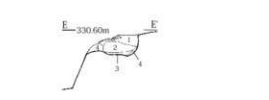
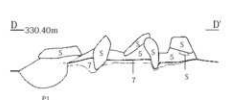
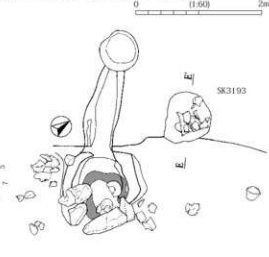
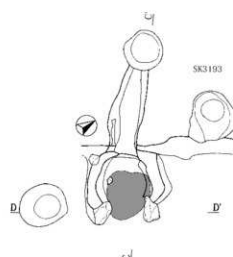
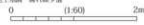
12区SB71



- SB71
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト φ5m白色炭粒多量 Fe腐
 - 2 10YR2/1 黒色粘質シルト 1層より腐粒層多量 Fe腐
 - 3 10YR2/1 黒色粘質シルト 1層より腐粒層シルト 腐粒層シルト多量 炭粒焼土少
 - 4 10YR2/1 黒褐色粘質シルト 地層下の10YR5/3黒褐色シルト
 - 5 10YR5/4 土に少量腐粒層シルト 腐粒層シルト20% 腐粒砂層
 - 6 10YR4/1 褐色粘質シルト 腐粒層シルト φ3m腐粒層多量

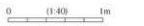
- SB71 南北
- 1 10YR2/1 黒褐色シルト 地上部のφ5m粘粒層20% φ2m白色砂子層
 - 2 10YR2/1 黒色シルト 地上部粘粒層20%
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト 地上部のφ3mシルト層20% 地上部のφ5m粘粒層20%

- 3 3層に別 雑を含まず
- 4 10YR2/2 黒褐色粘質シルト10YR5/3粘褐色シルト層20%
 - 4 4層に別 雑を含まず
 - 5 10YR4/1 褐色粘質シルト 腐粒層多量 Fe腐
 - 6 10YR4/1 褐色粘質シルト 地層の腐粒層多量 腐粒層多量



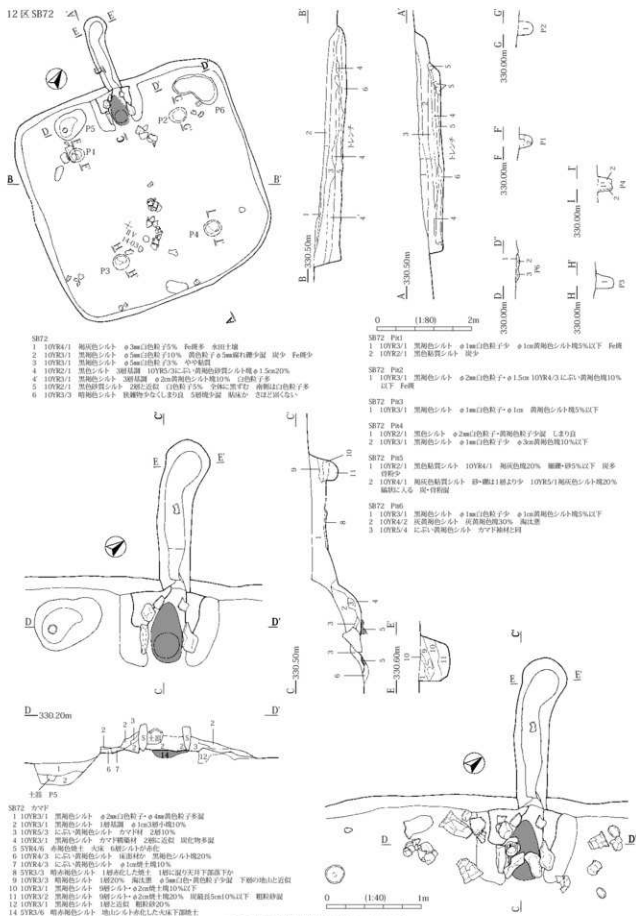
- SB71 全穴
- 1 10YR2/1 黒褐色シルト φ2m白色炭10% Fe腐
 - 2 10YR/8 赤褐色シルト 1層より腐粒
 - 3 10YR2/1 黒色シルト 1層より腐粒 φ1m(粘粒)シルト以下
 - 4 10YR5/4 土に少量腐粒シルト 腐粒層シルト20% 炭粒 炭粒焼土
 - 5 10YR2/1 黒色シルト 粘多層 φ1m焼土層20% 炭粒粘砂
 - 6 10YR4/2 土に少量腐粒シルト 4層に別 雑を含まず
 - 7 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR5/3 土に少量腐粒層1層 φ2m20%

- SK3193SB71住居跡内
- 1 10YR2/1 黒色シルト φ1m(粘粒)φ3m焼土1%以下
 - 2 10YR2/1 黒色シルト 1層粘土(粘粒)層 φ3m粘土20%
 - 3 10YR4/1 土に少量腐粒シルト 10YR5/3 黒褐色シルト母材の地層
 - 4 10YR2/1 粘多層 粘多層 土層の腐粒層
 - 4 10YR3/2 粘褐色シルト φ2m(粘粒)5% φ4m粘土多量

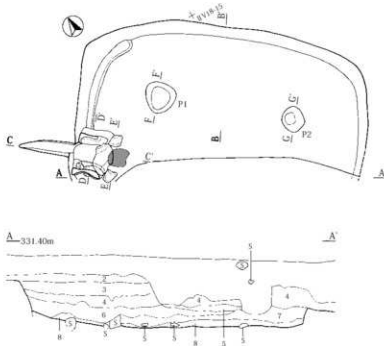


12区古墳時代整穴住居跡4 (SB71)

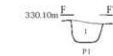
図版 302 12 区古墳時代竪穴住居跡 5



12区 SB73



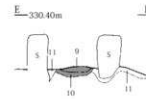
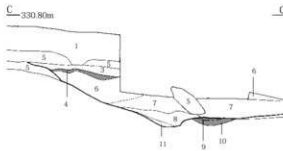
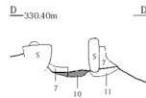
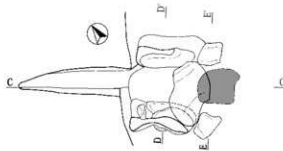
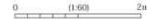
- SB73
- 1 10YR5/1 黒褐色シロト 赤田土層 上部粘結 白色粘土
 - 2 10YR4/2 赤褐色シロト 上部粘結層 粘結+白色粘土層
 - 3 10YR3/1 黒褐色シロト ϕ 6mm黄色粘土層(礫混入) (石灰は3層程度)
 - 4 10YR2/1 黒褐色シロト ϕ 4mm粗砂混入 石灰+黄褐色粘土(人土)混入 灰土層
 - 5 10YR2/3 黒褐色粘質シロト 石灰+黄褐色粘土 10%混入 赤褐色粘シロト混20%
 - 6 10YR2/1 黒褐色シロト 黄色粘土 白色粘土層 60%混入
 - 7 10YR4/1 赤褐色粘質シロト



- SB73 P1
- 1 10YR5/2 赤褐色シロト 黒褐色シロト層 10%混入 Fe層



- SB73 P2
- 1 10YR2/1 黒褐色シロト ϕ 2m(白色粘土)混入 粘土層(下部) 3層 ϕ 1.5m(黒褐色シロト)混入20%
 - 2 10YR4/4 赤褐色シロト 1層20% 粘土層
 - 3 10YR2/1 黒褐色シロト ϕ 2m(黒褐色粘質シロト)混入20%
 - 4 10YR2/1 黒褐色シロト 3層粘結 硬直土



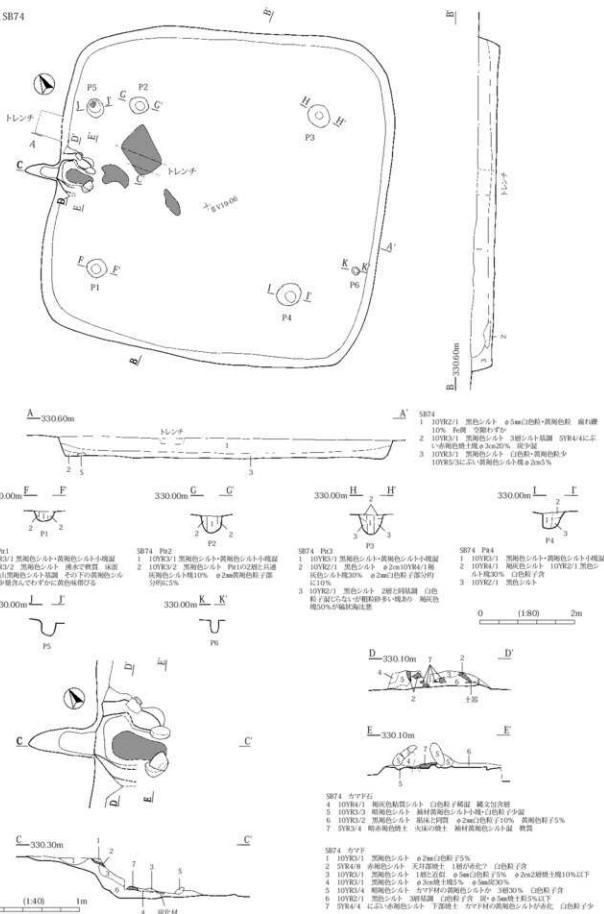
- SB73 カマド
- 1 10YR2/1 黒褐色シロト ϕ 2m(白色粘土)+ ϕ 3mm黄褐色粘土5%以下
 - 2 10YR2/2 赤褐色シロト 中粒砂(約40%)混入 黄褐色粘土 Fe層
 - 3 5YR3/2 赤褐色シロト 硬直土(約40%)混入 赤粘粒 黄褐色粘土
 - 4 10YR4/2 赤褐色シロト 硬直土(約20%)混入(約40%)粘土層(約5%)以下 粘土層
 - 5 10YR3/1 赤褐色粘質シロト ϕ 5mm(粘土)+ ϕ 1mm(礫)10%以下 灰土層 黄褐色 小礫
 - 6 10YR2/1 赤褐色粘質シロト 硬直土(約5%) 赤粘土層(約10%) ϕ 1.5m(赤褐色粘質シロト)混入10% 粘土層
 - 7 10YR2/1 赤褐色粘質シロト 硬直土(約5%) 赤粘土層(約10%) ϕ 1.5m(赤褐色粘質シロト)混入10% 粘土層
 - 8 10YR4/1 赤褐色シロト 硬直土層 ϕ 1.5m(粘質シロト)混入20% 硬直土
 - 9 5YR3/4 赤褐色シロト 灰土(約5%) 硬直土層 硬直土
 - 10 5YR4/4 赤褐色シロト 灰土(約5%) 硬直土層 硬直土
 - 11 10YR3/1 赤褐色シロト 硬直土(約30%)混入 ϕ 2m(粘質シロト) 硬直土



12区古墳時代竪穴住居跡6 (SB73)

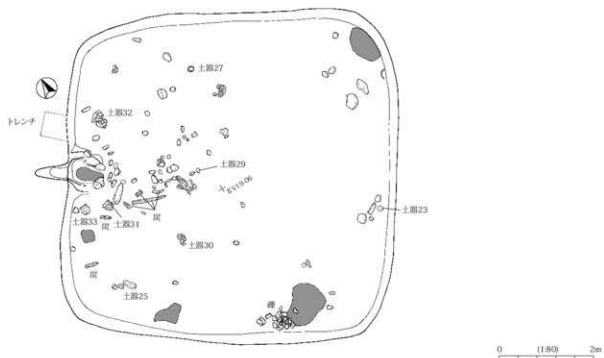
図版 304 12区古墳時代竪穴住居跡7

12区SB74

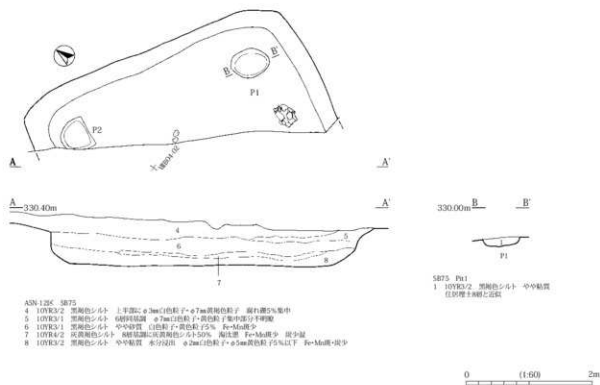


12区古墳時代竪穴住居跡7 (SB74)

12区SB74 遺物分布



12区SB75

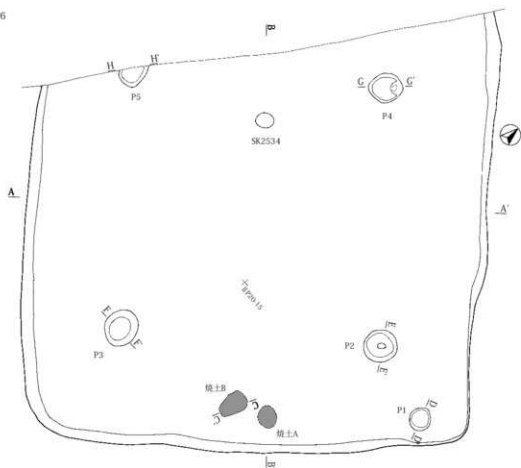


ASN 12区 SB75

- 4 10YR3/2 黒褐色シロト 上半部に ϕ 3cm白色粒 \pm ϕ 7mm黒褐色粒子 炭粉濃5%集中
- 5 10YR3/1 黒褐色シロト 6級砂粒層 ϕ 7mm白色粒 \pm 褐色粒 \pm 集中部 \pm 半埋
- 6 10YR3/1 黒褐色シロト 中々粒質 白色粒 \pm 炭粉粒 \pm 5% Fe-Mn減少
- 7 10YR4/2 灰黄褐色シロト 砂粒層に灰黄褐色シロト50% 炭化層 Fe-Mn減少 炭少埋
- 8 10YR3/2 黒褐色シロト 中々粒質 赤分混用 ϕ 2mm白色粒 \pm ϕ 3mm黄色粒 \pm 5%以下 Fe-Mn減少

12区古墳時代聚穴住居跡8 (SB74・75)

12区SB76



- SB76
 1 107R2/1 凝灰砂シスト 土層目 鏡上跡多量
 2 107R4/1 凝灰砂シスト 砂質層目
 3 107R2/1 凝灰砂シスト 耕作 溝堀の上の微石 鏡上跡目
 4 2.05R2/4 粘土質白土 穴の下の深さ5cmの溝水で敷石

330.60m D-D'



330.60m E-E'



330.60m F-F'



330.60m G-G'



鏡上B

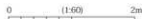
330.60m H-H'



330.60m C-C'

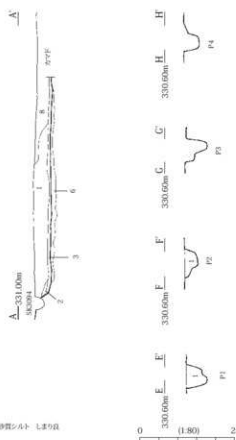
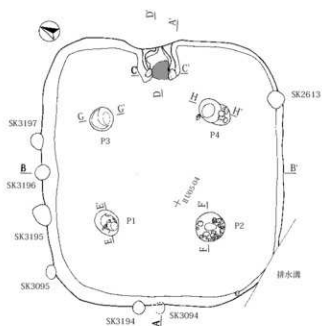


- SB76 P01-2 穴の埋土
 P01-2 1層、2層(埋土:2層)
 1 107R2/1 凝灰砂シスト 耕作
 2 2.05R2/4 粘土質白土 穴の下の深さ5cmの溝水で敷石



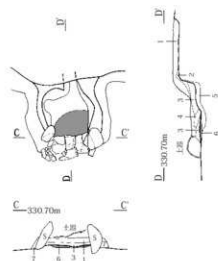
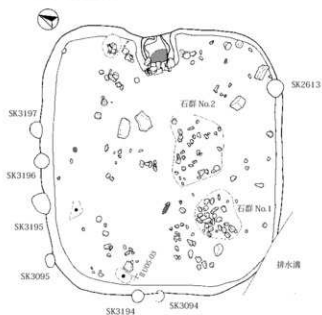
12区古墳時代竪穴住居跡9 (SB76)

12区SB77



- ASB 12区 SB77
- 1 109R2/2 灰褐色砂質シルト しまり目 縦穴跡多
 - 2 109R2/3 縦穴跡 灰土跡少
 - 3 109R2/2 灰褐色砂質シルト 粘付 (白褐色子-塊土粒層)に混
 - 4 309R2/3 縦穴跡
 - 5 309R2/4 縦穴跡 灰土跡
 - 6 109R2/3 灰褐色シルト 粘付 砂質層 φ10cm以上露出
 - 7 109R2/3 縦穴跡部分シルト 粘付 灰褐色土粒層
 - 8 709R2/3 縦穴跡なし

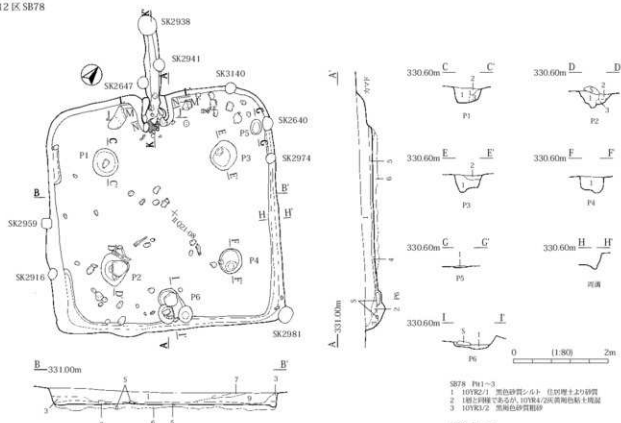
- SB77 Pk1-2
- 1 109R2/3 灰褐色砂質シルト しまり目



- SB77 カヤノ断面
- 1 109R2/2 灰褐色砂質シルト (柱穴跡の埋土と同)
 - 2 109R2/6 褐色粘土 しまり目
 - 3 109R2/6 褐色粘土 (柱穴跡埋土)粘付土粒層に混在
 - 4 309R2/3 灰褐色砂質シルト しまり目 ササササしている
 - 5 109R2/2 泥炭層
 - 6 209R2/4 粘赤褐色シルト 縦穴跡なし
 - 7 109R2/6 褐色粘土 縦穴跡なし

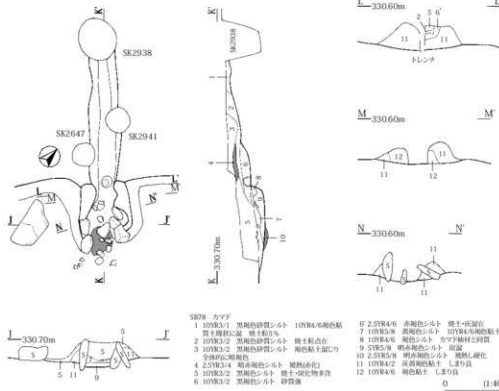
12区古墳時代整穴住居跡 10 (SB77)

12 区 SB78



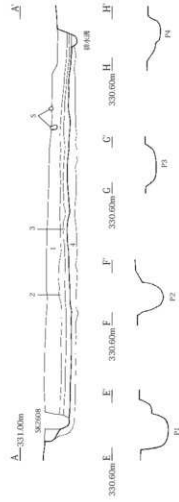
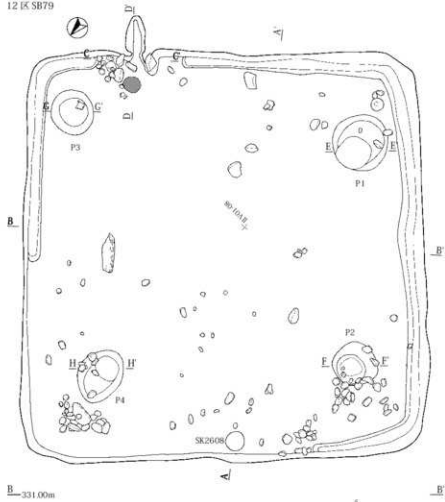
SB78

- | | |
|---|------------------------|
| 1 10YK3/1 黒褐色シルト 縦溝を掘き直したA10YK2/2層跡の表層土 | 6 10YK3/4 暗褐色砂質シルト 粘り質 |
| 2 10YK2/1 黒褐色砂質シルト 10YK3/3層跡の砂質シルト層跡に凝 | 7 10YK3/5 暗褐色 粘り質 |
| 3 10YK2/2 黒褐色砂質シルト 1-2階より粘り質 | 8 粘土が堆積に凝 |
| 4 10YK3/2 暗褐色 粘り質 | 9 10YK3/6 縦溝を掘き直 |
| 5 10YK2/3 黒褐色砂質シルト 粘り 縦溝跡が 縦溝跡なし | |



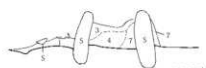
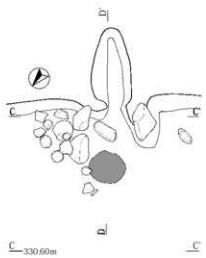
12 区古墳時代竪穴住居跡 11 (SB78)

12区 SB79



SB79
 1 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 腐れ層多含 しちり目
 2 10YR3/2 黒褐色シルト 腐れ層なし
 3 10YR4/1 黒褐色シルト 腐れ 両面縁部付着
 4 10YR4/1 黒褐色シルト 41cm一層説 床面下

0 (1:60) 2m

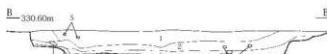
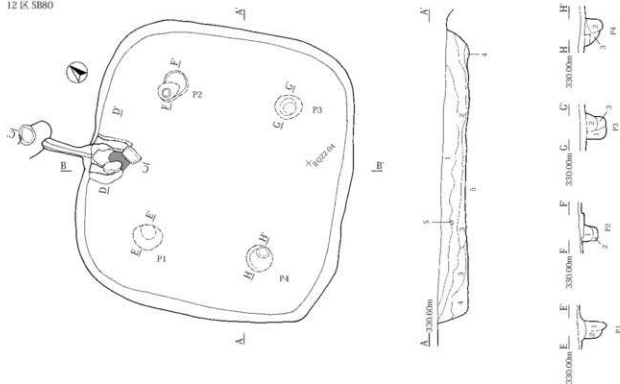


SB79 カマド
 1 10YR4/2 黒褐色シルト 腐れ
 2 10YR5/2 黄褐色シルト 腐れ 灰が層状
 3 10YR3/3 黒褐色シルト 腐れ多量
 4 10YR3/3 黒褐色砂質シルト 腐れ多量
 5 10YR3/3 黒褐色砂質シルト 4層より粘土粒少 砂質
 6 2.5YR4/4 紅土・赤褐色シルト 腐れ 腐れ面の積層
 7 10YR4/2 黄褐色粘土 しちり目

0 (1:30) 1m

12区古墳時代整穴住居跡 12 (SB79)

12区 SB80



ASM 12区 SB80

- 1 10YK2/1 黒褐色粘質シルト 文型ア層状構造のa2mm白色砂子10%
- 2 10YK2/3 黒褐色粘質シルト 中粒砂少量 縦糸織の黒褐色砂子5%
- 3 10YK2/1 黒色シルト 白砂・黒褐色粘土2%
- 4 10YK2/3 黒褐色粘質シルト 2層状構造 3層10% 10YK4/3による黒褐色シルト塊φ~5cm20% 陶片類
- 5 10YK4/2 灰黄褐色粘質シルト 黄色砂子少量 縦糸織 3層10%

SB80 P#1

- 1 10YK2/1 黒褐色粘質シルト 土中に丸塊
- 2 10YK4/2 灰黄褐色シルト地山の黒褐色シルト塊層 1層状構造50%

SB80 P#2

- 1 10YK4/3 土に白・黄褐色粘土 シルト層
- 2 10YK2/1 黒褐色粘質シルト 中粒砂少

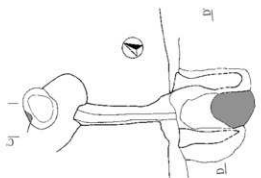
SB80 P#3

- 1 10YK2/1 黒褐色粘質シルト 縦糸織95% 黒褐色シルト10%
- 2 10YK2/2 黒褐色粘質シルト 1層に黒砂20% φ1mm黒褐色シルト塊10%
- 3 10YK3/2 黒褐色粘質シルト 10YK4/3による黄褐色シルト塊φ4~30%

SB80 P#4

- 1 10YK4/3 黒褐色粘質シルト 縦糸織50%
- 2 10YK2/1 黒褐色粘質シルト 中粒砂少
- 3 10YK2/2 黒褐色粘質シルト 縦糸織10%

0 (1:80) 2m



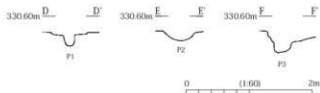
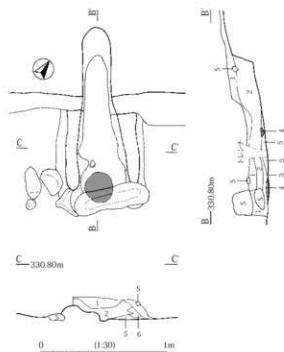
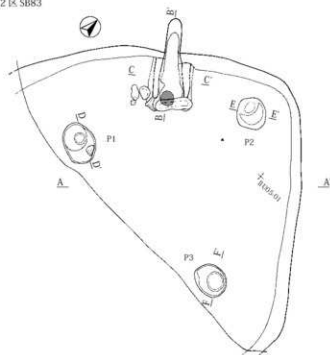
SB80 カマド

- 1 10YK3/2 黒褐色粘質シルト a2mm白色砂子φ7mm黄色砂子20%
- 2 10YK2/1 黒色シルト 白砂・黄色砂子5% a1mm土塊5%以下
- 3 10YK6/2 灰黄褐色粘質シルト 白砂・黒褐色粘土 大量に含む
- 4 10YK4/3 赤褐色粘土 2~5層状
- 5 10YK1/1 黒土・白土 灰黄色粘質黒色シルト層 (白砂子少 φ3mm 4層20%)
- 6 10YK3/2 黒褐色粘質シルト 縦糸織10%以下 黒砂含む
- 7 10YK4/3 土に白・黄褐色粘土 2層に白砂シルトが赤土
- 8 10YK3/2 黒褐色粘質シルト 縦糸織の土質に赤土 黒砂砂多量 地山土層 中粒砂子少量に含む
- 9 地山の黒褐色粘土が赤化した粘土 黒砂砂多量
- 10 10YK4/2 灰黄褐色粘質シルト
- 11 10YK3/2 黒褐色粘質シルト 地山

0 (1:40) 1m

12区古墳時代竪穴住居跡 13 (SB80)

12区 SB83



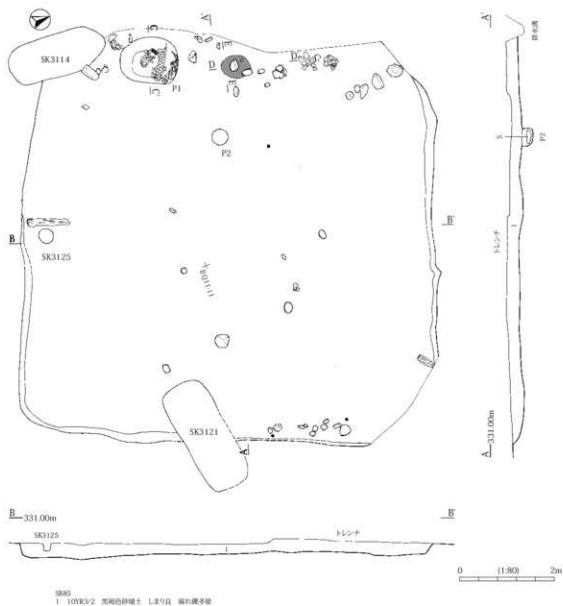
- SB83 本ツブ
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性 腐植質少 住居跡の増上土層
 - 10YR4/1 黒褐色粘質シルト 粘質 腐植質中 住居跡の増上土層
 - 2B2/2 粘質 粘土和泥
 - 2.5YR3/0 暗赤褐色シルト 腐植質より赤化 湧水のため 敷設
 - 2B2/2 粘質 粘土和泥 腐植質中
 - 10YR4/1 黒褐色シルト 粘性 カマド跡が埋れたため

- SB83
- 10YR4/1 黒褐色粘質シルト Fe-Mn 10% 0.2m 白色粉子 5%
 - 10YR4/2 黒褐色粘質シルト 白色粉子 2% 敷設
 - 10YR2/1 黒褐色粘質シルト Fe-Mn 10% 0.2m 白色粉子 5%

12区古墳時代整穴住居跡 14 (SB83)

図版 312 12区古墳時代竪穴住居跡 15

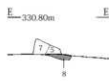
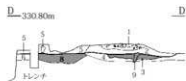
12区 SB85



SB85
1 10YR3/2 黒褐色砂礫土 L土刀痕 竪穴遺構跡



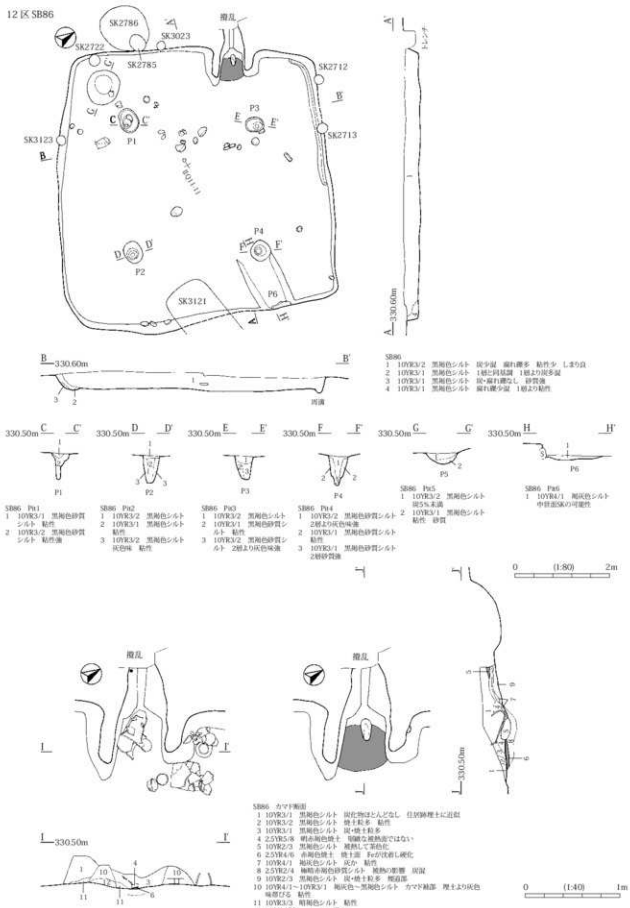
SB85 P1
1 10YR3/1 黒褐色シルト 黏性 炭化物10%



- SB85 カマヤノ堀田
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物多 40%砂礫土 しまり良 黏性良
 - 2 10YR2/3 黒褐色シルト 炭化物多 しまり良
 - 3 10YR2/4 灰赤褐色シルト 弱粘
 - 4 10YR2/2 黒褐色シルト 黏性 2層土0炭化物減少
 - 5 10YR2/2 黒褐色シルト 1粒7粒砂礫混 粘土割合
 - 6 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物多 2層土0炭化物減少 砂少
 - 7 10YR2/3 黒褐色シルト 炭化物少 しまり良 (住居埋土)
 - 8 10YR2/0 赤褐色シルト 弱粘0炭化
 - 9 粘土粒の塊

0 (1:40) 1m

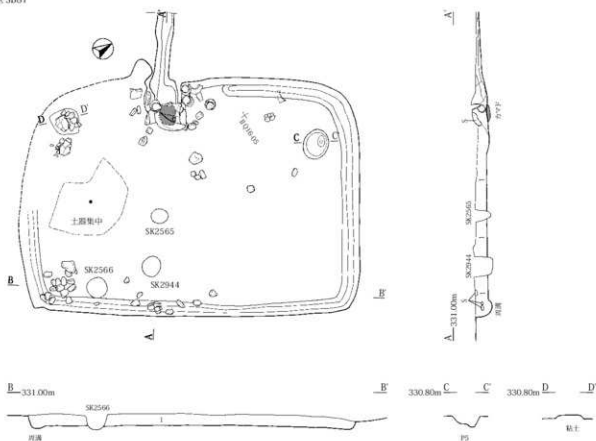
12区古墳時代竪穴住居跡 15 (SB85)



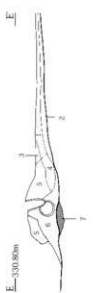
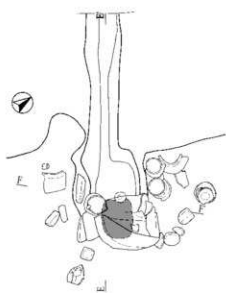
12区古墳時代整穴住居跡 16 (SB86)

図版 314 12区古墳時代竪穴住居跡 17

12区SB87



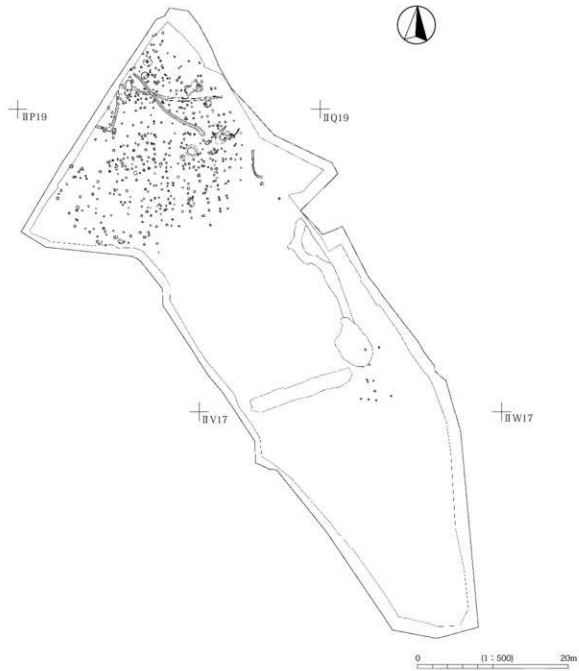
SB87
1 10YR2/2 黄褐色シルト 粘り 粘り層
2 L



SB87 カマシ
1 10YR2/2 黄褐色砂質シルト 粘土粘層 層通
2 10YR2/1 黄褐色砂質シルト 1層土中穴通過
3 1R1粘層 粘り粘り土中穴通過の泥
4 1R1粘層 粘土中穴通過の泥
5 1R1土砂層 灰色粘土塊状の泥
6 10YR2/4 黄褐色シルト 穴中層の粘り層 粘土粘層 粘り
7 2.5YR4/6 赤褐色シルト 粘り層の泥

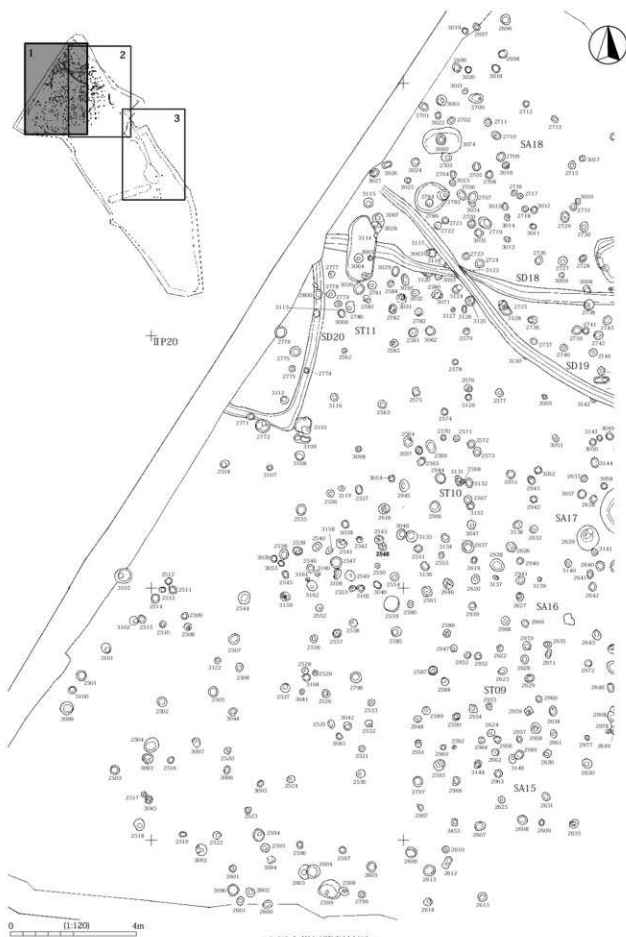


12区古墳時代竪穴住居跡 17 (SB87)

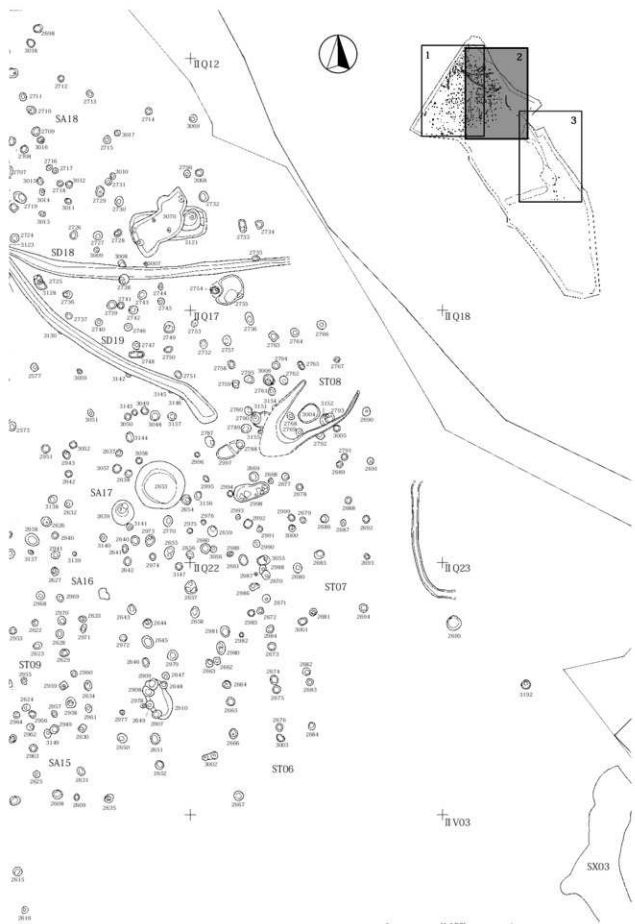


12区中世以降遺構分布图

图版 316 12 区中世以降割付图 1

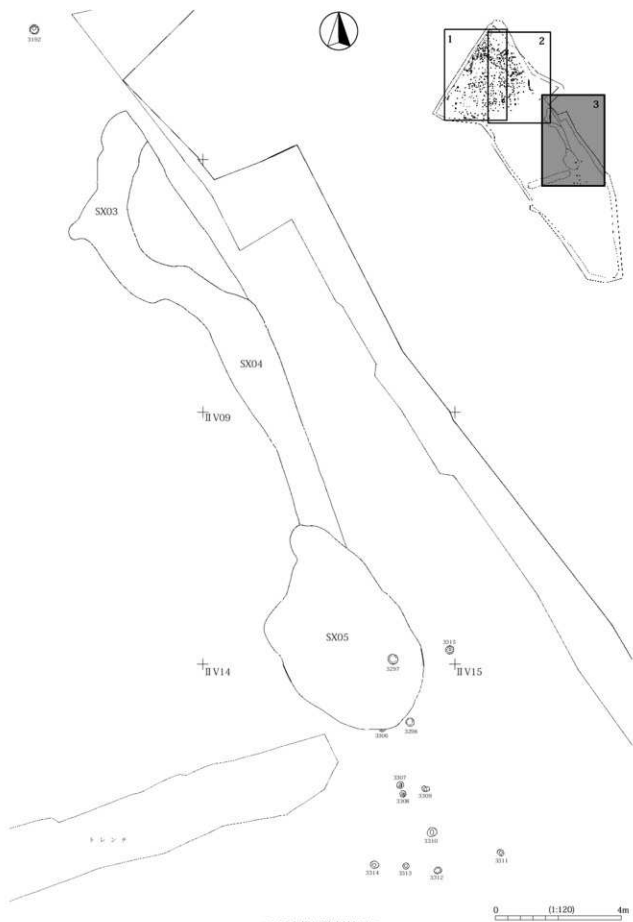


12 区中世以降割付图 1



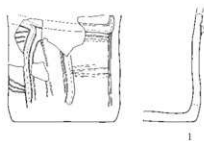
12 区中世以降割付图 2

图版 318 12 区中世以降附图 3



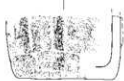
12 区中世以降附图 3

SB74 (1・2)



1

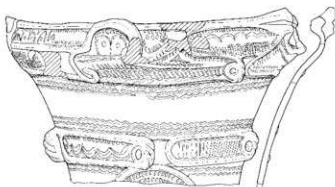
SB88 (3~5)



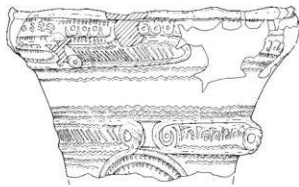
4



2



3a



3b

SK3204・3322 (7)

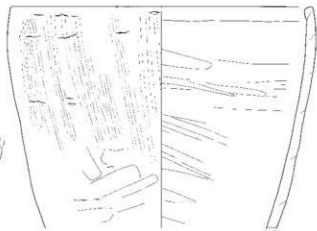


5

SH48 (6)



6

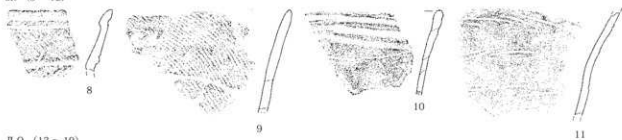


7

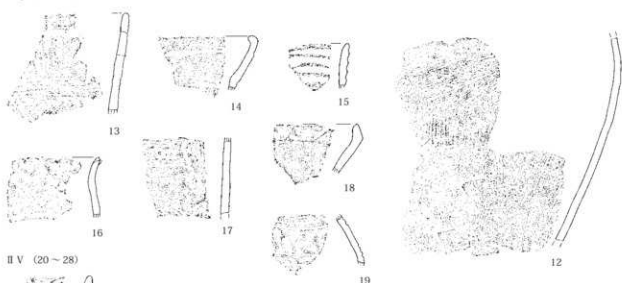
0 (1:4) 10cm

12区縄文土器 1 (SB74・88, SH48, SK3204・3322)

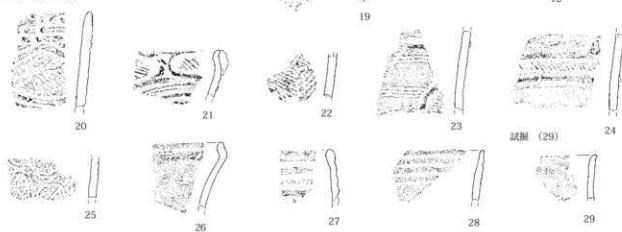
SK (8~12)



II Q (13~19)

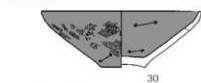


II V (20~28)

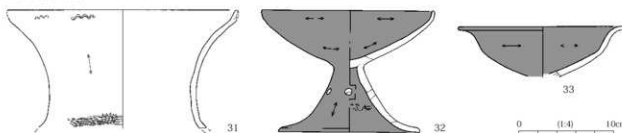


試刷 (29)

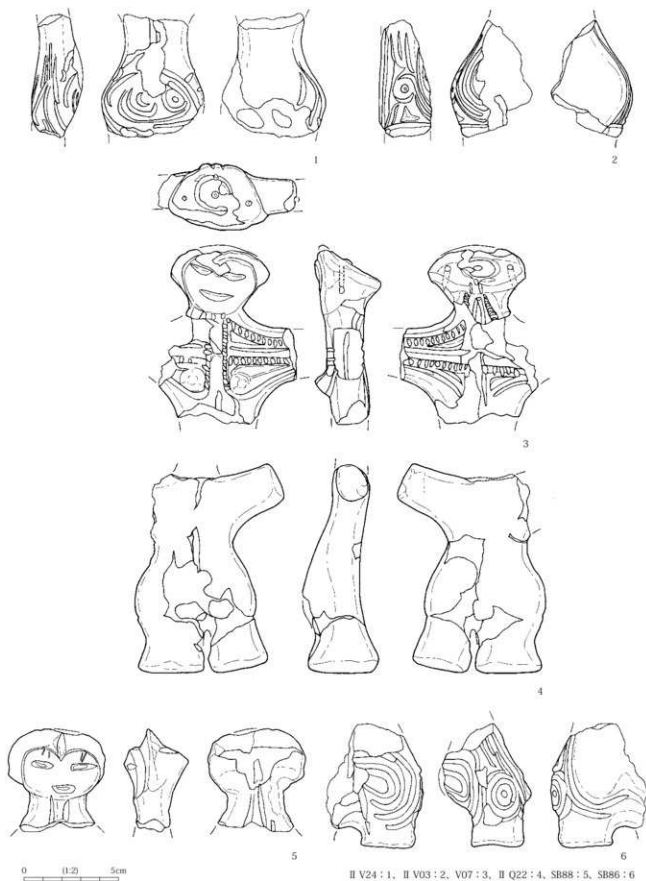
SB82 (30)



SB84 (31~33)



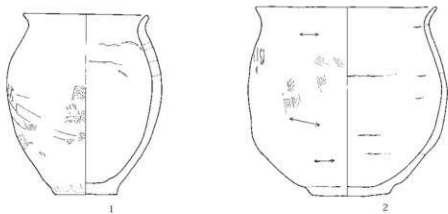
12区縄文土器2 (SK、II Q・V区)・弥生土器 (SB82・84)



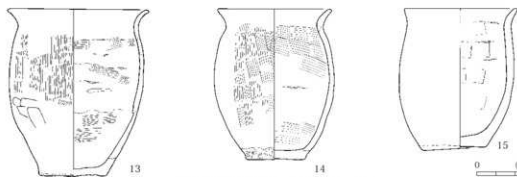
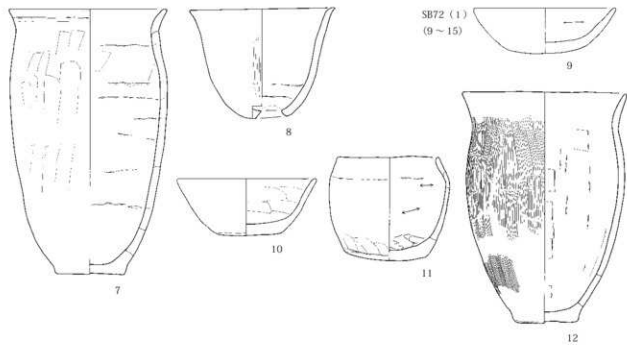
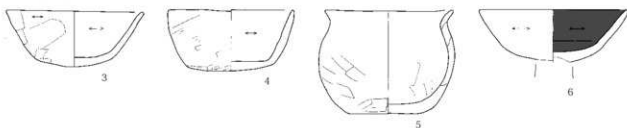
Ⅱ V24 : 1, Ⅱ V03 : 2, V07 : 3, Ⅱ Q22 : 4, SB88 : 5, SB86 : 6

12区縄文時代土偶

SB70 (1・2)



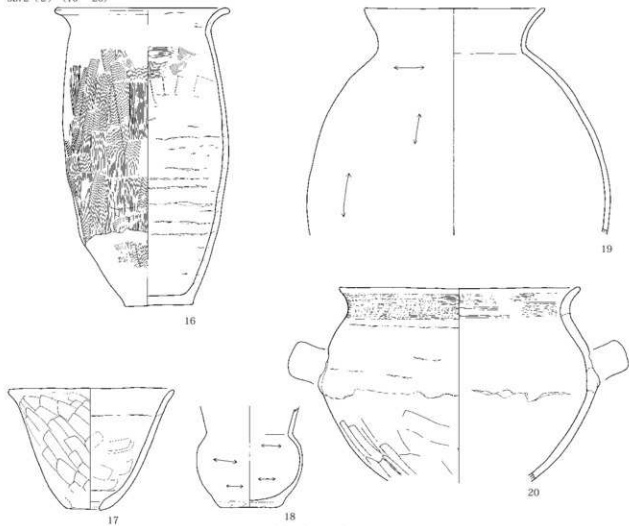
SB71 (3~8)



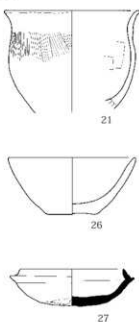
0 (1:4) 10cm

12 区古墳時代土器 1 (SB70・71・72)

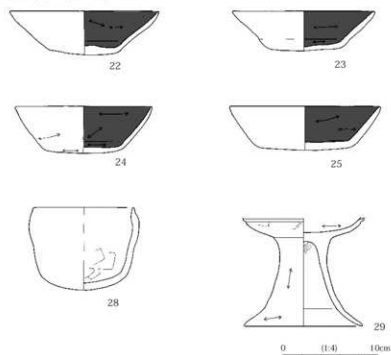
SB72 (2) (16~20)



SB73 (21)

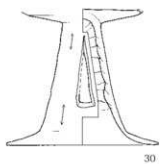


SB74 (1) (22~29)

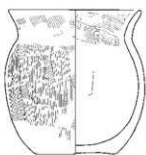


12 区古墳時代土器 2 (SB72・73・74)

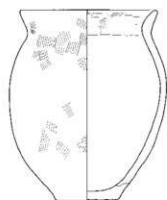
SB74 (2) (30 ~ 33)



30

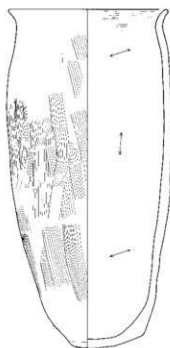


31

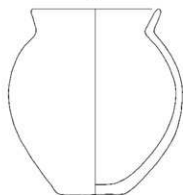


32

SB75 (34)



34

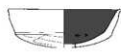


33

SB76 (35 ~ 41)



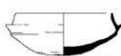
35



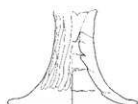
36



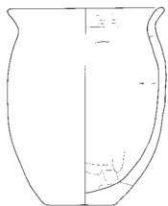
37



38



39



40



41

SB77 (1) (42 ~ 44)



42



43



44

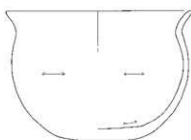
0 (1:4) 10cm

12 区古墳時代土器 3 (SB74・75・76・77)

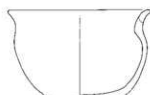
SB77 (2) (45~51・57)



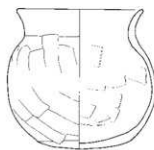
45



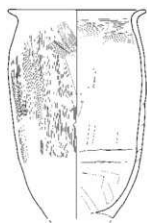
46



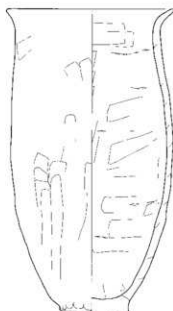
47



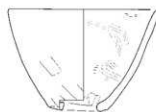
48



49



50



51

SB78 (52~56)



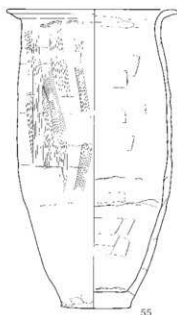
52



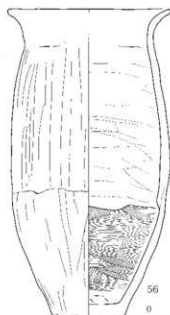
53



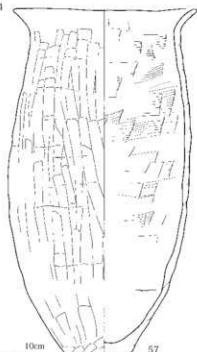
54



55



56

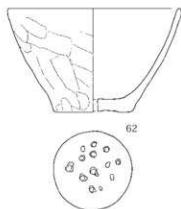
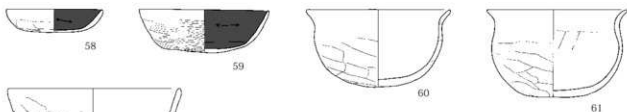


57

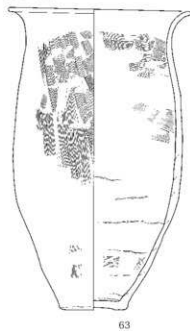
12区古墳時代土器4 (SB77・78)

0 (1:4) 10cm

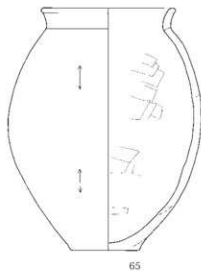
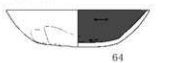
SB79 (58~62)



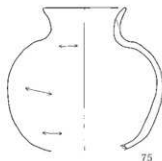
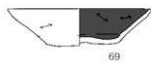
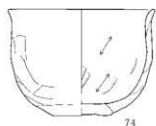
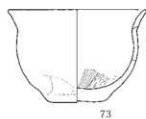
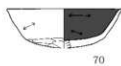
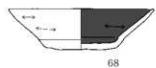
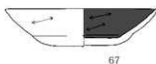
SB80 (63)



SB83 (64~66)



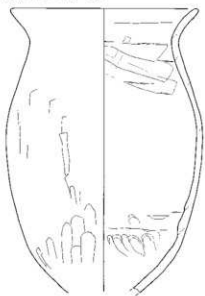
SB85 (1) (67~75)



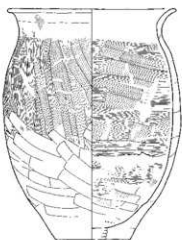
0 (1:4) 10cm

12 区古墳時代土器 5 (SB79・80・83・85)

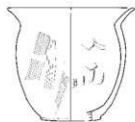
SB85 (2) (76~83)



76



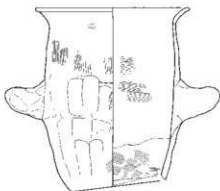
77



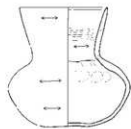
78



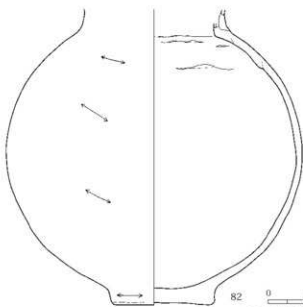
79



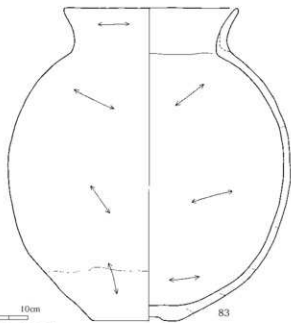
80



81



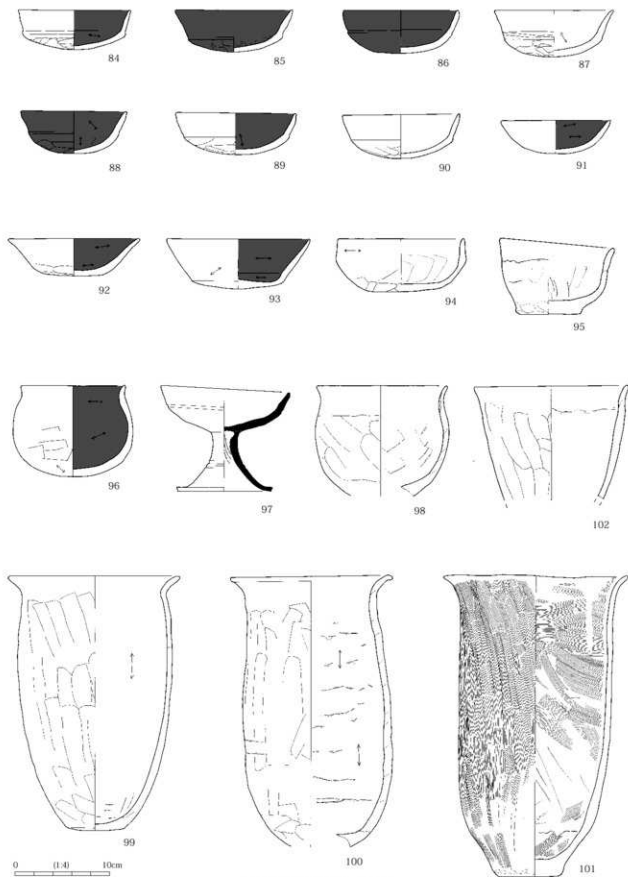
82



83

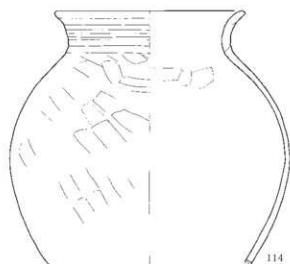
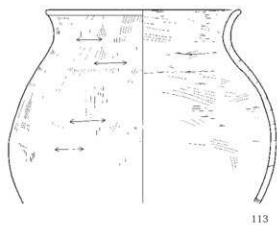
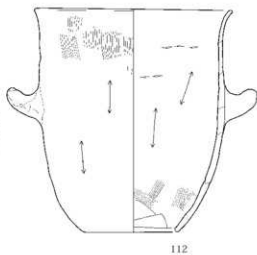
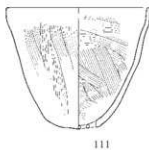
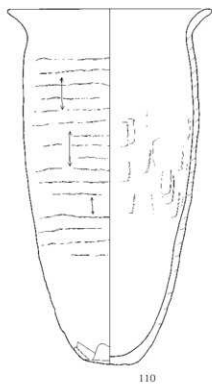
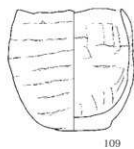
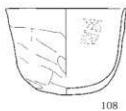
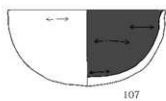
0 10cm
12区古墳時代土器6 (SB85)

SB86 (84 ~ 102)



12 区古墳時代土器 7 (SB86)

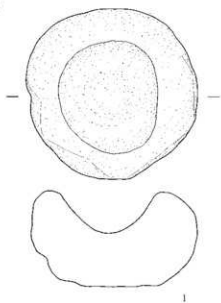
SB87 (103~115)



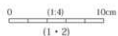
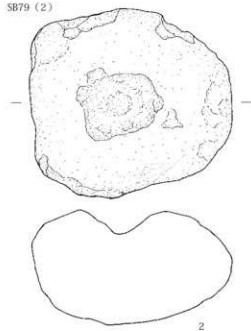
0 5.0 10cm

12 区古墳時代土器 8 (SB87)

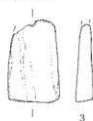
12 区
SB70 (1)



SB79 (2)



12 区
SB79 (3)



SB83 (4)



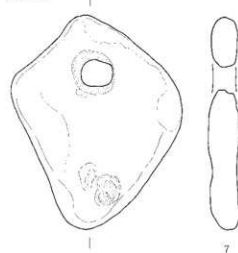
中世面 (6)



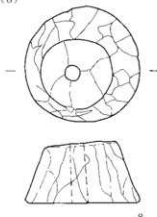
SB86 (5)



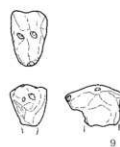
SB83 (7)



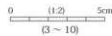
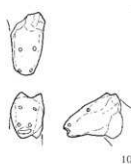
12 区
SB77 (8)



試掘 6T (9)

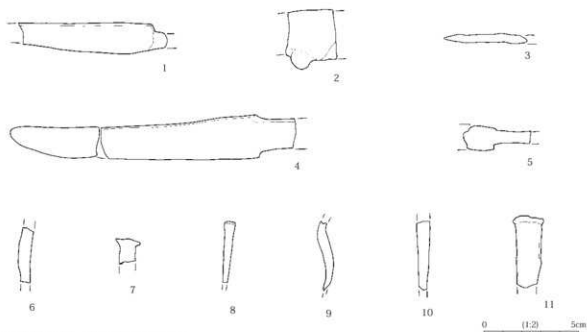


8 区
SB03 (10)



凹石 1・2、石製品 3～7、土製品 8～10

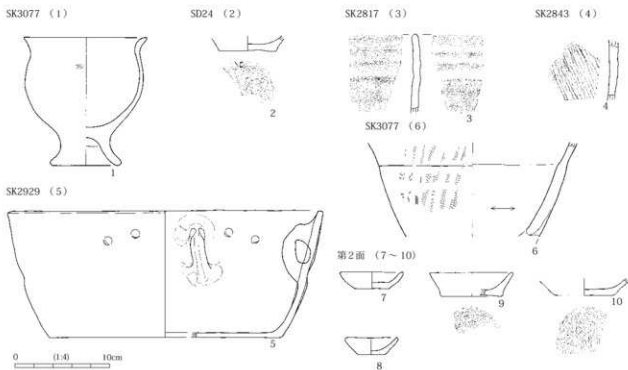
8・12 区古墳時代石製品・土製品



古墳時代 12区SB74:1, SB80:2・3, SB83:4

中世 12区中世輸出面:5

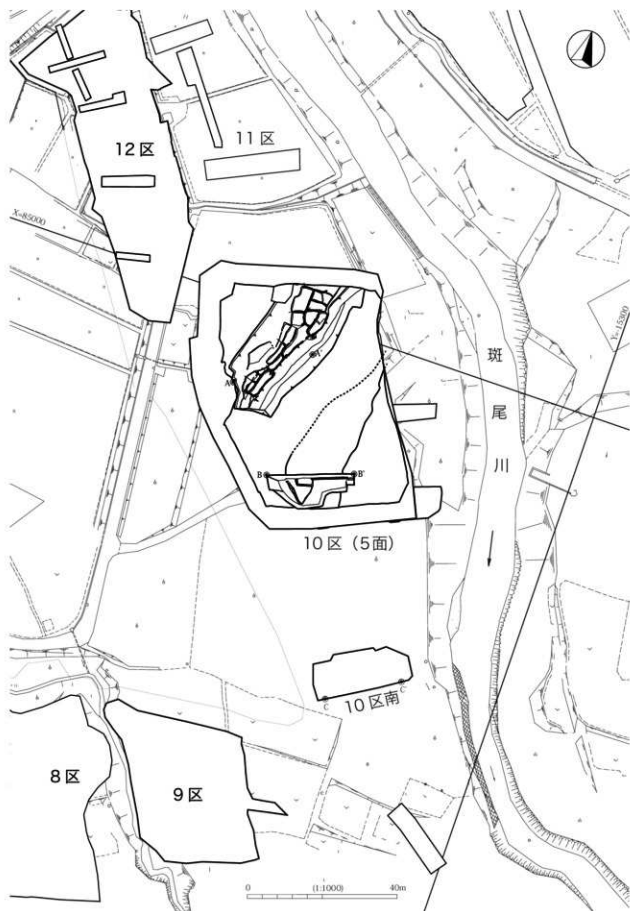
中近世 10区第1面:6, 第2面:7, SK2829:8, SK2936:9, 第2面細跡:10・11



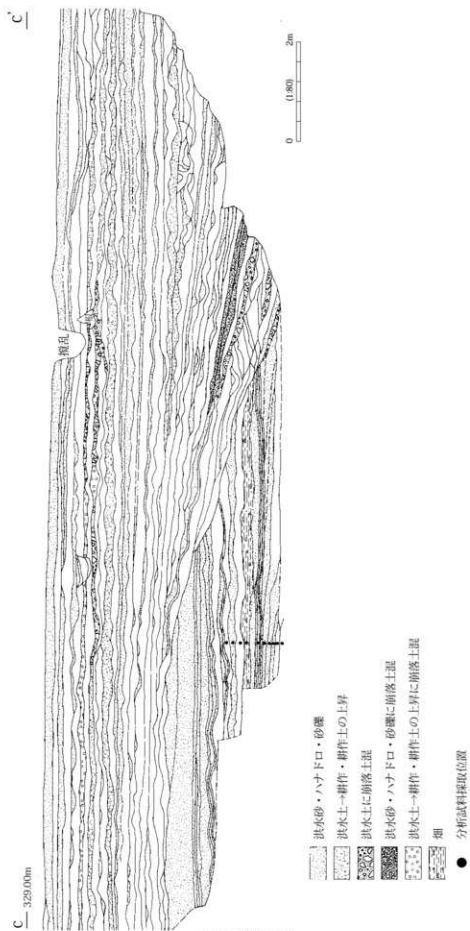
古墳時代土器 1

中世焼物 2~10

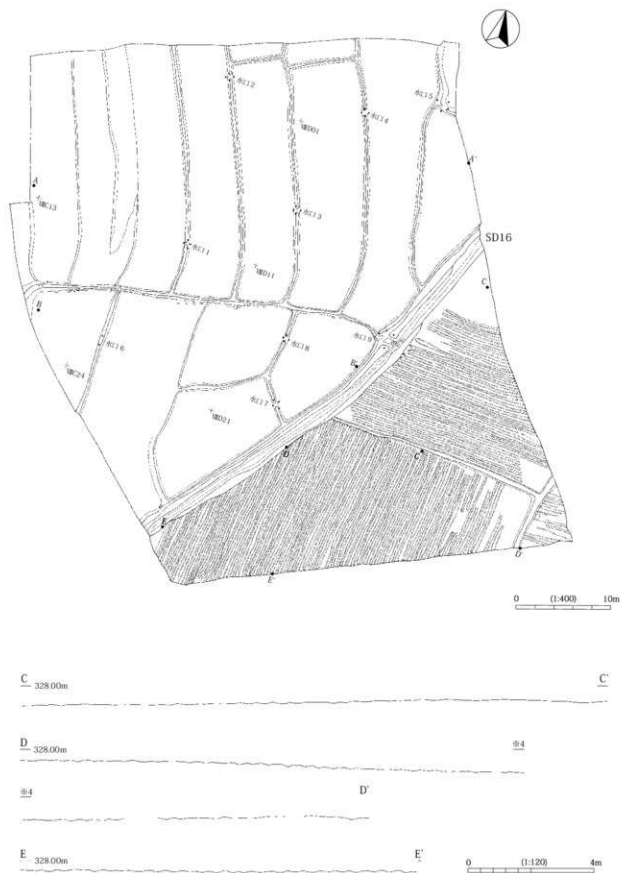
图版 332 10区位置图



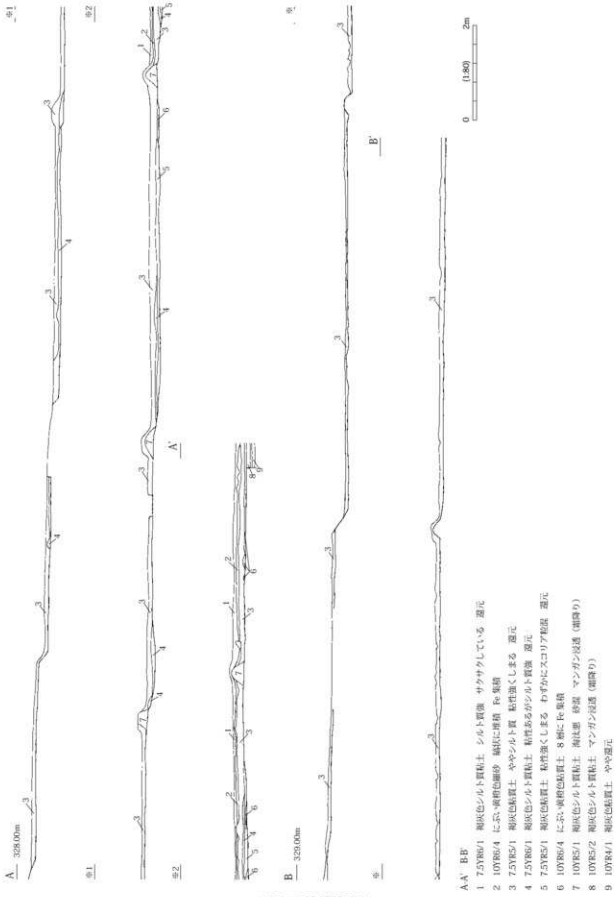
10区位置图



10 区南土層断面図

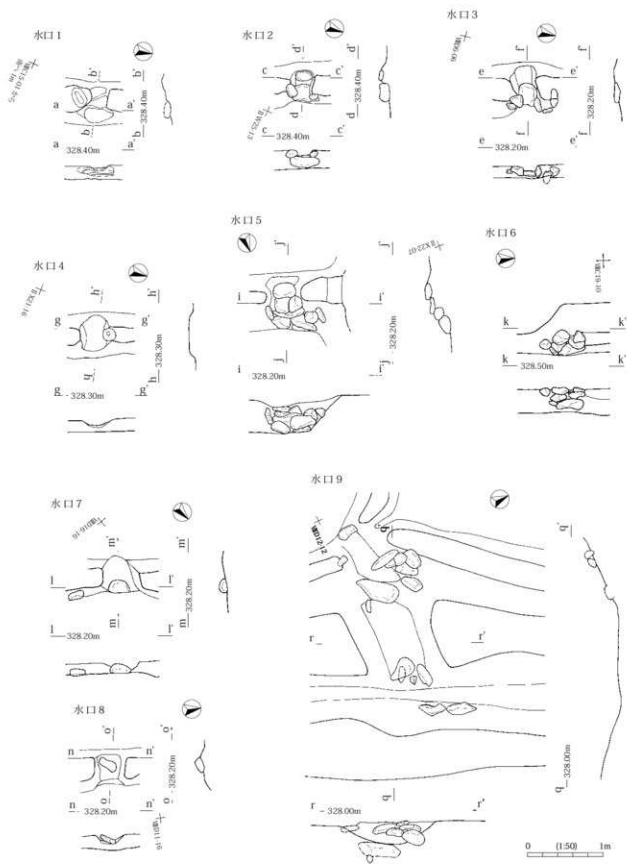


10区1面道構図

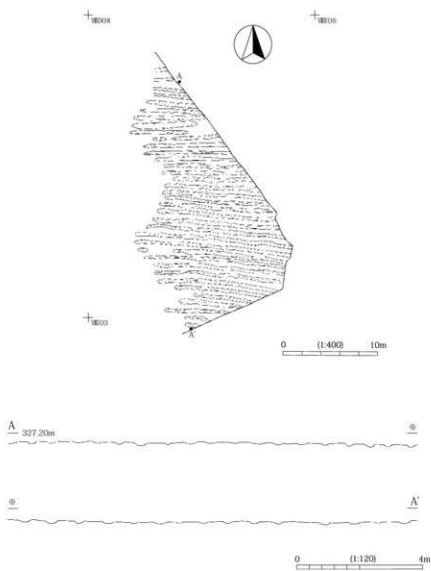


10区1面土層断面図

图版 336 10区1面水口部分图



10区1面水口部分图



10区2A面遺構図

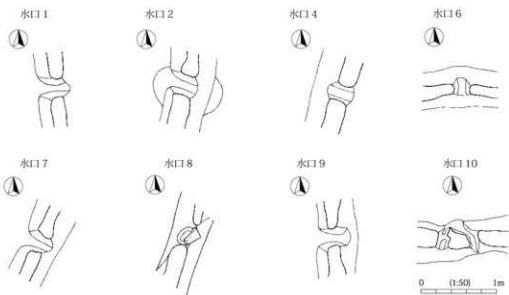
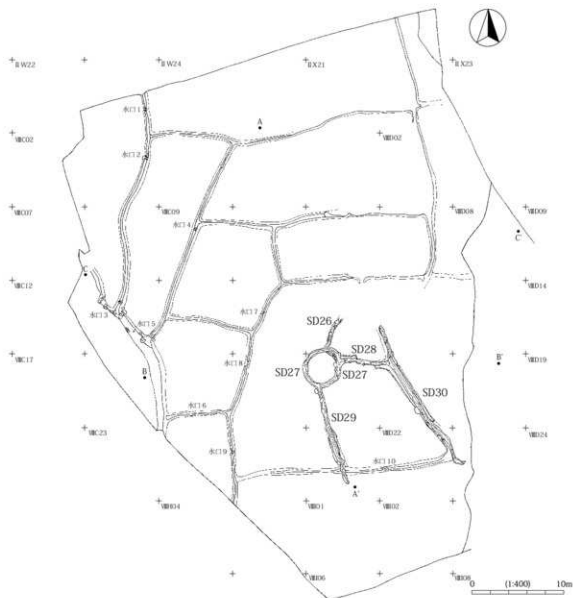


10区2面遺構図1

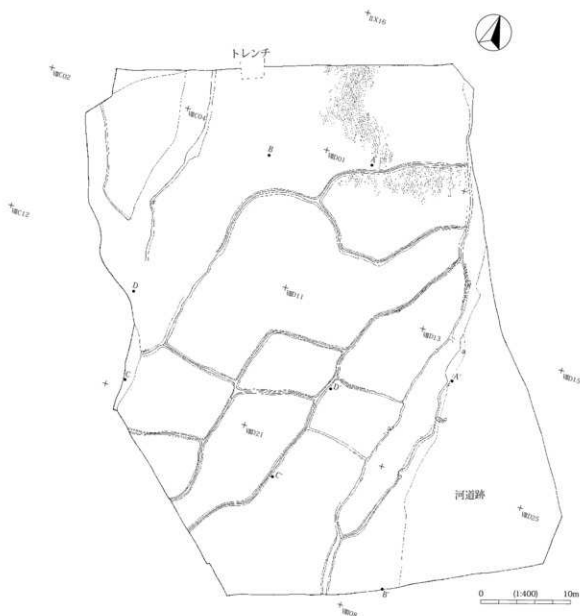


10区2面遺構図2 (原敷地)

图版 340 10区3面遺構図・水口部分図



10区3面遺構図・水口部分図



4面 A-A

- 1 10YR4/1 黄灰色粘土
- 2 10YR4/1 黄灰色粘土 粗砂多
- 3 10YR3/1 黄褐色粘土 粗砂多
- 4 10YR6/1 黄灰色土 ハナドロ
- 5 10YR3/1 黄褐色シルト
- 6 10YR6/4 に近い黄褐色土 砂ブロック

4面 D-D

- 1 10YR4/1 黄灰色粘土 粗砂多
- 2 10YR4/1 黄灰色粘土 粘性強くしまる
- 2a 10YR4/1 黄灰色粘土 全体的にFe 浸透
- 3 2.5Y5/1 黄灰色粘土 粗砂少泥
- 4 10YR6/1 黄灰色土 ハナドロ
- 5 粗砂多+
- 6 10YR4/1 黄灰色土 やや3/1 硬い粗砂少 シルト質の強い粘土

4面 B-B

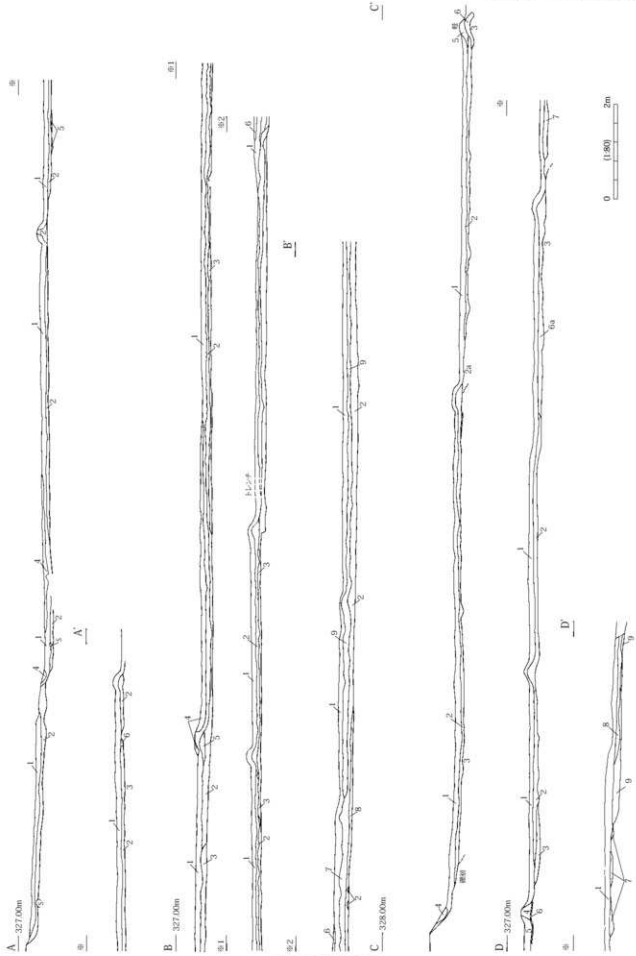
- 1 10YR6/1 黄灰色粘土 粗砂多 還元 粘性強くしまる
- 2 10YR4/1 黄灰色粘土 粘性強くしまる 還元 粗砂1層より少ない
- 3 2.5Y5/1 黄灰色粘土 粗砂少 (2-3層ほどに2.5YR3/1 暗赤黄粘土ブロック Fe 集積層)
- 4 ハナドロ 2.5Y6/1 黄灰色シルト 粘り弱くしまる
- 5 2.5Y4/1 黄灰色土 φ1mm以下の粗砂少
- 6 10YR6/1 黄灰色土 ハナドロ
- 7 10YR6/4 に近い黄褐色土 粗砂 10YR3/1 黄褐色土 シルト凝灰に含む 肥集体的に散る
- 8 10YR6/1 黄灰色土 ハナドロ シルト
- 9 10YR5/1 黄灰色土 粗砂 粗砂層 シルトブロック含む やや粘性あり

4面 C-C

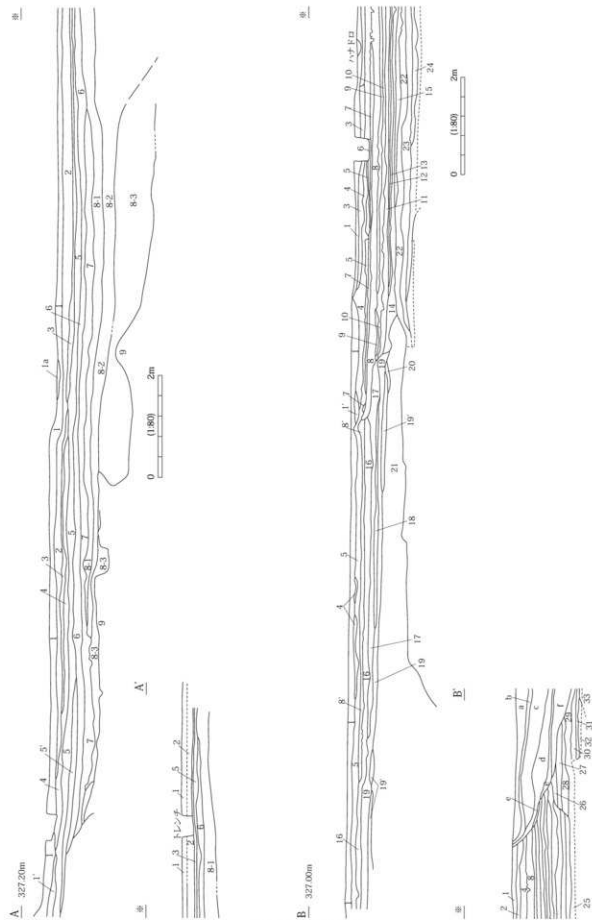
- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 粘性強くしまる 粗砂少
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘土 粘性強くしまる 粗砂含まず
- 3 2.5Y3/1 黄灰色シルト 粗砂含まず 還元
- 4 2.5Y4/1 黄灰色土 粗砂少 Fe 浸灰
- 5 2.5Y4/1 黄灰色土 シルト質強く粗砂少+
- 6 10YR5/2 黄褐色シルト 粗砂含まず 1層還元 10YR3/1 黄褐色シルトよりすくゆる
- 6a 10YR5/2 黄褐色シルト 粗砂含まず 全体的にFe 還元 1層還元 Fe 層
- 7 10YR4/1 黄灰色粘土 還元 10YR6/6 明黄褐色土 φ1-3mm粗砂ブロック含む
- 8 10YR5/1 黄灰色土 粗砂 10YR4/1 黄灰色シルトブロック含む 陶土質 洪水前後の粘土か 還元 全体的にFe 散る
- 9 10YR8/2 灰白色土 粗砂 凝灰に 10YR3/1 黄褐色土 粗砂

10区4面道構図

图版 343 10区4面土层断面图

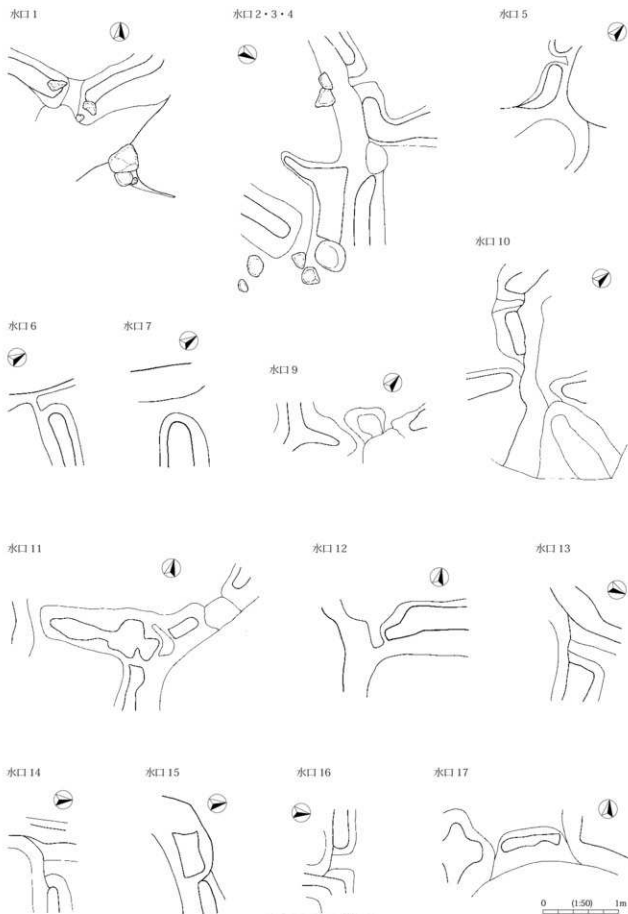


10区4面土层断面图



10区5面土层断面图

图版 346 10区5面水口部分图



10区5面水口部分图

写 真 图 版



1.千田遺跡全景（南東から）中央8区



2.千田遺跡遠景（西方の付佐城跡から）



1. 6区全景（南西から）左端J R飯山線



2. SB02（北西から）



3. SB02 カマド（南東から）



4. SB02 こも編み石出土状況



5. ST03



1. 1～4区全景 左端4区、右端1区



2. 2区第1検出面 遺物出土状況 (北西から)



3. 2・3区 SQ04・05 完掘 (西から)



4. 3区 SQ01 と集中区 (北から)



5. 3区 SQ01 と集中区 (西から)



6. 3区 SQ01 下層の土坑群 (北東から)



7. 3区 SK27 完掘 (南西から)



1. 1～5区全景(北東から)



2. 4区SQ03中央部(東から)



3. 4区SQ03西側ベルト南北断面(東から)



4. 4区SQ03中央部6層面(南から)



5. 4区SQ03 X III E -B05 第1黒色土層遺物集中(南から)



6. 4区SQ03 X III E -B05 ミニチュア土器他(南から)



7. 4区SQ03 X III D-N13・O13 遺物出土状況(北東から)



8. 4区SQ03 X III D-O13 三角埴形土製品出土状況(北東から)



1. 5区全景(上が千曲川側)



2. 5区 ST01



3. 5区 SM01 (北から)



4. 5区 SM02 (北から)



5. 5区 SM04 (北から)



6. 5区 SM05 (北から)



7. 5区 SM07 (北から)



1. 5区 SM08 (南から)



2. 5区 SM14 (北から)



3. 5区 SK891 石崩出土状況 (北東から)



4. 5区 SK669+1238 土器出土状況 (西から)



5. 5区 SK951 土器出土状況 (北から)



6. 7区 SK2036 土器出土状況 (南から)



7. 7区谷地形発生土器出土状況 (北西から)



8. 5区 SB01 (西から)



4区 SQ03-53



SQ03-47



SQ03-69



SQ03-41



SQ03-52



SQ03-46



SQ03-44



4区 SK80-31



SQ03-51



SQ03-67



SQ03-56



4区 SQ03-45



SQ03-54



SQ03-59



SQ03-37



SQ03-38



SQ03-60



4区 SQ03-61



SQ03-48



5区 SM08-213



SQ03-49



5区 SM01-212-2



5区 SK669-210



SM01-212-1



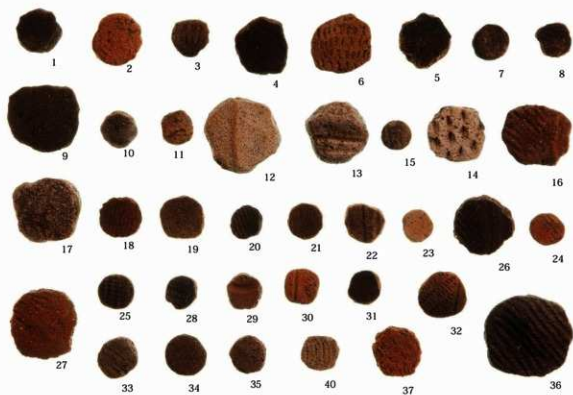
5区 SK1061-211



4区 把手 SQ03: 319・321・325・327, SQ06: 322・324・326, SK80: 323, SK81: 328



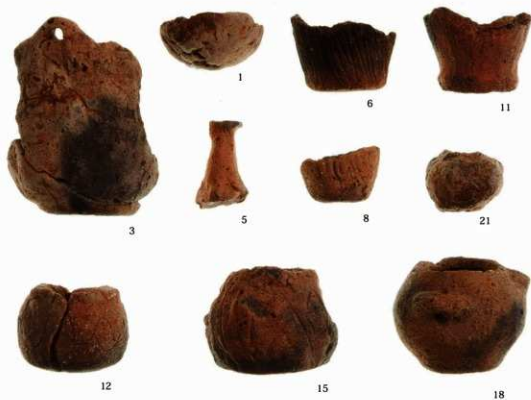
5区 把手・釣手・注口・蓋 SQ01: 330, SQ03: 70・178・331, SQ06: 329・333～336・338, XII C12・17: 332, XIII B15・C11: 337



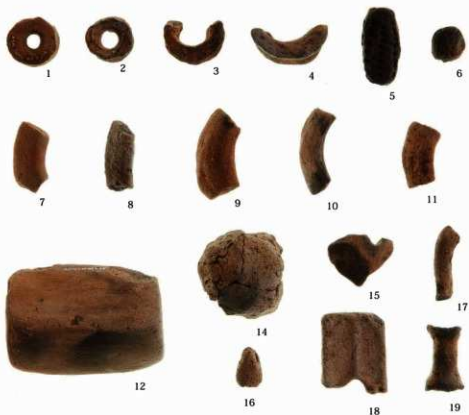
土製円板1 3区SK03: 1, SQ01: 2～9, SQ05: 10・11, XIIIH03: 12・13・15～17, XIII C23: 14, 4区SQ03: 18～37・40



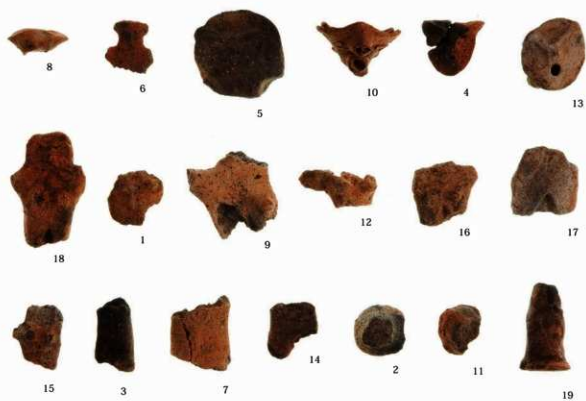
土製円板2 4区SQ03: 38・39・41～44, 5区SQ01: 47, SQ06: 48～66, SK718: 45, SK807: 46, 西端2面: 67, 試掘: 68



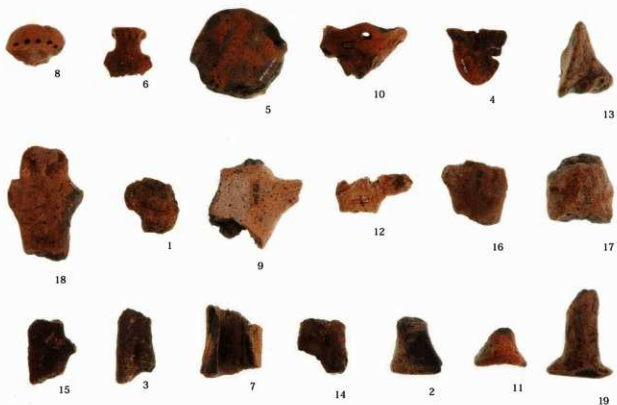
ミニチュア土器 1区XHC04:1, 3区SQ01:3, 4区SQ03:5・6・8・11・12・15, 5区SQ06:21, SK451:18



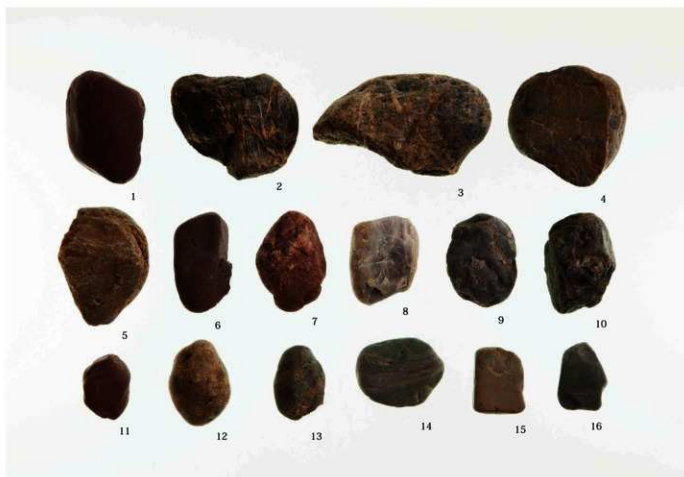
土製品 4区SQ03:1・2・5・6・8・9・12・15・19, XHD15:7, 5区SQ06:3・10・11・17・18, XHG02~04:4, 7区谷:14, 3区SK42:16



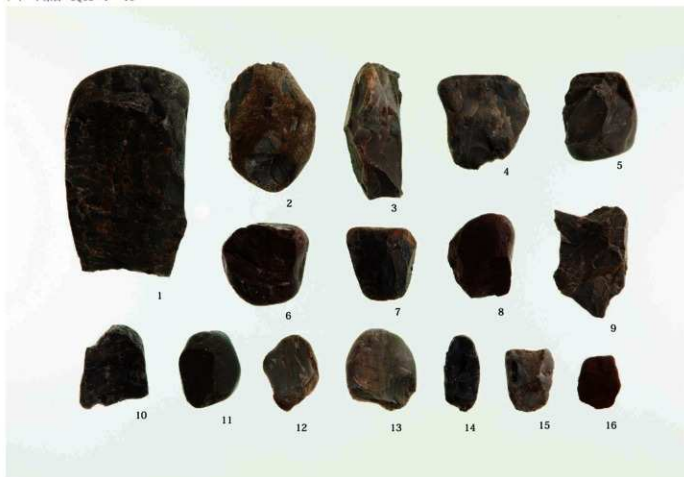
3～5区 土偶 (正面)



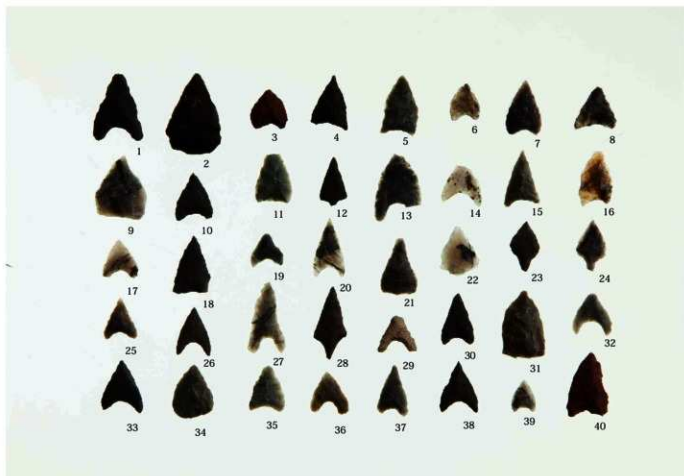
3～5区 土偶 (背面) 3区XIH03:1・2, SQ05:3, 4区SQ03:5～12, SK81:4, 5区SQ06:13・16・17・19, SQ01:14, XHC11:15, XIH11:16:18)



チャート原石 SQ03: 1 ~ 16



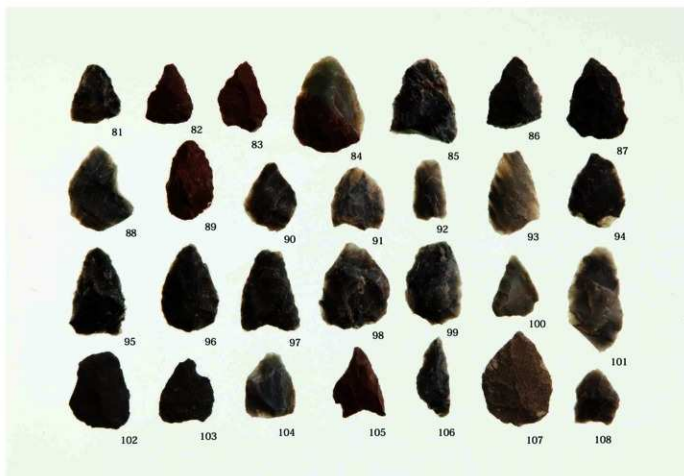
チャート石核 SQ03: 1 ~ 16



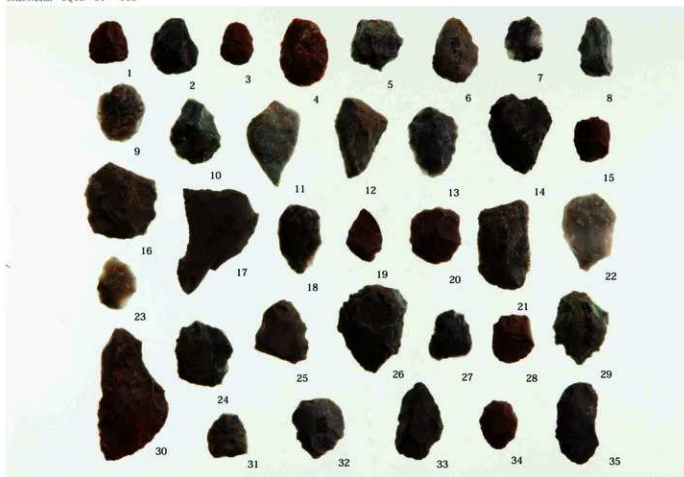
石器1 SQ03:1~40



石器2 SQ03:41~80



石鏃未製品 SQ03: 81 ~ 108



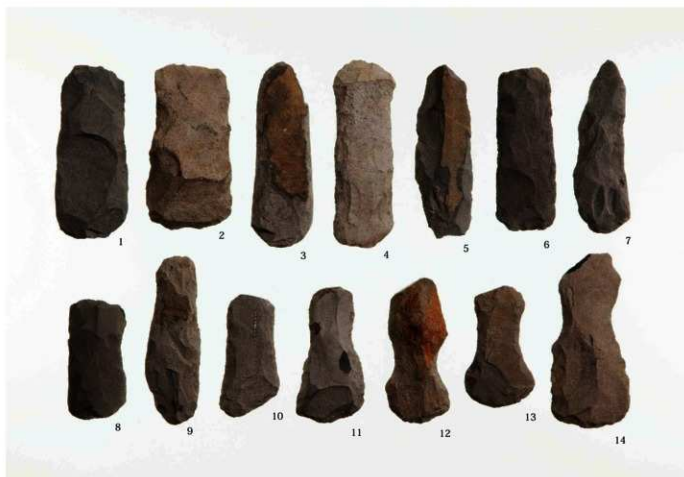
スクレイパー SQ03: 1 ~ 35



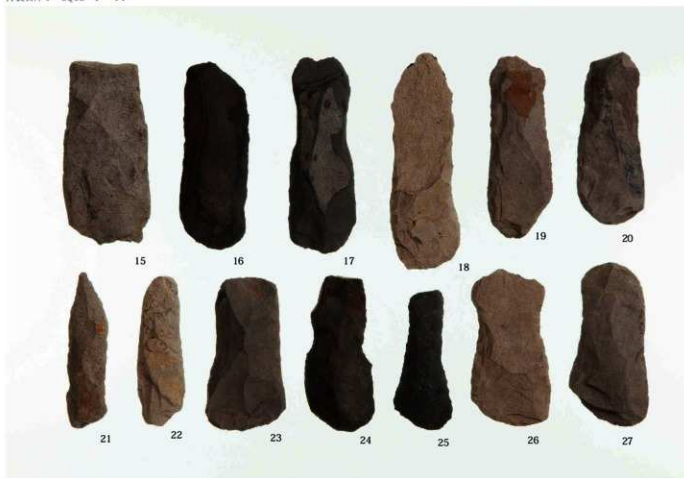
石鏃・尖頭器 SQ03:1~51



磨製石斧・砥石 SQ03:1~11



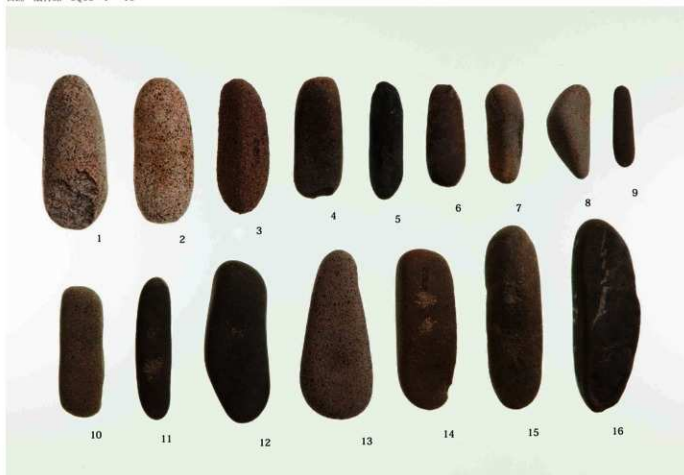
打製石斧1 SQ03: 1~14



打製石斧2 SQ03: 15~27



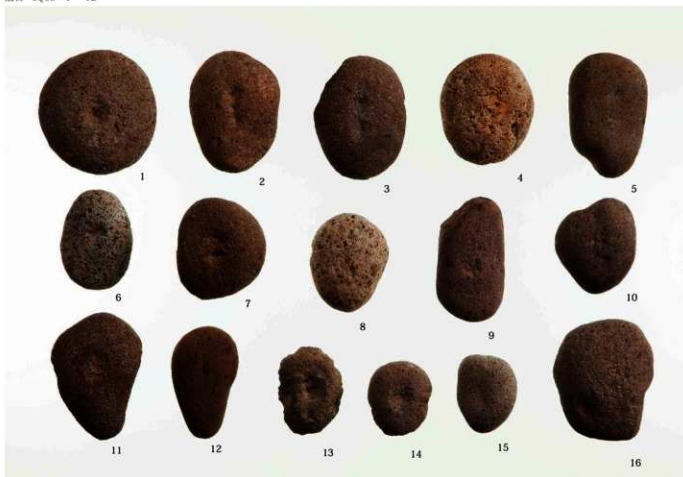
石鏃・敲打鏃 SQ03: 1 ~ 10



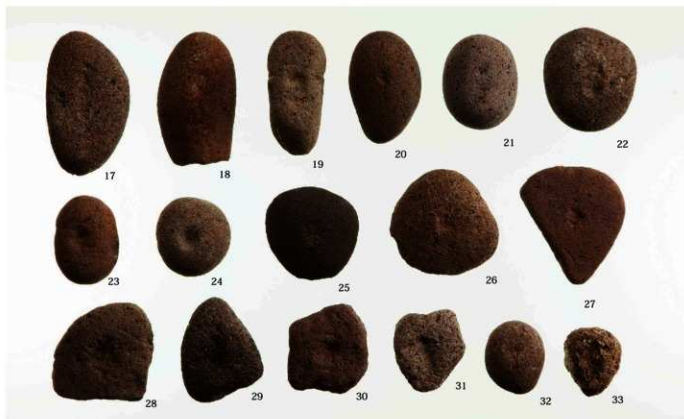
棒状敲石 SQ03: 1 ~ 16



敲石 SQ03: 1~12



磨石1 SQ03: 1~16



磨石2 SQ03:17~33



多孔石 SQ03:1~4



石皿 SQ03:1~3



台石1 SQ03:1~3



台石3 SQ03:4



台石2 SQ03:5~8



台石4 SQ03:9



1. SB07完掘(西から)



2. SB07 炉・埋喪検出状況(北から)



3. SB10完掘(南西から)



4. SB10 炉体土器側面(東から)



5. SB11完掘(西から)



6. SB17完掘(南西から)



7. SB14完掘(南から)



8. SB14炭化材出土状況(南から)



1. SB16完掘(南西から)



2. SB16北東壁前石棒出土状況(南東から)



3. SB19・52完掘(南西から)



4. SB20第1床面完掘(南東から)



5. SB20第2床面・SB69住居跡(左側)完掘(東から)



6. SB20第2床面が・台石・丸石出土状況(東から)



7. SB21完掘(南から)



8. SB21が(東から)



1. Ⅷ R01 ~ 03-06 ~ 08 周辺住居跡群 (東から)



2. SB23 遺物出土状況 (南から)



3. SB22・24 (左上がのみ) 完掘 (南西から)



4. SB22 奥壁ヒット内石器出土状況 (南から)



5. SB25 完掘 (南西から)



6. SB25 が・床直遺物出土状況 (北西から)



7. SB26 敷石・遺物出土状況 (南から)



8. SB26 主体部完掘 (東から)



1. SB27 完掘 (南東から)



2. SB27 遺物出土状況 (南から)



3. SB29 完掘 (南から、上はSK1401 土坑)



4. SB29 埋上下層遺物出土状況 (西から)



5. SB29 炉体上部器面 (西から)



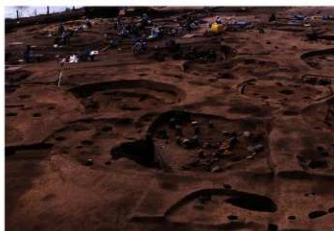
6. SB30 完掘 (南から)



7. SB30 遺物出土状況 (東から)



8. SB30 床直遺物出土状況 (南から)



1. VR R06-07-11・12 周辺住居跡群(北東から)



2. SB31 炉完掘(北から)



3. SB31 埋土中層露出状況(南東から)



4. SB31 埋土中層遺物出土状況(南東から)



5. SB32 完掘(南東から)



6. SB32 炉・遺物(東から)



7. SB34 炉(炉のみ、北から)



8. SB38 炉・石皿(炉のみ、南東から)



1. SR35 完掘 (南西から)



2. SR35 理上中層遺物出土状況 (南西から)



3. SR36 完掘 (東から)



4. SR36 石 (南西から)



5. SR37 完掘 (南から)



6. SR37 石 (南西から)



7. SR37 東西ベルト断面 (南東から)



8. SR37 理上上層遺物出土状況 (南から)



1. SB40 完掘 (南から)



2. SB40 立石・敷石・炉 (南から)



3. SB41 完掘 (南から、右下SK1401土坑平載)



4. SB41 遺物出土状況(1) (南西から)



5. SB41 遺物出土状況(2) (南東から)



6. SB41 遺物出土状況(3) (北東から)



7. SB42 炉 (北から、炉のみ)



8. SB47 完掘 (南から)



1. SB43 完掘 (西から)



2. SB43 炉 (北から)



3. SB44 遺物出土状況 (南から)



4. SB44 炉断面 (南から)



5. SB45 完掘 (南西から)



6. SB67 完掘 (南西から、外側はSB46)



7. SB46 完掘 (南から)



8. SB46 炉 (西から)



1. №Q16～18・21～23周辺住居跡群(西から)



2. №V 01～05周辺住居跡群(北西から)



3. SB51 完掘(南から)



4. SB51 伊¹(北から)



5. №V 06・07・11・12周辺住居跡群(東から)



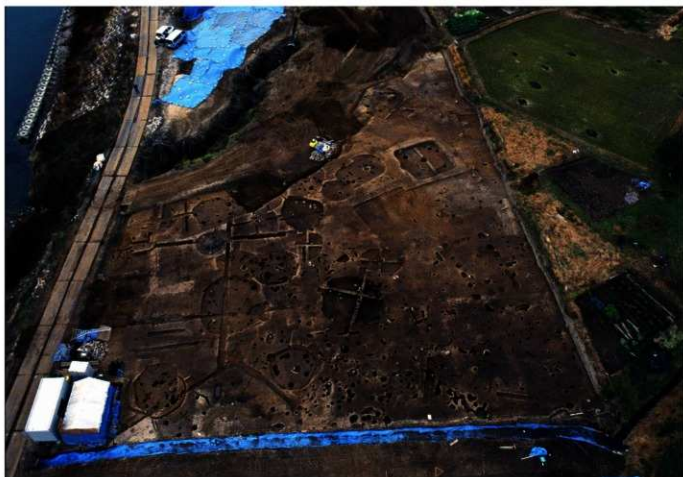
6. SB54 完掘(南東から)



7. SB53 完掘(南東から)



8. SB53 伊¹断面(北東から)



1. 縄文集落南部全景 (北東から、左は千曲川)



2. SB55 完掘 (南西から)



3. SB57 完掘 (南西から)



4. SB58 完掘 (南から)



5. SB59 完掘 (南から)



1. SB60 完掘 (南西から)



2. SB61 完掘 (南から)



3. SB62 完掘 (南から)



4. SB65 完掘 (南東から)



5. SB68 完掘 (南から)



6. SB68 床直遺物・掘出土状況 (南東から)



7. SB68 ビット1埋戻出土状況 (南から)



8. SB66 び1 (西から)



1. VII Q03-04-08-09-13-14 配石遺構群全景



2. VII Q03-04-08-09 配石遺構群 (南西から)



3. SH14-17 (南から)



4. SH16 (南から)



5. SH18 (南西から)



6. SH19 (南東から)



7. SH05 (南から)



8. SH11 (南西から)



1. Ⅷ Q14・15・19・20・23・24 配石遺構群全景



2. SH09 (左)・10 (南から)



3. SH09 (西から)



4. SH10 (北から)



5. SH08 (右)・27 (南から)



6. SH32 (北から)



7. SH03 (東から)



8. SH02 (西から)



9. SH38 上坑 (西から、右は取上げた礎)



1. SK1551・1552 埋設土器側面 (南西から)



2. SK1553 土器埋設状況 (東から)



3. SK1576 埋設土器側面 (南から)



4. SK1750 土器出土状況 (東から)



5. SK1571 土器出土状況 (北から)



6. SK1678 土器出土状況 (北から)



7. SK1660 土器出土状況 (東から)



8. SK1860 土器出土状況 (南西から)



1. SK1522 礫・土器出土状況(西から)



2. SK1559 礫・土器出土状況(北から)



3. SK1569 礫・土器出土状況(南東から)



4. SK1667 礫・土器出土状況(南東から)



5. SK1558 礫・土器出土状況(南東から)



6. SK1793 礫・土器出土状況(南西から)



7. SK1803 礫出土状況(南東から)



8. SK2265 礫出土状況(北から)



1. SK2410 裸出土状況 (南から)



2. SK2408 裸出土状況 (南から)



3. SK1557 黒曜石出土状況 (南西から)



4. SK1401 断面 (東から)



5. SK1560 遺物出土状況 (南東から)



6. SK1752 裸出土状況 (南から)



7. SK1700 裸出土状況 (西から)



8. SH07 裸出土状況 (南から)



1. 縄文中央部遺物・礎出土状況(南から)



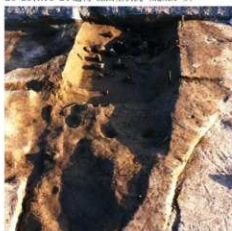
2. Ⅶ Q19・20・25, R16・21 遺物・礎出土状況(南から)



3. Ⅶ Q19・20・25, R16・21 遺物・礎出土状況(北東から)



4. Ⅶ Q16 土器・礎出土状況近景(東から)



5. 流路跡(SB15) 遺物出土状況(北東から)



6. Ⅶ Q 東傾斜地東西ベルト断面(南東から)



7. 9区 SH33・34 (南東から)



8. 9区 SK1764 土器側面(北西から)



SB07-2



SB10-6



SB10-8



SB07-3



SB10-10



SB10-11



SB10-9



SB14-19



SB14-15



SB14-18



SB14-16



SB14-17

SB14-22



SB14-20



SB14-21



SB16-27



SB16-30



SB16-34



SB16-31



SB16-28



SB19-37



SB19-36



SB19-41



SB19-35



SB19-39



SB19-38



SB20-46



SB20-45



SB20-47



SB21-50



SB21-49



SB21-48



SB21-52



SB21-53



SB22-55



SB22-57



SB22-54



SB23 62



SB23 59



SB23 60



SB23 63



SB25 68



SB25 71



SB25 70



SB25 72



SB25 73



SB25 79



SB25 69



SB25 77



SB26-81



SB27-85



SB27-82



SB27-88



SB27-84



SB27-89



SB29-98



SB29-101



SB29-100



SB29-102



SB29-90



SB29-93



SB30-107



SB30-105



SB29-92



SB29-95



SB30-106



SB29-94



SB29-91



SB30-109



SB30-112



SB30-115



SB30-104



SB30-114



SB31-120



SB31-121



SB31-123



SB31-124



SB31-122



SB31-137



SB31-138



SB31-125



SB31-134



SB31-133



SB31-126



SB31-131



SB31-130



SB31-127



SB31-132



SB32-140



SB34-141



SB35-154



SB35-156



SB35-145



SB35-144



SB35-153



SB35-143



SB35-142



SB35-149



SB35-148



SB35-155



SB35-150



SB35-157



SB35-152



SB35-147



SB36-158



SB35-151



SB37-167



SB37-165



SB37-164



SB37-169



SB37-160



SB37-175



SB37-177



SB37-176



SB37-172



SB37-150



SB37-166



SB37-161



SB37-163



SB37-173



SB37-182



SB37-170



SB37-168



SB37-184



SB37-189



SB37-188



SB40-192



SB40-193



SB41-206



SB41-205



SB41-201



SB41-200



SB41-203



SB41-199



SB41-202



SB41-197



SB41-198



SB41-204



SB41-196



SB41-218



SB41-209



SB41-207



SB41-211



SB41-210



SB41-212



SB41-214



SB41-217



SB41-215



SB43-222



SB44-225



SB44-224



SB44-223



SB44-230



SB44-227



SB44-229



SB46-234



SB46-246



SB53-233



SB46-231

SB53-244



SB53-245



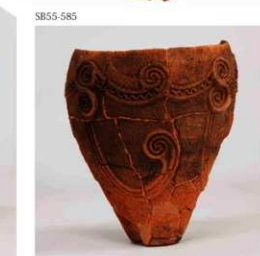
SB55-585



SB53-242



SB54-249



SB54-248



SB55-251



SB55-250



SB57-253



SB59-254



SB59-255



SB61-256



SB68-265



SB68-258



SB68-261



SB68-271



SB68-267



SB68-276



SB68-264



SB68-268



SB68-275



SB69-281



SB69-282



SB69-280



SQ11-309



SQ14-310



SK1401-285



SK1401-286



SK1553-295



SK1552-293



SK1558-294



SK1551-292



SK1522-291



SK1560-297



SK1570-300



SK1660-302



SK1559-296



SK1678-303



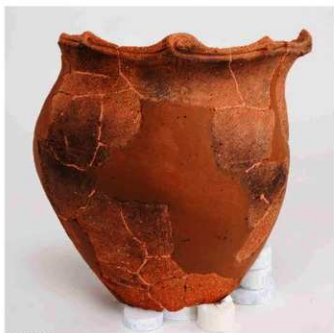
SK1750-304



SK1860-305



SK1571-301



Ⅷ Q24-315



Ⅷ Q25-330



Ⅷ Q24・25-316



Ⅷ Q24・25-317



Ⅷ Q25-320



Ⅷ Q25-326



Ⅷ Q25-322



Ⅷ Q25-328



Ⅷ Q25-325



Ⅷ Q25-324



Ⅷ R 1-3・6-8-333



Ⅷ R11-335



Ⅷ R11-334



Ⅷ R16-346



Ⅷ R16-339



Ⅷ R16-338



Ⅷ R16-345



Ⅷ R16-337



Ⅷ R17-347



VII R17-348



VII R17-349



VII R17-351



VII R21-354



VII R21-867



VII V04-360



VII V05-362



VII V05-361



VII R21-355



東傾斜面-369



東傾斜面-371



8区 東傾斜面-370



東傾斜面-368



東傾斜面-367



8区 流路跡(SB15)-363



流路跡(SB15)-365



9区 SK1764-917



9区 SH34-921



9区 SH34-920



9区 SH34-919



9区 922



把手1 (中剛後葉) SB37: 937 ~ 946



把手2 (中剛後葉) SB22: 424, SB30: 444・947・948, SB31: 949 ~ 951, SB40: 952, SB41: 953, SB46: 954, SB68: 658・955



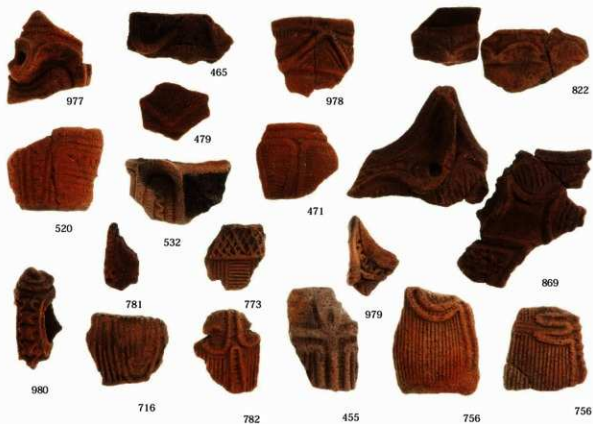
把手3 (中剛後葉) VII Q13 : 957・963, VII Q22 : 961, VII Q23 : 757, VII R07 : 956・962, VII R11 : 964, VII R17 : 960, VII R21 : 958・959



把手 (突起) 4 (中剛中葉) SB16 : 387, SB35 : 965 ~ 968, SH11 : 711, VII Q25 : 768, VII R16 : 970, VII R17 : 971, VII R20 : 866, VII R25 : 765・969



把手5 (火輪型・王冠型) SB06: 973, SB16: 385, SB19: 404, SB35: 146・976, SB37: 496, SB45: 540, VII Q25: 794・795, VII R13: 818, VII R17: 62, VII R22: 972, VII V04: 975, VII V05: 905, 東傾斜面: 974



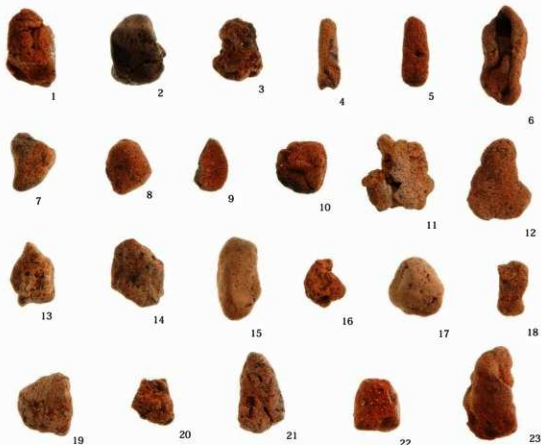
把手6 (中葉・中南信系) SB30: 455, SB35: 465・471・977, SB36: 479, SB43: 520, SB44: 532, SB46: 978, SH28: 716, VII Q22: 756, VII Q22: 756, VII Q25: 773・781・782・979, VII R16: 822, VII R21: 869, VII W01: 980



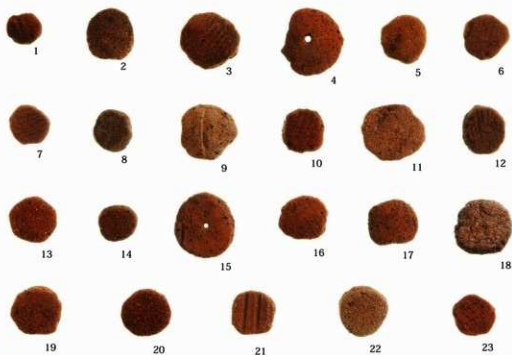
浅鉢形土器 SB19 : 405・406, SB30 : 457・983, SB54 : 40, VII Q20 : 748, VIII R11 : 810, VIII R16 : 844・981・982, VIII R21 : 878・885



釣手土器、人面装飾 SB16 : 390, SB41・SK1401 : 219, VII Q18 : 739, VII Q25 : 796, VIII R16 : 830, VIII R17 : 858・861・863, VIII R21 : 886・887
4区 SQ03 : 339



焼成粘土塊 SB10: 1, SB22: 2, SB30: 3・4, SB37: 5・9・10, SB68: 6~8・18, SB41: 11・12, SB58: 13・22, SK1430: 14, SK2375: 15~17, SB44: 19・20, SB45: 21, SB32: 23)



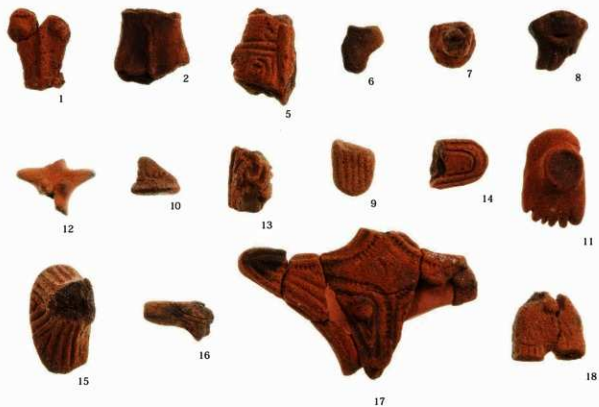
土製円板 SB07: 1, SB12: 2・3, SB35: 4~6, SB40: 7, SB44: 8, SB68: 9~11, SH19: 12, SK1846: 13, VII P10: 14, VII Q13・14・18・19: 15, VII Q14: 16, VII Q20: 17, VII Q25: 18・19, VII R16: 20, VII R21: 21・22, VII R22: 23)



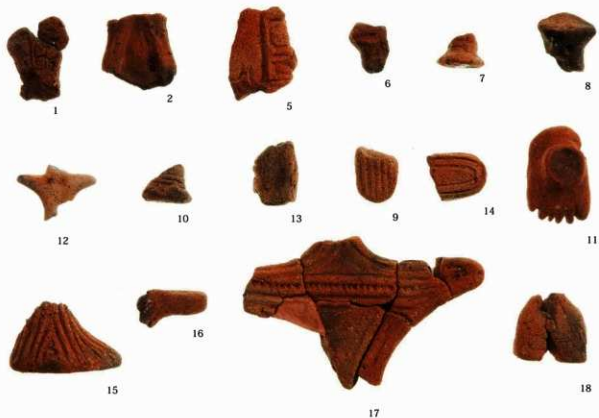
ミニチュア土器 SB11: 2, SB25: 9, SB30: 12, SB31: 13・14, SB41: 21～24, SB46: 25, SB68: 28, VII R01・02: 41, VII R17: 42



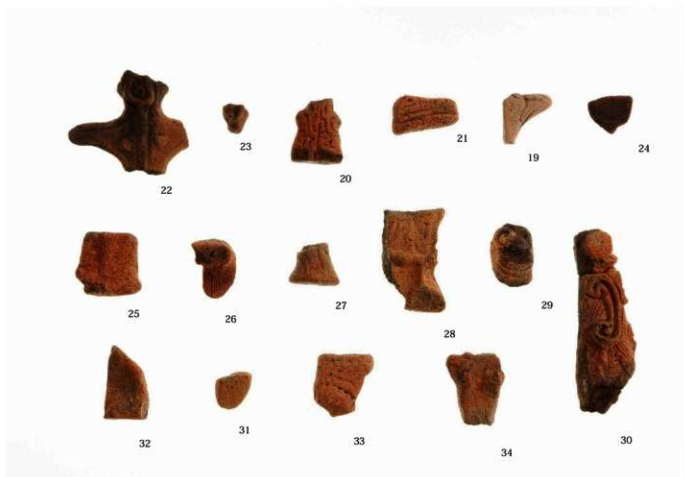
土製品 SB20: 1, SB21: 2, SB30: 3・10, SB32: 11, SB37: 4, SB41: 5・6, SB67: 7・13, SB68: 8・12, VII Q03: 9, VII Q20: 19, VII Q24: 17, VII R03: 14, VII R16: 15, VII R21: 16, 4区 SQ03: 13



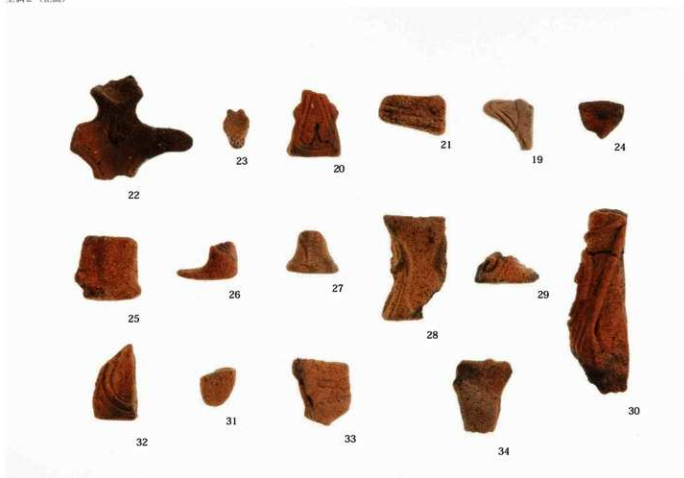
上例1 (正面)



上例1 (背面) SB07:1, SB10:2, SB20:5, SB25:6, SB27:7, SB29:8, SB30:9~13, SB31:14, SB34:16, SB35:17, SB36:18, SB57:15



上佩2 (正面)



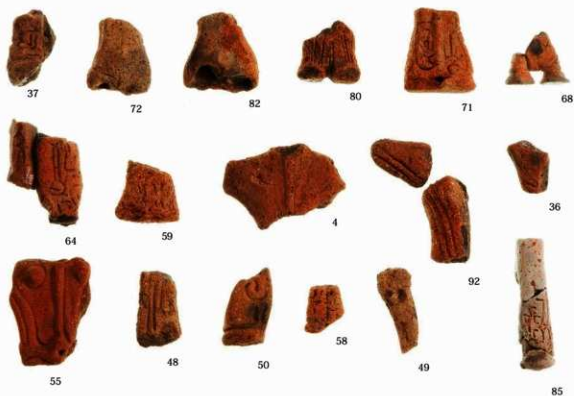
上佩2 (背面) SB37 : 19 ~ 23, SB40 : 24・25, SB41 : 26, SB43 : 27, SB58 : 28 ~ 30, SB68 : 31・32, SH04 : 33, SK1494 : 34



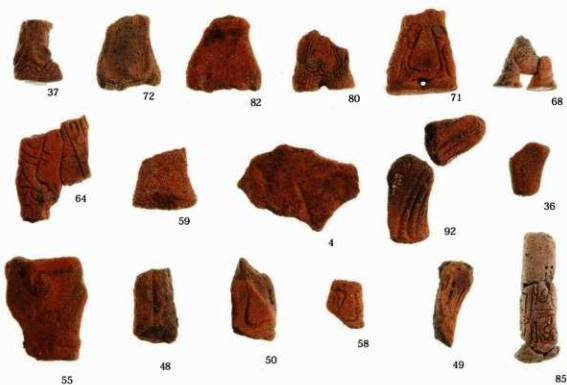
上例3 (正面)



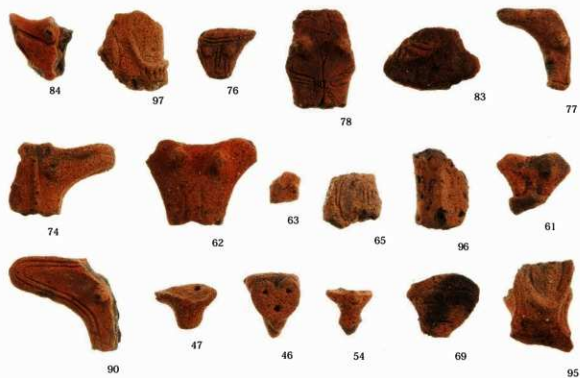
上例3 (背面) VII P13 : 88・89, VII Q08 : 40, VII Q09 : 35, VII Q14・15・19・20 : 41, VII Q18 : 44, VII Q23 : 56, VII R12 : 79, VII R17 : 73, VII V02 : 67, 東傾斜面 : 98



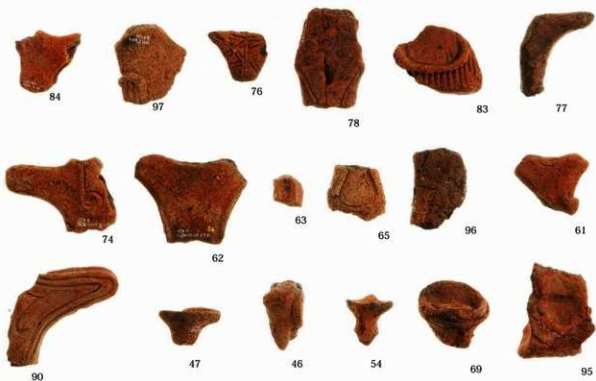
上例4 (正面)



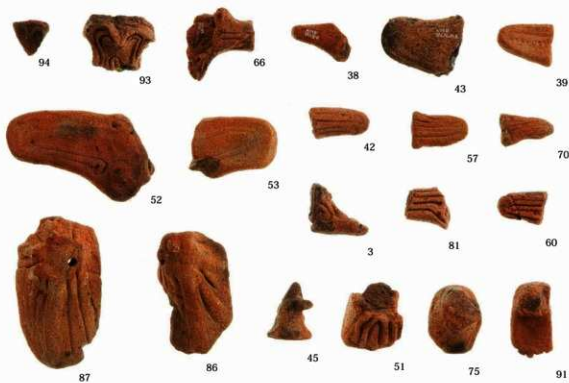
上例4 (背面) SB13: 4、Ⅷ Q03: 36、Ⅷ Q18・19・23: 37、Ⅷ Q22: 48・55、Ⅷ Q24: 50、Ⅷ Q25: 49・58・85、Ⅷ R11: 72、Ⅷ R16: 71・80・82、Ⅷ R21: 64・68、Ⅷ V02: 59、東傾斜面: 92



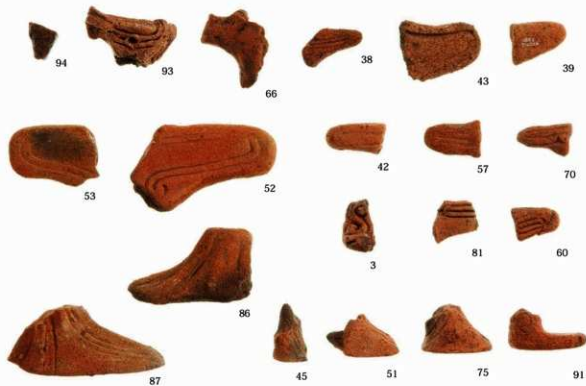
上例5 (正面)



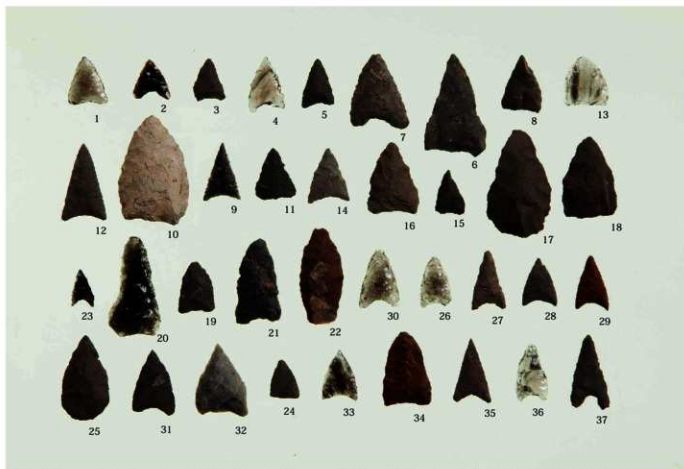
上例5 (背面) ⅧQ18:47、ⅧQ19:46、ⅧQ21:54、ⅧQ・R:84、ⅧR03・04:97、ⅧR11:76、ⅧR12:77・78・83、ⅧR13:74、ⅧR16:69、ⅧR17:62、ⅧR21:63、ⅧR22:65、ⅧV03:95、ⅧV04:61・96、ⅧW02:90



上例6 (正面)



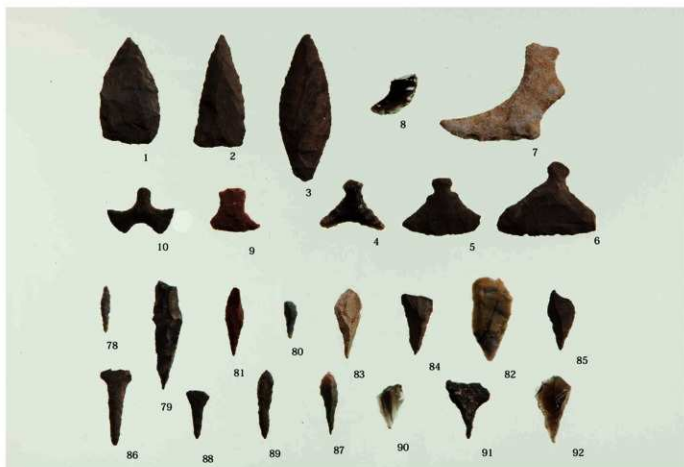
上例6 (背面) SB12: 3, VII Q13: 38, VII Q14: 43, VII Q20: 39・42・45・51・53, VII Q23: 86, VII Q24: 87, VII Q25: 57・81, VII Q28 (?): 75, VII R16: 60・66・70, VII V05: 52・94, VII V08: 93, VII W01: 91



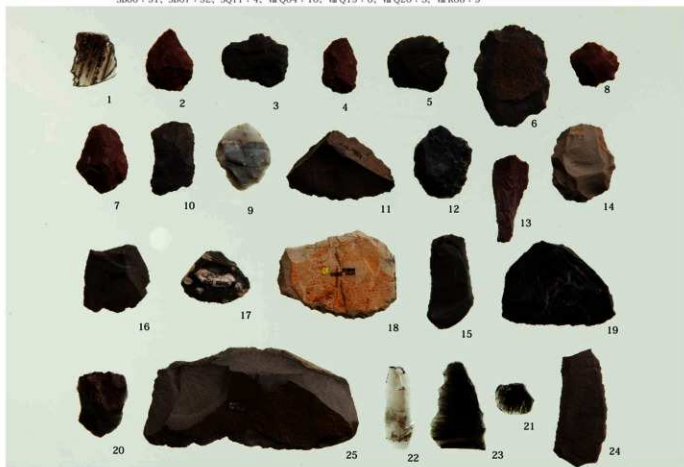
石器1 SB07: 1~3, SB14: 4, SB16: 5~7, SB20: 8, SB22: 9~13, SB23: 14, SB25: 15・16, SB27: 17, SB29: 18, SB30: 19~23, SB31: 24~32, SB35: 33~35, SB37: 36・37



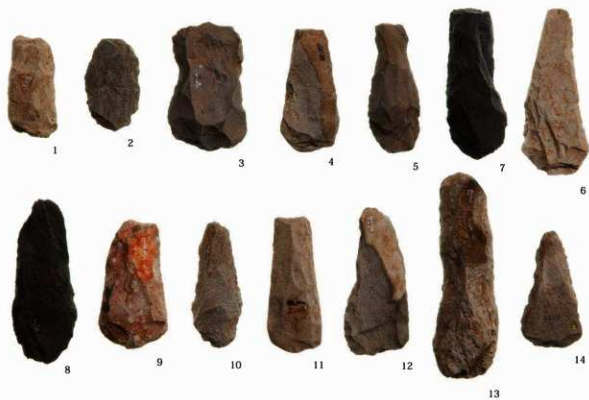
石器2 SB37: 38~42, SB41: 43~47, SB55: 48・49, SB57: 50, SB58: 51, SB61: 52, SB62: 53, SB66: 54, SB67: 55・56, SB68: 57~60, SB69: 61・62, SK1509: 63, SK1557: 64, SK1826: 65, SK2375: 66, Ⅷ Q09: 68, Ⅷ Q19: 67, Ⅷ Q24: 70, Ⅷ Q25: 69・71・72, Ⅷ R11: 73・76, Ⅷ R12: 74, Ⅷ R16: 75・77



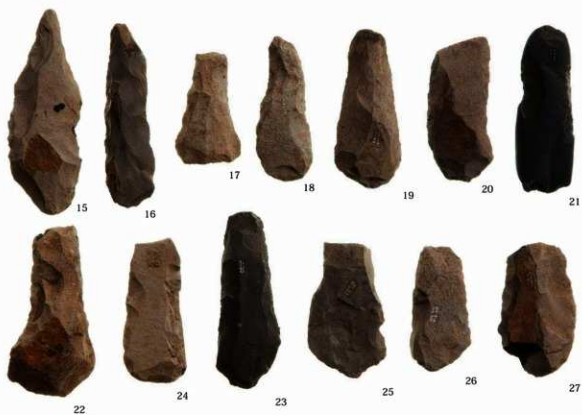
尖頭器・石匙・石鏃ほか SB12:7, SB20:3・8・78, SB22:79, SB30:80~85, SB31:85, SB36:86, SB37:1・87~89, SB38:5, SB44:90, SB51:2, SB66:91, SB67:92, SQ11:4, VII Q04:10, VII Q19:6, VII Q20:3, VII R08:9



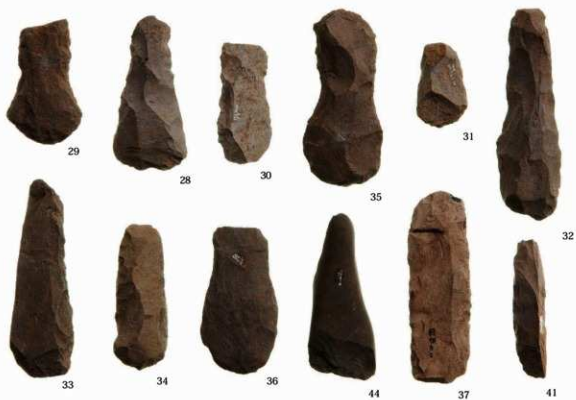
スクレイパー SB16:1, SB20:2, SB21:3, SB22:4, SB23:5, SB30:6, SB31:7・8, SB37:9・10, SB40:11, SB41:12, SB45:13, SB46:14, SB55:16~18, SB56:15, SB65:19, SB68:20, SK1616:25, VII Q09:22, VII Q20:23, VII R16:21, VII R21:24



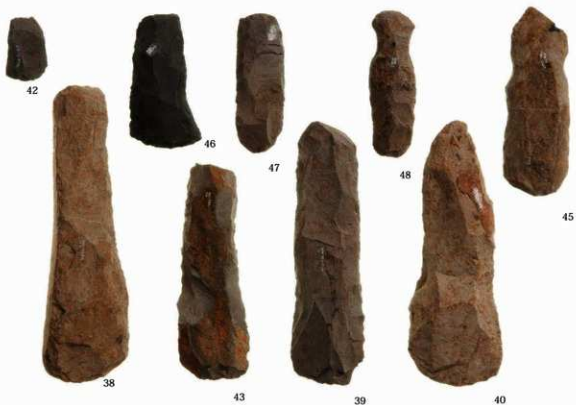
打製石斧1 SB07: 1, SB16: 2, SB19: 3, SB20: 4, SB21: 5, SB27: 6~8, SB30: 9~11, SB31: 12, SB35: 13, SB37: 14



打製石斧2 SB37: 15, SB39: 16, SB40: 17, SB41: 18・19, SB44: 20, SB55: 21・22, SB68: 23~27



打製石斧 3 SB06 : 35, SB68 : 28 ~ 30, SK1560 : 31, SK2163 : 32, SK2415 : 33, SK2433 : 34, VII Q02 : 37, VII Q10 : 36, VII Q18 : 44, VII Q19 : 41



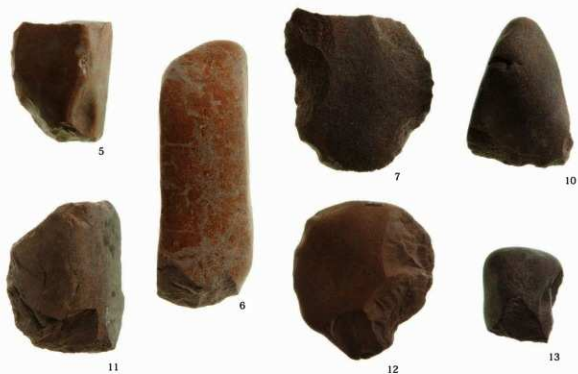
打製石斧 4 VII Q09 : 38, VII Q10 : 43, VII Q17 : 39, VII Q18 : 40, VII Q22 : 45, VII Q23 : 42, VII R09 : 46, VII R11 : 47, VII V03 : 48



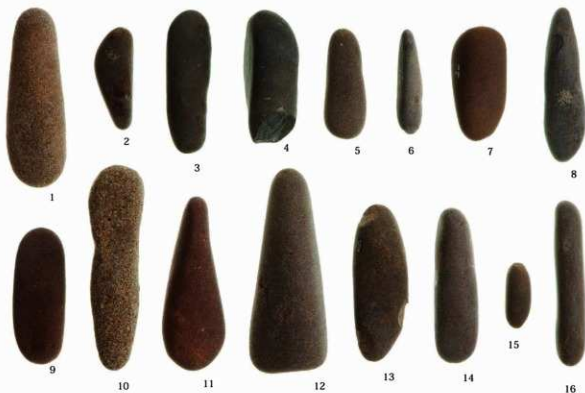
磨製石斧 1 SB07 : 1, SB10 : 2, SB16 : 3, SB20 : 4・5, SB21 : 6, SB22 : 7・8, SB25 : 9, SB29 : 10, SB30 : 11, SB31 : 12 ~ 15



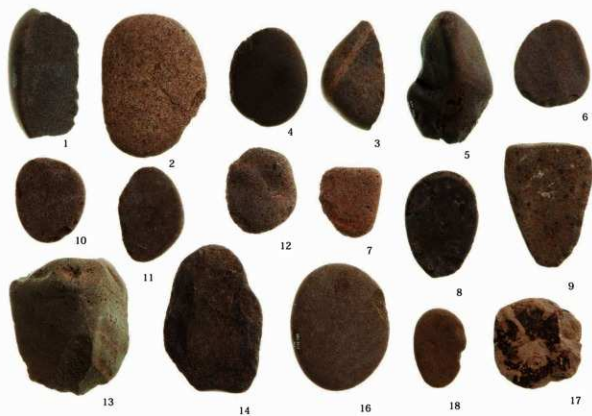
磨製石斧 2 SB37 : 16・17, SB38 : 18, SB44 : 19, SB46 : 20, SB55 : 21・22, SB57 : 23, SB68 : 24 ~ 30



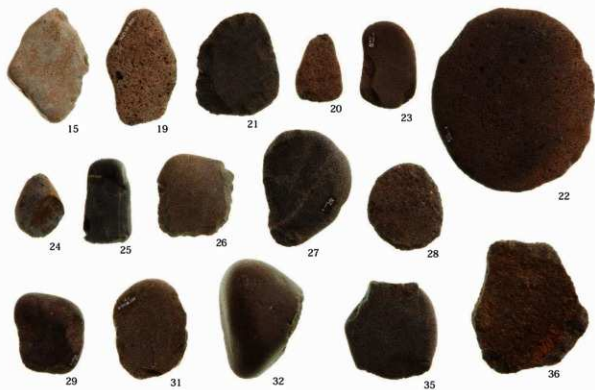
礮器 SB20 : 5, SB37 : 6, SB46 : 7, VII Q24 : 10・11, VII R09 : 12, VII V05 : 13



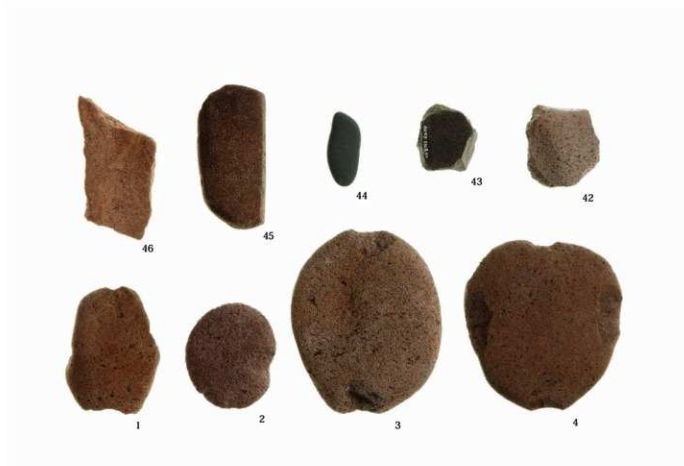
棒状敲石 SB20 : 1, SB22 : 2, SB26 : 3, SB29 : 4, SB30 : 5, SB37 : 6, SB41 : 7, SB61 : 8, SB68 : 9・10, SK1560 : 11, VII P13 : 12, VII Q20 : 13・14, VII R06 : 15, VII R16 : 16



最打礫1 SB07:1・2, SB27:3・4, SB30:5, SB31:6・7~9, SB37:10・11, SB41:12, SB43:13, SB44:14, SB68:16~18



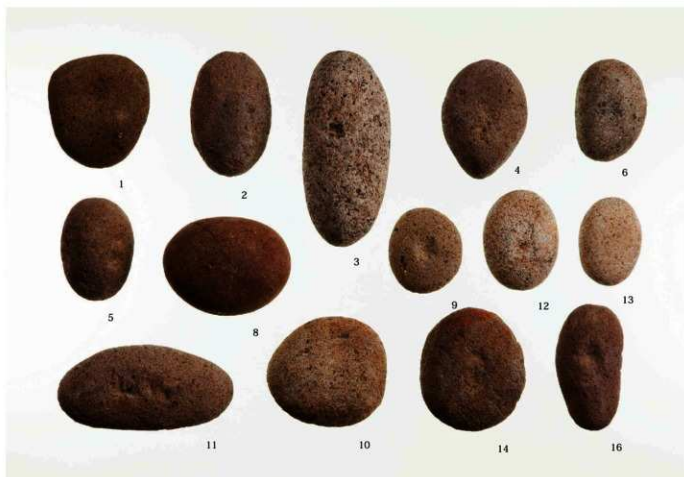
最打礫2 SB68:15, SH09:20, SK2375:19, VII P12:21, VII Q08:22, VII Q16:23, VII Q23:24, VII Q24:25・26, VII Q25:27・28, VII R11:29, VII R16:31・32, VII V02:35・36



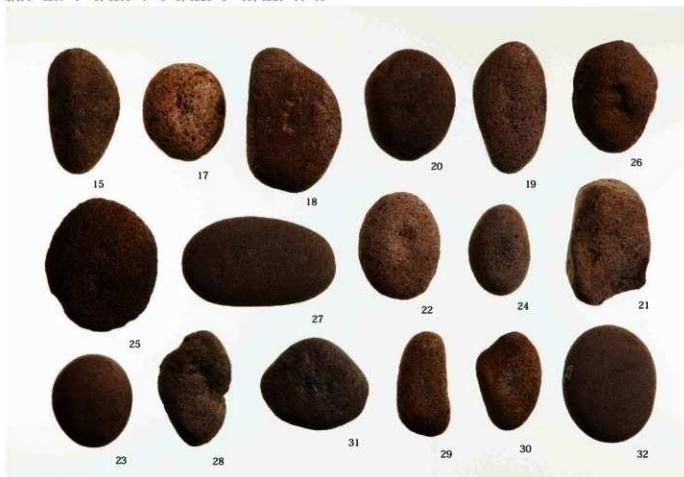
板状石器・石錘・砥石(1)・研磨盤 SB07:1、SB26:45、SB41:2、東傾斜面:43、NR101:3、ⅧQ24:42、ⅧQ25:46、ⅧR16:44、ⅧR17:4



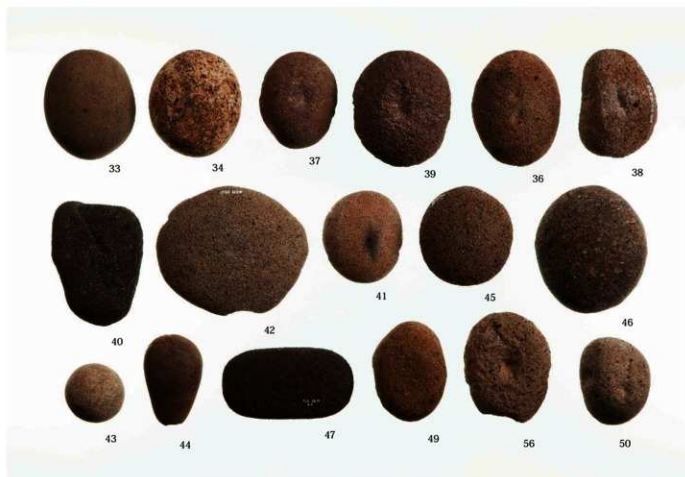
砥石(2) SB07:47、SH18:48、ⅧR12:50、ⅧW20:49



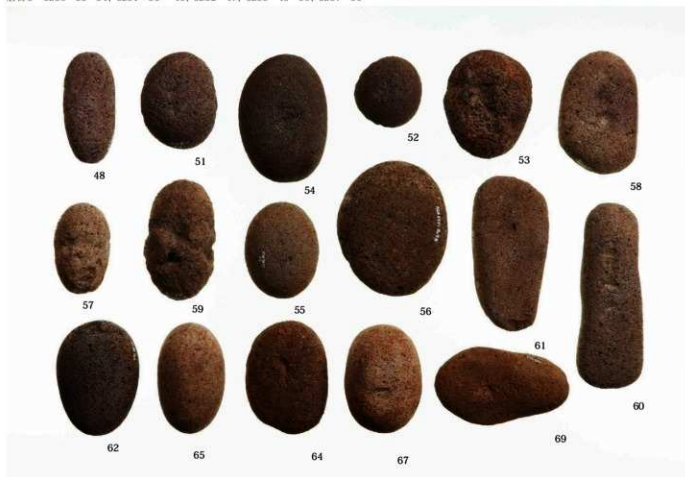
磨石1 SB07: 1~3, SB16: 4~6・8, SB20: 9~13, SB21: 14・16



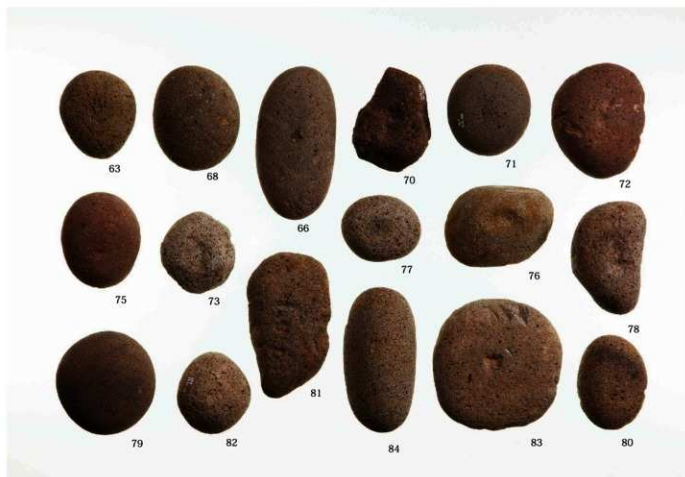
磨石2 SB21: 15, SB22: 17~20, SB26: 25~27, SB27: 21~24, SB29: 28, SB30: 29~32



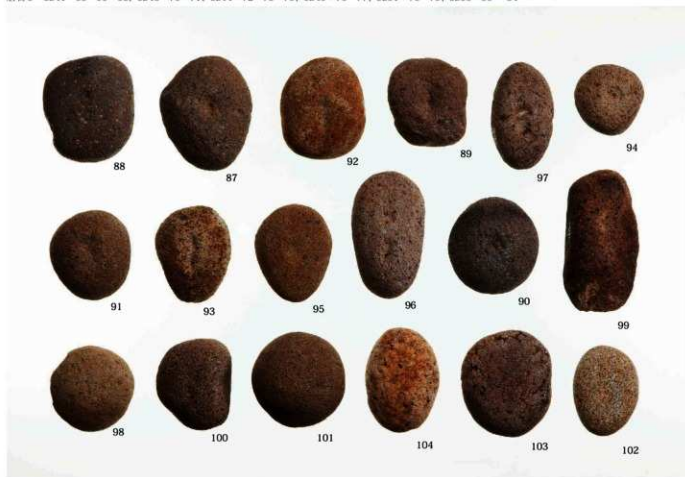
磨石3 SB30 : 33・34, SB31 : 36～46, SB32 : 47, SB35 : 49・50, SB37 : 56



磨石4 SB35 : 48, SB37 : 51～59, SB39 : 60, SB40 : 61・62・65, SB41 : 64・67・69



磨石5 SB41: 63・66・68, SB43: 70・71, SB44: 72・73・75, SB46: 76・77, SB51: 78・79, SB55: 80～84



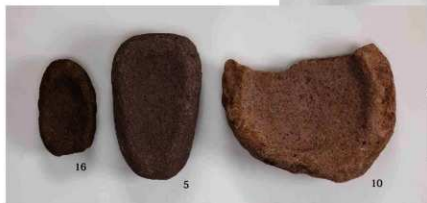
磨石6 SB68: 87～104



石皿1 SB16 : 1, SB19 : 2, SB25 : 3, SB27 : 4



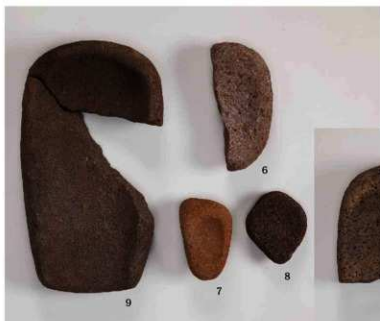
石皿2 SB31 : 13・14



石皿3 SB29 : 5, SB36 : 16, SB44 : 10



石皿4 VII Q20 : 31, VII R06 : 25, VII R11 : 27, VII R11 : 21



石皿5 SB35 : 6 ~ 8, SB35・SB38 : 9



石皿6 SB58 : 11, SK2182 : 17, SK2268 : 18, VIII Q25 : 23・24



石皿7 SH32 : 33



石皿8 VIII Q20 : 30



台石1 SB07:1・2, SB31:3・4



台石2 SB37:5, SB40:7, SB44:6



台石3 SH24:11, SK1596:10, SK2265:12



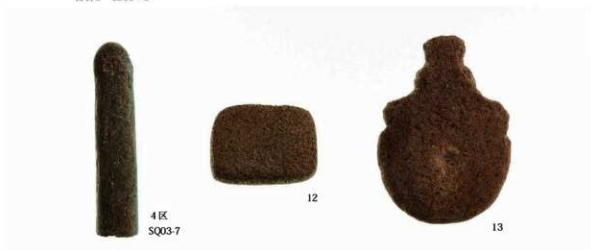
台石4 東傾斜面：13、Ⅷ R16：14・15



台石6 Ⅷ Q24：9



台石5 SB69：8



石製品2 4区SQ03：7、SB30：12、SB37：13



多孔石1 SB07:1・2, SB16:3, SB22:4



多孔石2 SB26:5, SB31:7・8



多孔石3 SB35:9, SB37:10・11, SB46:6, SB61:12



多孔石4 SH11:16, SK1634:13, SK1658:14, SK2265:15, W Q19:27:18



石棒 SB20:1, SH09:4, VII Q24:5, VIII R16:6



丸石 SB20:7, SB26:8, SB40:9, SH13:10



3～5・8区 石製品 3区SQ01:4, XIIC23:6, 4区SQ03:1～3, 5区SQ01:5, 8区SB05:8, VII Q13:9, VII Q14:15:11, VIII R14:10



1. 弥生・古墳面西半部全景 (上が北)



2. 弥生・古墳面東半部全景 (上が北)



3. SB05 完掘 (南東から)



4. SB06 完掘 (南西から)



5. SB08 完掘 (南東から)



6. SB09 完掘 (南から)



7. SB12 遺物出土状況 (南から)



8. SB12 遺物出土状況近景 (西から)



1. 9区全景 (北から、上は千曲川、右は8区)



2. 9区 SB63 (左)・64 (やや西から)



3. 9区 SK1755 土器出土状況 (南から)



4. 8区 SB04 完掘 (南西から)



5. SB04 カマド礎出土状況 (南東から)



6. SB04 カマド芯材・ミニチュア土器 (西から)



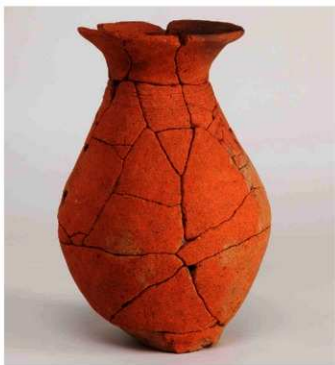
7. SB04 床面石礎出土状況 (北から)



8. 8区 SB13 土器・石礎出土状況 (西から)



SB03-1



SB05-2



SB05-3



SB06-5



SB06-13



SB06-7



SB06-10



SB06-12



SB08-15



SB08-16



SB12-29



SB08-17



SB08-18



SB12-27



SB12-26



SB12-34



SB12-24



SB12-25



SB12-30



SB12-31



SB12-28



SB12-32



SB12-47



SB12-48



SB12-45



SB12-38



SB12-42



SB12-22



SB12-36



SB12-43



SB12-41



SB12-46



SB12-49



SB12-44



SB12-40



SB12-37



SB12-51



SB12-56



SB12-50



SB12-35



SB12-53



SB63-60



SB63-58



SB63-59



SB63-61



SB63-62



SB64-64



SB64-65



SK1775-66



SK1775-67



7区 WY23-314



7区 WY23-312



7区 WY23-315



8区 弥生時代石器1 SB06:9・11・12、SB08:10・13



8区 弥生時代石器2 SB06:1、SB08:2~4、SB12:5~7、SK1401:8



8・12区 土・石製品 8区SB03:10、SB08:14、SB12:15、12区SB77:8、試掘6トレンチ:9



5区 SB01-316



5区 SB01-317



6区 SQ08-48



8区 SB04-2



8区 SB04-6



6区 SB02-45



6区 SK1260-43



8区 SB04-4



8区 SB13-9



6区 SB02-41



6区 SB02-42



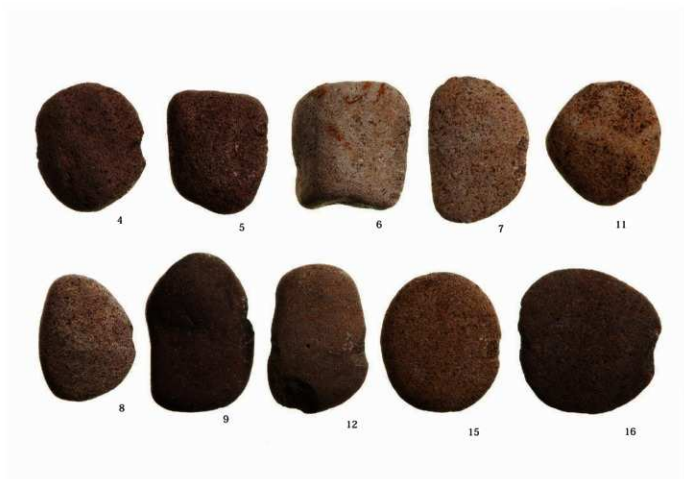
8区 SB04-1



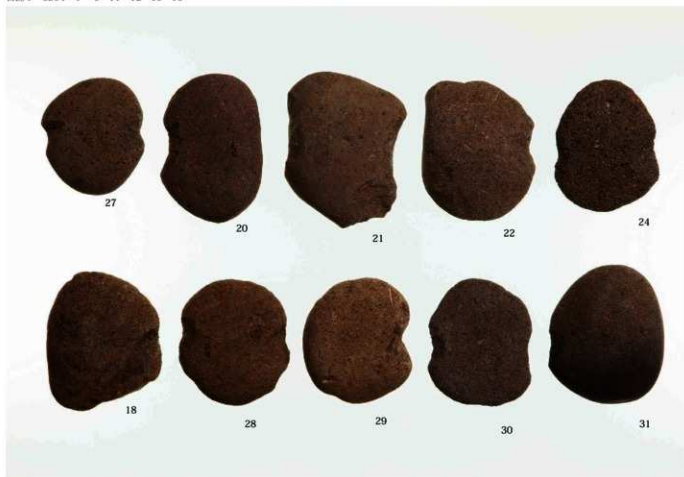
8区 SB04-3



8区 SB18-12



石罫1 SB04 : 4 ~ 9・11・12・15・16



石罫2 SB13 : 18・20 ~ 22・24・27 ~ 31



1. 12区全景(北東から、手前は斑尾川、右は宮崎駅)



2. 12区古墳面全景(左下は10区)



3. SB88完掘(北から)



4. SB82竪・遺物出土状況(南東から)



5. SB72完掘(南東から、床割後柱穴検出)



6. SB72カマ下周辺遺物・礎出土状況(南東から)



7. SB74完掘(南東から、床割後柱穴検出)



8. SB77完掘(北から)



1. SB77 礎・遺物出土状況 (西から)



2. SB77 カマド遺物出土状況 (南から)



3. SB78 完掘 (北から)



4. SB78 カマド付近遺物出土状況 (南から)



5. SB79 完掘 (西から)



6. SB80 完掘 (南から)



7. SB86 完掘 (東から)



8. SB86 カマド遺物出土状況 (東から)



1. SB87 完掘 (南東から)



2. SB87 カマド遺物出土状況 (南東から)



3. SB87 床面礫集中状況 (北から)



4. SB83 完掘 (南から)



5. 古墳面北部 (北東から、右手前 SB85)



6. SB85 ビット1 遺物出土状況 (東から)



7. 中世面Ⅱ Q21-22 ビット群 (東から)



8. 中世面Ⅱ P20 ビット群 (北から)



SB88-3b



SB88-3a



上俣 (正面)



上俣 (背面) SB86 : 6, SB88 : 5, II Q22 : 4, II V07 : 3, II V24 : 1, II V 03 : 2



SB70-1



SB71-7



SB71-5



SB70-2



SB71-8



SB71-4



SB71-3



SB71-6



SB72-12



SB72-14



SB72-13



SB72-10



SB71-11



SB72-18



SB72-16



SB72-19



SB72-15



SB73-21



SB72-17



SB72-20



SB74-32



SB74-33



SB74-31



SB74-22



SB74-23



SB74-24



SB74-27



SB74-29



SB76-35



SB75-34



SB76-38



SB76-40



SB77-42



SB77-43



SB77-44



SB77-45



SB77-47



SB77-51



SB77-46



SB77-48



SB77-57



SB77-49



SB77-50



SB78-52



SB78-53



SB79-62



SB78-55



SB78-56



SB79-59



SB79-58



SB80-63



SB83-66



SB83-65



SB83-64



SB85-71



SB85-67



SB85-75



SB85-81



SB85-79



SB85-80



SB85-77



SB85-76



SB85-83



SB86-84



SB86-86



SB86-85



SB86-87



SB86-92



SB86-89



SB86-90



SB86-91



SB86-97



SB86-95



SB86-96



SB86-100



SB86-99



SB86-101



SB87-103



SB87-104



SB87-105



SB87-106



SB87-115



SB87-107



SB87-108



SB87-109



SB87-111



SB87-110



SB87-112



SB87-114



12区 SB84-32



12区 SB82-30



10区 蒸石-11



10区 SK2029-5



1. 第1面全景(南から、右は珉尾川)



2. 第1面全景(南から、手前畑跡、後方水田跡)



3. 第1面足跡完掘(東から)



4. 第1面畑跡完掘(西から)



5. 第2面ビット群全景(北から)



6. 第2面ビット群完掘(東から)



7. 第2面畑跡道礫出土状況(北から)



8. 第2面畑跡全景(北西から、人物入)



1. 第3面全景(北から)



2. 第3面全景(南から)



3. 第3面全景(北から、人物入)



4. 第3面水田面状況北平部水口(東から)



5. 第4面水田跡全景(南から)



6. 第4面水田面状況(南西から)



7. 第5面第1トレンチ水田跡全景(西から)



8. 第5面第2トレンチ水田跡全景(南西から)

報告書抄録

ふりがな	なかのしせんたいせき
書名	中野市千田遺跡
副書名	千曲川特佐・柳沢堤環事業関連 埋蔵文化財発掘調査報告書 一中野市内の1ー
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	98
編著者名	藤田弘実 土田典男 市川隆之 廣田和穂
編集機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野市篠ノ井布高田963-4 Ⅱ 026-293-5926
発行年月日	2013年(平成25年)3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
千田遺跡 <small>チノダノイセキ</small>	長野県中野市 敷津千田136 他	202118	203	36° 46' 4" (世界測地系) 36° 45' 52" (日本測地系)	138° 19' 33" (世界測地系) 138° 19' 44" (日本測地系)	20020415～ 20021129	5,850 m ²	千曲川特佐築 堤事業に伴う 事前調査
						20030707～ 20020828	8,400 m ²	
						20050418～ 20051222	14,200 m ²	
						20060424～ 20061018	13,100 m ²	
						20070911～ 20070925	7,450 m ²	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千田遺跡	集落跡 水田・畑跡	縄文時代	竪穴住居跡 54、礎土跡 2 竪立柱建物跡 1、配石遺構 21 土坑 650、墓跡 21、溝跡 1	土器(早・前・中・後・晩期) 土製品、石器、石製品	中期中・後葉環状集落跡 中期末葉の度変場 遺物多量、土偶 240 点
		弥生時代	竪穴住居跡 10、土坑 32	土器(中・後期) 土製品、石器	後期前半集落跡
		古墳時代	竪穴住居跡 20 竪立柱建物跡 3	土器、土製品、石製品	後期集落跡
		古代	竪穴住居跡 1	土器	
		中世・近世	竪立柱建物跡 14、欄別跡 礎土跡 10、土坑 2600 溝跡 28、水田跡、畑跡	焼物、石製品、金属製品	
要約		<p>8区では、住居跡 53 軒からなる縄文時代中期中・後葉の環状集落の南半分程度を調査した。時期は勝飯式古段期から加賀川E Ⅱ式期に及ぶ。住居跡分布範囲は外径約 90m の大規模な集落である。住居跡 35 軒前後は橋倉式に並行する後葉期に属し、ベッド状遺構、コの字形石組などが、新潟県に多い内部施設を備えた住居跡が多い。中期末葉に近づくにつれて配石遺構が形成される。中葉期土器は火輪型・王冠型土器を含む越後系が主体を占め、新巻類型・坂野土器、勝飯式、大木 7 b・8a 式、浅鉢中心の北陸系土器がある。後葉期は橋倉式を主体とし、ハラエティーが豊富である。8区は石器は 3300 点余り、石礫、スクレイパー、打製石斧、敲打礫などが多い。多数の磨製石斧も注目される。</p> <p>土・石製品には三角埴形土・石製品、耳飾、垂飾、土製円板、ミニチュア土器がある。土偶は 8区で破片 190 点余り、全体で 240 点が出た。北信地方最大級の縄文中期集落調査事例であり、未解明だった土器様相、集落変遷、千曲川本流に接する生活を物語る初めての資料を提示した。</p> <p>弥生時代では 8・9区で後期前半の住居跡 8 軒を検出した。時期は古式式新段期の新相期にまともる。</p> <p>古墳時代では 12区で中期から後期の住居跡 16 軒を検出した。肥后川沿いの低地部 10区では 5面を調査し、近世から中世の水田・畑跡と戦国時代の屋敷地を検出し、土地利用の変遷をとらえた。</p>			

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 98

中野市千田遺跡
千曲川替佐・柳沢築堤事業関連
埋蔵文化財発掘調査報告書
—中野市内その1—

発行 平成 25 (2013) 年 3 月 25 日
発行者 国土交通省北陸地方整備局
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
印刷 信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野県長野市西和田1-30-3
TEL 026-243-2105 FAX 026-243-3494